

ボイロ探偵W

放飯ごdz

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今から一年前、私立探偵の虚音うろねイフとその弟子である結月ゆかりは謎の組織に囚われていた少女を救出した。脱出する中でイフは凶弾に倒れ、絶体絶命に陥る中で少女はこう告げた。

「悪魔と相乗りする勇氣、貴方にあります?」

そして現在、数々の怪事件が発生する水都市歩色町。ハードボイルド探偵を自称する結月ゆかりは一年前助け出した謎の少女きりたんと共に街の涙を拭う二色のハンカチとして怪事件に立ち向かう。

目次

始まりはW

第一話：Wの都／探偵事務所はBARの上	1
第二話：Wの都／二人で一人の探偵	9
第三話：Mな彼女／疑惑の依頼人	23
第四話：Mな彼女／決壊した濁流	34
第五話：Mな彼女／本当の友なら	49
第六話：Dの微睡み／白衣を着た獅子	59
第七話：Dの微睡み／咲き誇った惨劇	70
第八話：Dの微睡み／切札が牙を剥く	84
第九話：Eは極楽／水都が生んだ歌姫	98
第十話：Eは極楽／黄金郷の女帝	111
第十一話：Gの道の果て／断頭台に立つ君の名は	129
第十二話：Eは極楽／水都を守る呉越同舟	145
ボイロ探偵W設定（第十二話まで）	160
復讐鬼A	
第十三話：復讐鬼A／路地裏の殺人鬼	171
第十四話：復讐鬼A／歪な親子の絆	186
第十五話：Eがついて来る／恐怖の足音	199
第十六話：Eがついて来る／黒猫横切り不吉が来る	210
第十七話：Eがついて来る／イカサマステルス	220
第十八話：Fの嫁入り／刻限が迫る時	235
第十九話：Fの嫁入り／狂気爛漫	248
第二十話：Fの嫁入り／五人目のピエロ	262
第二十一話：Fの嫁入り／究極のダブル	276

ボイロ探偵W設定（第十三話〜二十一話まで）……………292
過去の記録S

第二十二話：Sの終演／バケモノと呼ばれた探偵……………300
第二十三話：Sの終演／囚われの悪魔……………310
番外編：Eに至る覇道／金は天下の回り物……………320
第二十四話：Sの終演／ビギンズナイト……………339
第二十五話：Tの贖罪／方相氏の村……………349
第二十六話：Tの贖罪／天才方相氏のトラウマ……………362
第二十七話：Tの贖罪／蜘蛛の糸を辿った先で……………375
第二十八話：Tの贖罪／過去を振り切る挑戦……………387
ボイロ探偵W設定（第二十二話〜二十八話まで）……………399

三人目E

第二十九話：R集結／我ら恐竜強盗団……………407
第三十話：R集結／黄金の仮面ライダー……………421
第三十一話：R集結／三人目の仮面ライダー……………432
第三十二話：R集結／恐竜仮面大決戦……………444
第三十三話：死人のO／復活の鬮……………458
第三十四話：死人のO／白面金毛九尾の狐……………470
第三十五話：死人のO／母親か相棒か……………480
第三十六話：死人のO／見えざる敵の正体……………488
第三十七話：Fへようこそ／ミュージアムの依頼……………499
第三十八話：Fへようこそ／不思議の国のゆかり……………510
第三十九話：Fへようこそ／姉と妹と弟と……………522
第四十話：Fへようこそ／「おわり」を呼ぶ怪鳥……………532
第四十一話：Fへようこそ／凄惨なるおわり……………542

ボイロ探偵W設定(第二十九話〜四十一話まで) | 555

試練のR

第四十二話：Tを止めろ／噛み砕かれた友情 | 565

第四十三話：Tを止めろ／蝕む親友の闇 | 575

第四十四話：Tを止めろ／もうあの日々には | 585

第四十五話：Tを止めろ／悪魔の誘いと残酷な真実 | 594

第四十六話：Tを止めろ／歯牙の激突 | 603

第四十七話：純愛のB／燃ゆる愛が嗣ぐまで | 614

第四十八話：純愛のB／恐怖の新婚ハウス | 624

第四十九話：純愛のB／愛に生きる戦乙女 | 634

第五十話：純愛のB／火焰幻想・姉妹降臨 | 642

第五十一話：純愛のB／遙か高き炎の壁 | 652

第五十二話：純愛のB／やがて愛という名の雨 | 662

第五十三話：凍り付いたW／悪夢の続き | 675

第五十四話：凍り付いたW／漂白される記憶 | 686

第五十五話：凍り付いたW／加速する本能 | 696

第五十六話：凍り付いたW／純白の悪魔 | 705

第五十七話：凍り付いたW／逆転ブースター | 712

第五十八話：凍り付いたW／懺悔の青空 | 720

ボイロ探偵W設定(四十二話〜五十八話まで) | 728

劇場版：A to Zフォーエバー

第五十九話：A to Zフォーエバー／地獄の始まり | 735

第六十話：A to Zフォーエバー／不死身の傭兵団 | 742

第六十一話：A to Zフォーエバー／ドーパント大渋滞 | 747

第六十二話：A to Zフォーエバー／黄金郷の不始末 | 753

第六十三話：A t o Z フォーエバー／国際警察きりたん | 759

第六十四話：A t o Z フォーエバー／永遠の宴 | 765

第六十五話：A t o Z フォーエバー／クリアトゥルース | 773

第六十六話：A t o Z フォーエバー／ゾンビクロニクル | 778

第六十七話：A t o Z フォーエバー／ハーフボイルド・デッドヒー | 784

ト

第六十八話：A t o Z フォーエバー／本物の悪魔 | 791

第六十九話：A t o Z フォーエバー／永遠の鎮魂歌 | 799

第七十話：A t o Z フォーエバー／水都タワーの惨劇 | 806

第七十一話：A t o Z フォーエバー／切札をその手に | 813

第七十二話：A t o Z フォーエバー／ジョーカーは二枚ある | 822

第七十三話：A t o Z フォーエバー／罪を数えて重さを知る | 828

第七十四話：A t o Z フォーエバー／孤独のNEVER LAND | 834

第七十五話：A t o Z フォーエバー／疾風の牙獣 | 840

第七十六話：A t o Z フォーエバー／水都タワー攻防戦 | 846

第七十七話：A t o Z フォーエバー／逆転の仮面ライダーたち | 853

第七十八話：A t o Z フォーエバー／閻魔の使者 | 863

第七十九話：A t o Z フォーエバー／始まりは白 | 872

第八十話：A t o Z フォーエバー／人間で探偵で仮面ライダー | 879

第八十一話：A t o Z フォーエバー／疾風吹き荒ぶ結末 | 886

第八十二話：A to Zフォーエバー／残された君の名は | 894

ボイロ探偵W設定（五十九話〜八十二話まで） | 901

最終局面W

第八十三話：怪盗I参上／豪華客船インペリアルスター | 909

第八十四話：怪盗I参上／予告状、白き影 | 915

第八十五話：怪盗I参上／初見さんいらっしやい | 922

第八十六話：怪盗I参上／船上の変人達 | 927

第八十七話：怪盗I参上／調査開始 | 933

第八十八話：怪盗I参上／ブラックアウト、戦慄の瞬間 | 940

第八十九話：怪盗I参上／裏切りの狂信者 | 947

第九十話：怪盗I参上／拝啓、私の影法師 | 953

第九十一話：怪盗I参上／犯人問答 | 959

第九十二話：怪盗I参上／現場百回は基本 | 965

第九十三話：怪盗I参上／墮天した歌姫 | 971

第九十四話：怪盗I参上／塗り潰された真実 | 976

第九十五話：怪盗I参上／最低最悪の歌姫 | 982

第九十六話：怪盗I参上／呉越同舟再び | 988

第九十七話：怪盗I参上／月読アイの独白 | 995

第九十八話：怪盗I参上／深海忠義 | 1001

第九十九話：怪盗I参上／茨の道の終演 | 1006

第一百話：怪盗I裏／鳴花散乱 | 1013

始まりはW

第一話：Wの都／探偵事務所はBARの上

「ここは水都市歩色町^{すいとしほいろちよう}。その名の通り、歩くたびに色づいて行くカラフルな景色が美しい町。海に隣接しているこの町は風車や水車など自然エネルギーを基軸としたエコロジーな町として有名で、特に町中に張り巡らされた水路に繋がる町の中心に存在する巨大な風車「水都タワー」が観光名所として聳え立ってる。

「キリマンジャロとは、マキさんもいい豆を仕入れましたね…これはお子様舌のあの子も唸らせるものが淹れれるに違いありません」

そんな街中を歩く、仕入れたコーヒー豆の入った行きつけの喫茶店のロゴが入った紙袋を抱えた、ソフト帽を被り黒のベストにスラックスを着こなしたハードボイルドな私。うむ、絵になりますね。平日の朝で人通りが少ないのも素晴らしい。

そうして上機嫌に歩くこと、五分と掛からず見えてきた。ビリヤード場兼梅酒BAR「鳴花^{メイカ}ーズ」の二階を借り受け営業する我が事務所。二階に続く階段の壁には「結月^{ゆづき}探偵事務所」と黒と紫でお洒落に彩られた自信作の看板が掛けられている。次々に依頼が舞い込んでくる、この町じゃ結構知られている探偵事務所だ。特に「とある分野」においては警察よりも頼りになる駆け込み寺として知られている。

「やーやー、ゆかりちゃん。朝からどこに行ってたのかねー?」

鳴花ーズのドアが開いて顔を出すなり冷かしてきたのは、先端が青い桃色という不思議な色の髪を伸ばしたバーテンダーの格好をした少女、鳴花ヒメ。私より小さいがこう見えて私より年上なのだというから不思議だ。

「マキさんところに豆を買いに行つてたんですよ。ちようど切らしていたもので」

「なーんだ、依頼を受けてたわけじゃないのかー、残り念ー」

「そういうもんじゃないよヒメ。依頼がないってことは平和だつてことだ、いいことじゃないか」

「ははは…探偵としては商売上がったariですけどね」

ヒメさんを嗜む様に顔を出したのは、先端が桃色の青い髪というこれまた不思議な色の髪を揺らすヒメさんとよく似た少女、鳴花ミコト。鳴花ーズのマスターをしている人物だ。ヒメさんという天然を上手く抑えてる手腕は大したものだと思う。うちの生意気な餓鬼んちよを抑えるためにいつか教唆願いたいものだ。

「イフさんがいた頃も閑古鳥は鳴いてたから気にすることはないよ。さあヒメ、さぼつてないで掃除の続き」

「はいはい。あ、面白そうな依頼が来たら教えてねーゆかりちゃん」
「覚えていたら教えますよ」

「それと、なんでずつと帽子を押さえてるのー？そんなに風強いかなー？」

「ぐっ。…気にしないでくださいと」

少しでもハードボイルドに見せたくて帽子を押さえてたのだが、天然のヒメさんには変に見えたらしい。…やはり、おやつさんの様にはいきませんね。そもそも私は女ですし…よく男と間違えられますけど。ミコトさんに引つ張られたヒメさんが店内に引つ込んでいったのを見届け、探偵事務所を見上げる。…託されたのだから、守つて見せます。

「あの子の朝ごはんを早く作つてあげませんとね」

手のかかる相棒のために事務所に手早く戻ろうと階段に足をかけたその時だった。

「あのー、虚音探偵事務所はここでよろしいでしょうか？」

「はい、今は結月探偵事務所となっておりますが元虚音……つて、あかりさん!？」

「あれ、ゆかり先輩？ですか？」

客であろう声を背中からかけられて、営業スマイルたつぷりにハドボイルドに決めようと振り返った先にいたのは、綺麗な長い白髪に星型の髪飾りをつけている姿が相変わらずの、高校時代の後輩である紺星あかりであった。

「ぱくぱく。もぐもぐ。おかわり！」

「いや、おかわりはいいんですけど……よく食べますね？」

あかりを客用の机に待たせてあの子用に特製フレンチトーストを先に作っていると、分かりやすく腹の虫を鳴らした後輩に馳走することになった。もう三枚目なのだが相変わらぬの健啖家で逆に安心した。

「それで、なんの用で来たんですか？依頼……にはおかしいですが」「あれ？そんなことわかるんですか？」

「わかりますよ、私も立派な探偵ですからね」

興味津々と言った具合に星の様な煌めく瞳を向けてくる後輩に、溜

め息を吐きつつ壁にかけておいた帽子を被り直し、ハードボイルドなポーズを取りながら説明する。

「依頼人と言うのは焦躁を感じさせるものです。何かしらに困ってここを訪れる訳ですから。しかしあかりにはそれが無い。さらに言えばその格好。頭部につけた星型の髪飾りからつま先のパンプスまで見るからに上物の服だというのにその上から春先の寒さをしのぐためなのか安物のスカジャンを身に付けているちぐはぐさ」

知らない人から見ても「あ、この子お嬢様だ」とすぐに察せられるだろうブランド品である。スカジャンは彼女個人の趣味だということとは覚えていた。

「傍らには旅行鞆一つあることから遠出してきたのは推察できますが、貴方は確か名家のお嬢様でしたよね？それが一人で、護衛を一人もつけないどころか徒歩でこの事務所までやってきた。さらに言えば腹ペコ。ここから推察するに貴方は突発的に家出てきて、何かしらの理由からおやつさん…虚音イフを頼ってここまで来た。こんな感じでしょうか」

「ふわあ。すごい、大当たりです先輩。でもなんで室内で帽子を被るんですか？」

「…………それは気にしないでいただけると」

パチパチパチと屈託のない笑顔で褒めてくれるのにこのハードボイルドが通じないことにながつくし来る。なかなかが決まった！と思っただけですが…。

「実は高校卒業後、その…いわゆるニート生活を享受していたのですが…」

「大学も行かなかったんですか…いや、私も高卒ですが」

「お母様に怒鳴られてしまい、売り言葉に買い言葉で一人で何とかし

ます！と啖呵を切つて荷物を纏めて外に出たのはいいものの、ろくな当てもなく」

「なるほど。それで、なんでこの事務所に？この町に住んでる同級生の住処を知りたかったとか？」

「ああ、ここ、お爺さまの事務所なんですよ。優しいお爺さまなら何かしら一緒に考えてくれるものかと思ひ至りまして」

「え」

その言葉にポカン、と呆けてしまい手から帽子がずれて床に落ちる。それを拾い上げながらあかりは笑顔で続けた。

「はい。虚音イフとは私の母方の祖父なんです」

「……………ははは、驚きました。おやっさんがまさかあかりの血縁だったとは」

あかりから帽子を受け取つて被り直し、なんとか平静を取り繕う。よりにもよつてあかりが、おやっさんの、孫。おやっさんに孫がいたなんて聞いたことも無かつたんですが!?!いや確かに年齢的にいてもおかしくありませんしあのかつこよさならむしろ結婚してない方がおかしいですが……………!

「それで、お爺さまはどこにいるんです？事務所の名前が変わつて、どうしたのかな？と思つたんですが」

…：真実を、言うべきだろうか。温室で生まれ育ち、外界の厳しさを何も知らないこの世間知らずで無垢な後輩に、受け止めきれぬだろうか。…：否だ。今は、隠し通すしかない。

「実はおやっさんから私が事務所を引き継ぎまして。今は私が所長兼探偵をしています。おやっさんは引退して今頃慰安旅行をしているものかと」

「そうなんですか。さすが先輩です、お爺さまに認められるなんて！」
「ははは、そうでしようとも。だって私、ゆかりさんですよ？」

とりあえず虚勢を張ることで悟られないように試みる。高校時代から変わらない尊敬の眼差しが眩しすぎる。私は何時から汚い大人になったのだろう。と、とりあえずコーヒーを入れて落ち着こう。

「今朝仕入れたばかりの豆をもらったんですが、あかりも飲みますか
——」

「遅い！ゆかりさん、何時になったら朝ごはん持ってきてくれるんですか！いい匂いだけさせて拷問ですか!？」

「え？」

あちやーとたまらず頭を抱える。一見帽子掛けに見える壁が扉の様にいきなり開いて包丁型の髪飾りを付けた茶髪の幼い少女が顔を出したのだ。しかもよりにもよって下着姿で。目を白黒させるあかり、迂闊だったことに気付いて固まる我が相棒。するとみるみるうちにあかりの視線が軽蔑のものに変わって行って。

「えつと……ゆかり先輩、もしかしてそう言う趣味だったんですか？
？わ、私のこともそんな目で……？」

「あ、じゃあ私はこれで……」

「違いますよ!?それと貴方も場をややくしくしておいて逃げるな！」

逃げようとしていた相棒を掴み上げ、弁明に時間を擁する羽目になつた。

「えっと、つまり彼女はお爺さまが保護した記憶喪失の子供で、今はゆかりさんが面倒を見ていると?」

「はい、そうなります。下着姿なのはずぼらな餓鬼んちよだからです。いつも着替える様に言ってるんですけどね。ほら、挨拶」

「どうも、きりたんです」

子供と言われて癩に障ったのかっーんとしながらぶつきらぼうに答えるきりたん。そんなところが子供っぽいんですよ…。

「きりたん…?」

「この名前しか覚えてなかったんですよ。というわけではない、今日の朝ごはんです」

「またフレンチトーストですか。変わり映えしないですね。はー、つつかえ」

「作ってやったのになんて言い草ですか。納豆とか出そうにも面倒…あつ」

「納豆?なんですかそれは?興味深いですね!」

文句を垂れる生意気な相棒にいらついで、言ってからやらかしたことに気付くがもう遅い。きりたんは目を輝かせてフレンチトーストを口に啜えたまま隠し扉からガレージに戻って行ってしまった。いつもの「検索」だろう。……これは最低一時間は使い物にならないな。

「きりたんさん、いきなりどうしたんですか?」

「病気みたいなものですよ、厄介なね。ところでどうします?おやっさんは当分戻りませんけど」

きりたんのことをこれ以上詮索されても面倒なので、とりあえず話題を変える。するとあかりは腕を組んで悩みだした。それもそうだろう、勢いで家出して、助言を求めて尋ねた祖父は不在。それまで感じさせなかった焦躁感を出してあからさまに狼狽え出したのだから

ノープランなのだろう。さてどうしたものか。

すると、コンコンとノックの音が聞こえてきた。客だと言うことを理解したのか客用の席から離れるあかりを横目に扉を開けると、そこには白のワンピースを身に着けたマキさんに匹敵するであろう物をお持ちの美女がいた。

「あの一、ここが結月探偵事務所で合ってるでしょうか…？」

不安に駆られた目をおずおずと向けてくる依頼人に、私はネクタイを締め直して安心させるように笑顔を向けて頷く。

「はい。私がハードボイルド探偵、結月ゆかりです。一体どのような依頼でしょうか？」

第二話：Wの都／二人で一人の探偵

「なるほど、お名前は佐藤紗々良さん、ですか。依頼内容は失踪した恋人、鷹嘴飛翔たかはし つばさの搜索、と」

依頼人：白いワンピースを身に着けふんわりした茶髪をポニテに纏めている女性のささらさんに逐一確認を取りつつ熱心にメモを取る先輩をぼんやりと眺める。今更だけど私がいるけど守秘義務とかはいいのだろうか。私の事をむやみに口外しないと信賴しているのかな。

「お二人は共に千絵美尾大学に通う院生で、タカハシさんが一週間前から音信不通で行方不明、と」

「はい…タカハシくん、いなくなる直前に就職に失敗していて意気消沈していて…元気になつてもらおうとデートに誘おうとした矢先に…」

「なるほど。ちなみにタカハシさんのご実家には連絡を？」

「はい。まだタカハシくん本人から教えてもらってなかったので事情を大学に話して連絡を…でも、実家の方にも顔を出してなくて…まさか、まさかとは思うんですけど思い詰めて自殺したんじゃないかって心配で…」

「それでここに、と。話は分かりました。よろしい、依頼をお受けしましょう。このハードボイルド探偵、結月ゆかりにお任せを。必ず、タカハシさんを捜し当ててみせましょう！」

ずれた帽子を直してきりつとした決め顔を向ける先輩。変わってないなあ、この人は。すると泣いていたささらさんは感極まったのかそのまま先輩の胸に飛び込んでしまった。あ、あ、私より大きなアレが先輩のまな板に…！

「…あかり、あとで覚えていなさい？」

「ひゃいっ！」

「あ、すみません：男性の方に私、こんな…」

「いや、あの…申し訳ありませんが、私、女です…。」

「えっ、たしかに男性にしては珍しい名前だなど思いました…ごめんなさい！」

私の考えたことを察知したばかりか男に間違えられてキレそうな先輩。名乗っておいて間違えられるの相変わらずでちよつと安心した。そうなんですよね、いつも男装していて顔も整つててアレがないから初見で女だと気付く人が本当にいないんですよね先輩…。

「タカハシくんを見つけたらスマホに連絡していただけると…よろしくお願いします！」

「承知しました。大船に乗ったつもりで待っていてくださいね」

お辞儀して去って行くささらさんを見送り、こちらに振り向く先輩。その顔はニコニコしていて、嫌な予感がした。

「あ、私はそろそろ帰ろうかな…？」

「待ちなさい、家出したんでしように。どうせ私の胸を馬鹿にしていたんでしよう。不問にするので手伝いなさい。今回は人手がいりそうなので」

「ええ!?私、探偵でもなんでもありませんよ!?!」

「探偵のいろはなら私が見習い時代におやつさんに習ったものをメモしているのですそれを渡します。連絡は…つと、そう言えば貴方の番号登録していませんでしたね」

「え、一番の後輩の番号を登録してないとかひどくないです?…あれ?」

先輩が取り出した今時珍しいガラケーに首を傾げる。あれ、高校時代は確かスマホだった様な…?それになんか、普通のよりもでかいよ

うな…？

「あー、これは探偵グッズでスタッグフォンといいます。こっちの方が便利なので替えたんですよ。番号は前のままですか？」

「あ、はい」

「じゃあメールで探偵のいろはを送るのでその番号を登録してください。私はバイクで遠出するので貴方はここの近辺で聞き込みしてくださいね」

そう言いながら私を連れて外に出て階段を降りながら手際よくスタッグフォンに打ち込む先輩に感心しつつ、来たときは気付かなかったが先輩の愛車なのであろうバイクに目を向ける。これまた奇妙なバイクだ。前後斜めに分かれた大胆なカラーリングで前が黒で後ろが緑、特徴的なフロントカウルの角が目立つ。どこで買ったのだろうか。多分改造車だけだ。

「先輩、それは…？」

「ああ、私の愛車ですか。聞きますか？聞きますよね？その名もマシンハードボイルダー。ハードボイルドな私にぴったりのマシンだと思いますか！」

「あ、はい。そうですね。わ、私行きますね！」

目をキラキラさせて顔を近づけてくる先輩から逃げるように立ち去る。ちらつと振り向くとマシンハードボイルダーに跨り颯爽と走り抜けて行く先輩の姿が見えた。…かっこいいなあ。黙ってればハードボイルドとはよく言われていたのも納得だ。さて、私も頑張らないと。

「うーん」

マシンハードボイルダーで駆け抜けながら考える。きりたんが納豆の検索に入ってるから足で稼ぐしかなかったのであかりがいるから助かった。しかし涼やかな風を受けながら考えるのは、依頼人の態度だ。

「涙を流しながら恋人を捜してくれと頼んできたのがウソとは思えませんが……私に抱き着いてきたのは何故なのか？」

考えを纏めるために口に出した声が風に流れて行く。彼氏がいたことないので断言はできませんが、恋人がいるのに……勘違いしていたとはいえ他の異性に思わせぶりの態度を取る、これが引かなかった。

「……いえ、いえ。おやつさんの教えのひとつに、依頼人を信じ抜くこと、とあります。少し引つかかりますが……ささらさんを、信じましょう」

すべてはタカハシさんを見つけたら判明するはずです。そのためにも……見えてきた、水都タワー前広場でパフェを自撮りしている女子高生2人。今日は休日だからこんな時間からでもここにいます。思いました。ギターケースを二人して担いでいるところを見ると午後から部活でしょうか？

「六花、花梨、今よろしいですか？」

「あ、ゆかりさん。こんにちは」

「ゆかりさんもこっちに来て来て、一緒に映りましょう？」

「ええ……まあ、はい」

言われるままに二人の真ん中に引っ張られて自撮りに参加する。

とびつきりの決め顔にしてみたが不評だった。何故…つと、落ち込んでいる暇はない。この二人、小春六花こはるりつかと夏色花梨なつきかりんは私が頼りにしている情報屋の一つだ。ちなみに鳴花ーズも夜なら情報が集まるBARへと早変わりである。このJKコンビはスイーツを奢る代わりに学生ならではの情報をくれる。今回はこのパフエの代金を払えばよさそう。

「それで、今日は何の情報が欲しいんです？」

「そんなにだと思ってたゆかりさんの決め顔、なんかバズってるから今回は無料タダでいいですよー？」

「さすが私、ハードボイルドな決め顔で瞬く間にバズりましたか…！」

「コメントを見るに面白いからみたいけど」

「しっ、六花。いらんことは黙ってていいの」

なにやらここそこそそしてる2人は無視して要件を伝える。知りたいのはズバリ、タカハシくん…様子のおかしい若い男性の目撃情報だ。ささらさんから聞いておいた容姿の特徴も並べると、六花が反応した。

「ああ、それならここ数日、ブティック「渚」付近で不審者を見たって友達が言ってたかなー」

「あ、ブティック「渚」ってあれでしょ？怪物騒ぎの」

「怪物騒ぎ？…その話、詳しく」

…ふむ。どうやら私達の元に依頼が舞い込んできたのは必然だったようだ。

「なるほど、思いつめた様な顔の男性をさつきその先のアウトレットモールで見かけたと…ありがとうございます！」

髪型や服装、身長などといったささらさんの言っていた情報とも一致する。タカハシさんだと当たりを付けた私はメールで先輩に連絡する。すると数分もせずマシンハードボイルダーに乗った先輩がやってきた。

「早かったですね？」

「この町は私の庭ですので。あかりにお願いがあります、事務所に行つてきりたんを正気に戻してくれないか？帽子をかけている場所に隠し部屋のノブがあります。本当は立ち入り禁止なのですが緊急事態なので」

「え、でも先輩は？」

「ちよつと不味いことになったので急ぎます、頼みましたよ！」

そう言つて走り去つて行く先輩。その様子からは焦りが見えた。

「でも、なんできりたんを…？」

不思議に思いながらもタクシーを呼んで結月探偵事務所まで戻り、教えられたとおりに隠し部屋のノブを回して入ると、お洒落な事務所と一変して無機質な鋼色の地下空間が広がっていた。奥にはテレビと座椅子、そしてゲーム機が置かれている。その横のホワイトボードで、下着姿に上着を着ていて謎の赤いバックルのベルトを腰に巻いた変な格好のきりたんが大きな本を広げてペンを片手にホワイトボードに何やら記していた。見れば、大きく「納豆」と書かれ、その周りに「発酵」「納豆菌」「塩辛納豆」「糸引き納豆」「甘納豆」「水戸納豆」「納豆汁」「納豆巻き」「与謝蕪村」「納豆卵飯」などなど、メジャーな物からマイナーな物まで、とにかくたくさん納豆について記されていた。これは一体…？きりたんを正気に戻せとは、そういうことですか

…!?

「えっと…きりたん、きりたん!」

近づいて揺さぶってみる。反応なし。ぶつぶつと納豆について呟きながらペンを走らせる手が止まらない。このままだとホワイトボードから溢れそうだ。なにか、なにか…?見渡せば、電源が入れっぱなしのテレビ画面に映った某RPGゲームがあった。もしかして中断してそのまま…?しようがない、先輩も急ぎの様でしたし…!

「ごめんなさい!」

「え。ああああああ!?!」

セーブもせずテレビに繋がった線を抜き取ると悲鳴が上がる。見ればペンと本を投げ出して慌ててこちらに駆け寄るきりたんが。涙目になっていて申し訳なさを感じる。…あれ?あの大きな本、白紙だ。何を見てたんだろう…?

「うう…ひどい…ああ、ゆかりさん。わかりました、わかりましたから」

泣きながら私を無視して地下室の下側に飛び降りるきりたん。よく見たらガレージの様になって謎の巨大な円形の…なんだろう、映画とかでよく見るマグナム銃の回転式弾倉みたいなものがある。何事かと見ていると、きりたんは上着の内ポケットから緑色の掌サイズのUSBメモリの様な物を取り出し、ボタンを押した。

《サイクロン!》

「変身」

そして何やら呟くとメモリを腰のバックルの右側に装填。すると

メモリが消失し、それに伴うようにきりたんの身体が倒れて……って、ええ!?

数分前、水都アウトレットモールにて。

「六花たちの情報が正しければ怪物が出ただけでなく、その付近で多数の転落者が出ている……ほぼ間違いなくドーパントの仕業で間違いないでしょう。そしてその正体は……!」

ハードボイルダーを停めた私は、水都アウトレットモールの入り口で多数の人間が行き交う中で突っ立っている白いワイシャツに灰色のズボンの茶髪の青年を見つけ、タカハシくんだと当たりを付けて話しかけようと試みる。

「タカハシくん、ですね? 恋人のささらさんが捜しています、私と一緒に……」

「お前も……この店員か?」

「え?」

そうやってタカハシくんが取り出した掌大の化石じみたUSBメモリの様な物……ガイアメモリを見て、身構える私の前で、ボタンが押されて悪魔の声が響き渡ってタカハシくんの捲り上げたシャツの下の右腕に悪魔の刻印……生体コネクタが現れる。やはり、ですか……!

《ホーク!》

「ははは……お前も落ちるところまで落ちてみる……！」

そう狂笑を浮かべてガイアメモリを生体コネクタに突き刺すとその身に挿入され、突風と羽が吹き荒れてその身体が怪物へと変貌、周りに悲鳴が上がる。現れたのは、鳥人間としか言い表せない異形。全身赤色の羽毛に包まれ、両腕が翼になっていて脚は鋭い爪のついた鳥の鉤爪が、顔は鋭い猛禽類の目と湾曲した嘴がついていた。名前の通り人型の鷹、ホーク・ドーパント……！

「ハハハハッ！落ちろ落ちろ落ちろオオオオオ！」

バサツと翼を振り回すと突風が発生、それは地面に叩きつけられ、看板や自動車まで打ち上げてしまう。私は近くのベンチを掴んでなんとか浮かばずにいられたがこれでわかった。犠牲者はこの風で打ち上げられて高所から叩き落とされたんだ。水都の象徴ともいえる風を悪事に使うとは……！ドーパントが現れたことで一般人のほとんどが遠くに逃げてたおかげで今回は大丈夫ですが……！

「俺を落としたことを後悔しろオ！」

そのまま翼を振り回して浮かんだ自動車や看板などをアウトレットモールの店々に激突させ爆発、炎上させるホーク・ドーパント。なんて力……あかりを帰して正解でしたね。懐から赤いバックル……ダブルドライバーを取り出し、腰に付けるとベルトが装着される。

「きりたん……きりたん？」

【待ってくださいいゆかりさん。貴方は知ってますか？「納豆時に医者いらず」という諺を！】

「知りませんよ!？」

ああもう、まだあかりは帰ってないみたいですね。こうなった相棒

は役に立たない。時間があれば説得もできるが、今はそうも言っていない。ベンチにしがみ付いて飛ばされないでいた私に気付いたのか猛禽類の様な目をギラリと輝かせて睨み付けてくるホーク・ドールパント。

「ああ？なんで落ちない？なら俺自ら落としてやるよ！」

「ちよっ、待っ…!？」

するとバサツと翼を広げて飛翔したかと思えば高速で飛来して足の鉤爪で私の一張羅を掴むと有無も言わず一瞬にして天高く、空に持ち上げられてしまう。眼下に広がる街並み。いい景色だ、さすが水都。つて現実逃避してる場合じゃない、この高さは不味い…！せめて変身できれば…

「俺を採用しなかったからこうなる！天から落ちろ！」

その言葉と共に投げ出される。咄嗟に構えるは左手首に備えられた派手なデジタル時計、スパイダーショック。ボタンを操作して頑丈な糸を飛ばしてビルの屋上に引っ掻け、ゆっくりと降下することに成功。

「とにかく時間稼ぎを…！」

それに気付いてこちらにまた飛来しようとしてきたホーク・ドールパントに、私は懐から青いデジタルカメラ…バットショットを取り出し、同時に手にしたギジメモリを装填。するとバットショットは蝙蝠に変形して飛び立ち、ホーク・ドールパントの眼前まで飛んでいきフラッシュを焚いて妨害。地面に落とすことに成功した。

「きりたん、いい加減に手を貸しなさいきりたん！」

「うう…ひどい…ああ、ゆかりさん。わかりました、わかりましたか

ら」

隙について呼びかけているとまともな反応があり、私はずれた帽子を直してジャケットを広げて左の内ポケットに入れられた、ドーパントの物と異なりすつきりしたフォルムの黒いガイアメモリを取り出して目の前に構え、ボタンを押す。

「《サイクロン！》」

《ジョーカー！》

「【変身】」

するとダブルドライバーの右スロットに緑のメモリが転送されてきてそのまま押し込んで装填、待機音が鳴り響く中ジョーカーメモリを左スロットに装填、両手を交差する様にしてバックルをWの形に展開すると緑と黒の風に包まれて私は文字通り、変身した。

《サイクロン！ジョーカー！》

現れたのは右が緑で左が黒の超人。変身時に発生する突風でマフラーが激しくはためき、赤の複眼が輝く。名はダブル。二人で一人の探偵だ。立ち上がって頭をフラフラさせてたホーク・ドーパントはこちらに気付き、翼を広げて羽を手裏剣の様に飛ばしてくるが軽く竜巻を発生させて弾き飛ばし、私は左手を拳銃の形にしてこの町を泣かせた犯罪者に手向ける。

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

私と共に響く幼い少女の声。相棒のきりたん。それに対してホーク・ドーパントは奇声を上げると翼を羽ばたかせて再び突風を発生、自動車やらを持ち上げてこちらに向けて飛ばしてきた。

「ハシイ！お前も落ちろヤア！」
「っ…！」

軽くステップを踏んで落ちてくる自動車を紙一重で避けていく。ジョーカーメモリは身体能力を上げるメモリ。変身したことで動体視力も上がった私にはそんな単調な攻撃は当たらない。

「キエエエエエッ！」

するとホーク・ドーパントは激昂して飛びかかってくるが、スウエーで左に避けてハイキックを叩き込んで蹴り飛ばす。奴の発生させた風をサイクロンのボディに取り込んだことでスピードを上げた蹴りは凄まじい威力で天高くまで蹴り飛ばした。

「なら…こからならどうだ…！」

飛ばされた勢いで滞空し、翼を広げて再び羽手裏剣を飛ばしてくるホーク・ドーパント。浅知恵はあるらしいが、こっちには天才がいるのだ。

《ルナ！》

『私のメモリを替えましょう』

《ルナ！ジョーカー！》

私の右手が勝手に動いて右スロットのメモリを金色の物に入れ替える。そして金色に変化した右腕を振るうとぐにやりとまるで某ゴム人間の如く伸びて鞭の様にしなり羽手裏剣を叩き落とし、そのままホーク・ドーパントの足を掴んで地面に引きずり下ろした。

「グアアアア…」

『メモリブレイクです！』

「言われずとも！」

《サイクロン！ジョーカー！》

サイクロンジョーカーに戻り、ジョーカーメモリを抜いて右腰のスロットに装填。迸るエネルギーが突風を発生させ、私の身体を持ち上げて行く。

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

そして右腰のスロットを叩くとマキシマムドライブが発動。ホーク・ドープアント目掛けて飛び蹴りを放ち、その途中で正中線で二つに分かれる。この感覚は相変わらず慣れませんね！

『ジョーカーエクストリーム！』

「ハシイ!？」

度肝を抜かれて奇声を上げるホーク・ドープアントに、タイムラグのある二段蹴りを行い、最終的に元通りとなり両脚蹴りとなる必殺技を炸裂させる。ホーク・ドープアントは吹き飛び、私の身体は風を受けてふわりと着地。同時に地面に転がったホーク・ドープアントは爆散した。

「ハシイ…」

《ホーク！》

爆散跡から元の姿に戻ったタカハシくんが顔を見せ、その右腕からホークのガイアメモリが排出されて砕け散る。メモリブレイク完了だ。

「…さて、タカハシくんを警察に突き出してささらさんに事情を話しますか。あまり気は進みませんが」

そう言つてドライバーに手をかけ変身を解こうとしたその時だった。マンホールが吹き飛んで謎の濁流が溢れ出し、タカハシくんに殺到すると飲み込んでしまったのだ。

「なっ…!?!」

『まさか、共犯の口封じ?』

咄嗟に構え直した私達の前で、濁流は一塊に集まつて行き巨大な人型を形作る。あの腰のコアは…ドーナツ…! そう認識するなり、濁流の怪物は咆哮を上げた。

第三話：Mな彼女／疑惑の依頼人

ダブルがホーク・ドールパントと戦っていた頃、水都に存在する巨大な日本家屋。水都で知らない者はいないというほどの名家「東北家」の邸宅である。その、畳が敷かれ長机が中心に置かれた広間で、「地球」と達筆で大きく書かれた掛軸がかけられた床の間を背に上座に座るのは、この世のものとは思えない透き通った白髪の和服美人。赤い目が細められゆつくりとお茶を啜り、席に座る四人の人間に目を向ける。

一人は髪を濃い緑に染めた女性。ロングヘアーに枝豆を模したカチューシャをつけて露出の少ないなれど上質なあつたかそうな格好で、金色の目をせわしなく動かして白髪の女性の様子を窺っている。その膝には奇妙な髪型の黄緑色の髪の中性的な子供が鎮座してニコニコ笑ってる。

一人は肩で切り揃えられた黒髪を揺らし黒いレディースのスーツを着こなしたキャリアウーマンの様な女性。緑色の瞳を怪しく輝かせて姿勢正しく待機している。

一人は桃色がかったふんわりとした茶髪で眼鏡をかけた少女。清楚なワンピースの上から水色のカーディガンを身に付けている彼女は小説家なのかスラスラと手記と筆ペンを手に何やら熱中して書いていた。

そんなちぐはぐな面子ではあるが、彼女たちは「家族」でありそして「組織」でもあつた。四人を一瞥し、もう一度お茶を啜った白髪の女性は湯呑を置いて話を切り出した。

「…ちゅわ。街が騒がしいようですね？」

「は、はい、姉さま。ウナちゃんのラジオによれば鳥人間が街を騒がしているとのことですね…」

「さすがなのだ！休みなく超人が水都を賑わせているのだ！」

「おや。セイカさん、また売れたんですね？せっかくなら教えてくれればよかったのに…」

「顧客情報を流すわけにはいきませんし、貴方に教える義理はないですよそらさん？それにガイアメモリ販売は私共の仕事です。売り上げも上々。そんな意外そうに言わないでいただきたい」

おずおずと反応する、白髪の女性を「姉」と呼んだ緑の女性。やんややんやと手を叩く中性的な子供。何やら険悪な雰囲気を感じさせる黒髪と茶髪の女性。そんな光景に溜め息を吐きながら白髪の女性は黒髪の女性に向けて笑みを浮かべる。

「よくやっていますわセイカさん。貴方を家族に迎え入れた判断は間違っていない様ですわね」

「お褒めに預かり光栄です至子様^{いたこ}。鳥人間：ホークメモリは凡俗なメモリですが、彼を紹介してくれた人間が購入したメモリはこの街の土壌を利用できるメモリでして…至子様の実験のお役にたてるかと」

「素晴らしいですわ。さすがは…【ミュージアム】の幹部、ですわね？」

そう言つて銀色の円形のバックル…ガイアドライバーと金色のガイアメモリ…ゴールドメモリを取り出す白髪の女性、東北至子に続く様に同じガイアドライバーとゴールドメモリ、または銀色のシルバーメモリを取り出していく女たち。次の瞬間、広間には五体の怪人が鎮座していた。それは自分たちが人間と言う器を捨て去ったという存在証明。または後戻りできない諦念の形。または純粹無垢な魂の在り方。または決して崩れない忠誠心の表れ。または抑えきれない好奇心の笑み。

彼女たちの名は東北家。またの名をミュージアム。水都にガイアメモリをばら撒く悪の根源である。

私達はダブル、二人で一人の探偵だ。依頼で捜していた鷹嘴飛翔が変貌したホーク・ドープアントを撃破したところに突如現れた濁流の怪物。口封じなのかタカハシくんが飲み込まれてしまい、咄嗟にスタックフォンを取り出しコードを入力しながら振り下ろされてきた巨腕の一撃を避ける。反撃に拳を叩き込んでみるが沈み込んでしまいビクともしない。それどころか、こつちが引きずりこまれる…!?

『ゆかりさん！こいつに直接攻撃は危険です！ヘドロ、いやタール…？何のメモリですかねこれ』

「殴る前に言ってほしかった！あとメモリの正体知るよりこの状況をどうにか…」

「ゴボアアアア!?!」

今更警告してきた相棒に文句を垂れてると、濁流の怪物が巨大な物体に轢かれて消し飛ぶ。現れたのは後方支援兼高速移送装甲車リボルギャリー。助かった、これなら…!リボルギャリーの下に両手を沈み込ませてちやぶ台がえしの要領でひっくり返す濁流の怪物。すかさずスタックフォンで遠隔操作、背部のリボルハンガーを回転させて体勢を立て直すと同時に吹き飛ばす。

「ゴボボオオオツッ!」

『逃げます！便利な身体ですね…!』

「追いかけますよ!」

すると濁流の怪物は人型から流動体へと変形、水路に逃げ込んだのでスタックフォンでハードボイルダーを呼び出し搭乗、追いかける。リボルギャリーには事務所に戻ってもらって、今は追跡に専念せねば。

「つ、厄介、ですね！」

『水場を最大限に活用している！この街じゃこの上なく厄介な敵です！』

水路からたびたび飛び出してくる流動体の塊による攻撃を避けながら必死に追いかける。水都の象徴の一つである風を悪用したホーク・ドーパントの次は水都の美しさを象徴する水を活用するドーパント。私を怒らせてそんなに楽しいですか！

「タカハシくんを取り戻さなければ！あのままでは窒息死か溺死です！」

『ここはトリガーで引き剥がすのがよろしいかと』

「その手で行きましようか、相棒！」

《トリガー！》《サイクロン！トリガー！》

バイクを運転しながらジョーカーメモリと取り出したトリガーマモリを交換し、青く染まった左ボディの胸部に出現した拳銃「トリガーマグナム」を手にして風の弾丸を水路を泳ぐやつ目掛けて撃つと、弾けた風が打ち上げて濁流の流動体が空中に飛び出して道路にべちやりと落ちる。そして現れたのは異形の怪人。

「ゴボボ……私の邪魔をするな探偵……！」

全身がドロドロと溶けていて片目が潰れ残った目がギョロリとこちらを睨み、両掌が異様に大きく引き摺っている。意外と小柄だ、女性だろうか？まるで溺れているかのようになくぐもった声を出すドーパント。なんのドーパントなのか。

「おや、私……いや、私達を探偵と知っていますか。有名人になったものですね？」

なんで私が探偵なのか知っているのか気になったが、今はそれよりタカハシくん。奴の身体に取り込まれている以上、手出しができない。するとそのことに気付いたのか歪な笑みを浮かべるドーパント。

「そんなに奴が心配か？なら返してやろう！」

「っ!？」

そう言つて右手の振りかぶると掌がゴボゴボと泡立って、勢いよく振られると同時に泥の塊が飛んできて咄嗟に避ける。そしてその正体に気付く。水分を抜き取られてミイラの様になっているが、タカハシくんのなれの果てだった。

「ハハハ……！見ろ！ヒモ野郎にお似合いの末路だ！」

「貴様……！」

怒りのままにトリガーマグナムを向けて弾丸を放つが、ドーパントの肉体にドボンと音を立てて当たったかと思えば擦り抜けて行く。物理攻撃無効タイプか、厄介な。

「ゴボボ……やった、やった……ウヒヒ……ハハハ……！」

トリガーマグナムの弾丸を受けながら笑い声を上げて流動体となつて路地裏に逃げ込むドーパント。慌てて追いかけるが、次の瞬間路地裏から見覚えのある女性が出てきたことで咄嗟に物陰に隠れて変身を解く。

【どうしたんです？ゆかりさん、いきなり変身を解いて】

「……………今あの路地裏から出てきた女性、今回の依頼人です」

ベルトによる交信で相棒に伝えたそれは、今回の依頼人である佐藤

紗々良さんその人で。タカハシくんの亡骸に気付いて駆け寄り泣き崩れるその姿は本当のことには見えなかった。

事務所に戻るなり待ち受けていたのは、怒り心頭のあかりであった。

「先輩―あれはどういうことですか！」

「待つて。説明は後でしますから」

恐らくきりたんが目の前で倒れたのだろう、それはあとにしてテレビを付ける。鷹嘴飛翔の死は地方局「水都テレビ」で大々的に取り上げられた。ささらさんは警察から事情聴取を受けてるらしい。そしてニュースで取り上げられたのは衝撃的な事実の数々。タカハシくんは生前自身に保険金をかけていて、その受取人が家族ではなくささらさんであること。ささらさんはこれまで数多くの男性と付き合ってきて、そのほとんどが怪死していること。テレビではモザイクが掛けられていたもののささらさんの所属する大学：千絵美尾大学での評判もかなり悪いようであると。今思えば、私に抱き着いてきたのも彼女の癖のようなものだったのだろう。

「うう…私達、騙されてたんですか…？」

それを事務所で見るのは私、あかり、そしてきりたんの三人。あかりは信頼していたささらさんの悪女っぷりに顔色を悪くしていて、きりたんは無感動に納豆食パンとかいうよくわからないものを咀嚼していた。

「犯人は決まりですね。ドーパントが消えた先から現れただけでも確定的なのにこれだけ動機があれば言い逃れもできないでしょう」

「…でも、私は彼女の涙が偽物とは思えないんです」

「先輩!」

「情で犯人を見逃すんですか? ドーパントの危険性はよく知ってますよね? このままだと証拠不十分で解放された彼女がまた犯行を犯すかもしれませんよ?」

「あの一、ドーパント、とは…あ、はい、黙ってます」

気になったのか尋ねようとして空気を読んだあかりに内心感謝しつつきりたんを真っ向から睨み付ける。きりたんの言っていることが正しいとはわかつている。だけどどうしても、あの涙が引つかかる。

「…彼女のことを調べ直してきます」

「それでも貴方はハードボイルド気取りの探偵ですか? そんなんだから貴方はハードボイルドなんですよ!」

ハーフボイルド。ハードボイルドには遠く及ばない半熟卵。たびたび甘い判断をする私に対してきりたんの使う呼び名。今回ばかりは言い返せなかった。それでも、言い返せなくてもできることはある。ダブルドライバーと所有している三本のメモリを取り出し机に置くと思わせた表情を浮かべるきりたん。

「これは置いていきます。今回ばかりは…貴方の手は借りません」

「正気ですか? 彼女がドーパントなら鷹嘴飛翔の二の舞ですよ?」

「おやっさんの教えです。依頼人を信じ抜くこと…私は私の依頼人を信じます」

そうやって私はジャケットを羽織ると帽子を手に事務所を後にした。目指すは千絵美尾大学だ。

「…あ。探偵さん」

「どうも。タカハシさんのことについては…残念です」

事務所の結構近場にある千絵美尾大学につくと、ちょうどタクシーからささらさんが降りてくるところだった。白い服は何故か土汚れで汚れている。…彼氏が亡くなったのに大学に来るのはとても怪しいですが…その前に聞きたいことが。

「ささらさん、聞きたいことがあつて来ました。第一発見者だと聞きました。ささらさんはどうしてあそこに？」

「え？それは、貴方から連絡をもらって…あれ？メールがない…なんで、どうして…？」

私の質問に疑問符を浮かべ取り出したスマホを操作するささらさんだったが目に見えて焦り出す。私から連絡をもらった？そんなこととした覚えはない。でもそのメールがないのだという。どうか演技でないことを祈るしかない。

「どうしたの、ささら。そんなところに突っ立って」

「あ、つづみちゃん！聞いてよ、この探偵さんからもらったメールが消えてて…」

「また嘘？今度は探偵さんまで巻き込んで…」

「前のも嘘じゃないってばあ…」

そこにやってきてささらさんと仲睦まじく話すのは、青みがかかった黒髪のショートカットが似合う、ちよつとすました態度の女子。緑のスカートに泥が付着しているところを見るに車かなんかに水たまり

りで受けたのだろうか？ささらさんは機嫌を損ねてキャンパスに向かっってしまった。なんか友達？なのか何人かに絡まれていたので一応バットショットを取り出し写真を隠し撮りしておく。するとささらさんを眺めていたつづみさんは溜め息を吐いてその場にとどまっていたので、話を聞いてみることにした。

「私は探偵の結月ゆかりといいます。あなたは？」

「私は鈴木鼓すずき つづみと言います。このたびはうちの親友がご迷惑を…」

「親友、ですか」

「はい、恥ずかしながら小学からの腐れ縁ですよ」

そう困った様な笑みを浮かべるつづみさん。やはり親友から悪い噂が出ているのを気にしているのだろうか。

「あの、嘘、とは？」

「ああ、あの子すぐ嘘をつくんです。特に私の部屋に遊びに来るたび色んなものをとって、それを知らないと言い張る：無自覚なわがまま娘なんですよ、あの子」

無自覚。その言葉で思い出すのは事務所で抱き着いてきたあの時のこと。あれもそうだったのだろうか。確かに私が男だったら落とされていたかもしれない。

「なんでもかんでも無自覚に欲しがって、たくさんの男の人もあの子の無自覚な思わせぶりな態度にコロツと落とされ告白して付き合います。なんでか事に至る前にみんな不審死するんですけどね。でもあの子は関与してませんよ、そんな悪知恵が働く子じゃない。やるとしても全力で無自覚にやらかす、それが佐藤紗々良というあの子です」

「無自覚にやらかす…」

「あんな親友に付き合えるのは私ぐらいですよ。じゃあ私はこれで」

そう言つてキャンパスに向かうつづみさん。親友から話を聞いたというのにマイナスな情報しか出てこないのはどうしたものか。：うーん、悪い噂が流れてるなら正確な情報はあまり望めませんし…：大学生、つまり大人になりたての子供ならではの情報網を頼るとしよう。

「そんなわけでここにきたわけです」

「あははー、きりちゃんと喧嘩して、なのにその真下のここに来たんだ！笑えるー！」

「こらヒメ。そういじめないの」

やってきたのはビリヤード場兼梅酒BAR「鳴花^{メイカ}ーズ」…つまり事務所の真下だ。飛び出しといてこの建物に舞い戻るのは格好がつかないが同じフロアじゃないから気にしないことにする。ヒメさんが馬鹿にしてくるけど気にしない、気にしないったら、しない！

「うん、だけどここに来たのは正解だよ。近場なのもあって、大学生みたいな若者はお洒落な酒を飲める場所を探してここにやってくる」

そうクールに笑うミコトさんに、ここに来たことは正解だったと思わずガッツポーズをとる。さて、あとは関連するワードを並べてこのマスターであるミコトさんの聞いたであろう情報を…。

「あ、そういえばさつきテレビに出てたタカハシって仏さんの名前、この間仕事に聞いたよ」

「え!?!ヒメさん、本当ですか!?!」

「うん。タカハシくんには振られたー!?!って泣きじゃくってた」
「振られた?」

のほほんとヒメさんが出した情報。それが全ての答えに繋がっている気がする。すると着信音。スタツグフォンを取り出してみると表示される「あかり」の文字に考える間もなく繋げる。

「あ、あかりですか?今こちらで新情報が……」

《「あ、よかった繋がった。えーとですね、きりたんに頼まれたわけじゃないんですけどー聞きたいことがありますてー」》

「なんですか白々しい」

《「ヘドロ」とか「タール」とか「ウォーター」まで調べたけどなんもでないんでーなんか気になるワードないかなー!?!なんてー」》

……なるほど、「検索」してくれているわけですね。きりたんも意地を張っているのか直接聞こうとはしないらしい。いいだろう、敵メモリの正体も気になってたところですよ。脳裏に浮かぶのはささらさんの服装で気になったアレだ。

「追加キーワード「土汚れ」です。……ヒメさんその泣いてた人……この写真の中にいますか?」

第四話：Mな彼女／決壊した濁流

手がかりを知ってそうなヒメさんに、千絵美尾大学で絡まれていたささらさんとその周囲を撮影したバットショットの画像を見せると、ヒメさんはにんまり笑って指を差した。

「このアングル隠し撮りかな？ いーけないんだー…うん、タカハシくんに振られたって酒の勢いで泣きじゃくってたのはこの子だよ」

「…やっぱりですか。あの違和感の正体はこれか」

犯人は分かった。でも動機が…少し小さい。私の考えが正しければ、まだわかってない事実がある筈だ。きりたんに頼るのが速いのだろうが…すると、のんびりしてたヒメさんが慌ただしく動き始めたかと思えばちらほらと客が入ってきた。この店の混みだす時間帯になったらしい。ちらつとミコトさんを見ると、ほくそ笑んで手をひらひらと揺らした。

「客の迷惑にならない程度なら聞き込みしても構わないよ？」

「助かります」

そして私は大学生らしき人間に片っ端から聞き込みを開始した。

二時間後、私は冷える夜の風を受けながらハードボイルダーを走らせていた。

「まさかとは思ってましたが…そのまさかでしたね」

動機は分かった。でも、まだ気になることがある。不審死したとい

う、ささらさんの彼氏たちのことだ。

「というわけで事件の捜査資料を見せて欲しいのです」

「あんだと、探偵！お前なんかに見せる資料はないわよ！」

やってきたのは水都署。守秘義務もあるので今回の事件を捜査してるとだけ話して、捜査資料を見せて欲しいと頼んだのだが頼んだ相手が悪かったらしい。垂れた犬耳の様な髪型が特徴の年若い女性刑事、有阿緒音^{ありあおね}。すぐ犬の様に噛み付いてくる犬猿の仲だ。

「落ち着きなさいワンちゃん。花さんはいないんですか？」

「だーれが犬だこらあ！」

「なにこんな夜に騒いでんの。あ、ゆかりじゃん。いらつしやい」

話にならないとおちよくっていると、奥から低い声が聞こえてきて振り向く。そこにいたのは一見銀髪のイケメン長身の青年に見えるが列記とした女性である不破花さん^{ふわはな}。私が尊敬している数少ない人間のひとりだ。やんちゃしてた頃からずっと面倒を見られてるので頭が上がらない。

「あ、不破先輩！こいつがまたしゃしやり出て…」

「ちようどよかった花さん！急いでいるんです、至急見せて欲しい捜査資料があります」

「なるほどね。いいよ。緒音、案内してあげて。でも代わりに、なんかわかったことがあったらすぐ教えてね」

「そんな、花先輩アイツに甘すぎませんか!？」

「恩に着る花さん！ほら有阿刑事、早く早く！」

「だから誰が犬……言っていないな。よし、ついてこい探偵！」

ちゃんと呼んでやると機嫌を直して案内してくれるワンちゃん。ちよろい。おちよくってなんだけどこの人本当に刑事なんだろうか。

「さあ、検索開始です」

愛用している何も書かれてない白紙の本を手に意識を集中する。

「あのきりたん、なにを…?」

「私は脳内に地球の記憶を全て内包しているんです。ゆかりさんのネーミングですが「地球の本棚」と呼んでいます。全てを閲覧したわけではないので事あるごとに調べてしまうのが難点ですが：普段はゲームに集中することでそうなることを防いでるわけです」

「ああ、だからゲーム…」

このあかりさんという方はゆかりさんが捜査に協力させていた。つまり信用していいということ。口外しないだろうと信じて話すことにします。説明を終えて、意識を本棚に向ける。白い空間に無数に陳列する本棚。いつもはゆかりさんがキーワードを並べてくれてたけど今回は自分で頑張ろう。

「犯人が佐藤紗々良だろうとそうでなからうとゆかりさんが必ず見つけ出します。私がするべきことは、敵のメモリの正体を探ること。：キーワードは「濁流」「粘性」」

キーワードを喋って入力することにより本棚が移動して減って行く。見えてきたのはヘドロやタールといった想像通りの物から、ウォーターやスライムといった液体系のもの。試しにヘドロの本を手にとって読んでみるが特性がかみ合わない。タールも同様だ。ウォーターは論外、スライムは近いが濁流が使える訳ではない。

「…恐らくあと一つ、キーワードが足りません。いつもはゆかりさんが何かしら思いつくんですが…」

「だったら電話しましょうよ。仲直りです」

「…私が謝る理由がわかりません。嫌です」

私にしては珍しく、ゆかりさんの行動にキレていた。私の正論を感情論で一蹴するし、自分の身を顧みないのも気に入らないし、なによ…私とゆかりさんの絆だと思っていたダブルドライバーを置いていかれた。怒りとも違う、この感情は一体なんだろう。

「なら私が聞きます！」

「ちよつ、まっ」

「…あ、よかった繋がった。えーとですね、きりたんに頼まれたわけじゃないんですけどー聞きたいことがありますー」

あまりに白々しい聞き方に何とも言えない顔になる。嘘を吐けない性格というやつか。ゆかりさんの後輩と言うのもわかる気がする。

「【ヘドロ】とか【タール】とか【ウォーター】まで調べたけどなんもでないんでーなんか気になるワードないかなー！なんてー…：…え？追加キーワードで「土汚れ」？」

気まずかったがあかりさんが代わりに聞いてくれた。さすがはゆかりさんだ、情に絆されながらも探偵としての責務は果たそうとする。だから私は彼女の相棒をやっている。

「追加キーワード「土汚れ」…これは」

そう入力すると本棚が減って行き、一冊の本が残って手に取る。ビンゴだ。その題名は「MUD」マッド…泥だ。

「敵のメモリが分かりました。あかりさん、ゆかりさんに…」

「あ、すみません。切られちゃいました…」

「……………」

「ただ私と話したくないんですかね…。」

「やはり、ですか」

朝になるまで資料室で調べたのはささらさんの彼氏たちが不審死したという事件の捜査資料。タカハシくんのようにミイラの様になったりの他、不自然な階段での転落死、浅瀬で足を滑らせ溺死、なにも水がないところで溺死、トラックに轢かれる（運転手の証言では不自然にいきなり足が止まったとのこと）など色々あるが、全員の衣服に土汚れがついていたという記載があった。警察はこの11人の事件は関連性はなくミイラ以外は全て事故死と推理した様だが違う。あの濁流のドーパントの作業だ。そして大学生たちへの聞き込みによると、この面々の共通点はささらさんと付き合っただけじゃない。

「…ん？」

メールが届いた着信音が聞こえてスタツグフォンを開く。差出人はささらさんで、【話したいことがあるので水都第二野外ステージで待っています】とあった。電話ではなくメール、というのが引つかかつ

た。それに水都第二屋外ステージといえばイベント以外では人が寄り付かないことで有名だ。：懐のダブルドライバーを入れている部分に手を触れて、置いてきたことを思い出す。

「……あかりに一応連絡を入れておきますか」

私になにかあってもどうにかしてくれるはずだ。それにあの人が犯人なら……早く止めないと、不味いかもしれない。急ごう。

水都第二屋外ステージ。水都を二つに分ける大きな万宵川まよいの南側、万宵川が一望できる川辺の丘の様な場所に存在する、音楽祭などの都市を上げたイベントで使われる屋外ステージだ。普段はミュージシャンを志す若者が練習に使われていたりするが、今日は静かだ。

「あ、探偵さん！ ささらを見ませんでした？」

「つづみさん、 どうしてここに？」

屋外ステージについてハードボイルダーから降りていると息を切らしてやってきたのは鈴木つづみさん。すると携帯を取り出しながらこう言った。

「昨日別れてからささらと連絡つかなくて：携帯のGPSを見てここまで来たの」

ほら、と言いながらスマホの通話記録を見せるつづみさん。その様子は親友を心配しているそれだ。

「私はささらさんから話したいことがあるからここに来るように、と言われて」

「つてことはここにいるのね？ささら、いるのー?!」

呼びかけながらステージに向かうつづみさんに付いて行く。するとステージ最前列の席前の通路で突っ立っているささらさんが見えた。その手に握られているのは、スマホと……ガイアメモリ、ですか。

「あ、つづみ、探偵さん……どうしてここに？」

「どうしてって、ささらを捜してきたのよ。どうして電話に出なかったの？心配したのよ」

「それが昨日からスマホを失くして……」

「じゃあその手にあるのは何？」

「それは、家に電話が来て知らない声でスマホを拾ったからここで待ってるって言われて、来たらこれが置いてあって……」

「また変な嘘をつくの？それにその手にあるの、ガイアメモリ！じゃあ、タカハシくんを殺したのは……そんな、なんでよ、ささら！」

「し、知らないよ……ここに置いてあったから拾ったの！」

「そんなものがこんなところに落ちてるわけないでしょ！」

「ち、違うの、私は本当に……」

怒号を浴びせるつづみさんにたじたじなささらさん。今にも泣き出しそうだ。……言質はこれぐらいでいいかな。

「はい、そこまでです」

二人の間に割って入る。すると救いのヒーローでも見るかの様な視線を向けてくるささらさんに対し、本当に驚いた表情を浮かべるつづみさん。

「どうして……ささらがガイアメモリを持つてるのよ!?探偵さんならそ

れがどんなに危険か知って…」

「はいまず待って。なんで、ガイアメモリの名前を知ってるんですか？」

「そ、それは…友達との会話で話題に出たから…」

「それでも見た目まではわかりませんよね？なのに貴方は確信して言った、まるで実物を知ってたみたい。それとも一つ。ささらさんは「置いてあった」と言いました。なのに貴方は「落ちていた」と言った。認識の違いですね。ささらさんは誰かの忘れ物だと思って言ったのに対し、貴方はまるでここに落として行ったと言わんばかりにおっしやる」

「…何が言いたいのかしら？」

スン、と無表情になって問いかけてくるつづみさん。ささらさんは理解が及んでいない様で目を白黒させている。

「いえ、おかしいなあ。まだありますよ。タカハシくんを含めて1人もいたささらさんの恋人たち。彼等にはある共通点がある。それはつづみさん…貴方と交際していた、もしくは友人関係だった人達です」

「つ…!？」

「特にタカハシくんとはつい一ヶ月前まで交際していた様ですね。千絵美尾大学の院生たちから聞きました。さらに言えば、鳴花ーズで貴方が愚痴っていたのを店員が聞いている。その店員にこの写真を見せたら快く教えてくれましたよ。それは貴方だと」

バットシヨットを取り出し写真を見せ、手前に映っているつづみさんを指で突きつける。すると目に見えて狼狽えた。酒に溺れて愚痴った己の失態を恥じているのか。

「ところでささらさん。探偵に依頼したと貴方はつづみさんに言いませんでした？」

「え、あ、はい。タカハシくんが見つかるかも、と心配していたつづみにも…」

「それで合点が이었습니다。それで初見なのに私を探偵だと見抜いた。あの怪物は潜伏が得意なタイプと見ました、恐らくどこからか尾行してたんでしょね。探偵であるのに恥ずかしい話です」

「…なんの、話かしら？」

「貴方が怪物として私と対峙したって話ですよ。それならあのタイミングでタカハシくんを攫ったのも頷ける」

「で、でも！メモリはささらの手にあるのよ！現行犯、言い逃れできない！なのに探偵さんは私がドーパントだと…」

「はいダウト。ドーパントの名前まで知ってるんですね？大方、メモリの力を利用してスマホを盗み、一緒にメモリを置いておいてささらさんに握らせたのでしょうか？私にメールを寄越して一緒に見ることでささらさんをドーパントに仕立て上げようとした」

「ち、違うーささらが…！」

「恐らく、昨日の追跡劇で貴方が逃げ込んだ路地裏からささらさんが出てきた理由でもある件のメールも貴方でしょう。昨日のささらさんのスカートに付いていた土汚れは貴方がマンホールに逃げ込むなりでその時に付いたと見た。貴方の服についてたのは変身時に付いたのでしょうか？」

「で、でも…ささらがメモリを持っていたのは貴方も見たでしょ！？自分の目を信じないの!？」

「ではそんなにお望みなら、文字通り動かぬ証拠というものを見せてあげましょう」

そう言つてささらさんからガイアメモリを受け取る。まるで水たまりから泥が跳ねた様に飛沫の形でMと書かれているそれを突き付け、ボタンを押した。咄嗟に左腕を右手で握りしめるつづみさん。

《マッド！》

「メモリのガイアウイスパーを鳴らすとそれに呼応する様に使用者に

は生体コネクタが出現します。ささらさんにはそれが無い、そして……！」
「っ……！」

右手で隠れた左腕から、特徴的な刺青の様な線が見えた。生体コネクタ。ドーパント特有の動かぬ証拠だ。苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべるつづみさん。メモリはこちらにある。チエックメイトだ。

「もう言い逃れできませんよっ！」

「つづみ、タカハシくんを……ううん、みんなを殺したの？ どうして……」

「どうして？……どうしてって、貴方のせいに決まってるじゃない！ ささらー！」

心配するささらさんに激昂するつづみさん。今まで溜め込んできたものが爆発したような憤怒の感情がびりびりと伝わってくる。

「子供の頃から私のものを次から次へと盗んで……！でもそれはまだいいわ、子供のやることだもの。怒りはしたけど貴方に悪意がなかったから我慢できた。だって私達、親友だもの。でも、高校時代からの幼馴染に、私の所属したサークルの男共……飲み会で出会ったあつくんにゆーくん……勇気を出して告白して付き合えたシヨウタ……そしてなにより、自然と仲良く話せる関係だったタカハシくん……私と関係を持った男たちを、貴方は次から次へと天然で誘惑して盗んで……！しかもそれに悪意がないなんて、どこに怒ればいいのよ!？」

語られた独白は同情できるもので、しかしささらさんは言われて初めて気付いたようだ。恐らく、盗っただなんて思いもしなかったのだろう。親友の物を無自覚に欲しがらるわがまま娘……昨日、つづみさんが言ってた通りだ。

「溜め込んで溜め込んで、私の心は淀んでいった……その時出会ったのよ、魔法の小箱に！私は迷わずマツド泥のメモリを選んだ……初めて変身した時の快感は忘れられない！そして私は思ったの、ささらは悪くない、靡いた男共が悪いんだって。だから私、ささらが盗るたびにあの手この手で殺して行っただわ……」

「それが不審死事件、ですか」

「タカハシくんも最初は殺そうと思ってたけど、彼が就活で失敗して落ち込んだことをささらから聞いて。思ったの、メモリを紹介すればタカハシくんはささらより私を選んでくれるかもって。でも失敗だった。タカハシくんは怒りのままに自分を落とした「WATER SCALAR」の子会社やその店員を襲って行っただ……それに熱中するあまり行方を晦ませてささらが探偵に依頼した……私はささらから話を聞いて焦ったわ。タカハシくんが捕まれば私の事も話すかもしれない。だから殺したの。私やささらよりも復讐に熱を持った馬鹿なんていらぬもの」

そう語るつづみさんは何でもない様に手をひらひらと揺らして囁く。人の心を失くしたのだと確信できた。

「自分から引き込んでおいて保身のために殺したというのですか……でも、なんでささらさんを身代りに？」

「私はささらが好き。親友として、好き。だから殺したくない。けどもう疲れたの。だから……殺さないで退場してもらおうことにした。逃げ道に呼んで、探偵さんに懐疑心を植え付けて、もういらぬメモリを持たせて……完璧だった、完璧だったはずなのに……」

「その、貴方と出会った時の庇っているようで疑わせてくる会話が引っかかったんですよ。つづみさん。自首してください。既に警察は呼んであります。私が呼べばいつでも……」

「そうはいかないわ。私は捕まるわけにいかない、人並みの幸せをいい加減味わせてよ……」

「っ、花さん！」

そう叫んでタツクルしてきたつづみさんに突き飛ばされる。咄嗟に花さんたち警察を呼ぶが、握っていたはずのものが無くなってることに気付いた。メモリがない。タツクルされた時に奪い取られたのか……！

「警察だ！その手に持つてるものを捨てろ！」

「アハハ……この水の街にいるかぎり、誰も私を捕まえる事なんてできないわ……！」

《マッド！》

私を守るように前に立った花さんが周りを取り囲んだ有阿刑事含めた警官達と共に拳銃を手に警告するも、つづみさんはガイアウイスパーを鳴らして狂笑と共に左腕の生体コネクタに挿入して目や口、鼻に耳など全身の穴から黒い泥を溢れさせて包まれ、マッド・ドーパントに変貌。警官たちが弾丸を撃ち込むも、沈み込んでしまいきるで意味をなさない。

「あ、あ……つづみが、怪物に……」

「ささらさん、逃げてくださいー！」

「邪魔よーささらあ……貴方の事は好きだけど貴方がいる限り私は幸せにならないの。死んでくれる……？」

ささらさんの手を掴んで屋外ステージから逃げ出そうとするも、警官たちをその大きな両掌で薙ぎ払い流動体になって追いかけてくるマッド・ドーパント。メモリの毒素が、彼女の最後の人間性まで奪ってしまったのか。ささらさんを連れて草むらに入る。…ダブルドライバーとメモリを置いてきたのは失敗だった。

「ささらさん。私が囷になります。あなたはその間に警察の元に向かって保護されてください」

「でも、探偵さんは?!」

「ご心配なく。私はハードボイルド探偵……依頼人を守り抜くのが仕事です!」

そう啖呵を切って飛び出す。すると人型に戻っていたマッド・ドーパントは私に向けて手を振るい、泥の塊を飛ばしてくる。視界の端でささらさんが警察の方に向かったのを確認、攻撃を避けつつスタッグフォンできりたんに連絡を取ろうとするも、泥の塊を避けようとして落としてしまった。

「しまっ……」

「よくも邪魔してくれたわね探偵さん……貴方はそうね、タカハシくんみたいにミイラにしてあげる……!」

そう笑いながら歩み寄ってくるマッド・ドーパント。万事休すか、と思ったその時。巨大車両が突っ込んできてマッド・ドーパントを轢き潰した。既視感を感じさせるそれはリボルギヤリーで、ハッチが開いて顔を出して降りてきたのはきりたんと、青い顔で目を回しているあかりだった。……あかりは放っていいかな。

「きりたん……」

「まったく、世話が焼けますねえ私の相棒は。あかりさんに居場所と真相を連絡したのはナイス判断です。おかげでここまで来れました。あかりさんにはお礼に今から起こることを見せようと思うんですが……いいですね?」

「……怒って、ないんですか?」

「別に? 私が犯人だと信じ込んでいた佐藤紗々良は犯人ではありませんでしたので私の過失です。でも、これを置いていくのはもう勘弁してください」

そう言っただブルドライバーとメモリ三本を手渡してくるきりた

ん。その目もとには泣いた痕があった。……ダブルドライバーは私ときりたんが繋がっている証だ。それを置いて行ったことがかなり心に來たらしい。さすがに反省だ。するとタイミングよくリボルギヤリーを持ち上げてマッド・ドーパントが顔を出した。やはり物理攻撃は効果が薄いようだ。

「ゴボボオオオ！この程度で、私を倒せるとでも……！」

「わかりました。今回も半分力を貸してください、相棒？」

「もちろん。私達は二人で一人の探偵ですからね。あかりさん、私の体を頼みます」

「え？え？？」

困惑するあかりを置いてダブルドライバーを腰に装着。ベルトにして左手に持ったジョーカーメモリを、横に立ったきりたんは右手に持ったサイクロンメモリを構える。それはまるで二人合わせてWを描く様に。

《サイクロン！》

《ジョーカー！》

「変身！」

そして二人同時に叫び、きりたんが装填して転送されてきたサイクロンメモリをダブルドライバーのソウルサイドに装填、続けてボディサイドにジョーカーメモリを装填。倒れたきりたんをあかりが受け止めるのを確認し、ダブルドライバーを展開する。

《サイクロン！ジョーカー！》

「え、ええええええええ！？」

黒と緑の竜巻に包まれ、私達が変わったのはダブル。驚くあかりを無視して、お決まりのポーズを決める。

『さあ、お前の罪を数えろ！』

第五話：Mな彼女／本当の友なら

「ふむ。せっかく感情の抑制から解放されたというのに邪魔者ですか。せっかくマッドメモリのフル性能が見られるかと思えば……ア
フターケアです、 “仮面ライダー” を消しますか」
《シャーク!》

『さあ、お前の罪を数えろ!』

つづみさんが変貌したマッド・ドーパント。泥の記憶の怪物が交互に両手を振るって、巨大な掌の中央から泥の塊を飛ばしてくるのを、風を纏った蹴りで吹き飛ばす。すると振り返りざまにきりたんを抱えて怯えているあかりが目に入る。

「あかり! 危ないからきりたんを連れてここから離れなさい!」

「え、え、ゆかりさんですか!?! でもきりたんが…」

『私はここにいますよ。私の身体を頼みます』

「え、きりたん? え、ええ!?!」

困惑しながらも言われるままにきりたんを抱えて離れて行くあかり。それを見送った隙についてマッド・ドーパントが右腕を振るって攻撃してきたので振り返りざまにチョップを叩き込むが沈み込んでしまい慌てて引き抜いて距離を取る。

「学習しないのかしら! 私に攻撃は通じないわ!」

「風で散らすのが精いっぱいですか、どうしたのか…とところでマツドって狂ってる方です?」

『ゆかりさん、英語もわからないんですか…このドーパントのメモリは「泥」。水分を得ることで脅威の粘性と再生力を有します。故に熱が弱点です』

「なるほど、さすがきりたん！私の出したキーワードで閲覧しましたか！」

『私のメモリを交換しますよ』

《ヒート！》

照れ隠しの様に右手が勝手に動いてヒートメモリを起動してドライバーに装填、展開。右側が赤く染まり右手の拳に炎を纏う。

《ヒート！ジョーカー！》

「でりゃあー！」

高熱の炎により泥が瞬く間に乾いてただの土塊となる。飛ばしてくる泥の塊を拳で打ち砕きながら突進、マッド・ドーパントの振るってきた巨大掌底に真正面から拳を激突。泥で形成されていたのかマッド・ドーパントの右手を粉碎した。

「ゴボボツ…そんな、馬鹿な…水、水さえあれば…！」

「行かせませんよ！このまま一気に！」

「行かせない、はこちらの台詞ですねぇ」

そのままとどめを刺さんとしていると、突如降りかかる何か鋭いものの雨。咄嗟に飛び退いてそれが飛んできた方向を見やると、新手のドーパントがいた。第一印象は重装備の青い騎士、だろうか。内側に牙が付いているフードの様なパーツの中にWを描く騎士の様な顔があり、胴体はYの形のプレートアーマーが特徴的な青い西洋鎧風、右手に一本のノコギリの様な剣を握っている。

「貴方が何者かは知りませんが、あのお客様を倒されるのは困ります」

「ミュージアムの幹部ですか…」

「ご明察です。邪魔者にはご退場願おう」

そう言って斬りかかってくる騎士のドーパント。こちらの炎を纏った拳を剣の腹でいなし、返しに斬撃を叩き込んできて、それを避ければ剣から牙の様なものが射出され追撃してくる。かなりの手練れだ。この攻防の間にマッド・ドーパントに万宵川まで逃げられてしまった。逃がすわけにはいかない。出し惜しみはできないか。

《メタル!》

「お熱く行きますよ!」

《ヒート!メタル!》

ダブルドライバーのボディサイドをメタルメモリと交換、左側が銀色となり背中に出現したメタルシャフトを手にして騎士のドーパントの斬撃を受け止め、弾き返す。

「…む?ならば!」

「無駄です!」

距離を取って剣を振るい牙の様なものを射出する騎士のドーパントだが、メタルシャフトを回転させて防ぎきり、回転した勢いそのまま投げつけてドーパントにぶち当てて跳ね返ってきたのを手に取り追撃に炎を纏った先端を肩から叩きつける。

「つ…どこからこんな力が…!」

『一気に決めますよ!』

「了解です、相棒!」

《メタル!マキシマムドライブ!》

たまらず距離を取る騎士のドーパントに対して、メタルシャフトの

中心部のマキシマムスロットにドライバーから引き抜いたメタルメモリを装填。横に構えたメタルシヤフトの先端に高熱を灯し、噴射した熱による推進力を乗せて滑走。

『メタルブランディング!』

「ぐっ、ここまでは…!」

その勢いのまま打撃を叩き込むが、騎士のドーパントは剣を盾に直撃を免れ衝撃でゴロゴロと転がる。メモリブレイクは…できてない、か。

「ふむ…どうやら貴方を侮っていたようです、仮面ライダー」

「仮面ライダー?」

「おや? ご存じない? 街の人間が貴方をそう呼んでるんですよ、仮面を被りマフラーを靡かせバイクを駆る正義のヒーロー…仮面ライダー、とね」

街の人達が私達を見て名付けてくれた、その言葉に心の内が温くなる。これまでは単にダブルとしか名乗って来ませんでした…その名は大事に使わせてもらおう。

「ならば私の、いや私達の名はダブル! 仮面ライダーWです!」

「なるほど。覚えましたよ、仮面ライダーW」

そう言っつて新たに剣を生成して地面に牙の様な物をばら撒いて砂煙を発生させそれに紛れて姿を消した騎士のドーパント。…強敵だった。いや、今はそれよりも。

「つづみさんを止めないと…きりたん、どうやって追いかけます?」

『ここはハードスプラッシュャーで追いましょ。水中に逃げられる奴にはそれしかありません』

「私だけだったらタービュラーで馬鹿の一つ覚えみたいに飛んでましたね！さすが相棒です」

拾い直したスタックフォンを操作して呼び出したハードボイルダーに搭乗して、ハッチを開けたリボルギャリーのリボルハンガーでバック走行でドッキング。緑色の後部ユニットを取り外して、代わりにリボルハンガーが回転して設置された黄色い高速艇ユニットに換装して前輪が横になったマシンハードスプラッシュャーをアクセル全開、リボルギャリーが万宵川まで射出し、私達は川の流れに乗って流動体に変化しているマッド・ドーパントを追いかける。この先にあるのは海に面している河口にかけられた水都の南北をつなぐ水都大橋だ。

「つづみさんの狙いは水都市からの逃亡でしょうか…」

『いえ、ならば下水道に逃げるはずです。あの方向にあるのは水都大橋…佐藤紗々良を乗せたパトカーが向かった先です』

「ということは、目的はさささらさん…あ、あれは?!」

水面から飛び出した泥の流動体が水都大橋の上で渋滞に巻き込まれていたパトカーに殺到し、人型の姿を取ると後部座席のドアをこじ開けてさささらさんを拘束して引きずり出し万宵川に飛び込む光景が見えた。

『このままじゃ鷹嘴飛翔の二の舞です!』

「逃がしません!」

そのまま流動体となつて海に逃亡するマッド・ドーパントを追いかける。しかしスピードはこちらが上だが水流に紛れて同化。巨大な濁った津波で出来た巨人となつて襲いかかって来て、ハードスプラッシュャーでサーフィンする様にして逃れるとドライバーのメモリを二本とも外して別の二本を装填する。

『水があるこの場では奴は無敵です!』

《トリガー!》《ルナ!》

「ならば炙り出します!」

《ルナ!トリガー!》

右が金色で左が青の姿になった私達はトリガーマグナムを手にして乱射。放たれた金色の光弾は曲がりくねって津波の巨人の中に隠れた本体を次々と撃ち抜いて分離。しかしすぐに流動体の形態を取って逃げようとするマッド・ドーパント。

『水がある限り回復し続ける…厄介なメモリですねえ』

「ならば水中から引きずり出します!」

そしてハードスプラッシュャーの水中翼に備え付けられてる魚雷を発射。マッド・ドーパントに直撃させずに近くを爆発させることで水中から岸部に吹き飛ばした。転がるマッド・ドーパントの体内から転がり出るささらさんがけほけほと泥交じりの海水を吐き出している。どうやら無事の様だ。

「ゴボボボ……くそっ……ささらあ……あんたさえ、あんたさえいなければあ……!」

「けほっ、ごほっ……つづみちゃん、お願い、やめて……!」

「させません!」

《ヒート!》

マッド・ドーパントがささらさんに向けて巨大な掌から泥の塊を飛ばして叩きつけようとするも、ハードスプラッシュャーを岸边に乗り上げて間に割り込むことで阻止。右側を泥で固められてしまうが、同時にガイアウイスパーを鳴らしておいたヒートメモリをルナメモリと交換して熱で泥をボロボロと崩壊させる。

《ヒート！トリガー！》

「っ、熱…!?!」

「つづみさん。おやっさんの言葉を送りましょう。撃つていいのは撃たれる覚悟がある人だけ、らしいですよ」

そのままハードスプラッシュャーから降りながらトリガーマグナムから火球弾を乱射。突進してきたマッド・ドーパントに次々と炸裂させ、水分を失ったのか乾いて罅割れ動けなくなる。無理やり動こうとしてボロボロと崩れて行くマッド・ドーパントに、私はトリガーマモリをドライバーから引き抜きトリガーマモリに装填、マキシマムモードに変形させて銃口に灼熱の炎を溜めて行く。

《トリガー！マキシマムドライブ！》

『トリガーエクスプロージョン！』

トリガーマグナムの引き金を引いて放たれるは灼熱の火炎放射。まっすぐ飛んで行った火炎はマッド・ドーパントの胸部を撃ち抜き、マッド・ドーパントは力なく頭から倒れて爆散。現れたつづみさんの左腕からメモリが排出され、粉々に砕け散った。

「う、うう……」

「つづみ……ごめん、ごめんね……」

ガイアメモリはその力の強さやメモリの毒素ゆえに精神と肉体を蝕まれて暴走・依存症になってしまう人が多い、一種の麻薬のようなものだ。メモリの毒素は怒りや憎しみといった負の感情を助長・増幅させやすく、最終的には暴走に結びついてしまう。それでもなお、ささらさんを最後まで殺そうとしなかったのはたしかな友情が存在していた証左だし、なんなら一度はメモリを捨てようと思えていたことから、きつとやり直せるはずだ。あとは警察に任せよう。

「…依頼人を泣かせてしまいましたね」

『でも、止めることはできました』

ハードスプラッシュャーに乗ってその場を後にする。ささらさんの涙を止めることはできなかったけど、この街を泣かせるつづみさんを止めることができた。これでよしとしよう。

【HOUKOKUSHO】と英文タイプライターに打ち込んでいく。これは事件が終わるたびにやっている、おやっさんの頃からのルーティンだ。まあ日本語の報告書もあとからちゃんとするのだが、落ち着くためにいつもやっている。

「先輩、相変わらず英語ダメなんですね」

「うるせーです」

あかりに冷やかされながらもこれを打つ。「つづみさんは警察病院に送られた。ささらさんはつづみさんに付き添っているらしい。タカハシくんを見つけ出す、という依頼は達成できなかったが、ささらさんは感謝の言葉を送ってくれた。彼女もある意味加害者だ。無自覚とはいえ彼女のやったことは擁護できない。だけど、この一件で本当に大事なものがわかったように猛省していた。

今回の事件、実質的に誰も救われてない。水都の現実は甘くない。だが、それが例え現実だとしてもきつとこの私が…」

「そこ「私が」ではなく「私達」とか複数形であるべきですよ？」

「…そうですね、失念してました」

椅子に座って携帯ゲームをしていたきりたんと言われて続けて打ち込む。「いや、私達が変わえてみせる」…と。うむ、いいできた。さて次はささらさんに渡す報告書、とパソコンに向き直る。

「そうだ、先輩」

「なんですか、あかり?」

「ダブルとかドーパントとか、まだわからないことだらけですが…私、やりたいことが見つかりました」
「ほう?」

パソコンに打ち込みながら振り向くと、そこにはあかりが鞆から取り出したこの事務所の権利書が…つて、ええ!?

「そ、それは!？」

「いやあ、お母さまに聞いたらお爺さま名義だったので、お爺さまが帰ってくるまで私が預かることになりました。だから私が所長です!これで私、独り立ちできました!」

「いやいやいやいや!？」

「おお…すごい、それは想定外…」

えっへんと踏ん反り返るあかりに全力でツッコみ、きりたんが感心したようにぼやく。いや、たしかにおやつさんがいなくなつてからそのまま勝手に使い続けてたので罪悪感が…

「事務所の名前は継星探偵事務所に変えた方がいいでしょうか?きりたんに聞いたら「ハードボイルドじゃない」って理由でペット探しか断ってるらしいじゃないですか、私が所長になったからにはそれも受けますからね!あ、私が所長になったのに先輩って言い方のままでアレですね。これからはゆかりさんって呼ばせてくださいね!」

「はあ…もう、好きにしてください…」

：私の助手になるのかなーと思ってたら甘かった。あかりは昔から行動力の化身だった……これから騒がしくなりそう。食費どうするんだ、真面目に。

第六話：Dの微睡み／白衣を着た獅子

いい風が吹く水都の昼下がり。事務所の留守をあかりに任せて知り合いの店に昼食を食べに来た私こと、ハードボイルド探偵結月ゆかり。いきなり所長になった我が後輩ではあるが、自由に外を出歩けるようになったのはいいことだ。おかげで一年前の様に親友の店に食事に行ける。…おやつさんがいなくなる前はこうしていつも来てたのだが、あかりが来る前まではコーヒー豆を買って軽く食事をするぐらいしかできてなかった。

「マキさん。カルボナーラといつもの一つ、頼めるかな？」

「はいはい。かつこつけてないで店では帽子を取って待っててね」

「…はい」

カウンター席に座り帽子に手を当てながら注文してみたが、軽くあしらわれてしまった。高校時代から敵わないなあ、マキさんには。

「マスター、カルボナーラひとつ！あとブレンドコーヒーも！ゆかりんブレンドね！」

「…いい加減そのブレンド名やめてほしいんですけど」

「ゆかりん好み五月蠅いじゃん。それよりどうしたの？ゆっくり食べてくなんて珍しいね？」

カウンターから私ににこやかに話題を振ってきたのは金髪のロングヘアが特徴のウエイトレス、弦巻マキさんだ。私の中学時代からの親友で同級生。ギタリストを目指していたが父親一人の店を手伝うことにした家族思いのできた女である。

「それがですね、聞いてくださいよ。あのあかりがうちの事務所の所長になったんです」

「あのあかりって…食いしん坊ご令嬢の？何故かゆかりんに懐いて

た」

「何故かってなんですか。そうです、そのあかりですよ。まあおかげでこうしてゆっくり喫茶店「弦巻」に来れてるわけですが」

「まあ、結果オーライなんじゃないの？はいお待ち、「弦巻」特製カルボナーラとゆかりんブレンドのコーヒーだよ」

「ありがとうございます。いただきます」

よく麺にチーズが絡まったそれをフォークで巻き取り口に入れる。うむ、美味しい。自炊もいいですがやはり安くて美味しい店が一番ですね。

「そうだ、ゆかりんは怪物騒ぎ専門の探偵だから知ってるかな？例の噂」

「例の噂？ですか？」

「そう、水都総合病院でね、お化けが出たんだって」

「…お化けですか」

ドーパントだろうか。それなら聞き捨てならない話である。

「そう。重病人の子供が入院している病室でね。激しく点滅する光が窓から見えて、確認しに行くと言寝静まつてる子供しかいないんだってさ」

「…それだけ？」

「それだけ。人魂かな？怖いよね」

…マキさんには悪いが大したことなさそうだ。病院というのは学校と同じでホラーの舞台になりやすいからそういう噂を誰かが流したのだろう。

「…ちそうさまでした。また来ますね」

食事を終えて帰路につく。事務所から徒歩で移動できる距離にあるというのがありがたい。そうして継星探偵事務所と名を改めた事務所に戻ると、異様な光景が広がってた。

「そこです！きりたん砲：fire！」

「ここで迫撃砲!?!にやあああああ!?!」

「……なにしてるんです?」

「あ、ゆかりさん。お帰りなさい」

珍しく事務所で携帯ゲーム機で熱中しているきりたんと、同じゲーム機をプレイしている見知らぬ少女。大興奮のきりたんと対照的に頭を抱えて涙を流している少女にあかりが何とも言えぬ笑みを浮かべてる。

「えーと、今回の依頼人です。ゆかりさんを待ってました」

「何でその依頼人ときりたんが遊んでるんです?」

「なんでも、ネット対戦でライバル関係だったようでして。きりたんが事務所でゲームしていたためいろはさんが気付いて意気投合って感じですね」

「いろはさんとは…依頼人ですか?」

「はい。猫村彩羽ねこむらいろはと言います。勝手に遊んでて申し訳ありません」

ふむ。白衣を着ていて、猫耳の様なカチューシャを付けてる赤髪の少女…に見間違うほど年若い。20になりたてと言ったところだろうか?

「いえいえ。うちの偏屈娘の相手をしていただいてありがとうございます」

「誰が偏屈娘ですか」

「それで、ご依頼はなんでしょう?」

きりたんは無視して席に座り本題に入る。きりたんがこの場に同席して依頼人の話を聞くのは何気に初かもしれない。

「私、水都総合病院の研修医をやってるんですけど……面倒を見てくれていた看護師の蒼姫ラピスさんが先日変死体として発見されて……」
「それは、ご冥福を祈ります……」
「変死体、とは？」

空気を読まずにずかずか聞いてくるきりたんを睨みつけながらいろはさんに話を促す。

「亡くなる先日までは元気だったのに、一晩でまるで衰弱死したような状態で発見されたんです……」

「衰弱死、ですか」

「はい……警察もまともに調べてくれなくて、単純に病気かなにかで衰弱してたところに転んで事故死したと判断して……これ、私が見つけた時に一応撮っておいたもののコピーです」

「え、第一発見者なんですか？」

「はい……いつも通り指示を仰ごうとしたら全然来なくて、おかしいなど探し回ったら屋上への階段の踊り場で見つけて……」
「なるほど。拝見します」

いろはさんが鞆から取り出したホッチキスで纏めた書類を受け取って順番に捲って行くと、後ろから覗き込むあかりとその手に抱えられたきりたん。いやまあ気にしませんけどさ。

一枚目。被害者の顔のアップ写真。黒髪を短く纏めた、瑠璃色の瞳が恐怖に苛まれて見開いたまま亡くなってる。痩せこけて衰弱しているように見える。

二枚目。動揺故なのか結構ぶれているが水色のナース服を着た上半身が映っている。外傷らしい外傷は見られないし、床に血の跡もな

い。腕部がやはり痩せている他、胸部に小さな穴が開いているのが気になる。この位置は心臓か？

三枚目、階段の下側から踊り場を横から撮った写真。踊り場の下に降りる方に頭があるらしい。背中側に外傷らしいものは見えない。

四枚目。恐らくは階段の上から踊り場の遺体を撮った写真。全体から見てもまるで老人か枯れ枝の様になってる。写真はこれで全部か。…あれ？

「…きりたん、気付きましたか？」

「おや、ゆかりさんも気付くとは。さすがは探偵ですね」

「え？なにかわかったんですか？二人とも」

あかりが困惑してるが明らかにおかしい場所がある。屋上付近と
いうことで壁がうつすら汚れてるのに、ある程度の高さから一定の範
囲だけ綺麗に拭き取られている。それも、見える限りU字に。明らか
に不自然だ。

「…ドーパント、ですかね？」

「まだ確証はありませんが、十分ありえますね」

「それでいろはさん。私達にどうしてほしいのですか？」

「ラピス先輩がなんで死ぬことになったのか…その真実を調べて欲しいんです。もし誰かの仕業なのだとしたら…私、悔しいんです。あんなにいい人な先輩が…」

「わかりました。その依頼、お受けしましょう」

こうして私達は水都総合病院に向かうことになった。

「きりたんさんはついて来られないのですか？」

「あの子は身体が弱くて外に出られないんですよ」

「そうなんですか…」

いろはさんの質問に用意していた言い訳を答えながら彼女の案内で正面玄関からあかりと共に水都総合病院に入る。廊下を通り、北側の階段を上って現場に。その向かう途中でいろはさんが立ち止まった。

「猫村彩羽。こんなところでなにしている？研修の時間はとつくに過ぎていくぞ」

「は、葉常ドクター…」

上から降りてきたのは、白衣の上に青く長いマフラーを首に巻いた下に青のスラックスと茶色いズボンを身に纏った黒髪碧眼で眼鏡をかけた男。すると反応したのはあかりだった。

「葉常海斗さん…!?!」

「知ってるんですか？」

「はい、ここ水都総合病院を代表する天才外科医です。私の知り合いの令嬢も彼の手術を受けて癌から助かったとか」

「なるほど。凄い人なんですね」

「そちらはどなたかな？」

怯えてしまったいろはさんを庇うように前に出て帽子を取って一礼する。横であかりも慌てて頭を下げた。

「失礼。私、継星探偵事務所の探偵、結月ゆかりと申します。こちらは所長の継星あかり。猫村彩羽さんの依頼でここまで来ました」

「…ああ、蒼姫ラピスの事件か。あれは衰弱による事故死だと警察が判断したはずだが？」

「そんなわけではないです！前日までラピス先輩は元気いっぱいでした……」
「猫村、君以外のナースからはここ最近顔色を悪くしていたとも聞いているぞ。大事な後輩のために空元気であったのだろう。体調管理もままならんとは、医療関係者として失格だな」

「っ、そんなこと…!？」

「いろはさん。落ち着いて。…残念ながらこの事件、奇妙な部分がいくつかあります。その謎を解いているいろはさんが納得するまで、私達に捜査させてもらえないでしょうか？」

「……わかった。俺から院長に通達しておこう。俺も忙しい、猫村。その人たちが変なところに迷い込まない様にしっかり見張つてろ」

「は、はい！」

そしてマフラーを靡かせて去って行く葉常ドクターだったが、私に前に立たれて分かりやすく眉間にしわを寄せた。不機嫌を隠すことなく睨み付けてくる。

「…何か？」

「いえ、どうして現場がある上から降りてきたのかなー、って。参考までにお聞かせいただけますか？」

「……屋上で一服していた。これで満足かな？」

「……いいえ、お手数おかけしました。では」

前からどくと今度こそ去って行く葉常ドクターを私が睨み付けているのが気になったのか心配そうに覗きこんでくるあかり。それで私も怖い顔をしていたことに気付いて笑顔をとる。

「ゆかりさん、なにか気になる事でも？」

「一服したにしては煙草の匂いがしなかったのと、……彼、外科医なんですよね？それがウソでも煙草を吸ったなんて言うほど、動揺してた

「ことになります」

「なるほど？」

「現場が気になります、見に行きましょう」

いろはさんが先導して階段を上って行く。二階分上ると、件の踊り場についた。人気ひとけが少ない、ここで倒れてもそう簡単に気付かれないだろう。

「寂しい場所ですね…」

「…やはり、汚れに違和感を感じますね。何者かが意図的に汚れを取って行った…？なんのために？」

「あ、私お花を摘みに行つてきますね。お恥ずかしながらさっきの緊張で…」

「ああ、ゆっくりしてきてどうぞ」

申し訳なさそうないろはさんを見送り、バットショットで写真を撮る。ふむ、角度が悪いですね。

《バット！》

「おお、それは確か、ギジメモリ？」

「よく覚えてましたねあかり。正解です」

バットのギジメモリを装填、蝙蝠に変形したバットショットに上から写真を撮ってもらう。

「これで何か分かればいいですが…む、足音？」

「あ、いろはさんが帰つてきたのかな？」

バットショットを手に取りながらあかりと一緒に階段の下を見る。しかしその足音は鈍重で。階段を上って現れたのは、異形の怪物であった。

「ら、ら、ら、ライオン!？」

「ドーパント……!」

白いふわふわした鬣を生やしている雄ライオンの様な巨大な顔から鋭い爪しか特徴がない胴体が生えているという、一見滑稽な姿をしているがそれは間違いなくドーパントで。咆哮を上げて威嚇するそいつに、咄嗟に取り出したダブルドライバーを腰に付けてジョーカーメモリを手に取る。

《ジョーカー!》

「きりたん、出ました!やはりドーパントです!」

【《サイクロン!》やはり出ましたか】

「【変身!】」

《サイクロン!ジョーカー!》

そしてメモリを装填すると同時にドライバーを展開しダブルに変身。あかりを守るために踊り場から飛びかかり、ドーパントと共にゴロゴロと階段を転がり落ちて行き、八階の廊下で受け身を取り、よろよろと立ち上がったドーパントと対峙する。

『ライオンのドーパントですか、随分と不恰好ですが』

「ホワイトライオンですかね……とりあえず、殴る!話はそれからです!」

跳躍して拳を繰り出すも、鋭い爪の手で叩き落される。さらにその巨大な口で頭から胸部まで噛み付かれ、がぶがぶと何度も噛まれてペツと吐き出されて壁に叩きつけられる。その時気付いたが、牙が黄色だった。黄ばんでいるのだろうか、などと現実逃避に考える。

「いたた……変身してなかったら食いちぎられてたかも……」

『さすがは百獣の王。厄介極まりないですね。獣には火で行きましよう』

「同感です…」

《ヒート！》《ヒート！ジョーカー！》

ヒートジョーカーに変身し、炎を纏った拳を鼻面に叩き込む。

「でりやあー！」

「グオン!？」

すると大きく怯み、続けて胴体、顔と連続で叩き込んでいく。するとドーパントはたまらないと言わんばかりに背中から緑色の翼を生やして窓から外に…つて、ええ!？」

「飛んだ!？」

『グリフォンかなにかですかね!？』

2人して驚いている間に下降するドーパント。あの先は…正面玄関!？」

「まずい、あそこには沢山の一般人が…」

《メタル！》《ルナ！》

『これで降りますよ!』

《ルナ！メタル！》

慌てているときりたんがメモリを入れ替えてくれて金と銀のルナメタルに変身、メタルシャフトが伸縮して手すりに引っかけ、窓から飛び出してメタルシャフトを命綱にするすると降りて行く。そして玄関から急いで入ると、自動ドアを開けた瞬間視界が真っ白になる。白いなにかが溢れ出てきたようだ。

「な、なんですかこれ!？」

『煙ですかね？誰か消火栓でも…』

人がいるかもしれないのでメタルシャフトを振ることもできずぶんぶん両手を振り回していると視界が開けたかと思えばとんでもない光景が広がっていた。

「こ、これは…!？」

『そんな、馬鹿な…』

二十数人はいて和気藹々としていたであろう待合室は客やナースにドクター問わず全員まるで衰弱しているかのような姿で倒れ伏して死屍累々となっていた。無事な人間が、この場に誰もいない。そしてドーパントは何処に…？

『病院でこうなっちゃ世話無いですね』

「一つだけわかりました。ドーパントは、この病院の人間です」

外には私達がいたので、逃げ道はこの建物内しかない。こんなひどいことを簡単にしでかす外道、必ず追い詰めて見せる…！

第七話：Dの微睡み／咲き誇った惨劇

「探偵です。現場を見せてもらえませんか」

一度八階までルナメタルで戻ってから変身を解き、あかりにはいはさんが戻ってくるまで待機してもらって改めて一階の待合室まで急ぐと人が集まって騒ぎになっていて、近くのナースに名刺を見せて中に入れてもらう。改めて数えると24人もの犠牲者が出ていた。止められなかったことがこれほど悔しいとは。おや？私以外にも死体を見て回ってる人がいる？

「ラピスの事件だけでも大変なのに、こんなに同じ死体が出るとはねえ。ついさつきまで生きてたはずが仏さんに早変わりとは、やってらんないねえ美来？」

「…死者の中には私の患者もいた。やりきれない」

「だよねえ。っと、アンタ何者だい？刑事？」

やってきたのは白衣を着てはいるもののミニスカートの赤いワンピースを身に着けた短い茶髪のドクターと、逆に白衣の下が露出度の低い服を着た長い黒髪をツインテールにした碧眼のドクター。後者は先程の葉常海斗ドクターと印象が似ていた。兄妹だろうか。

「刑事ではなく探偵です。ここの研修医に蒼姫ラピスさんの事件を解決してほしいと依頼を受けまして。来た矢先にこんなことに」

「あー、いろはちゃんかあ。あの子も熱いねえ。アタシは阪井芽衣子、監察医をやってる。この子は葉常美来。精神科医さね」

「葉常っていうと…葉常海斗さんの？」

「海斗は兄。もしかしてなにかご迷惑をおかけした？何分、堅物なので…」

「いえいえ、お気になさらず。ドクターならちようどよかった。貴女方の見解を聞きたい」

警察が来る前に調べておきたい。改めて亡骸のひとつを見てみる。ここに来たときに見た顔だ。たった一時間近くでここまで痩せ細るとは。ライオンのドーパントはどうやってこんな芸当を、しかも短時間で…。

「アタシから言わせてもらおうと、「ありえない」としか言えないね。ラピスの時は胃内の中身が干からびて残っていた。そして肉体は衰弱死も同然。死ぬ前日まで生きていた人間がそうなるのはありえない。あり得るとしたら肉体の養分を根こそぎ奪い取られた…としか言いようがない」

「養分を奪い取られた…？」

「全員服の心臓近くに小さな穴が開いてるから、そこから何かを刺されて吸い取られたんじゃないかってのがアタシの見解だ」

もしかしてライオンのドーパントではない、のか？吸血鬼と言われた方がまだしっくりくる。

「この犠牲者たちに共通点はありますか？」

「…私の患者が八割、あとはまちまち。今日往診に来なければこうなることはなかった…残念でならない」

「美来の責任じゃないっての。もう、アンタはまじめだねえ」

「義姉さんは適当過ぎる。ドクターなら自分の患者に責任を持つべきだ」

「あたしゃ監察医だからね。自分の患者がいらないのさ」

芽衣子さんを姉と呼ぶ美来さんに、関係性を察する。つまり芽衣子さんは海斗さんの恋人なのか。あの厳格な人の恋人がこんな人だとは意外だ。

「あえて言うなら異常死したこの仏さん方が患者さね」

「…そう。ならしやうがない」

「あ、ゆかりさん！いろはさんを連れて来ました」

「これは…ひどい…」

そこにあかりがいろはさんを連れてやってきた。いろはさんはこの惨状を見て口元を抑えてる。正常な反応だろう。達観している芽衣子さんと美来さんの方が珍しい。

「おや、いろはじゃないか。海斗んところで研修じゃなかったっけ？」

「海斗さんからは納得するまで調べていいと許可を得ました…」

「兄さんが…珍しい」

するとあかりがこそこそと私の耳に口を寄せてきたので耳を寄せる。

「ゆかりさん、ドーパントは…」

「逃げられました。その結果がこれです…」

「ゆかりさんたちは悪くありません。悪いのは犯人です！」

「ありがとうございます…」

あかりに元気づけられていると、自動ドアが開いて警官たちがやってきた。それを率いているのは見覚えのある刑事二人。

「水都警察署の有阿です！怪事件が起きたと聞いて…って、探偵!？」

「ゆかり。君も来てたのか」

「あ、ワンちゃん刑事に花さん。こんにちは」

「誰が犬だ!？」

きやんきやん喚く有阿刑事は無視して花さんと情報を共有する。いつも通り、何か分かったら教えると言うことで特例で調べさせてもらえることになった。

「ありがたい、助かります花さん」

「怒りに震えてるみたいだからね。止めても勝手に調べるんだろ？なら許可しておいた方がいい」

「…さすが。花さんには敵いませんね」

警察は待合室を調べるらしいので、なにかあるという確信を持って屋上への階段に向かう。いろはさんは事情聴取を受けるらしいのであかりと二人行動だ。

「…もしかしてですけど、いろはさんを疑ってます?」

「まさか。依頼人は信じ抜くのが探偵です。…ですが、あの場になかった人間全てが容疑者ですね」

いろはさんだけじゃない、芽衣子さん、美来さん、海斗さんも容疑者だ。あの場からすぐに逃げられたということは病院を知り尽くしてる人物、つまり患者ではなく医者やナースたち病院関係者ということになる。

「養分を吸い取る……もしかして噛み付いてきたのは私から養分を吸い取るため……?でも、あの行動からそんな意図は見られなかった……」

あの時の戦いを思い出しながらも一度踊り場を観察する。壁の汚れはカビの様だ。

「カビが消えた……ってことですかね。でもなんで?」

「ドーパントがカビ掃除したとか?」

「なんのために?」

「せざるを得なかった……とか」

養分を吸いとられたかのような死体。白いなにかに覆われたかと思えば大量に犠牲者が出た待合室。何故か消えたカビ汚れ。そしてライオンのドーパント。なんだろう、なにかが足りない。一度事務所に戻ってきりたんと一緒に整理した方がよさそうだ。

「一度帰りますよあかり。きりたんに「検索」してもらいましょう」
「あ、私はここに残って聞き込みします。情報は多い方がいいでしょう？」

「…危険ですよ、と言っても残るんでしょうね。気を付けてくださいね。一応、これを預けときます。それとこれも」

懐から取り出したバットショットとギジメモリ、手首のスパイダーショットから取り外した発信機をあかりに渡す。使い方は教えてるから問題はないだろう。

「護身用です。バットショットは撮った画像をスタックフォンに送れるのでなにか見つけたらそれで」

「わかりました。きりたんよろしく」

ハードボイルダーに搭乗し事務所に戻ろうと水都総合病院の門を通り過ぎた時、黒塗りの高級車とすれ違う。一瞬だけ後部座席に見えた黒髪に枝豆？の髪飾りを付けた女性と目があつた気がした。

「これ以上被害を出させたくありません、急いで検索を」
「そう言うと思って待ってましたよ」

ガレージに入りながらきりたん呼びかけると自信満々な返事が返って来て。見てみればガレージに設置してあるテレビに向かってゲームしていた。

「ゲームしながらつてのが、らしいですね！」

「これでも他の事に集中しないための気遣いなんですか？…今回はゲーム仲間の依頼ですからね」

「ほう。きりたんが私以外のために本気になるとは、珍しいですね？」

「さ、さあ始めますよ。検索開始です。知りたいのは敵のメモリ」

手を広げて意識を地球の本棚に飛ばすきりたんを見届け、メモに書いたことを言っていく。

「最初のキーワードは「ライオン」です」

「当たり前ですが、ライオンのドーパントにあの様な力はありませんね」

「では次。「飛行」どうですか？」

「グリフォン、キマイラ、マンコテア、アメミット、スフィンクス、ヒツポグリフ、ムシユフシユ、アンズーなどが残りましたがまだ絞り切れません」

「そんな感じはしませんでしたし、何より一瞬で大量に殺害する方法が分かりませんね。では次が本命のキーワードです。「養分」あの病院の監察医から得た死体の特徴です」

「…あっ。なるほど…納得しました。ビンゴです、ゆかりさん」

答えが分かっていたのか、手にした白紙の本をめくって行くきりたん。そして我に返ると、ホワイトボードに何やら書き込んでいく。大きく描かれたのは d a n d e l i o n という文字。

「ダンディライオン？ライオンの一種ですか？」

「いいえ、違います。ダンデライオン、日本語で…タンポポのことで

す」

「た、タンポポ!？」

ようやく判明したメモリの正体に、私は度肝を抜くしなかった。

「ダンデライオンは綿毛の鬣と葉っぱの様な翼を固有能力として持っています。あの時飛んでたのは翼ではなく、綿毛で浮いて翼で推進力を得て飛んでたわけです」

「はえー、納得です」

ホワイトボードに分かりやすく図を描きながら教えてくれるきりたん。そしてホワイトボードの「養分」と書いた部分をグルグルと円で囲んだ。

「そして特筆すべきは養分を吸い取ること。飛ばした綿毛は触れた人間・生物にくっついて養分を根こそぎ吸い取りタンポポに成長、ダンデライオンはそれを食べることで力を得るようです。そもそもタンポポは外来種もありまして、勝手に他の植物の養分を吸って成長するものもあります。またタンポポは料理すると美味しいそうです」

そう言って書き記したのは、被害者たちの服の胸に残った謎の穴。あれが蒲公英が咲いて食べられた跡らしい。

「生物……あつ、カビ汚れ」

「そうです。あの写真はU字に綺麗になってましたが…実際は円形だったんじゃないですか？恐らくダンデライオンは自らの綿毛を円

形に飛ばします。綿毛が飛んでくっ付き、偶然生物であったため一緒に根こそぎいただいたのでしよう」

「じゃあ待合室の惨劇も…」

「あの時私達も受けたあの白い煙が飛ばした綿毛だったのです。生体装甲のダブルだったおかげで吸われるまでタイムラグがあつて変身を解くことで種子を消し去りましたが、あのまま変身し続けるとゆかりさんの身体はラピスさんの二の舞になっていたことでしょう。気を付けてくださいね。いくらダブルでもあの量の綿毛を喰らえばただではすみませんよ」

「む…心得ました。それで、対処法は？」

「タンポポが咲いても諦めては駄目です。食べられる前にダンデライオン・ドーパントを倒すことができれば…」

「…つまり、犠牲者を蘇生することはできない…」

「そうなります」

「くっ…！」

たまらず壁を殴りつける。鋭い痛みが走るが気にしたもののか。私達が追い詰めたから、ダンデライオン・ドーパントはあの凶行を行った。その事実が重くのしかかる。

「あれは私達のせいじゃないです」

「でも…！」

「だって、逃げるなら外に逃げればいい。ああしたのは、犯人がそうしたかったからに他なりません。あの場にいた誰かを殺したかった…もしくは、あの場にいた全員を殺したかったか。私達の責任じゃありません」

「きりたん…」

「それに…ひゃい!？」

「ん?どうしました?」

まだ何か話そうとしたきりたんが肩を跳ねさせる。どうしました

かと条件反射で言ったが、普段冷静沈着なきりたんがこの反応になるのは一つしかない。きりたんの視線の先を見ると、物陰からそれは出てきた。

「ふあ、フアング…来ないでください！」

フアングメモリ。他のメモリと異なり、恐竜型の特殊なメモリ。このメモリで変身できるフアングジョーカーは強力なのだが…理性を失ってしまうため、きりたんはなによりも恐怖していた。フアングは一声吠えて姿を消し、きりたんは胸を撫で下ろす。

「…きりたん」

「なんですか？」

「もしかしたら今回はフアングを頼ることになるかもしれないかもしれません」

「な、なぜ？」

「もうこれ以上、奴に凶行をさせないためです。とりあえず水都総合病院に戻りますね」

そう言っただけ私はガレージを後にした。ある覚悟を胸に秘めて。

今頃、ゆかりさんたちは敵のメモリを暴いているところだろうか。そんなことを考えながら聞き込みを続ける。つい今芽衣子さんに聞いて分かったことだが、ラピスさんも美来さんの患者だった。不眠症だったらしい。美来さんは自分の患者を沢山一気に失ったことになる。やりきれないだろうなあ。

「ありがとうございます。芽衣子さん。美来さんにも話を聞いて…」

「俺の妹がどうかしたか？」

「ひい!?葉常海斗さん…」

そこに背後から話しかけてきたのは海斗さんだ。すると笑顔になって海斗さんの肩に手をかける芽衣子さん。海斗さんは珍しく照れていた。

「ほらほらくそんな仏頂面してるから怖がられるんだようピースピース」

「き、きみは！彼女といえどやっていいことと悪いことが！」

「これはやつちや悪いことなのかなー？」

「い、いや…うむ」

すごい、海斗さんがたじたじだ。というかこの二人やはり付き合っていたのか。美来さんが芽衣子さんを姉と呼んでいたからなあ。

「じゃ、じゃあ私は失礼します！」

なんか毛恥ずかしくなってその場を去る。なんとなく、現場の階段に足を向けた。

「うーむ…」

あのとき気になったことは、足音は遙か下ではなく、横…八階の廊下からやってきたように見えた。この先に犯人がいるのだろうか。

「…あれ？」

廊下の突き当たりの部屋をそーっと覗きこむと、いろはさんがベツ

ドから身体を起こした少年に寄り添い、少年がゲームをしている光景があつた。見るからに重病人、だろうか。咳をしながらも熱中している。いろはさん見ないなと思つてたらこんなところに……。

「見なかったことにしましょう」

恐らくルール違反だが、いろはさんなりの治療なのだろう。なら私が口を出すことはない。そう思いながら次の部屋を覗こうとして、何か激しい音が聞こえてきた。これは……!? その方向を見やると、階段の上から三日月の様な弓を左手に装備した熊の毛皮を被った女性の様な見知らぬドーパントと、あのライオンのドーパントが出てきた。しかし様子が可笑しい。あの時見た時よりもライオンのドーパントのボディが筋骨隆々になつてるような……。それになんでドーパント同士が争つて……

「よくも、騙したわね!」

「ウオオオオオン!」

なにかに怒っている熊のドーパントの弓から放たれる光の矢を、雄叫びを上げてその衝撃波で叩き落すライオンのドーパント。明らかに強くなつてる、なんで……?

「と、とりあえず写真を……」

ちようどよく空き部屋だった病室に入り、バットショットを構えてその様子を隠し撮る。これでゆかりさんに送られたはずだ。一緒にスマホで事細やかにメールを送る。すぐ近くにいろはさんと重病人の少年がいることも書いておいた。

「何で私を怒らせるの!」

熊のドーパントの鹿の様な足の蹴りがライオンのドーパントに突き刺さり、廊下をこちらに転がってくる。運が悪すぎませんかね!?

「【変身!】でやああああ!」

すると、廊下の突き当たりの窓を蹴破ってサイクロンジョーカーのダブルがゴロゴロと転がって受け身を取った。窓の外を見れば飛行ユニットのハードタービュラーが飛んでいた。あれで飛んできたのか。

「これ以上ここで凶行を起こさせません、ダンデライオン・ドーパント! 『さあ、お前の罪を数えろ!』」

「貴方達も私を怒らせるの!」

「貴方はミュージアムの…!」

すると怒鳴り散らした熊のドーパントが適当に光の矢をばらまき、廊下がどンドン壊れて行く。まず優先すべきはダンデライオン?らしいライオンのドーパントよりもあの熊のドーパントと見たのかダンデライオンの横を駆け抜けて行くダブル。

《サイクロン!トリガー!》

風の弾丸をばら撒き牽制しながら突進、右のハイキックを叩き込むダブルだったがしかし、熊のドーパントは腰に巻いた犬?の様な毛皮を投げつけ、それは大型犬に実体化して何度も何度もダブルを噛み付いて行く。その間に熊のドーパントは跳躍して窓から逃れて行った。なんだったんでしょ…?

「くっ…」

《ヒート!ジョーカー!》

炎を纏った拳で犬を殴り飛ばし消滅させるダブル。それと対峙するのは、明らかにパワーアップしてるダンデライオン・ドーパント。

「…貴方は一体誰ですか」

「ウオオオオオン！」

咆哮して四つん這いとなり、高速で突進するダンデライオン・ドーパント。ダブルの胸部に噛み付いて振り回しつつ廊下を何周も爆走して壁にダブルを叩きつけつつこつちまで突進してくる。

「ちよっ、こつちはいろはさんたちが…!？」

「…させ、るか…!」

私の悲痛の叫びを聞いて奮起したのか炎を纏った拳を顔面に叩き込んで解放されるダブル。しかしダンデライオン・ドーパントの勢いは止まらず、突き当りの部屋の扉を突き破ってダブルと共に中に入ってしまう。

「え、怪物!？」

『ゆかりさん、駄目だ!』

隣の部屋だからよくわからないけどいろはさんの驚いた声ときりたんの悲鳴が聞こえる。

《ジョーカー！マキシマムドライブ!》

そして必殺の音声と共に鬣が消えたダンデライオン・ドーパントが吹き飛んできて壁に激突。かなり効いたのか、その姿が最初に見た時と同じ貧弱な姿に戻り、よろよろと歩いて去って行ってしまった。一体何が起こって…

「っ、ゆかりさん!？」

「あかりさん! どうしよう、ゆかりさんが……！」

慌てて隣の部屋に入ると、明らかに衰弱し胸からタンポポを生やして倒れ伏しているゆかりさんの姿があった。そんな……。

第八話：Dの微睡み／切札が牙を剥く

「あれ、姉さん。どうしたのだ？」

東北家にて。たった今空を飛んで憤慨して帰ってきた怪人姿の姉に無邪気に問いかける少年。すると姉は怒りを隠さずに怒鳴り散らした。

「星香に言っておいて。私の主治医にまでメモリを与えるんじゃないわよって！」

「姉さんが珍しくお怒りなのだ…わかったのだー」

いらついた姉…アルテミス・ドーパントの放った矢が庭の石灯籠を壊す。そんな姉を見ながらニコニコと笑顔を浮かべて去って行く弟であった。

「ゆかりさん…！」

変身が強制的に解かれ、意識を戻した身体で飛び起きる。腰に付けられたままのダブルドライバーの通信で呼びかけるが返事がない。最後の光景がフラッシュバックする。あかりさんからドーパントが現れたと情報を得てハードタービュラーで急行したゆかりさん。

変身と同時に八階の窓を蹴破り突貫して、そこにいたミュージアムの幹部であろう謎のドーパントとダンデライオン・ドーパントの戦闘に割り込んだ。しかしそこで想定外なことが起きた、ダンデライオン・ドーパントが養分を大量に取り込んだ故なのかパワーアップしていたのだ。

その圧倒的な力でダブルを圧倒し、さらに運が悪いことに猫村彩羽や一般人の病人がいる部屋に入ってしまったことで、ゆかりさんは綿毛の放射から後ろの二人を庇い、返しにヒートジョーカーの必殺技ジョーカーグレネードを使用したことで退けることはできたが、ゆかりさんが倒れてしまった。恐らく心臓からタンポポが生えているはずだ。アレが食べられない限りは無事なはずだが：祈りつつ私用のスタックフォンでゆかりさんのスタックフォンに連絡を入れる。

「ゆかりさん、無事ですか!？」

《「あ、きりたん?! 大変なの、ゆかりさんが仮面ライダーで、私達を守って倒れて…」》

「猫村彩羽ですか!?! あかりさんは…」

《「あかりさんは私達を襲った怪物を追いかけて行つたの。ねえ、どうすればいい!?! 私、医者なのになにもできない…」》

「なら心臓のタンポポに触れないでください。それが失われると蒼姫ラピスの二の舞になります。私が行くので、それまで誰にも見せないようにしてください。あの病院で、貴方しか信用できません!」

《「わ、わかった」》

ゆかりさんのスタックフォンとの通話を切り、続けてあかりさんの電話番号をプッシュ。繋がった瞬間に怒鳴り散らす。

「こら！ 何勝手に一人でドーパントを追いかけてるんですか!」

《「き、きりたん…だって、ゆかりさんが倒れて、どうしようって、私にできることはこれしかないから…」》

「ゆかりさんなら心臓のタンポポがどうにかならない限りまだ生きてます！ 戻ってゆかりさんに誰も近づけないでください！ 今は猫村彩羽がやってくれてるので!」

《「う、うん…ごめんね、心配かけた?」》

「無事ならいいですよ」

通話を切り、外に出てタクシーを拾う。…ハードボイルダーを操れないこの小さな体が忌々しい。リボルギャリーを使う訳にもいきませんし。

水都総合病院に駆けつけると、警察が慌ただしくしてたのでその隙をついて中に入り八階に向かう。破壊跡を警察の鑑識が調べていて、病人のふりをして奥の部屋に向かう。体が小さくてよかった。

「いろはさん！あかりさん！」

「あ、きりたん」

「待ってました。ゆかりさん、この状態でずっと目を覚まさなくて…」

その部屋にいたのは、いろはさんとあかりさん、そしてベッドになつてる少年と、一番奥のベッドにカーテンで隠されて横たわってるゆかりさんだった。息はしている、まだ生きている。だけど、これでは戦えない。ゆかりさんの目を覚ますにはダンテライオン・ドーパントを倒すしかないのに、戦えるゆかりさんがこの状態だ。…あの時言っていた台詞が脳裏に浮かぶ。

「…凶行を重ねさせないってこういうことですか…貴方が倒れちゃ意味がないでしょう」

「きりたん…」

「決めました。ゆかりさんの代わりに私が戦います」

…ゆかりさんには悪いですがフアングを使うつもりはありませんが、それでも抗ってみせる。

「そうだ、あかりさん。ダンデライオンを追いかけたんですよね？何か手がかりはありました？」

「あ、それなんですが…」

そう言っただけあかりさんが差し出してきたのはカルテ。患者の名前と病状がびっしりと記されていて、責任者の欄には葉常美来の名があった。精神科のカルテだろうか。妙なことに、いくつかの名前にペケがなされてある。

「ダンデライオン・ドーパントが落としたとしたら、目的は美来さんの患者さんなんですかね…ラピスさんも美来さんの患者でしたし」

「そうですね、葉常美来に恨みを持っている人間の犯行とみて…：…：今、なんて言いました？」

「え？ラピスさんも美来さんの患者だった、と…」

「私は知りませんでした…先輩、不眠症だったみたいで…」

「……………」

ゆかりさんの話だと待合室で襲われた八割も葉常美来 of 患者という話だった。これは偶然か？葉常美来に恨みを持っている場合、その患者を襲う…なんて回りくどいことをするだろうか。直接襲ったならまだわかるが、葉常美来 of 被害は患者を襲われたことぐらいだ。まさか、まさかとは思うが。このカルテを落としたのが本人なのだとしたら…：…この、ペケの意味は。

「…猫村彩羽。犠牲者の名前、覚えてますか？」

「え？うん」

「…もしかして、このペケマークの名前じゃないですか？」

「え？ああ、うん、そう、この名前…全部犠牲者だ。でもなんで？」

「……………犯人が分かりました」

「本当ですか!？」

「すごい！」

だが、この仮説が真実だとしたら…なんて、胸糞の悪い話だろう。悪意のない悪意。昔の私みたいだ。

あかりさんを病室に残してゆかりさんと病人の少年を守ってもらいつつ、猫村彩羽を連れて件の犯人の元に向かう。犯人がいたのは休憩室で、葉常海斗や阪井芽衣子と共にお茶を飲んでいたところに私と猫村彩羽がやってきたことで首を傾げる。

「どうしたの？そんなに怖い顔をして」

「しらばっけてくなくても無駄です。貴方が今回の事件の犯人だということとは分かっています…精神科医、葉常美来」

「「ええ!?!」」

そう宣言すると驚く猫村彩羽、葉常海斗、阪井芽衣子の三人。しかし当の本人は動揺することなくツインテールを弄っている。

「な、なにを言いだすんだ君はいきなりやってきて！俺の妹がそんなわけ…」

「私は継星探偵事務所の探偵、きりたんと言います。そして葉常海斗…貴方は妹が犯人だとわかっていたはずです。その異常性を知っていたからこそ、現場に赴いて証拠隠滅していた…違いますか？」

「な、なにを根拠に！」

「うちの相棒から聞きました。煙草の匂いもしないのに屋上に一服しに行っていたと証言したと。それは、屋上が本当の犯行現場だからです」

「ラピス先輩は踊り場で亡くなったんじゃない？」

「それです。それに囚われて別の場所が現場だとは思わなかった。しかしダンデライオンの能力を考えると、閉鎖空間で能力を使うのは視界を塞ぐ、目標以外を殺すかもしれないとデメリットしかないのです。普通に考えれば屋外でやった以外にない。恐らく自身の患者を屋上に呼び出して、治療と称して殺害する。ラピスさんは偶然逃げ延びたけど踊り場で力尽きた。多分これが正解です」

そもそもあんな場所で殺す理由が思いつかない。すぐ近くの八階に患者は結構いるのだ、見つかるかもしれない状況で殺すとは思えない。ありえるとしたら人気がない屋上だ。

「待ちな。アンタの推理には大きな問題がある。なんで、美来が自分の患者を殺すんだい？やりきれないとまで言っていたのに……」
「その発言が引っかけかりました。やりきれない、の一言で片付くほど淡白。…その言葉の意味はおそらく「標的以外も死んでしまった、やりきれない」こうです。そして、自身の患者を襲った理由ですが……まずこれをご覧ください」

そう言って取り出したのは例のカルテ。そこで葉常美来は初めて動揺して白衣を漁っている。落としたとは思ってなかったらしい。

「これは葉常美来さんの患者のカルテです。…そこで質問なんです。が、このペケマークは何ですか？」

「……………」

「貴方は殺したくて殺したんじゃない、救うために殺した。…そうですね？」

「…うん。これは私の治療だよ」

「美来!?!」

観念して頷いた葉常美来に驚く葉常海斗と阪井芽衣子。猫村彩羽は逆に無表情になって葉常美来を睨みつけている。

「全部貴方の言う通り。私の患者はみんな苦しんでた。あらゆる手段を使っても苦しみ続ける、そんな患者を診るのが耐えられなかった。だからもう苦しまない様にと救済した。【ドクターは自分の患者に責任を持つべき】これは兄さんから言われたこと」

そう言つて白衣のポケットから綿毛に包まれた葉っぱでDとイニシャルが描かれたガイアメモリを取り出す葉常美来に、咄嗟にスタツグフォンとヒートメモリを構える。

「関係ない人も巻き込んだけど…患者を救えずに後悔するよりはマシ。私はこれからも患者を救い続けたいといけない、だから…」

《ダンデライオン！》

「貴方たちも兄さんも義姉さんも、みんなみんな、私が救済してあげる」

そう言つて静かな笑みを浮かべた葉常美来はスカートを捲りあげて右太腿に現れた生体コネクタにメモリを突き刺すとダンデライオン・ドーパントに変貌。姿は通常形態のままではあるが、生身で戦える相手ではない。

《ヒート！》

「これなら！」

《ヒート！マキシマムドライブ！》

スタツグフォンにメモリを装填。炎に包まれて突進してダンデライオン・ドーパントに何度も何度も攻撃を浴びせるスタツグフォンだったが体格差はどうしようもなく、背中に出現した葉っぱの様な翼で叩き落されこちらまで転がってきた。回収しつつ、走り出す。同時に、ぶるぶると身体を震わせるダンデライオン・ドーパント。

「三人とも！机の下に隠れて！」

「逃がさない……！」

ぶわつと、鬣になっていた綿毛が広がる。私は部屋の外に出て扉を閉めて回避、視界の端で三人も机の下に隠れて無事だったことを確認する。そして、意外と単純なこのドーパントは……

「待て……！」

「こつちに来ますよね……！」

扉を翼で切断して出てきた鬣が戻ってるダンデライオン・ドーパントが追いかけてきて、廊下を駆け抜ける。すれ違う人は無視だ。ゆかりさんのためにもこれ以上被害者は出させない……！

「来て、リボルギャリー……！」

廊下を走る途中でコードを送り呼び寄せていたリボルギャリーと、病院の庭に出るなり合流。追いかけてきたダンデライオン・ドーパントに体当たりを浴びせて吹き飛ばす。よし、このまま……！

「むっ……なら、こつう……！」

すると再びぶわつと綿毛を広げるダンデライオン・ドーパント。周りには私しか人がいない、何のつもりだとリボルギャリーの陰に隠れて観察していると、緑豊かな庭中どころか車が通るアスファルトにまでタンポポが咲き誇る。そして綿毛の鬣が生えて元に戻ったダンデライオン・ドーパントが大きく息を吸い込んで全てのタンポポを吸い込んでいく。やられた、この場の生命を糧に……！

「これでもう、負けない」

あの時よりもさらに筋骨隆々となり鋭い爪を手に生やして鋭くなった黄色い牙を剥き巨大な葉っぱの翼を生やした姿となったダン
デライオン・ドーパントが空を飛び、凄まじい勢いでリボルギヤリー
に突進。まるでトラックに轢かれた人間の如く吹っ飛ばされたリボ
ルギヤリーが宙を舞い大きな音を立てて転倒する。そのまま私に飛
びかかって大口を開けるダンデライオン・ドーパント。しかし、その
牙が私に届くことはなく、別の牙が私とダンデライオン・ドーパント
の間に割り込んで弾き飛ばしていた。

「…フアング」

私の目の前に着地して小さく鳴いて威嚇するフアングメモリに頭
が真っ白になる。いや、駄目だ。これだけは駄目なんだ。…でも、も
う手段はない。ゆかりさんに頼まれたんだ。やってやる。そう決意
するなりスタツグフォンに番号を打ち込む。出てくれたのはあかり
さんだ。

「あかりさん！ゆかりさんの懐からジョーカーメモリを取り出してド
ライバーにセットしてください！」

《「え!?わ、わかった!でもどうするの?」》

「私に変身します」

すると一分もしないうちに腰に付けられっぱなしだったダブルド
ライバーの左側にジョーカーメモリが転送され、装填。そして私の手
に飛び込んできたフアングメモリを受け止めて変形、少し躊躇してか
ら右側に装填する。

《フアング!》

「覚悟しなさい。こうなったらもう…加減ができません。…っ、変身
!」

《フアング!ジョーカー!》

「ウアアアアアアアアアア!!」

そしてドライバーを展開するとフアングメモリがドライバーに噛み付いた恐竜の頭のような形状に変形、タクティカルホーンが飛び出ると白と黒の風が吹き荒れて私の身体が浮かび上がり、通常よりも鋭角な装甲に包まれて何時もより感覚が伸びた手足を確認、白と黒のダブルに変身し着地する。しかし次の瞬間私はフアングの野獣の記憶に飲み込まれ……荒々しく獣の如くダンデライオン・ドーパントに飛びかかっていた。

意識が浮上するなり視界の情報を確認する。白と黒の腕が次々と荒々しくダンデライオン・ドーパントに叩き込まれていく。どうやらフアングジョーカーに変身したらしい。同時に相棒の記憶も共有する。犯人は葉常美来。善意で救済という名の殺人を行っていたサイコパス。ここで止めなければとんでもない数の人間が救済されることになるだろう。

「っ、んこは」

現実の身体を動かさない代わりに精神の肉体を動かす。思い出した、ダンデライオン・ドーパントの攻撃からいろはさんたちを庇って……きりたんに辛い選択をさせてしまった。謝らないと。周りを見渡す。燃え盛る数多の本棚。きりたんの知性が失われていく、ということだろうか。

「きりたん！きりたん！どこですか?!」

呼びかけながら燃える本棚の間を走り抜ける。すぐに、妙なものが見えてきた。沢山の本に埋もれている素足を晒した女性だった。

「…きりたん、ですか」

埋もれていた本を退かして抱き起すと、きりたんを成長させた様な女性がそこにいて。大人の様な姿なのにまるで子供の様に泣きじやくっていた。

「ゆかり、さん…私、私…」

「…無茶をさせましたね。大丈夫、私がいいます。もう絶対に、いなくなったりしませんから…一緒に乗り越えましょう」

その女性…本来のきりたんを安心させるように抱き着いて頭を撫でる。するときりたんは涙を止めてこちらを見上げてきた。

「ゆかりさん…地獄の底まで、悪魔と相乗りしてくれますか?」

「愚問ですとも。それと、貴方は悪魔なんかじゃありません。私の相棒です!」

そう宣言すると本棚が元の状態に戻り、私達の意識は浮上した。

「ぐっ、ううううー!」

ファングジョーカーの圧倒的な猛攻と渡り合っていたダンデライ

オン・ドーパント。意識がない獣だったのだから倒すことはできない。だけど、今の私ならば、知性を失わずに戦える。意識を取り戻すなり蹴りを入れて距離を開けつつ、右手を拳銃の様にして今回の犯人に向ける。

「…お待たせしましたね葉常美来」

『いや、ダンデライオン・ドーパント』

『さあ、お前の罪を数えろ！』

「私の救済が罪だとしても…？」

ゆかりさんと共に宣告すると激昂しながら跳躍して翼を広げ、急降下してくるダンデライオン・ドーパントに対し、私達は右斜めに跳躍してその体当たりを避けつつ、すれ違い様に空中回し蹴りを叩き込んでその巨体を蹴り飛ばす。体勢が崩れてズシンツと音を立てながら不時着するダンデライオン・ドーパント。それを確認するなりフアングメモリのタクティカルホーンを一回押し込む。

《アームフアング》

「行きますよ！」

そのまま鋭い爪を振り下ろしてきたので、右腕に出現した牙の様な刃アームセイバーで受け止めて弾き返しつつ、その腹部に何度も斬撃を叩き込むとよろよろと後退。また私達を戦闘不能にしようと思つたのか、綿毛を飛ばしてきた。

《シヨルダーフアング》

『もうその手は喰らいません！』

それに対してタクティカルホーンを二回押し込んで右肩に出現したシヨルダーセイバーを手に取りブーメランのように投擲。綿毛の塊を真っ二つに切り裂いて霧散させ、そのまま何度も何度もダンデラ

イオンに斬撃を浴びせて行くと見る見るうちに元の姿に戻って行く。

「メモリブレイク、行きますよ!」

『技名なんです、フアングストライザーはどうです?』

「いいですね、気に入りました!」

《フアング!マキシمامドライブ!》

タクティカルホーンを三回押し込んで右足首にマキシمامセイバーを展開して跳躍。グルグルと回転しながらダンデライオン・ドーパントに突っ込んでいく。翼を広げて逃げようとしているがもう遅い、空中で切り刻む!

『フアングストライザー!』

そして恐竜の頭部のようなオーラと共にメモリに描かれている「F」の文字が浮かび上がらせて連続で斬撃を叩き込み、ダンデライオン・ドーパントは爆散。

「私には…まだ、まだ、救うべき患者が……」

倒れ伏した葉常美来はそんな断末魔と共に自身から排出されたメモリに手を伸ばすも、次の瞬間メモリが砕け散って力尽きた様に気絶した。

その後、ゆかりさんはタンポポが消えて無事な姿で事務所に戻ってきてタイプライターを打っている。内容を聞いているに、葉常海斗は妹の分まで医療に専念して、阪井芽衣子はその事件で精神崩壊してし

まった葉常美来の治療をすることにしたようだ。精神科医が精神病にかかるとは皮肉な話だ。恐らく、自己矛盾で今にも壊れそうだったのがメモリブレイクでとどめになったようだ。

ゆかりさんが気になってたらしい病院の噂の正体もわかった様で満足げだ。そんな様子を尻目にしつつ、私はゲームをしながら傍らにたたずむファンクを見やる。どうやらファンクは私のボディージャードをやっていたらしい。拒絶して悪いことをした。これからは一人でも出歩くことができそうだ。

「くっ、私が負けるとは。さすがは天才ゲーマー「いろはにほへと」ですね……」

割と本気で挑んでいたのだが、某オールスター格闘ゲームで持ちキャラが撃墜されてニヤリと笑みを浮かべる。お相手はつい最近知り合った友達。負けて悔しくないと言えば嘘になるが、好敵手と出会えた事実の方に震える。

「ゾクゾクしてきましたね……!」

第九話：Eは極楽／水都が生んだ歌姫

「夜の水都…いい風が吹きますねえ」

買い出しに出かけた帰りに、缶コーヒーを買って埠頭で一服する。ここは夜、人が少ない穴場だ。ゆっくりするのにちょうどいい。水都通の私しか知らないだろう、と思っていたのだが。

「おや？こんな時間にここに人がいるとは」

「…あなたは？」

仕事帰りなのかキャリアアウーマンの様な格好をした黒髪を短く纏めた女性がビニール袋片手にやってきた。袋から取り出した缶ビールを開けて一口入れると赤らめた顔でこちらに向き直る。

「私、東北星香といいます。ここを知ってるとは貴方も通なんですねえ」

「私は探偵の結月ゆかりです。東北…というと水都の名家の？」
「お恥ずかしながら。養子に入れてもらい営業部長をやらせていただいています。水都に少しでも貢献したい、そう思っただけで今の仕事に就きました。まあ、つい先日上司に怒られてしまったんですけどね」

「それは大変ですね…私も同じです。愛するこの水都の涙を拭いたい、と」

「それはいい心がけですねえ。共に水都のため、頑張っただけです。う。これ、飲みますか？」

「いえ、バイクで来てるので酒はちよつと」

「おや、それは残念」

そのまま私はコーヒーを、星香さんはビールを飲んで一服する。そんな水都好きの仲間が出来た、帰り道。埠頭から歩色町に続く道路を走っていると、妙にビブラートの効いた女性の悲鳴が聞こえてきた。

すぐに方向転換、進む先に金色に煌めくそれを見るなりダブルドライブを腰に付けてその場に急行する。

「ゆかりさん、どうしたんですか？買い出しは？」

「それどころじゃありません、ドーパントが女性を襲ってます！」

【事件に出くわすのは探偵のお約束なんでしょうかね。《サイクロン！》】

《ジョーカー！》

「変身！」

《サイクロン！ジョーカー！》

そしてハードボイルダーに搭乗しながら変身、体当たりで金色に煌めくそれ：ドーパントに体当たりを喰らわせる。吹き飛ばされるも受け身を取るドーパント。へなへたと壁に背中を付けて腰を下ろす女性。…どこかで見た顔ですね。

「ちい、邪魔しやがって何者だ！」

「ダブル。仮面ライダーW。この街を泣かせる悪党をぶちのめすハードボイルドなバイク乗りです」

『相棒、かつこつけてないで警戒してください。囲まれています』

「…みたいですなえ」

ハードボイルダーから降りつつ名乗ると、周囲を囲む黒いスーツの集団。しかしその頭部は骨とムカデをイメージした仮面の形状になっている。見たことがある。マスカレイド・ドーパント。きりたんが囚われていた孤島でおやっさんが戦っていたミュージアムの戦闘員だ。だけどあの時とは服装が違う。別組織の構成員か…？

「お前ら、頑張れよ？いい働きをした者にはそんな雑魚メモリより上のメモリをくれてやるからよ！」

「」「」「うおおおおお！」

道路脇のベンチに座って踏ん反り返って部下を鼓舞する金色のドーパントの声に応えるようにして、マスカレイド・ドーパントの群れが一斉に襲いかかってきた。

「今更この程度の敵に！」

『苦戦なんかしませんよ！』

跳躍、壁を蹴って振り返ってパンチで吹っ飛ばしたマスカレイド・ドーパントを別のマスカレイドにブチ当たって纏めて転倒させる。

《メタル！》《サイクロン！メタル！》

ジョーカーをメタルと交換、風を纏ったメタルシャフトを振り回して一人の顎をかち上げ、一人の足を払い、一人を突き、一人の頭をかち割る。致命的なダメージを受けたマスカレイド・ドーパントは爆散してしまい変身者が出てこない。これは…。

『マスカレイドは倒したら死ぬ、そう言うメモリです。でも加減はできません』

「やるしかない、ですね」

《メタル！マキシマムドライブ！》

メタルメモリをドライバーから引き抜いてメタルシャフトのマキシマムスロットに装填。その場で回転し、旋風を纏ったメタルシャフトを振り回して次々に炸裂させていく。

『メタルツイスター！』

「ぐあああああああ!?!」

周囲に群がっていたマスカレイド・ドーパントは爆散。残った十数

人に対して、メタルメモリをドライバーに装填し直して構えた、その時。

「はい、そこまでよん」

「シャキン！」

「っ!？」

踏み込もうとした矢先にそれに気付いて一歩下がると、上空から飛来した異形のドーパントの両足の間に生えた斜めの刃がメタルシャフトの先端を切断。そのドーパントは金色のドーパントに顔を向けると頭を掻いた。

「噂の仮面ライダー、ですねえ。ライダー、少々厄介な相手かとお」

「は！同じドーパントの癖に人助けに精を出してる物好きが怖いのか、キク？来るのが遅い。役に立たないなら殺すぞ？」

「へへへっ、それはご勘弁……」

キクと呼ばれたそのドーパント。罪人の様に口輪を付けた深紅の長髪の犬の様な顔で首枷をはめた、全身黒い包帯に包まれているがまるで死体の様に真っ白で長い四肢は露出していてだらんと伸ばしてゆらゆら揺れている異形の怪人。今の攻撃から見てギロチン・ドーパント。処刑執行人か。

「別格のが来ましたね…まさかダブルのメモリの中でも最高硬度のメタルのシャフトが斬られるとは」

『ここは距離を取って戦いましょう。ルナトリガーです』

「了解」

《トリガー！》《ルナ！》《ルナ！トリガー！》

メモリを入れ替えてルナトリガーに HALF チェンジ、トリガーマグナムから誘導弾を放って攻撃するがしかし、ギロチン・ドーパントは

両腕の外側に沿うように刃を展開したかと思えば大きく両腕を背後に振りかぶって前方に振り抜き、光弾を斬り裂いてしまう。ギロチンの名の通り、ですか。

「ですが！今の動き！」

《ジョーカー！》

『ギロチンだと言うのなら勢いをつけさせなければいいだけのこと！』

《ルナ！ジョーカー！》

「む!？」

ルナジョーカーに変身、右腕を伸ばしてギロチン・ドーパントの右腕の刃の生えてない内側を掴む。ギロチン・ドーパントは左腕を振りかぶろうとするも、腕を縮ませて引つ張り体勢を崩して左のチョップを顔面に叩き込み、続けて二連撃腹部に拳を叩き込む。

「ぐえええ…リーダー、こいつ強いです…お助けえ〜」

「お前、オレの副官ならもう少し根性見せろや。ったく」

そう言うとき重い腰を起こす金色のドーパント。不味い、と直感が警鐘を鳴らす。咄嗟にギロチン・ドーパントを手放して大きく跳躍していた。

「オレが出張つたらもったいねえっていつも言ってたんだろ！」

その瞬間、跳躍してきた金色のドーパントの右手が今の今までいた道路に叩きつけられてクレーターを作ったかと思えば触れた場所を中心に金色に染まって行く。触れた物を金にする能力…!?見た所、触れた箇所から直径2メートルが純金にされてしまうらしい。その横でギロチン・ドーパントが変身を解いていた。深紅のロングヘアード般若の仮面を被った、白い男物のスーツを身に着けたスレンダーな女

性で顔が見えない。彼女がキクか。気を抜いたかと思えば用心深い。

「あー、もったいいねえ。地面引っぺがすのにどれだけ労力があると思っただけやがる。おいキク、あとで回収しとけ」

「了解リーダー。助かりました」

改めて見やる。さっきまでは暗闇でちゃんと見えなかったが、よく見れば凄まじい造形だ。王冠を被った黄金の髑髏の様な顔に、まるで城か宮殿の様な黄金の装甲で上半身を包んだ金色の骨の様な腕と、黄金のピラミッドの様な形状の硬質な腰布(?)から伸びた金色の包帯を巻いた金色の骨の様な形状の足が目立つ。

「趣味の悪い金ぴかですね…夜なのに輝いてますよ」

『…特徴からして、黄金郷…エルドラド・ドーパントでしょうか』

「…明察だ。だがわかったところで、どうにもならないぞ?」

そう言っただけで右手を触れた黄金のクレーターから黄金の触手を伸ばすエルドラド・ドーパント。咄嗟に伸ばした右腕を振り回して払うが伸びた右腕に金の触手が絡み付いて来て、雁字搦めに絡め取られてしまう。

「しまっ…」

『メモリの交換を!』

「させるかよ。お前、メモリの交換で能力を変えらるんだろ?」

「くっ…」

メモリを取り変えようとした左腕をも黄金の触手で囚われてしまう。自由自在か。余裕の笑みを浮かべて歩み寄ってくるエルドラド・ドーパント。あの手に触れられたら最後、黄金の像にされてしまうのだらう。だけど甘い。ルナジョーカーの腕の伸縮は際限がないのだ。

《ヒート！》

「なに!？」

「お熱く行きますよ!」

『仮面には意図を隠す役割もあるんですよ!』

《ヒート! ジョーカー!》

さらに伸ばしたルナの右腕でドライバーのメモリをヒートと交換し、拘束から逃れた右の拳に炎を纏いすぐ目の前まで迫っていたエルドラド・ドーパントを殴り飛ばす。殴られて焦げた腹部を押さえてよろよろと後退するエルドラド・ドーパント。

「ぐはあ…」

「このまま!」

『はい、メモリブレイクです!』

《ジョーカー! マキシマムドライブ!》

それを好機と見てジョーカーメモリを腰のマキシマムスロットに装填、右手に赤の、左手に紫の炎を灯してそれを推進力にして空に跳躍し、空中で半分に分離。同時に急降下して拳を振るう。

『ジョーカーグレイド!』

「楽しませてくれるな仮面ライダー! なかなかやるが、甘いぜ!」

するとエルドラド・ドーパントはアスファルトに右手を触れると分厚い金の壁を迫り出させて拳の二連撃を防いでした。たまらず一つに戻って後退すると壁から巨大な黄金の腕を形成して拳で殴ってきた。咄嗟に腕を交差して受けるが凄まじい威力に殴り飛ばされる。

「ここからが勝負だ、お前もオレのコレクションに……どこ行った? 女もいねえ!」

「リーダーが壁で視界を塞ぐから…」

「…ちつ、撤収するぞ。キク、お前は回収したらさっさと戻れ」
「りょーかいですよー」

吹き飛ばされた勢いのままハードボイルダーに搭乗し、女性を連れて逃亡することに成功。ドーパントを放って逃げるのは不味いが、女性が巻き込まれて金にされても不味い。というわけで逃げてきたわけだが。

「ここって…探偵事務所?」

「あ」

『馬鹿ですか? バカでしたね』

一心不乱に逃げた結果継星探偵事務所まで戻ってしまった。女性は看板を見て何やら考えこむと、合点がいったのかポンと手を打った。

「…もしかして、結月ゆかりという探偵さん…ですか?」

「な、なんのことでしょうか…」

「妹の緒音からよく聞いてます。気に食わないけど腕のいい探偵だつて」

「有阿刑事がそんなことを!? ……あ」

「やつぱり、そうなんですネ。だったら依頼したいことがあります」

『あとでお説教です』

「はい……ご明察の通り、私が結月ゆかりです。その依頼、お受けしまししょう」

ありがたいことに今日は鳴花ーズも休みだ。辺りに人の目がないことを確認してから変身を解いて一礼する。…これは、長い夜になりそうだ。

女性を事務所を入れて席に案内し、好みを聞いて買って来たばかりの紅茶を入れる。パックで悪いがコーヒーが苦手ならしようがない。きりたんはガレージにいるらしい。さつき怒らせてしまったのでゲームで怒りを発散してるところだろうか。

「私の名前は有阿衣亞^{ありあ}。IAと言う名前で芸能活動してます」

「え、IAちゃん!? わあ、本当だあ!」

「こら。うるさいですよあかり。では、依頼人ということで本名ではなくIAさんと呼ばせてもらいますね」

帽子と眼鏡を取って名乗ったIAさんにキヤーキヤー騒ぐあかりに自分の帽子を目深く被らせて無理やり後ろに退かす。この後輩兼所長、意外とミーハーである。IAといえば水都が生んだ歌姫として世界に名を轟かせている歌姫だ。まさかあの有阿刑事の姉だったとは。

「ところでIAさん、私が仮面ライダーだということとは…」

「ご心配なく。助けてもらった身ですし黙っております。もちろん妹にも…ね」

「助かります。それで、依頼とは?」

「水都に滞在している間のボディーガードをお願いしたいのです」

「ボディーガード、ですか」

「三日間休暇で水都に滞在してたんですけど、帰ってくるなり妹も仕事だったので一人で行きつけの喫茶店に行こうとしたら襲われて…」
「なるほど…三日間の護衛、ですか」

…つまり嫌でもワンちゃん…じゃない、有阿刑事と過ごさないといけないのか。うーん。

「し、失礼します！IAちゃんは！IAちゃんは無事ですか!?!」

すると突然ドアが開いて誰かが入ってきた。黒髪をポニーテールにしたスレンダーな赤縁の眼鏡をかけた女性だ。入ってくるなりすつ転んだところを見るにドジツ子らしい。咄嗟に立ち上がったIAさんを守るように立ちはだかると、IAさんが苦笑いしつつ女性に手を差し伸べる。

「大丈夫です、結月探偵。この人は北村^{きたむら}莉奈^{かるな}。私のマネージャーです。北村さん、私は大丈夫だから来なくていいとメールしましたよね？」
「そう言う訳にもいきません！襲われたと聞いては居ても立っても居られませんよ！」

そう熱弁する北村さん。ドジツ子だけど熱血マネージャーといったところか。世界を代表する歌姫のマネージャーですし敏腕そうですね。

「もう大丈夫。この方にボディガードを依頼したから」

「探偵さんですか？失礼ですがそんなに強そうには…」

「通りすがりに私を暴漢から助けてくれたの。いつものSPより頼りになるわ」

「ははあ……SPがいたら休暇を楽しめませんし、逆にいいかもしれませんか」

「マネージャーさんにも納得していただけたなら、細かいところを決

めましようか」

とりあえず今日は有阿刑事が帰ってこれないということで事務所に備えられている寝床でIAさんに寝てもらうことにした。北村さんは帰り、私とあかりで交代ずつソファを寝床に見張ることにした。今はあかりが寝ていて、私は推理小説を読みつつ寝ずの番をしていると、隠し扉が開いてきりたんが顔を出した。

「…ゆかりさん、起きてますか？」

「あ、きりたん。何か分かりましたか？」

「それぞれのメモリの正体は分かりました。やはり、エルドラドと断頭台ギロチンですね」

「では奴等の正体を探りましょう」

「はい。検索開始です」

そう言つて白紙の本を手に意識を飛ばすきりたん。私はメモに書いておいた気になったことを言っていく。

「まず気になったのは「金色のネクタイ」です」

「…さすがに絞り込められませんね」

「次にミュージアム程ではないにしても「組織力」です」

「…世界中のマフィアやヤクザ、シンジケートなどが残りました」

「では次。エルドラド、ギロチン、マスカレイド以外にもメモリを持っていた様子から、それを買うための「大金」恐らくエルドラドの能力を利用していると思われます」

「ビンゴです、ゆかりさん」

そう言つて白紙の本の最後のページを綺麗に破り取って机に置き、手にしたペンで書き綴るきりたん。記された名は、「e l d r a d o エル・ドラード」。

「裏社会でもトップクラスの影響力を持つガイアメモリマフィア「エル・ドラード」それが奴等の正体です」

「ガイアメモリマフィア？」

「地球の本棚にはそう書いてありましたが詳細は不明です。エル・ドラードは銀行やカジノから大金を盗んだり人さらいを生業としている裏社会では有名な犯罪組織です。エルドラド・ドーパントの正体はおそらく、リーダーのリリイ金堂。24歳という若さで一代でその地位を築いたカリスマを持つ女傑です」

「リリイ金堂…金堂といえば「金堂コンツェルン」という金融会社が昔水都に存在しましたが…」

「正解です。倒産した金堂コンツェルンの一人娘だったようですね。そしてキク、と呼ばれた女性は呪怨キク。正体までは書かれてませんでした、エル・ドラードの副リーダーの様です」

「何故正体が分からないんですか？」

「恐らくですが、名前がないんですよ。孤児か捨て子か…とにかくそういう類です、呪怨と名乗っていることから相当な人物ですね」

「…それで、エル・ドラードの本拠地は？」

「それが…わかりませんでした」

「わからない？」

「暴力団と違い各地を転々としていて定まらないのです。なんなら水都の外でも活動しています」

裏社会でも有名なものだけに用心深いですねクソツたれ！しかし水都の外でも活動するドーパントですか、珍しいですね。

「なるほど…しかし何故IAさんを襲ったのでしょうか」

「誘拐して身代金をせしめるとか？」

「休暇中の歌姫を、というところが気になりますが…多分それですかね」

二人してうんうん唸っていると、小さくアラームが聞こえて慌てて

止める。交代の時間だ。あかりを揺り起こしつつ、欠伸する。

「とりあえず今日は寝て英気を養いましょう。おやすみなさい、きりたん」

「はい。おやすみなさい、ゆかりさん」

あかりが起きたことを確認すると私はソファに沈み込み、眠りについた。

第十話：Eは極楽／黄金郷の女帝

その日、水都にとある少女がやってきた。鬼の面を被ったアルビノの少女は目の前の地面に突き刺さっていた剣を軽々持ち上げると持って来ていたゴルフバッグに入れて、彼方に見える水都タワーを睨みつける。

「ここが水都…なんや、嫌な匂いがぎよーさんするなあ。欲望に塗れたドーパントの匂いや。そんなの持つてくるなんて、嫌な風やなあ」

そんなことをぼやきつつ少女は足を進めた。

「探偵！姉がいると聞いてきたぞコノヤロー！」

「朝っぱらから五月蠅いですね……」

騒々しい聞き覚えのある声が聞こえて目を覚ます。時間は七時半。事務所内を見渡せばあかりがデスクで寝落ちしていて、寝床は空で………つて、なああああつ!?

「起きなさい！あかり！起きんかいこら！」

「ふにや…おはよーござまーす、しえんぱい…」

「起きないと朝食抜きですよ」

「はい！継星あかり、ただいま起床しました！」

脅すと飛び起きるあかり。色々怒りたいところだが今はそれどころじゃない。

「IAさんは！どこですか！」

「え？IAさんならそこに…って、あれええええええ！」

「このお馬鹿。寝ずの番だと言うのに何で眠ってるんですか！」

「そんなこともあるうかと」

私達の慌てる声を聞いたのかひよこつと顔を出すきりたん。夜通しゲームをしていたのか眠そうだ。

「ゆかりさんが忘れしてたようなので昨夜IAさんにスパイダーシヨックの発信機を付けておきました」

「でかしたきりたん！」

言われるなりスパイダーシヨックのモニターを確認する。2キロ先を結構な速度で移動していた。車か？いや、一定感覚で止まっている…まさか跳躍か？

「しかし戸締りしていたはずなのにどうやって…あ」

ドアを開けて出ようとすると、ドアが真つ二つに斬られていた。しかも触るまで分からないぐらい正確に綺麗に斬られている。えええ…涙が出てきた。

「修理代がー!？」

「ギロチン・ドーパントの仕業ですね。でもどうして居場所が…」

「それより追いかけてかないと！」

「ですね、ゆかりさん早く戻ってきてください。留守は下の鳴花ミコト達に頼みましょう」

「え？きりたんも行くんですか？」

「奴に対抗する術を思いつきました」

そう言つて降りて行くきりたんが続いて降りて行く。すると有阿刑事が怒り心頭といった表情でそこにいた。

「おい探偵！姉さんは何処だ！なんでこんな奴に依頼したのか文句言つてやる！」

「貴方が裏では褒めてるのは知ってますよ…それより大変です、うちの所長が寝落ちしてる間にIAさんを攫われました！」

「な、なんだって!?!」

「車は持つてますか？居場所は分かっているので全員で追いかけたいんですが」

「ま、任せろ！車を持つてくる！」

そう言つて近くの鳴花一ズ備え付けの駐車場に走つて行く有阿刑事。その間にきりたんが交渉したのかヒメさんミコトさんと共にできた。

「事情は把握したよ！留守はヒメ達任せとけー！」

「修理もしておくから安心して行つておいでよ」

「助かります！行きますよきりたん、あかり！」

そして私はハードボイルダーに搭乗して先行し、それを追いかけるようにきりたんとあかりを乗せた有阿刑事の車が続く。無事でいてください…！

反応を追つて走つて行くと、水都大橋を通つて水都の南、歩歌路町ほかるちようまで来た。万宵川北にある歩色町の事務所から結構な遠出だ。水都タワーも遠くに見える距離である。周りを見れば、あからさまな倉庫

だらけの埠頭だった。…以前、マッド・ドーパントと決着をつけた付近である。

「むっ」

ブレーキ。すぐ先の倉庫からIAさんにつけた発信機の反応がある。後続の車も止まり、三人が降りてきた。…有阿刑事がいるから変身できないな、でももしものときは目の前で変身しなければ…。

「ここは慎重に…」

「警察だ！姉を返せコラー！」

「馬鹿!？」

拳銃を手に入り口から怒号を上げて威嚇する有阿刑事を余所に私はそそくさに隠れる。やはりというかそろそろとマスカレイド・ドーパントが出てきて有阿刑事は結構奮闘したが、突如氷漬けにされて身動きが取れなくなってしまう。奥から出てきたのは、以前見たことがあるドーパント。

「…あれはたしか、アイスエイジ」

「アイスエイジ…氷河期ですか？私は知りませんが」

「あかりさんが来る前に戦ったことがあるドーパントですね。別個体か」

さらに奥からマグマ・ドーパントやコックローチ・ドーパントまで出てきてマグマ・ドーパントが氷を溶かしたかと思えばコックローチ・ドーパントが有阿刑事に腹パンして気絶させ連れて行ってしまった。

「有阿刑事が…」

「しっ、あかり。我慢して」

アイスエイジなら氷漬けにすれば殺せたはずなのにそうしなかった。恐らくIAさんの姉妹だから何かしらの価値を感じたのだろう。アイスエイジ・ドーパントが顔を出してきよろきよろと辺りを見渡し、誰もいないと断じたのか変身を解く。現れたのはダークブルーのスーツに金色のネクタイ、青いサングラスをかけて帽子は被らず飛び跳ねた様な髪に一本だけ入ってる金メッシュが特徴の、大きな青い宝石付きな黄金の指輪を左手の人差し指に付けている年若い男。なんか情報量が多いし他のマスカレイドとは一線を画してる格好だしナンバー3だろうか。

「周囲……警戒を怠るな。リリイ様の手伝いに……俺は戻る。邪魔者は……消せ」

「承知しました、西友にしともさま」

西友というらしい男の命令でマスカレイド・ドーパントが何人か見張りなのか出てきて辺りを探っているが、どうするか。

「どうします？きりたん」

「…当初の作戦は使えなくなりましたね。まさかあんなに多種多様なメモリを持っているとは。アイスエイジを警戒してヒートジョーカーで行きましょう」

《ヒート！》

「あかりはきりたんの身体を連れてここで待機しておいてください」

《ジョーカー！》

「わかりました、お気をつけて」

「変身！」

《ヒート！ジョーカー！》

ダブルに変身すると同時にハードボイルダーに搭乗し、突撃する。バイク音に気付いたマスカレイドが何体か止めようと前が出るが、弾

き飛ばして倉庫の中に入ります。

「これは…」

すると中に入ったのはこれでもかといわんばかりの数の黄金像たち。ビニール袋がかけられているが、美しい女性や逞しい男性の金の像が美術品と言わんばかりに並べられている。まさかこれって…

「エルドラドの、犠牲者たち…!?あの時言っていたコレクションとは、これ…」

『これで狙いが分かりました。奴はIAさんを黄金像にするつもりです』

「止めなければ…!」

『検索した通りだと倒せば元に戻せるはずですよ』

さすがにこのまま爆走すれば傷つけかねないのでハードボイルダーから降りて先に進む。立ちはだかるマスカレイド・ドーパントは炎を纏ったパンチ一発で仕留め、倉庫の奥まで進む。そこにいたのは、燃え盛るマツシブな怪人マグマ・ドーパント、女として正直見たくないコックローチ・ドーパント、そして筋肉モリモリモッコマンの変態バイオレンス・ドーパントの三体。…いやあ、今まで相手してきたドーパント(マッドとホークみたいなのもいるけど基本単体)と比べ物にならない規模ですね。ミュージアムと大差ないまでありません?

《メタル!》

「それでも一度倒したドーパントです、負ける理由がありませんね!」
《ヒート!メタル!》

ヒートメタルにハーフチェンジ、殴りかかってきたマグマ・ドーパントの顎をかち上げ、汚い液体を飛ばしてきたコックローチ・ドーパ

ントの攻撃を回転させたシャフトで払いのけ、バイオレンス・ドーパントのパンチを真正面から右手で受け止め燃やして怯ませてメタルシャフトを左手でスイング。バイオレンス・ドーパントの側頭部を殴打する。

「時間がないんで一気に行きますよ！」

《メタル！マキマムドライブ！》

『メタルブランディング！』

メタルメモリをメタルシャフトのスロットに装填、両端に纏った炎で推進力を得てバイレンス・ドーパントに一撃、爆散させる。爆発跡からは気絶した黒服サンングラスが出てくる。上級戦闘員だろうか。

《ルナ！》《ルナ！メタル！》

「逃がしませんよ！」

逃げようとするコックローチを伸縮するメタルシャフトで巻きつけて捕まえ、引っ張ってぶん投げてマグマ・ドーパントの放とうとしていた炎にブチ当てる。

「素早いなら、避けられない量の攻撃をすればいいまでです」

《メタル！マキマムドライブ！》

『メタルイリユージョン』

再度装填。振り回したメタルシャフトで金色の輪を大量に描き、一気に飛ばすとコックローチ・ドーパントは逃げきれずに爆散。最後のマグマ・ドーパントが火球を飛ばしてくるが伸縮するメタルシャフトを振り回して防御、メタルメモリをトリガーメモリと入れ替える。

《トリガー！》《ルナ！トリガー！》

「これで決まりです」

《トリガー！マキシマムドライブ！》

『トリガーフルバースト！』

ルナトリガーに変身してトリガーマグナムにトリガーメモリを装填。エネルギーを溜めて変幻自在に軌道を変える、黄色と青の破壊光弾を多数同時に発射。マグマ・ドーパントは狼狽えて何もできずに全弾撃ち込まれて爆散した。転がった男たちのうち、バイオレンス・ドーパントだった男が目を覚ましていたので襟首を掴み持ち上げる。倉庫を見た限りどこにも奴はいない。だがこいつらが守ってた理由がある筈だ。

「教えなさい。貴方達のリーダーはどこにいる？」

「ち、地下だ！一番奥にボタンで行ける地下室が！」

「なるほど。では」

「ぐえっ」

軽くデコピンしてやると失神したので投げ捨てて奥に進むと何も置かれてない空間の奥の壁にボタンがあり、押し込むと床が開いて階段が現れる。

「…よし」

『待ってくださいいゆかりさん。一度戻ってフアングジョーカーになりましょう』

「それが秘策ですか？」

『はい。この先にいるのがエルドラド・ドーパントとギロチン・ドーパントなら有効なはずです』

「分かりました」

変身を解きながら外に向かっているとフアングメモリを持ったきりたんとあかりも走って来て、私達は立ち止まって向かい合ったままメモリを構える。

《ファング！》《ジョーカー！》

「変身！」

《ファング！ジョーカー！》

そして私は倒れあかりに受け止められると同時にきりたんがファングジョーカーに変身、暴走しないことを確認するとすばやい身のこなしで地下に突入する。

『IAさん！有阿刑事！』

「無事ですか！」

駆け下りて行くと暗幕が一部の壁にかかった広大な地下空間が広がっていて。そこには猿轡をされ首輪をつけられロープでコンクリートの壁に繋がれたIAさんと有阿刑事、そしてその前で顎に手をやり何やら考え込んでいる金髪をロングヘアにした碧眼の美女がいた。マスカレイド・ドーパントたちと同じ黒服だが金色のネクタイを付けたシャツの上から黒の上着を肩にかけていて金色のサンングラスを身に付けている。眩しくないのだろうか。そして何故かIAさんは踊り子の様な格好に、有阿刑事はミニスカポリスの様な格好になってる。…え、変態？

「おお、来たか仮面ライダー。おや、中々にそそる姿をしてるじゃないか。歓迎するよ、ようこそオレのアトリエへ」

女性は私達に気付くなりサンングラスを額にずらして両手を広げて笑顔で歓迎の意を見せる。IAさんや有阿刑事の訴えの視線には素知らぬ顔だ。

「あなたがリリイ金堂……ガイアメモリマフィア、エル・ドラードのリーダーですか」

「そうだ。オレの名はリリイ金堂：自己紹介はいらないかな？やはりあの程度のメモリじや時間稼ぎにもならないか：君達が来る前に衣装と構図を決めておきたかったのだが。まったく、キクはIAを連れてくるなりどっかに行ってしまうし西友はあの仕事を任せてるし：オレが相手するしかないわけだ」

「衣装と構図：？」

「そうだ。この水都は美しいもので溢れている。しかしそれは永遠ではない。年を取り、疲弊し、美しさが失われていく。かつての栄光はある日あつけなく崩れ落ちてしまう。オレはそれが耐えられない。だがオレならばそれを永遠に留めることができる、美しい金の像として美しさを永遠に残せる！」

そう言つて壁にかけられた数多の衣装に視線を向け、指でファイルターを作つて有阿姉妹を入れてにんまり笑つたりリリイ金堂は衣装かけに歩み寄つて餞別していく。隙だらけだが謎の迫力で動けない。その言葉からはとてつもない覚悟を感じ取れた。

「美しいものはオレのコレクションとして未来永劫輝き、美しくない物も資金源として有効活用し新たな美しさへの糧となる。金さえあれば何も失わない、得る事だけができる。この地下室もその一つ。この衣装も全てがオーダーメイド品だ。ただの服なんか有象無象の為に作られた三流の品だ。その人間をもっとも飾り立てる衣装と構図が存在する。刑事の妹くんには失望したよ。素材はいいのにまるでお洒落に気を配ってない。このままではその美しさが損なわれてしまう」

そう言いながら無理やり今着させられてる衣装を脱がしてIAさんにはガラスの靴を履かせてお姫様の様なドレスとティアラを、有阿刑事にはヘッドドレスに濃紺に近い黒のワンピースに白のエプロンドレスと本場英国式メイド服で着飾つて行くリリイ金堂。：私達が男だつたらどうする気だつたんだ。

「うむ、やはりオレの見立ては正しかった。美しい…オレのコレクションの中でも最高のものとなるだろう。あとは構図だ、最高のポーズをしたまえ。さもないとギロチンか氷漬けだ。遅いぞ、キク」
「すみませんねえ、野暮用があつたもので…」

気に入ったのか大きく頷いていたリイ金堂がIAさんたちを脅してポーズを強要していると、階段から呪怨キクが降りてくる。凶らずも挟まれた形になってしまう。

「ああ、しかしオレは待とう。君達が自分の美しさを自覚してオレに降りコレクションに自ら加わることを。そしてそのコレクションには仮面ライダー…君も加わるのだ。」

「…なんだって?」

「昨日は散々罵倒しておいて悪いが、あの窮地から脱した君の姿を見て心が揺れ動いたよ。そして君達の造形は美しい! シンプルながら奥深い! だが二色に分かれているのが残念だ…金色に染め上げればさらに美しくなると思わないか?!」

『アイデンティティを崩すとかふざけないでください!』

「それもうダブルじゃねーです、仮面ライダー金ぴか野郎ですよ!」

ふざけたことを言いやがったりリイ金堂に二人してブチ切れる。他人に自分の趣味を押し付けるなんて奴だ。ところできりたん、そのネーミングセンスはどうかと思う。とか考えていると上着のポケットからまるで横にした黄金の城の様にEとイニシャルされたゴールドカラーのガイアメモリを取り出す。あれはミュージアムの最高幹部のメモリ…!? 道理で強いわけだ。

「オレは金儲けの天才だね。昔はマネーというメモリで人知れず稼ぎ、借金返済と同時に大金を得てミュージアムのスポンサーとなりこのメモリを手に入れた。スポンサー特権という奴だ。今はミュージ

アムに協力しているがそのうち水都の美しい風景もオレのものとして未来永劫金色に染め上げよう。奴らの目的など知ったことか。夕日を反射する金色の街はさぞかし美しいだろう……それがオレの黄金郷、すなわちエルドラドだ！」

《エルドラド！》

そしてガイアウィスパーを鳴らしてガバツとシャツの胸元を開いて自身の胸の中心に出現した生体コネクタにメモリを突き刺すと、黄金魔人：エルドラド・ドーパントへと変貌するリレイ金堂。後ろを向くと呪怨キクも、断頭台とそれに乗せられた人間の首でGと描かれたメモリを《ギロチン！》と鳴らして髪をかき分けてうなじに突き刺すことでギロチン・ドーパントへと変貌していた。

『…仮面ライダーW史上最大のピンチ、ですかね？』

「この程度、ビギンズナイト始まりの夜に比べたら軽いもんでしよう。相棒？」

『それもそうですね。暴れてください、相棒！』

《アームフッキング！》

「さあ、お前たちの罪を数えろー！」

アームセイバーを展開してまずはギロチン・ドーパントに斬りかかる。ギロチン・ドーパントは両腕に刃を展開して受け止め、背後から殺気。私が左手を操り裏拳を繰り出すと突進してきたエルドラド・ドーパントの伸ばしていた右手を払いのけることに成功。きりたんが右でギロチン・ドーパントを、私が左でエルドラド・ドーパントを同時に相手取る。

「ハハハッ、いいぞ！ダブルの名の通り二人で一人というのは本当らしい！ぜひともお前たちがミュージアムを相手にして壊れる前にコレクションに加えたい！」

「リーダー、片腕で捌かれて自信失うんですけどーうぎゃっ!？」

「勝手に壊れると思わないでほしいですね！」

《ルナ！》

するとギロチン・ドーパントを殴り飛ばしたかと思えばルナメモリを取り出してガイアウイスパーを鳴らすきりたん。何も聞いてない私は困惑するがそのままエルドラド・ドーパントの手を受けないように続ける。

「相棒、技名！」

《ルナ！マキシマムドライブ！》

『え、えーと……ファングムーンエッジってのはどうでしょう？』

『じゃあそれで！』『ファングムーンエッジ！』

ルナメモリを腰のマキシマムスロットに装填。アームセイバーが伸縮して三日月の様にダブルの身体を囲むように展開してギロチン・ドーパントとエルドラド・ドーパントに纏めて斬撃を叩き込んで吹き飛ばす。

「やはり、さすがのエルドラドと言えど刃に触れることは叶わない様ですね！」

『なるほど』

「触れられないが攻撃することはできるぞ」

そう言つて床に手を触れて黄金化させ、先端が鋭く尖った触手を複数伸ばしてくるエルドラド・ドーパント。伸縮する刃で迎撃するが圧倒的な数に押されていく。

「次、メタルです」

『了解』

《メタル！》《メタル！マキシマムドライブ！》

今度は私が取り出したメタルメモリを右手に持ち替えてからマキ

シラムスロットに装填すると背中にもタルシャフトが出現。さらに両端に逆を向いた刃が出現し鎌状になったそれを手に取り振り回し触手を全てきり払う私たち。

『技名はフアングスピニングサイズでどうです!?!』

「採用! 『フアングスピニングサイズ!』」

「むっ!?!」

エルドラドは床に黄金の壁を形成するが、それすら容易く斬り裂くシャフトの乱舞がギロチン・ドーパントとエルドラド・ドーパントを切り刻む。ギロチン・ドーパントの刃はズタボロで刃毀れし、エルドラド・ドーパントの装甲にも傷を与えた。

「素晴らしい! 美しい、まるで死神の鎌じゃないか! キク、お前は下がってろ。全力で相手をせねばなるまい!」

「あ、じゃあ喜んでー」

そう言つて暗幕の向こう側に離脱するギロチン・ドーパント。追いかけていがエルドラド・ドーパントを倒すのが先決だ。

「そちらが得物を使うならこちらもだ」

そう言つて床に手を付け、引っ張ると黄金の棍棒がその手に握られている。形状はタルシャフトそのものだ。エルドラド・ドーパントが両手で軽く振るうと鞭の様にしななって伸びてくる棍棒を咄嗟にシャフトで受け止める。

「こう、だったかな?」

「っ、これは…!?!」

『ルナメタル!?!』

「上の戦いは見ていたよ。そしてこの武器が気に入ったのさ!」

そう言つて棍棒を振り回し、縦横無尽に四方八方から攻撃が襲いくるそれを左手に握つたシャフトと右手のアームセイバーで捌いて行く。まるで孫悟空の如意棒だ。こちらが使う時はかなり便利なのに敵が使うとこんな脅威になるとは……！

「ならば！こうです！」

《シヨルダーフアング！》

ぶん、とシャフトを回転させて投げつけ、エルドラド・ドーパントに棍棒で防御させるとタクティカルホーンを二回押し込んでシヨルダーフアングを展開、投げつけて棍棒を切り刻むきりたん。さすが、相棒です。

《ヒート！》

「大本命行きますよー！」

《ヒート！マキシマムドライブ！》

戻ってきたシヨルダーセイバーを手に取り、ヒートメモリをマキシマムスロットに装填するきりたん。それできりたんの秘策の正体を推理する。そういうことか。

『技名は、フアングバーンザッパー、ですかね！』

「無駄だ、私に攻撃は届かない」

そう言つて両手を床に付けて黄金の触手を形成して包み込むように何重にも防壁を作成するエルドラド・ドーパント。対してシヨルダーセイバーに炎を纏い熱を刃に集中させていくきりたん。

「その技名、採用！なにをしようとしてるのかわかったようで！」

『さすがに高校で習いましたよー！』

『フアングバーンザッパー!』』

ある熱量まで達するとシオルダーセイバーを投擲する。それは綺麗な弧を描いてエルドラド・ドーパントの防壁をまるでバターの様に斬り裂き、中のエルドラド・ドーパントを露出させると私達は突撃。戻ってきたシオルダーセイバーを手に取り跳躍、縦一文字に斬り裂いた。

「…馬鹿な」

「貴方が操るのはあくまで黄金。腐食しにくいし強いのでしよう。ですが」

『金の融点は1,064℃。それに達することができれば容易く突破することが可能です』

「見事……!」

そしてふらふらと暗幕を引つ張りながらその奥に後退するエルドラド・ドーパント。暗幕が取れたことでその奥の空間がドックになっていて、クルーザーが置かれていることに気付く。逃げようというのかと結論付けて追いかけんとする、が。しかしそこで予想外の事が起きた。

「リーダーが負けちゃ世話ねーですよ。あとは私に任せてゆっくりお休みくださいませ、リーダー」

「キク…!?!」

『なっ?!』』

クルーザーに隠れていたギロチン・ドーパントがエルドラド・ドーパントを背後から急襲。飛び蹴りを喰らわせるようにして、エルドラド・ドーパントの首を切断したのだ。あまりの出来事に固まる私達。そしてエルドラド・ドーパントは信じられない、と声を上げながら足を滑らせてドックに沈んで行ってしまった。

「リリイ様…!? 呪怨キク、貴様…!」

「あー、西友くんはリーダーにゾツコンだったねえ…」

クルーザーで準備をしていたのかアイスエイジの男：西友が複数のマスカレイド・ドーパントを連れて出てきてギロチン・ドーパントを睨みつける。その手にはメモリが握られており一触即発だ。しかしギロチン・ドーパントは肩をすくめてあざ笑う。

「でもね、エル・ドラードは実力主義…リーダーが死んだら次のリーダーは私なんですよ。君以外は納得してますよ。元リーダーの一番大事な高価なものや金を積み込んでくれてご苦労様。従わないってんなら…殺しますよ?」

「ここで死ぬつもりは…ない! この借り、必ず返す!」

《アイスエイジ!》

西友は周りが敵だらけで不利だと悟ったのかドーパントになるとドックに飛び込んで海を凍らせて滑走し逃亡。追いかけたいが、今はギロチン・ドーパントだ。

『…まさかリーダーを裏切るようなやつだとは』

「人聞き悪いなあ。貴方達の代わりに断罪してあげたんですよ? 感謝してくれなきや。それよりも、あの二人を連れて逃げたらどうです?」

「なにを…っ!?!」

突如ゴゴゴゴ…ツと揺れる地下空間。まさか、爆弾!? クルーザーに乗り込み変身を解除して楽しげに手を振る呪怨キクに対し、私達は有阿姉妹を助けるか奴を追いかけるかの二択に迫られる。

「証拠隠滅用の爆弾です。そのうちここら一帯を吹き飛ばします。安

心してくれていいですよ、貴方達が無駄話してる間に上の像たちは運び出しておいたので。それにIAにはもつと稼がせてもらわないとですしねえ。はい、出してください」

そう言つてクルーザーに乗って地下ドックから出て行く呪怨キクを諦め、私達は有阿姉妹を助け出して命からがら車とハードボイルダーに乗って脱出。埠頭は完全に吹き飛んだのだった。

第十一話：Gの道の果て／断頭台に立つ君の名は

水都南埠頭……だったはずの爆心地近くの路地裏にて。ダブルと交戦し逃げ延びた上級構成員だった三人は、あのあとやってきた呪怨キクの口車に二つ返事で領き一足早く逃げ出して合流場所に向かっていたが、その途中で前の通路を氷塊で行き止まりにされ、背後からやってきた怪人に腰を抜かして命乞いしていた。

「マグマ、コックローチ、バイオレンス……裏切り者は消す」

「待ってくれ！め、メモリは碎けたしよお……もつと強いメモリをもらうために頭を下げないと……」

「り、リーダーは負けたんだ！なら次の強い奴に従うのは当然だるお！？」

そんなことを喚いた二人が一瞬で氷漬けにされ、残ったバイオレンスだった男はガタガタとみつともなく震えて逃げ出し、氷壁を素手で削って逃げようとする。

「特にお前は……地下室の在処を話した」

「ヒツ、ヒイ！西友の兄貴、やめてくれ……あれはしようがなかったんだ、アンタだって死にたくねーだろ!?仮面ライダーはリーダーだって倒したんだぞ!?」

「リリース様の為に命を捨てる……それが、エル・ドラード」

「ギヤアアアア……」

みつともなく足掻きながら断末魔を上げて凍り付いていくかつての部下を見下ろしたアイスエイジ・ドーパントは振り返る。

「お前たちの碎ける音を聞け」

そう宣言した瞬間、凍り付いた全てが碎け散る。そして人間の姿に

戻りながら西友は路地裏を歩いて行く。

「リリイ様は……仮面ライダーに負けはしない。あの女が……邪魔をした。仮面ライダー、呪怨キク……俺が潰す！」

「それはやめておけ。頼むよ、西友」

そしてそれを制止する女の声。

「貴方は…!？」

アレから半日。なんとか事務所に戻ってきた。ヒメさんたちが直してくれたりらしい扉を開けて全員でぐったりと雪崩れ込む。あとでお礼を言わないとな…有阿刑事は記憶が混同していて私達がダブルだったとは気付いてない。安心したのかソファで並んで眠る有阿姉妹を尻目に、悔しさから握った拳を壁に叩きつける。

「…やられました。全部あの女の掌の上で転がされていた…」

「敵ながらあつぱれと言うほかないでしょう。名無しの女が地位と大金を手に入れた。手がかりもない、完敗です」

「IAさんと有阿刑事を救えただけでもすごいことかと…」

きりたんとあかりと共に項垂れながら記憶を掘り起こす。そこでいくつか気になるところがあるのを思い出した。

「……いや、気になるところがいくつかあります」

「とうとうと…呪怨キクで?」

「はい。まずは何と言つても、どうしてIAさんが休暇で水都に来ることを知っていたか、です」

「!」

そこからまずおかしい話だ。SPがいようと簡単に誘拐できただろうが、それでも休暇中に偶然出くわすだろうか?本拠地を持たないエル・ドロードと、普段世界中を飛び回っているIAさんが。こんな日本の地方都市で。いや、ない。

「次に気になったのはなんでこの事務所でIAさんが寝泊まりしていたのにギロチン・ドーパントに居場所を知られ攫われたのか」

これもかなり謎だ。IAさんに発信機の類がついてないことは確認したし、尾行されてないこともちゃんと確認しながら事務所まで戻ったのだ。変身前の私が見られた可能性もあるが、夜中だったためそれもないだろう。

「そして最後に呪怨キクの発言です。「それにIAにはもつと稼がせてもらわないとですしねえ」これ、最初はまた誘拐して身代金でもとるのかと思っただけですけど…もつとつてのはつまりこれまでも稼がせてもらってたことになります」

「…IAさんの稼いだお金で私腹を肥やしてるってことですか?」

「でもそれができるとするなら身内以外ありえないですよ?」

「そうなんですよね…:うん?きりたん、それは?」

「うん?ああ、ギロチン・ドーパントと戦った時にくっ付いたみたいですね」

きりたんの右手にくっ付いていた紅い髪の毛らしきものを摘み上げてジーツと観察する。思い返す。キクは般若のお面を被って常に顔を隠していた。さらに言えば変身前後で共通する血の様に紅い口ングヘアー…あれはまさか、カツラ？ドーパーント態になっても被つてると考えれば説明がつく。おやつさんも変身後に帽子を被ってたし。

「IAさんが休暇にこの水都に来ることが把握できて、この事務所で寝ることを知っていて、IAさんに稼がせてもらってる人物…そしてお面にカツラ…まさか？」

「そのまさかです。今検索しました。……やはり、あの名前はありませんでしたよ」

そう笑って本を閉じるきりたん。私より先にあの可能性に行きつくとはさすがだ。あかりは首を傾げているが多分話す時間はない。そろそろ夕方だろうか。IAさんと有阿刑事はゆつくり眠っているが、IAさんは先程自身が所属する芸能会社に連絡していた。そして私達の推理が正しければ、犯人はあちらからやってくる。次の瞬間、ドアノブが回されて一瞬の躊躇のあとに件の人物が顔を出す。

「ご迷惑をおかけしました！IAを引き取りに……あれ？どうしたんです探偵さん達。怖い顔をして」

扉を開けて現れたのは黒髪をポニーテールにしたスレンダーな赤縁メガネをかけた、シヨルダーバッグを肩にかけたスーツ姿の女性。IAさんのマネージャー、北村莉奈は困惑した顔をむけてきた。どうやら面の下も仮面を被ることが得意らしい。

「お待ちしてましたよ、呪怨キク」

「え。や、やだなあ。人違いですよ。私は北村…」

「とぼけなくても結構。貴方はまず、こう聞かなければならなかった。

呪怨キクとは誰ですか？とね。その反応は貴方が呪怨キクを知っている証左だ」

「そ、そりゃあ知ってますよ。エル・ドラードは有名ですし…」

「そうですね、有名ですね。裏社会で…真つ当な企業のマネージャーである貴方がなんで知ってるんですか？ついでに言うところの躊躇。扉が破壊されてないから戸惑ったのでしょうか？」

「っ！」

動揺する北村さん。…いや、呪怨キク。きりたんは言っていた。こいつは名無しだと。故にデータがない。逆に言えば、どんな名前だろうが名乗ることが出来る。

「貴方はキクがいる時、常に不在でした。タイミングも完璧で何も違和感がなかった。でもスレンダーな体型は一致しますし、私達の前で一度もお面を外さない理由も知り合いでない限りわからない。貴方ならIAさんの休暇の時間と場所を知ることが息を吸うように簡単ですよ」

「そして、IAさんがうちの事務所にいたことを知っている部外者は妹の有阿刑事と貴方だけだ。ギロチン・ドーパントとして連れ去るのは簡単だったことでしょう。まさか身内に裏切り者がいるとは私ですら思わなかった」

そう首をすくめるきりたん。犯人が分かっているからと油断した私の責任だ。

「エルドラード・ドーパントとの決戦で遅れてきたのも、IAさんがいなくなつたことを会社にごまかすために根回しをしたから、じゃないですか？これから黄金像になるかもしれないのだから対策しないと怪しまれるのは貴方ですしね？」

「ち、違いますよ…やだなあ、私がIAを裏切るわけがないじゃないですか…」

「では聞きましょう。あなた、どの大学の出ですか？」
「え？」

いきなりの質問に呆ける女。すぐに意図に気付いたのか、三日月の様な笑みを浮かべる。

「なんなら高校でもいいですよ…っと、演技はもうやめましたか」

「何故わかった…私が金を使って今の会社に入ったことを」

「私の相棒は地球の記憶を有していますね。以前呪怨キクの名を調べた時に何も出なかったことから孤児か捨て子の出で名前がない、と推理しました。そしてついさっきも貴方の名前を調べたんですよ」

「この地球上に、北村莉奈なんて人間は存在しません。敢えて名付けるならば…名無しネームレスそれが貴方だ」

「ギロチンとはびったりなメモリを選びましたね。首を落とせばそれが誰だったか関係ない…貴方にびったりです」

「アハハハハハッ！やりますね、やりますねえ！さすがは元リーダーを追い詰めただけのことはある！」

そう言つてシオルダーバッグの中に手を突っ込み、紅い髪のカツラと般若の面を取り出して被る呪怨キク。片足を斜め後ろの内側に引き、もう片方の足の膝を軽く曲げ、背筋は伸ばしたままメモリを手にした右手を前にした優雅なお辞儀…カーテシーを行いにやりと笑う。

「改めまして初めまして…私は北村莉奈と呪怨キクを名乗るもの。新たにエル・ドラードのリーダーとなりましたただの名無しでございます」

《ギロチン！》

「私達にはれてないと見くびって顔を出したのは失敗でしたね」

《ジョーカー！》

「構成員も呼んでないとみました。ここで決着をつけます」

《ファンク！》

「変身！」

呪怨キクはメモリをジャグリングしてからキャッチして髪をかき分けたうなじに挿入してギロチン・ドーパントに変貌、私はドライバーにジョーカーメモリを装填して意識を失い床に転がるところをあかりがキャッチ、きりたんがファングジョーカーに変身。すると運が悪いことに有阿姉妹が目を覚ましてしまった。

「そんな、追いかけて!？」

「ど、ドーパントに仮面ライダー!?!なんでここに!？」

「IAにはまだ利用価値があるんでえ…諦めるのは惜しいのでもらっていきますよお！」

「待て！」

IAさんの襟首を掴みあげると両足の間に刃を出してそれを落とす衝撃で跳躍、窓を突き破って外に出たギロチン・ドーパントが跳躍を繰り返して逃げて行く。

「ぐへっ!?!姉さん…！」

『あかり！有阿刑事を！あと私の身体を一応りボルギャリーに運んどいてくださいー！』

「わかりました！」

有阿刑事は衝撃で引っくり返って気絶し、あかりに任せられた私達も窓から飛び出して追うと、飛び降りた所で人とぶつかりそうになった。ゴルフバッグを持っていた女子高生ぐらいの女の子は尻餅をつき、私達は謝罪しつつハードボイルダーに跨り追いかけた。

『ごめんお嬢ちゃん!』

「なんや? 慌ただしいのお:あれが仮面ライダーというやつか?」

「やあ。まっつたよついなちゃん。あの剣のふりごちはどこ?」

「もしかして、あんさんが月読アイか?」

ダブルが去った後、鳴花ーズから出てきた場違いな幼稚園児にしか見えない女の子がついなちゃんと呼ばれた少女に話しかけると、月読アイと呼ばれた女の子はレモンキャンディを取り出すと舐めながら手を上げて挨拶する。

「そだよー。わたしが月読アイ。ついなちゃんにちからをあたえるなぞのおんなだよー」

「さよか。あんさんがそう言うなら信じるわ。:もしかしてうちのドライバーができたんか?」

「ごめんねーまたせてー。でもばっちり、できてるよー」

黄色い帽子を被ったアイはピンク色のスモックの上に着たダボダボの白衣のポケットからバイクのハンドルの様な物を取り出すとついなに手渡した。受け取ったついなはにやりと笑ってそれをゴルフバッグ中に入れるとポケットの中から取り出した、ダブルの物と同じ形状のスピードメーターの様なAと描かれた紅いメモリを手にして笑う。

「仮面ライダー、ええやないか。うちは鬼やらバケモンやらよく言われたけど、あいつがそう呼ばれてるならうちも名乗らせてもらおうわ。

仮面ライダー……」

《アクセル!》

手にしたメモリのガイアウイスパアが鳴り響く。振り返ると月読アイが消えてるのを確認するついな。

「つてところかあ？なあ、月読アイ……つてなんや、いないやないか。しかしダブルと言うたか……忙しそうやったな。挨拶がわりに手伝つてやろうやないかい」

そう言つてゴルフバッグを担ぎ直すとついには側頭部にかけていた鬼の仮面を正面に被ると両足に力を入れて跳躍。人とは思えない身体能力で次々と屋根を乗り継いでダブルを追いかけていき、それを窓から見えていたあたりはぽかーんと呆けていた。

《トリガー！マキシマムドライブ！》

『フアングショットレイザー！』

「うわっ、いきなり技名言わないでくださいよ」

マシンハードボイルダーを操縦しつつトリガーメモリをマキシマムスロットに装填、左胸に出現したトリガーマグナムを左手に持つてIAさんに当たらない様慎重に狙つて剃刀の様な弾丸を飛ばすも、刃を生やした腕で防がれてしまう。エルドラドが強すぎて忘れていたがフアングジョーカーと普通に張り合える実力者だった。

「このまま狙うとIAさんに当たるかもしれません」

『ルナトリガーにするべきでしたね、まさか逃げるとは……』

トリガーメモリをスロットから抜いてトリガーマグナムを消しつつ追跡に専念する。跳躍を続けるギロチン・ドーパントは海岸沿いにそびえるビル群のひとつの前まで来ると人目も気にせず入って行く。

『あれは……IT企業イディガル・コーポレーション……？』

「恐らく大金で買い取ったビルでしょう。リリイ金堂と違い大胆不敵な奴です」

『金の力で何とでもなると思ってるのでしょうか』
「突入しましょう」

ハードボイルダーから降りて徒歩で駆け込むと、大量のドーパントがひしめき合っていた。バイオレンスが五体、マグマが三体、コックローチが十体、マスカレイドが二十体……いやふざけんですよ。

「奴はエレベーターで最上階に向かったようです、強行突破しましょうー！」

『技名はフアングヘブンズトルネードでどうでしょう』

《サイクロン！マキシマムドライブ！》

「いいですね、ノツてきましたよー！『フアングヘブンズトルネード！』」

サイクロンメモリをマキシマムスロットに装填すると私達はバク転、両手を床について回転、ブレイクダンスの様な動きで竜巻を発生させ、風の牙が吹き荒れてドーパント達は爆散。メモリブレイクされ、私達はエレベーターに転がり込んだ。結構な企業だからかなり広いし外が見える。

『向かうは最上階…社長室ですね』

「マフィアのリーダーの次は社長気取りですか…」

『名無し…もしかして、自分が存在することを世界に知らしめたいのかも…』

私には結月ゆかりという名前がある。記憶がない相棒にも、唯一覚えていたきりたんという名前がある。あかりにだって、IAさんになんて、あのリリイ金堂にだって名前がある。だけど彼女にはそれがない。IAさんを再び攫った理由はわからないけど、リリイ金堂を裏

切った理由は分かったかもしれない。

「はい、一名様…二名様のご案内！」

『っ！』

《アームフアング》

最上階について扉が開いた瞬間、飛び蹴りを繰り出してきたギロチン・ドーパント。咄嗟にタクティカルホーンを叩いたきりたんが右腕の刃で受け止め、さらにギロチン・ドーパントが開閉ボタンを足で押しして扉が閉まり狭い密室のエレベーター内で凄まじい攻防が繰り広げられる。外が見えるガラス張りの壁にギロチン・ドーパントの右腕の刃が突きたてられ、容易く裂いてしまうとギロチン・ドーパントは足裏に刃を展開し壁に突き刺すと蜘蛛の様に壁を張って犬の様な顔を笑みに歪める。

「アツハア…こんな狭い場所で私の断頭台から逃げることは不可能…！」

「そうとも限りませんよっと！」

アームセイバーで斬撃を逸らしつつ、押された勢いで肘をエレベーターのボタンに叩き込むきりたん。首を動かして視界をずらせば、一つ下の階が選択され、エレベーターが下降した勢いで跳躍していたために天井に頭をぶつけるギロチン・ドーパント。

「ぐえっ」

「とりあえず広い所に…！」

最上階の一つ下の階につくなりエレベーターから転がり出る私達。振り向くと五指を刃に変えたギロチン・ドーパントがエレベーター外の壁を掴んで斬り裂きながら出てきた。その姿は夥しい数の刃に包まれている。

「さすがにお強いから本気です……刃全力展開……切り刻んでやりますよおおお！」

両腕、両肩、五指、頭頂部、両頬、側頭部、背中、胴体、両太腿、両爪先、両足の間にと刃を展開して跳躍、オフィス内を高速で駆け巡るギロチン・ドーパント。机だろうが椅子だろうがコーヒーメーカーだろうが切り刻んでいくそれはもはやシユレツダーである。

《シヨルダーフアング》

「フツッ！」

「無駄ですよお！」

シヨルダーセイバーを展開して投擲するきりたん。しかし弾かれて意味をなさず、逆に弾かれた傍からまたギロチン・ドーパントの刃に当たり弾かれまくって複雑な軌道を描いて行くシヨルダーフアング。

『フアングの牙をも弾くとは……！』

「いえ、それを待つてました」

《ルナー・マキシマムドライブ！》

勝利宣言するかのようにルナメモリをマキシマムスロットに装填するきりたん。すると複雑な軌道を描くシヨルダーセイバーの軌跡が金色の線として実体化、複雑な軌道の黄金の蜘蛛の巣を作り上げ、今度はギロチン・ドーパントが弾かれまくりパチンコかなにかの様に跳ねて行く。

「うぎゃあああああ!?なぜえええええ!?!」

『……名付けて、フアングバインドトラップ、でしうか』

「フアングジョーカーはメタル、トリガー、サイクロン、ヒート、ルナ、

五つのメモリを通常時、アームセイバー展開時、シールドセイバー展開時でそれぞれ別の技を使用することができると理論上わかってました。あとは特性を考えてある程度予測すればどういう技になるかは計算できます。もちろん、弾かれることも考慮して、その位置に行くように反射角度も計算しました」

『きりたんすごい！』

「うっ、ぎゃあああああ!？」

最終的に何度も天井の中心にぶつかり続けたギロチン・ドーパントは10回目の激突時に天井を斬り崩して上階に移動、私達もそれに続くど、一人のマスカレイド・ドーパントと縛られて捕らえられているIAさんがいた。社長室と言うだけ合つて机が一つと棚がいくつかだけでかなり広い。ギロチン・ドーパントは机に激突したのかその上でのびている。

「おのれ……罫にはめ追い詰めて餓鬼をミュージアムに手土産として持っていく計画がああああ!」

「やはり私が目当てでしたか。ミュージアムのスポンサーですし、私の事も知ってたんでしようが」

『それわかってたら私の肉体で来たんですけど…』

「居場所が割れてる事務所を急襲されて私の身体持ってかれたらどうする気だったんですか」

『ぐっ』

ぐうの音もでない。ゲームも推理も計算も全部きりたんに勝てません…年上のお姉さんとしての尊厳ぐぬぬぬ。

「IAはもったいないけどここは仕切り直しを…!」

「これで決まりです。ゆかりさん、技名」

《トリガー!マキシマムドライブ!》

何とか立ち上がりんとするギロチン・ドーパントに対し、シオルダーセイバーを持ちながらトリガーメモリをマキシマムスロットに装填するきりたん。えっと、通常時だとトリガーマグナムが出てファングシヨットレイザーだったから…

『フアングネイルブラスト、とか？』

「いいですね。『フアングネイルブラスト！』」

「え」

青い光を纏って鋭く棒状になったシオルダーセイバーを投擲。窓を粉碎して今にも逃げようとしていたギロチン・ドーパントを背中から撃ち抜き、爆散させた。ばたりと倒れて般若の面が砕け散り、うなじからメモリが排出され頭の上でブレイクされ残骸を乗せた姿となる呪怨キク。砕けた面の破片で切ったのか俯せの顔から血が流れ出していた。

「そんな、ま、まだだ…この部屋にはまだ、メモリが…」

カツラが取れ、一面は砕け、メモリの残骸を頭に乗せ額から血を流しながらもながらも床を這いずっていく呪怨キクを止めようとするが手で制される。慌てて立ち止まると、コツコツと靴音を鳴らして歩いて行く人物がいた。

「無様だ、実に無様だ。オレを裏切った末路がそれか。キク」

「お、まええ…？」

先程までIAを捕らえていたマスカレイド・ドーパント。それが変身を解いてメモリを捨てつつキクの前に立つ。上着のボタンを外して肩にかけなおし、懐から取り出した金色のサングラスをかけたその人物は、死んだはずの人物だった。

「リー…ダー…？そんな、確かに首を切ったはず…！」

「このオレが、仮面ライダーが本命だと言う技になんの対策もしてないわけがないだろう？」

リリイ金堂。呪怨キクに首を断たれて死んだはずの女。それが五体満足で呪怨キクを見下ろしている。振り向く、既にIAさんは金の像に変えられていた。…今の一瞬の攻防の間に、だと…？

「黄金の壁を作った後、金でエルドラド・ドーパントとそっくりな分身を作り出して私は離脱していたんだ。そしたらキクが面白いことを始めたからマスカレイドメモリを使って偽りつつクルーザーに乗り込んでたわけだ。そしたらオレに見張りを頼んできたから思わず笑いそうになったぞ」

「…そうか、エルドラドが死んだはずなのに黄金化は解除されていなかった…」

『そこに気付くべきだったという訳ですか…』

知っていたはずなのに、あまりにも衝撃がデカすぎて忘れていた。リリイ金堂はエルドラドメモリを取り出してコネクタに挿入しドーパントへと変貌。その手をかかげた。

「リーダー、まさか…!？」

「無様ではあるがその足掻く姿は美しい。IAと同じくオレのコレクションに加えてやろう」

「い、いやだ…私は私が生きた証を…アアアア!？」

頭を撫でるように触れられ、断末魔を上げて一瞬のうちに金の像に変えられてしまった呪怨キクを尻目に振り向くエルドラド・ドーパント。

「第二ラウンドだ。オレのコレクションになりたくなかったら…足掻

「いて見せろ、仮面ライダー！」

第十二話：Eは極楽／水都を守る呉越同舟

「リリイ様の命令は……俺が遂行する」

ダブルがギロチン・ドーパントと激突してる頃。接触してきたリリイ金堂から「仮面ライダー以外の邪魔者を寄せ付けるな」と命令を受けた西友ことアイスエイジ・ドーパントは表情には出さないが嬉々として働いていた。キクに与する構成員や近づいてしまった一般人を氷漬けにして砕いて行く。ダブルが戦っている今、誰も止められない……はずだった。

「なんや自分、通り魔なんかか？ドーパント人間問わず殺して回ってからに」

「……？」

先程まで誰もいなかった背後に、落ちてきた鬼の面を被った謎の少女。ドリルの様なツインテールにした赤みがかかった白い髪に鬼の面を外して出てきた金の瞳の端正な顔、セーラー服を身に纏っていることから高校生だろうか、ゴルフバッグを手をしている姿は通りすがりに立ち寄っただけにも見える。

「誰かは知らんが……凍らせてやる……！」

「おっと、頭上注意や」

「!？」

右手を向けて冷気を放とうとしたところに、空から飛来した凄まじく重い剣がアイスエイジ・ドーパントの目の前のアスファルトに突き刺さってその衝撃で吹き飛ばす。少女はビクともせずその剣……エンジンブレードまで歩み寄ると軽々と引き抜いて肩に置く。信じられない、という視線を向けるアイスエイジ・ドーパントに対して少女は笑う。

「ほんまはあんさんを潰すために投げといたんやけどな？運がいいなあ。いや、今のでのびてた方が幸運やったかもな？」

そう言つてゴルフバッグから取り出したバイクのハンドルとタコメーターを合わせた様な物を腹部に宛がうとベルトになり、それ：アクセルドライバーがダブルのダブルドライバーを彷彿とさせることに警戒するアイスエイジ・ドーパントにスピードメーターでAと書かれた紅いメモリを突きつける少女。

《アクセル！》

「ところで凍らせるのが得意らしいなああんさん：Wのメモリの持ち主とか言わへんよなあ？もしうちの探してるメモリのドーパントだった場合：その命は諦めよな、な？」

そう言つてメモリをアクセルドライバーの中心に装填、右のハンドル：パワースロットルを握って回してエンジン音を轟かせる。

「変：身！」

《アクセル！》

そして少女は蒸気と熱気に包まれ成人男性並みの大ききとなり、無骨な深紅の戦士へと姿を変える。Aを模した青い複眼を輝かせ、先ほどまでよりも軽々とエンジンブレードを振り回して切っ先を向ける。

「さあ、振り切るでー！初乗りなんや、ひとつ走り付き合せてーな！」「リリイ様の：邪魔はさせない：！」

そして、剣と冷気がぶつかった。

生きていたリリイ金堂が変身したエルドラド・ドーパント。社長席に手を置いて黄金化させると黄金の球体に変形させて槍状の触手を大量に伸ばしてきた。

《アームフアング》

「くっ…!?!」

アームセイバーで斬り払うきりたん。するとエルドラド・ドーパントは触手を引っ込めて黄金の球体を自身の下半身と融合、ケンタウロスの様な姿となり椅子を手に取り黄金にすると変形させ馬上槍にして構えた。

「ハハハハッ！ハンティングだ！」

社長室をパカラツパカラツと爆走し馬上槍を突き出してくる。アームセイバーで弾くも衝撃までは殺せず後退。振り返る間もなく背後から一撃をもらい膝をつくきりたん。フアングの反動もあるのに長期戦でマキシマムを連発してたところに大ダメージ。そろそろ限界だ。

『きりたん！もう体が限界です！』

「おいおい、まさかちよつと本気を出した程度で降参なんて言わないだろう？」

「…歌姫IAは水都の宝です。私だってラジオで聞くのが好きだ。貴方が独り占めしていいものじゃない…!」

そうきりたんは踏ん張り、啖呵を切るとエルドラド・ドーパントは周囲を走りながら馬上槍を持ってない手で壁に触れて行く。

「美しい物は美しいオレの手中で輝き続ける事こそが幸せだ。何時か失われる美しさなど認めない。加減はなしだ、絶望を見せてやろう」

すると黄金に染まった壁が変形し、ダブルを取り囲むようにして二十体のエルドラド・ドーパント（ケンタウロス態）が現れた。分身を作ったとは言ってましたが質量さえあればこんなこともできるんですか…!?

「さあ終わりだ、どう足掻いても終わりだ」

「「「「「もうもうすぐすぐ終わりだ」「」「」「」」

「お前は串刺しにして速贄として黄金像にしてやろう。壮絶な最期だ。さぞ美しいだろう」

「「「「「さぞさぞ最期は美しいだろう」「」「」「」」

社長の机があつたところに居座る本体に合わせてエコーをかけるかのように分身たちがその場で蹄を鳴らして続く。するときりたんはヒートメモリを取り出してマキシマムスロットに装填。さらにタクティカルホーンに触れようとしたので慌てて止める。

《ヒート！マキシマムドライブ！》

「一か八かです…!」

『まさかツインマキシマムを!?まだ試したこともないのに危険です!』

「なにもできないまま死ぬよりはマシですよ…!」

《ファング！マキシマムドライブ！》

ツインマキシマム。ファング以外ならトリガー・メタルで可能だが

肉体への負担があまりにも大きいためきりたんに使うなど止められていたそれを使うぐらいに追い詰められたきりたんはタクティカルホーンを三回叩き、全身に炎を纏って跳躍。その場で横に高速回転して自身を中心に炎の竜巻を発生させ、突撃してきていた分身たちとぶつかる。

「ツイン、マキシマム……！」

「これは…分身が溶解されると…!?!」

技名すら考えてないそれは分身を一掃し、さらに槍を盾に変形させたエルドラド・ドールパント本体にもダメージを与えるが、バチバチとファングメモリをがショートを起こして回転するきりたんの体勢が崩れ、まるで振り回されるようにしてガラス張の壁に激突、ぶち破つて落下してしまう。

『きりたん、起きてくださいきりたん！』

「うう…」

『こころなれば……！』

右半身のきりたんが意識が朦朧しているので、自由に動く左手でスタッグフォンを操作。結構な高さを頭から落ちて行く。そして地面に激突するかしないかのところで海近くの廃線を利用してきたリボルギヤリーが到着、私達を回収してくれたので変身を解いた。リボルギヤリーに入れられていた私の身体が目覚ますと同時に倒れ伏すきりたんの小さな体。見れば内側まで燃えていたのだろう、体が煤だらけで火傷もできていた。慌てて持ち上げて横に抱えると外に出て風に当てる。

「きりたんは普通の人間じゃなくても私にとっては普通の女の子でたった一人の相棒なんです…起きてください…」

涙ながらに抱えたきりたんに呼びかける。すると零れ落ちた私の涙で気付いたのか目を開けてくれるきりたん。

「なんつー顔をしてるんですか…いつものハードボイルドは何処に行ったんです？貴方の憧れる人はこんなことで涙を流すんですか？」
「大事な人が生きていて涙を流さない人間はいませんよ…もうツインマキシマムは禁止ですからね、きりたんの身体では！」

「ゆかりさんの身体で同じことになったら嫌なんですけど…まあいいや、それよりエルドラドは…」

「呼んだか？」

空から、絶望が落ちてきた。あれだけの攻撃を受けても無傷でピンピンしているエルドラド・ドーパントが馬の四肢で目の前のアスファルトに着地する。

「変身してないのは残念だが…二人とも見目麗しい女子だ、コレクシヨンに加えてもいいだろう…！タイトルは「悲観に暮れた英雄」とかどうだ？」

「っ…!？」

きりたんを両手に抱えてるためリボルギャリーを操れない。きりたんを抱えたまま走って逃げようと試みるがエルドラド・ドーパントは早く…

「アリーヴェデルチ、仮面ライダー…！」

「っ…!？」

しかしてその手は、横から割り込んできたノコギリの様な剣で斬り払われた。

「その人は同じ水都を愛する友人でして、手を出すのはやめていただ

きましようスポンサー殿」

そう言った人物：以前戦った騎士のドーパントが腰に付けられたベルトに手を伸ばすとそこからメモリが排出され、人間の姿に戻る…つて、ええ!?

「星香、さん…?」

「ゆかりさん。奇遇ですね、またここで会うとは」

その人物は、東北星香さん。言われて気付く。ここは以前星香さんと出会った穴場の場所だ。追いかけるのに夢中で気付かなかった。

「おや、そのベルトに装甲車。まさか…」

「何故オレの邪魔をする、ミュージアム。それは仮面ライダーだ、むしろ排除してほしい人間のはずだろう」

「…やはりゆかりさんが仮面ライダーなのですか。残念ですねえ。せっかく同士に会えたと思っただのに敵同士とは」

星香さんがミュージアムの幹部だったなんて。シヨックで立ち尽くすがすぐ我に返る。不味い、仮面ライダーだとバレた。殺される…!?

「…スポンサー、リレイ金堂さん。貴方の後釜についていた呪怨キクさんから聞いたのですが…この街を黄金に染め上げてコレクションに入れようとしていたのは本当か?」

「む?…キクのやつ、余計なことを…事実だと言ったら?オレはお前たちミュージアムのスポンサーだ。その契約を切ろうつてののか?」
「我々ミュージアムにとっても大事なこの街を私物にされるのはいただけないですねえ。それなしにしても、この街は誰のものでもない。美しい水都を独り占めする権利は誰にもない。そうですよね、ゆかりさん?」

そう言つて私に手を差し伸べる星香さん。…ああ、この人は本当に水都を愛しているんだな。そう確信してその手を取ると驚いた表情を浮かべるきりたん。

「ゆかりさん!?! いいんですか…!?!」

「エルドラドは強いですが、正直ファンングジョーカーでもきつい…同じ水都を愛する人間として星香さんは信用できる。きりたん、貴方が信じる私が信じる彼女を信じてください」

「…しようがないですね」

きりたんを下ろして、私を中心に三人で横に並んでメモリを構える。一陣の風が舞った。

「水都はやはりいい風が吹く…失われるわけにはいきません」

《シャーク!》

「呉越同舟。いきますよ、相棒」

《ジョーカー!》

「こんなこと、今回だけですからね」

《サイクロン!》

「変身!」

《サイクロン!ジョーカー!》

そして星香さんはシャーク・ドーパントに、私達はサイクロンジョーカーへと変身を遂げた。

『さあ、お前の罪を数えろ!』

「私の剣の錆となれ!」

「纏めてオレのコレクションに加えてやるよ!」

私達は突撃、エルドラド・ドーパントの下半身の馬部分から伸びて

きた黄金の触手を私達は避け、シャーク・ドーパントは斬り払いながら共に突っ込む。

《メタル!》

《サイクロン!メタル!》

「ぐっ、ぬう:!?」

懐に飛び込むと同時にサイクロンメタルに変身してシャフトを叩き込むと槍でそれを防御するエルドラド・ドーパントだったが反対側からの斬撃を受けてよろめき、たまらず下半身の馬から分離。分離した黄金を自身とそっくりに変形させると2VS2に持ち込んできた。

「ならばこうです!」

するとシャーク・ドーパントは剣を両手で顔の前に構えると鎧が変形する様にして巨大なノコギリザメとシユモクザメとホオジロザメを合体させたような姿となると分身に噛み付いて海に飛び込み、一分もたつことなく水飛沫を上げて人型に戻ってきた。

「水圧で潰しました。これで自由に使える金は足場とその槍だけです!」

「オレは金さえあれば無敵だ!」

そう言つて左手を触れて黄金の巨木をその場に生やしていくエルドラド・ドーパント。槍を円形の双剣に変形させると木々を足場に跳躍して私達二人を斬りつけてくる他、樹木から枝を伸ばして四方八方から攻撃。私達は背中合わせに耐え凌ぐ。

『くっ…地上で戦う限り彼女の能力に際限はありません!』

「なんて力…こんなものを外部の人に渡すとか何考えてるんですかねえ!?!」

「いやはや耳が痛い…我が組織も金が要りますからね。それに、ガイアドライバーを付けてないところを見るとそもそも強力なメモリの毒素で弱らせて金を搾り取る意図が組織の上部にあったと思われる。私は末端の構成員なのでそこまでは詳しく」

「…ということは、あの力を使うたび弱って行く?」

『そうになると不味いですね、メモリブレイクすると死にかねません』

きりたんと二人で悩んでいると、疑問の声が横から投げられる。

「何故命を気にするのです? 奴は水都を独り占めしようとする悪ですよ。なら死んでもいいじゃないですか。貴方達は優しすぎる』

「私達は探偵です。探偵は犯人を追いつめることはあっても死なせることはご法度なんです。悪人だろうがなんだろうが罪を暴いて償わせる…それが、探偵なんです」

『もちろん貴方もなので首を洗って待つとけこのやろー』

「これは手厳しい。…ならば能力を使わせない、が最優先ですね。そこは賛成です」

しかしどうするか。地上である限りありとあらゆるものを金にして攻撃できる……地上なら?」

「星香さん、私達が隙を作ります。さっきみたいに奴に噛み付いて海に引きずり込んでください!」

「なるほど? 今は協力関係ですからね、やってみせましょうとも」
《スタツグ》

スタツグフォンを取り出してメタルシャフトにくっ付けメタルメモリをスロットに装填。風でできた巨大クローを展開し黄金の樹木を斬り裂きながらエルドラド・ドーパントに突撃する。

《メタル! マキシマムドライブ!》

『メタルスタッグブレイカー！』

「させるか！」

そのまま相手を挟み込む技なのだが、巨大クロウを槍で相殺して防ぐエルドラド・ドーパント。しかしその際に隙ができて、横から突撃していた巨大鮫形態のシャーク・ドーパントに気付いていなかった。

「あちらも佳境に入った様やな。性能テストはこれぐらいにしてそろそろ決めよか」

一方、すぐ側の路地裏でアイスエイジ・ドーパントと対決…というよりは一方的に蹂躪していたもう一人の仮面ライダー：アクセル。見えないながらも戦闘音が聞こえてくる方に顔を向けながら、エンジンブレードを地面に突き刺してドライブバーの左グリップ下にあるマキシマムクラッチレバーを引くアクセル。

「凍れえええええ！」

「それは無理な相談やな」

《アクセル！マキシマムドライブ！》

赤熱していくボディにアイスエイジ・ドーパントの冷気はやはり通じず、臨界点までパワーを上昇させると右グリップのパワースロットルを捻って跳躍。全身に高熱の炎を纏って突撃し、キツクの軌跡にタイヤの跡が残る後ろ跳び回し蹴りを叩き込んだ。

「アイツらもなんか技に名前付けとったなあ。ならアクセルグラン

ツアーなんて、どうや?」

「グッ：リリイ様：グアアアアアアッ!」

「ま、もう聞こえてへんか。絶望がお前のゴールや」

爆散し、倒れた西友から転がり出たメモリにIと描かれていたことを確認すると殺気を消して変身解除する少女。

「Wのメモリやなかったか。よかったな兄ちゃん、生かしてやるわ。警察は呼ぶがな」

そうやってエンジンブレードとバツクルをゴルフバッグに入れて去って行く少女はアスファルトにめり込むほど踏み込んで跳躍、その場を去る。それには目もくれず、西友は立ち上がって主の安否を確かめるためによりよると歩きだすのだった。

「ぐっ、海だと…!」

《ルナ！トリガー!》

「ここならば、金にするものはないでしょう!」

シャーク・ドーパントが飛び込んだのを見るなり、ルナトリガーになりながらリボルギャリーに駆け寄ってハードスプラッシュシャーに搭乗。同じく水中に飛び込む私達、ダブル。巨大シャーク・ドーパントはシユモクザメの様な部分から弾丸をばら撒き、私達もトリガーマグナムから光弾を放つ。身動きが取れないエルドラド・ドーパントに炸裂。さらに海深くに沈めて行く。

「オレを、なめるなよ！」

するとエルドラド・ドーパントは自ら沈むことでまだ比較的浅い海底に辿り着くと海底に手を付けて触手にして攻撃してきた。しかしそれは巨大シャーク・ドーパントのノコギリが斬り裂き、さらに私達が魚雷を撃ち込んで海底から打ち上げ水中に移動させた。

「これで……！」

《トリガー！マキシマムドライブ！》

『トリガーフルバースト！』

トリガーメモリをトリガーマグナムに装填して必殺の誘導弾を放つ。がしかし、エルドラド・ドーパントは両手を振り回して水流を変化させ全弾撃墜してしまう。どんなポテンシャルだ、本当に。

「ならば直接攻撃です」

《サイクロン！ジョーカー！》

『合わせなさい、ミュージアム！』

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

「心得ました！」

私達はサイクロンジョーカーに変身し、ハードスプラッシュャーから跳躍。巨大シャーク・ドーパントに呼びかけ同時攻撃。マキシマムドライブで分離して三方向から攻める。

『ジョーカーエクストリーム！』

「ウオオオオオオッ！」

私が真ん中、きりたんが右側、星香さんが左側から攻撃。

「オレは負けない、黄金郷は永遠なり！」

まず右手で巨大シャーク・ドーパントのノコギリを、左手できりたんを受け止めて瞬く間に黄金に変えるエルドラド・ドーパント。しかし同時に攻撃していた三人目…私の一撃が胸部に炸裂。

「今度こそ、完敗だ…お前たち、輝いているな！」

黄金と化した二人を手放して沈んで行くエルドラド・ドーパントは爆散。同時に二人は元に戻り私ときりたんは一体化、ハードスプラッシュャーに乗り込んでリリイ金堂を回収し、砕け散ったゴールドメモリが海底に沈んで行くのを横目に見つつ海上の光を目指すのだった。

【HOUKOKUSHO】その後、気絶したりリリイ金堂と何故かボロボロでやってきた西友は逮捕。星香さんはいつの間にか消えていた、今度会った時は捕まえる。エルドラド撃破と同時に黄金化から解除された呪怨キクとその手下であるエル・ドラードの生き残ったものも全員お縄に付いた。IAさんも無事であり、黄金化から解除されるなり自分を騙していたキクに平手打ちしたらしい。水都の女は強い。その後依頼通り三日間護衛を行い報酬ももらった。これからもその歌声が水都を活気づけるのを見届けよう。ああそうそう、きりたんは無茶なツインマキシマムを使ったツケで火傷だけでなく足や腕が骨折もしてたらしくしばらくファンングジョーカーは使えないとのことだ。当分は私がメインで頑張ることになるだろう！

「こんな感じですかね」

「私の事もしっかり書き残してくれましたね…あいたたた」

「こら、きりたん！ゲームしない！安静にしてなさい！」

窓を修繕した事務所内でゲームをしようとしていた包帯まみれのきりたんがあかりに怒られる。本当に自分は安静にしてください。さもなきりたんを失うかもしれない恐怖で心臓がバクバクです。

そんな事務所を外から見上げる小さい影。鳴花ーズから出てきたその子供はダボダボの白衣を引き摺りながら慈愛の笑みを浮かべる。

「…きりたん、げんきにしてるようでなによりだね」

「覗いて行かないのかい？」

「そうだよー、私達が紹介してあげるのにー」

そう尋ねるのは鳴花ミコトと鳴花ヒメ。しかし幼女、月読アイは不敵に笑って踵を返す。

「ようやくじゅんびがととのったんだもの。ふできなあいぼうとのおままごとをいまのうちにたのしんでおけばいいよね」

そう言っつて月読アイはぽてぽてと足音を立てながら水都の街へと消えていった。

ボイロ探偵W設定（第十二話まで）

・結月紫／仮面ライダーダブル

ハードボイルドを自称する探偵を営んでいる帽子が似合う男装の麗人。かつこよく決めようとして失敗するポンコツだが愛する水都が悲しむことを嫌い、奮闘できるお人好し。きりたんからハーフボイルドと呼ばれるが否定できない。男装しているのに男と間違えられたらキレる。好物はコーヒーと喫茶店「弦巻」のカルボナーラ。仮面ライダーダブルの左サイドに変身する。元キャラは結月ゆかり。

・きりたん／仮面ライダーダブル

地球の記憶を脳内に宿した安楽椅子探偵でゆかりの相棒。口が悪い子供。「きりたん」という名前しか覚えていない記憶喪失。小学生にしか見えないが指摘するとキレる。いつもは引き籠もってゲームばかりしているが、すぐ知らないことを検索してしまう悪癖を抑えるため。結構なゲーマー。ファングジョーカー変身時には「本来の姿」になってから変身する。好物はきりたんぽと味噌パン。仮面ライダーダブルの右サイドに変身する。元キャラは東北きりたん。

・継星燈

ゆかりの後輩にしてイフの孫、継星探偵事務所の所長。身長が低いロリ巨乳だがれつきとした大人。資産家の娘で大食らいであり、働きもせず食っちゃ寝していたが独り立ちするために事務所の所長をすることにした。今のところイフの最期は知らない。元キャラは継星あかり。

・虚音威風／仮面ライダースカル

ゆかりの師匠であかりの母方の祖父。本気を出すとペストマスクを被る変人で、帽子と着流しの似合う飄々とした老獪にして水都に名を轟かす名探偵だったが、「ミュージアム」からきりたんを救出する依頼をこなす中で銃弾からゆかりを庇い死亡した。仮面ライダースカルに変身していた。元キャラは虚音イフ。

・ついな／仮面ライダーアクセル

月読アイからアクセルドライバーと剣をもらった少女。異様な身

体能力を持っていて、重い剣を持ちながら建物の屋根を跳躍して移動することが可能。Wのメモリのドーパントを捜している。仮面ライダーアクセルに変身する。元キャラはついなちゃん。

・弦巻真希つるまきマキ

ゆかりがいつもコーヒー豆を購入する喫茶店「弦巻」の看板娘。ゆかりの同級生。ギターリスト志望だったが父親が一人で切り盛りする店を手伝うことにしたよくてきた娘。元キャラは弦巻マキ。

・鳴花緋女めいかヒメ

歩色町にある梅酒BAR「鳴花ーズ」のバーテンダー。天然のアホの子。梅の精を自称しミコトとは同一人物らしい。見た目は少女だが年齢不詳。月読アイの正体を知っているなど謎の存在。元キャラは鳴花ヒメ。

・鳴花三言めいかミコト

歩色町にある梅酒BAR「鳴花ーズ」のマスター。ヒメの天然に振り回される苦労人。ヒメと思考は近いらしくよく悪乗りする。見た目は少女だが年齢不詳。月読アイの正体を知ってるなど謎の存在。元キャラは鳴花ミコト。

・月読哀つよみアイ

謎の幼女。幼稚園児にしか見えない子供。ぶかぶかの白衣を纏って舌つたらずながらも大人びた論理を展開する。ついなにアクセルドライバーを渡した張本人。きりたんの幸せを慈愛の目で見つめる謎の人物。元キャラは月読アイ。

・有阿緒音ありあおね

水都署刑事。犬の様にすぐ噛み付く。歌姫の衣亞が姉であるが姉妹仲は良好。経験不足な23歳の若者。元キャラはCEVIOのONE

NE | ARIA | ON | THE | PLANETES |

・不破花ふわはな

水都署刑事。オネの先輩。声も低く男性と間違われるがれつきとした女性。ゆかりとはゆかりが子供の頃からの付き合い。結構若い見た目だが年齢不詳。元キャラはVOCALOID3のver.。

・小春こはる六花りつか

潮風高校のJKで情報屋。花梨の後輩。学生関連の情報屋。高校2年生。花梨と共に軽音部所属。ギター&ボーカル担当。元キャラはCeVIO AIの小春六花。

・夏色なつき花梨かりん

潮風高校のJKで情報屋。六花の先輩。高校3年生。六花と共に軽音部所属。ベース担当。元キャラはCeVIO AIの夏色花梨。

・東北至子

代々霊媒師として地位を築いてきた歩色町の名家、東北家の家長。水都にガイアメモリをばら撒いている組織「ミュージアム」の首魁でもある。とあるできごとから妹の純子と弟の蛇門を何よりも優先し溺愛している。テラー枠。元キャラは東北イタコ。

・東北純子

東北家次女。ミュージアムの幹部。ずんだをこよなく愛し、普段はずんだ広報アイドル「ずん子」として活動している。街のアイドルと仲良くしてるらしい。自身を失うと言う恐怖に苛まれているイタコを恐れながらも離れられずにいる。クレイドールとタブー枠。元キャラは東北ずん子。

・東北とうほく蛇門だもん

東北家長男にして未っ子。ミュージアムの幹部。物心ついた頃にある出来事から心を壊した中性的な少年。語尾になのだをつける他、すぐ褒めてくる。純粹無垢。スミロドン枠。元キャラはずんだもん。

・東北とうほく星香せいか

ミュージアムの幹部にしてガイアメモリの売人。水都をこよなく愛してメモリが進化を促すと信じて活動している根っからの仕事人。幹部になると同時に東北家に養子に入って現在の名となった。旧名は京町星香。シャーク・ドープアントに変身する。ナスカ枠。元キャラは京町セイカ。

・東北とうほく奏楽そら

東北家の養子にしてミュージアムの幹部。詳細不明。面白いことが好き。???枠。元キャラは桜乃そら。

——ここからネタバレ注意

●第一章「Wの都」「Mな彼女」の登場人物（Wは水のウォーター、Mは泥のマッドの他にマッド（狂ってる）や憂鬱のメランコリーなど）

・佐藤紗々良

第一章の依頼人。通称ささら。歩色町の千絵美尾大学の院生。突如失踪した恋人のタカハシの搜索依頼しに結月探偵事務所にやってきた。親友のつづみ曰く無自覚なわがまま娘。つづみのものを全て欲しがり得ていたことで最初の事件を招いてしまった。事件後は入院中のつづみにかかりつきりらしい。元キャラはCeVIOのさとうささら。

・鷹嘴飛翔／ホーク・ドーパント

通称タカハシ君。歩色町の千絵美尾大学の院生。突如失踪したとして恋人の佐藤紗々良から搜索依頼が探偵事務所にやって来る。アパレルメーカー「WATER SCALE」の就活で落ちたことでメモリを手にしてしまいホーク・ドーパントに変貌。最終的にマッド・ドーパントに殺害された。元キャラはCeVIOのタカハシ。

・鈴木鼓／マッド・ドーパント

通称つづみ。歩色町の千絵美尾大学の院生。ささらの親友にしてタカハシの元カノ。ささらになんかまでいろんなものを奪われたらしい。マッド・ドーパントの正体であり策略を練ってささらをはめて罪をなすりつけようとしていた。ダブルに敗北した後は入院中。元キャラはCeVIOのすずきつづみ。

・ホーク・ドーパント

『鷹』の記憶を宿したドーパント。風を発生させ高所に打ち上げて落下死させたり、翼で飛翔し鉤爪になつて足で掴んで持ち上げたり、羽を飛ばして攻撃することができる。両腕が翼になつて人型の鷹の様な怪人。正体は鷹嘴飛翔。鼓に唆されてメモリを購入し自分

を不合格にしたアパレルメーカー「WATER SCALE」の関連会社を襲って復讐していた。モチーフはシヨツカーグリードとタカメダル。

・マツド・ドーパント

『泥』の記憶を宿したドーパント。自らの肉体を泥化して敵の攻撃を受け流したり、泥を取り込んで巨大化したりできる。片目が潰れていて両掌が異様に大きい泥の人型の様な姿の怪人。正体は鈴木鼓。これまで幼馴染のささらに何度も何度も無意識に奪われてきた恨みからメモリを手にしてささらに彼氏たちを殺してきたが、タカハシとよりを戻そうと意気消沈の彼にメモリ売人を紹介し、負けると口封じで殺害した。ささらにをドーパントだと陥れたうえで殺そうとする。モチーフは泥田坊と新パルテナの鏡のドロドロン。

・シャーク・ドーパント

『鯨』の記憶を宿したドーパント。ノコギリザメを模した鋸剣と、剣から飛ばす鋭い歯の様な弾丸が武器。水中戦を得意としており水中ではホオジロザメ・シユモクザメ・ノコギリザメの特徴を持った形態に変形する。重装備の青い騎士の様な姿で一見ヒーローにも見える。内側に牙が付いているフードの様なパーツの中にWを描く騎士の様な顔があり、胴体はYの形のプレートアーマーが特徴的な青い西洋鎧風。また、サメフードで直接噛み付くことも可能。使用するメモリはシルバーメモリ。変身者はメモリ売人のトップにして東北家の養子、東北星香。モチーフはバイオハザードリベレーションズのスカルミリオーネとディケイドのアビソドン及びアビス+ナスカ・ドーパント。

●第二章「Dの微睡」の登場人物（Dはダンデライオンの他に医者
のドクターや乾燥のドライ、乙女のダムゼルなど）

・猫村ねこむら彩羽いろは

第二章の依頼人。水都総合病院の研修医。小児科で研修している子供好き。天才ゲーマー「いろはにほへと」であり、きりたんと何度

もネット対戦していた。輝く病室の噂の正体その人。キャラモチーフは宝生永夢。元キャラはVOCALOID2の猫村いろは。

・蒼姫ラピスそうきらびす

水都総合病院内科の看護師。彩羽の面倒を見ていたが、変死体として発見される。不眠症で美来の患者だった。元キャラはVOCALOID3の蒼姫ラピス。

・葉常海斗はつね かいと

水都総合病院の天才外科医。美来の兄で芽衣子の恋人。夏だろろがマフラーをつけている変人だが天才の名に恥じない執刀をする。妹の犯行を知っていた。キャラモチーフは鏡飛彩とブラック・ジャック。元キャラはVOCALOID無印のKAITO。

・阪井芽衣子さかい めいこ

水都総合病院の監察医。海斗の恋人。とんでもない酒飲みで医者
の風上にも置けないが腕は確かという変人。キャラモチーフは九条貴利矢。元キャラはVOCALOID無印のMEIKO。

・葉常美来／ダンデライオン・ドーパントはつね みく

水都総合病院の精神科医。いつも眠そうにしている長い黒髪のツインテールが特徴の年若いドクター。東北家の主治医もやっている。ダンデライオン・ドーパントの正体であり、どんなに手を尽くしても救えない精神病で苦しんでいるのを見かねて死という救済を与えて自身の患者を救おうとした狂気のドクター。キャラモチーフはドクター・キリコ。元キャラはVOCALOID2の初音ミク。

・ダンデライオン・ドーパント

『蒲公英』の記憶を宿したドーパント。白いふわふわした鬣を生やして黄色い牙が特徴の雄ライオンの様な巨大な顔から鋭い爪しか特徴がない胴体が生えている滑稽な姿をしている。緑色のギザギザした翼を生やして飛ぶことが可能。最初はライオンのドーパントだと思われていたがタンポポのドーパントであり、黄色い牙は花卉を模していて緑色の翼は葉っぱ、鬣は綿毛。綿毛の鬣を飛ばして目くらましして逃げながら、綿毛がくっ付いた人間から生命エネルギーを奪ってタンポポの花を生やさせ、それを食べることで殺害していた。溜め込

んだ養分で己を強くすることが可能。変身者は水都総合病院の精神科医、葉常美来。

・アルテミス・ドーパント

『月女神』の記憶を宿したドーパント。三日月を模した盾にもなる平べったい弓を左腕に装備している、熊の毛皮の様な装甲を上半身に纏い猟犬の毛皮のスカートを身に着け、足が鹿の様になっている女性の様な姿。目元は熊の頭部の様なバイザーで隠れており、標的をロックオンし弓を振るうことで百発百中の光の矢を飛ばすほか、引き絞って強力な強弓を放つことができる。さらに猟犬の毛皮を分離することで実体化して標的を追い詰めることが可能。使用するメモリはゴールドメモリ。変身者は東北家の…。

●第三章「Eは極楽」「Gの道の果て」の登場人物（Eはエルドラドの他に耳のイヤー、Gはギロチンの他に黄金のゴールドや外道など）

・有阿衣亞

第三章の依頼人。風都の歌姫「IA」。緒音の姉でもある。エル・ドラードに襲われたところをゆかりに助けられ、護衛を依頼する。元キャラはVOCALOID3のIA | ARIA | ON | THE | PLANETES |

・北村莉奈

衣亞のマネージャー。黒髪をポニーテールにしたスレンダーなメガネをかけた女性。おつちよこちよいのドジツ子で頼りない。実は呪怨キクの変装であり、北村莉奈という人間は存在しない。元キャラはVOCALOID3のCUL。

・リリイ金堂／エルドラド・ドーパント

本名、金堂百合。ガイアメモリマフィア「エル・ドラード」のリーダーでミュージアムのスポンサーの一人。派手好きで傲岸不遜な金髪ロングヘアで碧眼の美女。エルドラド・ドーパントであり、美しいと思う物を黄金化して自身のコレクションにすることで永遠に失わせないことを目的とするが、これは幼少期に実家の金堂コンツェル

ンが倒産し美人だった母がストレスで病死、父は首つり自殺で変り果ててしまったことに起因する。実はゴールドメモリの毒素を直接その身に受けていたが適合したためピンピンしていた。

マネー・ドープアントとして金を稼いでいた時期が存在し、その頃にエル・ドランドを作りキクと出会い部下を増やしていった。西友など心酔している部下が何人もいたがマスカレイドだったためほとんどが戦死している。

キクの裏切りで首を断たれて海に沈み死んだかと思われていたがそれは金で作った偽物であり、本人はマスカレイドになって潜伏していた。元キヤラはVOCALOID2のlily。

・呪怨キク／ギロチン・ドープアント

ガイアメモリマフィア「エル・ドランド」の副リーダー。深紅のロングヘアで般若の仮面を被った、白い男物のスーツを身に着けたスレンダーな女性。その正体は北村莉奈…を名乗っていた名無し。どこかの街の捨て子で、マネー時代のリリイと出会いその輝きに魅入られてエル・ドランドに入りその腹心となる。首を断つことで自分と同じ名無しになるギロチンに気に入りメモリを手にした。ダブルとの交戦時、リリイを裏切りエル・ドランドのリーダーになったが、黄金の輝きに魅入られて「自分が生きた証」を歴史に刻みこまんとしたため。リリイも自分と同じ名無しにしようとして首を断つたが出しぬかれ、しかしその足掻きようを美しいと称されリリイに黄金にされてしまった。元キヤラは初音ミクの亜種、呪音キク。

・西友／アイスエイジ・ドープアント

ガイアメモリマフィア「エル・ドランド」の構成員のまとめ役。リリイに心酔していてそのためなら捨て駒にされても構わない狂信者。生体コネクタは左手の掌。ダークブルーのスーツに金色のネクタイ、青いサングラスをかけて帽子は被らず飛び跳ねた様な髪に一本だけ入れている金メッシュが特徴の、リリイにもらった大きな青い宝石付きな黄金の指輪を左手の人差し指に付けている年若い男。キクが覇権を得てからもリリイに付き従い仮面ライダー以外を排除していたがついなど遭遇したことにより敗北した。逮捕時にもリリイを助けよ

うと暴れてたしなめられたらしい。

・エル・ドラード構成員

マスカレイド・ドーパントに変身する他、上級構成員はバイオレンスやマグマやコックローチなどにもなる。黒服帽子にサングラス、金色のネクタイが特徴。

・エルドラド・ドーパント

『黄金郷』の記憶を宿したドーパント。王冠を被った黄金の髑髏の様な顔に、まるで城か宮殿の様な黄金の装甲で上半身を包んだ金色の骨の様な腕と、黄金のピラミッドの様な形状の硬質な腰布(?)から伸びた金色の包帯を巻いた金色の骨の様な形状の足が目立つ姿をしている。触れた物を金にする他、金を自在に操り武装することで己を強化することが可能。質量があれば分身を作ることでもできる。金にするものがない空中や水中ではほぼ無力となる。変身者はガイアメモリマファイア「エル・ドラード」のリーダー、リリイ金堂。ゴールドメモリでありながらドライバーを介せず使用していたため毒素による汚染が強いがリリイは普通に耐えていた。モチーフは王様と黄金髑髏とピラミッド。本家Wにおけるユートピアの立ち位置のドーパント。

・ギロチン・ドーパント

『断頭台』の記憶を宿したドーパント。罪人の様に口輪を付けた深紅の長髪の犬の様な顔で首枷をはめた、全身黒い包帯に包まれているがまるで死体の様に真っ白で長い四肢は露出していてだらんと伸ばしてゆらゆら揺れている異様な姿。両脚の間に出現させたギロチン刃を稼働させてその反動で跳躍したり、両腕をギロチン刃にしてどんなものだろうが斬り裂く切れ味を誇る。奥の手として全身に刃を生やすことも。変身者はガイアメモリマファイア「エル・ドラード」の副リーダー、呪怨じゅおんキクキク。モチーフは罪人と処刑執行人、ワンピースのダズ・ボーネス。

●これまで使用したオリジナル技

・フアングムーレンエッジ

フアングジョーカーのアームセイバー装備時にルナメモリを腰のマキシマムスロットでマキシマムドライブすることで発動。アームセイバーが伸縮して三日月の様にダブルの身体を囲むように展開して周囲の敵を斬り裂く。

・フアングスピニングサイズ

フアングジョーカーの通常時にメタルメモリを腰のマキシマムスロットでマキシマムドライブすることで発動。背中にメタルシャフトを装備して両端に逆を向いた刃が出現し鎌状になったそれを手に取り振り回し触手を全て斬り払い、防御壁だろうが容易く斬り裂くシャフトの乱舞を行う。

・フアングバーンザッパ

フアングジョーカーのシオルダーセイバー装備時に腰のマキシマムスロットでヒートメモリをマキシマムドライブすることで発動。シオルダーセイバーを手に取り炎を纏い熱を刃に集中させて投擲、綺麗な弧を描いて相手の防御をバターの様に斬り裂き、突撃して戻ってきたシオルダーセイバーを手に取り跳躍、縦一文字に斬り裂く。

・フアングシヨットレイザー

フアングジョーカーの通常時にトリガーメモリを腰のマキシマムスロットでマキシマムドライブすることで発動。左胸に出現したトリガーマグナムを左手に持って剃刀の様な弾丸を飛ばす。剃刀の弾丸。

・フアングヘブンストルネード

フアングジョーカーの通常時にサイクロンメモリを腰のマキシマムスロットでマキシマムドライブすることで発動。バク転して両手を床について回転、ブレイクダンスの様な動きで竜巻を発生させ、風の牙を放って周りの敵を一掃する。元ネタは原作コックローチ戦のダンス。

・フアングバインドトラップ

フアングジョーカーのシオルダーセイバー装備時に腰のマキシマムスロットでルナメモリをマキシマムドライブすることで発動。複

雑な軌道を描くシオルダーセイバーの軌跡が金色の線として実体化、複雑な軌道の黄金の蜘蛛の巣を作り上げ相手を拘束する。

・フアングネイルブラスト

フアングジョーカーのシオルダーセイバー装備時に腰のマキシマムスロットでトリガーマモリをマキシマムドライブすることで発動。青い光を纏って鋭く棒状になったシオルダーセイバーをダーツの様に投擲して相手を貫く。

・ツインマキシمام（フアング+ヒート）

フアングジョーカーでタクティカルホーンを三回叩いてヒートメモリを腰のマキシمامスロットに装填して発動。炎を纏ったフアングストライザー。黄金すら溶かす絶大な威力は使用者に火傷、骨折などの反動を与える。

●水都市

北に歩色町、南に歩歌路町が存在する海辺の地方都市。風車や水車など自然エネルギーを基軸としたエコロジーな町で町中に張り巡らされた水路に繋がる町を中心に存在する巨大な風車「水都タワー」や万宵川の河口にかかる水都大橋が主な観光名所。名物はずんだ餅で専門店まである。

歩色町は歩くたびに色づいて行くカラフルな景色が美しい港町で、水都タワーや継星探偵事務所、梅酒BAR「鳴花ーズ」に喫茶店「弦巻」、千絵美尾大学や水都警察署、水都総合病院や琴葉神社、水都アウトレットモールや東北家の屋敷などがある。

北の歩色町とは万宵川を挟んだ南にある歩歌路町はサブカル面に秀でた場所で、音楽祭などがよく行われ、埠頭やらビル街が目立つ。水都第二屋外ステージやエル・ドラードの倉庫、IT企業イディガル・コーポレーションの他、水都市民ホールなどがある。

復讐鬼A

第十三話：復讐鬼A／路地裏の殺人鬼

水都の路地裏にて。深紅の血溜まりの上で、狂笑を浮かべるドーパント。

「血祭りだ…血の海だ…水都を血で染めてやる…」

跳躍してその人物が去った血溜まりの中には、滅多刺しにされた遺体が浮かんでいた…。

翌日、通報を受けてやってきた有阿刑事と不破刑事を始めとした水都署の警察たちは凄惨な現場に辟易としていた。

「今回で血だまり殺人は二件目か…大丈夫かい、緒音。復帰早々な事件だけど」

「心配は結構つす、不破先輩。しかしまさか水都でこんな事件が起こるなんて…」

「緒音が休んでた間に起きた事件と同一犯だろうね。ドーパントの事件でもここまでなのは早々ない」

血だまりの中に沈んだ惨殺死体。しかも顔がわからないぐらいにグチャグチャにされている。相当な恨みがあったのだろうか。すると路地裏の入り口から警官の制止も聞かずにずかずか入ってくるゴルフバッグを抱えた少女がいた。少女は血塗れに沈んでいた遺体から金のバッジを手袋に包んだ手で摘み上げると取り出した透明な袋

に入れて封をする。

「なんや血生臭いなあ。やっぱりこの街は嫌な風を運んでくるわ」

「な、何だところの餓鬼！」

「待て、緒音。…貴方はまさか」

その少女、ついなに食ってかかる緒音を止める花。頭に浮かぶは今朝の辞令。少女は警察手帳の様な物を取り出すと中身を見せると、警視の二文字が目立つ。

「うちは国家特別捜査官の方相氏ほうそうし、如月追儼きざらぎや。水都署の皆さん、よろしゅう頼みます」

「け、警視いいいいい!?!」

狭い路地裏で緒音の絶叫が木霊した。

エルドラド事件から一週間も経たないこの日、継星探偵事務所には珍しい客が来ていた。

「はあ、国家特別捜査官で方相氏…?方相氏って鬼は外一ってやるあの?」

「その方相氏や。なんや姉ちゃん、詳しいのう。簡単に言うとな国に認められた怪奇事件専門の捜査官や。警視という階級と権限はあれど純粋な警察やない。その街の警察に許可取らんと逮捕することもできひんしな」

そう説明するのはいきなり押しかけてきた高校生にしか見えない

少女、如月追儼。こう見えて花さんより偉いらしい。

「あー！思い出しました！あなた、たしかこの間のエルドラドの事件の時に事務所の前から跳躍してビルに跳んでいた人！」

「は？…あー、あかりが騒いでたやつですか。寝ぼけてたんじゃ」

「あ、それはうちやな。間違いない」

「いやどう聞いても人間業じゃないんですけど。まあいいや、それでご依頼とは？」

「警察じゃ頼りないから連続殺人鬼を捜す手伝いをしてほしいんや」

「いや頼りないって貴方の組織じゃ…」

「うちは外部の人間やからな。国に仕えはしとるけど、警察は頼りにならん。超常現象を信じもせんからな」

「…水都署の刑事たちはドーパント事件に慣れきってるのでそんなことではないと思いますし花さんは頼りになりますよ」

水都の警官達を馬鹿にされたと思つてムツとして言い返す。この如月追儼とやらからは水都を侮っている節がある。…いや、あの表情から感じるのは嫌悪だろうか。

「そうかい。そう言うなら頼らせてもらうわ。でも今はこの事務所にいる検索娘の力を借りたいんや」

「なんできりたんのことを…？」

「そんななんどうでもいいやろ。はよ出さんかい。隠すのも時間の無駄やで」

「…生憎と怪我人なんです。捜査は私が…」

「私なら大丈夫ですよ」

怪我人なのもあつて断ろうとしたが、当の本人が隠し部屋から顔を出した。ゲームできないからと寝てたんじゃありませんかね…。

「きりたん、安静にしとかないと…」

「当分戦えないってだけなので検索ぐらいは大丈夫です」

「そらよかった。早速力を借りるわ」

「あ、勝手に…」

「知りたいのは犯人の手掛かり。まず最初は「歩歌路町の路地裏」や。そこで連続殺人が起きた」

止める私とあかりを無視して検索を始めるきりたんと如月追儼。

「次に…このバッジや。水蓮と風車のマークが刻まれてるな」

「それは多分、潮風高校の校章ですね。私とあかりの母校です」

如月追儼の取り出した証拠品の中身を見てそう言ってみるときりたんが頷く。

「確かに歩歌路町の潮風高校の校章ですね。こういうのは私の検索よりゆかりさんの方が詳しいかと。検索で出した結果は被害者はどちらも共に潮風高校の二年生。名前は明峰春と沖田寝郎あきね はる おきた ねろうですね」

「助かったわ。あとはこちらで調べる。依頼したんやから手伝ってくれるよな？ 結月」

「いやまあ協力しますけど…」

「あ、私も行きますよ！」

如月追儼とあかりと一緒に潮風高校に向かうことになったが、なんか釈然としない。

「あれ、ゆかりさんじゃん。どうしたの？」

「またなんか事件？」

潮風高校にやってきて如月追儼と別れて聞き込みしていると、六花と花梨と出会った。そう言えばこのJKだったなこの二人。今は夕方。二人もいまから帰るところだったらしい。

「ちようどよかった。明峰春と沖田寝郎について話が聞きたいんですけど」

「あ、その二人なら私の同級生っす」

「確か数日前から行方不明だっつて話だったわよ」

六花の同級生。これは如月追儼を出しぬけるかもしれませんね。

「同級生ですか。どんな二人だったんですか？」

「まあ普通の子たちっす。強いて言うなら…真面目な二人だったかな。よくうちのクラスの不良に注意していました」

「その不良とは？」

「おんね遠祢理奈さん。女の子なのに特攻服を着てるこわーい人です」

「誰が怖いっつて？」

「ひえっ」

後ろから話しかけられて背筋を伸ばす六花。振り向くと、白いズタボロなコートの下にセーラー服を着た、赤い大きなリボンが特徴のアルビノの少女が立っていた。彼女が遠祢理奈か。近づくなオーラが凄い。

「小春六花、お前が人に陰口をたたく輩とは思わなかったよ…」

「い、いやそんなつもりは…」

「夜道に気を付けな…クククツ、ギヤツ」

「なにがクククツだ、いい加減にしろ」

すると悪い笑みを浮かべていた理奈さんの後ろから灰色のシャツ

と青いネクタイ、黒いズボンを着た色素の薄い黒髪の、煙草を吸った男の人がやってきてきてチョップ。頭頂部をどつかれた理奈さんは怒りに顔を歪ませながら怒鳴り散らした。

「なにしやがるクソ親父!」

「友達は大事にしろ。まったく…頭が痛いぜ」

どうやら父親らしい。私が見ていたことに気付くと煙草を取りながら会釈してきた。

「遠祢照おんねっていいいます。こいつの父親です。何かご迷惑をおかけしましたか?」

「い、いえ。なにもありませんでしたよ。むしろこっちの六花が悪口言ったのが悪いと言うか…」

「ええ!?私、こわいって言っただけっすよ!」

「本人の目の前ではどうかと思います…」

「失礼なのは変わらないわよ、馬鹿六花」

私とあかりと花梨に総ダメだしされて涙目になる六花。理奈さんが中指を建てようとして照さんに殴られた。

「ご、ごめんね理奈ちゃん…」

「…ふん。さっさと帰るぞ、馬鹿親父」

謝る六花に対しそっぽを向く理奈さんは照の手を引いて校門まで向かって行った。…なんかすごい子でしたね。

「で、あれが?」

「うん、アルビノで体調をよく崩すから父親がよく迎えに来るっす。

あのお洒落?もアルビノが関係してるとか」

「なるほど…」

今のところ被害者と接点があるのは彼女だけだ。…一応念のため、かな。

「あかり、ここに残って聞き込みを続けてください。私は二人を送り届けます。六花と同じクラスの学生が被害者ですし」

「え？あの二人、なにかあったんですか？」

「…もしかして、最近起きてるあの事件？」

「そういうことです。あかり、後は任せます」

「わかりました」

あかりを置いて潮風高校を後にし、二人を連れて歩歌路町を歩く。もしものときは二人を逃がして、ダブルに…ですかね。バットショットとかをいつでも使えるように準備しときましよう。

「ゆかりさん、春と沖田が殺されたって本当なんですか？」

「はい、残念ながら…」

六花に聞かれて答える。きりたんがそう言ってたから間違いないだろう。何時もならカラオケやスイーツ屋に寄り道する二人も今回ばかりは怖がっていた。そう言ってるうちに商店街に入る。事件があったからかほとんどの店が閉まっていてゴーストタウンの様だ。この近くでも犯行があったらしいから気を付けないと…。

「ね、ねえ…あれって」

「っ、キヤアアアアアア!?」

二人の一步後ろを歩いて警戒していると、路地裏の入り口に差し掛かった二人から悲鳴が上がる、慌てて二人を守るようにその前に出ると、血の海となった路地裏にそれはいた。

「…はあ、見られるとはな。頭が痛いぜ」

誰かの亡骸の頭部を踏みつける細身の人型で、女性を思わせるマネキンの様な顔で、全身に黒いぼろ布の破片を身に纏っているが、その下は白のナース服とドレスを合わせた様な意匠かと思えば、警官を思わせるズボンの意匠の足の先はハイヒールを履いていて女性の様だが、両腕は太く男の様で右手首に腕時計を付けて左手には短剣を握っている。高い女の様な低い男の様な不思議な声だ。つぎはぎの様な謎のドーパントだった。

「見られたからには死んでもらうぜ…」

「させません!」

《スパイダー!》

ドーパントは消極的な態度でこちらに向かって来て、私は咄嗟にスパイダーシヨックにギジメモリを装填してライブモードにすると路地裏の入り口を塞ぐように蜘蛛の巣状のワイヤーを展開、時間稼ぎする。

「今の内です!早く逃げて警察を呼んでください二人とも!」

「で、でもゆかりさんは…」

「そうだよ!一緒に逃げよう!」

「私なら大丈夫です!ほら、早く!」

二人を説得して逃がして、見えなくなったことと周りに人がいないことを確認するとダブルドライバーを取りだして腰に装着してジヨーカーメモリを取り出す。

《ジヨーカー!》

「ちっ、ござかしい…お前、仮面ライダーか」

「知っているなら話は早いです。変身!」

《サイクロン！ジョーカー！》

転送されてきたサイクロンメモリと共にジョーカーメモリを装填してドライバーを展開、ダブルに変身して突撃する。ドーパントは短剣でワイヤーを斬り裂くと長い脚を曲げて跳躍、近くの店の屋根に飛び乗ると壁を蹴ってこちらに向けて突撃、ハイヒールによる飛び蹴りを行ってきた。

「でやあー！」

風を纏った右足を振り上げて迎撃。すると奴の身体から靄が広がってその姿が掻き消えたかと思うと背後から斬撃を受けてよろめいてしまう。

「瞬間移動!?!」

『何のメモリですか!?!』

「仮面ライダー、この程度かよ…頭が痛いぜ」

そう言つて右手を掲げるドーパント。その手首についてる腕時計が変なことに気付く。長針しか…ない?と思つた次の瞬間、腕時計から飛び出るようにして長針が長剣として奴の手に渡る。あの短剣は短針か…いや、本当に何のドーパントですかこれ?」

「お前の身体も血に塗つてやるぜ…」

《メタル!》

「それは勘弁ですねっとー！」

《サイクロン！メタル!》

長針と短針を構えて同時に振り下ろしてきたので、サイクロンメタルとなりメタルシャフトで受け止め弾き返す。すると長針と短針を合体させてダブルセイバーにしてくるドーパント、跳躍して商店街の

店の壁を跳躍しまくったかと思えば靄に包まれ瞬間移動するのを繰り返すと不規則的に死角から斬撃を繰り出すのを繰り返し、反撃する暇がない。

「くっ…」

「なかなか傷つかないな…どういふ身体をしてるんだ？」

『メタルでこのダメージはやばいですね…』

骨まで響く一撃が何度も何度も叩き込まれる。こんな一般人が受けたらひとたまりもないだろう。どうしたものかと攻めあぐねていると、足音が聞こえてきた。まさか一般人が!?!と振り向くとそこにいたのは、ゴルフバッグを担いだ如月追儼だった。

「こっちに来たんやな。潮風高校で次の事件が起こると思ったが外れたかあ。なんや、路地裏になんか恨みでもあるんか？」

「如月追儼!?!なんでここに!?!」

『危ないですよ!?!』

「なんか文句があるんか結月。うちに質問するなやボケ。うちも混ぜろ言うてんねん」

そうやってゴルフバッグからバイクのハンドルのようなものを取り出して腰に取りつける如月追儼。するとベルトが展開されて腰に巻かれ、懐からAと書かれた紅いメモリを取り出す如月追儼…って!

「ガイアメモリ!?!」

『しかもあれは私達と同じ…』

《アクセル!》

「変…身!」

《アクセル!》

そしてメモリをバックルに装填したかと思えばハンドルを捻り、如

月追儼は無骨な紅い戦士へと姿を変えていた。青い複眼と背中、両足に付けられてるタイヤが特徴的だ。身長は私より大きくなっている。嫌味か。

「仮面ライダー…アクセル。さあ、振り切るで！」

「その赤い体をさらに染め上げて…ぐあっ!？」

ゴルフバッグから今度はメカメカしい剣を取り出して握ると足のタイヤを回転させて凄まじい速度でドーパントに突撃、逃げる間もなく斬撃を叩き込む如月追儼改めアクセル。ドーパントは瞬間移動で対抗するが逃げた先にアクセルが追いつき斬撃を叩き込んでいく。

「はああ、嫌な奴だな。頭が痛いぜ」

「無駄やで」

《エンジン!》

跳躍して翻弄しようとするドーパントに対し、アクセルは取り出したEと書かれた銀色のメモリを剣を中折れ式リボルバーの如く折ってそこに現れたスロットに装填。剣を元に戻して持ち手の引き金を引いた。

《ジェット!》

「飛んで火にいる殺人鬼ってなあ！」

「ぎゃああ!？」

そして剣を振るうと跳躍していたドーパントに切っ先からエネルギー弾を超高速で射出して迎撃。叩き落とすと再び引き金を引いて突撃するアクセル。

《エレクトリック!》

今度は電撃を纏った刃で斬り裂き痺れさせてダブルセイバーを落とさせるとグーパンチを叩き込んで怯ませ、エンジンブレードの柄でどつくアクセル。突然の喧嘩殺法に狼狽えながらも果敢にハイヒールの足で蹴りを入れるドーパントだがアクセルは回転していなして回避。ダブルの複眼がまた引き金を引いた瞬間を目撃する。

《スチーム！》

「ぐあああああ!?!」

すると今度は刀身から高温の蒸気を噴射、ドーパントの絶叫が木霊する。たまらず跳躍して逃亡するドーパント。

「これでとどめや。って、待てや!?!」

とどめを刺そうとしていたものの蒸気が晴れて逃げたことに気付くアクセル。私達はスタッグフォンでハードボイルダーを呼んでいると、目の前でとんでもないことが起きた。

「ほな、これや。逃がさへんで〜!」

『「ハアア!?!」』

アクセルがドライバーのハンドルを両手で握って外したかと思えば変形し、少々歪なバイクへと変形してしまっただかと思えば凄いですピードで走って行ってしまったのだ。とりあえずとやってきたハードボイルダーに乗って追いかける。

「な、なんなんですかあのライダー名乗るバイクになる変態!」

『「久々にゾクゾク来ましたよ!」』

「だあれが変態じゃボケ! 右の方がよっぽど変態やろがい!?!」

追走していると律儀にツツコミが飛んできた。人の形をしてない

ものから当たり前にツッコまれて違和感が凄い。なにこれ。

「連続殺人鬼だけは…うち、ぜーったい、逃がさへん！」

トーンの違う真剣な声が聞こえて来たかと思えばアクセルは後部のマフラーから炎を噴出して跳躍、商店街の屋根を走っていたドーパントに激突。もみくちやになって路地裏に落ちて行く。

「終わりや、覚悟せい」

《エンジン！マキシマムドライブ！》

追い付くと、人型に戻って再度剣にエンジンメモリを装填して引き金を引いてるところが見えた。靄に包まれ逃げようとするドーパントを逃がすかと言わんばかりに、A字に軌跡を描いて斬り裂くアクセル。

「ダイナミックエース。絶望がお前のゴールや」

そして爆散。大爆発が路地裏を飲み込んだ。私達は変身を解き、爆発が晴れるのを待つ。如月追儼が手にしてる剣は通常装備なのだろうか。すると出てきたのは、換気扇の残骸だった。

「なんやと!?!」

「メモリの所持者は何処に…そこです！」

見れば、路地裏の奥の方に逃げ込む人影。あの瞬間移動で呼び寄せた身代りにしたとでも言うんですか!?!慌てて二人で追いかける。すると「きやつ」と聞こえてきて、角を曲がると危うくその人物にぶつかりそうになった。咄嗟に如月追儼が振ろうとしていた剣を蹴り上げて惨事は回避できた。

「うわ、あぶねえ…あんだ、確か探偵の…」

「たしか遠祢理奈さんでしたね?!今、誰とぶつかりました!？」

「え、いや、糞親父だけ…」

そこにいたのは遠祢理奈。そして逃げて行ったのが彼女の父親、遠祢照だと言われて妙な既視感の正体を知る。そうだ、ドーパントがたびたび口にしてた「頭が痛い」は彼も口にしてた言葉だ。見れば、彼方に逃げて行く遠祢照の後ろ姿が見えた。

「家に帰ってすぐいなくなつて捜してたんだ。あんなに急いでどうしたって…」

「なにを呑気に言うてるんや!お前の父親がメモリ使つて人!殺してるんやぞ!？」

「如月追儼、落ち着いてくださいって!」

転倒して尻餅をついていた遠祢理奈の胸ぐらを掴んで怒号を浴びせる如月追儼を何とか引き剥がす。何が琴線に触れたのかはわからないが、おかげで犯人を逃がしてしまった。

「…自分、父親の名前は？」

「遠祢照、だけ…」

「不破刑事たちに伝えて包囲網を張る。逃がしはせんで…このまま追いかける。お前はどうする?」

「もちろん私も追いますよ」

遠祢照の逃げて行った先へ走って追いかける私達。なんか異様に速い如月追儼に何とか追い縋りつつ、気になったことを聞いてみる。

「…それより如月追儼。貴方は今、剣を生身の人間に当てようとしたね」

「ああん?なにを言いだすかと思えば、それは…」

そう言うのと押し黙る如月追儼。横から見える顔は罰が悪いといった表情を浮かべている。

「…間違いや。ほんまは犯人に…」

「犯人が変身を解いていても躊躇なく斬ろうとしたでしょう」

「あんな殺人をしでかしてる犯人や。ここで止めんでどうする」

「ドーパントでもない人間を傷つけるのは仮面ライダーのすべきことじゃありません！」

「甘い、甘いで。凶悪犯相手にそんな考えが痛い目を見るで。…ほんまに悪い奴はな、加減なんて知らんのや」

何か実感のこもった言葉に何も言えなくなる。結局その日、私達は遠祢照に追いつくことはできなかった。

第十四話：復讐鬼A／歪な親子の絆

水都署に戻った如月追儼と別れて事務所に戻ってきた私。あかりも帰ってきて報告を受けるが特にいじめなどの噂もなかったらしい。電話で確認すれば六花たちは無事帰宅できたようで、その話に裏付けもとれだ。そして未だに冷めない怒りのままに拳を机に打ち付ける。

「ど、どうしたんですかゆかりさん？」

「如月追儼が仮面ライダーで、ドーパントでもない生身の人間に危害を加えようとしたから憤ってるんですよ」

「まさかドーパントでもない人間に危害を加えようとするなんて…あんな人に仮面ライダーを名乗る資格なんて…」

「落ち着いてくださいゆかりさん。今のところ正当性はあちらにありますよ」

私のデスクでゲームをしていたきりたんがたしなめてくるので睨み付けると素知らぬ顔で返してきた。

「今回の犯人の凶悪性と残虐性は疑いようがありません。傷つけてでも止めるべきです」

「でも私が止めなかつたら違う人を…」

「おや、犯人だったらよかつたみたいない言分ですね。貴方も怒りを抱いてたのでは？」

「…そんなつもりは」

「きりたん、その言い方は酷いです」

確かに犯人に言いようもない怒りを感じていたのは確かだ。変身して私の中にいたきりたんにはそれが伝わっていたのだろう。でもだからって、ドーパントでもない人間を傷つけるのは駄目だ。

「いえ、いえ！違う人でも犯人でも、殺したら駄目です。ちゃんと罪を

数えさせて償わせないと。それが探偵である前に…人間がやるべき事です」

「それでこそです、私の相棒。もし仮面ライダーが道を踏み外しそうになったら殴ってでも止めましょう。それが先輩仮面ライダーのやるべきことですよ」

そう不敵な笑みを浮かべるきりたん。先輩仮面ライダー…言われて気付く。仮面ライダーとして間違ったことをしようとしているなら止めればいい、のか。

「…そうですね。でも、その前に。あの殺人鬼を止めましょう。きりたん、検索です」

「よしかったです。キーワードは？」

きりたんが本を取り出すのを見てから、思い出す。男でも女でもない、かと思えばナースにドレスにハイヒールに警官に腕時計とバラバラだった。

「まず一番目立っていた「腕時計」とかどうです？」

「たしかに一つだけ異彩を放ってましたね」

「次に剣…いや、「メス」です」

「そのワードは？」

「時計の針…から変化した二本の剣ですが、形状がメスに見えたんです」

「なるほど。おっ、一気に減りましたね。あと一つ何かあれば…」

あと一つ…逆にありすぎて困るのだが。ええ…。

「話を聞く限りごちゃまぜのキマイラみたいなやつですね。しつちやかめつちやかというか、モチーフが決まってるのかな？」

「ガイアメモリですよ？決まってるわけが…あつ。あかり、そ

れですよそれ。きりたん、最後のワードは「正体不明」です」

「え？」

「なるほど。ビンゴです、ゆかりさん。あかりさんも侮れませぬね」

にやりと笑って本を閉じるきりたん。ガレージまで私とあかりを連れて降りて、ホワイトボードに書き出したのはJTRの三文字。あかりは首を傾げているが私にはピンときた。これでも探偵だ、有名な殺人鬼については知っている。

「JTR…？」

「きりたん、それってまさか…」

「はい。JTRは略語。ジャック・ザ・リッパー…切り裂きジャック。それが奴の正体です」

切り裂きジャック。1888年イギリスのロンドンに出没し、8月末から11月初頭の約二ヶ月の間に中年の売春婦ばかり5人を殺害した、世界で最も有名な^{連続殺人犯}シリアルキラー。メスのような刃物で殺人を犯していた、ぐらいいしか情報がなく、正体不明の殺人鬼と呼ばれている。

「切り裂きジャックは地球の記憶を持ってしても正体不明という特異なメモリです。故に、正体だと言われている娼婦、ナース、貴族、警官…そして呪いの腕時計。これらの特徴を持っているのはそのせいですね」

「呪いの腕時計なんて説もあるのは初耳です。あの瞬間移動や跳躍は？」

「跳躍は「バネ足ジャック」から、瞬間移動は「路地裏で」「神出鬼没」という特性が付与されているためですね。路地裏限定でワープが可能です」

「よく小説とかゲームとかに出ていますよね。ほら、私もやってるFGO (fight/grotesque zero) にもジャック・ザ・

リップー出てますよ！かわいいです！」

「…いやあ、ドーパントの実物を見たらそんな感想出ないと思います」

スマホのゲーム画面を見せてふんすつと興奮するあたりだが、もはやあれはグロテスクの類だ。というかいいな、ホームズとか出てるらしいけどスタツグフォンは対応してないのだ…。

「あとは犯人ですが…：本当に遠祢照なんでしょうか」

「というと？ゆかりさんも見たんでしょう、逃げる姿を」

「ぶつかったという遠祢理奈さんが嘘を吐いたとかでなく実際逃げていたんならその人じゃないんですか？」

「そこです。なんで遠祢理奈さんは路地裏で父親を捜していたのか？犯行を知っていたのか、もしくは…：」

「遠祢理奈が犯人か、ですか」

きりたんの言葉に頷く。その可能性も高いと見ている。根は真面目そうだったが、父親の口調を真似て容疑を自分からずらしたんじゃないかという懸念だ。

「一番の違和感は、角を曲がったらドーパントの変身を解いて照さんが逃げていたことです。逃げるだけなら変身を解かない方がいいのに。そしてそこには遠祢理奈もいた」

「遠祢照は替え玉であると。なるほど…：そう言えばいじめなどの噂は無かったんですけど、理奈さんについてひとつ」

そう言ってあたりはメモを取り出す。

「遠祢理奈さんは常にあの長袖のコートを着ていた他、体育の授業にも理由を付けて一切出なかったそうなんです。それを明峰春さんに注意されたんだとか。でも必要以上に歩こうともしなかったようで…：」

「それってまさか」

「虚弱体質、ですかね。アルビノな上に虚弱体質、さぞ辛いでしょう」
「必死に隠していたそれを何も知らない健康なクラスメイトに注意された……それで殺意が湧いたとか、ありませんよね？」

思わず浮かんだ考えを述べてみると三人揃って押し黙る。

「でも、なんで遠祢照は逃げてるんですかね？」

「娘を庇ってて、遠祢理奈はそれを利用して騙ってたとか……ですかね」
「…虚弱体質」

あかりの質問にきりたんが答えるのを見ながら考える。ふと浮かんだのは、遠祢理奈が犯人だとしてどうやってメモリを手に入れたか。ガイアメモリの相場は高校生に買える程安くない。そして実験としてミュージアム売人に無料で渡されるに於いては、理奈はそもそも虚弱体質故に出歩かない。だとするならば……

「まさか、まさかと思うんですけど。遠祢理奈の虚弱体質を少しでも楽にするために遠祢照がメモリを購入して渡したとか……？」

「もしかしてゆかりさん、そんな彼女が、自分の境遇を知らないクラスメイトに注意されて殺意が湧いて殺人に発展した……ということですか？そんなことが？」

「遠祢照はその負い目から遠祢理奈に逆らえない、と。辻褄は合いますね。……だとすると、如月追儼は間違った相手を狙おうとしている」
「止めなくては。遠祢理奈も、如月追儼も」

如月追儼に依頼された時に渡された番号に連絡を入れるも反応しない。自分を邪魔すると思ったのだろうか。不味い、止めなくては。

「…あの人に頼りますか」

ハードボイルダーに乗った私がやってきたのは水都タワー前公園。そこには今時珍しいガラケーをポチポチ操作している黄色いメッシュが入った黒髪をサイドテールに纏めた少女がいた。

「ネルさん！力をお借りしたい！」

「おや、ゆかりさん。私を頼るってことは相当切羽詰まってるみたいですね」

「…貴方の情報量は高いんですよ」

彼女は昭胤流子、通称ネルさん。ネットの特に掲示板に精通しており9つのニュースサイトの管理人でさらには140のツイッターアカウントを持ち合わせ、着火や火消などを自在に行えるやべーやつだ。普段は家に籠るか気晴らしにこの公園に来ていることが多い。

「欲しいのはアルビノで改造コートを着た少女と、クツソ目立つドリルツインテの女子高生、目つきの悪い寝不足そうな煙草を吸う男の目撃情報です」

「三人もですか？報酬は？」

「30万でどうですか」

「まいどあり♪貴方が有している仮面ライダーの情報でもいいんですけどねえ」

「それは勘弁してください…」

するとバッグからノートパソコンを取り出して凄まじい勢いで打ち込み始めるネルさん。相変わらず速い。すると五分もしないうちに特定したらしく、スタックフォンにメールが送られてきた。

「どうやら男とドリルツインテは同じ場所に、アルビノの少女もそこに向かってるみたいですね」

「助かりました！」

最後の手段だけあって仕事が速い。そしてよりにもよって如月追儼と遠祢照がいるのは歩花路町の路地裏だ。急がないと。

「なんや？はよメモリ使わんかい。このエンジンブレードの錆になりたくはないやろ？」

「っ…」

急いで目撃情報のあつた付近に急行すると、如月追儼がああ剣…エンジンブレードを行き止まりに追い込まれた遠祢照に突きつけていた。ハードボイルダーから飛び降りるなり如月追儼に飛びかかって拘束する。

「なんや!?結月か！まだ邪魔をするんかお前！」

「違います！その人は恐らく犯人じゃありません！間違った人を斬る気なんですか!？」

「なにを証拠にそんなこと！」

「ピンチなのにメモリを取り出そうともしないじゃないですか！」

そう言うとハッと目を見開く如月追儼。そうなのだ、犯人だとしたらメモリを使って抵抗するところだ。なのに遠祢照にはそれが無い。つまり…持っていない。落ち着いた如月追儼から降りながら、逃げようとしていた遠祢照を呼び止める。

「遠祢照さん！貴方は理奈さんのためにメモリを購入し渡した、そしてこんなことになった！違いますか!？」

「な、何故それを……そうだ、俺はあの子のためにとメモリを購入し……理奈は心身ともに怪物になってしまった」

「お前が諸悪の根源やないかい!」

「如月うるさい黙って」

「お、おう」

遠祢照が自白し始めたのに五月蠅い如月追儼を睨んで黙らせる。

「…最初は使おうとしなかったんだ。あの子は理性的で真面目な子だったから…でも、あの子は周りと違うってことに劣等感を感じていて…それを刺激されて豹変してしまった。あの子、手放す様に説得したんだ。でも君達が来て…俺はあの子に言われて逃げることにした」

「でもそれじゃなにも変わりません。貴方は何としても娘さんを止めるべきだった。彼女の替え玉になるのは何の意味もありませんよ」

「…俺は、俺はあの子を守りたかったんだ…」

「なんや、ふざけんな。自分の子供を犯罪者にして責任も親が何言うても響かへんよ」

両膝をついて涙する遠祢照に、またなにかが琴線に触れたのかキレる如月追儼。すると路地裏の通路から足音が聞こえてきた。

「なーんだ、クソ親父を犯人に仕立て上げようと慣れない演技もしたのにはれちまったのか」

そう言いながら現れたのは遠祢理奈。光を失った紅い目はどす黒い血のようで、無感情な顔で悪態を吐く姿が不気味に映る。

「なあ、なんで私をこんな体に生んだんだよ、クソ親父。ここまで来るのも苦しくて苦しくて狂っちまいそうだったよ」

「り、理奈…もう、やめてくれ…」

「やめる？・冗談！私にこれしてくれたのは感謝してるがよ？・もういらねえなあ…クソ親父。私にアンタの血を見せてくれよ…私に生の実感を味わせてくれよ…なあ！親父イ！」

《ジャック・ザ・リツパー！》

そう言つて取り出してつまんだメモリのボタンを押して服を捲つた腹部に出現した生体コネクタに突き刺した遠祢理奈の姿がJTRドーパントに変貌。腕時計の針を二本のメスとして装備して逆手に構えた。

「アハハハハ！気持ちいい。気持ちいいな、この身体は最高だあ！自由に動く！苦痛もしない！最高だ！演技はやめだあ！血を見せろ！赤く染まれ！仮面ライダー共！」

「きりたん」

【《サイクロン！》思つてたよりも手遅れでしたね】

《ジョーカー！》

「ドーパントになったからには容赦しないで」

《アクセル！》

「【変身！】」

「変…身！」

《サイクロン！ジョーカー！》

《アクセル！》

そして私はダブルに、如月追儼はアクセルに変身。背後に瞬間移動してきたJTRドーパントに裏拳を叩き込む。

「ワンパターンなんですよ。貴方は」

「ぐっ…だが甘いなあ！」

吹き飛ばされるなり瞬間移動して背後に現れたJTRドーパントの短い方のメスが私の背中に突き刺さる。生体装甲を貫き、引き抜か

れることで血が流れる。さらに斬撃を浴びて後退する私達。なんで
…!?

「私のメスはなんでも切れる。メタル？ってのはさすがに無理だった
がなあ」

「つう…」

「うちを忘れてないやろなあ!？」

《エレクトリック!》

アクセルが電気を纏ったエンジンブレードで斬りかかり、それを避
けてハイヒールの蹴りを叩き込むJTRドーパント。そのままメス、
ハイヒールと四肢を縦横無尽に動かし瞬間移動を適度に繰り返して
アクセルを圧倒する。

《トリガー!》《ルナ!》《ルナ!トリガー!》

誘導弾をばら撒いてアクセルを援護する。JTRドーパントは自
らに迫る光弾を全て叩き落とし、さらにアクセルの斬撃すら弾くと言
うとんでも芸当を繰り出した。ドーパントになって身体の自由を得
たからか、かなり無茶な動きをしている。あれはドーパントの身体能
力故だけじゃなさそうだ。

「如月追儼! JTRドーパントは、路地裏で比類なき強さを発揮しま
す!」

「つまり、路地裏から出せばいいって話やな。了解や」

《スチーム!》

すると高熱の蒸気を発生させて自身とJTRドーパントを包み込
むアクセル。するとエンジン音が鳴り響き、バイクになったアクセル
がJTRドーパントを轢きながら蒸気から飛び出し、大通りまで運び
込んだ。私達もそれを追いかける。

「ちい！…なに？」

「どうした？瞬間移動せんのか？」

投げ出され、霧に包まれるも瞬間移動しないことに狼狽えるJTRドーパント。やはり、あの強力な力は路地裏でしか発揮されない様だ。人型に戻ったアクセルに殴られ、斬られ、よろよると河川敷に追いつままれていくJTRドーパント。

「嫌だ…嫌だ！私はもう、あんな体に戻りたくない！血だ…血を見せろ！私が生きているという実感をくれえ！」

「生憎と、人殺しの言うことを聞く理由はあらへんな」

《エンジン！マキシマムドライブ！》

「絶望がお前のゴールや」

駄々っ子の様に両手のメスを振り回して突撃してくるJTRドーパントに対し、アクセルはエンジンメモリを装填したエンジンブレードを構え、先端からA字型のエネルギーを放ってJTRドーパントを貫き、爆散。遠祢理奈とメモリの残骸が転がった。

「いやだ…いやだ…メモリがないと私は…」

「そんなにその体が嫌なら解放してやるわ」

「まっ…」

そう言ってエンジンブレードを振り上げるアクセルを慌てて止めようと走るが、その心配はいらなかった。振り下ろされたエンジンブレードは遠祢理奈の眼前の地面に突き刺さる。それで完全に怖気付く遠祢理奈の前で変身を解除する如月追儼が手錠を取り出した。

「命は落としたくないやろ。命が惜しければこのまま大人しくしとくことやな」

「うう……わたし、わたしは……」

「言い訳なら取調室で聞くわボケ」

手錠をかけて遠祢理奈を立ち上がらせる如月追儼に、心配無用だったと胸を撫で下ろすのだった。

あの後、遠祢照も自首した。私達の推理は大体当たっていたらしい。遠祢理奈が苦しんでる姿を見かねた遠祢照がメモリとコネクタ手術を行う拳銃型装置を購入して渡したが、理奈はそれを生来の善性で拒否。しかしクラスメイトから注意されてコンプレックスを刺激され殺意が湧き、メモリに手を出して痛めつけるだけのつもりだったが、血を見たことで生の実感を得てそれを感じるべく殺人を犯した、というのが真相だった……と事務所にやってきた如月追儼が語ってくれた。

「しかし不味いな、このコーヒー。ちゃんと淹れているんか？」

「余計なお世話ですよ。文句言うなら飲むな」

「うちが美味しいコーヒーというのを飲ませてやるわ」

そんなことを言いながら如月追儼……あらためついなさんが淹れたコーヒーはマキさんの淹れたもの並に美味しかった。悔しい。

「で、うちのことは調べたんか？」

「…はい。きりたんに頼みました。氷のドーパントに一年前仲間を殺されたようですね。貴方が殺人鬼を恨む理由は分かりました。です

が、仮面ライダーを名乗るのなら人殺しは駄目です。わかりましたね？」

一応きりたんに調べてもらったついなさんの過去。幼少期に親に捨てられたついなさんにとって唯一の身内だった方相氏仲間を皆殺しにされたらしい。殺人鬼を恨むのもわからないでもない。

「郷に入っては郷に従えやな。わかった、殺人鬼だろうが殺しはせん。

…アイツに関しては断言できひんけどな」

「ちなみに相手のメモリは分かっているんですか？」

「なんの因果やろうな。Wのメモリ。それしかわかつたらん」

「W…」

それはなんとも、運命を感じますね。

第十五話：Eがついて来る／恐怖の足音

その日、珍しい客が事務所を訪れていた。高校時代の同級生だ。

「悪いなあ、ゆかり。それにあかりちゃんも。急に押しかけて」

「いえいえ茜先輩。お客は大歓迎ですよ」

琴葉茜。黒髪に桃色の瞳をした、私が潮風高校の学生だった頃の友人の一人だ。葵さんという双子の妹がおり、当時の潮風高校で二人揃ってアイドルみたいに人気だった。今は歩色町にある実家の琴葉神社で巫女さんをやってたはずだ。マキさんと違って正月の初詣とたまにやつてる飲み会でしか会わない友人である。

「それでどうしたんですか茜さん。この間の飲み会以来ですが」

「楽しかったなあ！また鳴花ーズで飲み会しよな！ってちやうねん。実はな、ストーカーに悩まされとるねん」

「ストーカー、ですか」

それはまあなんとも。高校時代でも何回かありましたね。探偵を気取ってた私がついに仲間と力を合わせてとつ捕まえて解決してましたけど。

「またですか？」

「またやねん。ここ数年は無かったんやけどな。しかもただのストーカーじゃないねん、すぐ真後ろにいるのに影も形もないねん」

「どういうことですか？」

話を聞くにこうだ。数日前、茜さんが熱燭を買いにコンビニに行つて帰路についているとき、背後から足音が聞こえたのだと言う。振り向くと誰もいない、なのに足音は続く。不気味に思つて走ると足音も走つてついてくる。すぐ真後ろまで足音が迫った時、勇気を振り絞つ

て正拳を背後に叩き込んだのだと言う。それが、中空で何かに受け止められる。そこにはなにもない。茜さんは恐怖のままに拘束を振りほどいて神社まで逃げ延びたのだと言う。ちよつとしたホラーだ。

「つまり…透明人間にストーカーされてる？」

「そういうことになるなあ…警察にも相談したんやけど見えない物はどうしようもないって…もう頼れるところはここしかなくて、なあ」「そりやまあ、姿さえ見えないんですからねえ。まあ恐らくドーパントでしょう。わかりました、引き受けましょう。いいですよね、あたり」

「もちろん！茜先輩のためならば全力で捜査しますとも！紺星探偵事務所にお任せを！」

「やった、助かったわ！あれ以降夜に出歩くことすらできなくてなあ…」

手を叩いて喜ぶ茜さんを見てやる気が出る。相変わらず一挙手一投足で他人を惹きつける人である。葵さんが溺愛しているのも分かる気がする。

「とりあえず琴葉神社に向かってコンビニまでの道中を捜査しましょうか」

「よろしく頼むで、ゆかりー！ほんまおおきに！」

そんなわけで私はハードボイルダー、あかりと茜さんはタクシーに乗って琴葉神社までやってきた。風凧樹と呼ばれる風車の様な形状の大樹がシンボルの結構大きい神社だ。茜さんたちの家で先祖代々受け継いできたらしい結構な歴史ある神社である。

「あ、ゆかりさん。ご無沙汰してます」

「おや、伊織君じゃないですか」

そこで境内を掃除していたのは弓弦伊織君^{ゆづるいおり}。銀髪を鈴で纏めてい
る特徴的な髪型のフリーターで琴葉神社でアルバイトしている男性
だ。たまに茜さんと葵さんが飲み会に連れてくるので顔見知りだ。

「伊織君、葵はどした？」

「葵さんならどこかに出かけましたよ。お姉ちゃんがゆかりさんを頼
るならーとか何とか言っていました」

「葵さんは相変わらずですねえ」

思わずあかりと揃って苦笑い。葵さんの茜さん好きは変わらない
様だ。ストーカーに遭うたび犯人をボコボコにしようとするので止
めるのが大変だった記憶がある。

「とりあえず、茜さんが通ったコンビニまでの道中を調べましょうか」

「ですね。茜さん、私達を守るので案内してください」

「案内するまでもないと思うんやけどなあ」

茜さんに案内されるまま、徒歩でコンビニまでの道中を進む。バッ
トショットで気になるところを撮りつつ、スパイダーショットをライ
ブモードにして辺りを探らせる。しかしなにも見つからない。

「きりたんが目に見えない敵用のガジェットの設計図を以前手紙でも
らったので作ると言っていました、それ待ちですかね」

「え。誰から設計図をもらったんですか？」

「ダブルドライバーを作った人だと思いますよ。声しか知りませんけ
ど」

「ええ!？」

運命のあの日、始まりの夜^{ビギンズナイト}。私を置いてきりたん救出に向かったお
やっさんが置いて行ったトランクケース。ダブルドライバーが入っ
ていたそれをおやっさんに送り届けるように電話で指示したのがそ

の人物だ。女だと言う事と意外と幼い声という事しか知らないが、ダブルドライバーを制作した人物であろうというのがきりたんの推理だ。

「そういえばダブルドライバーがどこから来たのかは私知りませんでした…」

「何時かちゃんと話しますよ。…いつかね」

「なんや、なんの話をしてるんや？」

「ああ、こちらの話です。今のところ怪しいものは見えませんね」

後ろから話しかけてきた茜さんの相手をしながら歩いていると、件のコンビニまで辿り着いた。特になにもなかったですね。

「…おや？」

「どうしました、あかり」

するとコンビニ横の電柱の陰まで歩いて行くあかり。何が見えたのかと思えば、屈んで何かを指差したので見てみる。

「これ、なんででしょう？」

「これは…大きいガム…？」

そこにあつたのはよく道路に吐き捨てられるチューインガムの残骸…を大きく細長くしたもの。電柱の陰に隠れるぐらいの大きさだが、明らかに妙だ。

「うわ、なんや触りたくないなあ」

「同感です。しかし触らないことには…」

とりあえず近くに落ちてた枝を握りツンツンしてみる。予想以上に硬質な反応が返ってきた。

「…これ、ガムと言うよりはゴム…ですかね？」

今度は指で触ってみる。感触はあれだ、車のタイヤのそれ。ゴムです。ねこれ。

「とりあえず回収…したいですね。あかり、コンビニでビニール袋買ってきてください」

「ええー…わかりましたよー」

頬を膨らませて「私不満です」と顔に表しながらコンビニまで歩いて行くあかり。茜も苦笑いだ。

「しかしなんなんでしょうねこれ」

「なーんか見たことあるんやけど、なんやっただけな」

「奇遇ですね茜さん。私もなんか既視感が」

なんだろう、凄い昔から知ってる気がする。この既視感がなにかわかればメモリの正体もわかりそうなものだが。

「ん？」

物音がした。聞こえてきたコンビニの屋根に視線を向けると、何か慌てて隠れた。…あつちから現れてくれましたか。

「あ、ゆかりさん。買ってきましたよ。あと割箸も。これで回収すればいいんですよ？」

「そうですね、あかり。回収して神社に帰りましょう」

「はいー」

無邪気にゴム？の塊をビニール袋に入れて回収するあかり。その

まま三人で歩いて帰路につく。するとやはり、何かの気配が近づいて来ていた。

「ゆかり、あの」

「言わなくてもわかってますよ茜さん。あかり、次の曲がり道曲がったらずぐ走って神社まで向かってください。あとできればついなきんに連絡を」

「え?…まさか?」

「そのまさかです。私が相手します」

「ゆかり、大丈夫なん?」

「心配ご無用。私、探偵ですので」

そんな会話の後に曲がり道を曲がった瞬間、二人は走り出し私はダブルドライバーを取り出し腰に付けて振り向きジョーカーメモリを構える。すると高速でやってきて曲がるなり驚き立ち止まったのは、猫の怪物だった。

「お前…!?!」

「残念ながら私だけです。茜さんに手は出させません」

《ジョーカー!》

ジョーカーメモリを鳴らして転送されてきたサイクロンメモリと共にドライバーに装填。ドライバーを展開してダブルに変身するとまるで怒ったようになにかを取り出すドーパント。金と黒に彩られた、長い金髪と純金の瞳が特徴の細身で人型の黒い毛並みの猫という見た目で、まるで神具の様な金の装飾を身に付けている。手は人の形だが足は猫のそれで、腰からは先端に金の金具がついた尻尾が生えている艶かしい女性のようなそれは、さすがに見たことがあった。

「バステト…のドーパントですかね」

『おそらく。手にしてるのは「シストルム」と呼ばれるマラカスのよう

に振って音を鳴らす楽器ですね』

「ニャア…お前かあ!」

するとシストルムを振ってなにかを放ち、咄嗟に飛び退いた場所のコンクリートを抉り取るバステト・ドーパント。今のは…!?

『恐らく音の刃です。気を付けて』

「ニャアニャアニャア!」

鳴き声を上げながらシストルムを振りまくるバステト・ドーパントの攻撃を必死に避ける。隙がない…!?

「死ね!」

すると攻撃が当たらないことに苛立ったのか、右目を光らせて熱線を放ってくるバステト・ドーパント。そんな伝承ありましたっけ!?

『バステトの瞳はセクメトの逸話に由来して「太陽の瞳」と呼ばれてるのでそれかと!』

「地球の記憶だいぶ拡大解釈されてますね今更ながら!」

『テイラノサウルスが磁力操るんだから今更ですよ!』

熱線に加えて見えない斬撃まで繰り出してくるバステト・ドーパントに防戦一方。どうしたものかと攻めあぐねていると。

《ジエツト!》

「なーにちんたらしてんねん結月!」

「ついなさん!」

光弾という横槍を受けて中断するバステト・ドーパントの猛攻。やってきたのはアクセルだ。あかりがちゃんと呼んでくれたらしい。

「ストーカー事件と聞いとったが、こいつが犯人か？ だいぶ派手なやつちゃうのう」

「恐らくは。とりあえずメモリブレイクして正体を見たいところですが」

「その隙がないと言う訳やな」

バステト・ドーパントは乱入者を確認するなりアクセルに見えない斬撃を飛ばし、私達に熱線を放ってくる。たまらずメモリを入れ替える私たち。

《メタル！》《ヒート！》《ヒート！メタル！》

「でやあああ！」

鋼鉄の防御力と熱への耐性があるヒートメタルとなつてメタルシャフトを回転させて熱線を防御。アクセルはエンジンブレードで見えない斬撃を斬り弾いていた。相変わらず無茶苦茶だ。

「このまま近づいて…！」

「斬る！」

「キシヤー！」

私達はメタルシャフトで熱線を防ぎながら、アクセルは斬り払いながら近づいて行くと臆したのか鳴き声を上げるバステト・ドーパント。すると何を血迷ったのか、シストルムを上空に投げつけた。

「なにを…!?!」

「だがチャンスや！」

『危ない！ 防御して！』

「え？」

きりたんがいきなり叫んだので咄嗟にメタルシャフトを回転させて防御、した瞬間。上空を見上げたバステト・ドーパントの右目から熱線が放たれてシストルムに当たって幾重にも反射。熱線の雨が周囲を襲い、爆炎を発生させ熔解させていく。とどめを刺さんと突進していたアクセルには直撃して吹き飛ばされていた。見ればその重厚な装甲が熔けてしまつて転倒し、動けない様だ。

「ぐああ…」

「せめて一太刀…!」

《メタル! マキシマムドライブ!》

熱線の雨を避けながらメタルメモリをメタルシャフトに装填。回転させて防ぎながら両端に炎を灯し、その推進力で防ぎながら突撃し、懐に飛び込んでメタルシャフトを振りかぶる。

『メタルブランディング!』

「いやあああああ!?!」

そして振りかぶつた一撃がバステト・ドーパントの左腕に炸裂、悲鳴が上がるが横に一薙ぎ熱線が放たれて私達は吹き飛ばされる。

「くっ…:ドーパントは…!」

そして爆炎が晴れるとバステト・ドーパントの姿はそこになく。私達は慌てて変身が解かれたついなさんに駆け寄るのだった。

「途中で助けてくれた刑事さんが重体…:だ、大丈夫なんかその人!?!」

とりあえずついなさんを安全なところに寝かせて救急車を呼んでから神社に戻ると、心配してた様子の茜さんに事の次第を伝えた。困りなうって仮面ライダーを呼ぶまでの時間を稼いでいたら助けてくれた刑事さんが重傷を負った、みたいに。友人たちには私は仮面ライダーと知り合いということにしてる。ちなみに正体不明の爆発事件として噂になつてたらしい。

「結構頑丈な超人なので多分大丈夫。それより、犯人に心当たりありませんか?」

「うちのことを狙つてる奴やろ?...ないなあ、誰かに恨み買った覚えもないし」

「そうですか...そうだあかり、あれをきりたんのところに送つてもらえませんか?」

「あのよくわからないゴムのやつですね。わかりました、では茜さん。また」

あかりを事務所に返し、考える。...バステト・ドーパントは本当に茜さんを狙つていたのだろうか。透明人間の話から茜さんを狙つてゐるものだと考えていたのだけど。すると鳥居の方から茜さんと瓜二つの少女が慌ててやってきた。違いといえば目の色と髪飾りを付けてる向きぐらいだろうか。

「ただいま...あ、お姉ちゃん!?大丈夫だった!?例のストーカーに襲われたりしなかった!」

「大丈夫や葵ちゃん。大丈夫やから安心しい、今回はゆかりが助けてくれたからな。うちは無事や」

「ゆかりさんが?...あ、ゆかりさん。お久しぶりです。お姉ちゃんを守っていたいただいてありがとうございます」

「お礼を言われることじゃありませんよ。私達の仲じゃないですか。あれ?」

すると葵さんがハンドバッグを手にしてるのが右腕だということ
が何故か気になった。確か茜さんと逆で左利きだったような……？

「どうしましたか、ゆかりさん？」

「いや、葵さん左利きじゃありませんでした？」

「え、ああ。ずっと持ってたら疲れちゃっただけですよ」

「なるほど？」

左腕を右手で押さえながら笑う葵さん。……なるほどね？

「じゃあお姉ちゃん、私お昼ごはんを作るね。ゆかりさんも食べて行
きます？」

「あ、ではお言葉に甘えて」

…そういえば、伊織君は何処だろう。もう帰ったんですかね。とり
あえず茜さんの警護のために何日か近くで見張ることになりそうだ。
その間にきりたんが新ガジェットを完成させるといいけど。なんか
違和感がありますね、今回の事件。

第十六話：Eがついて来る／黒猫横切り不吉が来る

「ははは…あおい、おしゃけもってこーい…」

「ふふ、お姉ちゃんったら…酒癖が悪いんだから」

昼過ぎ。リビングで酔いつぶれてソファに横になる茜さんの紅潮した頬を撫でる葵さん。私は事中なので断ったが琴葉姉妹二人して酒盛りを始めてしまったのだ。そして酔い潰れた茜さんと酒に強い葵さんという真逆の姉妹を改めて実感する。双子なのに共通するところが顔と声ぐらいだけというのだからすごい。

「で、茜さんを酔い潰して眠らせたのは何故ですか？葵さん。もしや告白してくれるとか？」

空き缶などを持って台所に向かった葵さんに尋ねてみる。すると片づけていた手をピタリと止める葵さん。普段と違う鋭い目で睨んできた。ストーカーたち…敵対者に向ける目だ。

「…お気づきでしたか。さすが探偵さんですね」

「貴方が帰って来た際に、左腕を庇っていたのですね。あそこは私達が唯一攻撃を与えた箇所だ」

「さすが。あの程度の言い訳は通用しませんでしたか…」

そう言っって壁画の様に猫人間がBの形に描かれた黒いメモリを取り出す葵さん。私もダブルドライバーを取り出し腰につける。

「まさかゆかりさんが噂の仮面ライダーだったなんて。知り合いだなんで、お姉ちゃんに嘘をついてたんですね？」

「自分じゃなくて茜さんになってところが相変わらずですね」

「そして…お姉ちゃんが可愛いからってストーカーになるとは！落ちぶれたか結月ゆかり！」

「え」

【え】

現在繋がっているきりたんまで呆ける葵さんの激昂に目が点になる。えつと…？あれ、私てつきり葵さんが犯人だと思つてたんですが………あれー？

【ゆかりさん、私の知らないところでそんなことを……？】

「違いますから引かないでくださいきりたん！えつと、葵さんが茜さんのストーリーカーじゃないんですか？」

「失礼な！決してそんなことはしないけどするならお姉ちゃんが怯えないようにするよ！」

「え、じゃあ犯人は誰……？」

「しらばつくれるな結月ゆかりお前だあああ！」

《バステト！》

怒りを露わにしながらメモリを右太腿に現れた生体コネクタに突き刺してバステト・ドーパントに変貌する葵さん。かつてないシリウスを感じない変身だ……！

「お姉ちゃんから離れろ！」

「ぐっ!？」

ジョーカーメモリを鳴らす間もなく首を掴まれて持ち上げられ、静かに開けられた玄関のドアから境内に投げ出される。長身の怪人が律儀に扉を開けて出て行くのシチュールなんですが!?あまり人の来ない神社でよかつた!

「お姉ちゃんに付きまとして！お姉ちゃん、心配でここ一週間全然寝れてないんだよ!?絶対に許せない！貯金をつぎ込んで買ったこのメモリでお姉ちゃんを守るんだあ！」

「え、メモリ、買った、ばかり!？」

「お姉ちゃんを害する者は滅びろッ!」

ブンブンブンブンとシストルムを一心不乱に振り回し、見えない斬撃を連続で叩き込んでくるがワンパターンというか一直線というか。明らかに使い慣れてない動きだ。そうなのだ、バステト・ドーパントと戦った時に思ったこと……ある程度使用して自身の特性を理解していた今までのドーパントと違い、初めて使ったかの様に自分の能力を試すような動き、愚直な狙い、つまりはまあ……弱かったのである。火力だけは洒落にならなかったが。まさか、本当に初めて使っていたのか。じゃあ、茜さんを襲ったドーパントは……。

「葵さん、私は犯人では……あぶなっ!？」

【どうやらメモリの毒素が酔いでさらに回って思考回路がおかしくなってるようですね】

「倒すしかないってことですね、わかりやすい!」

《メタル!》

【どうにも締められません……《サイクロン!》】

「【変身!】」

《サイクロン!メタル!》

能力は分かっているので最初からサイクロンメタルに変身、風を纏ったメタルシャフトで音の斬撃を弾き飛ばす。サイクロンは疾風のメモリ。風を取り込み力に変えて風を操る他、マフラーになつてるウインディスタビライザーで風の動きを感知できる。見えない攻撃との相性はいいのだ。

「だったら……!」

すると目からの熱線をシストルムに当てて、シストルムを熱して形状を変化して軽く振るって長剣の様に変形させるバステト・ドーパン

ト。そのまま両手で振り回し、まるで素人の様な動きだが熱された剣身は避けた先の石灯籠を容易く斬り裂いてしまう。

「アハハハ…にやあ！お姉ちゃんに近づく奴は死ねえええッ！」

「洒落になりませんよ!?!」

『熱には熱です』

《ヒート!》《ヒート!メタル!》

ヒートメタルになって耐熱性を得て、メタルシャフトで熱された剣身を受け止める。鏝迫り合いとなるが、バステト・ドーパントは恵まれた体躯によるパワーを押し付けてきて追い詰められ、その右目が光る。ヤバい…!?!

「ニャアアアアアア！」

「あつぷ!?!」

右目から放たれた熱線を、背負い投げの要領でバステト・ドーパントを投げることで回避。しかし境内を大きく削り爆発してしまおう。琴葉神社が滅茶苦茶になってるんですが!?!

「避けるにや！潔く死ね！」

「相変わらず理不尽ですね!?!」

「お姉ちゃんを怖がらせる奴はたとえ友人でもいらないんだから…!」

今度はシストルムの剣をぶんぶん振り回して炎を纏った見えない斬撃を連続で繰り出してくる。でも、通常時より炎を纏ってるぶん見えやすいからウィンディスタビライザーが無くてもメタルシャフトで防ぐのは容易い。とか思ってたらシストルムの剣身に熱線を浴びせて拡散させて放って来てシャフトを回転させて防ぐ。

「時間が経つごとに強くなってる…!」

『これじゃ埒があきませんね。あの武器を奪い取りましょう』

《ルナ!》

「熱線が怖いですが致し方なし」

《ルナ!メタル!》

メモリを入れ替えルナメタルに変身。メタルシャツを伸縮させてシストルムを打ち払い、手放させる。

「にやつ、私の武器?」

「このまま!」

そのままバステトの両腕を縛りあげて全力で引っ張り地面に頭から叩きつける。今がチャンスだ。あとは逃がさないように混乱させよう。

「ぎにやあ?!」

『メモリブレイクです』

《ジョーカー!》《ルナ!ジョーカー!》

「よしきた。少し痛いですよ」

メモリを入れ替えルナジョーカーに変身。そのままジョーカーメモリをマキシマムスロットに装填し軽く叩くと私達は半分に分離し、ルナ側が複数に分身。分身が本体もろとも全て右腕を伸ばしてバステト・ドーパントをビシバシ殴って行く。

《ジョーカー!マキシマムドライブ!》

「にやつ!?割れた!?増えた!?伸びた!」

『ジョーカーストレンジー!』

「ぎにやあああああ!」

そして最後にジョーカー側が強襲。強烈な拳を叩き込んで爆散させた。爆発跡から葵さんと砕け散ったメモリが出てきたので私は変身を解除。葵さんに手を差し伸べた。

「葵さん。大丈夫ですか？」

「うっ…お姉ちゃんの敵の情けは受けない！」

「なんでそんなことになったんですか。私は探偵として動いてただけですよ。なんで勘違いを…」

「え、だって「ぐへへ、茜さんは油断してるな…」みたいなこと言ってたじゃん！だから止めようと思って追いかけたら立ちほだかつてたからゆかりさんだと思って…」

「言つてませんよ!?!」

どういうことだ。そんなこと言つた覚えはない。…つまり、あの場に別の誰かがいた？

「それがまさか、本当の犯人…？葵さん、確認なんですけどそのメモリは今日買った物ですか？」

「そうだよ。お姉ちゃんを守るためにネットで探して、売人に接触して購入して…」

「じゃあやつぱり、葵さんは茜さんを追い詰めてた透明なストーカーじゃないんですね？」

「違うよ!?!私は正々堂々隠れずにお姉ちゃんにくつついていくもん！」

「それはそれで問題なんですがねえ!?!」

葵さんの全力全快な茜さんへの愛にツツコミを入れるしかない。いやまあ、だから容疑者から外してたんですけど攻撃された箇所を庇っていたからまさか？と勘違いしてました。

「…とりあえずメモリに手を出したので警察に自首してください。あ

と器物損害罪で怒られてください。ここも、最初に戦った場所も結構貴方が壊したんですからね」

「それはごめんなさい…」

「ちなみに貴方が倒した仮面ライダーアクセル、一応刑事ですよ」
「公務執行妨害!?!」

うおおおと頭を抱えて唸ってる葵さんは置いていて、推理に戻る。透明なドーパントは別にいる。茜さんのストーカー。あの場にあった。つまり私達がコンビニに向かったことを知ってる人物。…それって一人しかないような。

「葵さん、伊織君から何か連絡は?」

「え?今日は急病で帰りますって連絡はあつたけど…」

「やっぱり、伊織君がストーカーです!今、茜さんは…」

その時、ぽとつと何かが落ちた音がした。周りを見渡すと、玄関から出てきた茜さんの髪飾りが落ちた音だった。しかし茜さんは気にせずふらふらと歩いて…あれ?

「…お姉ちゃん、寝てる?」

「ですよね…まさか!」

慌てて駆け寄ると、ふらふら歩いていたのが何かに抱えられたかのように浮かんで鳥居まで向かっていく茜さん。

「きりたん、もう一人いました!」

《ジョーカー!》

「変身!」

《サイクロン!ジョーカー!》

私は再度ダブルドライバーにメモリを装填してダブルに変身、茜さ

んに手を伸ばす…が見えない何かにぶつかって転倒してしまう。これは…狛犬の像!?

「自分だけじゃなく、他のものまで透明にできるんですか…!?!」

慌てて立ち上がり追いかけると、茜さんをおんぶしたのか目に見えてスピードを増して石造りの階段を下りて行く透明なドーパント。下まで降りると茜さんを透明なナニカに乗せたかと思えば高速で移動していく。車か？

「あ、ゆかりさん!」

「あかり!?!」

ハードボイルダーを呼び出して待つかそのまま追いかけるか迷っていたら、ハードボイルダーに乗ってやってきたあかりに驚く。でもナイスタイミングです。

『必要になるかと思つてあかりさんに頼んでおきました』

「さすがきりたん! あかり、葵さんがバステトのドーパントだったので一応見張つて…」

「私も行く!」

「え、ええ!?!」

葵さんのことをあかりに任せようと思つたら階段の上から跳躍してきた葵さんが後部座席に乗ってきた。あかりはあたふたしてる。

「ほら、早く! お姉ちゃん、逃げられちゃうよ!」

「いや、でも、えっと、あの…?」

『はあ…あかりさん、神社は任せました。行ってきます』

「あ、はい。行ってらっしゃい」

するときりたんが勝手にエンジンを回して走り出してしまった。葵さんが腰に手を回してくる。あーもう、しょうがない！

「いきます！全速力で行くので葵さん、絶対離れないくださいよ！」
「お姉ちゃんの為なら火の中水の中だよ！」

道路に出て一般車をするすると擦り抜けて行く茜さん…もとい透明な車を追いかける。茜さんが横になってるのを見るに後部座席に乗せられているのだろうか。

「もう少し…なっ!？」

次の瞬間、透明な車がすれ違った一般車がいくつか透明になった。ギリギリ、直前まで覚えていた場所から計算して避ける、避ける、避ける。一般車も驚いて停車してるのがブレーキ音から分かる。厄介な能力だ。

「うん?」

透明にされた一般車とすれ違った時、件のゴムの塊が落ちているのが見えた。

「くっ、対向車が邪魔で追いつけない…！」

透明な車は茜さんだけ見せることによって混乱させ、一般車を急停車させて即席の壁にしたり、透明にして妨害したりしてきて中々追いつけない。そうこうしているうちに橋を抜けて南の歩歌路町まで来てしまった。建設中のビルに差し掛かると、透明な車…があるだろう場所から上空に光弾が放たれる。それらは鉄骨を運ぶクレーンを撃ち抜いて爆散、大量の鉄骨が降り注いだかと思えば鉄骨が消えてしまう。

「そんなことまで!?!」

不味い、と思つてブレーキした時にはもう遅く、落ちてきた鉄骨の山に激突し投げ出される。咄嗟に葵さんをキャッチして着地。しかしその間にも茜さんに乗せた透明な車は逃げて行つてしまった。

「やられた…」

「お姉ちゃん…」

私達は悔しさのまま拳を握るしかなかった。

第十七話：Eがついて来る／イカサマスターズ

「仮面ライダーと葵さんを出し抜いてついに茜さんを手に入れたぞ……」

どこかの豪華な部屋にて、大きな天蓋付きベッドに寝かされている琴葉茜を見下ろす大柄なドーパントがいた。青と白と黒で彩られた全身のシルエツトが角ばっておりロボットの様で、左腕が四角く先端が丸くなっている。顔は四角く青白黒で彩られたシルクハットを被っておりモノクルを付けた白いのっぺらぼうといった顔をしていた。

「少々乱暴に連れてきてしまったが、俺の愛は伝わる筈だ……彼女が微笑みかけてくれたのが勘違いなはずがない！」

そんなアホ丸出しのことを言ってるドーパントが変身を解くと、ストーカー事件の犯人である弓弦伊織が現れる。伊織は茜に視線を向けるとにやりと笑って手を伸ばし……。

「ん?」

電話の音がかかってきた。葵さんが自分の正体に気付いて説得するつもりなんだろうと当たりを付けてスマホを手に取り相手の名前を見ると、琴葉茜の文字。「は?」と呆けた声を上げながら通話ボタンを押した。

《あ、伊織君かあ? すまんなこんな時間に》

「あ、茜さん!」

目の前で眠っているはずの想い人からの電話に頭が真っ白になる伊織。この声色、間違いない。今まで聞いてきた琴葉茜の声そのもの

だ。では自分が誘拐してきたのは？と疑問符が浮かぶ。

《「起きたら葵がいなくなっとな。ゆかりに聞いたら伊織君が誘拐したって言うんよ。そんなことないよなあ？」》

「そ、そんなわけないじゃないですか。あはは、ひどいなあ」

《「せやな、そんなわけあらへんよな。それで、葵から連絡が来たら水都第二屋外ステージに来てほしいと伝えて欲しいんよ。なんやあの子もガイアメモリ？を使っとならしいからな？誰にも見られない様に会って説得したいんよ》

「な、なるほどー。わかりました、連絡来たら伝えときますー」

《「頼んだで伊織君」》

電話を終えた伊織は混乱する。目を瞑ってるし髪飾りがないから確信できないが、本当に誘拐したのは琴葉茜なのか？葵なのではないか？と疑心暗鬼になる。

「いや、待て！直接確認すればいいだけだ。念のため、ミュージアムにも援護を要請して……僕は茜さんと幸せになるんだ……！」

その数刻前、継星探偵事務所。

「調べてきたで、弓弦伊織の情報」
「助かります」

包帯を上半身に巻いたついなさんが申し訳なさそうな葵さんを睨みつけながら書類を手渡してくる。あの透明なドーパント…弓弦伊織君に逃げられてすぐ、私はついなさんに協力要請した。バステト・ドーパントとの戦いで結構な重傷を負ってたらしいが方相氏ゆえに割とすぐ治るらしい。

「情報調査会社ユミカルチャーの社長、弓弦重三ゆづるじゆうざの息子で御曹司…結構いいところのお坊ちゃんだったんですね。社会勉強のためにフリーターとして活動中…それで琴葉神社に来た訳ですか」

「逮捕状出して奴の住んでる高級アパートに踏み込んでみたけどもぬけのからやったわ。父親も息子はいない、居場所も知らないの一点張り。こりや居場所を探るのは骨やで」

「お姉ちゃんを狙ってたなんて伊織君、絶対許さない…」

「あんさんもこの件が終わったらちゃんとう首しないうちのエンジンブレードが唸るで」

「それは本当にごめんなさい」

もう完全についなさんに頭が上がらない葵さんに笑みが浮かぶ。その様子がいつも葵さんに平謝りする茜さんと重なって…ひとつ、案を思いついた。

「みんな、作戦を思いつきました。でもその前に…きりたん」

「検索ですね。敵のメモリが分からないと、ですしね」

双眼鏡の様なガジェットを弄っていたきりたんが頷き本を手に検索を開始する。葵さんが驚いたように見ているがまあダブルだということにはばれてるし気にしない。

「最初のキーワードは「透明」です」

「インビジブル、カメレオン、などが残りました」

「そんな感じはしないですよね…次は「隠蔽」です」

ありとあらゆるものの姿を消して隠蔽することに長けていた。そう告げると何とも言えない顔になるきりたん。

「ニンジャ、とかが残りしましたけど。あと一つ、なんかありませんか？」

「そう言えばあのゴムは調べたんですか？」

「大きなゴムが削られたものってぐらいですね。なんなのかはさっぱり」

思い出す。あのゴムが落ちてた場所。それは全部、透明のドーパントが出たと思われる場所だった。まさかあれは痕跡？いや、ゴムの欠片を落として透明にする？それって…

「最後のキーワードは「ゴム」です。…いやもう多分、メモリ名わかってしまいました」

「ビンゴです。なるほど、ゆかりさんの方が分かりやすいというのも頷ける。メモリの名はイレイザー。…「消しゴム」の記憶です」

「消しゴムやて!?!」

消しゴム。文房具の一つで、えんぴつやシャーペンで書いた字を消すことができるゴムの塊だ。消す代わりに削りカスを作るため私はちよつと苦手だった。

「イレイザーは万物の姿形を消すことが可能です。任意で元に戻すことも可能のようで、その能力を使って自身も透明にすることができま

す」

「はえー、消しゴムも侮れんなあ。戦闘能力は皆無そうやけど」
「お察しの通り、光弾を飛ばすこととゴムの身体しかろくに戦闘力がありませんね」

「対抗策は？」

「ちようど今完成したこの「デンデンセンサー」ならば対抗できるかと」

《デンデン！》

そうやって取り出したのは双眼鏡かゴーグルの様なオレンジ色のメモリガジェット。ギジメモリを装填すると変形してカタツムリの形になる。

「これはセンサーにもなるので、ギロチン事件の様に侵入者が入って来ても感知できます。そして目に見えない物を検知することも可能です」

「それなら奴が透明になって来ててもわかりますね。では：葵さん、ご協力をお願いします」

「はえ？…私、なにをすればいいの!?お姉ちゃんを助けるためなら何でもするよー!」

「なら何でもやってもらいましょうか？」

必死に詰め寄ってくる葵さんに、私は不敵な笑みを浮かべた。

そして今に至る。畏にかかった感触はあった。彼女が起きていなければ、引つかかる筈だとは思ったが相当馬鹿だったらしい。私ときりたん、あかりとついなさんは物陰に隠れてステージの中央に立つ

いつもの髪飾りを付けてピンク色の瞳の「茜さん」を見守る。すると黒塗りの車がやってきて、黒服の男たちと共に「茜さん」を横に抱えた伊織君が降りてくる。あの特徴的なスカーフは……ミュージアム。そうか、ユミカルチャーは水都を代表する情報調査会社……ガイアメモリの適格者をあの会社が調べていたとしたら説明がつく。つまり弓弦伊織はミュージアムと繋がっている。

「伊織君、葵はどうしたんや!?ま、まさか……」

「や、やあ。茜さん。葵さんなら大丈夫。親父に頼んで調べてもらったら葵さんがとあるところに監禁されてるってわかって、取り返してきたよ。薬品を嗅がされたのかまだ眠ってるけど……」

慌てて駆け寄る「茜さん」に伊織君の顔が赤くなる。やはり恋慕が動機か。だったら……覚悟はしてもらおう。

「伊織君はすごいなあ。……自分が誘拐したお姉ちゃんをまるで自分が助けましたみたいな顔で連れて来て……」

「え?」

次の瞬間、「茜さん」もとい、髪飾りとカラーコンタクトを付けて茜さんに変装した葵さんの右ストレートが伊織君の顔面に突き刺さり、投げ出された本物の茜さんを慌ててキヤツチする葵さん。そんな彼女に私達は駆け寄った。

「ぐ、ぐあああ……なんで、この僕が、茜さんの声や顔を見間違うなんて……」

「当たり前でしょ。私は誰よりもお姉ちゃんを見てきたの。お姉ちゃんを完璧に演じることぐらい、朝飯前だよ!」

カラーコンタクトを外して投げ捨て、髪飾りを茜さんにつけてドヤ顔の葵さん。そこは誇るところじゃないと思います。

「ちよつと完璧すぎて引いてます、葵さん」

「え」

「ああ。ストーカーを騙せるなんて相当やで」

「え」

「姉のためにドーパントにまでなった愛を感じました」

「え、あ、うん」

私とついなさんの言葉に絶望した顔を浮かべたかと思えばきりたんの言葉で元気を取り戻す葵さん。ちよろい。

「琴葉葵！お前が、お前がいなければ僕はとつくに茜さんと…！」

「あんな無害そうな顔してお姉ちゃんを狙ってたなんて…信じられない！…この変態…！」

「うるさい！僕は欲しいものは何でも手に入れてきたんだ…茜さんも手に入れて当然なんだ…！」

《イレイザー！》

そう言つて消しゴムでEと描かれたメモリを半ズボンで露出した右のふくらはぎに出現した生体コネクタに挿入、消しゴムと怪盗が合体したような姿のイレイザー・ドーパントに変身。同時に周りの黒服たちもマスカレイド・ドーパントに変貌していく。

「あかり、きりたんの身体をお願いします。ついなさん、いけますか？」

《ジョーカー！》

「個人的にファンングで行きたいところですが友人を襲われたゆかりさんの怒りを尊重しましょう」

《サイクロン！》

「うちに質問するな、愚問や結月」

《アクセル！》

「変身！」

「変…身！」

私ときりたんといいなさんは三人で並び立ち、メモリを鳴らしてドライバーに装填して仮面ライダーに変身。あかりがきりたんを抱えて茜さんを抱えた葵さんと一緒に退避したのを確認し、指を向ける。

『さあ、お前の罪を数えろ！』

「さあ、振り切るでー！」

突撃してくるマスカレイド・ドーパントたちに対して私達も突撃。私はパンチとキックで、アクセルはエンジンブレードで蹴散らしていく。

「イレイザーショット！」

するとイレイザー・ドーパントが動く。某岩男の岩砲みたいな右腕を向けたかと思えば光弾を乱射。なんのつもりかと思っていると当たったマスカレイド・ドーパント達が透明になり、見えない攻撃が襲いかかる。さらにその際生じた消しカスを何故か集めたイレイザー・ドーパント本人も姿を消して、傍から見たら虚空で暴れ回る仮面ライダー二人みみたいな凶になった。

《トリガー！》《サイクロン！トリガー！》

「出番です！」

『デンデンセンサー！』

サイクロントリガーになってからデンデンセンサーを取り出し、ゴーグルモードで敵の位置を確認し風の弾丸を炸裂させて爆散させていく。横では斬れば分かると言わんばかりにエンジンブレードを振り回し、スチームやジェットを駆使して見えながらかもマスカレ

イド・ドーパントを殲滅しているアクセルがいて思わず苦笑い。センサーなんていらなかったんや…。

『ゆかりさん、注意してください。イレイザー・ドーパントが何か持っています』

「なにかとは?」

きりたんに言われてデンデンセンサーで確認する。そこにはまるでメタルシャフトの様な棒状の武器を持った透明のイレイザー・ドーパントが攻撃してきてデンデンセンサーを弾き飛ばしていた。あんな能力まで!?

『恐らくきつき拾っていた消しカスを加工した武器だと思えます』

「ゴムの武器と。見えないとリーチも分からず地味に厄介ですが!」

《メタル!》《サイクロン!メタル!》

ウインディスタビライザーが感じ取る。奴の武器が風を斬る感覚。それを感じ取りメタルシャフトで受け止める。

「なに!?!」

「センサーが無くてもそんな大ぶりの攻撃!見え見えです!」

「ぐあっ!?!」

メタルシャフトを振るうとゴムを殴る感触が伝わってくる。確かな手ごたえ。どうやら機動力はそんなないらしい。頭、足、腕、胸、腰と次々に打ち付けて行く。怒りのままに、大事な友人を穢そうとした輩に、燃え上がる怒りのままに殴りつける。

「ぐはあ!?!」

最後にホームランバットの如くメタルシャフトを握って頭部をぶ

ん殴るとイレイザー・ドーパントは姿を現してゴロゴロと転がり木に激突して目を回す。透明になるだけが強みらしい。弱い。

「このままメモリブレイクです」

「そうはいかない、のだー!」

そのままメモリブレイクしようとする、上空から何かが落ちてきてその衝撃波で吹き飛ばされる。そこに立っていたのは、異様なドーパント。特に装飾がないシンプルな筋骨隆々な赤いマツスルボディに、二カツと笑っているかの様な仮面を被っているかの様な、横からネジが突き刺さってるフォルムの頭部。なんかとんでもないドーパントだった。

「僕はエクスタシー・ドーパント! ミュージアムの幹部なのだ! 姉さまから命令されたからお前を守ってやるのだ! 感謝するのだ!」

「え、あ、ははは、やっときたかミュージアム! 僕を守れ!」

「エクスタシー…歓喜の記憶ですか。…:…どんなドーパント?」

『ですが幹部ということはエルドラド並の強敵です。気を引き締め…!?!』

次の瞬間、エクスタシー・ドーパントに殴り飛ばされていた私達。胸部のメタルの装甲がひしゃげている。危なかった、咄嗟に一歩引いたおかげで直撃は免れた。それでこの威力…幹部は伊達じゃないってことですか。

《ヒート!》《ヒート!メタル!》

「なんとかこれで…!」

「アハハハ! 僕の拳を受けて生きてるなんて、面白いのだ! 楽しませてくれなのだ!」

跳躍してきて拳を私達が避けた地面に叩きつけるエクスタシー・

ドーパント。その顎にシャフトを叩き込んで殴り飛ばす。しかし身を振っただけで特に効いておらず、逆に頭突きを叩き込んできてシャフトで受け止めるものの地面に叩きつけられてしまった。

「ぐはっ…!?!」

「そうだ、僕の力も貸してやる!」

すると最悪なことに、イレイザー・ドーパントが光弾をエクスタシー・ドーパントに浴びせてその巨体の姿が消える。最悪だ、と思う間もなく足を掴まれて持ち上げられ、何度も何度も地面に叩きつけられる。シャフトを振るうがサイクロンでもないので見えないことにはどうしようもない。

「なんとか、メモリを…があ?!」

『このままじゃ、ゆかりさんの身体が持たない…!』

「面白いのだ!面白いのだ!」

まるで子供がおもちゃを乱暴に扱うように、振り回される私達。万事休すか、と思ったその時。視界に紅いバイクが映ったかと思えば透明なエクスタシー・ドーパントが吹き飛ばされ私達は投げ出される。受け止めたのは、アクセルだった。

「マスカレイドは全員潰してきたで。なんややべーのが出たな。こいつは任せい。…あの消しゴム野郎を許せないんやろ。自分の手で決着付けるべきや」

《スチーム!》

「…恩に着ます」

巨体故に蒸気を発生させることでそのシルエットをみつけて斬りつけるアクセル。上手い。私達も負けてられない。イレイザー・ドーパントは勝ちを確信してるのか逃げようともしない。

「ははは！そんな満身創痍で僕に勝てるわけが…」

「うるせーですよ変態野郎。ジョーカーで勝負です！」

《ジョーカー！》《ヒート！ジョーカー！》

ヒートジョーカーに変身。するといつもより燃えたぎる何かを感じる。怒りの炎の力、見せてやる。

「ははは！鬼さんこちら！手の鳴る方へ！」

『あんなこともできたんですね…』

イレイザー・ドーパントは走って逃げつつ光弾を上空に撃つて巨大な四角い消しゴムをいくつも召喚。さらに光弾を浴びせて透明にして逃げて行く。見えないゴムにぶつかってたか。上等。

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

『ジョーカーグレネイド！』

私達は両手に炎を灯して分裂し、交互に消しゴムの見えない壁を殴りつけて熔解させて突き進んでいく。そのことにビビるイレイザー・ドーパント。茜さんが感じた恐怖はこの程度じゃありませんよ！

「ヒツ!?な、なんなんだお前は…!?!」

《ヒート！マキシマムドライブ！》

「…技名はジョーカーバックドラフトです」

ある程度壁をぶち破ると一人に戻り、走りながらジョーカーメモリではなくヒートメモリを装填。右半身が熱き炎に包まれ、右拳を握る。消しゴムの壁を目の前に召喚して防ごうとするが、その程度で防げるか！

「切り札の拳を……舐めるな！ 『ジョーカーバックドラフト！』」
「ギエアアアアツ！」

炎を纏った右拳は拮抗することなくゴムの壁を貫き、イレイザー・ドーパントの腹部に炸裂して吹き飛ばし、爆散。メモリと弓弦伊織が転がった。

「あつちは終わったみたいやな。こっちも決めたるわ」

《アクセル！マキシマムドライブ！》

アクセルの方を見てみれば、拳と剣をぶつけ合っていたエクスタシー・ドーパントに対して全身に高熱の炎を纏ったの後ろ跳び回し蹴りを叩き込むが、容易く片腕で受け止められてしまった。

「なんやと!？」

「あー、倒されちゃったのだ。姉さまに怒られるのだ…」

「は、はなさんかい！」

《サイクロン！ジョーカー！》

「ついなさんを放しなさい！」

慌てて参戦。拳を叩き込むもエクスタシー・ドーパントはビクともしずアクセルを放そうともしない。

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

『『ジョーカーエクストリーム！』』

ならばとマキシマムドライブ。二段キックを叩き込んでアクセルを解放させることに成功するが、アクセルを盾にされて直撃には至ら

ずメモリブレイクするにはいたらない。まだやる気のエクスタシー・ドーパントに対して二人で身構える。

「痛いのだ…やっぱりお前たち面白いのだ！もっと遊ぶのだ！」

「そこまでよ、エクスタシー」

「あ、ず…アルテミス姉さま！」

そこにやってきたのは、いつぞやの獣の狩人の様なドーパント。アルテミス・ドーパントらしいその人物に大人しく従うエクスタシー・ドーパント。彼女が弓弦伊織を守らせた「お姉さま」…？

「お姉さまがもういいとおっしゃってるわ。証拠は始末したから貴方の時間稼ぎはもういいの」

「そういうことならやめるのだ。仮面ライダー、また遊んでくれなのだ」

「待て…!?!」

するとアルテミス・ドーパントが弓からエネルギーの矢を地面に飛ばしたかと思えば爆煙で見えなくなり、晴れた時には2人とも消えていた。

「逃がしましたか…」

『ミュージアムの幹部、侮れませぬね』

「次会った時はボコボコにしてやるからな！」

そうして私達はあかりたちの元に戻るのだった。

その後、弓弦伊織はついなさんに逮捕された。しかしその父親の弓弦重三は何者かに惨殺、ユミカルチャールは建物が炎上してミュージアムと繋がっていたという証拠は精神崩壊した弓弦伊織からしかわからない状態となっていた。そして葵さんも自首したものの、動機が動機なので嚴重注意だけですみそうだというのがついなさんの談だ。

「あかりさんが時々茜さんを手伝うことになりましたが、茜さんが元気で何よりです」

「妹とアルバイトがどつちも犯罪者になったのに凄い人ですね」

「そういう人なんですよ。人を惹きつける様な元気の塊。ストーカーがたくさん生まれてしまうのも分かる気もします。許しませんけどね」

ミュージアムに繋がる手がかりを掴んだかと思えば先に潰され、救いは茜さんが元気だと言う事だけ。なんともいえないが、依頼人の笑顔を守れただけマシだろう。

「またみんなで酒を飲めればいいですね」

窓から外を見やる。今も昔も変わらない水都タワーが見えて、笑みを浮かべるのだった。

第十八話：Fの嫁入り／刻限が迫る時

水都のラジオ局、WATER WAVE。その一つであるラジオ番組「音街ウナのポジティブ★ワールド」はアイドルの音街ウナがMCを務めている冠番組だ。IAさんと双壁を為す人気があるアイドルであるウナさんのこの番組は私ももちろんきりたんも大ファンで、毎回欠かさず聞いている。

《「音街ウナのポジティブ★ワールド〜！はっじまるよ〜！」》

「きりたん、始まりましたよ」

「もちろん聞いてます。ネット対戦とか棄権です棄権」

「好きですねえ二人とも」

なんで今更そんな話を始めたのか。今回の事件はこのラジオ番組から始まるからだ。

「あかりは馬鹿ですか？水都市民なら彼女を嫌いな人なんていませんよ」

「いや私、水都市民だけどラジオは聞いてなかったの…」

「そういや富豪の娘でしたねあかりさん。でもこれは聞いてくださいよ！彼女が小学五年生時にヒットしたきっかけである「ロストメモリーデイ」いい曲なんですよ！」

「失われた記憶の日々、ですか。しみりしそうな曲ですね。しかしきりたんがここまで興奮するとは」

「それはそうですね。きりたんが激ハマリした理由は謎です。ですが問題が一つあって…」

相変わらずテンション爆上がりのきりたんに慣れていないあかりに苦笑いしながら「問題」を伝えようとすると、遅かったらしい。

《「今日はね〜！ウナの大好物のウナギについて話そうと思うんだ！

特に水都の潮鳴山の湖で取れる八目鰻が美味しいんだよ。厳密にはウナギじゃないんだけどね!」

「八目鰻?」

「あ、不味い」

「あ、なるほど……あ、私琴葉神社の手伝いに行つてきますねー」

「あかり、逃げるな逃げないで!」

ラジオから聞こえたそのワードに反応するきりたんに、そそくさに逃げ出すあかりを止めるが逃げられてしまった。：はー、やつぱりこなるのかあ。

「ゆかりさんゆかりさん! ウナちゃんの好きな珍しい鰻が潮鳴山にいるんですつて!」

「ええ、はい。だから?」

「行きましょう! そして食べましょう!」

「いや、待つて、今日は定休日でもなんでもないですつて!」

何とか説得して戸締りしたあと、私達はハードボイルダーに乗つて潮鳴山に向かうのだった。：季節外れの嵐が来ると言う今朝のニュースを完全に忘れて。

そして数時間後。件の湖を見つけて鰻獲りを満喫していた私達人なのだが。

「で、何匹か獲れたはいんですけど」

「まさかこんな大嵐が直撃するとは……」

今現在。すっかり夜になり、私達は潮鳴山の小さな洞窟の中で焚火をして急な嵐が過ぎ去るのを待っていた。鰻を焚火に串刺しで焼いて飢えを凌いでいる。

「うーん、せっかく獲りましたけど食べたらもうそんなに興味なくなりましたね…今はとても反省してます」

「そんなことだろうと思いました。絶対またやらかすんです知ってます。こんなに獲ったのにどうするんですか本当に」

適当な枝に突き刺して持ってきた十匹ぐらいの八目鰻を見て嘆息する。当分ウナギ料理ですかねえ。

「スタッグフォンが圏外だからリボルギャリーも呼べませんしハードボイルダーも籠に置いてるし、どうしますかねえ」

「…意識を失ってる間の私の体力がもてばダブルに変身してハードボイルダーの場所まで向かうと言う手段もあります」

「この嵐で正確な場所が分かる気しないので無理です」

そんなことを言っているうちに焚火が消えてしまう。燃やすものは何もない。本格的に不味い。

「このままじゃ体力減る一方ですし、近くに家屋がないか調べますかね？」

「ああ、確かこの山、おやっさんの別荘もあるはずだし人が住んでる山間村もあるはずですね」

「虚音イフの別荘は確か都市側だったはずなのでどっちにいくかですね」

風に打ち付けられながら外に出る。八目鰻は交渉材料になりそうなので縛り上げてちゃんと持ち歩く。きりたんを先導にして山道を

進んでいくと、寂しげな村が見えてきた。スタックフォンを飛ばしてあらかた空中から撮ってもらおう。フラッシュが瞬いた。

「これは…」

「残念ながら、人の気配はありませんね」

「廃村ですか…せめて、屋根がちゃんとしているところ…：見た限りありませんね」

バットシヨットの写真を見て万事休すか、と二人揃って溜め息を吐いていると水たまりが跳ねた足音が聞こえた。顔を上げると、そこには年若い短い黒髪の女性が雨合羽を着て立っていた。

「ゆ、幽霊!?!」

「失礼ですよゆかりさん。人です。ちゃんと足があります。でもどこから…?」

「あ、あの!この嵐で遭難したんですか?!」

「そ、そうです!貴方はこの近くの…?」

「早く、こっちに!」

女性の案内で廃村を進む。まさかこんなところに人がいるとは。

「助かりましたね。どこかに入れる民家があったとは。バットシヨットも役に立ちませんねえ」

「…いや、バットシヨットが取れなかったのは大きさが違いすぎたからですね…」

「大きさ?…つて、なんですかあれ!?!」

女性について行った先にあったのは、巨大な洋風の豪邸。なるほど、大きすぎて写真に写らなかつたと…。

「なんですかこの屋敷。なんで廃村のど真ん中に…」

「ごつち、早く！」

女性が案内してくれた扉から豪邸の中に入る。どうやら裏口の様だ。フードを取るとびよこんと大きなりボンが彼女の頭の上で跳ねて女性は窓ガラスを見て髪型を整える。そしてその顔を改めて見て気付いた。知ってる顔だった。

「あ、あなた確か、新人女優の加賀見鈴音かがみすずねさん？」

「……フツ。はい、私は加賀見鈴音です。知っているなんて感激です」

妖艶な笑みを浮かべる鈴音さん。さつきまでの元気な感じとはまた違ってドキツとした。そんな私を小突いてきりたんが頭を下げる。

「ありがとうございます。貴方は命の恩人です」

「外にフラッシュが見えたので誰かいるのかなと念のために……」

「貴方はこの豪邸の持ち主なんじゃ……？」

「いいえ、違いますよ。ここの主は嵐が収まるまで休んでいいか聞いてくるので、しばらくここで待っていただいても……」

「もちろん。よろしくお願いします」

そそくさと雨合羽を着たまま通路の奥の曲がり角に消えて行く鈴音さん。…あれ、雨合羽の下もしかして薄着……？

「裏口でもあったかいですね。…きりたん、どうしました？」

「いえ、この屋敷の全てを照らして適温に暖房をするにはかなりの電力が必要だと思ってます。よくこんな環境を維持できるなあ、と」

「言われてみれば確かに？」

こんな山奥でそんな大量に電気があるのは奇妙な話だ。でも気にするほどでもない気がする。しばらくすると、鈴音さんが曲がり角か

ら顔を出して楽しげに笑う。

「この館の主がお会いになるそうです」

「ありがとうございます。あれ、そんな大胆な服を着てるんですね」

「これがここでの私の正装なんです」

鈴音さんに追いつくと、背中のスリットの大きい大胆な白いドレスを雨合羽の下に着ていたらしいことがわかる。正装？と疑問に思いながら進み、鈴音さんが扉を開けると、豪華な部屋が広がっていて。7人も美女を侍らせた髪をエメラルド色に染めたイケメンが玉座の様な椅子でグラスを手に踏ん反り返っていた。なんだこいつ、とは思ったが命の恩人ではあるのでかしまる。きりたんの頭も無理やり下げさせた。

「やあ、初めまして。予定外の美女が来るとは驚きだ。俺がこの屋敷の主人、初峯家当主の初峯九王だ」

「初峯家って水都でも指折りの富豪の…!？」

「そうとも。しかしウナギを獲ってて嵐に巻き込まれたって？現実小説より奇なりともいうが実に不運な人だねえ、男装の美女よ」

「え、ええ…あ、よければ雨宿りさせていただくお礼にこの八目鰻をどうぞ」

私だけ美女扱いされて不貞腐れてるきりたんを宥めながら鰻を差し出すと九王さんは笑って「フェイ」と言っただけに控えていたメイドが鰻を受け取る。

「ありがとう。鰻は好物だ。フェイ、捌いて皆にもてなしてくれ」

「かしこまりました、ご主人様」

眼鏡をかけた緑っぽい黒髪をツインテールにしたフェイと呼ばれたメイドが鰻を手に奥へと向かっていく。それを見届けると九王さ

んは両手を広げて美女のうち五人を侍らせる。紫の着物を着た九王さんとよく似た白髪の女性はそれを横目に金屏風を背負い畳に座ってお茶を飲んでいたかと思えば口を開く。

「まさかこんな時に遭難者が来るとはの」

「いいじゃないかお婆。ほっとけば死ぬのも目覚めが悪い。どうせこの屋敷は無駄に広い、嵐が落ち着くまでここにいてもらっても構わんよっ。」

「それは助かります」

「だがタダで許すのもつまらん。クイズだ。男は俺一人、他は全て絶世の美女だらけ。さて問題だ。俺達はどこで何をしようとしている？」

そう言われて考える。スリットの大きい白いドレスを着た鈴音さん。黒のゴシッククロリータを着た銀髪をサイドテールにした低身長
の美女。青のチャイナドレスを着て眼鏡をかけた桃色がかつた茶髪
をふんわりとさせた美女。赤のアフタヌンドレスを着た黒髪で右
目を前髪で隠した美女。緑のマーメイドドレスを着た男勝りでワイ
ルドな髪型の黒髪の美女。それら五人を侍らせる、白のスーツを着た
九王さん。

「風変わりな富豪が美女を侍らせて舞踏会をしている…ぐらいですかね私から言えるのは」

「育ったら美しいであろう君、そう思うかね？」

「いいや相棒。楽しみたいだけならお婆と呼ばれたあの女性は…本当に九王さんの祖母であるならむしろ邪魔でしょう。なのに金屏風を背負ってお茶を飲んでいる、九王さんと同じく別格感があります。なので娯楽のための宴会でないことは確かでしょう」

「うむ。では君の答えは？」

「一人の男に対して複数の女、思いつくのは嫁入りでしょうか。金持ち特有の、ね」

「ハハハハッ！ 聡明な男装の麗人とその相棒よ。君達の名前は？ 仕事は何を？」

なんてことない推理を披露すると高笑いして問いかけてくる九王さんに私は帽子を取って挨拶する。

「申し遅れました。私は結月ゆかり。こちらは相棒のきりたん。水都の継屋探偵事務所で二人で共に私立探偵と営んでおります」

「それでか！ 驚いたよ、素晴らしい直感だ。君の答えは正解だよ！」
「これは嫁入りじゃ。このわしの孫が嫁候補から一人を選ぶためのな」

そう口を開いたのはおばばと呼ばれていた女性。…いや、九王さんの祖母にはとても見えないのですが…。

「わしは初峯弥美。はつみね やみ 九王の祖母じゃ。この村落はかつて金鉱でな。この屋敷はその村落の王家として、廃村となった今でも切り売りして遊んで生活できるぐらいの財力はある。そしてこの男は面食いでな。格付けなど難しい絶世の美女を揃え、内面だけで花嫁を決める儀式がこの集まりじゃ」

「…まあ面食いなのはわかりました」
「ゆかりさん、顔はいいですからね」

いらんこと言ったきりたんの頭をどつくどつくと笑い声が響く。ゴシツクロリータに身を包んだ銀髪サイドテールの美女だ。

「オレらはその儀式に選ばれた幸運な美女ってわけだ。オレは刃金雪。はがね ゆき ロックシンガーだ」

一心不乱に何かをメモに書き込んでいたかと思えばこちらに興味津々の瞳を向けてくるのはチャイナドレスの女性だ。

「私達はみいんな、この方の花嫁候補らしいですよ。あ、私は小説家の桜乃空はるのそらといひます」

カクテルを手に指で二を示して無表情で口を開いたのはアフタヌンドレスの美女だ。まるで人形の様だ。

「今日はその儀式の二日目。全部で四日間間に五人の候補がずっと屋敷に籠つてアピールするの。私、徒影涙とかげるい。バイオリニスト」

マーメイドドレスの美女が吟醸酒を手に酔いながら笑う。凄いプロポーションで羨ましい。

「その四日の間にご当主様の心を捕らえた女の勝ち、体を使わなければ何してもいいらしいわ。私はファッションモデルの景山かげやま冷れいよ」

ちびちびとワインを飲んでいた鈴音さんがこちらを見て優しげに笑う。

「でもちよつと雰囲気かとげとげしてて…ゆかりさんたちが来てくれてちよつと助かったかも」

それはちよつとわかるかもしれない。何せこの家の財産がその女のものになるのだ。他の女は全て敵みたいなものだろう。鈴音さんはあんまりわかってないようだが。あと空さんも。

「そんなわけでお二人さん。俺はこれから彼女たちの相手をしなきゃならん。電気と食料は気にしなくてもいい。総勢十人程度じゃ嵐が過ぎ去る間ぐらいいはビクともしないぐらいいの財産がある」

「道理で、この屋敷は快適なわけだ」

そう会話しているとフェイと呼ばれたメイドが戻ってくると九王に耳打ち。九王は笑って私達に告げる。

「二人部屋を用意させた。食堂と浴場は別の場所だ。くつろいでほしい。特に食堂では君達の獲った鰻も用意されてるようだ」

「なにからなにまでありがとうございます、ご主人。よきお嫁さんを得ることを願います」

「なあに、俺が君達を気に入っただけのことだよ。のんびり見物していつてくれたまえ、結月探偵」

一礼し、私達はフェイさんの案内で広間を後にした。

お風呂をいただきさっぱりした後、ナイトローブを着て食堂で食事をいただく。きりたんも自分で獲った鰻料理を食べて「満悦だ。名産なだけはあるのかうな重まで作ってあってありがたかった。他の料理も美味かったのでさすが富豪の屋敷だ。あかりが聞いたら羨ましさでキレそう。」

「しかし、嵐の中の屋敷ですよきりたん！探偵としてワクワクしませんかー！」

「事件が起きるのを望む探偵は駄目でしょうさすがに」

「冗談ですよ。事件なんて起こらない方がいいです」

「どこまで冗談なんですかね。：私は電話を探してあかりさんに連絡を取ります。ゆかりさんはどうしますか？」

「珍しいのでちよつと探検しようかなと」

「お子ちゃまですね」

「うるせーですよ」

きりたんと別れて屋敷をうろつく。商売柄、気になると捜査してしまふのは悪癖ですね。そのうち正さないと…おや？

「あれは…鈴音さん？」

ふらつく女性が見えて駆け寄る。やはり鈴音さんだった。楽しげだった顔が恐怖に歪んでいる。

「あ、えっと、あの…」

「探偵の結月ゆかりです！どうしました、鈴音さん？」

「わ、私、怖くて…助けて、探偵さん！私、何が起きてるのか…本当に…！」

涙目で私に抱き着いてきた鈴音さんがそう言つて窓を見た鈴音さんが口を閉じる。な、なんなんですか？

「…ごめんなさいゆかりさん。今のは忘れてください」

そう言つて鈴音さんは走って去って行ってしまった。曲がり角に曲がつて見えなくなる。…とりあえず追いかけるか。

「待つて、鈴音さん！」

追いかけてようとすると、どこからか嫌な臭いが流れてきて。これは…何かが焼けてる臭い…外から？鈴音さんを追いかけるのをやめて裏口から外に出る。ナイトローブ姿で嵐の中に飛び出したので寒いが、それが気にならない出来事が外で起きていた。

「これは…弥美さん!？」

そこにあつたのは木によりかかり燃える着物姿の女性。雨に打ち付けられてなおガンガン燃える炎で悲鳴も聞こえてこないのが既に事切れていることを表していて。それは、木々の中から現れた。

「アハア〜！」

テイラノサウルスの頭部を右肩に乗せ右腕の鋭い爪をカチンカチンと鳴らし、恐竜の尻尾の様な左腕をビシバシと地面に叩きつけている、牙の様な装飾が目立つ小型の肉食恐竜の様な顔の白黒のドーパントがよろよろと歩いて姿を現す。こいつがこんなことを…!?

「アハハア〜、気持ち、イイ！」

「きりたん！」

《ジョーカー！》

【ゆかりさんがあんなこと言うから… 《サイクロン！》】

「今は関係ないでしょう！ 【変身！】」

《サイクロン！ジョーカー！》

私達はダブルに変身、ドーパントに殴りかかるもいつもの力が出せず、軽く当たった拳が弾かれる。

「え、なんで…?」

『ゆかりさん、防御！』

「くっ…!？」

左腕の尻尾に薙ぎ払われ、力なく転がる。なんだ？力が出ない。いや、むしろ右側から力が溢れて振り回されている…!?!これがこのドーパントの能力…?」

「そろそろ、しおどきかなー」

どこかで童女が不敵に笑う。

第十九話：Fの嫁入り／狂気爛漫

「そろそろしおどきだよ結月ゆかり。きみの^{ジュー}おかげで^{カー}エクストリームメモリがしょーかんされた。かんしゃはするけどここまでだよ。きりたんにふさわしいのはついなちやんだ」

ダブルがドーパントに苦戦する映像が映るスタツグフォンを手に童女は嗤った。

「くっ…なにがっ!」

突如起きたダブルの不調。イレイザー・ドーパントとの戦いでヒートジョーカーに変身した時の様な過剰なエネルギーを右側から感じる。まさかあるとき私側が過剰エネルギーを出したことできりたん側も過剰にエネルギーを出し始めてそれに私が追い付けなくなってる…!?

「き、きりたん!なんとか抑えられませんか!」

『駄目です!なんでか知らないけど、安定しない…!』

「アハア…?」

左右のバランスが崩れて動きが悪い私達の攻撃を容易く受け止めたかと思えば右肩のテイラノサウルスの頭部で噛み付いてくるドーパント。顔から胸部まで噛み付かれて暴れていると足に何かを巻き付かれて引きずり出され、木に叩きつけられる。見ればドーパントの左腕の尻尾だった。

「と、とりあえずメモリを…」

《トリガー!》《ルナ!》《ルナ!トリガー!》

サイクロンジョーカーからルナトリガーに変身、距離を取り誘導弾を放つ。これなら動きが悪いことも関係ないと思ったのだが、反動がいつもよりでかい。しかもドーパントに全弾向かって行ったが右肩のテイラノサウルスの頭部を向けて来たかと思えば口を開いて咆哮。発生した衝撃波で全弾撃ち落とされてしまう。ルナトリガーでしか戦えないというのに厄介な。

「クルオアアアアアツ!!」

「...!？」

『ゆかりさん!?どうしました!?!』

「あ、頭が...」

咆哮の衝撃波を浴びた瞬間、体が火照る。頭痛がする。なんだこれは。ドーパントの能力か?頭が割れそう。気が狂いそう。

「ああ、あああああああ!!」

《メタル!》《ルナ!メタル!》

頭が割れそうな激痛を振り切るように何も考えずメモリを交換。ルナメタルとなって伸縮するメタルシャフトを力任せに振り回し、ドーパントの左腕の尻尾とぶつけ合い、弾き飛ばす。

『ゆかりさん、落ち着いて!』

「アハハハッ!クルオアアアアアアツ!」

「その咆哮を、今すぐ止めろッ!」

何時にも増して語気荒く、湧き上がる怒りのままに攻撃的になる私を必死に止めるきりたん。自分でも止まらない、落ち着かない。暴れ足りない。するときりたん側のエネルギーがまた溢れてメタルシャ

フトの伸縮が暴走、伸び続けて凄まじい勢いでドーパントに先端が炸裂。吹き飛ばした。

「アハハア…」

笑いながらドーパントは左腕の尻尾を地面に打ち付けて砂埃を起こして消失。しかし私は気付かずメタルシャツフトを振り回し続ける。敵は何処だ。暴れさせろ、暴れさせろ。暴れさせてくれ！

『落ち着いてください、ゆかりさん！』

「…がはっ」

きりたんが無理やりメモリを外して変身が解除され、私は膝をついて肩で息をする。頭の痛みが急速に引いてようやく落ち着いた。なんだったんだ。あのメモリは一体。立ち上がって周りを見渡す。この嵐でぬかるんでるのに森に続く足跡がない、犯人はまさか…？

「ゆかりさん！大丈夫ですか!？」

「きりたん…なんとか…」

「一体何の騒ぎだ!?!…おばば!?!」

走ってきたきりたんにつき騒ぎを聞きつけて九王さんとフェイさんがやってきて、惨状を見て絶句する。…そうだ、初峯弥美さんが燃やされたんだった。雨で火は消えたが原型は残っているのは見ようよ。よってグロイ。…そう言えばあのドーパント、燃やす攻撃してこなかったな。

「私が来たときには既にこの状態でした。足跡から、犯人は内部の間だと思われまます」

「内部の…ということは花嫁たちの誰かだど?」

「…そうなりますが、貴方達も容疑者ですよ」

そう言つて私はバットショットで現場写真を撮つてからご遺体を屋敷内の空いてる部屋に運び…九王さんに頼んで、容疑者を広間に集めてもらった。…のだが。みんなを呼びに行つたはずのフェイさんがやつてきて、私はきりたんと顔を見合わせる。嫌な予感がする。

「結月様。景山様のみ部屋におりませんでした。どうしましょう」

「きりたん、貴方は先に広間に行つて集まつてるはずの容疑者たちを見張つていてください。私はフェイさんと一緒に冷さんを捜します」
「わかりました。お気をつけて」

きりたんと別れてフェイさんの案内で冷さんのいそうな場所を探す。途中で乾かしてもらつていた一張羅に着替えて屋敷を探索する。あの豪胆な女傑が姿を消す理由として考えられるのは犯人だったか、もしくは…殺害されたか。

「あれ、お風呂場に明かりが…」

「風呂に入つてるならいいんですが…」
「ヒツ」

浴室に入ると、赤く染まった巨大な浴槽に冷さんが仰向けに浮かんでいた。悲鳴を上げそうになったフェイさんの口を塞ぐ。騒ぎに紛れて犯人がきりたんの監視から逃れて逃げ出す方が不味い。観察する、既に亡くなつているようだ。つけていたであろうタオルははだけて今は一糸まとわぬ姿を見せていて、その顔は不気味な笑みに歪んでいる。外傷は胸部の刺し傷、ぐらいでしょう。しかし傷に反して出血量が多い。これは……。

「…フェイさん、手伝ってもらえますか」

「は、はい…」

泣きじやくりながら手伝ってくれるフェイさん。悪いことをしたな。とりあえず洗面所に冷さんのご遺体を寝かせ、私たちは広間に向かった。

広間に着くなり九王さんに冷さんが亡くなっていたことを話すと、神妙な面持ちで告げる。

「皆を集めたのは他でもない。……おばばと景山冷が殺された。犯人はこの中にいるらしい」

九王さんに集められ、どよめく花嫁候補たち。仮面を被ってるわけでもないのに特に怪しい所はない。犯人がいるのは間違いない。鈴音さんを始め震えている人間もいれば、驚愕を表情に浮かべた人間もいる。違和感はない。相当演技が上手いか、殺人を何とも思っていないか、それとも…？頭がまた痛む。額を押さえていると、きりたんが前に出て周りを見渡す。

「犯人はガイアメモリを使って怪物・ドーパントになりました。この怪物の噂を聞いたことがある者は？」

その問いかけに全員が手を上げる。そりやそうだ。水都に住む人間でドーパントを知らない人間はいないだろう。

「怪物に変身できる魔法の小箱が高額で手に入るというアレだろうか？噂は聞いたことはあるが実物は……多分見たことはないね」

「本当にいるとは思わなかった」

「そもそもそんな大金持ってないから見たことも聞いたこともないな」

とはそれぞれ九王さんと涙さんと雪さんの談。小耳に挟んだ程度の人が多そうですね。

「私達の継屋探偵事務所は結構頻繁にガイアメモリの事件の依頼を受けてます。この場の仕切りは任せていただきたい。さつそくで悪いのですが身体検査を行いたい。つい先刻起きた事件です。まだ犯人がガイアメモリを隠し持つてる可能性もある」

そう言うのと素直に頷く容疑者たち。きりたんに残りを見張つてもらって一人ずつ調べることにした。九王さんは特になし、自分の屋敷だし小物は持ち歩かない様だ。次に女性陣、なのだが全員がドレス姿でろくに隠せる場所がなかった。メイドのフエイさんも同様だ。これはそれぞれの部屋を調べる必要もあるかなと思案する。

「いいえゆかりさん。この屋敷は広いです。どこかに一時的にメモ리를隠していたら見つかりそうにありません」

「それもそうですね…：そうだ、九王さん。弥美さんが亡くなり、花嫁候補も一人いなくなつたわけですが…：この宴を続けるのですか？」

「…：それなんだが、みんな。聞いてほしい」

九王さんの声に反応する鈴音さん、雪さん、空さん、涙さん。フエイさんやきりたんも視線を向け、この屋敷の主人に全員の視線が向けられる。九王さんは心底悲しそうな顔で告げた。

「まだ二夜しか経ってないが俺も遊び呆けていたわけじゃないんだ。ある程度相手を絞り、答えも出てる。景山冷さんは残念ながらその中に入っていないかったけれど。…：おばばも殺されて俺も気が立っている。これ以上誰かに死んでほしくはない」

「婚姻の夜会はこれまでと。賛成です」

九王さんの言葉に頷く。金持ちの面喰いだが、まともな精神は持っていたらしい。好印象だ。すると九王さんの前に出たのは涙さんだ。

「待つてほしい。私達も選ばれたからには本気で勝ちを狙っている。…もしも、もしもだけどまた怪物が出て、花嫁候補が一人以外殺された場合…貴方はそれが犯人かもしれないけれども、気に入ってない女でも、選ぶ?」

「…愚問だな。おばばを殺したかもしれない人間だとしても、俺は君達を選んだ責任がある。もしもそうならその子と結婚することを誓うよ」

「なるほど。よくわかったわ」

「え、マジですか?」

「どっちも正気じゃいらなくなってますね…」

前言撤回。九王さんも花嫁候補たちも極限状態で精神が参ってるらしい。特にこの状況だと言うのに興奮しながら何かをメモに一心不乱に書き込んでいる空さんはまあ正気じゃない。鈴音さんも唇の端が上がってるし、雪さんも九王さんの答えを聞いて小さくガッツポーズを作ってる。駄目だなこれは。

とりあえず容疑者たちには広間を中心に団体行動をしてもらい、私ときりたんは捜査のために屋敷中を回っていた。できることといえば捜査と夜通し屋敷を見張ることぐらいしかない。

「実際の所、花嫁候補の誰かがライバルを殺してる、なんてことがありえるんでしょうか」

「いくら初峯家が金持ちとはいえ殺すメリットがあるか、と?…多分

ありますよ。ちょっと検索しましたが廊下に飾られている絵は全て億単位の価格を下回るものではありません」

「はえー、金のために殺人しているとしたら恐ろしい話です」

「…ゆかりさん、ここに迷い込んだのが相棒と二人でよかった。あまりにも異常な、今まで感じたことのない人間の感情が渦巻いてて私の苦手な論理的でない事件です、正直言って混乱しています。ゆかりさんの人間力と直感が便りです」

頭を押さええてそう言うきりたんの頭を軽く撫でて安心させる。

「それはごっちの台詞ですよ。今回の私は戦闘で足を引つ張ってばかり。貴方の頭脳と冷静な目が必要です。やっぱり私達は、二人で一人であることが必要の様です。…そういえば、あのダブルの不調はなんだったんでしょう」

「…それなんです、ゆかりさんが私についてこれてない…のだと思います」

「私が？」

きりたんの言葉に立ち止まり振り向くと、言いたくないとばかりに目を瞑っていたきりたんが意を決して口を開いた。

「先日のイレイザー事件…あの時ジョーカーメモリがゆかりさんの怒りに反応して爆発的にパワーを増していました。私はその際、引きずり出されるように自身のパワーが増す感覚がしたのですが…その影響か、バランスが崩れてしまっているんです」

「あのドーパントの影響ではないと？」

「いえ、ゆかりさんの精神を不安定にされていたのも無関係ではないと思います。何故私に効かなかったのかは謎ですが。…次はファングジョーカーを試したいところですが」

「…それがよさそうですね」

あのドーパントはやばい。あの咆哮を受けた瞬間、正気を保てなくなる。一発、二発と喰らうたびに症状は重くなつていった。頭が割れそうな頭痛が起きて体が火照り、落ち着かず暴れたい衝動に駆られるのに、それを自分で止めることができない。なんなんだあれは。

「最初に見た時に頭に浮かんだのはフアング、だったんですよ」

「それは思いました。噛み付いてきましたしね。Tレックスがアレだったから単純に恐竜型ドーパントとは思えないってのもありますが」

「フアングならこの…暴れたい衝動を与えるってのも納得がいくと言いますか」

「とりあえずフアングで仮定しましょう。そうになると気になるのは…」

「『殺し方』」

きりたんとハモる。ですよね、それが気になった。

「フアングだとしたら炎を使うなんて能力はないはずですよ」

「それに、景山冷の遺体…あんなに綺麗に残せるような器用さがあるとも思えない」

あのドーパントが使わなかった炎で燃やされていた初峯弥美さん。

あのドーパントの荒々しさからは考えられない綺麗な外傷だけしか残ってない景山冷さん。違和感しかないのだ。

「…まさかと思いますがあのドーパントは揺動で」

「本命のドーパントが別にいる、と？ありえなくはないですね」

新たな可能性が浮上した。不安定なダブルだけではきついかもしれない。だがしかし私達には頼れる味方がいる。

「ついなさんは？」

「既にこの屋敷の電話を借りて呼びました。彼女ひとりならバイクフォームで一直線に来れるでしょう」

「便利ですよねあれ…」

「しかもあれ、ハードボイルダーと同じでユニットくつつけられるみたいなんですよね。ダブルとの互換性が感じられます。あのアクセルメモリもダブルドライバーに対応してるようですよ」

「…今の私より、ついなさんの方がきりたんの相棒にふさわしいのでしょうか」

ふとそんな言葉がこぼれていた。きりたんは強くなってるのだ。不安定な私より、安定して強いついなさんの方がダブルは強くなれる、そんな気がする。と考えていると、ポコツとお腹を殴られた。見下ろすときりたんが怒り心頭といった顔で睨んでいた。

「馬鹿言わないでください」

「きりたん…」

「私の相棒は貴方だけです。冗談でもやめてください。…私は、ゆかりさん以外を信用できません。私を真っ向から叱ってくれた貴方と、今は亡き虚音イフしか信じることができななんです」

「あかりも、ついなさんもですか？」

「…あの二人も、私が悪魔だったと知れば手の平を返しますよ」

「きりたん…」

「それとも、私の事を見限りましたか…？私は、貴方の相棒にふさわしくありませんか…？」

「そんなことありません！」

裾を掴んで涙ぐみ見上げてきたきりたんに、思わずしゃがんで抱きしめる。この子は記憶がなく、唯一ある記憶も運命の子としてミュージアムに利用されメモリを作らされていたことしかないのだ。そんな自分に負い目を感じているきりたんを不安にさせてしまった。そ

れだけはしないと誓ったのに。

「ごめんなさい、弱音を吐いてしまいました。私達は二人で一人の探偵です。どうにかあのドーパントを攻略して、ダブルの不調も治しましょう」

「…また言ったら承知しませんからね。不安なのはわかりますけど」

「…はい。…そうだ、不安といえば事件の直前で鈴音さんが何かしらに困惑してましたね」

「困惑？」

「はい。私の名前も咄嗟に言えないぐらいに。窓ガラスに映った自分の顔を見たら妙に落ち着きましたけど」

「加賀見鈴音は何かを知ってしまった可能性が高いですね」

ですよね。聞いてみるか…：あ、噂をすれば。目の前の突き当りの廊下を歩いて行く鈴音さんが見えた。笑っていたかと思えば窓を見て我に返りそそくさと去って行く。あのやってきた方向は…：確か食堂？

キヤアアアアアアアアアッ！

次の瞬間悲鳴が食堂の方から聞こえてきて、きりたん顔を見合わせ頷くと一緒に走り出して急行する。悲鳴を上げていたのはフェイさんで、食堂の入り口で腰を抜かしている。

「どうしました!？」

「あ、あわ、あわわ…：刃金様が、刃金様が…！」

「これは…!？」

食堂を覗くと、料理を乗せられた机の上に仰向けに乗せられた雪さんが大きなシャンデリアに潰され絶命していた。血の池に沈んでいるその様はまるで人間を料理した様で、犯人の悪趣味さが際立っている。

る。

「まさか、鈴音さんが…!?」

「追いかけてみましょう!」

きりたんと共に来た道を引き返して鈴音さんを追う。まさか、あの鈴音さんが…? 俄かには信じがたい。私達が遭難した時に助けてくれたように、他人の事を考えられる人間だ。それがまさか…!?

「アハア〜」

「っ!?!」

次の瞬間、私達の背後からその巨体がのっそりと現れる。廊下が自動車一台ぐらいなら余裕で入れる広さのおかげで突っかからずどこかに向かおうとしているそれは、件のドーパントだった。

「きりたん!」

《ジョーカー!》

「フアングで行きましょう」

《フアング!》

「変身!」

そして私達はフアングジョーカーに変身、私の意識を失った身体が倒れて飛びかかる…がやはり右側が異様にパワーが高く体勢が崩れてドーパントに飛びかかってしまう。

「アハア〜邪魔よ!」

右肩のテイラノサウルスに噛み付かれて近くの部屋に投げ込まれる。人の気配を感じて横目で見てみると鈴音さんがガタガタと震えていて。…つて、ええ!?

「加賀見鈴音はドーパントじゃ、ない!？」

『っ、不味い!』

右肩のテイラノサウルスの口が開きそうだったので左腕を操りアップで無理矢理に口を閉じる。あれをされたら終わる。そのままきりたんが右腕でパンチをドーパントの顔面に叩き込むと、ドーパントは私達に取っ組みかかり大きな窓から外に飛び出した。嵐は弱くなっていたが、強く踏み込んだ右足がぬかるみに突っ込んで体勢が崩れてしまう。

「アハア！マヌケー！」

力任せに振るわれたドーパントの左腕の尻尾がまるで生き物の様になつて私達の胸部を強打、大きく突き飛ばされる。そして右肩のテイラノサウルスの顔を向けてきたのを見て咄嗟に動く右手がタクティカルホーンを一回叩いてアームセイバーを展開する。

《アームフアング》

《ルナー！マキシマムドライブ！》

『フアングムーンエッジ!』

そしてルナメモリを腰のマキシマムスロットに装填するとアームセイバーが伸縮して鞭の様に動かしてテイラノサウルスの頭部に巻き付いて拘束。開けなくさせた。

「よし、このまま…!？」

『っ、振り回される…!？』

しかしそれも一瞬で、フアングの力をジョーカー側で制御できずに振り回されてしまい拘束が緩みドーパントは脱出。その口を開いて

例の咆哮を放って来た。

「クルオアアアアツ!!」

「しまっ…ゆかりさん!」

『ああ、ああああああ!!』

案の定、再発した。闘争心が膨れ上がり、頭痛から逃れるために一心不乱に暴れる。左側が勝手に暴れ出したため振り回されるきりたんが必死に止めようと抗う。いつも私が抑えているのがまるで逆だ。

「アハハア!」

そんな私たちは格好の獲物だったようでドーパントの容赦ない、しかし理性の欠片もない荒々しい一撃がベルトに炸裂。メモリが弾け飛んできりたんの変身が解除され、地面に転がる。意識を取り戻して慌てて駆け寄ろうとするも頭痛で立つこともできない。ファングメモリもライブモードじゃないから動けない。誰もきりたんも守れない。そんな、やめてくれ。動け、動いてくれ私の身体。奴が爪と牙を鳴らしながらきりたんに歩み寄っているのに、動けないなんて。

「きりたん!」

思わず叫んだその時、エンジン音が鳴り響いた。

「よっしや間に合った!振り切るで!」

紅いバイクが横から激突、吹き飛ばされるドーパントの前でバイクは人型に変形する。現れたのはもう一人の水都の仮面ライダー、アクセルことついなさんだった。

第二十話：Fの嫁入り／五人目のピエロ

私とゆかりさんのピンチに駆けつけたのはアクセルこと如月追儼。アクセルはエンジンブレードでドーパントの右手の爪を切り弾くと拳を叩き込んで殴り飛ばす。

「クルオアアアアアッ!!」

「なんや五月蠅いなあ。黙らんかい！」

ゆかりさんの正気を失わせる咆哮を真面に受けてもピンピンしているアクセルは何度も何度もエンジンブレードを叩き込んでいくが、硬質な奴の身体には通じてない。やはりフアング・ドーパントなのだろうか：いや、何か違う気がする。

「アハハア？」

「くっ!？」

自由自在に伸縮する左腕の尻尾に弾かれ、大きく後退するアクセル。あのパワーに対抗するには……一か八かです。

「如月追儼！これを！」

「ん？おし、借りるで！」

《サイクロン！》

私を手渡したサイクロンメモリを受け取りエンジンブレードに装填。エンジンブレードに緑色の竜巻状エネルギーを纏わせ、ドーパントを斬り裂き大きく吹き飛ばした。

「なんてパワー……」

「やはり私と違ってついなさんは使いこなしている……?」

「馬鹿言うなや。うちも振り回されてるわ。このまま一気に決めるで

〜!」

《サイクロン！マキシマムドライブ!》

引き金を引いてマキシマムドライブ。もはや竜巻と化したエンジンブレードをふらつくドーパントに叩き付けんとするアクセルだったが、何かが背中から襲いかかりマキシマムドライブは中断。それは素早い動きでアクセルを蹴りつけるとコミカルな足音と共に、大ダメージで動けない恐竜ドーパントの横に並んだ。

「ここでこいつを倒されると困るんだよなア…」

それは一見、ジョーカーとスカルとアクセルを合わせた様を彷彿とさせていた。赤が主体の道化師のような恰好をしていて胴体には獅子の顔が描かれ、顔は異常に白く塗られ赤鼻がついたピエロの意匠の罽毬。先端が湾曲した靴の様な足から「pow!」とコミカルな足音を鳴らし、手袋の様な両手で二本のナイフをジャグリングしている新手のドーパント。

「なにもんや?」

「俺はただの殺人鬼さ。人呼んで「五人目のピエロ」だ、ヨホホイ!」
「なにがヨホホイやふざけるな!」

アクセルが斬りかかるが、「五人目のピエロ」と名乗ったドーパントはコミカルな足音と共にジャグリングしながらアクロバットな動きで跳躍、振り下ろされたエンジンブレードの刀身の上に乗ると口から炎を吐き、浴びたアクセルの装甲が小爆発を起こす。さらに横の斬撃をコントーション（身体を自由に曲げてみせる芸）で頭部を後ろから足の中に入れる驚異の柔軟性で回避。

「んなっ…!?!」

「頭が固いと俺の曲芸を楽しめないぜ!ヨホホイ!」

ロープを取り出し虚空に投げつけると空中で何もない所で固定してロープに掴まり空中ブランコのような動きでアクセルを蹴り飛ばし、転倒させると再び口から炎を吐いたかと思うとアクセルと自分の間に炎の輪を形成。

「それは!? ついなさん気を付けて!」

「があああああ!」

それに見覚えのあったのか警告するゆかりさんの声も虚しく、胸部の意匠が飛び出して実体化したライオンに食い付かれ、変身が解除されてしまう。このままでは食べられてしまう、といったところで頭痛がするであろう頭を振って動き出したのはゆかりさんだ。

「ついなさん!? きりたん、もう一度!」

《ジョーカー!》

「やむを得ませんね!」

《サイクロン!》

「変身!」

サイクロンジョーカーに変身。しかしやはり安定しなかったが、ゆかりさんは安定しない右側の拳を推進力に利用してライオンの頭部を殴り飛ばした。だがしかし、そのまま動けなくなってしまう。

「よしっ!...ぐっ!」

「俺の可愛いペットをいじめるなんてひどいなあ、お前なあ...今宵はここまで、ヨホホイ!」

動けないダブルをどう解釈したのか、そう言って丸い玉をジャグリングし始めたかと思えば地面に落として爆発。煙が発生し、風で吹き去る一瞬後には恐竜のドーパント共々「五人目のピエロ」を名乗った

ドーパントは消えていた。

「大丈夫か結月！」

「ちよつときついかもです…」

変身が解けて膝をついたゆかりさんに駆け寄る如月追儼。そのベルトを見ると、ライオンに噛み付かれたせいなのか破損して火花を起こしていた。これでは変身は難しそうだ。

「悪い。助っ人に来たのにこの様や」

「いえ、助かりました。貴方が来てなかったら今頃きりたんは…」

「ならよかったわ。…えーと、確か壊れたらビートルフォンに言つて送れつて言つてたな…ほな頼むで」

頭痛の痛みが残ってるのか頭を押さえながら如月追儼に礼を言うゆかりさんと、直す当てがあるのかアクセルドライバーをカブトムシに変形するスタッグフォンによく似たガジェット、ビートルフォンに運ばせる如月追儼を見ながら考える。…ピエロの方はともかく、あの恐竜のドーパントは不味い。何故か私と如月追儼には奴の能力は通じないが、ゆかりさんには致命的だ。それにダブルがまともに戦えない、アクセルも変身不可。このままじゃ、私を守るためにメインで変身するであろうゆかりさんが……それだけは嫌だ。

「…如月追儼。お願いがあります」

「なんや？エンジンブレードだけで戦えってんなら望むところやけど」

「いいえ。…私と一緒にダブルに変身してもらえませんか？」

「きりたん!？」

私が告げると驚いた表情を見せるゆかりさん。如月追儼は黙って続きを促してきたので続けた。

「今回の敵はゆかりさんじゃ敵いません。このまま戦ったらゆかりさんの心が壊れてしまう。…先程のサイクロンメモリの力を引き出した貴方なら恐らく、安定して…いや、前より強くダブルとして戦えます。だから…！」

「ふざけんなや、検索娘」

「え…？」

意を決して頼み込んだのだが、如月追儼はキレた。なんで。

「お前、結月以外を信用しとらんやろ。そんなやつとダブルになれ？冗談やないわ。もしそれでしかWのドーパントを倒せないとしてもうちはお断りや。いいか、方相氏はな。魔を祓うことに命を懸けて、仲間に命を預けて戦ってきたんや。仮面ライダーになってドーパントを狩る今でもそれは変わらへん。うちを信用してない奴に背中を、いや半分任せられるわけがないやろ」

「うっ、それは…」

「それに話を聞くとなんや？大事な相棒をこれ以上傷つけないからうちに代わりになれと？人を舐め腐るのもいい加減にせえよ。ダブルが不調やつて言うてたな。そりやそうやろ！お互いがお互いを大事にしすぎて息が合っておらんのやからな！相棒ならとことん信じ抜かんかいボケナス！」

「！！」

如月追儼に怒鳴られて目を見張る。見れば、ゆかりさんもこちらを向いていて。ああ、そうだ。相棒は守るものじゃない。私の方が頭がいいから、今は私の方が強いから、頼りにしていると言われて調子に乗っていた。忘れていた、私達は二人で一人前だった。

「…ゆかりさん、ごめんなさい。私、どうかしてました。貴女以外に私の相棒はいないというのに」

「…私もです。貴方の保護者でいるつもりでした。そうじゃありませんでしたね、貴方は私の相棒だ」

「強いだけのWに意味はない。貴方の優しさが必要です。…悪魔と相乗りする勇氣、今でもありますか？」

「もちろん。地獄の果てまで付き合つてやりましょうとも。貴方が私を相棒だと思つてくれる限り、私はもう絶対に折れない！」

笑顔で向かい合い、どちらからともなくそれぞれ右拳を握つて相手に向け、拳を打ち付ける。ダブルが不調だろうが関係ない。私の相棒はゆかりさんだけだ。二人で乗り越えないでどうする。

「きりたんはついなさんと一緒に雪さんが亡くなったことを九王さんたちに伝えてください。ついなさんはこの人達に刑事だと伝えてアライバイを聞いてもらえませんか。私はフェイさんと合流して、各部屋を巡つて手がかりを探します」

「わかりました。加賀見鈴音にもなんであそこに行ったのか聞いてみます」

「了解や。助っ人として仕事はするで」

そう決めて私と如月追儼はゆかりさんと別れ、広間へと向かった。

「…ここは弥美さんの部屋ですか」

ショックがデカすぎたのかフラフラと廊下を歩いていったフェイさんと合流した私は、最初の犠牲者である初峯弥美さんの部屋に赴いていた。

「はい、まさか大奥様が亡くなるなんて…」

「中を見ても？」

「ご主人さまから探偵さんが望むならどこにでも案内しなさいと言われております」

「ありがたい」

フエイさんの了承をもらい弥美さんの部屋の中に入るとシツクな赤と黒の部屋が広がっている。一見怪しい物は何もなかったが、妙に天蓋付きベッドの下の垂れてる布…マルチカバー？が乱れてるのを見つけて、布を上げてベッドの下を見てみる。

「これは…!？」

そこに置かれていたのは重厚な黒塗りの箱。開けると、拳銃型の機械の横に長方形の小さな穴が開いていた。これは、ガイアメモリのコネクタ手術を行う拳銃型装置…横の穴は入れられていたメモリか？なんでこんなものが弥美さんの部屋に？当の弥美さん本人が殺されてるのですか？

「……いや待ってください。なんでコネクタ手術の装置がここに…JTRの事件で装置ごと買った人がいましたが、本来は購入と同時に施術されるものはず……」

しかもこんな重厚な箱に入れられてるってことは大事にしまわれていったってことで……。

「フエイさん。この箱に見覚えは？」

「えっと、大奥様が寝る前に出しては眺めていたものかと…」

「中身は見ましたか？」

「えっと、Fという文字が見えた様な…」

「F、ですか」

恐竜かピエロのドーパントのメモリはイニシャルFと。…ふむ？
どちらかは知らないけど犯人は分かったかもしれない。いやでもま
だ確証がない。もしその人物が犯人だとしたら、時系列がおかしいの
だ。

「…まさかと思えますがあのだーパントは揺動で」

「本命のだーパントが別にいる、と？ありえなくはない
ですね」

あの時のきりたんとの会話が脳裏によぎる。揺動。本命。大事に
仕舞われていたメモリと手術装置。私を狂わさんとした恐竜のだー
パント。何故か悲鳴も上げずに燃やされていた弥美さん。何故か傷
口に対して異常に血が流れていた冷さんの死体。何故か食堂の机の
上に大の字に寝てそのままシャンデリアに潰された雪さん。…異様
な死体たち。まさか…。

「フエイさん。加賀見鈴音さんの部屋に案内してもらえませんか」

「わ、わかりました！」

一つの答えに行きついたかもしれない。ならば次は、乱入してきた
ピエロのだーパントの第一容疑者を探ろう。彼女が恐竜のだーパン
トじゃないことは二人同時に見たことから確定だ。だがしかし、ピエ
ロのだーパントは別だ。信じたいが、今一番怪しいのは怪しい行動を
していた彼女だけだ。

「きりたん。加賀見鈴音さんから話は聞きましたか？」

《「はい。気が動転してるからなのか、ここ最近たびたび意識が飛んで
知らない場所にいたりすることがあるそうです。本当ですかね？」》

「…嘘だと思いたくはないです」

《「ですよ。そう言うと思いました。他の人にも話を聞きますね」》

きりたんとスタッグフォンで電話してあちらの情報を聞く。…ま
だなにもわからない。何があるんだ、彼女に。そう考えながらフェイ
さんについていくと、扉が壊されてる部屋まで来た。

「ここです。扉と窓が破壊されてしまっているので後から部屋を変え
てもらおう予定ですが…」

「助かります」

フェイさんの様子を時折見ながら部屋を物色する。さすがは役に
入り込むと真に迫った演技が有名な女優の卵だ。こんな催しでも恐
らくドラマで使うであろう衣装に、恐らく次に撮影するであろうドラ
マの台本まで………うん？

「九十九のキョー面相…？」

台本のタイトルがどうしても気になった。駄目だと思いつつも
パラパラめくって中身を見ると、ごく普通の高校生の少女が、鏡を見
ると「五人目のピエロ」を名乗る凶暴な人格が目覚めて悪人を愉快に
容赦なく退治していく、二重人格が主体の物語、らしい。五人目のピ
エロのワードがここにあった。……意識が飛ぶ、知らないところに、
鏡、凶暴、二重人格？……まさか。鈴音さんと出くわした時の光景
が脳裏に思い出される。…まさか、そんなことがありえるのか？い
や、でも……。

「ゆかりさん、なにか見つけましたか？」

フェイさんを広間まで送り届けると、きりたんがやってきた。容疑
者たちはついなさんが見張っているようだ。

「犯人の目星はつきました。あとは恐竜ドーパントのメモリの正体が

掴めれば完璧です」

「なるほど。では検索開始です」

本はないため私の手帳を手にいつも以上に集中して意識を地球の本棚に繋げるきりたん。頑張っているんだなと痛感しながらキーワードを言っていく。

「キーワードは「テイラノサウルス」「精神攻撃」です」

「当たり前ですが普通にフアングやTレックスが出ますね。あのデカイ顔は普通に恐怖を与えます」

まあですよ。だが、被害者たちの共通点を考えれば答えは変わってくる。

「…最後のキーワードは「熱」。被害者の共通点です」

「…出ました。これが答えか」

そう言っ手帳にスペルを綴るきりたん。頭文字はフェイさんの証言通りというべきか、Fだ。

「frenzy。つまりフレンジー…『熱狂』の記憶です。能力は己に付与される熱狂による狂乱状態、即ち興奮状態の伝染です。このメモリを扱えるのは、同じような狂気を常に内包している者のみ」

「なるほど。納得いきました。これで答えは見えた」

「そしてもう一本のメモリは如月追儼の協力でわかりました。サーカスメモリ、と思われまます」

「まあそれ以外にないでしょうねあの能力は…」

真相は見えた。推理のお披露目と行きたいところだが……

「一人だけ。現行犯で捕まえない人間がいます。だからそのために

「……ちよつと体を張ろうかと」

「は？」

「犯人が分かりました」

もうすぐ明け方という時間。私ときりたんは容疑者たちとついなさんが待つ広間にやってきて、ついなさんと相談。ついなさんが配置についたことを確認するとそう宣言する。さあ、始めようか。

「まず、今回使われたガイアメモリは二種類あります。フレンジー、そしてサーカスです。一つずつ答えて行きましょう。まずフレンジーメモリの持ち主は……フェイさん、貴方です」
「っ!？」

私にビシツと指を差された途端、隠し持っていたであろうメモリを取り出してガイアウィスパーを鳴らそうとするフェイさんの手を掴んで捻り上げるついなさん。その手から零れ落ちたシルバーメモリを手に取り、皆に見せた。フェイさんは今までの大人しい様子が嘘の様に暴れるがっついなさんの拘束はビクともしない。

「放しなさいよ！な、なんで！私だと…!？」

「弥美さんの部屋での質問を覚えていますか？箱の中身を見ましたか、と。アレは本来、中身は見えませんでしたという答えが正しい。隠し事をしてる人が中身を確認してるんですよ？箱を開いた時に中身を見るのは背中や蓋に隠れて不可能です」

そう言っって持って来た例の重厚な箱を見せる。だがこれだけでは

ないのだ。

「まさか、フエイがおばばを…?」

「違います! 旦那様! 私は誰も殺してなど…! そもそもそのメモリは…!」

「そうなんです。フレンジー・ドーパントは実は誰も殺せていなかった。…いえ、フレンジーメモリ自体は殺せていた、が正しいかもですね」

「どういうことだい、結月探偵」

訪ねてくる九王さんに私は指を四本立てる。信じられないことだが、そう言う事なら納得がいくのだ。

「実は四人、フレンジー・ドーパントは存在したんです。いえ、四人どころではありませんが」

《フレンジー!》

そう言つて、テイラノサウルスの頭部でFと描かれたメモリのガイアウイスパーを鳴らす。すると九王さん以外の容疑者全員の額に生体コネクタが出現した。

「これは…!?!」

「これが答えです。死んでしまったので確認することはできませんが…恐らく弥美さんはガイアメモリ売買組織ミュージアムの協力者です。このフレンジーメモリは使用者と他者に熱狂を与えます。没落していくこの家を守るためにメモリの力を使っていた…その影響であの若々しさを保っていたと考えれば説明がつきます」

「おばばが!?! そんな…」

「それでも老いて行く身体を見て思ったことでしょう。自分が潰れてもなお、初峯家を守る人間が必要だ、と。それで花嫁候補を集めたというわけです。孫の伴侶兼後継者を見つけるために。フレンジーメ

モリは同じ様な狂気を内包してないと体に合わないメモリでもありません。そんなメモリを秘密裏に渡し、生き残りをかけて殺し合わせることで最強の後継者を見つけようとした…そんなところだと思いません。それに乗ったのが冷さん、雪さん、そしてフェイさんだった。だがしかし、ある想定外が起きてフェイさん以外が死んだ…。その証拠に、全員の死体にフレンジーによる影響がありました」

弥美さんは熱を籠らせたことにより自身が燃えてるとも自覚できずに死んでいった。冷さんは興奮状態による血流の活性化で大量失血。雪さんは恐らく変身しただけで熱狂に負けて机に倒れ込んだ、とここに潰された。多分こうだ。

「雪さんが死んだあと、一番近くにいたのはフェイさんでした。その時メモリを手に入れていたのでしよう。そのあと私を口封じのために襲ったって所でしょうか？ 施術を行ったのは恐らくこの屋敷に招き入れる時。一人で行えることではない、その時手伝ったのはメイドのフェイさん、恐らく貴方です。花嫁候補たちのみ施術されるはずだった生体コネクタが貴方にもあるのはその時こっそり自分にも施術したからでしょうか？」

「だって……だって、私も、私だって…旦那様の…九王さんの花嫁になりたかった…！」
「フェイ……」

泣きじゃくるフェイさんにみんなの視線が突き刺さる。…さて、次だ。

「今回の殺しは全部フレンジーによる熱狂状態の時に何者かに殺された、というのが真相です。その何者かがサーカス・ドーパント…即ち今回の事件における真犯人です。炎、刺殺、そして恐らくシャンデリアの落下も…全てサーカス・ドーパントの能力で説明がつきます」

少なくともフレンジー・ドーパントではできない芸当だ。これはおそらく間違いない。

「そしてサーカス・ドーパント…五人目のピエロを名乗ったその正体は…貴方だ！」

私が指差したその人物は、にっこりと笑みを浮かべるのだった。

第二十一話：Fの嫁入り／究極のダブル

「そしてサーカス・ドーパント…五人目のピエロを名乗ったその正体は…貴方だ！」

私が指差した真犯人、加賀見鈴音は余裕の笑みを浮かべる。それではわかった、この目の前にいるのは加賀見鈴音であって加賀見鈴音ではない。

「私はそのサーカス・ドーパント？そんな、ひどいですゆかりさん…」

「それです」

「え？」

「呼び方が気になってたんです。貴方は一度、私の名前が分からなくて改めて自己紹介すると「探偵さん」と呼んできました。まるで…広間での自己紹介を知らない様子の貴方にね」

「…そんなこと言いましたか？私、気が動転していて…」

「鈴音さんが気が動転していたことをいいことにそう演技してたんでしよう？貴方、変わるたびに表情が変わってわかりやすいんですよ」「待たんかい結月。なんの話をしてるんや？」

私達の問答に割り込んできたついなさんの言葉に、私は持って来たあの台本を見せる。「九十九のキョー面相」だ。それを見て目の色を変える鈴音さん。

「これは加賀見鈴音さんが次に出演するドラマの台本です。鏡を見ることで別人格が発現する二重人格を取り扱っている作品です。そして加賀見鈴音さんは役に入り込む天才女優として知られています」「まさか、役に入り込むあまり二重人格になってしまったと、そういうことか？」

「その通りです九王さん。この屋敷に来た時に彼女の優しさと思いやりを見たことで無意識に容疑者から外してましたが、まんまと乗せら

れました」

「で、でも証拠は？私が犯人だと言う証拠は…」

「実はずっと気になってました。貴方の頭に常につけられているその大きなリボン」

「っ!？」

指を差すと兎の耳の様にぴよこんと跳ねる鈴音さんの頭の大きな黒のリボン。大きさはちょうど、メモリがすっぽり入るぐらいの大きさだ。

「その中にメモリがあるんじゃないんですか？そして貴方は鏡を見ることで人格が入れ替わる！」

「ちい！」

《サーカス!》

私が腰に手をやるのと、加賀見鈴音がリボンからメモリを引っ張り出してボタンを押すのは同時で。左手の甲に出現した生体コネクタに突き刺す前に、私が突きつけた手鏡が奴の視線に入り、その手からメモリが零れ落ちる。

「……、は……？」

「鈴音さん！鈴音さんですか?!」

「探偵さん……？」

状況を理解してない様子できよろきよろと辺りを見渡している。そんな彼女に駆け寄りながらサーカスメモリを拾い上げる。これでフレンジーとサーカスのメモリは私が確保した。

「貴方は二重人格、だということを実感してましたか？」

「二重人格……ああ、だからか……もしかして、ここで起きた殺人は……」

「……辛いでしようが、もう一人の貴方の仕業です。……ついなさん、この

場合どうなるんでしょう?」

「二応同一人物やから逮捕することになるなあ。情状酌量はあるやろうけど」

「というわけだそうです。申し訳ありませんが、その…」

「…うん。私、罪を償います」

腑に落ちたらしい鈴音さんはそう言って悲しそうに笑った。空想のものにのめり込んで犯罪を起こす輩は沢山いる。彼女もまたその一人、納得しきれないが納得するしかないだろう。そう、ついなさんがフエイさんと鈴音さんに手錠をかけようとした、その時だった。

「あーあーあー困ります! 困りますよ刑事さん! 探偵さん! いいや、仮面ライダー!」

「!?!」

黙っていたかと思えば突然喋り出した人物: 桜乃空の発言に、私ときりたん、ついなさんの視線が向く。仮面ライダー? とざわついている九王さんと涙さんは知らないのはいい、だけどこの女は…何故、知っている? 桜乃空は怒り心頭といった顔で髪をふんわり縛っていた組み紐を外していく。

「困りますよー、せっかく花嫁候補を皆殺しにして愛を勝ち取る狂乱したメイドさんか、皆殺しにして高笑いを上げる五人目のピエロを名乗る殺人鬼: そのどちらかのエンディングを生で見られると思ったのに! なんて邪魔してくれやがるんですか! 正気ですか!」

「それはごっちの台詞や物書き。面白ければそれでいいんか? 人が死んでるんやぞー!」

「そんなのこの水都じゃ日常茶飯事じゃないですかー。それでもこんな貴重な場面、中々ないんですよ? なーのーでー、邪魔者を始末してどうなるかを見てみましょうか」

そう言つて桜乃空が髪の中から取り出したのは氷柱でWと描かれたシルバーメモリ。それを見て目を見開くついなさん。まさか、まさか。さらに取り出した銀色のバックルを腹部に装着してベルトにしてメモリを鳴らす桜乃空。

《ホワイトアウト!》

そしてメモリを挿入すると、桜乃空の姿が純白のイブニングドレスを着た全身が凍てついた女性的なフォルムで白熊を思わせる装甲を身に着けた美しい妖精、とも言うべき姿のホワイトアウト・ドーパントとなり両手を胸の前に置いて間に冷気を集めて行く。

「ミュージアムの幹部がこんなところに:!?」

「お前、お前がWのメモリの持ち主だったんか:!!」

「五人目のピエロ。貴方の殺人、痺れました!まだまだ見せてください!」

ついなさんがフェイさんの拘束を外してエンジンブレードを手にホワイトアウト・ドーパントに突っ込んだ瞬間、冷気が爆発して視界が真っ白に染まる。まさしくホワイトアウト。すぐ近くでパキパキという音が聞こえる。冷気の煙が晴れると、私ときりたん、フェイさんと鈴音さんの目の前には巨大な氷塊が形成されていた。表面が磨かれていて、まるで鏡……しまった!?

「ハハハ……ハハハハッ!」

次の瞬間、笑い出したかと思えば蹴りを入れて氷塊の表面に罅を入れる鈴音さん……否、五人目のピエロ。咄嗟に手鏡を取り出すが蹴り飛ばされ、手にしていた二本のメモリも手放してしまう。

「ヨホホイ!礼を言うぜ小説家!こいつは返してもらおうぜ!しかし名

推理だったなゆかりさんよお！」

二本のメモリをキャッチして勝ち誇りながらそう笑う五人目のピエロ。取り返そうとしたきりたんを蹴り飛ばしながら殺人鬼は続けた。

「俺はこのサーカスメモリを鈴音が周囲からのプレッシャーに耐え切れずに使ったことで生まれた別人格だ。生憎とメモリを使った記憶は忘れてしまったがなあ？ 今回の最初の事件なあ、あの婆さんは俺の：いや、鈴音の身体に施術した時に偶然メモリを見つけてよ！ 鈴音に成りすましていた俺に次のフレンジーにならないかと誘ってきたんだ！ だが俺のメモリはサーカスだけだ。冗談じゃないと一蹴したら口封じのつもりなのか襲って来てな？ 返り討ちにして燃やしてやった！」

それが最初の事件か。視界の端でついなさんがエンジンブレードでホワイトアウト・ドーパントに斬りかかって避けられ拳を入れられてる姿が見える。変身できないのに無茶な。

「なら、なんで冷さんが!?!」

「そこに居合わせたあの女だがな？ 俺を鈴音だと気付かなかったのか、これを使って他の花嫁候補を殺してみないか？ と誘ったら快く承諾してよ。だがアンタらと戦って逃げた後に偶然出くわした俺を風呂場で殺そうとしてきたもんで、変身してナイフで刺して返り討ちにしてしまったんだなこれが！」

立ち上がろうとしながら尋ねると語ってくれる五人目のピエロ。勝利を確信しているようだ。

「そのあと雪って女にメモリを持ちかけてみたんだがな？ あの女はメモリを使った瞬間熱狂して机に倒れ込んでしまったからばれるのを

危惧してシャンデリアを落として殺害、したら料理を準備しようとしていたそのメイドに見つかってなあ。羨ましそうに見てくるもんでメモリを渡して自室に戻ったところをアンタらに見られたわけだ。ほら、メイド！ここで終わる気はないだろう!？」

《サーカス!》

「わたしは……九王様の花嫁に……ウアアアアアアアアアアツ!」

《フレンジー!》

止める間もなく、五人目のピエロは右手の甲にメモリを突き刺してサーカス・ドーパントに、フェイさんは額にメモリを突き刺してフレンジー・ドーパントに変貌してしまう。止められなかったけれど、今から止めて見せる。私が……いや、私達が!

「ぎりたん!」

《ジョーカー!》

「いきましよう、ゆかりさん!」

《サイクロン!》

「変身!」

私ときりたんは並び立ち、サイクロンジョーカーに変身。二体のドーパントに立ち向かう。

「お前が、お前がうちの仲間を……!」

「変身しないんですか? そうだ、できないんですか?」

方相氏の方で全力で振るうエンジンブレードが、一瞬白く染まって床が凍り付き形成された剣の山の一本を手にしたホワイトアウト・

ドーパントに受け止められる。力を入れて碎けばまた別の剣を手に取り応戦を繰り返す。ようやく見つけた仇なのに、遊ばれている…!

「なるほどなるほど。その重量の剣はさすがに受け切ることができないと。もう少し硬度を上げるべきですねえ」

「自分、なに人と戦ってるのに分析してんねん!」

「これは実験だからですよ。仮面ライダーアクセル。貴女方、方相氏の力でどこまで私と張り合えるのか、というね」

「クソがあ!」

怒りのままに叩きつけて粉碎、したところにもう片方の手に握られていたナイフ型の氷が咄嗟に退いたうちの腹部を軽く斬り裂いた。血が滴る。並大抵では傷付かない方相氏の肉体に容易く傷をつけた。おった。

「うちは、お前を倒すまで死なへんぞ…!絶対なあ!」

「ほう!なら試してみましようか!」

ナイフ型の氷を捨てて氷剣を二本握り、さらに冷気を吹き荒させて周囲に複数の氷の刃を展開、連続で生成しつつ一斉に飛ばしながら自分から斬りかかってくるホワイトアウト・ドーパントの斬撃と、刃の雨を何とか受け止める。こいつ自身が斬るではなく突く動きはいやらしいことこの上ない。

右肩を貫かれ、左足に刃が掠り、パキパキと右肩と左足が凍って行くのを感じて万事休す、かと思いきや。視界の隅にこちらに突っ込んでくるビートルフォンが見えて。左腕で握ったエンジンブレードを渾身の力で振り上げてホワイトアウト・ドーパントを吹き飛ばし、ビートルフォンが落としたアクセルドライバーを手に取り腹部に取りつける。完全に修理されておる、さすがやな。

《アクセル!》

「待たせたな桜乃空！さあ、振り切るで！変…身！」
《アクセル！》

変身と同時に凍てついた体の氷も溶け、エンジンブレードを構える。ようやく見つけた仇や、ここで倒す！

変身と同時に外に飛び出した私達。サーカス・ドーパントの火炎放射とフレンジー・ドーパントの爪が襲いかかる。

「動きが…よくなった！」

『これなら行けます！』

ついなさんに叱咤されてから初めての变身。ダブルの不調が治った。自由に動ける。サーカス・ドーパントとフレンジー・ドーパントの2人がかりの攻撃も捌いて行ける。

「ヨホホイ！プレゼントフォーユー！」

「死ねえ！」

サーカス・ドーパントがジャグリングした二つの爆弾を投げつけ、フレンジー・ドーパントは左腕の尻尾を伸ばして攻撃してきたが、爆発は跳躍で避け、尻尾の攻撃は蹴り飛ばして迎撃。何時もより動きが
いいまである。

「クルオア…」

『させるか！』

「背中ががら空きだぜ！」

「ぐっ!?!」

フレンジー・ドーパントの右肩のティラノサウルスが咆哮を上げようとしていたので顎を蹴り上げて阻止。しかし背中に投擲されたナイフを刺されて動きが止まったところにフレンジー・ドーパントの右手の爪の一撃を受けて吹き飛ばされる。

「復活したとはいえ1VS2はきついですね」

『如月追儼は幹部を相手にしてますし、どうしますかね』

ナイフを抜いて構えを取って二体から距離を取る。片方を攻撃すればもう片方の攻撃を受ける、しかもどちらも洒落にならない火力だ。しかもフレンジー・ドーパントは放っているとあの咆哮が来るため是が非でも止めないといけない。攻めあぐねている、どうしたものか。

「ヨホホイ！終わりだあ！」

火の輪を展開したサーカス・ドーパントから飛び出したライオンが襲いかかり、アッパーでかち上げる。しかしその隙をついてフレンジー・ドーパントがティラノサウルスの口を開いて咆哮を放っている。

「っ!?!」

思わず身構えたその時、私達とフレンジー・ドーパントの間に割り込んだ何かが咆哮を鳥の様な鳴き声で相殺させた。

「え?」

『これは……エクストリーム、メモリ』

「エクストリームってなんですかきりたん!?!」

『いえ、何故か知っていて…って!』

割り込んできた鳥の様なメカはそのまま屋敷の中に入ると窓から見えるきりたんの身体を粒子化させて取り込み、戻ってきた。あまりの出来事に一瞬固まる私達。

「き、きりたんの身体あああ!?!」

『落ち着いてくださいゆかりさん!これを、使いましょう!』

「この殺人鳥を!?!」

『違います、私の肉体を中に取り込んだだけです。これを使うことで私達は本当の意味で一心同体になる、と知らない記憶が言ってます!』

「きりたんが言うなら信じますよ!」

きりたんが言うのでエクストリームメモリを装填しようとドライバーを変形させるとジョーカーメモリとサイクロンメモリが入ったスロットから二本の、緑と紫に輝く光の柱が立ち上り、エクストリームメモリはそれに重なるとレールの様にして降下。サイクロンメモリとジョーカーメモリを取り込みメモリの様な形状になつて足をついてドライバーに装填、勝手に展開する。

《エクストリーム!》

『なんですか、この沸き起こる力…!まるで地球そのものと一体化したような…!』

「それだけじゃない。私たちの、心と体が…!」

「『一つになる!』」

するとダブルの中央が輝き出し、荘厳なメロディーと共に私の身体ときりたんの身体が重なる感覚を得ると同時に中央のラインに手をかけると、力の限り開き白い輝く装甲クリスタルサーバーが現れ頭部の形状も変わる。私は、いや、私達は…ダブル!

「名付けて仮面ライダーダブル、サイクロンジョーカーエクストリーム」

私の口から二人の声が重なって聞こえる。きりたんゆかりさんと一つになった私をなんと呼称すればいいものかわからない。だが文字通り二心同体となった今の私達なら、行ける！

「プリズムビッカー！」

私が手をかざすとクリスタルサーバーから、四隅と上部にマキシマムスロットが取り付けられた盾プリズムビッカーが現れて握られる、怖気づいているフレンジー・ドーパントに歩いて行って殴りつける。テイラノサウルスの口も開こうとするのを見るなり殴りつけてやめさせ、私はクリスタルサーバーから現れた結晶の記憶が封じられたプリズムメモリを鳴らし、プリズムビッカーの上部の柄のスロットに装填。

《プリズム！》

「解析完了。もう貴方の咆哮は通じない」

上部の柄を引き抜いてプリズムソードとビッカーシールドに分離して、咆哮に向けて斬撃を繰り出して防御してプリズムソードの鰐部分にあるボタンを押す。

《プリズム！マキシマムドライブ！》

「プリズムブレイク!!」

プリズムメモリによって発生したエネルギーを纏った剣身でそのままフレンジー・ドーパントを斬り飛ばした。この形態は地球の本棚に直結している。相手の能力を閲覧し、その上でプリズムメモリを使

うことで敵ドーパントの解析済みのガイアメモリの能力を無効化する一撃を放ち、フレンジー・ドーパントの咆哮を完全に無効化。フレンジー・ドーパントは吹き飛ばされた先で呻くと爆散。ブレイクされたメモリが散らばりフェイさんが倒れた。

「ふざけんなよ仮面ライダー！」

「ふざけてるのは貴方です」

サーカス・ドーパントが火球を放ってくるがビツカーシールドにプリズムソードを納刀したプリズムビツカーで容易く防御する。完全に検索済みの攻撃はちゃんと防御することで完全に防げる。きりたんがよくやるゲームで言うチートだ。

「二重人格であるのをいいことに、何も悪くない加賀見鈴音の身体を使つて三人も殺した。なんとも度し難い。メモリから生まれた悪魔なら、メモリを破壊することで消し去つてやりましょう」

「はいそうですかって倒されてたまるかよ！俺は五人目のピエロ……面白おかしく観客を楽しませながら人を殺すことが存在意義なんだよお！」

「お前の大道芸で喜ぶのは当の本人だけです！さあ、お前の罪を数えろ！」

炎、ナイフの雨、ライオン。全ての攻撃を防ぎながらプリズムビツカーの四隅のスロットにメモリを装填させていく。

《サイクロン！マキシマムドライブ！》《ヒート！マキシマムドライブ！》《ルナ！マキシマムドライブ！》《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

「ビツカーファイナリユージョン！！」

するとプリズムビツカーの中心にエネルギーが集まって七色の破

壊光線を放ち、空中ブランコのアクロバティックな動きで避けようとしていたサーカス・ドーパントを撃ち抜き、爆散。

「すずねっ、鈴音エエエエエ!?」

本来の己の名を叫ぶ断末魔を上げながらその姿が加賀見鈴音へと戻り、落ちてきたところを横抱きでキャッチ。メモリの破片が流星群の様に落ちてきてキラキラと輝いた。加賀見鈴音を地面に寝かせて、思い出す。

「「そっだ、如月追雛ついなさん…!」」

《アクセル! マキシマムドライブ!》

「アクセルグランツァー!」

「はーい残念。ハズレー!」

私が駆けつけると、すっかり氷漬けの漂白された世界となった広間でアクセルが必殺技を放つも喰らったホワイトアウト・ドーパントが砕け散る光景があった。あれは氷の偽物か。九王さん達はさすがに逃げたようだ。

「能力を把握しても技量でカバーする相手…エクストリームでもきつい、か…?」

「あれ…? なんですかその姿。もしかしてダブル? もしかしてあの二人、ヤラレチャツタ?」

私の姿に気付いたホワイトアウト・ドーパントが漂白された虚空から現れる。白に溶け込む能力…ホワイトアウト。検索してわかりま

したが強力なメモリです。

「そこにいたか、お前…覚悟せえや…：…がはっ」

アクセルはそれを見つけて今度はエンジンメモリをアクセルドライバに装填してマキシマムドライブを発動しようとするが、疲労が溜まったのか強制的に変身が解除されて転倒し、慌てて駆け寄って受け止める。周囲を見れば、壊された氷像の様な物がいくつもあった。まさかこれ全部にマキシマムドライブを使ったというのなら、そりゃ倒れて当然だ。

「ああ、せつかくのネタが…ひどいことしますねダブル…：と言いたいところですがその姿。ついにエクストリームに至りましたか、あの方にいい報告ができます」

「逃がす気はありませんが？」

「残念。私はもういないのです」

プリズムソードで斬りかかるが、ホワイトアウト・ドーパントが砕け散る。これも氷像…：この広間全体が白い霧に包まれている。既にこの「白」に溶け込んで逃げられていたらしい。自身の空間を形成すればいくらでも武器を生成し、どこにでもいるという厄介な相手だ、あれがWのメモリの持ち主…：ついなさんの仇。そう考えながら変身を解く。…と私ときりたんは変身解除と同時に分離、二人して床に降り立った。エクストリームメモリはどこかに去って行くがまた会えるだろう。

「とりあえず、凶行を止められてよかったですと思いますしよ」

「はい。如月追儼…：いいえ、ついなさんにも礼を言わなきゃいけませんね」

きりたんの呼び方が変わった。どうやらついなさんがある程度信

用することにしたと分かるその変化に、私は笑みを浮かべるのだった。

あのあとは大変だった。水都署の警官たちがやってきて加賀見鈴音さんとフェイさんの逮捕をしたのはいいが、現場検証に付き合わされた。バットショットの写真も全部提出したから勘弁してほしい。鈴音さんとフェイさんはメモリ使用のことだけ咎められることとなった。なにせ黒幕である弥美さんと五人目のピエロが死んだのだ。鈴音さんは自分の罪だと受け入れるらしい。彼女がこれからどうなるかは神のみぞ知ることだろう。

九王さんは誰も選ぶことなく、屋敷も財産も売り払うことを決めたらしい。弥美さんの闇稼業で手にいれていた様な物である屋敷を残しておくことを許せなかったのだろう。あの人は誠実な男だ。あのあと涙さんと何やら話していたので、近々いい報告があることを期待したい。

「サイクロンジョーカーエクストリーム、ゆかりさんときりたんが二心同体になった姿…私も見たかったなあ!」

「そのうち見れるでしょう。悲しいことに、この街は桜乃空が言っていた通り犯罪に塗れている」

「アイツのことだ、どうせ我慢できなくて事件に関わってくるはずや。そこを叩く」

そう言うのは元気な姿のついなさん。かなりの負傷を負ったようだが普通に治ったらしい。方相氏って軽く人間やめてませんか? それ

から桜乃空は指名手配されたが、行方を晦ませたらしい。ついなさんの言う通り、あの性格ならまた会うだろう。そのときにシャーク、エクスターシー等と共に決着をつけたいものだ。

「…ゆかりさん。考えたんですが、やはりあのことはあかりさんと…ついなさんに話すべきじゃないでしょうか」

「きりたん、いいんですか?」

「ゆかりさん、きりたん? あのこととは?」

思い立った様子のきりたんに首を傾げるあかり。言うんですね、ついに。

「融合したことでゆかりさんが既に覚悟を決めていたことを図らずも知ってしまいました。私も、覚悟を決めました。この二人を信用します。だから、話したい」

きりたんの覚悟を受け止め、私も意を決する。あかりにおやつさんの死を教える事にもなるが…致し方ないだろう。何時までも隠しておけない。

「…わかりました。あかり、ついなさん。聞いてもらえますか? 私達の出会い、そしておやつさんと別れた運命の日…レギンスナイト始まりの夜を…」

ボイロ探偵W設定（第十三話〜二十一話まで）

・結月紫／仮面ライダーダブル

新しくやってきたついなとは喧嘩友達みたいな関係。ついなは暴走は自分が止めなければいけないと考えている。精神攻撃への耐性が皆無。怒りの力でジョーカーメモリのエネルギーを引き上げた他、きりたんの事を心配し過ぎてバランスを崩していたがついなは叱咤で克服した。

・きりたん／仮面ライダーダブル

ついなをフルネームで呼んで信用していなかったが叱咤されたことで信頼する様になる。精神攻撃への態勢がある他、エクストリームメモリの記憶を何故か有していた。ジョーカーメモリに呼応するかの様に右側のエネルギーが増していた他、ゆかりに依存しすぎてその身が傷つくことを危惧するあまりバランスを崩していたがついなは叱咤で克服した。ゆかりとイフしか信頼してなかった形からついなとあかりも信頼し過去を語る。

・継星燈

新しく琴葉神社のアルバイトを始めた。縁の下の力持ち。イフの死をようやく知る。

・如月追儼／仮面ライダーアクセル

国家特別捜査官の方相氏で階級は警視。怪奇事件専門の捜査官で基本的に「鬼」を退治してきた。国に仕え鬼退治を生業とする方相氏だったが、仲間をホワイトアウト・ドーパントに殺されたことで仇を取るためにドーパント狩りをしていた末に水都にやってきた。方相氏としての力でエンジンブレードを軽々と振り回す。上記の経緯から殺人鬼を許すことができず殺してでも止めるスタンスだったが、ゆかりとの会話で仇以外は殺さず逮捕する方針にした。よく重症を負うが方相氏故に割とすぐ治る。普通の人間ではない。ホワイトアウト・ドーパントと出くわしたときには二十連マキシマムドライブという無茶をしてぶっ倒れた。

・月読哀

ついなを寄越してきりたんと組ませようと目論んでいた童女。ゆかりを目の仇にしている。デندنセンサーの設計図をきりたんに送ったり、エクストリームメモリの出現を確認したり、アクセルドライバーを修理したりした。よく鳴花ーズに入り浸ってる。ゆかりときりたんがエクストリームに至るのは想定外だし、なんならついなが予想外にダブルを認めてたのも想定外と地味にポンコツ。

・有阿緒音ありあ おおね

ついなに噛み付いた後に警視だと知って謝り倒した人。エルドラド事件のあと数日休暇を取っていた。

・不破花ふわ はな

ついなついなの部下になったがそんなに気にしてない。

・小春六花こはる りつか

「遠柵理奈の同級生だったが運よく狙われずにすんだ。

・昭胤流子あきたね りゆうこ

ゆかりが頼りにする情報屋の一人。ただし代金が高いため切羽詰まった時しか頼らない。ネットの特に掲示板に精通しており9つのニュースサイトの管理人でさらには140のツイッターアカウントを持ち合わせ、着火や火消などを自在に行えるやべーやつ。普段は家に籠るか気晴らしに水都タワー前公園に來ていることが多いニート。株で金を稼ぐのが趣味。元キャラは初音ミク亜種の亞北ネル。

・東北純子／アルテミス・ドーパント

姉に言われてユミカルチャーの証拠隠滅をしていた。葉常美來が主治医であり「救済」されそうになったので抵抗した。癩癩持ち。

・東北蛇門／エクスタシー・ドーパント

姉に言われて弓弦伊織の援護しに現れた。狂人。

・東北星香／シャーク・ドーパント

名前こそ出なかったもののせつせと仕事していた。JTRやバステト、サーカスは彼女が売った物。

・東北奏楽／ホワイトアウト・ドーパント

東北家の養子にして水都が誇る小説家でペンネームは「桜乃空はるの そら」。その正体はミュージアムの幹部にして始末人。ドーパント事件を元

にして小説を書いている好奇心の塊。面白いことが好きでそのためならば何でもする狂人。ウエザー・ホツパー枠で、ついなの仲間を自分のメモリの実験で殺していた張本人。初峯九王に見初められ花嫁候補となりフレンジーの生体コネクタを付けられていたものの、面白くなりそうだったら自分が使うかー程度の認識だった。そしたら面白いことになったためずっと観察してメモしていた。

——ここからネタバレ注意

●第四章「復讐鬼A」の登場人物（Aはアクセル）

・遠祢理奈／JTRドーパント

潮風高校の二年生。アルビノな上に虚弱体質であり、それを隠すため奇抜なファッションをしていたが春に注意され、劣等感を刺激されて殺意に目覚める。父親が自分のために購入したメモリで殺人を犯したことで血を見ると生の実感を得ることに気付き、JTRが真価を発揮できる歩歌路町の路地裏で連続殺人を行った。本来は理性的で真面目な少女だった。元キヤラは怨音リナ。

・遠祢照

理奈の父親。ヘビースモーカーで「頭が痛いぜ」が口癖。妻が死んでおり、残された娘である理奈を思ってメモリを買ったが裏目に出ってしまった。元キヤラは本音デル。

・明峰春

第一の被害者。潮風高校の二年生で委員長だった。元キヤラは初音ミク亜種の亜北ネルと弱音ハクを合わせた亜種の秋音ハル。

・沖田寝郎

第二の被害者。潮風高校の二年生だった。元キヤラは初音ミク亜種の亜北ネルの亜種で弟の亜北ネロ。

・第三の被害者

ゆかりたちがJTRドーパントと初遭遇した時に殺されていた人

物。特に設定なし。

・ JTRドーパント

『切り裂きジャック』の記憶を宿したドーパント。人物というか幻獣のメモリで、正体だと思われるものの要素が混ざったキメラみたいな姿をしている。腕時計からどんなものでも容易く切断する針型のメスを取り出し、ハイヒールと共に怒涛の攻撃を繰り出す他、驚異的な跳躍力や靄に包まれ瞬間移動することが可能。しかし路地裏でしかその能力は発揮できない。正体は遠祢理奈。

●第五章「Eがついて来る」の登場人物（Eはイレイザーの他にエゴイストなど）

・ 琴葉茜ことのはあかね

第五章の依頼人。琴葉神社の巫女さん。目に見えないストーカーに悩まされていた。人を惹きつける様な元気の塊。ゆかりが高校生だった頃の潮風高校で妹と二人揃ってアイドルみたいに人気でその頃からストーカー被害を受けていたがゆかりやマキなどに助けられていた。事件後は葵や伊織からの異常な愛を知ってなお咎めようとはせず、一人で巫女を続けている。元キャラは琴葉茜。

・ 琴葉葵ことのはあおい／バステト・ドーパント

琴葉神社の巫女さんで茜の双子の妹。ゆかりと同級生で共に茜を守った仲。茜がストーカーに悩まされていると聞き、話から噂の怪物だとわかったため解決するために自身もメモリを購入、ドーパントとして茜を守ろうとしたところダブルと遭遇し戦闘になる。その際ゆかりが件のストーカーだと謎解釈し排除しようと暴走する。倒された後は和解してゆかりに協力し茜救出作戦の要となる。姉の事は見続けたから姉を真似れると豪語するほど茜を溺愛している。元キャラは琴葉葵。

・ 弓弦伊織ゆづるいおり／イレイザー・ドーパント

琴葉神社のアルバイトでゆかりとも顔見知り。温厚な好青年だがその正体は情報調査会社ユミカルチャーの社長、弓弦重三ゆづるじゅうぞうの息子で御

曹司にして茜のストーカー、イレイザー・ドーパント。社会勉強のためフリーターとして活動中だったが、高級アパートに住んでたり甘やかされてる。欲しいものは何でも手に入れてきたと豪語し、微笑みかけてきた茜も手に入れて当然とのたまう真正の馬鹿。元キャラは一応伊織弓鶴だが容姿だけで別物。

・バステト・ドーパント

『バステト』の記憶を宿したドーパント。金と黒に彩られた、長い金髪と純金の瞳が特徴の細身で人型の黒い毛並みの猫という見た目で神具の様な金の装飾が特徴。シストルムによる見えない音の斬撃と、目から放つ熱線が武器。ただでさえ火力が高いが組み合わせで強力な技に昇華する。変身者は琴葉葵。

・イレイザー・ドーパント

『消しゴム』の記憶を宿したドーパント。消しゴムと怪盗を融合させた様な姿をしてる。右腕の消しゴムから光弾「イレイザーショット」を放つてありとあらゆるものの姿を消したり、その際生じる消しカスで武器を作ったり、巨大消しゴムを生み出してバリケードにしたりできる他、普通に光弾で攻撃も可能でゴムの身体で物理攻撃をある程度軽減できる。モチーフはエグゼイドのソルティバグスター。変身者は弓弦伊織。

・エクスタシー・ドーパント

『歓喜』の記憶を宿したドーパント。ミュージアムの幹部。やたらテンションの高い子供の様なやつ。出る作品間違えてるんじゃないかってレベルでやたら強い。モチーフは変態仮面とフランケンシュタインの怪物。

●第六章「Fの嫁入り」の登場人物（Fはフレンジーの他、狐のフォックスなど）

・音街ウナ

歩色町のアイドル。10年前に亡くした親友のことを綴った歌「ロストメモリーデイ」で小学五年生時にブレイクした。ラジオ番組「音

街ウナのポジティブ★ワールド」のMCもしている水都のアイドル。元キャラは音街ウナ。

・加賀見鈴音かがみすずね／サーカス・ドーパント

九王に招待された新人女優。役にのめり込む天才として有名。周囲からのプレッシャーに負けてサーカスメモリを使用してしまったことで鏡を見ることで男人格と入れ替わってしまう二重人格になってしまった。ゆかりのことを「探偵さん」と呼ぶ。元キャラはVOCALOID2の鏡音リン。

・五人目のピエロ／サーカス・ドーパント

鈴音の中に生まれた男性人格でドーパントになったことで生まれた人格。鏡を見ることで人格が入れ替わるため、本編での鈴音はほとんどこつち。面白おかしく観客を楽しませながら人を殺すことが存在意義。一人称は「俺」でゆかりのことを「ゆかりさん」と呼ぶ。元キャラはVOCALOID2の鏡音レン。

・初峯九王はつみねくおう

水都外れの山間村に住む水都でも指折りの富豪「初峯家」の当主。自分の嫁候補を集める。面食いだがイケメンで人格者。元キャラは初音ミクの性転換キャラである初音ミクオ。

・初峯弥美はつみねやみ／フレンジー・ドーパント

見た目は若い九王の祖母。初峯家の先々代当主。息子夫婦を失い自身の死を予感し九王の嫁を見つけるために画策、嫁候補を集める。フレンジーのメモリの本来の持ち主であり、メモリの影響で若々しさを保っていた。最初の犠牲者。元キャラは初音ミク亜種の闇音アク。

・フェイ／フレンジー・ドーパント

機械的なメイドで九王と弥美に仕えている。第三のフレンジー・ドーパントであり、自身が九王の花嫁になるべく暴れた。元キャラはスーパーロボット大戦UXに登場する初音ミクとフェイ・イエンが融合したフェイ・イエンHD。

・桜乃空はらのそら／ホワイトアウト・ドーパント

水都を代表する小説家。九王に招待された。実は東北奏楽のペンネームであり、最初はフレンジーが誰になるのか観察していたが五人

目のピエロが現れたことで事件の行く末を楽しんでずっとメモしていた。

・刃金雪／フレンジー・ドーパント。

破天荒な一人称「オレ」のロックシンガー。九王に招待された。第三の犠牲者。フレンジーメモリの効果で狂い果て、シャンデリアに潰された。元キャラは初音ミク亜種の鋼音ミク。

・徒影涙

物静かなバイオリニスト。九王に招待された。今回唯一まともだった人。元キャラは鏡音リン亜種の影音レイ。

・景山冷／フレンジー・ドーパント

姉御の様な性格のファッションモデル。九王に招待された。第二の犠牲者。本編最初のフレンジー・ドーパントだったがダブルと戦っているうちに正気を失い、鈴音を襲ったが五人目のピエロに返り討ちにされる。元キャラは鏡音レン亜種の影音レイ。

・フレンジー・ドーパント

『熱狂』の記憶を宿したドーパント。シルバーメモリ。白黒のテイラノサウルスを横にしたような見た目をしておりファングドーパントと間違えられた。変身者を熱狂させる副作用があり、血流が速くなったり快楽に飲まれたりするため適合しないと危険な状態になる。能力は大興奮させて狂気に陥る自身の状態「狂乱状態」の感染であり、右肩のテイラノサウルスの咆哮を受けた人間に伝染させる。また右手の鋭い爪と左腕の尻尾を伸ばしての攻撃もできる。モチーフは爆竜戦隊アバレンジャーのアバレンオーと、獣電戦隊キョウリュウジャーのキョウリュウジンとファングメモリ。

・サーカス・ドーパント

『大道芸』の記憶を宿したドーパント。ジョーカー・アクセル・スカルを合わせたような姿をしており、ナイフの投擲や火吹きにライオン召喚などの攻撃に加え、予測できない回避やアクロバティックな動きも行う。また本編では使用しなかったがコマンド兵のようなクラウン・コマンドを生み出し使役できる。しかし能力に長けているだけに見切られた場合の防御力の低さが難点。変身者は加賀見鈴音。

・ホワイトアウト・ドーパント

『漂白』の記憶を宿したドーパント。一定空間を絶対零度にする能力を持ち、己のテリトリーに変えて、自由自在に氷で武器や氷像を展開することができる。並大抵の炎では溶けず無限に生成することができる。触れたものを文字通り漂白させて殺害することも可能。さらに「白」に溶け込むなど圧倒的な能力を有する。コンセプトは「氷雪系最強ドーパント」であり作中最強クラス。シルバーメモリでさらにドライバーを使用してるのだが、本人の研究で直刺しと変わらないどころかそれ以上の出力を引き出した。変身者は東北奏楽。

過去の記録S

第二十二話：Sの終演／バケモノと呼ばれた探偵

それは、私が初めておやっさんと出会った話。10年程前：私が小学生の頃ですかね？水都市民ホールで当時の歌姫「メーコ」のコンサートに幼馴染のマキさんと来ていた時のこと。突如不気味な蠍男：スコープオン・ドーパントが舞台に現れました。尻尾を使って天井からぶら下がったまま、駆けつけた花さんを始めとした警官隊を蹴散らしたそいつを、おやっさんは華麗な動きで蹴り落としたのだ。

——「あたしの依頼人に手を出さないでもらいやしようか」

古風な喋り方をする帽子の下にペストマスクを被り着流しを纏ったその探偵は子供の私にはかっこよくて。生まれて初めて男の中の男を見た気がしました。それが私が探偵：いや、おやっさんとかっこいい男に憧れたきっかけです。

あとからおやっさんの日記を見つけて詳細を知ったのですが、メーコは一番のファン蠍男と名乗る人物に脅迫されていた様で。それが水都に現れたドーパント第一号。スコープオン・ドーパントこと：おやっさんの相棒、海音かいと はじめ一でした。

★

「お爺さまの、相棒…」

そう呟くあかりに、私は頷いて日記に挟まれてあった古い写真と新聞のスクラップを見せる。帽子を被った和装の初老のおやっさん：虚音イフと、長いマフラーを首に巻いた年若い男が一緒に映ってる。新聞のスクラップには、蠍の様な頭部から伸びた蠍の尾をマフラーの様に首に巻いた怪人が映っていた。

「その捜査の途中で初めて、仮面ライダースカルに変身したそうです」
「仮面ライダー…スカル？」

「私達がそう呼んでいるだけで本来は「スカル」なだけみたいですけどね。当時は骸骨男という都市伝説として知られてました。でもおやつさんは紛れもなく仮面ライダーです。断言できます」

些細なことからスコープオン・ドーパントの正体が自分の相棒だと突き止めたおやつさんは追い詰めるも、戦う決断が鈍ったことで多大な被害を出してしまいます。己の罪を数えたおやつさんは告げたくです。お前の罪を数えろ、と。

★

海風が涼しい建物の屋上で。その決戦は行われた。帽子を外し、普段から付けているペストマスクを投げ捨てた虚音イフは真剣な目でスカルメモリのガイアウィスパーを鳴らして腰のロストドライバーに装填、倒した。

「俺が愛するメーコの愛を独り占めするお前は…一体なんなんだ、イフ!」

《スコープオン!》

「一も知つての通り、あたしはしがない探偵ではじめございますよ」
《スカル!》

共に異形の姿となり対峙する相棒だった両者。スカルは手にしていた帽子を傷の入った髑髏頭を隠す様に被り直し、スコープオン・ドーパントが放つて来た蠍の尾を蹴り飛ばす。

「今は…はじめと同じ、ただのバケモノでございます」

蹴り飛ばした蠍の尾を掴んで引っ張って引き寄せたスコープオン・ドーパントに拳を叩き込み、右手の指を拳銃の様にして突きつけるスカル。

「一つ。自分の相棒の心の闇を知ろうとしなかったこと。二つ、相棒を止められなかったこと。三つ、戦う決断が鈍って犠牲を出したこと。…あたしは自分の罪を数えやした。さあ、お前の罪を…数えろ」
「人を愛することが罪だとしても…！」

猛毒の滴る尻尾を鎖鎌の様に振り回して斬撃をスカルに叩き込むスコープオン・ドーパント。しかしスカル…骸骨の記憶であるが故に半死人も同然なその身体には毒は通じない。

「…変身するのは少しの間死ぬことだ」あくまであたしの場合でございやすが」

《スカル！マキシマムドライブ！》

そして決着をつけたおやつさんだったが、海音一はメモリの毒素や初期型なものも相まって死亡。街の平和と引き換えに相棒の命を奪ったことも相まって探偵稼業を休業…していたところに、そんなことも知らない幼い私は探偵事務所を訪ねて、おやつさんの様にこの街を守りたいと熱弁。しかし断られ、私は高校生になるまで毎日助手になることを懇願し、紆余曲折あって認めてもらい高校を卒業してからおやつさんの助手になりました。

★
「紆余曲折ってなにがあったんや？」

「いやあ、高校生の頃に茜さんのストーカーを相手にしたことを知られて…今思えばあかりから聞いたんですかね？」

「そういえばそんなことをお爺さまに自慢した記憶があります。私の自慢の先輩だって！」

「なるほど、一つ謎が解けました」

★
その数年後、仕事を覚えてダメなりにおやつさんについていけるようになりいくつかの依頼も任せられるようになった頃。運命の夜へと

導く依頼人が現れたのです。

今から一年ぐらい前。その日、何時まで経っても帽子を被ることを認められなかった私は、仕事を終えて事務所に帰るとおやつさんがいないことをいいことにこっそり帽子を被ってかっこつけてたんですが、異常に気づきました。黒い帽子：おやつさんがいつもここぞつて時に被る帽子と、危険な仕事の時に付けて行くペストマスクがなかったのです。

★

「そういえばお爺さまってペストマスクをつけてたんですか？」

「なんでも、毒ガスなどから身を守るのと正体を隠す他、犯罪者に恐怖を与える効果があったそうです。実際にアレを被ったおやつさんはよくバケモノと呼ばれてました」

★

調査道具のケースもなく、いつもの様に置いてかれて一人で仕事をしているんだろうなと思いました。今思えばスカルとして戦っていたのでしょうか……一人前だと認められてないのだと、そんな気持ちがあだとなりました。私にとってはもう一人の父親も同然だったあの人が認められたかった、それだけだったのですが。そんな私が謎の呼びかけるような音と共に見つけたのが、謎のトランクケース。指紋を判別しておやつさんにしか開けられないだろうそれにどうしたのかと考えていた時に鳴り響いた電話を手を取った。

「はい、虚音探偵事務……」

《「じよしゆのおんなのこだね。しよちよーは？」》

聞こえてきたのは幼い女の子の声でした。年下に助手で女の子呼ばわりされてイラついた記憶がある。

「むっ。…あなた、誰です？」

《「いらいにんだけど」》

「子供の悪戯なら切りますよ」

《「いいのかなー。だいじなことなんだけど」》

「…おやつさんなら今いませんけど」

《「やっぱり。けーたいがつながらないから、いちおーじむしょにかけたんだけど…うごきだしたならいいや。もうひとつだけいい？トラクケースのこつてないかな？」》

「え!?!なんでそれを…」

《「あるんだ。あいかわらすがんこだなー。じごくからぬけだすためのきりふだになるはずだったんだけど…イフらしいといえぼそうだけどさ」》

「あなた、いったい…?」

そこで電話は切れた。おやつさん呼び捨てにする幼い声から聞き取れたのは「地獄」のワード。そしておやつさんの本気の装備。どんな事件に関わっているのか心配になった。人生には必ず分かれ道が来る、「決断」と言う分かれ道が。この時の決断がそれだった。

「おやつさんの助手は私だけなんです…ほうっておけるわけないでしょー!」

私はトラクケースを手に事務所を飛び出した。日頃おやつさんが頼っている鳴花ーズの2人や昭胤流子といった情報屋を回って必死に足取りを掴んだ。そしてある港から船に潜り込んだらしいことを突き止め急行した。

港では黒服にサングラス姿の物々しい連中が、物資を運び入れている。私はそのうち一つに潜り込んで船に乗り込み、この船が小さな島へ向かっているのを知ったのだ。それはただの小さな島ではなかった。一定距離まで近づくと巨大なビルが現れたのだ。もうわかるだろうがその連中はミュージアムで、小島のビルはミュージアムの重要な施設だった。

「ゆかり、なんであんた様がいるんですかねえ。それを持って来たんでございやすか?」

そのとき物音を鳴らしてしまった私はおやつさんに助けられ合流。電話があつて危険を感じて届けに来たことを説明した。

「半熟卵半人前の癖に立派に探偵の技術だけは盗んだよう。感心しやせんが、誇らしいとも感じております。仕方ありやせん。これもきつと運命ということございましょう。いいですかゆかり。こうなったら引き返せやしません。あそこは地獄、この世の地獄。あの中に一人、少女が囚われておりやす。今回の依頼はその少女の救出でございやす」

★
そう言ったおやつさんと共に、私はそのビルに乗り込んだのです。そこまで言うと、きりたんが口を開く。

「ここからは私から。そのビルに囚われていた少女こそこの私であり、そのビルは私のために作られた施設でした。あの日、目を覚ますと目の前のモニターに見たこともない狐の様なドーパントが映っていました」

★
《「ちゅわ。目が覚めましたか?」》

「あなたは…誰ですか?」
《「気にしなくてもいいただの狐ですわ。ちゅっちゅっちゅつ! さあ研究に励むのですわ。あなたは地球の全てを学ぶために生まれてきたのですから」》

「全てを学ぶ…そうです、それが私の使命でありたった一つの生きる価値です」

《「その通り。自分が何者かなどと考えなくても結構! ここはあなたのために作られた施設、いわば楽園ですわ。存分に楽しんでくださいまし」》

そう言った狐のドーパントの言うとおりに、私は一心不乱に：ガイアメモリを、作成してしまっただけです。

★

「なんやて!?!お前が、メモリを作った!?!」

「私の記憶はそこからしかありませんが、恐らく何度も記憶をリセットされて同じことを繰り返していたんだと思います。今この街にはらまかれているガイアメモリは間違いなく、私が作成してしまっただけです。：ついなさん。貴方のお仲間を殺したメモリを作ったのも、私なんです」

泣きそうな顔のきりたんを、ついなさんは睨みつける。これは私が口出ししていいことじゃない。きりたんが隠さずに言うと思ったのだから止めるべきではないはずだ。

「それは悪意を持って作ったんか?」

「……いいえ、悪いことをしているという自覚は：ゆかりさんと出会うまでありませんでした」

「ならええわ。メモリを作ったのはお前だったのやとしても、うちの仲間を殺したのは桜乃空でメモリをばら撒いたのはミュージアムや。お前を恨むのは筋違いやろ」

「で、でも……!」

「じゃあかしいわクソガキ。なんも知らない子供がしたことや吐ってくれた結月という大人がいたんやろ?それで考えを改めたんやろ?ならこれ以上怒鳴るのも筋違いやろ」

「うっ……」

「そういうことらしいですよ、きりたん」

★

言い負かされたきりたんを宥めて私は話を続ける。おやつさんと共にビルに乗り込んだ私が聞かされたのは、囚われている少女が「運命の子」と呼ばれているという話だった。

「運命の子？そんな大袈裟な…」

「大袈裟も何も、本当に地球の全てをしょいこんじまった女の子なんですよ。敵はこの島で彼女の力を引き出して悪事に利用、その子をまるで生きた部品の様に扱っているとのこと。運命の子を救いたい、それが依頼人の願いでございます」

そう言っただけで私が渡したトランクを簡単に開けるおやっさん。中身を確認したおやっさんに私は中身を尋ねた。

「…ガイアメモリでございます」

「ガイアメモリって人間を怪物に変えるって言う…街を泣かす怪物たちの力の源って噂じゃないですか！なんでそんなものを…」

「お黙りんさい。置いといた物をわざわざ届けに来たのはあんた様でございます」

「そ、それはそうですが…」

「あたしだって嫌いでございますよ。できるものなら見たくもありません。こんなもののせいで愛すべき街の人間がバケモノに成り果てるのを何人も見て来ましたからねえ…：ゆかり。必ずあたしの命令は守るのでございますよ」

「こんなところで説教ですか？例え半人前でも私はおやっさんの力に…」

「こんなところだから、でございます」

そんな問答をしていた時、明かりが消えた。おやっさんが「小さな援軍」と言っていたので恐らくフアングメモリが配線を切ったのだろう。しかし警報が鳴り響き、それは現れた。

「出て来なさいコソ泥。産業スパイかどうかも知らないけど、私の矢はどんな獲物も逃がさないわ」

熊の毛皮を纏った鹿の足を持つ女の怪物。ミュージアムの幹部ドーパント。そうですね、病院でダンテライオン・ドーパントと戦っていたアイツです。あとから名前が分かりましたがアルテミス・ドーパントは黒服たちを引き連れて私達の近くまでやって来ていました。牽制に放った矢が壁に大穴を開けるのを見て悲鳴を上げなかったのは奇跡だったでしょう。

「…ゆかり。早速で悪いが命令です。これを持ってじつとしているのでおきなさい。一步も動かない様に、わかりやしたね?」

私にトランクケースを預けて奴等の前に出ていくおやっさんを私は止めることもできないぐらい震えていて。おやっさんは姿を現すなり黒服を蹴り飛ばしましたが黒服たちはマスカレイド・ドーパントに変身。完全に囲まれてしまったおやっさんに向けて矢を放とうとするアルテミス・ドーパント。

「不気味な男ですね。狩猟相手としてはやりやすく助かります」

「…人を撃つのに慣れてない様でございますね、お嬢さん」

「なっ…」

「覚えておいてくださいませ。「撃つていいのは、撃たれる覚悟がある奴だけ」でございますよ。ガイアメモリを仕事に使わないのがあたしのポリシーだったのでございやすがやむを得ません」

「ロストドライバー!?!」

おやっさんが腰に付けたそれにアルテミス・ドーパントが驚いていたのを覚えている。ロストドライバー…ダブルドライバーの前身であるそれは、きりたん曰くミュージアムから設計図ごとロストした新型メモリのドライバーだったらしいです。帽子を外してメモリを手に取りガイアウィスパーを鳴らすおやっさん。

「なぜ、お前が!?!」

《スカル!》

「変身」

《スカル!》

そしておやっさんが変身した骸骨男、スカルに私は衝撃を受けた。他の怪物たちと違って長年噂を残す骸骨男。奴こそが一番水都を泣かしていると思っていたがそうではなかった。メモリの力で骸骨男になって怪物たちと戦っていたおやっさんが陰から水都を守り続けていたんだと、気付いたのだ。

「さあ、お前の罪を数えろ」

帽子を被り直して宣告したその姿に、私はまた憧れたのだ。

第二十三話：Sの終演／囚われの悪魔

「さあ、お前の罪を数えろ。化け物退治は「裏」の仕事。加減はもうできないでございやすよ」

「言つてくれるわね。やりなさい！」

スカルに変身したおやつさんにマスカレイド・ドーパントをけしかけるアルテミス・ドーパント。スカルはマスカレイド・ドーパントを拳と蹴りで蹴散らす、それに気を取られたところで空中に浮かびあがったアルテミス・ドーパントの放った光の矢の雨が降り注ぐ。近くにいたマスカレイド・ドーパントを持ち上げてぶん投げて盾にするスカル。さらにバックステップで光の矢の雨を避けて行くが、避けきれずに帽子に掠ってしまった。

「お気に入りの帽子に傷をつけやしたね？お礼をくれてやりやしよう」

そう言ったスカルの胸部にトリガーマグナムによく似た銃が出現。それを手に取り、乱射して光の矢を撃ち落としていく。弓を振るうアルテミス・ドーパントと銃を撃ちまくるスカルの攻防は、埒が明かないと踏んだのかアルテミス・ドーパントが上に光の矢を放ち天井を瓦解してスカルを押し潰したことでひとまずの終わりを迎えた。

「おやつさん……！」

叫びそうになった口を慌てて塞ぐ。瓦礫を押しつけてスカルがピンピンした様子で現れたからだ。痛みを感じていない様子のスカルに怖気づくアルテミス・ドーパント。

「骸骨は、それ以上殺せない。今のあたしは死人も同然です」

「死体は死体らしくくたばってなさい！」

そして再びマスカレイド・ドーパントたちとアルテミス・ドーパントに挑んでいくスカルを余所に。私は物音を聞いて振り返ると、そこには病衣の様な服を着た裸足の幼い女の子がペタペタと足音を鳴らしながら扉の先に消えて行く光景があつて。さつきも言いました。人生には「決断」という名の分かれ道があります。特に、取り返しのつかない分かれ道には二つの声が囁きます。そのうち一つは必ず死神の囁なんです。この時、私が選んでしまったのは死神の誘う道でした。

「彼女を助ければおやっさんも見直してくれるはずです…！」

あまりにも異様な存在に、彼女こそ「運命の子」だと結論付けた私は、おやっさんとの約束も忘れてその場を離れてしまった。忘れもしません、私はこの時初めてきりたんと出会ったのです。

「あの、あなたが「運命の子」ですか…？」

「誰ですかお前」

だけど、私と相棒の最初の出会いは間違いなく最悪でした。このときいきりたんは今の生意気さはそのままに、無気力で薄気味悪い幽霊の様な少女でした。

「…ふっ。ここの人間じゃありませんね？組織に選ばれるような知能があるとは思えません」

「んなっ!?年上に向かつてなんて口を聞きやがるんですか…！」

「年上なのがおか関係が？」

「このハードボイルドな面構えがわからないなんておこちゃまですね！」

「ハード…ボイルド？」

いきなり馬鹿にされて悔しかったのでかつこつけながら指摘するも、少女は無視して傍の機械を弄ります。目の前のモニターのはガイアメモリの設計図の様な物が、すぐ傍のガラスケースの中には完成品のガイアメモリが並んでいて、少女がそれを作っていたのは明白だった。

「ガイアメモリ!? 貴方が作ったんですか…!」

「ん?それは…」

問い詰めようとすると少女は私の手に握られたトランクケースに興味を寄せて。突撃されて奪われたばかりか、少女はおやっさんにか開けられない筈のケースを開けてしまったのです。その中であつたものこそ、ダブルドライバーとジョーカー、メタル、トリガー、サイクロン、ヒート、ルナの新型ガイアメモリでした。中身を見るなり大興奮する少女に、私は怒りを募らせます。

「これは凄い! 凄いですよ! 誰が考案したんですかこれ!? このドライバーの使用者は私と一体化できる! 同時に二本のメモリを使い、私の知識全てを備えた究極の超人が生まれる! はははっ! どんな頭をすればこんなものを作れるんですかね?!」

「なにがおかしいんですか! この、悪魔!」

「なんですか、邪魔しないでください」

「あなたたちの作ったメモリのせいで水都がどんなに泣いてるか、わかっているんですか!」

「水都…というのはよくわかりませんが。拳銃を作っている工場の間は犯罪者ですか?」

「っ…」

「違うでしょう。使つて悪事をする人間が悪い。私はただ、より効果の高いメモリを見たいだけなんですよ」

そう無感情に言う少女に、私は分からなくなつた。本当に哀れな囚

われの女の子なのか。こんな子供を助けるだなんて、正しいことなのか？こんな、悪魔みたいな少女を助けるだなんて……！

「邪魔をしないでくださいよ。どうせあなたはガイアメモリの実験体か何かでしょう？あなたにピッタリなメモリならあとで私が選んであげますよ。そうですね……切札にも最悪なカードにもなる道化師、ひょうきん者を意味するジョーカーなんてふさわしいと思いませんか？」

「ふざけないで！」

悪びれないどころか私を馬鹿にする少女を、怒りのままに突き飛ばしていた。すると少女は奥の機械に入って姿を消してしまった。今思えば転送装置だったのだろうか。

★

「この時私はビルの最奥にして中枢部、ガイアタワーに転送されてきました。自分では出られない檻の様な場所でありながらその時の私は気にせず、気になって仕方なかったことを検索したのです。ハードボイルド、興味深いと思いました」

★

私は一心不乱にトランクケースを手に元いた場所に戻りました。そこには、壊れたロストドライバーを腰に付けたおやっさんが壁によりかかってました。

「おやっさん！」

「…おまえさん、どこに消えてやした？」

おやっさんに睨まれて、少女を見つけたため離れていたこと、少女との会話、そして少女がどこかに消えたことを正直に話すと、私は珍しく怒ってる様子のおやっさんに委縮するしかありませんでした。

「お前さんは馬鹿野郎でございますね。なんで言われたとおりにしな

かったのか。あの子を押さえていれば今頃脱出もできていたでございましょう。…参りますよ。時間が無い」

「……………なんで、助けないといけないんですか！あんな、あんな悪魔みたいな奴なんですよ!?あの子におやっさんが命張ってまで助ける価値があるんですか?!」

気付けば不満を爆発させていた。それぐらい、その時の私に依頼を成し遂げようなんて思いはなかった。ただただ、あの少女を助けたくなかった。

「怪物の元を…ガイアメモリを作っていた悪魔なんですよ!?あんな、あんな娘のために…私は嫌ですッ！絶対対に……………嫌です、吞めません！」

「…お前さんなら吞めるはずなんですがね、ゆかり。命を張る価値ならありますよ。彼女も水都に住む一人の人間なんでさ。本当なら母親の胸に抱かれて、姉弟きょうだいに囲まれて、幸せに育っていたはずなんでございませぬ。だが引き離されたんです。助けておやりなさい、ゆかり」

「でも、でも……」

「彼女が悪魔に見えるなら、悪いのはそう書き換えた奴等でございます。…半人前のお前さんでしょう。あの子自体は真っ白な紙と同じです。…半人前のお前さんの中であたしが唯一尊敬しているところがあります。それは、弱い者には決して力を振りかざさず、むしろ手を差し伸べてやれる…そんな心根でございます」

その言葉に、涙が溢れていた。おやっさんが私を認めているところがあった。それがたった一つの小さなことでも、嬉しかった。

「友人を守り、水都を愛することができるとお前さんなら…あの子も救える。恐らくこれはあたしじゃできないことです。…お守りです、壊れています弾除けぐらいにはなるはず」

そう言つて手渡してきたのは、罅割れたロストドライバー。それはおやつさんがもう変身できないことを表していた。

「おやつさん、私は…」

「恐らくあの子はこの建物の中枢部に融合している。まだ間に合う、行きましょう」

私達はビルを駆け抜けた。襲ってくるマスカレイド・ドーパントを二人でけちらし、最奥部まで辿りついた。そこにはひし形の宝石の様な機械に取り込まれている少女の姿があったのだ。

『…帰ってください。私の読書の邪魔をしないでください』

少女は私達の存在に気付くとそう言ってきた。なんのこっちゃと首を傾げていると、おやつさんが合点が言った様に説明してくれた。

「あの子は今、地球の本棚に入ったようでございますね」

「ほしの、本棚…？ってなんなんですか…？」

「彼女は地球の記憶そのものと頭脳が直結してしまっているという話でございます。脳内に地球が抱える全ての知識が「本」という形になって現れ、それを自在に検索することができ…そう聞いています。その地球の記憶を悪用し、人間を怪物に変える悪魔の小箱…それが」

「ガイアメモリってことですか…」

彼女が「運命の子」で悪人に利用されてるってそう言う事だったのかと納得する。

「…あの子を装置から引き出すことはもう不可能。救出する方法はただ一つ、彼女が自分の意思で出るしかありません。…このメモリに残ってるエネルギーで彼女の世界に接触できるかどうか…試してみ

やすか。ゆかり、入り口を見張っていなさい」

「おやつさん…大丈夫なんですか？」

「今度こそ約束を守ってくださいよ」

《スカル!》

「…わかりました!」

★

「言われるなり私が入り口を見張ってる間に…なにがあつたんですかね? きりたん」

「ではここからは私が話しましょう。私は困惑してました。ハードボイルド、という言葉調べるたびに不可解でした。ゆかりさんがハードボイルドという人物像とは程遠かったので」

「ゆかりさんえ…」

「いや草。お前ら芸人になれるで」

「余計なお世話ですよ今畜生」

★

そんな困惑している私の元に、彼はやってきました。消滅していく己のガイアメモリを見て哀愁を漂わせていた彼の存在に私は気付きます。

「…すみませんね、スカル。お前さんの力を憎んだこともありましたたが最後に礼を言いますよ」

「…その特殊なメモリの力ですか。まさかこんな強引な方法で私の本棚に入るだなんて…」

「さあ、行きやしようかお嬢さん」

そう手を差し伸べてくる男の手を、私は払いのけた。

「…いいえ、それは無理です。ここにいろと言われています。あの「狐」を名乗った女に」

「狐…ああ、そういうことでございやすか。では質問をば。あんた様は今まで一つでも、自分で決めて何かしたことはありますか?」

「自分で…決める…そんなこと、する意味が…」

「じゃあ今日が最初でございますね。自分自身の決断でこの暗闇の牢獄を出るのでございます。そして自由になったら…お前の罪を数えろ」

「私の、罪…」

そう言われてフラッシュバックしたのは先程であった女性に怒鳴られた言葉の数々。思わず目を見開いた。

「あたしは虚音イフ。しがたい探偵でございます。あんた様の名前は？」

「…きりたん。それだけは、覚えています」

「きりたん。いい名前じゃないですか」

「…はは、目覚めて初めて名前を呼ばれましたよ。…いいものですね」

そう言つて私は、泣き笑いを浮かべて男の手を取つたのだ。ガイアタワーが砕け散り、現実の私は虚音イフに身体を抱えられて下ろされた。

「問題はここからですよ虚音イフ。この島から逃亡するなど不可能に近い」

「なんとかしますよ。あたしの助手もいる」

「…彼女はあまりに不完全だ。助けになるとは…」

「結月ゆかりと言うんですがね。確かに半人前でございますがちょうどあんた様のない物を持っている。仲良くしてやってください。ゆかり、きりたんと言おうそうです」

そんな会話の後に駆け寄ってきたゆかりさんは手を差し伸べてきて、私は驚くしかなかった。

「おやっさん、代わります。きりたんと言うんですか。可愛い名前で

すね。私は…多分あなたとは合わない。でも、貴方の事情を知らなすぎた。なのに一方的に罵倒してしまったのは謝ります。だから…私達に貴方を救わせてください」

そんな言葉に何も言えなくなつて。…油断してしまった。入り口に立ち銃を構えた黒服たちが見えて私は思わず叫んでいた。

「危ない！」

「え？」

「っ…！」

私はゆかりさんと一緒に突き飛ばされた。突き飛ばした虚音イフは背中に三発も弾丸を受けて倒れ込んでいて。帽子がひらひらと舞い落ち、血が流れていく。慌てて駆け寄る私達。

「おやつさん！おやつさん！」

「虚音イフ…！」

「…」瞬間判断が鈍りやした…あたしもまだまだ甘いでございますね……」

「おやつさん、血が！私、どうすれば…！」

流れる血と倒れ伏した虚音イフに混乱するゆかりさんに、虚音イフは力を振り絞って帽子を手に取りゆかりさんに被せた。

「ゆかり…この依頼、お前さんが引き継いでくれ…あの子を、きりたんを頼みましたよ…」

「よして、くださいよ…私に帽子はまだ早い、まだ早いですよ…！」

「似合う女になれ、なんて無責任、ですかねえ…」

「おやつさん？おやつさ——ん!!!」

最期に安心させるように笑みを浮かべて息絶える虚音イフと、絶叫

するゆかりさんに。私は己の罪を自覚した。そうか、これがそうなのか。街を、人を泣かせるということ……これが私の罪だと、自覚したのだ。瞬間、降り注ぐ光の雨。私に当てない様に周りに放たれたその影響で穴が開き、虚音イフの遺体が階下に落ちて行く。そして現れたのは、アルテミス・ドーパントだった。

「死んだ……また死んだ……死んでしまったのね、スカルの男。少し、安心した。人の気も知らないであんなこと言うから死ぬのよ。残るネズミ一匹を殺せば、いいのね!? やりなさい!」

自分に言い聞かせるようにそう叫んだアルテミス・ドーパントの声に応じて、戦闘ヘリが現れ機銃掃射が襲いかかり、私はゆかりさんを手を引かれて物陰に隠れる。私を殺したくないのか威嚇射撃だったから助かったが、このままではゆかりさんまで死んでしまう。そう思った。

★
「そのとき私の内心にあったのは後悔でした。私が最初に約束を守っていれば今頃脱出していておやっさんは死ななかつた……そんな、後悔が」

「お爺さま……二人を庇って、死んだのですね」

「なんちゆう男や……一度会ってみたかつたな」

「話を戻します。どうするべきか、考えた私が手にしたのはゆかりさんがずつと持っていたトランクケースでした」

★
「貴方はさつき、私を「悪魔」と罵りましたよね」

「こ、こんな時に何を?」

「悪魔と相乗りする勇氣、貴方にありますか?」

開いたトランクケースの中身を見せて私はそう尋ねた。それが、始まり。

番外編：Eに至る覇道／金は天下の回り物

今から7年前。水都に住む17歳の少女、金堂百合は借金返済のために奔走していた。金堂コンツエルンという会社を倒産させ首吊り自殺という醜い最期を迎えた父と、ストレスで醜くなり病死した母親、かつては美しかった両親の残した借金。高校は退学して始まった金稼ぎの日々。しかし彼女は自分だけは美しく居続けると誓い、道路工事から窓掃除、詐欺にひつたくりといった犯罪、自分の身体を売ること以外は全部やった。

「…なんだ、お前も負け犬か？」

バイトの帰り、ヘトヘトになりながら帰宅していた途中で路地裏で強姦されようとしていた年下の少女を見かけて暴漢を蹴り飛ばして救出。半殺しにしたあと、泣きそうになっていた黒髪を伸ばしっぱなしにしている少女にそう尋ねると少女はキツと睨み付けて反論した。

「私は、私は！なんでこうなんだろうと思うことはあっても、自分を見失うことだけはなかった！私は捨て子だ。言葉も道行く人間の会話を聞いて覚えた様な人間だ。だが、私が私だ！私が諦めない限り負けなんかじゃない！」

「いい言葉だ、感動的だな。だが無意味だ。お前は社会的地位の最下層、弱者だ。負け犬がなに言ったところで響かないさ。……心が醜い者共にはな」

半殺しにした暴漢を足蹴にしながらそう言う百合を、少女は荒んだ目で見上げる。

「お前はそうじゃないとどうして言える？」

「オレは金堂百合。美しい物が好きだ。美しい物を見た以上それを失いたくない、そう言う人間だ。お前の目は美しい。こんな環境でいて

なお輝き続けるそれは宝石をも上回る。…お前、名は？」

「…名前はない。言っただろ、私は捨て子だ」

「ならキクを名乗れ。菊の花言葉の一つは「高潔」お前にぴったりだ」
「…キク」

与えられた名を反芻し、大事に受け止める少女に百合は満足げに笑って手を差し伸べる。

「オレについて来る気はないか？今はまだ下積みだが、そのうちオレは頂点に立つぞ。絶対だ。オレには見えている、黄金の玉座に座る美しいオレ自身の姿が」

「美しいって…：あんたはナルシストですか？」

「オレが美しくない？」

「…いやまあ美人だとは思うけど。とかかなんで自分の事をオレって言うんですか」

「オレはオレであるからだ。お前と同じだ」

「…あんたについていけば私は私を誇れそうですね」

それから一年。キクに手伝ってもらってやれること全部やっても四割がやつとの借金。

「どうするんだ百合さん。このままじゃ…」

「まともに稼いで間に合わないなら方法はあるさ」

トイチでないのが救いだが、このままでは母親と同じ末路を辿ってしまう。そう危惧した百合は大勝負に出ることにした。

「オレはオールイン。さあどうするよ、オーナー」

「なっ…ダブルダウン！…っ!？」

「絵札の残り枚数を考えると賢い選択じゃなかったな？」

裏カジノ【黄金郷】^{エルドラド}。それが百合が選択した大勝負。イカサマもなにも知らない少女が選んだのはブラックジャック。確固たる自信による豪運と、父親譲りの観察眼による残りのカードの把握で荒稼ぎ。ついには【黄金郷】のオーナーとの勝負に持ち込み、根こそぎ勝ち取った百合は【黄金郷】のオーナーの座を勝ち取ったのだった。

「なんだちよろいな。こんなもんか」

客を相手に稼いだ金で大金をせしめた百合が次に求めたのは力。よりにもよって借りた先が悪徳企業でこちらが大金を手に入れたことをいいことにあの手この手で金を奪おうとしてきたのだ。力が無くては金を守ることもできない。都合のいいことに、客の中にはガイアメモリでイカサマしようとした者もいたのでとっ捕まえて情報を吐かせてガイアメモリの売人と接触。キクと共にガイアメモリを手に入れた。

《ギロチン！》

「へへっ、へへへ…私までいいんですかねえ、百合さん」

「気に入るな、オレの側近なんだからな。しかし選んだのはそれか…趣味が悪いな」

「ギロチン、いいじゃないですか。首を断てば皆平等。名無しの私としてこれほどふさわしいメモリもありませんよ…」

「お前にはもうキクという名前があるのだと何度言えば分るんだお前は。…オレは、これ以外には考えられないな」

《マネー！》

「それは他の物より高額ですがよろしいのですか？」

セイカと名乗った売人の女性にそう尋ねられて百合は不敵に笑い、札束を取り出す。

「もちろんだ。金に糸目はつけんさ。いただく、『通貨』の記憶。マ

ネーのメモリを」

《マナー!》

生体コネクタを胸元の中心に施術し、買ったばかりのメモリを挿入した百合の姿が全身黄金の体色で三本指のドーパントへと変貌する。本来肥満体のはずが彼女自慢のプロポーションを保っていた。なんなら女性型の肉体の胸部が変身前より大きくなっており、長髪のように札束の様な物が複数頭部から伸びている。

「うん、心地いいな。まるで金貨のプールを泳いでいるようだ」

「そっちの方が悪趣味では?」

同じくギロチン・ドーパントへと変貌したキクがツツコむ。三本指になった己の手を不満げに見つめていたマナー・ドーパントは気にせずセイカに尋ねる。

「このドーパントはどんな能力があるんだ?」

「相手の額に端子が付いたコインを挿し、生命を吸い取る「ライフコイン」を体内に溜め込む能力を持つ他、コイン型の光弾を飛ばすことができます」

「…それだけか?」

「残念ながら。しかし貴方は適合した様だ、少なくとも他の使用者は貴方の様にプロポーションを保っている人間はいませんでした。本来なら肥満体になる筈なんですがね」

「そんな醜くなるわけがないだろう。オレは金堂百合だぞ?」

「もちろん高額なメモリを買っていただいたのでアフターケアは保証いたします。では私はこれにて」

セイカはそう言ってその場を去り、残されたマナー・ドーパントとギロチン・ドーパントは顔を見合わせる。

「で、どうします?」

「せっかくだ。今日も来るであろう馬鹿ども相手に能力を試すか」

その日、生気を失った拳句バラバラにされた大量の死体と、胸部がさらに増量した黄金の怪人と血塗れの怪人が水都の陰にいたことは誰も知らない。

「骸骨男?」

一年後、本編から五年前。【黄金郷】で客から金を実力でむしり取り、さらには自身に心酔する部下も増えてきてカジノではなくちよつとした裏組織となり、メモリ売買組織ミュージアムのスポンサーにもなり軌道に乗り始めた頃。キクに続く自身の側近である男、西友から聞かされた情報に百合は首を傾げた。

「はい。怪物が骸骨男に倒されるという報告、多数：俺達に犠牲者は出ていない。しかし…ドーパントを倒す者、確実にいます」

「へえ。都市伝説の骸骨男か。だから活動を自粛しろって言いたいのか西友?」

「いえ。そんな事はありません」

「そういや、妙な探偵が嗅ぎまわってるって部下から報告を受けてましたね」

「探偵ねえ」

手にしたコインを指でカラカラと弄びながら熟考する百合。カジノ二階にあるこの部屋の窓から一階に目を向ける。目元にマスクを

つけて簡易的に顔を隠しドレスコードしている客がメインの【黄金郷】で今時珍しい着流しで帽子を被り、目元のマスクではなくペストマスクを被った男がいることに気付く。

「いるじゃないか、クソ怪しいのがな」

《マネー!》

にんまりと笑ってメモリを鳴らし、胸に突き刺してマネー・ドープアントに変貌するなり下に降りて行く百合。突如現れた怪物に、常連の客達は驚きもせず、新参の客達も「怪物が経営しているカジノ」と知っているからかどよめきはすれど悲鳴は上がらない。その中でビクツと反応したペストマスクの男は明らかに異様だった。

「ようこそ客共!楽しんでいただいているか?オレはこのカジノのオーナー、金堂百合だ。申し訳ないが、賭けようもしない曲者が紛れ込んだようなので排除させていただく。…そのペストマスク、お前だよ」

「…これは自前の仮面でございりますが、駄目でしたか?」

「駄目じゃないさ。お前が探偵じゃなければ、な!」

コイン型の光弾を放つ。握ってから開くことで高速で射出できるように進化させた力、それをあっさりと身を翻して避けるペストマスクの男に、笑うマネー・ドープアント。

「ハハハッ!知ってるぞ、バケモノと呼ばれ犯罪者に恐れられているペストマスクの探偵!それがお前だろう。ただ者ではないな、オレの部下にしてやるよ」

「それは嫌でございませう。あたしのペストマスクが有名になっているとは誤算でした。しかしバケモノと…言い得て妙でございませうね」

《スカル!》

「ガイアメモリ、だと?」

ペストマスクの男は腹部に赤いバツクルを取り付けると帽子を外し、懐から取り出した骸骨でSと描かれたメモリのガイアウイスパーを鳴らすとバツクルに装填、バツクルを傾ける。

「変身」

《スカル!》

すると男の姿が骸骨男としか形容できない異形へと変わり、帽子を被ると周囲の客がどよめいた。骸骨男の都市伝説を知らぬ者はいないのだろう。怪物が骸骨男に退治される。オレが退治されたらこのカジノも無くなる、そう考えているのだと察した百合は更に笑う。

「ハハハハッ!骸骨男なんぞにオレがやられるとでも?血も肉も無い骨になにができる?」

「あんた様を止めること、ぐらいはできると思いますが?」

「ハッ!言うねえ!ご同類!」

変身前より大きな胸に手を当てると溜め込んでいるライフコインが左腕へと複数枚、移行。巨大な大砲に左腕を変化させると金貨の塊を発射。骸骨男:スカルに炸裂して金貨がぶちまけられた。客がそれをここぞとばかりに回収しようとする姿を見て愉悦するマネー・ドープアント。

「オレの奢りだ!このコインで賭けするか?」

「……その腕、半死状態のあたしには明るい物が見えます。命、でございますか?」

「よく気付いたな。このオレと1VS1のギャンブルをして、全財産を失ってもなお勝負を渴望する者には、命を担保としたファイナルゲームを持ち掛けるんだ。それにも敗れた場合、このライフコインに命を吸い取られる。文字通り命を懸けたギャンブルだ。面白いだろ

？」

「…その命を奪われた人間は」

「うちの側近に始末させる。命が吸われた人間なんて置き場の無駄だからな？オレの糧となって生き続ける、永遠に！」

「…ならせめて解放してやるのが救いでございますね」

瞬間、突進してきたスカルの拳を受けて壁を突き破り下水道に飛び出すマナー・ドーパント。大砲でスカルを狙うが蹴り返され、まともに直撃の衝撃を受けて転がってしまう。

「くっ……美しいオレの中で生き続けることの何が悪い!?その身が破壊しようと思えばガンブルを続けようとしていた連中の命だぞ!」

「命に良し悪しはありやせん。そこにあるだけで尊い物。それをあんた様は奪ったばかりか肉体までもを失わせた。さあ、お前の罪を数えろ」

「ハッ！罪なんて、どれだけ重ねたかももう忘れたさ！」

スカルの宣告に、金貨大砲を乱射して返答するマナー・ドーパントだったが、全て蹴り飛ばされてしまい、スカルがメモリをスカルマグナムに装填する隙を与えてしまった。

《スカル！マキシマムドライブ！》

「覚えておいてくださいませ。「撃つていいのは、撃たれる覚悟がある奴だけ」でございますよ」

「撃たれる覚悟？そんなもの、力を手にしたときからしているさ！来い！」

スカルマグナムからばら撒かれる弾丸を避けもせず真面に受けるマナー・ドーパントは爆散。姿が消えたことを確認するとスカルは歩いてその場を去っていった。

「ご無事ですか百合さん！」

「百合様……！」

爆散跡に駆け寄るキクと西友、その部下である黒服たち。姿が見えない主に不安になっていると、下水の中からマネー・ドーパントが出てきて歓声が響いた。

「危ない危ない……咄嗟にライフコインを出して盾にしてなかったらヤバかった……」

「さすがというか、そんなもの咄嗟に思いつくなんて相変わらず豪運ですね百合さん……」

「さすが、百合様……下水に濡れて尚、美しい……！」

「言わずとも知ってる。むしろ我が黄金の光沢を際立たせているな、結果オーライだ」

そう言つて変身を解いた百合は考える。負けるつもりはなかったが相手が中々に強かった。これ以上の力がある、とそう思ったのだ。

「……一度ばれた場所で商売を続けるのも危ないな。今頃警察にリークされてる頃だろう」

「どうしますか……？」

「よし、高飛びするか。その前にアフターケアを試すか。マネーメモリを買ってさらにはスポンサーにもなったんだ。何も無いのは嘘だろ。……よし、西友。お前は部下と資金を集めて海外に逃げる準備。キクはオレについてこい」

「了解……！」

「了解ですよ」

携帯電話を手には百合は笑った。

翌日、百合とキクはミュージアムの中心たる東北家に訪れ、客間に交渉していた。

「マネーより強力なメモリですか。それも黄金の」

「そうだ。金に糸目はつけん。あるなら寄越せ、このオレに」

売人である星香に突きつけた条件は、マネーより強力でなお且つ黄金のメモリ。相変わらず強欲だな、とキクは苦笑いを浮かべる。星香はその条件を聞くなり手にした端末をポチポチと叩いて結論を述べた。

「二つあります。最高級のゴールドメモリの一本。その名も：エルドラド黄金郷のメモリ」

「オレにぴったりじゃないか。どこにある？今すぐ寄越せ」

「そうはいかないのです。このメモリを紹介しなかったのは当時の貴方がスポンサーじゃなかったのと、そもそもこのメモリは一本しか存在せず持ち主が決まっているからです」

「オレ以外にそのメモリを手にするとは生意気な。何者だ？」

百合が尋ねると星香は端末を操作し、目の前にモニターを出現させて件の人物を映す。拘束具の様なマスクで口元を隠した赤と黄色のオッドアイで黒髪を虫の触角の様なツインテールにした女性が映っていた。

「…ミュージアムのスポンサーの一つ、財団Xの幹部。CAカルネと

いう人物です」

「C Aカルネ…？そいつはどこにいる？」

「運がいいですね、今この屋敷に來ています。会って行きますか？」
「愚問だな」

星香に案内されついて行くと、また別の客間で。星香がノックして開けると、そこにはとてつもないプレッシャーを放つ女性がC Aカルネと対面していた。この世のものとは思えない透き通った白髪の和服美人、東北至子は赤く光る眼を百合へと向けた。とてつもないプレッシャーを感じるが不敵な笑みを取り繕う百合。キクは蒼い顔で気を失いそうになっていた。

「ちゆわ？星香さんでしたか。何の用ですか？」

「いえ、スポンサーの一人である金堂百合氏がC Aカルネ氏と話があるとのことだったのでお連れしました」

「それはそれは。直接会うのは初めてですわね。私は東北至子、ミュージアムの首魁ですわ。金堂百合さん、これからもどうぞ「鼻屑に」

「お、おう…こちらこそいい取引をよろしく頼む」

プレッシャーに押されながらもなんとか言葉を絞り出す百合。それに対してC Aカルネは慣れているのか長身の身体で背筋ピンと座ってお茶を飲んでいた。拘束具の様なマスクの上から飲んでるので何か仕掛けがあるらしい。

「どうやら商談はここまでの様だね東北至子殿」

「そうみたいですわね。スポンサー同士、仲良くしていただけると嬉しいですわ」

そう言つてその場を去つて行く至子の姿が見えなくなってようやく深呼吸できた百合は緊張が解けて気絶してしまつたキクの脛を

蹴って無理やり覚醒させる。目の前には席を立ったCAカルネ。白い詰襟の服を着た二メートル近い身長に見下ろされる形となる。

「それで何用かね。私に用があるのだろうか？」

「単刀直入に言おう。お前の持っているエルドラドのメモリ、オレに寄越せ」

「それは困るな。スポンサー特権で手に入れた我が組織の資金源の一つだ」

「お前たちがスポンサーになるのが早かっただけだ。本来ならそれはオレが手にしていたメモリだ」

「負け惜しみを言って悔しくはないのかね？」

「負け惜しみ？違うな。そのメモリがオレの物というのは厳然たる事実だ」

「…どうやら平行線の様だな。星香君、といったか。君、戦えるところを貸してもらえないかな。どうやら力づくで黙らされるのがご所望らしい」

「はい。では我が屋敷の傍の森をお使いください」

ニコニコと手で外の森を指し示す星香に従って廊下を歩いて行くCAカルネ。それに続く百合とキクだったが、星香に呼び止められ、小さな機械と拳銃型の機械を手渡された。

「先日は金堂様がピンチなのにも関わらず援護に向かえず申し訳ありませんでした。お詫びとしてはなんですが、貴方にぴったりのものをお渡しします」

「これは？」

「メモリ施術装置と、ガイアメモリ強化アダプター。ガイアメモリの能力を3倍に増幅する装置の試作版です。一度使えば使用後にメモリが崩壊してしまう諸刃の剣となっていますが……このギャンブルに勝つおつもりの貴方なら関係ありませんね？」

「いいなそれ。ありがたくもらっていくぞ」

につこり笑顔の星香に、百合も満面の笑みを浮かべた。

「待たせたなデカブツ蟲女」

「本当に待たせた挙句、罵詈雑言とは。どうやら君には躰が必要らしい…」

《エルドラド！》

CAカルネが取り出したゴールドメモリを鳴らして額に突き刺すと、王冠を被った黄金の髑髏の様な顔に、金色の包帯を巻いた金色の骨の様な形状の手足が目立つ骸骨の様な姿へと変貌。さらに両腕を付けた大地を黄金に変えて両腕と両足に武装し、まるで昆虫の脚の様な形状にするとさらに脇腹からももう一对黄金の節足を生やし、異形の巨体で百合を見下ろした。

「私は蟲が好きでね。彼らの機能的な造形には敬意を表しているんだ。人間なんぞよりよっぽど美しい」

「ならコックローチのメモリでも使ってるデカブツ蟲女」

《マナー！》

メモリを胸に突き刺してマナー・ドーパントになるなり胸に手をやりライフコインを全て左手に移動して金貨大砲を装備する。そして間髪入れず発射したが、跳躍したエルドラド・ドーパントに避けられ、外してしまう。

「なっ…飛蝗!？」

「遅いよ、君」

グシヤリ。急降下と共に右の下腕に頭を掴まれ地面に叩きつけられる。さらに持ち上げられたかと思えば四本の腕が鞭の様に振るわれて廻り殺しにされていく。力量が違いすぎた。そもそも人間の命を奪い取ることに特化しているマネーと、触れた物を黄金化し自由自在に武装できるエルドラドの戦闘力に差がありすぎた。

「この…ウアアアアアアア!?」

「邪魔なそれは切除しよう」

左腕の大砲を向けるが、蠟螂の鎌になった右腕に切断され、激痛が走る。何とか腕は無事で済んだが己の身体を斬られた感覚は抜けない。もはや一方的な蹂躪だ。

「思い知ったかね、同じスポンサーでも格が違うということ。一思いに殺してあげよう」

再び飛蝗の脚で跳躍。さらに下腕部を翅に変形させて羽ばたき、両腕を甲虫の角に変形させたエルドラド・ドーパントは急降下。

「百合さん!?!」

「グッ…アアアアアアアアアッ!?!」

ドロップキックと共に両腕の角をマネー・ドーパントに蹴り込んだ部位に突き刺した。マネー・ドーパントの変身が解除され、胴体がひしゃげてさらに挟まれ、見るに堪えない姿となった百合に駆け寄るキク。エルドラド・ドーパントは血に塗れた己の金の腕を見やると嗜虐心からか笑みを浮かべて立ち去ろうとする。

「……………待てよ」

「百合さん、無茶ですよ!?!」

「…ふむ、存分にしぶといな」

しかしして金堂百合は立ち上がる。このまま無様に倒れているのは美しくないから。血反吐を吐きながら立つのは美しいから。己の信念を貫くために立ち上がる。

「ガハッ…いいな、いいメモリだ。だがお前はそのメモリを使いこなせていない」

「なにを…」

「お前、生物まで黄金化できないんだろ。できるのなら私を黙らせているはずだからな。だから無生物を黄金化し武装する。その力を金儲けのためにしか使っていないのか？全然使いこなせてないぞ！」

「減らず口が…！」

甲虫の角、螳螂の鎌、飛蝗の脚を装備して跳躍。再び急降下して黙らせんとするエルドラド・ドーパント。しかし百合は不敵に笑って件の機械を取り出しメモリに取りつける。

《マナー！アップグレード！》

「オレが先に死ぬか、メモリが先お前に崩れるか…ギャンブルといこうか」
《トレジャー！》

そして胸部に突き刺すと、その姿が一瞬マナー・ドーパントになつてから変形する。頭部は頭頂部に宝玉がはまった豪華な王冠を目深く被った黄金の触手を髪のように生やしたものに、全身に宝石が散りばめられており両肩は宝箱の形に、両足は宝剣に。そして手には黄金の杯…聖杯が握られている。胸部には強化アダプターが露出していた。マナー・ドーパントのアップグレード。『財宝』の記憶を有するトレジャー・ドーパントへと金堂百合は変貌した。

「ハハッ、ハハハッ…百合さんらしい姿ですね…！」

「一回限りというのがもったいないぐらいだな！色んな意味で！」
「ほごくなあああああー！」

飛びかかってくるエルドラド・ドーパントに、トレジャー・ドーパントは右肩の宝箱の蓋を開いて突きつける。

「溢れる財宝よ」

すると宝箱から湯水の如く金貨や宝石が溢れだして物量でエルドラド・ドーパントを押し返して叩き潰す。そしてトレジャー・ドーパントは跳躍。お宝に埋もれたエルドラド・ドーパントに肉薄し露出している六本の黄金の手足を両足の宝剣を振るって全て切り裂いた。

「この…！」

「黄金の聖杯（物理）！」

「ごはあ!？」

さらに手にした聖杯で何度も何度も殴りつける。変身を解くまで殴るのをやめない、と言わんばかりにタコ殴りにする。マフィアというかヤクザというか、生来の百合らしい戦い方にキクは苦笑いを浮かべた。

「西友辺りが見たらなんて思うかな…いやあいつなら全肯定するか」

「お宝に殴られる気分はどうだ、金メツキ野郎！」

「私は女だ…！くっ、役立たずのメモリが欲しいならくれてやる！」

何とかトレジャー・ドーパントから逃げ出して変身を解き、エルドラドのメモリを投げ捨てるCAカルネ。それをキャッチし変身を解く百合。同時に、強化アダプターごとマネーメモリは負荷に耐えきれず崩壊してメモリブレイクしてしまう。CAカルネはそれを見て勝利を確信したのか笑いだす。

「わかる、わかるぞ…お前は何時か我が財団Xの不利益になると…
ここで始末する」

そう言つて取り出したのは目玉の様なスイッチ。それを押すとC
Aカルネの姿が蠍を模した怪人へと変わる。スコープオン・ゾディ
アーツ。財団Xが援助している他組織の怪人だ。

「無様に醜く逃げればいいものを…逃げないと言うのならここまでさ
れたお返しはしないとな?」

《エルドラド!》

エルドラドメモリを施術装置に装填して胸部に生体コネクタを刻
み、メモリのボタンを押して突き刺し、エルドラド・ドーパントに変
貌する百合。しかしCAカルネのエルドラド・ドーパントと異なりま
るで城か宮殿の様な黄金の装甲と黄金のピラミッドの様な形状の硬
質な腰布が追加されている。この姿こそがエルドラド・ドーパントの
完全体だった。

「なんだ、その姿は…まさか適合したとでも…?」

「エルドラドのメモリだぞ?【黄金郷】のオーナーであるオレが使いこ
なせないわけないだろう!」

そう言つて地面に手を触れ黄金の触手を展開してスコープオン・ゾ
ディアーツを瞬く間に拘束し持ち上げると蹴り一つで変身を強制解
除させるエルドラド・ドーパント。

「オレには野望がある。欲望に塗れた醜い水都を、美しい黄金に染め
上げてその朝日を拝むことだ。さぞその光景は美しいだろう。金の
力で全部金に置き換えるしかないと考えていたが、この力があるなら
話は別だ」

「ぐっ、この…放せ！」

「あと一つ。美しい物は永遠にその姿のまま残したい。そんな願望を、お前は叶えてくれるか？なあ…エルドラド」

「まさかつ、やめっ、やめろおとおお!？」

「お前は一目見た時から美しいと思ったんだ。醜く足掻くぐらいならオレの物になれ」

そしてそのまま、CAカルネに手を触れると断末魔を上げながら黄金像へと姿を変える。有機物すら黄金に変えて操る力。それが百合の変身したエルドラド・ドーパントの能力だった。

「うわあ、百合さんやべえ。あの重傷なのに何で動けるの」

「やばいつてなんだ。美しいだろこのオレは」

「ブラボーブラボー。私、いたく感動しました」

キクと馬鹿なことを話していると、そこに拍手をしながら星香がやってくる。黄金像と化したCAカルネを見やりニヤリと笑みを浮かべた。

「いやー、実は財団Xはミュージアムの技術をそのまま自分たちの物にしようと思論んでいたらしく。でもスポンサーなので手を出せないの、存分助かりました金堂様」

「オレを上手く使ったわけだ。念願の力を手に入れたから見逃してやるよ」

「ありがたい。これで貴女方、【黄金郷】が最大手のオーナーとなりました。これからはそちらとの取引を優先させていただきます」

「…ああ、それなんだがな。我々は一時期海外に活動の域を広げようと思う。ガイアメモリの力で一稼ぎするつもりだ。だから名を改めることにした」

「ほほっっ」

変身を解いた百合は明らかな重症の姿で仁王立ちし、宣言する。

「その名もガイアメモリマフィア、エル・ドラードだ。それと外国を拠点にするならオレも名を改めないとな。…リリイ。リリイ金堂。なんてどうだ？」

こうしてエルドラド・ドーパントことリリイ金堂が誕生したのだった。

第二十四話：Sの終演／ビギンズナイト

「悪魔と相乗りする勇氣、貴方にありますか？」

「……………え？」

きりたんはトランクケースの中のメモリとドライバーを見せながらそう問いかけた。その時、おやつさんが死んでいっばいっばいだった私にはまったく意味が分からなかった。だけどその時：六本のメモリの中で一つだけ何故か異様に目立って見えたんだ。道化師の靴を模したJのインシヤルが描かれた黒か紫のメモリ。隅に綴られているのはj o k e rの文字。

—————「そうですね……………切札にも最悪なカードにもなる道化師、ひょうきん者を意味するジョーカーなんてふさわしいと思いませんか？」

先程きりたんに言われた言葉がフラツシユバツクする。私は魅入られるように手を伸ばし、掴んだ。そのメモリこそが私のもう一つの相棒。ジョーカーメモリだった。

「…やはり貴方にはそれが似合うと思ってきました。では私は……………虚音イフ…威風と書くんですかね？彼の様に自由に、風の様に……………」

そう言ったきりたんが選んだのはサイクロン。この時ダブルの基本形態が決まった。

「なにしてるのきりたん!?何故侵入者にメモリを……………」

焦った様なアルテミス・ドーパントの声が聞こえてきた。しかしきりたんはそんな言葉に返事もせず私の腹部にダブルドライバーを装着、それはベルトとなって私の腰に巻かれる。

「ロストドライバーとも違う、未知の新型!? やめろ! きりたん、やめな
さー!」

これまでにない激昂と共にアルテミス・ドーパントの光の矢の雨が
降り注いできた。同時に戦闘ヘリの銃撃も襲いかかる。

「…行きますよゆかりさん」

《サイクロン!》

「…うっ、うああああああああああ!!」

《ジョーカー!》

きりたんの呼びかけに、私は私に向けて放たれる矢と弾丸の嵐に絶
望を感じながらも体が自然に動き、私は変身の余波で矢と弾丸の嵐を
弾き飛ばしながら姿を変えた。紅い複眼が輝き、緑の疾風が吹き荒れ
る。吹き荒れる風はアルテミス・ドーパントを吹き飛ばして天井に叩
きつけたどころか戦闘ヘリまで墜落させてしまった。

「うおおおおおっ!」

「さつきはよくもおやつさんを!」

見覚えのある黒服たちが無謀にも殴りかかってきたので、拳と蹴り
で文字通り蹴散らす。大の大人が簡単に吹き飛ばされるその力に、私
は感嘆した。

「す、すごい…私、もしかしておやつさんの様に…?」

『かなりの身体能力ですね。貴方の評価を改める必要がある』

「え!? な、なんか頭の中からあの子の声がする!」

『私の身体を見てください』

言われて見てみると、きりたんの身体が無造作に横たわっていて。

死んでいるんじゃないかと、でも声は聞こえていて!?!と私は混乱した。

「なんなんですかこれ、私どうしちゃったんですか!?!」

『まだ勝手がわからない様ですね。説明は受けてないのですか?』

「説明も何も私、そのトランクケースを開けることもできなかつたんですが?」

『…本来なら虚音イフが私とこうなっていたってことですかね。それより来ますよ』

「え?」

言われて振り向くと、黒服の一人が一本のメモリを手に立ち上がっていて。

《マグマ!》

溶岩を意味する言葉が鳴ったかと思えば男は首にメモリを突き刺して溶岩の怪人、マグマ・ドーパントへと変貌した。

『上級戦闘員みたいですね。メモリの実験に耐えれたエリートです』
「なんでもいいですが水都を泣かせる怪物の一人ってことですね。やってやります!」

マグマ・ドーパントに突撃する私達。放たれる火球弾を紙一重で避けながら突撃し、今まで茜さんのストーカーに対してよくやっていたヤクザキックを繰り返す。しかし受け止められ、軽々と投げ飛ばされてしまう。

「っ……!」

『そんな愚直な…メモリ交換しますよ』

《ルナ!》

「メモリ交換？って、私の右腕が勝手に!？」
《ルナ！ジョーカー！》

私の右腕が勝手に動いてどこからともなく取り出したルナメモリとサイクロンメモリを交換、右側が緑から金色に染まったことに驚く私。さらに右腕が伸びてゴムの様にしなりマグマ・ドーパントの放った火球を弾き飛ばしたばかりか奴を殴り飛ばすもんだからもう度肝を抜くしかない。

「え？えええ!!ええええ!!」

《サイクロン！》

『驚いている暇があつたらジョーカーメモリを抜いて右腰のマキシマムスロットに装填してください』

《サイクロン！ジョーカー！》

「右腰？」

言われるなりジョーカーメモリを引き抜いて、いつの間にか緑に戻っていた右腰のマキシマムスロットに装填。すると私の身体が風に巻き上げられて空に舞い上がり、私が狼狽えているときりたんが私の右手を操り右腰を叩く。

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

「半分!!」

そしてそのままマグマ・ドーパントに向けて両足を向けて直進。したかと思えば正中線で二つに分かれて微妙にタイムラグのある二段蹴りを行い、当たる瞬間には両脚蹴りになるというよく分からん飛び蹴り：後のジョーカーエクストリームが炸裂。マグマ・ドーパントは爆散し、その衝撃で床が崩れて私と、きりたんの身体が落ちて行くがきりたんの方は小さな恐竜型メカ：フッキングメモリが服を掴んで落下を防いでおり、一緒に階下に降り立った。

「わた、私の身体どうなって…」
『あのメカ…なるほど』

狼狽えているときりたんがメモリを抜いて変身が解かれ、私は何事も無い無事な身体を見てほっと一息ついていると目を覚ましたときりたんが手を上げる。

「どうやらあなたは変身に慣れてない様ですね。あと五月蠅い。代わりましょう」

「え、あれ、どうなってるんです?」

「このシステムで変身した、二つのメモリの融合超人の名前は…^{ダブル}W」

「W? 私達、合体してたつてことですか…?」

「そうです。貴方と私は、虚音イフとの誓いを果たさねばならない」

「おやっさんとの、誓い…」

「二人でここを脱出します。また一度力を貸してください」

《ファング!》

手に飛び乗ったファングメモリを変形させてダブルドライバーに装填するきりたん。意識が飛ばされる直前、私は高校生ぐらいの年に成長したきりたんの姿が見えた。

「変身!」

《ファング! ジョーカー!》

次に目を覚ますと、周りには何か鋭い刃物で切り裂かれた傷がある。マスカレイド・ドーパントの亡骸が沢山転がっていて。傍らに私の身体が転がっていていくらか意識が飛んでたことに気付く。

「ヴアアアアアアアア!!」

『こ、これは…』

きりたんは咆哮を上げながら暴れて、まだ立っているマスカレイド・ドーパント達を蹂躪していくダブル。私の方はまるで動かさない。ただ見ていることしかできなかつた。

「な、なに!?!あの力は…!?!」

「ヴアツ!」

《シヨルダーフアング!》

そこにやってきた息絶え絶えのアルテミス・ドーパントが矢を放とうとするも、二回フアングメモリのタクティカルホーンを叩いたダブルが右肩から生えた刃を手に取り投擲。それは残っていたマスカレイド・ドーパント全てを切り裂き、さらにアルテミス・ドーパントの胸元に斬撃を浴びせてダウンさせる。

「こ、これは…!」

『起きましたか!私の身体を持って逃げますよ!』

「ヴアツ!」

私の身体を担いで走るダブル。一瞬きりたんが正気に戻ったようだが走り方には知性の欠片も感じられず心配になり、海岸まで出た所で問いかけた。

『あの!大丈夫なんですか!?!なんか私の方まで気持ちが悪ざわするんですが!』

「ヴアアツ…:…黙っててください。このメモリの破壊衝動は凄すぎます、このままではつ…敵!?!」

海から何かが海上を走って来て、私達は身構える。しかしやってきたのは、黒と黄色のボートの様な物、ハードスプラッシュャー。おやっさんのバイクにも似てる気がした。

「海戦用ユニットを付けたマシン！Wの支援メカです！これで海中から脱出すれば逃げられます！」

『え!?待ってください、海の中ですよ!?私の身体は!?!』

「仮死状態だから大丈夫ですよ、多分」

『多分って貴方ね:!?』

そのままハードスプラッシャーに乗り、私達は島から脱出したのだった。

目を覚ますと変身が解かれていて、私ときりたんは同時に目を覚ます。どこかのガレージの様な場所で、開いている入り口の外には線路が見える。確か廃線だっただろうか。水都を知り尽くしていると自負している私でも知らない場所だった。

「無事ですかきりたん……どこですか、ここ?」

「何とか無事です……あのメモリもう絶対に使いません。安全な隠れ家ですかね?マシンに逃亡先がインプットされていたのは確認しました……」

「これは……」

振り返るとそこにあったのは巨大な骸骨を模した戦車の様なマシン。その骸骨の意匠がおやっさんの変身したスカルと重なった。

「骸骨のマシン……そうか、ここはおやっさんの基地ですか……!」

すると目の前で機械が勝手に動いて骸骨の意匠の装甲をWとよく似た意匠の装甲に換装して。スカル専用マシンのスカルギヤリーからダブル専用マシンのリボルギヤリーへと、おやっさんから私達に継がれた瞬間だった。階段を上ると、机…今でいうきりたんのテリトリにスタックフォンが二つとバットショット、スパイダーショットが置かれていて。きりたんはそれを手に取り納得する。

「二人分のガジェットということはこれを使って組織と戦ってことですか」

「もしかして、あの依頼人…?」

「どうやらスカルの陰の支援者は引き続き私達の味方になるようですね。それが恐らく、Wを作った人物…」

「あの階段は…」

上に行く階段を見つけて登ると事務所に帰って来ていて。たった一日で寂しくなった光景に、涙が溢れてくる。

「事務所…:地下にこんな基地があったなんて。そういえば、この扉に触れたら幽霊が出るって言ってましたね…:そういう、ことですか」

「…結月ゆかり?」

同じく登ってきたきりたんの問いかけに応えることなく、フラフラと、おやっさんのデスクに歩を進め、被っていた帽子を定位置に戻す。その横に揃って飾られていたペストマスクがなくて、そのことを自覚して、涙が溢れる。もう懐かしくなくなってしまった匂いがした。

「…おやっさんの…匂いがします…:」

「え?」

「私はずっと、追いかけていた人の匂いなんです…:」

椅子に寄りかかり、泣きじゃくる。駄目だ、我慢できない。おやっさんが死んだのだと、本当の意味で自覚してしまった。

「消えてしまふんですかね、この匂いも……本人がいなくなったらそのうちに……いやです、いやですよ、おやっさん……」

★

「…そうです。そうなんですよ、あかり。おやっさんを…虚音イフの命を奪ったのは私、なんです」

いつの間にかあの時と同じように泣いていた。止まらなかった。静かに泣いていたあかりに、あの時の後悔が蘇って……涙が溢れてくる。

「あれから一年以上経ったのに、駄目ですね……おやっさんの最期を思い出すと、気持ちがボロボロ崩れてしまう……」

「もういい、もういいです、ゆかりさん！そんなに辛い話を無理に話さなくても……！」

泣きじゃくる私を、涙を浮かべたあかりが止める。ああ、その優しさは…おやっさんにそっくりだ。

「あかり、私は貴方がおやっさんの孫だと聞いた時…おやっさんに会いに来たと言った時、このことをすぐ話そうか迷いました。でも怖かった、大事な後輩の祖父を死なせてしまったなんて言う勇気がなかった。でも、おやっさんの様に探偵になって、危険なのに物怖じせず調査していく姿におやっさんを重ねてしまって……話さないことの方が罪だと思うようになっていたんです」

「…虚音イフの死はあまりにも大きい」

泣きじゃくり告白する私をもういいと止めるように背中を擦って続いてくれたのはきりたんだった。私の方が大人なのに、情けない

…。

「でも彼のおかげで生きて人形だった私は心を持ち始めました。そして生涯の相棒にも出会えた。エクストリームの件で改めて確信しました。あの日は私達にとつて、人生最悪の別れと最高の出会いが両方訪れた日でもあると思うのです。だから二人で話しあつてこう呼ぶことにしました」

「悪夢の夜ではなく、始まりの夜。ビギンズナイトと…！…これが私達の過去です」

きりたんの言葉に続ける。聞いていたあかりとついなさんは押し黙ってる。

「二人とも…？」

「いや、なんとというか…壮絶でした。でも、お爺さまは命を賭して二人に繋げたんですね…」

「うちとしてはミュージアムに師匠殺されていて、それでよくうちみたいにならんかったなと感心したわ」

思い思いの感想を語る二人に、私ときりたんは顔を見合わせる。…責められると思った。怒鳴られると思った。だけど違った。やはり、信じてよかったのだと、私達は笑ったのだった。

第二十五話：Tの贖罪／方相氏の村

ビギンズナイトのことをあかりとついなさんに話してから一週間ぐらいたったある日。今日も今日とて猫探しなどの危険のない依頼を終えて帰ってゆつくりしていた私とあかりの元に訪れたのは、今時珍しい和服を着た若者だった。

「如月追儼を捜してほしい?」

白を基調としたミニスカ和服とも言うべき服と赤い襟巻、和風で先端が草履になっているサイハイブーツを身に着けた高校生ぐらいの少女の名は赤井快子^{あかい かいこ}。水都の外の山奥にある「役村」^{えんの}から出てきたらしい。

「はい…足取りを追って行ったら水都に来たことが分かって。伝えたいことがあつて捜しているんです…」

「えっと…赤井快子さん、でしたっけ?如月追儼さんなら…」

「邪魔するで結月」

「あ」

「え」

私達の顔見知りです、と伝えようとした瞬間、ノックもせずに入ってくる警視殿が一人。ついなさんは快子さんと目を合わせて固まった。

「ついなあ!」

「わあ!?!快子なんでお前がいるんや!?!」

…どうやら今回の依頼は、今まで謎に包まれていたついなさんのルートについて知ることができそうだ。

「岳^{がく}さんが鬼に殺されたって聞いたのに、何時まで経ってもついなが帰ってこないから捜しに来たのよ！貴方まで死んだんじやないかって心配だったんだから！」

「そ、それは悪かったけどな？うちもようやく岳を殺した奴を見つけて…今は刑事の方を本業にしよう」

「ついなは方相氏でしょ！幼馴染三人娘の中で一番優秀な村一番の方相氏！」

「いやそうなんやけどな？」

「言い訳しない！」

「はい！」

すごい、あのついなさんが完全に押されている。どうやらこの二人は幼馴染らしい。話を聞くについなさんが目的のために、本来は効率よく動くための手段でしかない刑事という立場を本業にしていることに快子さんは憤ってるらしい。方相氏であることに誇りがあるのだろうか。

「ついながないから村は大変なことになってるんだからね！」

「大変ってどういうことや？村に何があった!？」

「…岳さんが蘇って怪物になって、方相氏を殺し始めたんだ。与一さんがもう犠牲になってる」

「あの与一がか!？」

怪物。殺し。そのワードに顔を見合わせる私とあかり。水都の外でドーパントが？エル・ドラードという海外でも活動していたドーパントもいるものの、日本では何故か水都にしか現れないはずのそれが、水都の外に現れるなんて今までにないことだ。

「……結月。頼みがある。依頼をしたい」

快子さんから事件のあらましを聞いていたついなさんが黙ってい

たかと思えばそう言ってきた。

「うちにはどうしてもあの岳が蘇って見当違いな復讐をし始めたとは思えへん。アイツを騙る阿呆がいるに違いないんや。うちと一緒に役村えんのむらに赴いてその正体を暴いてくれへんか。虫がいいことを言っているとはわかつとる。お前が水都を離れるってことは守る人間がいなくなるってことや。でも頼む、うちに力を貸してくれ……」

そう言つて頭を下げるついなさんに、私は様子を見に扉から顔を出したきりたんと視線を交わす。きりたんは頷いた。行けということか。

「水臭いじゃないですか。貴方と私達の仲です、もちろん手伝いますよ。ね、あかり?」

「もちろんです! ついなさんも私達の仲間ですから!」

「へー、ついな新しい仲間を見つけたんだね」

「そ、そんなんやないし! …でもいいんか? 留守の間に事件が起きたら……」

「きりたんを残すので大丈夫ですよ。それに水都以外にドーパントが出たつて言うのなら間違いなく組織が絡んでるはずです。行かないわけにもいかないでしょう」

そんなわけできりたんを事務所に残し(ご飯は鳴花ーズの2人に頼むことにした)、私達はついなさんの故郷、山奥にあると役村えんのむらに向かうことになったのだ。念のためコートの下に目だたない様にダブルドライバーを常に付けておく。きりたんが襲われて連絡ができないとかなつたら大変ですし。

快子さんを後部座席に乗せたついなさんのバイク、ディアブロツサをハードボイルダーにあかりと二人で乗って追いかける。バイクになってばかりで知らなかったがちゃんと免許を取って購入してエンジンブレードを組み込む改造までしてあるらしい。そういや公務員でした。まだ道路はあるがアスファルトもだいぶ古くなってきた。ろくに人が来ない場所であることが容易に想像ついた。そして先が見えないトンネルの前につくとついなさんは一度停車させて振り向いた。

「このトンネルを抜ければ役村えんのむらや」

「ついにですか」

「ちよつとお尻が痛いです。タクシーで来るべきでしたね」

あかりがそうぼやくのを聞きながらトンネルを進んでいく。バイクの音が木霊する中、感じた。途中で空気が変わったと。トンネルを抜けると、盆地の様になっている山々に囲まれた村が見える丘に出た。見る限り建物は木造だらけだ。ちらほら見える住人も着物を着ていて江戸時代にタイムスリップしたかのようだ。

「ここが…役村えんのむら」

「ついなさんの故郷ですか…」

「そうやで。まずはうちの家に向かおか。快子はここまででいいか？」

「うん、送ってくれてありがとね、ついな。あとで恵のところにもちやんと顔を出すんだよ？」

「わかっとなるわ」

そうやってディアブロツサから降りた快子さんは当たり前なのか跳躍するのを繰り返し返して村まで向かって行った。：方相氏ってみんなあなんですかね？

ディアブロッサを引き摺るついなさんの案内でハードボイルダーを手で押しながらやってきたのは村で一番大きな武家屋敷。門構えに「如月」とあるのでついなさんの実家らしい。ついなさんが当たり前のように片手でバイクを引つ張っているのはツツコミ待ちなのだろうか。村の印象としては、ところどころにぽつぽつと存在する岩から緑色の結晶の様な物が生えていたのが気になった。鉾脈なのだろうか？

「親父ー！帰ったでー！」

大声で呼びかけるついなさん。すると障子扉がバンツと開き、誰かが飛び出してきたその手に持った棍棒をついなさんに振るい、私達が慌てる間もなくついなさんは片手でその一撃を受け止めにとやりと笑う。

「引退したのに腕は落ちとらんようやの、親父！」

「当たり前じゃ！心配かけおって馬鹿娘！」

「ええ……」

襲ってきたのは袴を履いた黒い着物姿で鬼の面を斜めに被った立派な髭の初老の男でついなさんの父親らしい。今のは再会の挨拶か。何なのだろうかこの村。きりたんがいたら目を輝かせそう。

「おや、ついなきせくらぎの友人ですか？わしは如月木偶蔵でくぞう。ついなついなの父親です」

「結月ゆかりといいます。水都で探偵をしている者です。こちらは所

長の…」

「私は継星あかりといいます。継星探偵事務所を経営してます」

「ほう、探偵さん。お若いのに一城の主とは立派な。…ということは例の事件を聞いて？」

「はい。友人のついなさんの依頼で調査に来ました」

挨拶を終えると屋敷の中に入れてくれる木偶蔵さん。床の間に案内されて机を挟んで畳に敷かれた座布団に座る。

「この村は完全な奥地での。人が死んでも警察のお世話になることが珍しいんじゃない。そもそも人死になど珍しくもないでの」

「それはまたどうして」

「わしらは国にお仕えする方相氏。鬼を相手に死ぬことなど珍しくないからじゃ」

「鬼とは？」

そうだ、気になっていた。せいぜい厄い空気とかを祓うだけだと思ってたのだが物理的に被害が出るのか。

「鬼つてのは文字通り異形の怪物や。比較的人間的な姿なんやが…角や牙が生えていたり異色肌やったり中途半端に異形化しとる。原因不明ながら日本各地に現れるそいつらを退治するのがうちの役目や」

「この村の人間は昔から超人体質に生まれてな。常人より頑丈で怪力を併せ持ち、傷が治る速度も速い。故に鎌倉幕府の時代から国にお仕えして鬼退治をしてきた。それが方相氏じゃ。その中でも一番の才能の持ち主で歴代最強の方相氏がわしの娘、ついなじゃ」

【興味深いですね】

私と脳内会話しているきりたんの声が聞こえて頷く。鬼…そんなものが実在してるんですね。それについなさんがその歴代最強とは

…いやまあ、生身であの重さのエンジンブレードを振り回すばかりか跳躍してたし妥当か。

「そんなうちでも仲間を助けることはできひんかったがな…」

「そうだ、岳が殺されたと報告を寄越してそのまま雲隠れするもんだから心配してたんだぞ」

「岳を殺した奴を追っていたんや。岳は鬼に殺されたわけやない、鬼よりも凶悪なドーパントに殺されたんや」

「ドーぱんと？」

首を傾げる木偶蔵さんにドーパントについて説明する。水都に出没する怪物であること。人間がガイアメモリという悪魔の小箱で変貌すること。今回蘇ったついなさんの仲間だと言う怪物もそのドーパントかもしれないので調べにきたことを語った。

「なるほど…まるで鬼みたいなものだな」

「私も思いました。その鬼は、ドーパントに酷似している」

「でもガイアメモリは水都にしか出回ってないんですよね？」

「…鬼とドーパントどっちも戦ったことがあるうちから言わせてもらえば、どっちもどっちや。強いて言うならドーパントの方が強いな」
「なるほど？」

鬼は不完全なドーパントという事か。…ドーパントってことはもしかして人間だったり…まさかね？

「あれは鬼ではなかった。ドーパントという奴なんじゃろう。うちの者の中でも確かな実力者だった若者、那須野与一を容易く葬ってしまった。糸で雁字搦めにされ、袈裟斬りにされてな」

糸を使うドーパントか。糸と刀、全く繋がらない。

「だがあの太刀筋、立ち振る舞いはまさしく神威岳かむいがくの太刀筋そのものだっただ…」

「そんなわけあるかい！あいつは、岳は！氷漬けにされてうちの目の前で碎け散ったんやぞ?!生きとるわけがあらへん!」

「わしが剣を教えたんじゃぞ?!見間違えるはずが無かろう!」

「うちはその死を目の前で見たって言うてるんや!」

「落ち着いてください二人とも!」

あかりが二人を宥めているのを横目に考える。死んだはずの人間が生き返る。そんなことを以前見た覚えがある。

「…以前、エルドラド・ドーパントという怪人がいました。そいつは自身の偽物を作って死を偽装し姿を隠していました」

「……おいなんや結月。自分、まさか…」

「ホワイトアウト・ドーパントは自身の偽物を作ることができます。

…氷漬けにされた人間なら作れると思いませんか?」

「ふざけてんのか!あいつがうちを騙して奴と共謀して生きとって仲間を殺してると言うつもりか!」

私の服に掴みかかり怒鳴り散らすついなさん。木偶蔵さんとあかりはオロオロしてる。

「その可能性もあるっただけですよ。ガイアメモリは人の心を狂わせるんです。例えば善人であっても心根が歪んでしまう」

「うちは信じへんぞ!そんなこと…そんな馬鹿げたこと…!」

「大変!大変よ村長!」

そこに黒髪で翡翠色の目をした狐の面を斜めに被った少女が入ってきた。誰?と私とあかりが首を傾げているとついなさんが反応した。

「恵!? どうしたんやそんな焦って!?!」

「どうした、恵。まさか…」

「怪物が、兄上がまた現れて…隆斗さんを襲っていて!」

「兄上ってまさか…」

「ああ、恵は岳の妹や。それよりいくで、結月! 怪物が岳じゃないと証明したる! 恵、案内を頼む!」

「あかりは念のためにここで待機を!」

私達は外に出るなり恵さんの案内で急行する。途中でついなさんはディアブロツサに収納しているエンジンブレードを引き抜いて走る。そこは川沿いで巻き藁などがあることから修練場らしいことがわかる。そこに、奴はいた。両肩はまるで糸車の様で青黒い蟲の様な顔と四肢が目立つグロテスクな全身を白い和服に身を包んでいて白い刀を手にしている姿は侍の様にも見える。

「方相氏は滅するがいいでござる!」

「グツ…アアアアアアツ!」

目にも留まらない速度で振り下ろされた刀が、止める間もなく出っ歯の青年を縦一文字に斬り裂き鮮血が舞う。鮮やか過ぎるその太刀筋は圧倒的な練度を感じさせる。これが神威岳の太刀筋ということですか…。

「隆斗さん!?! いやあああああ!?!」

「恵は下がつとれ! 岳を騙る不届きもの…ここで潰したる!」

《アクセル!》

ついなさんはアクセルドライバーを腰に付けてメモリを鳴らしてドライバーに装填、私もジョーカーメモリを手にきりたんに呼びかけドライバーに装填する。

「きりたんん！」

《ジョーカー！》

【出番ですか。《サイクロン！》】

蟲のドーパントは血に濡れた刀を振るって血を飛ばし、返り血を浴びて白い着物を赤く染め上げた悪鬼が振り返る。

「変…身！」

「【変身！】」

《アクセル！》

《サイクロン！ジョーカー！》

「ついなが…変わった!?!」

驚く恵さんを置いて、私達は左手の指を拳銃の様にして突き付け、アクセルはエンジンブレードを構えて宣言する。

『「さあ、お前の罪を数えろ！」』

「振り切るで！」

「…来い」

刀を手に挑発してくるドーパントに、私達は突撃する。刀を蹴り上げて拳を叩き込むが刀を握っていない方の左手で受け止められて押し返され、振り下ろされた斬撃を紙一重で避けて距離を取る。同時にアクセルが斬撃を受け止めて罅迫り合い。

「お前は誰や!?!なんで、岳を騙るんや!?!」

「拙者は神威岳。拙者を見捨てたお前たちに引導を引き渡す復讐鬼だ、ついな！」

「黙れ！うちは、岳を見捨てた訳やない！」

激しく刀とエンジンブレードを斬り交わすドーパントとアクセル。

その間に私達はメモリを入れ替える。

《ルナ!》

『こいつに接近戦は危険です!』

《トリガー!》

「同感です」

《ルナ!トリガー!》

ルナトリガーに変身、アクセルと斬り交わすドーパントに向けて誘導弾を放つも、ドーパントが左手を翳すとシユルルツという音と共に誘導弾が全て斬り裂かれてしまう。なんだ、今のは。

「きりたん…見えました?」

『いえ、音は聞こえましたがトリガーの目を持ってしても見えませんでした』

「とにかく、少しでも気を逸らさせましょう」

乱射乱射乱射。誘導弾を連射し、そのたびに左手が向けられ斬り裂かれていく。しかもその間片手でアクセルの猛攻をいなしている。なんて奴だ。技量はシャーク・ドーパントを越えているかもしれない。

「くそつ、岳と同じ太刀筋をしおつてからに…!」

「拙者は神威岳だと言っているでござろう。ついな、お前は最後だ。そこで寝ているでござる」

「ぐあああ!?!」

「ついな、大丈夫!?!」

押し返され距離を取ったかと思えば刀が振るわれて見えない斬撃がアクセルに炸裂。その威力に吹き飛ばされて変身が解除されるついなさんに駆け寄る恵さん。

「ついなさん!?!この…!」

《メタル!》

《ルナ!メタル!》

ルナメタルに変身してメタルシャフトを伸ばして攻撃するが、伸ばした瞬間刀が振るわれて見えない斬撃に輪切りにされてしまう。なんなんですかねこの剣豪!?

「飛ぶ斬撃とか漫画だけで十分なんですが!?!…って、シャフトが動かない!?!」

『手放してください!』

「遅いでござる!」

さらに切断されて残ったメタルシャフトが何故かビクともせず動かなくなり、手放そうとしたときには見えない斬撃を受けてダブルドライブが弾き飛ばされて変身が解除されていた。歩み寄ってくるドーパントに、ダメージで動けず何もできない。万事休すか。

「がはっ…フアングかエクストリームなら対抗できたかも…」

「標的じゃないが邪魔者…ここで始末する、でござる」

「待て!結月はこの村と何も関係あらへん!恨んでいるならうちを殺せ!岳!」

エンジンブレードを地面に突き刺し杖代わりにして立ち上がり、涙を浮かべて叫ぶついなさん。斬り交わして神威岳だと確信したのか。

「お主は最後だついな。方相氏に生まれたことを後悔して死んでいくでござる」

「待って!兄上!」

斬られようとしていた私の前に両手を広げて立ちはだかった恵さんに、刀が止まる。実の妹はさすがに斬れないか。

「本当に兄上ならどうしちゃったの!? 方相氏であることに誇りを持っていた兄上は何処に行ったの!?!」

「…方相氏は存在すること自体が悪でござる。悪鬼滅殺。己が異形になろうと成し遂げて見せようぞ」

「ついな！お客人！無事か!?!」

「ゆかりさん！悲鳴が聞こえましたけど…」

「一体何事!?!」

「まさかまたあの怪物が…りゅうくん!?!」

すると様子を見に来たらしい木偶蔵さんとあかり、快子さんと見知らぬ黒髪の一部が金髪になってるロングヘアーの女性がやってきて、それを見たドーパントは分が悪いと見たのかどんな手品か幻の如く刀を消し去り、跳躍すると何も無い空中に着地し走って行って姿を消した。

「これは、ついなさんにとってのビギンズナイトを聞く必要がありますかね…」

残された死体の前に転がっていたダブルドライバーを拾い上げ、私は苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべるしかなかった。

第二十六話：Tの贖罪／天才方相氏のトラウマ

「ゆかりさんが無事なのがわかって何よりですが強敵でしたね……糖分取りに行きますか」

事務所を出て階段を下りていく。ベルトを吹き飛ばされて変身を強制解除されたのは完全に予想外だったが、その後すぐに連絡が入ってあちらの無事を確認できた。正直に言って、通常の六本のメモリじゃほとんど勝ち目がない。私が行ってフアングになった方がまだ勝ち目がある。だけど、水都を離れる訳には……そう考えながら梅酒BAR「鳴花ーズ」の扉をくぐる。客は私だけの様だ。

「こんばんは……」

「おっ、いらっしやいきりちゃん！座って座って！」

「ゆかりから話は聞いてるよ。何を食いたい？」

「とりあえず甘い物をください……」

「かしこまりました」

カウンター席に座って注文すると厨房に入って行く鳴花ミコト。その間に鳴花ヒメがニコニコと持って来たぶどうジュースをコップに注いで差し出してきたので素直に受け取る。不思議な人たちだ。ゆかりさんからもこの二人は虚音イフの知り合いで年齢不詳と言う事しか知らないらしいが信用しているとのこと。私達がダブルだということとは知らない筈、らしいが……。

「お待たせしました。梅ジャムパフェだよ。どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

すると五分もしないうちに鳴花ミコトが厨房から出てきてグラスに入れられた生クリームと紅いジャムが目立つパフェを差し出してきたので遠慮なく受け取り、カウンター席に備えてあるスプーンを手

に取りいただく。程よい甘さが脳に沁み渡る…。

「きりたん。君、迷ってるね？」

「な、なんのことですか？」

「水都を留守にするかどうかだよ」

「!？」

パフエを食べていたらカウンターに頬杖を突いた鳴花ミコトに迷っていることを当てられ、さらに鳴花ヒメに内容まで当てられて驚く。

「私達は同一人物、梅の精霊」

「考えていることは同じさ。二つ分の視点で観察すれば悩んでることぐらいはわかる」

「貴方達は一体…？」

「きみのなかまだよ、きりたん」

混乱している私の元に舌足らずな言葉と共に店の奥からやってきたのは、ピンク色のスモックの上にダボダボの白衣を着て黄色い帽子を被った園児にしか見えない子供。その特徴はついなさんから聞いていた人間の特徴と同じだった。

「…もしかして、貴方がついなさんにアクセルドライバーを渡した月読アイ…？」

「そだよー。ダブルドライバーをつくってイフにあなたをすくうようにいらしたのもわたし。ようやくあえたね、きりたん」

「…何の用で私の前に現れたんですか」

警戒する私に、月読アイはポケットから取り出したキャンデーを舐めながら告げた。

「だいじょうぶだよってつたえにね」

「大丈夫…?」

「もうひとり、仮面ライダーをよういしたから」

そう言つて入り口からは死角になつていた店の奥をだぼだぼの白衣に包まれた右手で指し示す月読アイを警戒しながらもそちらに視線を向ける。そこにいたのは思わぬ人物だった。

「あなたは…!？」

「また会つたな、ダブル」

そこには蒼く塗られたダブルドライバーの様なバックルを手に笑う、金髪碧眼の美女…金堂百合が呪怨キク、西友を連れて座つていた。

あのあと、私とあかりは仮面ライダー関連の説明をついなさんにしてもらつてる間に手分けして村中を廻つて聞き込みした。その結果、あの場にいた面々以外三人以上で相互視認していたため犯行は不可能という結論に至つた。

「あの場にいた人間以外の村の人間はアリバイがありました。まあ一応ですけど。だってあの場に全員いましたからね。第一容疑者は神威岳本人、となります」

ついなさんの父親で村長の木偶蔵さん。神威岳の妹である恵さん。ついなさんと恵さんの親友である快子さん。そして被害者の印種隆斗いんたね りゆうとの婚約者だった利理百合子りり ゆりこさん。そしてあかりとついなさ

んが揃った如月家の屋敷の広間で、私は報告を行う。隆斗さんが亡くなった上にその犯人が神威岳だということから完全にお通夜状態だ。百合子さんなんて泣きじゃくって完全に塞ぎ込んでしまってる。

「そうか……世話をかけたな、結月。所長。本当に岳なんか……いや、アイツが死んだところはうちがこの目で……」

「……ついなさん。辛いでしょうが私達も知る必要があります。貴方にとってのビギンズナイト。神威岳の最期と貴方が仮面ライダーアクセルになったきっかけを」

「そうだよついな。一体何があったの……？私はともかく、妹の恵にも話してないなんて……」

「兄上の最期を聞かせて、ついな」

私と幼馴染である快子さん、恵さんの言葉を聞いて意を決した表情となるついなさん。神威岳が犯人だとしたら何か違和感があるかもしれない。ちゃんと聞かなければ。

「……あれは今から一年ぐらい前や。珍しく地方都市に出て人々を襲っていた強力な鬼二体を、村で一番強かったうちと岳で手分けして当たってたんや。こちらは鬼の気配を感じ取ることができる。せやからうちは岳も鬼を倒したことを確認して、後始末をしてからアイツの所に向かった」

「神威岳はついなさんと肩を並べるぐらい強かったと……？」

「天才のついなに対して努力して肩を並べた努力の天才なんですよ！」

「兄上とついなはこの村どころか日本中の方相氏の中でも別格だったと思います」

思わず漏れ出た質問に答える幼馴染二人の言葉に頷き、ついなさんは続ける。

「せやけど、岳のいた街の一角は春先だというのに漂白された氷漬の街になつとつた」

「漂白…まさか」

「アイツの仕業やろうな。鬼の力じゃ絶対になしえない変り果てた街並みに、うちは岳と話していたことがフラツシユバックした。ある街に人造的に強力な鬼を生み出す悪魔の小箱ガイアメモリがばら撒かれてるらしい、という国からの情報や。これがそれかと直感し、うちは気配を辿って岳の元に急いだんや」

★

嫌な予感がした。凍り付いた街並みを一気に駆け抜けた。錫杖の使い手であるうちと異なり、刀の扱いに長け瞬く間に鬼を両断する岳。敵の呼吸や鼓動や足音で動きを予測し、無傷で斬り捨てる岳。力任せで身体能力に物を言わせてるだけのうちと違い技に長けている岳ならどんなことがあっても生き残れるのだと、そう思っていた。

「岳！無事か!?……っ!?!」

凍り付いた街の中心地にあつたビルの屋上。自動ドアをこじ開けて中に入り、扉を蹴破って屋上に出た内が見たのは、中心で刀を構えたまま凍りついた岳と、その前に立つ純白の怪人。当時はドーパントという名前も知らなかったが、ホワイトアウト・ドーパントがそこにいた。

「おや?この方のお仲間ですか?あまりに強いのでちよつと本気を出してしまいました。ああ、ご心配なく。まだ生きてますよ?まだね」
「きつさまああああッ!」

錫杖を手に床を突いて跳躍。空中を舞って錫杖を叩きつける。うちお得意の一撃必殺の攻撃。それを、ホワイトアウト・ドーパントは手にした長い氷柱を杖代わりにして受け止めると錫杖を握り、瞬く間に凍結させてきたのでうちは錫杖を手放して退避。凍り付いた愛用

の錫杖は奴が握りしめるとあっけなく砕け散ってしまった。

「危ない危ない。でも面白い方ですねえ。まるで妖怪退治の物語の主人公の様だ！」

「岳から離れんかい！」

懐に入れていた小太刀を引き抜き、奴の頭部目掛けて跳躍する。しかし容易く片手で首を絞められて、うちの全身も凍てついて動けなくされて岳の近くまで放り投げられてしまう。

「常人よりは強いですがそれだけですな。ドーパント相手じゃなければ無双なんでしょうねえ。貴方は面白くしてくれそうなので生かしてあげますよ」

「ふざけるなや……！逃げさへんで……！」

「おやその身体で立ち上がる。大したものですねえ。では動けなくなるまで痛めつけましょう」

その手に氷の短剣が二本握られる。何とか立ち上がって手がどちらにも動かないので足技で立ち向かうも、凍結した足場では踏み込むこともできず簡単に受け止められて、一方的に滅多斬りにされて血塗れで倒れ伏した。ムカつくことに致命傷は決して負わず血が多く流れるところだけを斬られていた。ありや殺しに慣れているやつや。理性の無い鬼とは格が違った。

「私のことは忘れてくださいいね」

そうやって手で頭を触れられると奴の姿が白くおぼろげになる。今でこそ初峯家での戦いで見たから思い出したんやけど、あの時のうちはマジでもうアイツを認識することができひんかった。

★

「[検索しましたがホワイトアウトは触れた人間を氷漬けに漂白する

他に自身に関する記憶まで漂白させてしまう能力があります」…だそうです」

きりたんから説明されたであろうことを結月が話して補足してくれた。そういうことやったんか。厄介な奴やで。

★

「待てや、コラ……W……?」

変身を解いて去って行く奴の手には氷柱でWと刻印されたメモリが握られているのが見え、それだけが記憶に残った。

「つい、な……いるのか……?」

「岳!お前、無事なんか!」

刀を構えたまま氷漬けにされた岳から声が聞こえ、這う這うで近寄る。岳は身動きせず口だけ動かして喋っていた。しかしその声からはいつもの力強さが失われていて、弱っていると嫌でも分かるものだった。

「うちはなんとか無事や!お前はどうかんや?」

「…拙者の事は捨て置き……もう、無理だ。それよりも、奴を野放しにすれば数多の人間が犠牲になる…拙者は守れなかったが、お前なら……奴を、止めるんだ……!」

「そんなこと、当たり前やボケ!お前と、岳と一緒に!あいつを……!」

何とか立ち上がって手を伸ばす。だけどそれが間違いだった。その手に触れた瞬間、岳の身体が罅割れて行く。既に手遅れだった。岳は最後の力を振り絞ってうちに後の事を託したのだと気付いた時には、岳の身体は半分以上崩れ落ちていて。

「いや、いや、いやや！岳！岳！うちを置いて逝かんでくれ…!?」

信じられなくて縋りつくしかないうちに、罅割れながらも手を伸ばして頭を撫でてくる岳。いつも子ども扱いされてるようで鬱陶しく、てしようがなかったそれに、涙が出てきて。

「あとは、任せたぞ…」

そう笑顔で言い残して岳は完全に砕け散った。砕けた氷の欠片が宙に舞い、一つがうちの頬につく。

「うああ、ああああああああ!!」

うちは膝から崩れ落ち、未だに凍り付いた街に響く慟哭の声を上げるしかなかった。涙が枯れるまで泣いた。公安に保護されたうちは治療を受けながら、うち以外街の人間が全滅していたことを知った。誰一人守れなかった。なにが最強の方相氏や。何が天才や。守らなきゃいけない時に何も、相棒一人さえ守れないではないか。失意のままにうちは岳との最後の約束を守るため、Wのメモリの持ち主を捜してドーパントを退治しながら水都まで流れ着いたという訳や。

★

「その途中でエンジンブレードやらをもらったと」

「錫杖を失ったからな、助かったわ。今では仮面ライダーとしてガイアメモリ犯罪と戦っておる。…わかったやろ？あいつなわけがあらへん。アイツは確かに目の前で死んだんや。確かにあれは岳の太刀筋やったけど、違はずなんや……悪い、頭冷やすわ」

過去を話し終えたうちは外に出る。親父が主体で対策を話し合うらしい。奴の狙いは方相氏らしいし、一纏めになってもバラバラになっても……早く見つけて倒さなきゃならん。

「どこに行く気ですか？」

「…結月」

ディアブロツサからエンジンブレードを回収し門から外に出た所で結月に呼び止められた。見れば、腰にはダブルドライバーはなく、きりたんにも聞かれない二人きりの話をしに来たのだとわかる。

「…きりたんはいいんか？」

「今頃晩飯食べに鳴花ーズにいるはずなので大丈夫です。それより、どこへ行くつもりなのか当てましようか？ 貴方は誰よりも先にあのドーパントを見つけて決着をつけようとしている」

「早く見つけて止めなきやいけないのは当たり前やろ。捜査は足、刑事の基本や」

そう言うてはぐらかす。次の犠牲者が出る前に止めなきやならんからここで問答している暇はない。

「…ついなさん。もしあのドーパントが神威岳だった場合、死ぬ気ですか？」

「っ…」

結月には見抜かれていた。さすが探偵やな、お見通しか。

「ああ。刺し違えてもアイツはうちの手で決着をつける。倒せなくても相棒のうちが死ねば止まる筈や、あいつが岳なら…。うちが死んだところで誰も…」

「ふざけないでください！」

「…なんやと？ うちはなにもふざけてなんか…」

「そう思っているのは貴方だけです！ 少しは周りを見なさい！ 心配している人たちがいるでしょう！」

「っ…」

真剣に怒られて、何も言い返せなくなる。…脳裏に浮かぶのは結月、きりたん、所長、恵、快子、親父、…岳の最期の笑み。

「…うちは、誰も守れなかったんやぞ。心配されるような人間じゃあらへん。ホワイトアウトを止めれないのは遺憾やけど、あの岳を騙るドーパントはうちが止めねばならん、絶対に」

「なら、私達を頼ってくださいよ。同じ仮面ライダーで仲間でしょう」「それは駄目や」

「なんでですか!?!私達がそんなに頼りになりませんか!?!私達は友人の貴方を助けにここまで来たんですよ!?!」

「虚音イフが命懸けで守った結月ときりたんをうちの都合で殺させるわけにはいかへんやろ!」

食い下がる結月を突き放す。あんな話を聞かされといて、巻き込めるわけがない。そんな思いの丈を聞いた結月はうちの剣幕に後ずさった。

「岳の強さはうちがよく知つとるんや。アイツの刀は日本一や。例えばエクストリームでも技術相手はどうにもならへん。お前たちが殺されるのだけは、駄目や!」
「ぐっ…」

実際に殺されかけたことを思い出したのだろう、押し黙る結月。言い返したいのだろうがうちの心配も理解したのか何とも言えない顔をしている。すると、入り口が開いて百合子が出てきた。その顔は憔悴しきっている。

「百合子?どうしたんや」

「…帰ろうと思って。私達の、家に」

「百合子、隆斗はもう…」

「まだ信じられないの。帰ればりゆうくんがいるんじゃないかって……ううっ、ううう……」

泣きながら門から出て行く百合子。……そつとしておいた方がいいな。岳もわかっていただろうに、なんであんなことを……そんなことを考えていたうちの沈んだ顔を見た結月が決心した顔で言った。

「わかりました。私が、私達が神威岳が犯人ではないと証明して見せます」

「頼んだうちが言うのもなんだけど、あれはたしかに岳の剣やった。アイツ以外があのだーパントやとはとても……」

「それでも、違はずなんでしょう？ 確かに貴方は彼の死を見たのでしよう？ なら調べる価値はあります。岳さんを騙りその死を侮辱する真犯人を必ず見つけて、倒しましょう！ そのためにもまずは休みましよう。ちゃんと寝ないと冷静な判断はできません」

「……せやな。そうするわ」

結月の言うとおりにひとまず眠り休息をとることにする。その判断をしたことをうちは後に後悔することになった。

翌日。うちと親父、結月とあかりの四人で結月が用意してくれた朝餉を食べていた。悔しいぐらいに美味い。きりたんを養ったのだから当たり前か。味噌汁が沁みる。恵と快子は着替えを取りに家に戻ったらしい。百合子はあれ以降何も連絡がない。大丈夫やろか。

ジリリリン！

「……」

家の黒電話が鳴り響く。うちが急いで廊下に出て黒電話を取ると、

聞こえてきたのは快子の怯えた声だった。

《「ついな! ついな! ついなあ! 助けて、助けて!」》

「快子か? どうした? どこにおる?」

《「役神社! ついなが勝てるようになってお参りに来たらあいつが、し、岳さんがいて……!」》

「落ち着け! いいか、すぐ行く! 全力で逃げるんや!」

《「足が、右足が斬られて……ぐすつ、ぐすつ! 私の足が、なくなって……! 這う事しか……いやつ! 待って、岳さん! 私だよ、恵の幼馴染の……キヤアアアアアアアアツ!」》

「快子!? おい、快子! 快子!」

そこで電話がブツツと途切れた。そんな、快子まで……

「ついなさん!」

「お、おう! 役神社はこつちや!」

村の中を二台のバイクが爆走する。まだ、まだ生きてるかもしれない。痛めつけはすれど、快子の命まで奪うなんて、岳が一番可愛がってた快子の命を奪うなんて、そんなこと……!

「快子……!?!」

「快子さん……!?!」

バイクから降りてエンジンブレードを手に石段を駆け上った頂上、鳥居の先にあったのは、神社本殿の賽銭箱の上に蜘蛛の巣の様な物で礫にされた快子……の服を着た、首なし右足がなしの死体を見上げて自然体で立つドーパントの姿があった。こちらに振り返るその姿が完全に岳と重なって。そんな、まさか……

「貴様、貴様あああああ!」

《アクセル!》

「変…身!」

《アクセル!》

うちは激昂のままに跳躍してそのまま斬りかかったが、見えない何かに阻まれる。糸…?

「単純なところは変わらんでござるな、ついな」

そして返しの刃で肩を大きく斬り裂かれ、鮮血が舞った。

第二十七話：Tの贖罪／蜘蛛の糸を辿った先で

「ゆかりさん！なんで、なんで…！」

「あ、結月ゆかりのもとにむかうならこれ、とどけてくれないかな」

ひどく慌てた様子で急いでゆかりの元へ向かおうとするきりたんにアイが差し出したのはストツプウォッチの様な物が付いたメモリだった。

「トライアルメモリだよ。たぶん、きつと、ついななのやくにたつから」

「あとはオレに任せて行って来い、仮面ライダー」

「…悪さしてたら絶対許しませんからね！」

アイとリリイに見送られ、きりたんは飛来したエクストリームメモリに入って水都を後にした、その数刻前。

右肩を大きく斬り裂かれて鮮血が舞い、倒れ伏すアクセルに、私は咄嗟に飛び出していった。

「ついなさん!?!…きりたん!」

【はい！ヒートメタルです！《ヒート！》】

《メタル！》

「了解です、変身！」

《ヒート！メタル！》

きりたんに言われるなりヒートメタルに変身。炎を纏ったシャフトを振ると、何かに燃え移って炎の線がドーパントに直撃。左腕を

覆っていた白い和服状の装甲が燃えた。

「あれは…!?!」

『恐らく奴のメモリの正体は糸の記憶、ウェブです。昨日の戦いで見せたなんでも容易く斬り裂く斬撃は高速で振動させた糸鋸、飛ぶ斬撃は高速で振るわれた糸、シャフトを拘束されたのも糸と考えれば説明が付きまます』

「なるほど。糸ですか…：最初から答えが分かっていたとは厄介な」

『糸車に蚕の顔で個人的に検索するだけで分かりました。だからヒートが有効ですが…』

「近づくことは難しい、と」

「拙者のメモリに気付いたところで、もう遅い！八俣の剣！」ヤマタノツルギ

そうやって左腕を糸で覆って和服型の装甲を修復した奴の握った刀の刀身がほどけて持ち手を振るうと八つの斬撃が神社の境内を斬り裂きながら襲いかかり、咄嗟に炎を纏ったメタルシャフトを振るうが炎は通じずシャフトは輪切りにされて、胴体の表面を斬り裂かれて火花が散る。

「なん、で…!?!」

『糸でできた刀をほどいた糸を糸鋸状に振動させて炎を突き破った様ですね…』

「何でもアリですか…!?!」

「集束、三步絶刀！」

さらにほどけた刀身をまた纏めて一本の糸刀を手にしたウェブ・ドーパントが両手で糸刀を握って踏み込み加速。さつき斬られた際に胴体に糸が付けられていたらしく引き寄せられて、目の前まで迫ったところにまっすぐ振り下ろして斬撃。

《ジョーカー！》

《ヒート！ジョーカー！》

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

「むっ…!?」

『『ジョーカーグレネード！』』

咄嗟にヒートジョーカーになりマキシマム、真ん中から分裂して奴の斬撃を回避し両側から炎を纏った拳を叩き込む。しかし糸で作った装甲が燃えるだけでありメモリブレイクには至らず、さらに瞬く間に糸の和装甲が修復されていく。

「マキシマムが、効かない…!?」

『無尽蔵・種類も色も豊富な糸を操る、それだけのメモリのはずなのに…ここはエクストリームです！』

「駄目です、それでは水都を守る者がいなくなる！」

『いや、あのゆかりさん。実はですね…』

《トリガー！》

「…ツインマキシマムです」

《ヒート！トリガー！》

ヒートトリガーに変身。トリガーマグナムにメモリを装填し、さらにヒートメモリを引き抜いて腰のマキシマムスロットに装填。以前きりたんが使用した禁断の技、ツインマキシマムだ。

《トリガー！マキシマムドライブ！》

『正気ですかゆかりさん!?やめてください！』

「私は怒ってるんです。「依頼人を危険に晒す探偵は最低だ」おやつさんから私が何度も怒鳴られたことです。…衣亞さんや茜さんの時も守れませんでした。救えました。けど…私についていなさんを捜してくれと依頼してきた快子さんや、今回の依頼人であるついなさんを傷つけさせてしまった…私は私を許せない」

《ヒート！マキシマムドライブ！》

『やめて！やめてください！私でもああだったのに、ゆかりさんが死んじやう……！』

「ここが命の張りどころです……！」

《マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！マキシマムドライブ！》

きりたんの制止の声をかき消すように狂ったように鳴り響くマキシマムドライブの音。まるで警告の様なそれと共にダブルの身体が炎に包まれ全身が焼けついて行く激痛に苛まれる。そんな私に怖気づくウェブ・ドーパント。だがもう遅い。

「待て結月！駄目や！」

『ゆかりさん！やめて——！?』

「喰らいなさい、ツインマキシマム……！」

ついなさんときりたんの制止の声を振り切って腰のマキシマムスロットを叩き、全身に纏った灼熱の炎をトリガーマグナムに纏めて特大火球を解き放った。

「無駄でござる。糸格子いとこうしの構え」

糸刀を円形に振るうウェブ・ドーパント。それと同時に格子状に展開された糸が煌めき、特大火球が受け止められて、糸刀を縦に振るうと格子の糸に包まれて特大火球が潰され消えた。

「そん、な……」

【ゆかりさん!?ゆかりさん!ゆかりさん!】

変身が強制的に解除され、全身黒焦げの姿で倒れ伏す。きりたんの声が聞こえるが返事ができない。不味い、意識が朦朧と……。

「今度こそとどめでござる」
「くっ……」

歩み寄ってくるウェブ・ドーパント。私は反動で動けず、アクセルも変身こそ解かれていないが右肩を大きく斬られたダメージで動けない。今度こそ終わりか、きりたんの制止の声を聞かなかった罰だな…。

「でやあああああー！」
「っ！」

瞬間、石段から誰かが飛び出してきて手にした刀を叩き込んだ。見ればそれは巫女服の様な物を着た恵さんで、身の丈はあろう物干し竿と呼ばれる刀を凄まじい剛力で振り回して糸刀で受け止めたウェブ・ドーパントをまるで野球ボールの様に打ち飛ばした。

「っ!？」
「兄上は、妹の私が止める！」
「恵…ッ！」

やはり恵さんは殺せないのか、受け止めるだけで反撃に出れないウェブ・ドーパント。それが分かっているが故に巧みに刀を操り斬撃を叩き込んでいく恵さん。しかしあの糸の鎧で受け止められて致命傷を与えられない。

「ゆかりさん、ついなさん！大丈夫ですか!？」
「あかり…どうしてここに?」

すると石段からあかりもやってきて、私を助け起こそうとする。恵さんはあかりが…?

「嫌な予感がして、ドーパントが手が出せないであろう恵さんを捜して連れてきたんです。とにかく今のうちに……」

「ハアアアアアッ！」

「いい加減にするでござる、恵！」

胴体を覆っていた糸の鎧を剥がされると激昂し、左手を突き出して視覚できる量の糸の束を放ち、それに弾かれた刀を手放してしまった恵さんを繭の様に閉じ込めてしまうウエブ・ドーパント。

「…恵も方相氏として生きるといふのか。ならば、死ぬがいいでござる」

「やめろ！」

《エンジン！マキシマムドライブ！》

するとついなさんがちぎれそうな右手でエンジンメモリをアクセルドライブに装填して取り外し、バイクフォームとなって炎を纏って突撃。その一撃に吹き飛ばされるウエブ・ドーパント。しかしアクセルの変身が解かれてついなさんはその場に転がり倒れ伏し、ウエブ・ドーパントも糸の装甲の一部が剥がれただけですぐ修復してしまう。

「お前は最後だと言っているでござろう、ついな」

「……今気付いた。お前、岳やないな」

「なに？」

すると何かに気付いた様子をついなさんにたじろぐウエブ・ドーパント。倒れ伏したままついなさんは続けた。

「何より大事にしていた恵に手をかけようとするのもそうやし、なにより……あいつはな、おどけて侍みたいなござる口調を普段からして

いたけど、真面目になった時はそうじゃないよ」

「なに…?」

「お前の口調が自然すぎて忘れておった、ビギンズナイトを語ったおかげか思い出したわ。…お前、誰や? その口調の岳を知ってるのは村の人間しかいない。岳の剣を真似れるのはうちら方相氏仲間しかない。妹の恵でも再現できひん剣やぞ。誰なんや…!」

「うるさい! 拙者は神威岳! 方相氏を滅する復讐鬼だ!」

「ぐうつ…!?!」

「恵イ!」

激昂のままに糸刀を繭の中の恵さんに突き立てるウェブ・ドーパント。あそこは腹部だろうか。早く手当しないと不味い。

「…決めたぞついな。お前の今の仲間も殺してやる。後悔して死んで行け」

「なにを…!?!」

「きやあ!?!」

「あかり…!」

私の手当てをしていたあかりが糸で縛られてウェブ・ドーパントの手元に引き寄せられてしまう。くそつ、体が動けば…!

「この女は預かる。拙者が神威岳じゃないと言うのであれば誰か言つて見ろ。明日の早朝まで待つ。役山えんのざんの採石場まで来い。拙者を神威岳と認めるか、名前を当てられればこの女は解放しよう。外した場合目は前で殺してやる」

「ううつ、ついなさん…!」

「楽しみにしているぞ、お前の絶望する顔をな…!」

そう言つて私達の間を歩いてあかりを担いで石段を降りて行くウェブ・ドーパントに、私とついなさんと恵さんは倒れ伏すしかなく。

鳥の鳴き声が響く。

「ゆかりさん……!」

飛んできたエクストリームメモリから放たれた光の下で構成された姿を現したのはきりたん。慌てて駆け寄るきりたんを見て私は安心して、意識を手放した。

目を覚ますと、見覚えのある天井。如月家の客間だった。横を向けば右肩に包帯を巻いてさらしを巻いた上半身を露出させているついなさんがいた。

「起きたか結月」

「ついなさん……きりたんは?」

「うちに休めと言って自分は聞き込みをしとるわ。慣れてない様子やったけど、結月が倒れた上に所長が攫われたと聞いて気が気でないらしいな」

「…面目ございません」

心配かけたことを謝ると、ついなさんはニツと笑って頭を撫でてる。空元気だろうか。

「うちのためにやったんやろ?もう無茶せんって約束するなら許したる。とりあえずわかっつとることを話すで。まず恵が重傷。今は親父が秘薬を使って寝かせとる。次に、百合子は行方不明や」

「行方不明……」

「あいつが岳やないとしたら百合子で確定やろうな。きりたんは色から声まで再現できる糸人形を作ってアリバイを作れるって言っとつたし。だけど百合子ならなんで隆斗を殺したんやって、そう思ってた。違う気がするんよ」

「…私もです。でもそうすると」

「ああ。…犯人がいないことになるな」

あかりを助けるためには嘘でも奴を神威岳だと認めるか、犯人を言い当てないといけない。で、その犯人候補は利理百合子だけ。でもその百合子が印種隆斗を殺すとは思えない。考えていると、ついなさんの手に握られた奇妙な物に気付いた。ストップウオッチの様にも見えるけど、フアングメモリの様な大型のメモリにも見える。

「それは？」

「ああ、きりたんが月読アイから預かったんやと。トライアルメモリ。アクセルの強化メモリらしい」

「月読アイってアクセルドライバーやらを貴方に渡した？きりたんとは接触したんですか!？」

「そうらしい。月読アイが留守の間水都を守る手段を用意したらしいからきりたんもこつちに来れたんやと」

「でも、それがあれば…」

「駄目や。弱くなる」

「え?」

ついなさんの話によると一度試してみたらしいがアクセルの特徴でもある重装甲がパージされ、パワーアップするどころか奴の攻撃の一つも受け止められないほどの紙装甲になってしまいうらしい。スピードこそ上がるもパワーも下がっていて、それだけだそうだ。

「なるほど…確かにアレに対抗するには装甲は必須ですものね…」

「そもそも普通のアクセルの装甲でもあの攻撃を受け切れないから

な。あの子供は何を思っけりたんに預けたんやろ…」

「…思っけたんですけど。あの攻撃全部避けるってことじゃないですか？」

「え？」

「紙装甲ってことは運用方法が異なるってことですよ。それにスピード…脚力があるなら、あるじゃないですか！」

「なにが？」

「過去を語った際にホワイトアウトに繰り出そうとしていた足技ですよ！」

「！」

そう言うくと突破口が見えたのか顔を輝かせるついなさん。あとは敵の正体、か。すると足音が聞こえてきたと思っけたら障子が開いてきりたんが顔を出す。ナイスタイミング、さすが相棒。

「ただいま戻りました」

「お帰りきりたん」

「あ、お帰りなさい」

「馬鹿ゆかりさんはあとで怒るとして、色々聞いてきましたよ。ゆかりさんはアリバイしか聞けなかつたようですが、今回聞いてきたのは神威岳との関係です」

「関係？」

「神威岳じゃないとしたらなんであそこまで固執してるんだろうと思っけまして」

さすがというか着眼点が違っけ。

「木偶蔵さんは神威岳の師匠で師弟仲は村の間でも評判でした。利理百合子は時々一緒に任務に出る程度と同僚。神威恵はそれはもう仲睦まじい兄妹で幼馴染二人と一緒に慕っけたとか」

「…まあうちにとっけても年上の先輩やっけたしな」

「次に第一の被害者、那須野与一は神威岳とは同級生で親友だったそうです。第二の被害者の印種隆斗も同級生と一緒に修行した仲良しの同僚。第三の被害者である赤井快子は妹の神威恵の幼馴染で後輩、ついなさんと肩を並べるべく本人に内緒で修行を付けてもらってた、などの情報を村で聞きました」

「快子、岳に修行付けてもらってたんか。知らなかった」

「そんなこと一度も言ってますでしたね。……………うん？」

あの時のことがフラッシュバックする。それにたしかあの時……………あ。

「あ———!?!」

「うるさっ!?!どうした結月!?!何かに気付いたんか!?!」

「ゆかりさん?」

「きりたん、ナイスです!最後のピースがそれだ!違和感はいくらでもあったんです。なのに今の今まで気付かなかった…!」

「どういうことや?」

首を傾げるついなさんときりたんに、私は其の名を告げる。

「犯人は———」

「「ええええええええええ!?!」」

翌日、役山の採石場。右肩を治したうちはきりたんを連れてここま
でやってきた。そこに約束通り、奴はいた。健啖家なためお腹を空か
して弱ってる様子の所長。今助けてやるからな…!」

「拙者のことを神威岳だと認める気になったか？それともまさか正体が分かったとでも？」

「そのまさかや。…まさか、お前だったとはな。結月に言われても信じられへんかったわ」

「……なんだと？」

訝しむウェブ・ドーパントに、きりたんが指を立てる。

「ゆかりさんが気になったのは五つ。ついなさんが村に戻ってるのにそれが当たり前だと言わんばかりにノーリアクションだったこと。ごさる口調なんてのを真似るぐらい稚拙なのに太刀筋はついなさんが誤認するほどそっくりだったこと。なんで三人目だけ首を断たれていたのか。貴方が電話で神威岳の事を呼ぶ際に言いかけた「し」という言葉。そして決め手は……悲鳴が上がったことでした」

「なに、を……!?!」

「気付きましたか？首を斬られてるのに悲鳴を上げられるわけがない！」

「行方不明の百合子をお前は利用して、自分が死んだように見せかけた。なあ、そうなんやろ？」

エンジンブレードを突きつける。信じたくなかったが間違いないらしい。

「快子…いや、赤井快子！」

「………なんだ、ばれちゃったのか」

そう言ってメモリを引き抜いて変身を解除するウェブ・ドーパント。そこに現れたのは、巫女服姿で首にトレードマークのマフラーを巻いた快子だった。…信じたく、なかったなあ。

第二十八話：Tの贖罪／過去を振り切る挑戦

ゆかりさんがついなさんとの約束を守り見つけた真犯人。それは、三つ目の殺人で首を斬られて殺されたはずの赤井快子だった。

「そうだよ、私が神威岳を名乗ったウェブ・ドーパントの正体だ」

メモリを弄びながら何でもない様にそう言つて笑う赤井快子。三人もの人間を殺害し、幼馴染二人に重傷を負わせた人間とは思えない笑みだった。

「お前、なんで…!」

「探偵さんが気になったことから答えて行こうか。なんでついながいて驚かなかったのか? ついなを巻き込むためにわざわざ捜し出して連れ戻した。太刀筋が同じ? 当たり前だよ、私は師匠の弟子だもの。なんで三人目の死体の首を断ったのか? 私と同じ背丈の百合子に私の服を着せて首から上を斬ることで私に見せかけるために決まってるじゃん。「し」って言いかけた理由? 師匠を師匠と呼びそうになったから。悲鳴を上げた理由? は…正直やらかしたね。ただ臨場感を持たせたかっただけなんだけど…素人じゃこれが限界か」

「んなこと聞いてないわ! なんてこんなことしたんや!」

「は? 決まってるでしょ。師匠が死ぬことになった原因、方相氏が憎くて憎くて憎くてしょうがないからだよ!!」

何でもない様にゆかりさんが気になったことについて答えていたと思えば死んだ目で怒鳴り散らす赤井快子。精神が不安定だ。ガイアメモリの影響もあるだろうが、これは……。

「…恋慕?」

「そうだよ! 師匠に恋していたよ! 悪い?! 生憎と、師匠の目にはついなしか映ってなかったから告白する前に失恋したけどね! 大好き

だった。私が並ぶことを諦めたついな隣の隣に立とうと努力して実際に追い付いた師匠を尊敬していた。私もついなと並びたくて、教えを乞いた。なのに、ついな！貴方がいたのに！師匠は死んだ！師匠だけが死んだ！」

激昂して捲し立てる赤井快子。今まで解き放てなかったのだろう。激情を解き放っているのだろうか。こういうのはゆかりさんが相手すべきなんだけどなあ。

「方相氏じゃなかったらあんなバケモノに挑むこともなかったんだ。方相氏じゃなかったら知らない誰かのために命を張ることも無かったんだ。天才のついなですら勝てないんだよ！凡人の師匠が勝てるわけないじゃん！逃げればよかったのに、方相氏だから逃げられなかった！方相氏が、方相氏なんて習慣が！存在しなければ師匠は死ななかった！……あの人を私から奪ったのは方相氏だ。だから私は方相氏を許さない」

「そんな、そんなの！悪いのはうちだけやんか！与一を、隆斗を、百合子を！殺す必要なんてなかったやんか!？」

「ついなが方相氏で居続けるからだよ、方相氏を名乗りながら刑事でもあろうとするからだよ。トラウマになったのなら方相氏なんてやめてしまえばよかったのに。方相氏であり続けながら復讐しようとして掻いてるのを知らされてさ。改めて見返したら師匠が死んだのにそれを当たり前だと断じて仕事を続けるみんなを見てさ。怒るなんて方が無理だよ！」

メモリを握った手をガタガタと震わせる赤井快子。明らかに正気ではないし、言っていることがおかしくなってきた。

「知らされたやと……まさか、そのメモリを渡したのは……！」

「この村で方相氏が生まれているって知ってやってきたホワイトアウトの人にもらったんだ、これを。もちろんすぐにこれを使って殺そう

としたけど返り討ちにされた。手も足も出なかった。人間は自然災害には敵わないんだ。自然災害を相手に復讐しようとしてるついなは馬鹿だよ。でもさ、だったらこの復讐の矛先をどこに向ければいいのよ。……そんなの、もう！師匠が死んでも平然としていた方相氏なんていうクズどもを殺すしかないじゃない……！」

「快子、落ち着け。お前の考えは支離滅裂や。メモリの毒素でおかしくなつとる」

「おかしくないよ！正当な復讐なんて存在しない！許せないから殺す！それだけだ！」

《ウェブ！》

糸が通った糸車でWを描いたメモリを右のつむじに突き刺して姿を変える赤井快子。目が糸の束でグルグル巻きになって現実を直視しない蚕を模した頭部、糸車の様な肩はからころと無意味に回り続けて空回りしている感情を彷彿とさせ、全身に纏った糸の……今回は白無垢を模した装甲で侍にも見えるが繭に閉じこもっているだけの様にも見え、青黒い虫の様な四肢は醜い心の中身を曝け出してるよう。ウェブ・ドーパントは糸刀を手に構えると、肩の糸車を高速回転させて大量の糸を放出する。

「なにを……!?!」

「邪魔はさせない。ついなをこの手で殺す邪魔はさせない……！」

現れたのは、全身白いが露出している目が黒く光ってるウェブ・ドーパントの分身が四体。私に向かって飛びかかってきた。振り下ろされた糸刀をどこからともなく姿を現したフランクメモリが弾いてくれて難を逃れる。

「ゆかりさん！」

《フランク！》

「ほい来た！エクストリームは無理ですが……《ジョーカー！》」

「【変身！】」

《ファング！ジョーカー！》

ファングメモリを変形させてジョーカーメモリを装填させたダブルドライバーに装填、ファングジョーカーに変身して迎え撃つ。

「快子……お前はうちの罪そのものや。うちが絶対に倒す！倒して所長を助ける！うちかて仮面ライダーの端くれやからな！」

《アクセル！》

「二回も私に敗れた癖によく言えるね！」

「三度目の正直って奴や。変……身！」

《アクセル！》

ついなさんはアクセルに変身。エンジンブレードを手にして糸刀とぶつけ合う。動きのキレがいい。吹っ切れてる。剣の勢いでウェブ・ドーパントを押している。

「ヤマタノツルギ
八俣の剣」

《エレクトリック！》

「無駄や！」

ほどけた糸剣による八つの斬撃を、電撃を纏ったエンジンブレードで斬り払うアクセル。そのまま斬撃をウェブ・ドーパントに叩き込むがやはり斬り裂いた糸の装甲は修復されてしまう。何て耐久力だ。

「ハハハハハッ！無駄よ！私の執念の糸は、決して断ち切れない！」

「むっ!？」

ほどけた糸を集束させて蛇腹剣の様にした糸剣を叩きつけられて吹き飛ばされるアクセル。さらに左手を突き出して蜘蛛の巣状に糸を展開して盾にするウェブ・ドーパント。アクセルは物ともせず斬り

裂いて突っ込もうとするが、斬った糸はアクセルの身体にまとわりついたかと思えばピンツと張って拘束する。身動きの取れないアクセルに連続で斬りつけて行くウェブ・ドーパントだったが、アクセルがスロットルを回して赤熱化し灼熱の炎を纏ったことで拘束が解かれ殴り飛ばされる。

「ぐあっ!?!」

「快子、お前はうちに勝てへん。ガイアメモリなんぞに手を出したお前は、うちにも、岳にも、絶対に敵わへん!」

「私の防御を崩してから言いなさいよ!」

両肩の糸車が高速回転し、次々と糸玉を射出してミサイルポッドの如く攻撃するウェブ・ドーパント。アクセルはエンジンブレードを横に構えてその場で高速回転し次々と糸玉を弾いて撃墜していくが防ぎきれず炸裂。弾けて糸の斬撃が連続して炸裂してアクセルの装甲を罅割らせて吹き飛ばした。駄目だ、アクセルの装甲でももう耐えきれない……!

「がはっ……」

「もう私はついなを越えた! 師匠の剣で、ついなを……ついなを、越えれたよ、師匠……!」

「じゃあかしいわ! なにが岳の剣や! 確かに岳の剣を再現はできつつだが、メモリの力に頼って与一や隆斗や百合子を殺し、恵に勝つといて! なにが岳の剣や! 恥を知れ!」

「う……うるさい、うるさい! 私の剣は師匠の剣だ……! 手も足も出ないお前が、好き勝手言うなあ!」

激昂して突進してきたウェブ・ドーパントにアクセルはエンジンブレードを投擲して吹き飛ばし牽制、トリアルメモリを取り出した。

「それは……!?!」

「うちの仲間が持つて来てくれた新しい力や。お前の剣が怖くて使うのを躊躇してたが…覚悟は決めた！」

《トライアル！》

「これは贖罪や。奴へ復讐するよりも大事なことがある、それは今、お前を止める事や！」

《トライアル！》

アクセルメモリを引き抜き、ボタンを押したトライアルメモリを信号機のような形状に変形、ドライバーに装填。オフロードバイクのタイヤとスポークで描かれたTの文字が浮かび上がり、トライアルメモリの信号の色が赤から黄色に、同時に通常の赤いアクセルから黄色い姿…イエローシグナルに変化し、信号が青になると同時に全身の装甲が弾け飛んでその姿を変えた。

「今こそ呪われた過去を…全て、振り切るで！」

全身蒼く、軽量化されていて印象が変わる。バイクフォームにならないからか全身から変形用パーツが取り除かれているが、残されている背部と脚部のタイヤはディスクタイプからスポークつきのオフロードタイプに変更。オフロードバイク用ヘルメットを模した形状の頭部のオレンジ色の複眼が輝く。仮面ライダーアクセルトライアル。

「呪われた、過去だと…？お前は一生師匠の事を引きずれ！その責任があるでしょう！」

「そんなこと、岳が望むわけがあらへん！あいつのガワしか見てないお前が岳を語るな！」

「そんな紙装甲で受けれるか！八俣の剣！」
ヤマタノツルギ

糸剣がほどかれ、八つの斬撃が同時に複雑な軌道を描いて襲いかかる。それをアクセルトライアルは高速で動くことで当たることなく

駆け抜けてパンチ。怯んだウェブ・ドーパントは糸剣を元に戻して乱舞を繰り出す、そのすべてをアクセルトリアルは高速で体を逸らすことで避けていく。

「糸格子いとこうしの構え！」

糸刀を円形に振るい、格子状に展開された糸が煌めきアクセルトリアルを拘束せんとするがアクセルトリアルは高速のバックステップで回避。落ちていたエンジンブレードを拾うと高速の乱舞で斬り裂いて糸の檻を破壊する。

「やりますね！」

『「こちらこそそろそろ決めましょう」』

四体の分身と戦っていたこちらだったが、既に二体は撃破した糸の残骸がその場に転がっている。本物ほどの技量はなくただ単に襲いかかってくるだけだから怖くはない。タクティカルホーンを三回叩く。

《ファング！マキシマムドライブ！》

『『ファングストライザー！』』

そのまま回し蹴りで二体同時に破壊。アクセルトリアルにウェブ・ドーパントが気を取られている間に人質のあかりさんを助けに行く。

「だ、だけどー！私の装甲を突破することはできない！そうでしょ!?!」
「どうやらな?…あえて言わせてもらおうわ。さあ、お前の罪を数えろ」

エンジンブレードをその場に突き刺してトリアルメモリを引き抜き、抜きストッパウオツチ型に戻すアクセルトリアル。

「力を貸さんかい、トライアル!」

そして即面のボタンを押すとタイマーが作動し、放り投げると同時に最高速度だろう速さでウェブ・ドーパントに接近。咄嗟にウェブ・ドーパントは糸刀ではなく糸玉を射出して迎撃せんとするが、それを全てアクセルトライアルは回避して目前まで迫る。

「はああ!」

「がつ!?!ぐつ!?!」

速すぎて気付いていないウェブ・ドーパントに拳を繰り出し怯ませるとそのまま連続蹴りに移行。T字を描く様に連続蹴りを叩き込み、全ての糸の装甲に何度も何度も蹴りを浴びせて破壊していく。修復が間に合っていない。そのまま本体にも何度も蹴りを叩き込み、落ちてきたトライアルメモリをキャッチしタイマーを止めるアクセルトライアル。それは10秒にも満たない攻防だった。

《トライアル!マキシマムドライブ!》

「9・8秒、それがお前の絶望までのタイムや!」

「そんな、そんなあああああああつ!?!」

そしてウェブ・ドーパントは爆散。ついなさんが復讐の闇を振り切って手に入れたのは、大切な者を救うための10秒間だった。

「があ!?!」

ウェブメモリが排出されて砕け散り、倒れる赤井快子。だがその様子がおかしい。胸を押さええて掻き巻く。慌てて駆け寄るアクセルトライアルと、あかりさんを救出して駆け寄る私達。

「あつ、がつ…」

「なんや!?何が起きてる!?!」

「これはメモリの中毒症状…!?まさか」

『まさかつてなんですさきりたん!?!』

「…ホワイトアウトに渡されたメモリと言ってますでしたが、奴がただのメモリを渡すとは思いません。この症状からして五倍の毒素が実験として使われていたのだと思われまます…正気を失ったのも無理もない。そんなもの、人間には耐えられない…方相氏でなかったら即死してもおかしくない代物です。」

「そんな、そんな馬鹿なことがあるか!」

変身を解き、拳を地面に叩きつけるついなさん。するとそれを見た赤井快子が手を伸ばした。

「ごめんね、ついな…私、どうかしてた。自業自得だから、気にすること、ないよ…」

「気にしないわけないやろ!?!せつかく正気に戻ったのに…」

「……………ああ、でも……………これで、師匠の、みんなのところに……………謝らな
いとなあ…」

そう涙を流しながら言い残して、赤井快子は消滅した。残ったのは倒された時に衝撃で落ちたマフラーだけで。ついなさんはマフラーを握りしめながら涙する。

「こんな、こんなことって…」

一部始終を見ていたあかりが涙を流して怒りに震える。気持ちはみんな同じだ。

「…うちはあいつを許さへん。岳を殺したばかりか快子を狂気に落として仲間を殺させて……………絶対に許さへん」

『ホワイトアウト…私達も許すわけにはいきません』
「絶対に止めましょう…!」

そう改めて決意する私達だった。

こうして役村^{えんのむら}での事件は終わった。そうそう、きりたんが昔の文献などを調査してある事に気付いたらしい。それは、方相氏や「鬼」が生まれる秘密。地球の記憶が溢れだす穴が各地の奥地に存在しているらしい。その中で一番大きいのが水都。そして役村の各地から垂れ流される地球の記憶の影響を受けた人間が「方相氏」という特殊な人間となり、さらに影響を受け過ぎてメモリを介さずドーパントの様な異形になったのが「鬼」とのことだった。

「鬼も元は人間だったんか…」

「メモリを介さず地球の記憶の影響を受けているので自我は失っているものと思われまます。方相氏は簡単に言うどドーパントにならずにその力を引き出せる人間の姿をしたドーパントみたいなものですね」

後部座席に座っているきりたんの声を聞きながら、快子さんのマフラーを巻き後部座席にあかりを乗せたついなさんと共に水都への帰路を走る。色々納得しました。

「そういえばついなさんは村に残らなくても…?」

「たまに帰郷はするがな。今のうちが守るべき場所は水都や。これからもよろしくな、所長。きりたん。…ゆかり!」

「…っ!はい、よろしくお願ひしますついなさん!」

このメンバーでこれからもやっていく。そう信じていたのが覆されるのは水都に帰ってすぐだった。

《ゴールドラッシュユ！》

「オラオラオラオラ、オラア！」

水都に帰ってすぐ、出くわしたドーパントに変身しようとした矢先。ガスタンクのような丸みを帯びた姿の…恐らくタンク・ドーパントに次々と攻撃を叩き込むのは見知らぬ仮面ライダーだった。全身金色のダブルに赤い海賊を思わせる装甲が上着の様に身に付けられてる、腰に蒼いダブルドライバーを巻いた姿の仮面ライダーは黄金の光を纏って次々と拳を叩き込んでいた。

「い、いいのか!?俺を倒せば街一つ消し飛ぶぞ！」

「…なっ!?」

追い詰められたドーパントの言い放った言葉に驚く私たち。そんなの、事実ならどうすれば…

「汚い花火するなら一人でやれよ、派手にな！」

《ゴールド・マキシマムドライブ！》

謎のライダーはドライバー左側のメモリを引き抜いて腰のマキシマムスロットに装填。両手を地面に触れると黄金化して津波が発生しドーパントを取り囲み上空にタワーの様に變形させて打ち上げると、その手に海賊のカットラスの様な武器を取り出すと鏢のスロットにドライバー右側の赤いPと描かれたメモリを装填。グルングルン振り回す謎のライダー。その光景にデジャヴを感じた。

「オレの名前を覚えて逝きな！仮面ライダーエルドラゴ、つてなあ！」
《パイレーツ！マキシナムドライブ！》
「アリーヴェデルチ！」

そして両手で構えて振り上げると黄金の斬撃をタワーに放たれ、タワーを伝って斬撃が遙か上空のドーパントに炸裂し爆散。街一つは言いすぎだったが一角は吹き飛ばすほどの大爆発が発生した。黄金のタワーをアスファルトに戻し、乗っていたドーパントだったであろう太めの男にどうしたものと悩んでいた謎のライダー…エルドラゴはこちらに気付くと、周りに他の人間の目がないことを確認してからドライバを閉じて変身を解除する。現れたのは、脳裏に浮かんでいた知っている人物だった。

「リリイ金堂…!?!」

「よっ、久しぶりだな仮面ライダー」

リリイ金堂。エルドラド・ドーパントにしてガイアメモリマフィア、エル・ドラードの首魁だった女がそこにいた。

ボイロ探偵W設定（第二十二話〜二十八話まで）

・結月紫／仮面ライダーダブル

元探偵見習い。イフを死なせたことに負い目を感じていたが、ビギンズナイトをあかりとついなに話して、肩の荷が下りた。Tの贖罪では、ついなとのピンチにツインマキシマムを発動、めでたく倒れた。探偵は足で稼ぐ者と思っっているが、実は安楽椅子探偵の方が向いてたりする。

・きりたん／仮面ライダーダブル

運命の子と呼ばれた、ミュージアムの重要人物。「狐」の言いなり人形だったが、イフに名前を呼ばれたことで人間になれた。鳴花ヒメ・ミコト、月読アイ、リリイ金堂の一派と連続でイベントが発生した挙句、ゆかりがツインマキシマムで倒れた事で、大混乱しながら救援に向かった。安楽椅子探偵ではあるが、実は外に出て自分で調べる方が得意だったりする。

・虚音威風／仮面ライダースカル

帽子と着流しの似合う、飄々とした老獪にしてペストマスクを被った姿が、水都に「バケモノ」として名を轟かす名探偵。特徴的なのは、その古風な口調。アイ・ヒメ・ミコトとは知り合い。相棒を救えなかつた事で、一時期スカルであることを止めていたが、ゆかりとの出会いで復活したという、隠された話がある。リリイ金堂とも戦い、一方的に叩きのめした実力者だったが、ゆかりときりたんを守る為に凶弾に倒れ、ゆかりにロストドライバー・帽子と共に、きりたんを託して死亡した。ゆかりの憧れの人で、きりたんの恩人。

・継星燈

イフの死を知らされて尚、ゆかりときりたんを責めなかつた聖人。ついなのお大事な仲間と見なされ、誘拐されたりヒロインやつてる。

・如月追儼／仮面ライダーアクセル

役村出身の方相氏で、神威恵と赤井快子の二人とは幼馴染であり、神威岳とは相棒だった。方相氏の闇が生んだ事件に翻弄される。過去を振り切り、トライアルの力を得たものの、結局ホワイトアウトの

掌の上で何も救えず、改めて岳との約束を守り、ホワイトアウトを止めることを誓う。

・月読哀つくよみ アイ

ゆかりときりたんが、エクストリームに至った為、プラン変更。アケセルの強化を進めつつ、ミュージアムに対抗できる新たなライダーとして、リレイ金堂に接触。ドライバーとメモリを与えた。鳴花ーズに匿われ、居候している。

・鳴花緋女めいか ヒメ

歩色町にある梅酒BAR「鳴花ーズ」のバーテンダー。イフの知り合い。梅の精を自称し、ミコトとは同一人物らしい。アイ曰く「きりたんの仲間」とのことだが……？

・鳴花三言めいか ミコト

歩色町にある梅酒BAR「鳴花ーズ」のマスター。イフの知り合い。梅の精を自称し、同一人物だと言うヒメの言葉を否定しなかった。アイ曰く「きりたんの仲間」とのことだが……？

・東北至子

Eに至る霸道にて、CAカルネを通して財団Xと商談していた。人間の姿でも、強烈なプレッシャーを放っている。きりたんに命令していた「狐」その人。

・東北純子／アルテミス・ドーパント

一年前まで「運命の子」の警護をしていた。咄嗟に「きりたん」と呼んでしまうなど、事情を知らながら情を捨てきれない人間。スカルが死んだ事で、何かが切れた。

・東北星香／シャーク・ドーパント

リレイに、マネーメモリやエルドラドメモリを購入させた、張本人。水都を愛するが故に財団Xを疎ましく思っており、排除と同時にリレイも自滅することを予測して、至子の命令通りにエルドラドメモリを与えた。数々の事件の元凶とも言える人物。

・東北奏楽／ホワイトアウト・ドーパントとうほく ぞら

Tの贖罪の黒幕で、神威岳を街ごと凍らせて殺した張本人。Fの嫁入りにて、すっかり忘れていたついなと再会した事により、方相氏に

興味が湧いて役村を訪れ、赤井快子と接触。毒素を五倍にしたウェブメモリを渡して凶行に至らせ、それを観察していた。その結末にも満足している、外道の中の外道。

・リリイ金堂／マネー／トレジャー／エルドラド・ドーパント／仮面ライダーエルドラゴ

本名、金堂百合。一人称は「オレ」。金堂コンツェルンの社長令嬢↓【黄金郷】のオーナー↓ガイアメモリマフィア【エル・ドラード】首領で、ミュージアム最大のスポンサーといった肩書を持つ。「マネー」「エルドラド」のメモリに適合しており、ゴールドメモリの毒素すら克服した、ハイドロープもどき。

エルドラド・ドーパントになってからは、気に入った美しい人間を片っ端から部下を使って誘拐、金に糸目をつけずオーダーメイドした衣装で着飾り、最高の構図で黄金像にする事を趣味としている。美しい物にしか興奮できず、美しい物を病的に愛しており、その殆どが女性の為、女性しか愛せないレズな部分がある。愛し過ぎると、その相手を黄金像にしてしまう悪癖持ち。その為、実は心から愛している水都すらも、黄金に変えたいと言う野望を抱いていた。

一番の部下であり相棒の呪怨キクは容姿と「私が私であること」という信念を抱いた目を入れており、従順なので黄金化はせずつと手元に置いていた。七年の付き合いであるのもあって例え裏切られてもその時は「アイツを自分を好きにならせることができなかつたオレの責任」として特に気にしないが、本編では絶望したキクの表情を見て「イイ」と感じて黄金像にしてしまうぐらい歪んだ愛を抱いている。例え自分から離れようとしても逃がす気はないとして黄金化して手元に置いて行くヤンデレみたくなるほど。

ダブルに敗れて投獄されていたが同じ場所に収監されていた女性囚人全てをカリスマだけで従えたばかりか一週間も経たずに保釈金を払いキクと西友と共に出所。キクと西友に働かせて生活費を稼ぎつつ自身は再びメモリを手にして再起すべく奔走していたがエルドラドメモリを失ったりリイにミュージアムは利用価値を見出さず切り捨てられている事実を知る。自身を切り捨てたばかりか愛する水

都に何かしようと企んでいるミュージアムを潰そうと決意したところ、月読アイに接触されミュージアムを潰すことを条件に仮面ライダーとなる。

・仮面ライダーエルドラゴ

リリイ金堂が青いダブルドライバー「ダブルドライバーNEO」と「ゴールド(黄金)」と「パイレーツ(海賊)」のメモリで変身したダブルに酷似した仮面ライダー。黄金一色のダブルにもう一本のメモリに該当する装甲を纏うことで変身する仮面ライダー。意味は「悪魔」ゴールドメモリのマキシマムドライブで触れた物を黄金化できる。ドライバーを一度開閉することで「ゴールドラッシュ」を発動可能。10秒間だけ金色に煌めく無敵状態となってパワーとスピードを増した怒涛の攻撃を繰り出すことができる。

———ここからネタバレ注意

●第七章「Sの終演」の登場人物（Sはスカルの他に師匠など）

・海音かいと一はじめ／スコープピオン・ドーパント

10年程前。かつて、虚音探偵事務所に所属していた、イフの相棒。常に青いマフラーと眼鏡を身に付けている。イフに嫉妬、メーコには恋心を抱き、水都最初のドーパントとして暗躍していた。しかし、初期型メモリを使っていた事で、スカルに倒された後そのまま死亡。その死は、イフの心に大きな傷跡を残した。元キャラはK A I T O。

・メーコ

10年程前。当時の歌姫。イフ・一とは顔なじみ。スコープピオン・ドーパントに「俺のために歌い続けてくれ」と脅迫されるが、イフに救われる。しかしイフがスカルに変身した事、一を殺してしまった所を見た際、悲しみのままイフを拒絶してしまい、イフの心に更なる大きな傷を残した。元キャラはM E I K O。

・運命の子

後のきりたん。「狐」に命令されて、ガイアメモリを制作していた張本人。名前を呼ばれたことで「きりたん」となり、イフの死で罪を自覚。ミュージアムへの反逆に挑む。

・スコープオン・ドーパント

原作で言うスパイダー・ドーパントに当たるドーパント。普段はマフラーにしている、後頭部から生えた尻尾が武器。小蠍を植え付け、植え付けられた相手が、愛する人間に触れると、その愛する人間に熱暴走を起こさせる毒を打ち込む能力など、かなり凶悪な能力を持つ。

●番外編「Eに至る覇道」の登場人物（Eはエルドラドの他、栄光など）

・キク／ギロチン・ドーパント

後の呪怨キク。七年前に、歩歌路町の路地裏で強姦されそうになっていた所を百合に救われ、そのまま拾われて相棒となる。ドーパントになった後は、マネー・ドーパントがライフコインで命を頂いた人間の、後始末をしていた。百合の心と輝きに入れ込んでおり、西友とは凄まじい犬猿の仲。後に、その輝きに魅入られて、百合を裏切る事になるが……

・西友／アイスエイジ・ドーパント

本名、西友蒼司にしとも そうじ。百合を「リリイ様」と呼び、常にリリイを最優先に考えて忠誠を誓っている、実質ナンバー3の男。リリイを疑い、敵対する者がいれば絶対に許さず、容赦はしない忠犬。自分程忠誠心がある訳でも無く、一度は彼女を裏切っておきながら、未だにリリイの右腕に収まっているキクを怒りと憎しみも込めて敵視している。勿論、超絶的な犬猿の仲。

・CAカルネ／エルドラド・ドーパント／スコープオン・ゾディアーツ

機能的な蟲が大好きな、財団Xの幹部。妙齡な男らしい口調で長身、拘束具の様なマスクで口元を隠し、赤と黄色のオッドアイで黒髪を虫の触角の様なツインテールにした女性。リリイからは、デカブツ

蟲女と呼ばれる。リリイに敗北するも、気に入られて黄金像にされるが……

・マナー・ドーパント（百合ver）

適合したことで、スリムな女性的なフォルムとなったマナー・ドーパント。ライフコインを胸部に溜め込む他、左腕に移して金貨大砲に変形させる事が出来る。しかし、戦闘力はあまり無い上に、命を奪った人間をギロチン・ドーパントに始末させていた為、原作みたいに人質を取る作戦も出来ないが、ライフコインを盾にして致命傷を避ける事は可能。

・トレジャー・ドーパント

マナーメモリを、試作版強化アダプタでアップグレードして、一回限りの変身を果たした姿。能力は財宝召喚。体を構成している物が財宝の為、全て一級品。

・エルドラド・ドーパント（CAカルネver）

リリイと比べると、豪華な装甲が無く大分みすぼらしい。有機物を黄金化する事が出来ず、基本的に無機物を黄金化して武装、蟲の形状にする事で戦う。

・スコープオン・ゾディアーツ

フォーゼの幹部怪人。ゾディアーツスイッチの複製品を持っているが、エルドラドの敵ではなかった。

●第八章「Tの贖罪」の登場人物（Tはトライアルの他、ついななど）

・神威岳かむいがく

ホワイトアウトに殺された、ついな仲間。刀を手に、数多の鬼を屠った方相氏。ホワイトアウトに殺された時、ついなへ後を託した。生き返り、蚕のドーパントとして糸の刀を手に、村の者に復讐しているとされていたが、弟子である快子が偽っていた。一人称は拙者で、ごぎると語尾に付けるが、それはおどけているだけであり、真面目な時にごぎるは付けない。元キャラはVOCALOID2のがくつぽ

いどこと神威がくぼ。

・神威恵かむい めぐみ

岳の妹で、ついななの幼馴染。兄の事は恨んでおらず、ついなを心配している。物干し竿と呼ばれる長刀を武器に、戦う事も。ウェブ・ドーパントに挑んで重傷を負うが、生き残った。元キャラはVOCALOID2のメグツポイドことGUMI。

・赤井快子／ウェブ・ドーパントあかい かいこ

今回の依頼人。ついなと恵の幼馴染。第三の被害者。首なし死体で発見される。実は、百合子の死体を使ったフェイクであり、今回の犯人。師匠だった岳への恋慕と、方相氏への絶望がメモリの毒素で膨れ上がり、凶行に至らせた。最終的に、メモリの毒素も相まってマキシマムドライブに耐え切れず、消滅した。元キャラはKAITOの性転換キャラであるKAIKOと、亜種であるアカイト。

・那須野与一なすの よいち

岳の相棒だった。最初に殺害された。糸で雁字搦めにされ、袈裟切りを受けて殺される。元キャラはがくつぽいどの愛馬(?)ナスノヨイチ。

・如月木偶蔵きげつき ぼくざう

ついななの父親で、役村の村長。引退しているが、元方相氏。今回、唯一無事で済んだ人。元キャラは、ついななの相棒でお面ダイクソン。

・利理百合子りりり ゆりこ

方相氏の一人。恋人の隆斗が死んだ事に悲しんでいたが、翌日から行方不明に。実は殺害され、首を斬られて快子の服を着せられ、快子の死体に偽装されていた。元キャラはリリイと同じVOCALOID2のlily。

・印種隆斗いんたね りゆうと

方相氏の一人。第二の被害者。ゆかり達の目の前で、ドーパントに惨殺される。元キャラはガチャツポイドことリュウト。

・ウェブ・ドーパント

「糸」の記憶を宿した、蚕と糸車を合わせた様な姿のドーパント。常に、己の糸で作った着物型の装甲を身に纏っており、破壊されても即

修復する事で、とんでもない耐久力を誇る。糸の硬度や種類、色まで変える事が可能。糸を束ねて剣や薙刀にしたり、蜘蛛の巣状にして捕らえたり、偽物人形を作ったりと、万能に立ち回れる。変身者は赤井快子^{あかい かいこ}。モチーフはモンハンライズのヤツカダキと蚕、手足はFGOの第三再臨オベロン。

・タンク・ドーパント

「貯蔵庫」の記憶を宿したドーパント。ガスタンクのような丸みを帯びた姿で機動力は非常に低い、エネルギーを無尽蔵に貯め込む能力を持ち、下手に攻撃すれば町一つ消し飛ばすほどの危険なドーパント。リアクター・ドーパントの下位互換的存在。

● 役村^{えんのむら}

水都の外の山奥に存在する、方相氏の村。ついななの故郷。採石場や役神社があるなど、結構大きな村。村中に緑の結晶が飛び出ており、これは地球の記憶が結晶化した物。役神社に、地球の記憶が漏れ出している場所が存在する。

三人目E

第二十九話：R集結／我ら恐竜強盗団

「どういうことですか？」

私、きりたん、あかり、ついなさんが揃ってる事務所の客用ソファーに座る二人の美女と傍に控える男一人。

踏ん反り返っているアロハシャツを肩がけにして金色のTシャツと黒のハーフパンツとサンダル、金色のサングラスを身に付けているスレンダーな長い金髪碧眼の美女。

おずおずと座っている相変わらず深紅のロングヘアーのカツラと般若の面を斜めに被っているが白い男物のスーツだった以前と異なりラフな「麺」と大きく描かれたTシャツとダメージジーンズを履いたスレンダーな女性。

ダークブルーのスーツに金色のネクタイ、青いサングラスをかけて帽子は被らず飛び跳ねた様な髪に一本だけ入ってる金メツシユが特徴の、大きな青い宝石付きな黄金の指輪を左手の人差し指に付けている年若い男。

「改めて、金堂百合だ。リリイと呼んでくれ」

「呪怨キクです。…ただのキクです」

「西友蒼司……だ」

「いや名前を聞いてるんじゃないやなくてですね!?なんで貴方が仮面ライダーになってるんですか!？」

「ガイアメモリファイア「エル・ドラード」の中心人物三人が何で自由に出歩いてるんですか!？」

「その男は水都に来たばかりのうちのうちにやられた悪党やる覚えとるぞ。なんで刑務所じゃなくてここにおんねん」

私とあかりとついなさんのツツコミに顔を見合わせる三人。する

と冷や汗だらだらなきりたんに金堂百合が視線を向ける。

「その餓鬼から聞いてないのか？」

「え？きりたん？」

「えっと、あのですね…彼女たちが私が水都を離れることができた理由なんです…」

そう言っつきりたんが語るのは、鳴花ーズに晩飯を食べに行つた時のこと。鳴花ヒメとミコトの二人がきりたんの同類らしい謎の二人だったということ。月読アイと接触したこと。トリアルメモリを渡されたほか、金堂百合たちを紹介されたこと。金堂百合たちは保釈金を払って法律に則り刑務所から出たこと。エル・ドワードが壊滅していた上に接触したミュージアムの協力も受け付けられず途方に暮れていたところ、月読アイが接触。ミュージアムを潰すために力を貸してくれと言われて承諾、仮面ライダーの力を得たこと。今は金粉入りラーメン屋台「金堂」を経営している、などなど色んな情報がきりたんと金堂百合の口から語られた。

「…つまり？」

「罪は償うからミュージアムを潰させろってことだ」

あかりの問いかけにそう答える金堂百合に、私ときりたん、ついなさんは顔を見合わせ頷く。

「私達が留守の間水都を守っていたことには感謝しています。ですが」

「誘拐だけならまだしも過去に殺人を犯している相手を信用しろとでも？」

「保釈金払ったからって犯罪者じゃなくなることないんやぞ？ああん？」

「あ、金粉入りラーメンは気になるので教えてください！いたい！」

能天気なあかりに一発ゲンコツして黙らせておく。全くこの食い意地張ってる娘は……いやまあ、赤井快子に誘拐されてろくに食べれてないからしょうがないのか……ううーん。

「……まあ金粉入りラーメンとやらは気になるので後でもらいにいくとして」

「やったー！ゆかりさん大好き！」

「貴方を仮面ライダーとは認めません」

「ほう？」

宣言すると頷くきりたんといなさ。仮面ライダーを名乗らせるのだけは許さない。

「仮面ライダーとは水都の人々が我々を見て名付けてくれた、街とそこに住む人間を守るヒーローの名前です。悪党が名乗っている名前じゃない」

「貴様……リリイ様の何が分か……！」

「……そうかよ。邪魔したな」

「り、リリイ様……」

西友が何か反論しようとしたがそれを金堂百合が諫めて事務所を立ち去ろうとする。

「安心しろ、もう悪事はしないさ。エルドラドメモリが破壊された時点でオレの野望は潰えている。だがな。美しいと思っただお前たちが守ろうとしたこの街は黄金にしなくても守る価値がある、そう思ったのも事実なんだ。勝手に暴れるさ、仮面ライダーは名乗らねえ。おら、仕事に戻るぞキク、西友」

「あ、待ってください」

「……了解」

そう言い残して金堂百合はキクと西友を連れて去って行った。すると見送っていたあかりがおずおずと尋ねてくる。

「…本当ですかね？ゆかりさん」

「本当だとしても、信用できないのはどうしようもありません」

「躊躇なく殺人に手を出していたのは間違いありませんからね」

「なんか悪事してたら容赦なく捕まえるから安心せい。うちも仕事に戻るわ」

「あ、月読アイから新しいガジェット的设计図もらったので私はガレージに籠りますね」

ついなさんも出て行き、きりたんもガレージに降りて行き私とあかりだけが残る。少し寂しく感じたのは気のせいだろうか。

「なら私も喫茶「弦巻」で昼飯を…」

「ゆかりさん、せっかくだから「金堂」のラーメン食べにいきませんか！」

「え。…そうですね、見張りも兼ねて行きますか」

お腹を空かしてるあかりのリクエストだ。ついでに見張れる。それ以上でもそれ以下でもない。

ハードボイルダーに乗った私とあかりがやってきたのは水都タワー前公園。ここで屋台を開いていると言っていた。「ラーメン金堂」と達筆で書かれた金色の暖簾がかかった屋台の前で客引きをやっている金堂百合がいて。ちよっと拍子抜けしながら歩み寄る。

「らっしやい！その別嬪さん、ラーメン食べて行かないか…って結月ゆかりと継星あかり。どうした？悪いことは何もしてないぞ」

「いや、上に立っていた貴方がこんなことしてるのが信じられなくて…」

「それでも昔はバイトをやっていたから慣れている。労働をするオレは美しい。そうだろう？ところで何の用だ？うちのラーメン食べに来たのか？」

「あかりが食べたいって言うので来たんです。ついでに見張り」

「おう、どんどん見張ってくれ。こつちだつて心改めてるんだ。うちのキクのラーメンは美味いぞ」

自慢げな笑みを浮かべる金堂百合。一度は自分を殺そうとした相手なのに寛容ですね。

「あなたが大将じゃないんですね」

「オレは料理が下手だからな！料理はキクに、資金調達は西友に任せられている。美しい見た目しか能がない物でな！」

「資金調達ってまさか犯罪…」

「失礼な。ただの株だ。あとオレのプロマイドを高値で売ってるのか言ってたな。とりあえず食っていけ、値引きはしないがな？」

そう言つて案内された暖簾をくぐると三人席で先客がいて。よく見れば昭胤流子…ネルさんだった。

「おや、ゆかりさん。貴方も来たんですか、さすが水都を自分の庭だと豪語する人だ。ここのラーメンは美味しいですよ、イチオシです」

「ゆかりさん！ゆかりさん！早く食べましょうよ！」

「ネルさんがそこまで言うなんて相当ですね。わかりました。ラーメン二つお願いします」

「かしこまり」

無口なキクに注文すると、手際よくラーメンを用意してくれた。金粉がかかっているチャーシューとメンマが眩しい。

「金粉ラーメン二丁上がり」

「眩しいですね…」

「いただきますーすーおいしー!」

もぐもぐもぐもぐと躊躇なく食べ始めるあかりに溜め息を吐きつつ私も「いただきます」と両手を合わせてからいただく。――あまりに美味すぎて理性が飛んだ。え、うまつ。なにこれ。

「美味いだろ?」

声が聞こえて横を向くとにまにま笑う金堂百合がいて。ちよつと言いつ返せないのが悔しい。

「…貴方が作ったわけじゃないのに誇らしいんです?」

「ああ、オレの部下はダブルに認められるほど料理が上手いってことだ。嬉しいじゃないか」

「戦った時から思っていましたが大変な奴ですね…」

金堂百合に見られながらも睨り続けて完食。多分水都の料理でも一、二を争う美味だった。また来よう。

「少し付き合ってくれないか。さもないと、その情報屋にばらすことも辞さん」

「その力ずくなどころ変えた方がいいですよ」

「生憎と性分だ」

金堂百合に連れられて、私はハードボイルダーを、金堂百合はミダスホイラーというらしい金と赤で骨格を模した装飾のハードボイ

ルダールの様なバイクを駆って走り出す。どこに連れて行く気だろう、と思つていたら公園を抜けて水都タワー近くの建物までやってきた。ゲーム会社がある三階を見上げて金堂百合は感慨深げに笑つた。

「ここはな、八年前まで金堂コンツェルンつて会社があつた場所だ」

「それはたしか…」

「うちのクソ親父が経営してた会社なんだがな。つまらないミスから倒産させた挙句に首吊り自殺という醜い最期を迎えた場所だ。あんなところを使つてるなんて物好きな会社だ」

「……」

「まあわかる気もするが。ここはいい場所でな？あの三階の窓からは水都タワーが一望できるんだ。そんなところに毎日通つてたもんだから……いやでもその光景が好きになつてな」

「それは…わかる気がします」

水都の美しさに魅入られたのは私も同じだ。案外、同類なのかもしれない。

「黄金にして自分の物にしようとは思いませんがね」

「それは悪かつた。オレは美しい物に目がないんだ。命を懸けていいとも思つてる。美しい物はオレの手の中で永遠に美しさを保てばいい…そう思っていたが、水都はその必要がないらしい。お前たち仮面ライダーがいる限り、な？」

お前たち、という言い方から本当に仮面ライダーを名乗るつもりはないのだと気付いて。居た堪れなくなつた。

「…金堂百合。わかつてください。仮面ライダーという名は軽々しく名乗れるものじゃないんです。街の人々の希望となりえる、そんなヒーローの名前なんですよ…」

「ならオレが仮面ライダーの名にふさわしくなればいい話だな！」

「…すごいですね貴方は。なんで犯罪者なんかになったんですか」
「オレがオレであるために、だったはずだったんだがな。メモリの魔力に魅入られたのもまた事実だ」

頭を掻きながら語る金堂百合。バイトをしていたと言っていた。メモリを手に入れなければ…と思わざるを得ない。

「オレは美しい物を黄金にしたらそれだけで満足して、飽きてしまっていた。お前らに負けて分かったんだ。美しい物は手に入れたら味気ない。自由に紡がれる美しさにこそ価値があるんだってな。だからオレは勝手に守る。美しいこの水都を、水都を色づく人々を」
「…そう、ですか」

彼女の決意に何も言えなくなった、その時だった。ジリリリリ！と甲高い音が鳴り響く。これは、銀行？そう、近くの銀行の方を向いた瞬間。

「イヤッハー！金はもらっていくよ！」

何故か閉まっていたシャツターを蹴破り、それは現れた。全身瑠璃色の小型肉食恐竜を人型にした様な姿の怪人が一体。長い尻尾を揺らして鋭い爪をカシャカシャと擦らせ牙を剥き周りに威嚇すると手にしていた大きな袋を担ぐと、骨格が変形し小型肉食恐竜そのものの形態をとると凄まじい速度で道路を走り出した。私はヘルメットを被りながらハードボイルダーに跨りエンジン全開、追跡を開始する。後ろを見れば金堂百合もミダスホイーラーに跨りヘルメットを被って追いかけてきていた。

「まさか白昼堂々犯罪を起こす奴がいるとはな！やるなら夜だろ、夜！」

「犯罪者目線での感想ありますがとうございます！力を貸していただい

も?!」

「もちろんだ!」

こちらのマシンはただのマシンではない。すぐに追いつき、金堂百合がミダスホイラーで後ろから轢き飛ばした。ゴロゴロと転がる小型恐竜ドーパント。転がりながら人型に戻ると飛び跳ねて立ち上がり、こちらを睨みつけてくる。

「なにをしゃがるんですかね!人を轢くなって学校で習わなかったのか!」

「メモリに手を出した貴方はもう人でなしなので大丈夫です」

「そういうこつた」

周りの目があるのでヘルメットを被って顔を隠したままダブルドライバーを腹部に装着。金堂百合もヘルメットを被ったまま蒼いダブルドライバー…ダブルドライバーNEOを装着。ジョーカーメモリを取り出した私と異なり、金堂百合は金の延べ棒でGと描かれた金色のメモリとカットラスでPと描かれた紅色のメモリの二本を取り出し同時に鳴らした。

《ジョーカー!》

《ゴールド!》《パイレーツ!》

「…二本?」

「オレのドライバーはお前らのと違って一人で二本を使うベルトだ。片方しか換装できないがな」

【なるほど興味深い】

「まあいいです…行きますよ!」

「おうよ!」

私は転送されてきたサイクロンメモリを装填してからジョーカーメモリを装填、対して金堂百合は同時に二本を装填。まるでジョーリ

ロジャーを思い出させる両腕を胸の前で交差するポーズを取った。

「〔変身！〕」

《サイクロン！ジョーカー！》

《ゴールデンパイレーツ！》

そして私はサイクロンジョーカーに。金堂百合は蒼い複眼以外黄金色のダブルに、海賊を思わせる紅いコートとキャプテンハットのような装甲を身に着け黄金の剣身と紅い持ち手のカットラスを握った姿の：一応仮面ライダー、エルドラゴ・ゴールデンパイレーツへと変身した。

「陽光を、受けて輝く黄金郷——誰かがオレを呼びやがる。怪物を屠り、悪を討てと言いやがる。上等だ、やってやる！悪鬼を制し羅刹を潰し！——輝くこの身はゴールデン！まだ認めてもらってねえが！仮面ライダー、エルドラゴ。——只今ここに見参だ！

カットラスを振り回し、ビシッ！ビシッ！とポーズを決めて行くエルドラゴに、周りのギャラリィから歓声が沸く。目立ちたがり屋ですかね貴方は。

「なんです、それ？」

「お前らの罪を数えろって奴に対抗してみた」

『なげーですしなんか聞いたことあります』

「ありやばれたか。オレが尊敬する英霊の名台詞を真似させてもらった」

「正義のヒーロー気取りかよ！恥ずかしい奴等だな！」

「過去はともかく今は正義のヒーローだが、なにか？」

速い。挑発した小型恐竜ドーパントに、一跳躍で眼前まで迫って拳を見舞うエルドラゴ。殴られたドーパントは牙の欠片を散らしなが

ら吹っ飛んだ。

「いったあ…なにすんだ!？」

「こっちは仮面ライダーと認められなくて苛立ってるんだ。大人しくやられておいた方が身のためだぞ」

「そうだな、あたし一人じゃ勝ち目がないな。仮面ライダー2人とか。だけどね?」

《ラプトル!》

《ラプトル!》

《ラプトル!》

《ラプトル!》

ドーパントが爪を鳴らすと野次馬の中からメモリの音声为重なつて響き、慌てて逃げ出した野次馬の中から赤茶色な以外目の前のドーパントと瓜二つなドーパントが四体も出てきた。これは…!？」

「うちの部下が揃えばわからないよ?」

『ラプトル。量産の効くメモリの様ですね…』

「あたしたちはREX!かのガイアメモリマファイア、エル・ドラードに連なるストリートギャングだ!」

「…ほう?」

リーダー格であろう青ラプトル・ドーパントの言葉に反応するエルドラゴ。あ、勝手に名前使われて怒ってるな、と声色で分かった。

「行くよ野郎ども!」

「二「アイアイ頭領!」二」

一斉に飛びかかってくるラプトル・ドーパント四体。私達は拳と蹴りで一人ずつ二体を迎撃、エルドラゴは突進の勢いを利用して斬撃を叩き込み間髪入れず蹴りを叩き込んで斬られたラプトルを蹴り飛ば

しもう一匹を迎撃。あつという間に地に伏せさせる。

「単体だと弱いようですね」

「油断はするなよ。この程度でエル・ドラードの後釜を名乗るわけがないからな」

「そういうこつた!」

《スピノサウルス!》

「っ!」

しかしラプトル・ドーパント達に気を取られていた私達2人の背後でさらにメモリを使った野次馬がいた。振り返ると4メートル以上の巨体の、胴体に丸鋸が貫通している様なワニの様な頭部と長い手足のドーパントがいて。エルドラゴは咄嗟に剣を間に押し込んで受け止めていたが私達はもろに薙ぎ払いを受けて吹き飛ばされてしまう。

「遅いよツナミ!」

「悪かったよ頭領。見覚えのある顔があると思ひましてね。その金ぴか、前のエル・ドラードのリーダーだぞ」

「なんて!」

スピノサウルス・ドーパントの台詞に驚く青ラプトル・ドーパント。金堂百合の事を知っていると云うことは…元エル・ドラードの構成員か。

「お前、ツナミか。仮面ライダーが来てすぐさま逃げ出したマスカレイド風情がなにをやっている?」

「名前を覚えてもらっていたんですね。拾ってもらって悪いんだけどマスカレイドしか渡されないとか逃げて当然でしょ?死ねと?」

「成果も出さない奴にやるメモリはないって言ってたはずなんだがな?」

「実力を認めてもらえる上につくのは当たり前でしょうよ!」

胴体の丸鋸を高速回転させながら何度も腕を叩きつけるス
ピノサウルス・ドーパントの攻撃をカットラス一本で弾いて行くエル
ドラゴ。あの巨体と互角って、いや強すぎませんか？

「一人なら甚振れるわ！整列！」

青ラプトルの命令で縦一列になり、連続で飛びかかって斬りつけて
くるラプトル・ドーパント。迎撃したら次の一撃を受けてしまい、吹
き飛ばされる。見れば装甲に鋭い傷がついていた。

《トリガー！》《ルナ！》

《ルナ！トリガー！》

「こっちはこっちでやりますか！」

次々と狩りの様に飛びかかってくるラプトル・ドーパント達を蹴り
で迎撃しながらルナトリガーに変身。誘導弾を放つてまとめて迎撃
する…はずだったのだが、他のラプトル・ドーパントが爪で横から迎
撃したことで失敗する。今のコンビネーションは…。

『どうやら同じメモリでテレパスかなにかで指示できるようですね。
司令塔の頭がよくなければできませんが』

「あのふざけてる青いの頭いいってことですか」

「私じゃないもんね、姉ちゃんの指示だ！」

「姉？」

踏ん反り返る青ラプトル・ドーパントとその場から跳躍して私達か
ら離れるラプトル・ドーパント達に嫌な予感がしてその場から退避。
したその瞬間、空から何か落ちてきて頭部をアスファルトの道路に
叩き付け、クレーターを形作る。あ、危ない…。

「うちの妹が世話になったな」

「姉ちゃんさすが！」

『パキファケロサウルス、ですかね』

「恐竜系ドーパントのオンパレードですか」

そこにいたのはまるで棘鉄球の様な頭部が目元を隠している、しかし両腕は貧弱そうなスラリとしたスレンダーな三メートルほどの長身の竜人の様なドーパント。ラプトルが五体に、スピノサウルス、パキファケロサウルスのドーパント。ただでさえ強力な恐竜系ドーパントの一団……楽勝だと思つてたさつきまでの自分を殴りたい。

「私達はREX。仮面ライダー、お前たちを潰せば名は上がるかな？」

「オレを差し置いて王を名乗るとは、お仕置きしないと？」

「ツツコミはしませんけど……まあお仕置きするのは同感です」

スピノサウルス・ドーパントに吹き飛ばされてきたエルドラゴと背中がぶつかり、背中合わせで構える。

「行くぞダブル、派手にな！」

『さあ、お前たちの罪を数えろ！』

第三十話：R集結／黄金の仮面ライダー

ドーパントが沢山現れたことで野次馬が逃げ出して、被害をそこま
で気にしなくてよくなったはいいが、数の差はどうしようもなく。エ
ルドラゴも勝手に暴れてて共闘もできない。

「どらあー！」

《ルナー・メタル！》

「ぐうっ!？」

パキファケロサウルス・ドーパントの頭突きを咄嗟にメタルの装甲
で受け止めるが、とんでもない衝撃と共に大きく吹き飛ばされてしま
う。さらに転がったところに次々と鋭い爪を光らせながらラプトル・
ドーパントが襲いかかって来て、咄嗟にメタルシャフトを近くの電信
柱に伸ばして巻き付け、縮ませることで回避する。

「危ない…なんてコンビネーションですか」

『ラプトルとパキファケロサウルスでは繋がりはない筈…何も言わな
いでどうやって連携を…』

「考えてる暇があったら手伝ってほしいんですけどね！」

きりたんがぶつぶつ考えてるので、一人でパキファケロ+ラプトル
五体を相手取ってるんですけどね!?!パキファケロがメインで攻撃し
てきて、ラプトルがその隙を縫って追撃してくる。シンプルながら厄
介だ。避けた先の停車されていた自動車がもう何個もスクラップに
なってる。

「元リーダー、仮面ライダーに負けたと聞きましたよ?それが仮面ラ
イダーの仲間なんぞに堕ちて、プライドはないんですか!」

「大きなお世話だ。生憎と今の姿は気に入ってる」

一方、カットラスで丸鋸と張り合ってるエルドラゴが視界に入る。なんで張り合えてるんですかね。でもさすがに刃毀れしてきたのかカットラスを無造作に投げ捨てたエルドラゴは稲妻でSと描かれた黒いメモリを取り出してボタンを鳴らし、パイレーツメモリと入れ替えてドライバーを展開した。

《サンダー!》

「こいつを試してみるか」

《ゴールデンサンダー!》

すると海賊風の装甲が消え去ったかと思えば雷雲が発生して雷が落ち、それは黒に稲妻が描かれた和風の鎧武者風の装甲となり、その手には稲妻の様にギザギザした金色の刃の斧が握られた姿となる。エルドラゴ・ゴールデンサンダーといったところか。

「派手にぶっ飛べ!」

「ぐっああああ!」

斧はグリップを回すとチエーンソーの様に刃が回転して帯電、丸鋸とかちあつた瞬間、そのまま凄まじい勢いでスピノサウルス・ドーパントの巨体をぶっ飛ばした。吹っ飛んできたスピノサウルス・ドーパントの巨体にラプトル・ドーパントが二体巻き込まれて潰された。それを見て頭部の矛先をエルドラゴに向けるパキファケロサウルス・ドーパント。

「ラズリ、半分この仮面ライダーは任せる。エル・ドラードのリーダーだった仮面ライダー…アンタから潰した方がよさそうだ」

「潰せるもんなら潰してみな!」

スイングされた斧と、助走して勢いをつけた頭部が激突。火花を散らし、さらにパキファケロサウルス・ドーパントの全身に電気が走り

バチン！という音と共に双方弾き飛ばされる。頭突きに特化したドーパントだからか異様に強い。あの巨体を吹き飛ばした今のエルドラゴは間違いなくパワータイプなのにそれと張り合えてるのだから。

「何時まで耐えられるかな！」

「返り討ちにしてやるよ！」

頭突きの勢いは完全に防げないらしく、パキファケロサウルス・ドーパントの猛攻に大きく背後に弾かれながらも何度もぶつけ合うエルドラゴ。斧を振り下ろすも横に避けられてくるりと回転した尻尾の一撃を受けて斧を弾かれてしまった。

「金堂百合?!」

「よそ見をしている暇があるのか?!」

「あぶ、ない！」

背後で立ち上がり、長い両腕を交差して振り下ろしてきたスピノサウルス・ドーパントの一撃をメタルシャフトで受け止める。そのまま両横から襲いかかってきたラプトル・ドーパント二体を、メタルシャフトの両端を伸ばして迎撃。メタルの怪力で押し上げ、押し付けられそうになってた丸鋸を回避。そのままメタルシャフトを振り回して伸ばした勢いの一撃で吹き飛ばす。

「危ない奴ですね…」

『あれを喰らったらひとたまりもありません。存分に注意しましょう』

「一人から二人分の声がするとか気持ち悪い奴だな！」

「うるせーですよ降りてこいリーダー格！」

近くの信号機の上に座って見下ろしていた青いラプトル・ドーパン

トに怒鳴り散らす。自分で戦うと敵わないのは目に見えているからか部下にやらせている、性格の悪い奴だ。エル・ドラードのリーダーだった金堂百合が自分で戦っていたのとは対照的だ。

「上から見下ろしてる方が指示しやすいんだからやだよーだ。それより見てよ、姉ちゃんがもう一人の仮面ライダーを追い詰めてるよ！」
「なに？」

見てみれば、己を手放したエルドラゴは徒手空拳で頭突きを上手く避けて攻撃を加えていたが、フェイントをかけられてもろに胴体に一撃をもらって近くのブティックに飛び込んでしまう光景が見える。

「今のは、効いたあ…」

「頑丈なようだな、金メッキじゃないらしい」

ブティックの奥まで服のかかったハンガーを押しつけながら転がり、壁に飾られていた服を散らし試着室に飛び込んで罅割れた鏡に寄りかかって倒れ伏すエルドラゴ。ブティックの入り口に立ったパキファケロサウルス・ドーパントは何かを見つけると小さな両腕を地に付けて尻尾を突き上げ、頭部を低く下げて構える。必殺の構えだとすぐ分かった。

「ふふつ、とどめだ！」

「なにを笑ってる？んなの、避け…!?!」

避ければいいのに、何かに気付いてその場にとどまり受け止める体勢になるエルドラゴ。そのままパキファケロサウルス・ドーパントはバネのような脚力で横に跳躍、まるでミサイルの様にブティックの店内に突撃し、エルドラゴはあろうことか仁王立ちして受け止め、顔面に受けて鏡ごと壁を突き破り吹き飛ばされてしまった。

「はははっ、悪党が子供一人を庇って死ぬとはな……！」

そう言いながら出てきたパキファケロサウルス・ドーパントの手に握られ引き摺られていたのは幼い少女。どうやら試着室に隠れていたようだ。金堂百合、まさか彼女を庇って……？

「避けていれば子供に当たるだけで自分は死なずにすんだのになあ？ 私達が憧れたエル・ドラードのリーダーはこんなもんか？ どうにも腑抜けたらしいな」

「いや、いや！放して!？」

暴れる少女を無視しながら動けずにいた私達の前にやってくるパキファケロサウルス・ドーパント。さつきスピノサウルス・ドーパントに轢かれていたラプトル・ドーパントの一人を蹴り起こすと少女を渡して私達を一瞥した。

「形勢逆転だ仮面ライダー。このガキを殺されたくなければ、武器を捨てる。そして動くな。さもないとうちの部下が首を搔っ切るぞ」
「くっ……」

少女を人質に取られた以上、指示に従うしかない。メタルシャフトを足元に落とし、両手を上げて抵抗の意思がないことを伝える。すると信号の上の青いラプトル・ドーパントが手を動かして指示を出し、私達を取り囲むスピノサウルス・ドーパントとラプトル・ドーパント三体。せめて隙ができれば……

「さつきはよくもやってくれたなあ！」

「やっちまえ！」

「正義の味方は大変だなあ、ヒーロー！」

「ビヤッハー！切り刻んでやるぜ！」

スピノサウルス・ドーパントを筆頭にして、ラプトル・ドーパントたちも鋭い爪の両手を叩きつけてきて、メタルの装甲に火花が散る。ルナの方は爪が装甲を貫いて私の体にまで傷を与えてきた。激痛と共に血が流れるのを感じる。見れば装甲に血が滴っていた。さらにリンチと言わんばかりにズパスパ斬られていく。なぶり殺しにしたのか、スピノサウルス・ドーパントの丸鋸が使われないのが救いだった。

「ぐうっ……」

『ゆかりさん、耐えてください！せめてアクセルが来るまで……』

「アクセルが来るだけではダメです、人質を殺されてしまう。隙さえ、隙さえあれば……」

とにかく耐え凌ぐしかない。パキファケロサウルス・ドーパントの機嫌を損ねれば一人の罪もない少女が殺される。見ればついなさんや花さんに有阿刑事といった警察の面々も路地裏から顔を出しているのが見えたが人質がいるので迂闊に出れない様だ。攻撃を耐え凌ぎながら隙を窺っていた時だった。

「おい。勝手に死んだことにしてくれるなよ」

「なに?！」

その声に振り向く。そこには、仮面の右側が割れて内部の目と血に濡れた顔が見えてるものの、ちゃんと両足で立っているエルドラゴがいて。バチバチと全身が帯電したかと思えば手を伸ばすと、転がっていた斧がエルドラゴ目掛けて高速で浮遊。

「なっ、頭領危ない!」

スピノサウルス・ドーパントの警告の声虚しく、斧が飛んでいく直線状にいてエルドラゴの方に向いていた。パキファケロサウルス・ドー

パントの後頭部に斧の刃が直撃、露出している頭蓋骨に罅を入れてエルドラゴの右手に握られた。

「頭領!？」

「今です！」

人質を捕まえているラプトル・ドーパントが狼狽えるのを見るや、私達も行動開始。足元に転がしておいたメタルシャフトを思いっきりサツカーボールシユート。同時にエルドラゴが動き出し、パキファケロサウルス・ドーパントに斬りかかると同時にメタルシャフトがラプトル・ドーパントの顔面に炸裂して怯ませ、そのまま駆け寄ると少女を保護しながら手に取ったメタルシャフトを伸ばして一回転。

「ありゃー!みんなー!？」

信号機の上にいる青いラプトル・ドーパント以外の全員にダメージを与えて怯ませる。視界のすみで、ついなさんが持ち前の身体能力で花さんと有阿刑事の後ろで路地裏の壁を蹴って壁ジャンプで上まで行ったのが見えた。相変わらず滅茶苦茶ですね。

ギヤリギヤリギヤリ!

「!」

何か金属と金属がこすれ合う音が聞こえて、振り向いたらスピノサウルス・ドーパントが持ち前の胴体の丸鋸でメタルシャフトを切断している。

「いったいなあ…お返しだ！」

さらに丸鋸の回転速度が上がり、やばいと直感した時には射出。全てを斬り裂く丸鋸が私達に迫る。

《ゴールドラッシュユ!》

「させるかああああ!」

するとダブルドライブバーNEOを開閉しながらエルドラゴが間に割り込み、黄金の光を纏って丸鋸を弾き飛ばした。そのままゴールドメモリを引き抜いて斧の刃の後ろについているスロットに装填。斧が黄金を纏って巨大化し、頭上で回転させて跳躍。

《ゴールド!マキシマムドライブ!》

「ゴールドデンシャイニング!」

陽光を受けてキラキラ輝く斧に全員の視線が引きつけられ、回転する斧から雷が発生して降り注ぎ、慌てて避ける。そしてエルドラゴは斧の回転をやめると両手に持って急降下、一気に振り下ろした。

「はえ?」

雷撃が円形に降り注いだことでその中心にいて逃げられなかった、さつきまで人質をとっていたラプトル・ドーパントがに巨大化した斧が炸裂。爆散して排出されたメモリが砕け散った。そのまま限界が来たのか倒れ伏して変身が解除された金堂百合に慌てて駆け寄る。

「ヤスオ!?!」

「やっべ、姉ちゃん逃げよう!」

「くそっ、腐つてもエル・ドラーダのリーダーか…!」

「元リーダー、こわっ。逃げましょ逃げましょ」

「逃がさんわい!」

逃げようとするREXだったが、近くの建物の屋上からアクセルがエンジンブレードを手に強襲。気付いたパキファケロサウルス・ドー

パントの振り上げた頭突きがエンジンブレードと激突。

「くっそ…なんちゆうパワーや…!?!」

「その程度のパワーで勝てると思われるとは心外だ!」

罅が入ってるはずなのに物ともせず空中で踏ん張れなかったアクセルを簡単に弾き飛ばすと、パキファケロサウルス・ドーパントは身を縮こませてぶるぶると震えると磁力を発生させ、周囲のスクラップを集めて頭部が砲塔の様に露出した戦車へと変身。パキファケロ戦車とも言うべきだろうか。

「ツナミ、乗れ!お前ら逃げるぞ!」

「おうよ姉ちゃん!おら野郎ども、ヤスオは置いてけ!金は持て!逃げるぞー!」

上部にスピノサウルス・ドーパントが飛び乗るとパキファケロ戦車は走り出し、恐竜形態になったラプトル・ドーパント四体がそれに続く。ハードボイルダーに戻ってる間に見失う…!

「ゆかり!こっちや、乗れ!」

「ついなさん!」

するとバイクフォームになったアクセルが傍に停車。背中に乗ってハンドルを握るとアクセルが走り出し、REXを追いかける。金堂百合を置いて行くことになるがしようがない、後で迎えに行きます!

《トリガー!》

「逃がしません!」

《ルナ!トリガー!》

逃亡するREXの背後を取るとルナトリガーに変身し乱射。誘導

弾を一発ずつ当てて怯ませる。すると配下ラプトル・ドーパントの一体がこちらを向いて飛びかかってきた。

「姉御、逃げてくれ！頭領姉妹の為なら死ねるぜ〜！」

「『なっ!?!』』」

背中に乗ってる私達が掴みかかれ、グラグラとバランスを崩すアクセル。そのまま壁面に突っ込んでしまい、思わず目を瞑った瞬間。

「なめんな〜！」

アクセルは跳躍してビルの壁面に着地、そのまま上に向けて爆走していた。

「上に打ち上げる！決めてやれ〜！」

『ならこれで!』』

《ジョーカー!》《サイクロン!》

「これで決まりです!」

《サイクロン!ジョーカー!》

屋上までたどり着いて空に飛び上がった瞬間、サイクロンジョーカーに変身。ラプトル・ドーパントは投げ出されるも屋上に着地。私達はアクセルの後輪を踏んで上空に打ち上がり、ジョーカーメモリを腰のマキシマムスロットに装填。急降下する。

「半分!?!」

「『ジョーカーエクストリーム!』』」

迎撃しようとしたラプトル・ドーパントは驚愕、分離して二連続キックを叩き込み、爆散させた。着地すると横にアクセルも落ちてきて着地。私達は一息ついた。

「…あとのREXのメンバーは逃がしましたか」

「メモリを使う集団か、厄介やな」

『…エル・ドロードを率いていた金堂百合なら何か対策思いつくかもしれないですね』

「そうですね。…彼女も、「仮面ライダー」だったみたいですし」

思い出す。体を張って少女を守るためにあの必殺の頭突きを受け止めた姿。ゴールドラッシュという能力を使えば無敵で済んだろうが弾かれたパキファケロサウルス・ドーパントがそのまま少女に向かわない様にと考えたのだろう。…あれはまさしく仮面ライダーの姿だった。…認めてもいいかもしれないなあ。

第三十一話：R集結／三人目の仮面ライダー

一度ルナメタルで屋上でメモリブレイクしたREX構成員を地面に下ろし、ついなさんに任せて呼び寄せたハードボイルダーに乗って金堂百合の元に戻る私達。破壊の跡が残る場所には野次馬はおらず、ヘルメットを被ったまま倒れ伏した金堂百合と、それを介抱する少女がいた。刑事二人は倒されたREX構成員の…えっと、ヤスオを連行したのだろうか。変身を解いて駆け寄る。

「金堂百合！無事ですか!？」

「あつ、仮面ライダーの人！お姉さん、全然目を覚まさないの!」

黒い髪をおさげにしてランドセルを背負った赤い服の少女の叫びに慌てて駆け寄る。ヘルメットを脱がせると、額から夥しい血を流した顔が出てきた。重症ですねこれは。

「ガイアメモリによる傷は普通の薬が効かないでしたっけ…えっと、あなたのお名前は？親はいます?」

「かあい ユキ川合優希…お父さんお母さんはいないよ、施設の先生はいるけど」
「あー、じゃあ私達ときた方がいいですね。彼女から離れたくないでしょう?」

頷く優希さん。私はスタッグフォンを操作してリボルギヤリーを呼び寄せる。病院じゃ意味ないので事務所に運ぼうと言う魂胆だ。いやでも、誘拐になってしまうからやめた方がいいかと思いつく。

「…なんだ、お前も親がないのか…」

すると金堂百合が目を覚ます。フラフラと立ち上がるもんだから慌てて支える。

「お姉さん!？」

「金堂百合、大丈夫なんですか!？」

「リリイと呼んでくれ…大丈夫だ、頭が割れた程度だ」

「大丈夫って言いませんが!？」

むしろなんで死んでないんですかね!?とか言つてたらリボルギヤリーがやってきたので優希さんに振り返る。

「彼女の事は私に任せておいてください。一人で帰れますか?」

「うん、大丈夫。お姉さんを…よろしくね?」

「ちよつと待て結月ゆかり。…無事でよかったが、今度はちゃんと逃げるんだぞ。お前、今でも美人なんだから成長したらもつと美しくなる。それは水都の宝だ、みすみす失われるような真似をするな。いな?」

「え、はい、うん…」

顔を真っ赤にして俯く優希さんはその場に残り、言うだけ言つて気絶した金堂百合をリボルギヤリーに残して事務所に戻ることにした。
：エル・ドラーズの構成員もそうですが、天然の人たらしなんだなこの人。

「馬鹿につける薬はないと言いますか。こればかりは自然治癒能力を頼るしかないですね」

金堂百合の怪我を診察したきりたんの台詞がこれだ。とりあえず金堂百合は事務所の寝床に寝かせてある。未だにラーメンを食べて

いたあかりに連絡して呪怨キクにも伝えてある。

「しかしおかしいですね」

「おかしい、とは？」

「いや…普通、頭が割れる程の一撃を受けたら死ぬんですけど。仮面ライダーの装甲を突き破るほどの威力ならなおさらです。特にゴールドメモリは検索したところメタルメモリと同じ防御力に特化したメモリです。それを貫く威力は決して馬鹿にできません」

「じゃあなんで生きてるんですか？」

「さあ？」

「さあ？つて…」

「特殊体質かなにかだとしか言えません」

お手上げだと言わんばかりに首を振るきりたんに溜め息を吐いていると、どたどたと言う足音と共に事務所の扉がバタンと開かれる。そこにはあかりを脇に抱えた西友が荒い息を吐いて立っていた。

「リリイ様は……！」

「生きてはいますよ。なんであかりを？」

「足が……遅かった」

「伝えたらものすごい速度で…あ、キクさんは屋台を離れられないそうです」

「リリイ様が最優先ならば……屋台などやっている場合ではない……やはり、アイツも……！」

「まあちようどいいところに来ました。リリイが致命傷を負うはずの一撃を受けて生きてるんですが、何か知ってますか？」

尋ねると、あかりを丁寧に傍に下ろした西友は即答した。

「フツ……リリイ様だからだ」

「いやそんな女神様だからと言わんばかりに言われても……」

「昔、ミュージアムの幹部が言っていた……リリイ様は、ハイドープか
もしれない……と」

「ハイドープ？」

「リリイ様は特別……当然だ」

「……まあ、金堂百合が慕われる人間なのは理解しましたよ」

あれは人を惹き付ける人間だ。茜さんと同じ……いやそれ以上か。
私がおやつさんと出会ってなかったら、私も彼女の下についていたか
もしれない。あの輝きは人を狂わせる。

「当たり前のことだぞ……」

「とりあえず看病します？」

「いや、俺は、リリイ様を傷つけた者共を調べる……粛清、お前達に託
す……!」

「いや粛清で……ああ、行っちゃった……」

そそくさと去って行った西友を見送り、どうしたものかと考える。
私も、調査するべきだな。あかりに金堂百合を任せて外に出ようとす
ると、黙っていたきりたんが口を開いた。

「検索完了。ハイドープという言葉を検索したら今回謎だったことも
わかりました」

「きりたん。ハイドープとはなんなのですか？」

「ハイドープとは、ガイアメモリを長年使用し続ける、もしくは過剰に
使用してきた結果、一種の超能力に目覚めたドーパントの総称です」
「超人だけじゃなく超能力者にまでなれるんだ……」

「ドーパントの強化版みたいなものですか」

「メモリの力を最大限に引き出せる他、生身の状態でも異常な能力の
行使が可能で、金堂百合の頑丈さも恐らくこのハイドープさ故です。
そして……パキファケロサウルス・ドーパントと青いラプトル・ドー
パントの二人もこのハイドープと思われれます」

「どういうことですか？」

「ラプトル同士ならわかりますが、ラプトルとパキファケロで明らかに連携を取ってました。恐らくテレパシーみたいな能力に開花します」

言われてたしかに、と思い至る。青いラプトルの妹が上から状況を見て、姉と部下に指示しているように見えた。いや、彼女たちの言い分を信じるなら頭脳はパキファケロサウルスの方だ。つまり、青いラプトルと喋らずに意思疎通して指示していたと思われる。器用な奴だ。

「彼女たち姉妹は一心同体です。あの連携を崩すことはできない。どうにか分断できればいいのですが…」

「分断、ですか」

「使えそうなガジェットが出来ましたがどう使うか…ですね。あかりさん、何か喋ってください」

「あ、ゆかりさん！ごちそうさまでした！」

そう言っつきりたんが手に取ったのは緑色のサウンドレコーダー。カエルが描かれた Gizme モリを取り出しあかりの台詞を聞いてから装填、するとカエル型に変形してぴよこぴよこ動いたかと思えば私の声で喋り出した。

《「ごちそうさまでした！」》

「え？」

「わあ、ゆかりさんの声！」

「これはフログポッド。録音した声を別の声に変換して鳴らすことができます」

「なるほど、確かに分断に使えそうですね。ところであかり？ごちそうさまでして…」

「え？ゆかりさんの奢りじゃないんですか？」

「私の分は払いましたがあかりの分まで払いません！」
「ええー!?」

図々しいあかりにお説教だ。すると何が面白いのかスタッグフォン、バットシヨット、スパイダーシヨック、デンデンセンサー、フロツグポッドといったメモリガジェット全員とファンングメモリが集まってやんややんやと楽しんでた。

「大所帯になってきましたね」

「誤魔化そうたってそうはいきませんからねあかり。しかし手段があっても居場所もわかりませんが…」

「あとはREXの構成員の情報が欲しい所ですが…」

「…他の餓鬼どもは知らんが」

「お」

声が聞こえてきたので振り向くと、そこでは金堂百合が身体を起こしていた。よかった、目を覚ましたようですね。

「あのノコギリ野郎…ツナミのことなら知ってるぞ。奴の名前はツナミ角南陸太郎。確か普段はファツシヨンデザイナーをしていたはずだ」

「ファツシヨンデザイナー?聞いたことない名前ですね」

「あー、たしか普段はなみおと波音リツと名乗っていたな」

「波音リツといえば正体不明のカリスマファツシヨンデザイナーじゃないですか!」

私でも知ってる名前だ。赤茶色の綺麗なロングヘアで常に喪服の様なドレスと帽子を身に着けタイツを履いた足の曲線美で数多の人間を魅了する正体不明のカリスマファツシヨンデザイナー……え?男?

「……え、いやいやいや。ねえ、あかり?」

「そうです！波音リツはどう見たって女ですよ！」

あかりがスマホで画像を見つけて金堂百合に見せつける。確かに過剰に全身を隠してるなとは思いますが…。

「確かにハスキーボイスの低い声ですけど！あんなに綺麗な男がいるわけが…」

「アイツはオカマだし、その格好はアイツが頼んでくるもんだからオレが飾り立てたら気に入った姿だ。いわゆる男の娘ってやつだな」

「オカマ…」

「男の娘…」

あかりと共にガクツと両膝をついて項垂れる。おやつさんほどではないが、女のカリスマとしてちよつと尊敬していただけにその事實は重い。

「美的センスはよくてオレのオーダーメイド品の衣装を作らせていた。ちなみに脱ぐと中性的な顔をした眼鏡の美少年だ。ただ傲慢な奴でな、美しい自分は何したって許されると思っててマスクレイド以上のメモリを渡すのを危惧してたんだ」

「あなたも美しければいいとか言ってますでした？」

「オレは自分は何にしないで美しいと思ってるが、アイツは醜い本当の自分を隠すために美しさを選んだ男だ。根本的に違う」

「そ、そうですか…」

ダウンした私とあかりに代わってきりたんがツツコンでたが相変わらずのナルシストな金堂百合であった。いやすごいわこの人。勝てる気がしねえ。なんで私達勝てたんだ。あ、ミュージアムと協力したんでしたそうでした。

「で、でもスピノサウルスが波音リツだと言うのなら…！」

「情報屋の力を借りればいけそうですね。私、潮風高校の二人に会ってきます」

「私はネルさんに！」

「じゃあ私は鳴花ーズで聞き込みを」

「金堂百合はここで休んでいてください！では！」

あかりはJKコンビのもとに、私はネルさんのところに、きりたんは下の鳴花ーズに、それぞれ移動を開始。金堂百合はぽつんと残され不満そうだったが無視する。

「リリイと呼べと言ってるのに……それに私を一人残すなんて信用してくれてるのか？……まさかな」

「あれ、ネルさんは……」

ラーメン屋台「金堂」に来ると、ラーメンを食べていたはずのネルさんはおらず、時間も時間だけに人が来ずに暇を持て余してるのか包丁を研いでいる呪怨キクだけがいた。

「サイドテールの子なら帰ったよ。仕事に戻るって」

「ああ、ならいつものベンチですかね」

「…それより、百合さんが怪我したって本当ですか…？」

包丁を研ぐのをやめて心配そうな視線を向けてくる呪怨キクに、以前の狂気的な表情じゃなくなってるなど思いつつ答える。

「はい、今は私達の事務所で休ませています」

「恩に着ますよ、探偵。でもあの人が怪我するなんて信じられないな
…首を斬られても生きてるような人なのに」

「逃げ遅れた少女を庇ったんです。…あれは悪党ではなく、仮面ライ
ダーの姿でした」

「そう、ですか…あの人は昔からそうだった。私を悪漢から助けて
くれて、孤児だった私に名前をつけてくれたのも百合さんだ」

「そうだったんですか。…ああ、だからあんな反応を」

お前もってそういうことか。昔に思いをはせているのか空を見上
げる呪怨キク。清々しい表情からは彼女がエル・ドラードの副リ
ダーだったことは感じさせない。

「…私、百合さんを一度裏切ったじゃないですか。それで西友から
は親の仇だと言わんばかりに恨まれてるんですけど、百合さんは恨ん
でなかったんですね」

「え!?!:殺されかけたのにな?」

「はい…お前が自分を好きにならせることができなかったオレの責任
だって言って。いっそ殺された方がマシってぐらいの罪悪感で。私
のことをちゃんと考えてくれてた人を裏切って殺そうとしたんだっ
て。あの人の輝きが羨ましくて、あの人の様になりたくて裏切ったけ
ど…あの人の様にはなれないと痛感しました」

「呪怨キク…いや、キクさんのことが好きなんです、金堂百合は」

「や、やめてください…さん付けされる人間じゃないです…」

呼び方を変えると慌てて鬼の面を被り包丁を握った手をぶんぶん
と振るキクさん。危ない危ない。

「いやフルネームで呼ぶのも面倒です。犯罪者は許せませんが、
罪を数えて償おうとはしてるみたいなので」

「…あとで衣亞さんにも謝罪するつもりです。騙していて悪かった

と。…貴方のマネージャーは楽しかったと」

「それがいいですね。衣亞さん、マネージャーである貴方に裏切られて悲しんでましたし」

「……こんな私が百合さんだけでなく誰かに悲しまれるような存在になつたんですね…ああ、それを知っていれば、なあ…」

泣きそうになっているキクさんに気を利かし、私はネルさんの元に向かった。…昔から、仮面ライダーの資格がある人だったみたいですね、リ…金堂百合は。

一時間後。私達は事務所に戻り、金堂百合の包帯を巻き直しながら集めた情報を整理していた。西友と、ついなさんも一緒だ。

「ネルさんがツイッターやらで調べたところ、波音リツを水都歩歌路町の廃線で見たって情報がありません」

「こちらでは六花さんと花梨さんから、波音リツの情報はなかったんですけど、最近不登校のラズリ・郡上とメルリ・郡上っていうハーフの双子が歩歌路町にいかにも不良数人と大人しそうなメガネの美少年を連れて屯っていたという情報をもらいました。もしかして…？」

「こちらも一つ情報が。鳴花ーズに歩歌路町の廃線で獣の声が聞こえたって言う酔っ払いがいました」

「俺からは一つだけだ…：愚かな裏切り者ツナミ…：波音リツは、アトリエと称した歩歌路町廃線近くの古い工場を…：買い取っていた。どうです？リリー様」

「うちからはメモリブレイクした二人は情報を吐かなかつただけ。無駄に忠誠心高くて嫌やわ。頭領の姉の方はかなりカリスマがある

様な」

そんな情報が並んだ。私が包帯を巻き終えた金堂百合は少し考えると、口を開いた。

「オレの、いやエル・ドラードの隠し財産があるという噂を闇サイトに流す。それでラズリ率いるラプトルたちは引きつけられるはずだ。それでスピノサウルス：ツナミも同行するだろうから、フロッグポッドでメルリの声を使って別の場所に誘き寄せる。そしてアジトに残るだろう。パキファケロサウルス：メルリ、この三つに分断して潰す。これが最適解だろう」

「なるほど、さすがは一大組織を率いた女ですね。どう分けますか？」
「隠し財産があるのはオレの倉庫跡地にする。唯一数がいる面子だ。臨機応変に戦えるのはダブルだろう」

「理に適ってますね。ダブルでは他二体の力押し相手は分が悪い」
「次にスピノサウルス：ツナミだが、あの巨体だ。水都第二屋外ステージがいいだろう。相手するのはオレかアクセルだが…」

「うちがやる。デカブツ相手なら、パワータイプのうちが適任やろ」
「ならオレがメルリの相手だな。オレに頭突きを浴びせたアイツにリベンジマッチといこう。…だけどいいのか？お前たちは、オレを信用してくれるのか？」

そう訪ねてきた金堂百合に、私ときりたんとついなさんは顔を見合わせ頷く。

「知らない誰かのために命を張れる人間を信用できないとでも？貴方はもう仮面ライダーですよ」

「まあ、私も悪魔と呼ばれた人間ですし？」
「うちも人の命を何とも思わん復讐者やった。お前もゆかりに絆された口やる？信用したるから任せたわ」

そう言うのと金堂百合は不敵に笑って、ダブルドライバーNEOを手に立ち上がる。

「おう。仮面ライダーエルドラゴ、金堂百合。またの名をリリイ金堂。敵の頭目の相手は引き受けた」

「お前達、リリイ様に迷惑を掛けるな。でなければ、命を掛けてでも……俺が潰す！」

「落ち着け西友。むしろオレが迷惑をかける側だ」

そう言うのと金堂百合は包帯を巻いた体の上から上着を羽織り、先陣切って事務所を出て行った。

「行きますか」

「おうっ」

私とついなさんも続いて外に出て、共にバイクに乗って歩歌路町に向かうのだった。

第三十二話：R集結／恐竜仮面大決戦

「まさか裏サイトに、エル・ドラードの隠し財産の居場所の噂なんて情報があるなんてな！」

深夜23時。先回りしていた倉庫跡地に、REXの一団…青い個体が率いるラプトル・ドーパント9体にスピノサウルス・ドーパント。雑魚ラプトルは倒した分も含めると10人いたようですね。結構な大所帯だ。私はスタッグフォンのメールでアクセルのビートルフォンに合図を送ると、あらかじめ録音しておいたフログポッドをスピノサウルス・ドーパントの足元に向かわせる。

《「ツナミ。お前は水都第二屋外ステージへ向かえ。そこにもあるらしい」》

「え？メルリさん？あ、はい。了解しました？」

いないはずのメルリの声が聞こえてきたことに首を傾げながらスピノサウルス・ドーパントは海に飛び込み、そのまま北上していった。よし、分断できた。アホでよかった。

「あれ？ツナミはどこ行った？」

「波音リツなら用事があるとかで帰りましたよ」

「！」

青いラプトル・ドーパントがスピノサウルス・ドーパントがいなくなったのに気付いたので顔を出すと、どよめくラプトルたち。私はダブルドライバーを装着しながらメモリを構える。

「…なんてね。貴方達が厄介なのはコンビネーションです。それを潰させてもらいました」

「姉ちゃん…姉ちゃんのとこにエル・ドラードのリーダーが!?や

「ばい、嵌められた!?!」

「そういうことです。隠し財産なんかありませんよ」

《ジョーカー!》

【行きますか《サイクロン!》】

困んできた中でメモリを鳴らして装填。構える。

★

「おー、よく来たな。待ってたで」

うちがステージで待つてると、川から巨体がのそりと顔を出す。スポットライトが点いてうちを照らしだすと、うちの存在に気付いたスピノサウルス・ドーパントが巨体を震わせて驚く。

「刑事の…仮面ライダー!」

「カリスマだかなんだか知らんが、波音リツ…角南陸太郎。観念しいや」

《アクセル!》

「アタシを…その名で呼ぶなアアアア!」

丸鋸を回転させながら突進してくるスピノサウルス・ドーパントに、うちはアクセルドライバーを装着してメモリを鳴らした。

★

「まさか、こんなにすぐ復活するとはな。バケモノかお前」

《パキファケロサウルス!》

歩歌路町の廃線にて、パイプ椅子に座ってパソコンを弄っていたメリ・郡上は来客を見てパキファケロサウルスの頭部でPと描かれた

メモリを手にして額に浮かび上がった生体コネクタに突き刺しパキ
フアケロサウルス・ドーパントに変貌。 来客…金堂百合は笑いながら
手にした二本のメモリを鳴らした。

《ゴールド!》《パイレーツ!》

「…ハハッ!骸骨男と同じように呼ばれることになるとは、人生なに
があるかわからんな!」

金堂百合はかつて戦った仮面ライダースカルを思い出しながら装
着済みのダブルドライバーNEOに二本のメモリを装填、ジョリロー
ジャーを模すように両腕を交差して構える。それは偶然にも、結月ゆ
かり、きりたん、如月ついな、金堂百合の四人同時で。

「(「変身!」)」

ゆかりときりたんは仮面ライダーダブル サイクロンジョーカー
に、ついなは仮面ライダーアクセルに、百合は仮面ライダーエルドラ
ゴ ゴールデンパイレーツに変身した。

「(「さあ!」)」

「『お前たちの罪を数えろ!』』

「振り切るで!」

「派手に行こうか!」

その瞬間、水都の仮面ライダーとREXの決戦の火蓋が切って落と
された。

「何度やっても同じだ!」

「それはどうかな?」

その場で頭突きを繰り返し、地面をえぐりその瓦礫を飛ばすパキ

フアケロサウルス・ドーパント。エルドラゴは黄金の剣身と紅い持ち手のカットラス：パイレーツカリバーをフェンシングの様に高速で突きで繰り出し、瓦礫を全て貫いて団子のようにする。

「お返しだー！」

そのまま一回転、突き刺さった岩を勢いを利用して射出し、パキフアケロサウルス・ドーパントが頭部を振るって瓦礫を対処している間に突撃する。

「…ッ!？」

「お前の弱点は、攻撃が頭部を使うことメインってことだ！」

頭部を振るっていたことで接近したことに気付かなかった。パキフアケロサウルス・ドーパントは斬撃を受け、咄嗟に一回転して尻尾を叩き付けんとするがエルドラゴは跳躍。パイレーツカリバーの柄を首の後ろに叩き込んでから着地。死角への攻撃に「ぐえっ」と短い悲鳴を上げた。



「姉ちゃん!?!…この、早くこいつを倒して姉ちゃんの元に急ぐぞ野郎どもー！」

テレパシーで姉のピンチを感じたのか、焦った様子の青いラプトル・ドーパントが陣取った街灯の上で扇動する。両側からグルグル回転した二体の尻尾攻撃を回し蹴りで迎撃。前と後ろからの挟み撃ちは跳躍して逃れ、背後を取られないように海を背に着地した。

「相変わらずの連携ですがどうやって指示をしているのか…」

『ここはエクストリームで行きましょう。奴等のメカニズムを解き明

かします』

「了解！」

突進してきたラプトル・ドーパントを受け止めて背後の海に投げ飛ばして迎撃していると、甲高い鳴き声と共に、きりたんの身体を収納しているであろうエクストリームメモリが飛来。ドライバーを変形させるとスロットから緑と紫に輝く光の柱が立ち上り、それに重なったエクストリームメモリがレールの様にして降下。装填されたエクストリームメモリごとドライバーを展開する。

《エクストリーム！》

そしてクリスタルサーバーを胸部に展開し、私達は融合しサイクロンジョーカーエクストリームへと変身した。

「まだまだこの感覚には慣れませんね」

「なっ…姿を変えたぐらいでどうなるってんだ！」

カシヤカシヤとなにかが擦れる音が聞こえ、七体のラプトル・ドーパントが逃げ道を失くしていつせいに襲いかかってきた。…なるほど？

「解析完了。リーダー格の爪の音で指示していた様ですね。そのパターンも全てわかりました」

右足を上げる。すると左足にガシツと海に落ちたラプトル・ドーパントが掴んでくるも、空ぶった右足側の手を踏み潰して左足の拘束も解除。

「うぎやあああ!?!」

「え、なんでばれたの!?!」

「プリズムビツカー！」
《プリズム！》

クリスタルサーバーからプリズムビツカーを召喚しプリズムソードを引き抜いて横一文字に斬撃。同じタイミングで接触しようとしていたラプトル・ドーパント達を纏めて薙ぎ倒す。

「「「ぐぎやあああ!?」」」

《サイクロン！マキシマムドライブ！》《ヒート！マキシマムドライブ！》《ルナ！マキシマムドライブ！》《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

そのままプリズムソードを納刀したプリズムビツカーの四隅のスロットにメモリを装填、プリズムビツカーの中心に七色のエネルギーを集めてからプリズムソードを引き抜くと、七色のエネルギーが剣身に移動。

「ビツカーチャージブレイク!!」

そのまま近くで立ち上がっていたラプトル・ドーパント八体に連続で斬撃を叩き込み、爆散させた。残りはリーダーの青いラプトル・ドーパント…ラズリ・郡上だけだ。



《スチーム！》

手始めにと高温の蒸気を叩き込むも、スピノサウルス・ドーパントは物ともせずに客席を薙ぎ払いながら突進してきた。

「はっ！そんなものアタシに効くかあ！」

「ならこいつや」

《エレクトリック!》

ならばと突進を回転して避けつつ電撃を飛ばす。胴体の丸鋸に直撃し、感電して動きを止めるスピノサウルス・ドーパント。しかしすぐに頭を振るって立ち直り、近くの座席を握ると連続で投げつけてくるのをエンジンブレードで叩き落とすとうちの頭を掴んできた。

「美しいアタシの身体をよくも黒焦げにしてくれたなあ!このままその頭、齧り取ってやろうか!」

《トライアル!》

「そいつは困るなあ。全て…振り切るで!」

トライアルメモリを使用することで装甲がパージしてその勢いで脱出。高速で脇腹に連続パンチを叩き込み、スピノサウルス・ドーパントは脇腹を押さえてよろよろと後退する。

「ぐああああ…」

「遅いで、ノロマ!」

「このお!」

そのまま高速で回転蹴りを叩き込むと、スピノサウルス・ドーパントはバックステップで大きく後退。座席を掴み連続で投擲してきたが、うちは高速で移動して次々と回避。当たらないことに苛立ったスピノサウルス・ドーパントは丸鋸を射出。次々と新しい丸鋸を生成して高速で射出し続け、ステージはボロボロになって行くがうちにはまるで当たらない。しかしトライアルの必殺技…命名マシンガンスパイクで倒せるビジョンが見えんな。アレを倒しきる火力がないとなあ。いつぞやのサイクロンメモリ使わせてほしいわ。



《ゴールデンサンダー!》

「ぐっ、ああっ!？」

ゴールデンサンダーに変身したエルドラゴ。稲妻の様にギザギザした金色の刃の斧、イナズマサカリという名のそのグリップを回してチェーンソーの様に刃が回転、帯電させて斬撃を連続で叩き込んでいく。パキファケロサウルス・ドーパントは痺れて頭突きをすることもできずに追い詰められていく。

「人質とらないと仮面ライダーにも勝てない奴が、オレ達の後継を名乗るな」

「ならばこうだ!」

磁力を発生させ、周囲のスクラップを集めて戦車形態となり突撃するパキファケロサウルス・ドーパント。パキファケロ戦車はそのまま突進するが、エルドラゴは避けるそぶりを見せず。

《サンダー!マキシマムドライブ!》

「なっ…!？」

「避けたら女が廃るもんでな!サンダーバツシュ…!」

サンダーメモリを装填し、刃を高速回転させ大電流を放出させるイナズマサカリで縦一閃。パキファケロ戦車を真っ二つにして爆散。

「クソツ…馬鹿な、こんなことが…」

「せっかくだから三本目のメモリも試させてもらうか」

《ルーラー!》

転がったパキファケロサウルス・ドーパントの目の前にイナズマサカリを落として、鎖とメイスでRと描かれた三本目のメモリを取り出

し装填、展開するエルドラゴ。

《ゴールデンルーラー!》

すると武者風の装甲が消失し、空中に展開されたいくつもの黄金の波紋から出現した鎖の様な装飾がある純白の彫刻を思わせる西洋風の鎧が全身に装着され背中に赤いマントが展開、王を思わせる荘厳な姿「ゴールデンルーラー」へと変身。その手に、黄金の鎖が巻き付いて封印されてる印象の純白のメイス「ルーラティン」を握り、地面を突いた。

「裁定を与えてやる」

すると両肩の装甲から一対の鎖「ルーラチェイン」が伸びてパキファケロサウルス・ドーパントを拘束。持ち上げて引き寄せ、ルーラティンを振るい上空に吹き飛ばし、さらに巻き付かせたままのルーラチェインがジャラララと音を鳴らして引き戻し、眼前まで迫ったところでルーラティンを振り下ろし地面に叩きつける。

「ぐはあ!？」

「支配者の鎖だ。お前はもう、逃げられない」



「よくも私の可愛い部下を!」

「直接戦った方が強いのでは?」

高所から飛び降りてくるなり連続キックを繰り出してきたラプトル・ドーパントの攻撃をビツカーシールドで受け止め、プリズムソードを振るうも簡単に避けられる。ポテンシャルが高い。新体操とかやっってる動きですね。

「ですが！」

「ぐっ…なんで！」

フラフラと動いて一瞬で消えて死角から襲ってくるラプトル・ドーパントの攻撃を振り返って受け止める。変な動きをし出したらすぐさま検索、今のは盲点に移動する動きだと解析完了して受け止めた。パワー押しや技術がバケモノな奴ならともかく、素早い動きと鋭い爪とコンビネーションが強みのラプトル・ドーパントならばこれで完封できる。

「姉ちゃん、姉ちゃん！どうすればいい？私は、どうすれば…！」

「自分で自分の事も決めれない奴に、私達が負ける道理はない！」

やけくそになって跳躍して空中から襲いかかってきたので、プリズムソードをビッカーシールドに納刀してプリズムビッカーを投擲。回転したプリズムビッカーに激突して叩き落されたラプトル・ドーパントに、ダブルドライブバーごとエクストリームメモリを閉じて開き、エクストリームメモリ中心のエクスタイフーンから発生した緑と黒の竜巻に乗って浮き上がる。

《エクストリーム・マキシマムドライブ！》

「ぐええ…なっ!？」

「ダブルエクストリーム!!」

そして慌てて逃げようとしたラプトル・ドーパントに強烈なドロップキックを叩き込み、爆散させた。爆散跡から出てきた青いメッシュの入った黒髪セミロングのパンクファッションの少女…ラズリ・郡上を抱きかかえて私は北を見上げる。戦闘の余波の音がここまで聞こえてくる。…ついなさん、金堂百合…大丈夫でしょうか。



「アタシは、アタシは……こんなところで終わる奴じゃないんだ……!」
「っ!？」

決定打がないので奴の攻撃を避け続けて攻めあぐねていたところ、いきなり発狂して五メートル大に巨大化。巨大化した丸鋸で地面を引き裂きながら本当のスピノサウルスみたくなって街の方に向かってしまった。もはやビッグスピノサウルスだ。

《アクセル!》

「待たんかい!」

一度通常のアクセルに戻り、アクセルドライバーのハンドルを両手で握って外し、変形。バイクフォームとなって奴を追いかける。横から体当たりを仕掛けてみるもビクともせず逆に跳ね飛ばされて人型に戻ってしまう。

「いたた…あんなのどないすりやいいねん」

「ちからをかせてあげよーか?」

「え?」

聞き覚えのある声に振り向く。そこには夜には不釣り合いの月読アイと、まるで戦車の様な青いマシンがいて。

「ガンナーAだよ。かわいがってあげてね。ビートルフォンで指示できよるよ」

「恩に着る!」

言われた通りビートルフォンのそれっぽいボタンを押すとガンナーAが起動。ビルを破壊せんとしていたビッグスピノサウルスの

足に腕？を突っ込んで持ち上げ、ひっくり返してしまった。やるやないか。

「がったいもできるよ。アクセルガンナー！」

「よし！」

再びバイクフォームとなりガンナーAの前まで行くと、ガンナーAが変形して頭部が砲塔となり、バイクフォームの後輪が変形して合体。アクセルガンナーとなって砲塔からエネルギー弾を連射。ビッグスピノサウルスを怯ませていき、追い詰めて行く。

「絶望がお前のゴールや！」

そして砲塔が開かれて極太の青いビームを発射。ビッグスピノサウルスは撃ち抜かれて爆散し、ドレス姿の女性：じゃない、男性がメモリの残骸と共にその場に転がった。



「このお！」

縛られたまま突撃し頭突きを浴びせんとするパキファケロサウルス・ドーパント。しかしエルドラゴはルーラチエインを伸ばしてその勢いで遠ざけて攻撃を空ぶらせ、ルーラチエインの先端にあるスロットに引き抜いたゴールドのメモリを装填する。

《ゴールド！マキシマムドライブ！》

「オレの名前を覚えて逝きな！仮面ライダーエルドラゴ、つてなあ！」

伸ばされたルーラチエインから解放されたかと思えば波紋が出現してその中にルーラチエインが飛び込み、パキファケロサウルス・

ドーパントの四方八方に波紋が現れて雁字搦めに拘束。完全に身動きが取れなくなったパキファケロサウルス・ドーパントの前でエルドラゴは跳躍、右足に夜の闇を眩く照らす黄金の光を纏い、ルーラチエインを戻す勢いで急降下して飛び蹴りを叩き込んだ。

「ゴールデンジャツジメント」

「ぐっ…あああああああ!?!」

胸部に飛び蹴りをもらい、ルーラチエインで吹き飛ばされることなく全ての衝撃をその身に打ち込まれたパキファケロサウルス・ドーパントは爆散。エルドラゴがルーラチエインを肩に収納すると、メモリの残骸と共にロングヘアーの黒髪に蒼いメツシユが入ったパンクファツションの少女、メルリ・郡上がその場に転がった。

「もう少し早く出会っていればこうなることもなかっただろうな。残念だ」



その後、スタッグフォンでついなさんと金堂百合と連絡を取った私は、その後やってきた警察にREX構成員が全員お縄についたことを確認した後、私、きりたん、あかり、ついなさん、金堂百合、西友、キクさん、どうやら仮面ライダーの事も知ってたらしいヒメさん、ミコトさんで鳴花ーズを貸切にして打ち上げていた。

「REXは全員お縄につきました。我々の勝利です!」

「酔ってますねゆかりさん。あ、私紫蘇ジュースお願いします」

「私はハイボールをお願いします。しかし、仮面ライダーが三人…四人?…になつて頼もしくなりましたね!」

「月読アイはいないんか：アイツ結局何者なんや」

「知らん。が、ミュージアムの敵だろ。利用できるもんは最後まで利用するべきだ」

「リリイ様……これを……！」

「西友、ナチュラルにサーロインを全部百合さんにやるな。困ってるだろ。あとタン塩ばかり食うな」

「たくさんあるからいっぱい食べてね！ミコトのおごりだよ！」

「え……。まあいいか、ようやくミュージアムに対抗できるメンバーが揃ったわけだしお祝いだ！ヒメ、僕たちも食べるよ！」

「やったー！ミコト大好き！」

わいわいがやがや。なんかミコトさんが聞き捨てならないことを言ってる気もするが、酒の席だ忘れよう。

「リリイ！酒を飲める仲間が増えて嬉しいです！大いに飲みましょう
そうしましょう！」

「結月ゆかり、今オレのことを……？」

「いやなんか恥ずかしかったんですがどうでもよくなっちゃいました
！あと名前がいいですよ、まどろっこしい！」

「警戒してる人をフルネームで呼ぶゆかりさんならではの本音が聞こ
えた……いや私もですけど」

きりたんが何か言ってるが気にしない。とりあえず、梅酒ソーダ割
り、おかわり！

第三十三話：死人の〇／復活の髑髏

「ちゅわ。皆さん集まりましたわね？」

東北家の屋敷の広間で。集まった幹部たちの顔——焦燥しきつた最愛の妹の顔、ニコニコ笑顔の弟の顔、真面目に引き締めている売買トツプの顔、期待の視線を向ける狂人の顔——を確認して、一息吐いてから続ける東北至子。

「奏楽さんの報告でエクストリームが出現してから数日……昨夜、わたくしの「尻尾」がエクストリームの出現を確認しましたわ」

「…あの、至子姉さま…以前に聞きそびれたんですけど、エクストリームとは…?」

純子の問いかけに「そういえば説明してませんでしたわね」と口元を押さえる至子。一瞬の思考の後に口を開く。

「エクストリームとは究極のメモリですわ。これが出たということはあの女が動いてる証……そして我々の悲願に一步近づいた証でもありますわ」

「あの女とは誰の事なのだー?!」

「10年前に我々を捨て、実験体を連れロスドライブーの設計図を持って逃げ出したあの女ですわ」

「10年前…となると、私と奏楽さんは知りませんか？」

「10年前とはミュージアムが誕生した時期のお話…面白そうですね！」

10年前と聞いて険しい顔を浮かべる純子と蛇門を見て、なにかあったのだなと察する、養子組の星香と奏楽。

「あの女を引き摺り出して実験体の在り処を知りたいところですわ。」

そのために……星香さん、貴方の部下に確か「死人の誘惑」を得意とする人間がいましたわね」

「はい。死人を蘇らせて、その言葉でメモリを買わせるといふ悪徳商法で私は好みませんが……」

「なんですかその人、すごく面白そうじゃないですか!」

「至子姉さまの霊媒の方が凄いのだ」

「悪趣味……」

「死人の誘惑」というワードに思い思いの反応をする幹部たちを、プレッシャーを出すことで諫めてにつこり笑う至子。

「その方を私の直属に配しますわ。父様の悲願、ガイアインパクト：必ず成功させてみせますわ」

その日、ミュージアムが本格的に動き出そうとしていた。

REXとの決戦から十数日。あれからずっとリリイは我が事務所に入り浸ってる。部下二人が忙しくて、暇なんだそう。いやラーメン屋台「金堂」の看板娘じゃなかったんかい。え、自分が美人過ぎて逆に客が来ないからキクさんに任せた?ええ……。あかりとついなさんもきりたんが興味を持ってしまったタコ焼き巡りに保護者として付き合っ——多分あかりは自分が食べたかっただけです——大阪に行っちゃいましたし……あと何日リリイと二人きりで過ごせばいいのだろう。留守番してもらって喫茶「弦巻」にご飯を食べに行けるからそこは助かるが。

「つまりは……ニートと」

「言い返せん。バイトでもすればいいんだろうが、この美しさのせいか全然採用されなくてな……」

「いや多分経歴のせいでしょ。どこだって元犯罪者を雇いたくないですよ」

「正直は美德だぞ」

「嘘も方便です」

どうやら履歴書に馬鹿正直に元犯罪者です、と書いたらしい。リイらしいと言えそうですが、嘘を吐けない性格は損ですね。すると扉をコンコンと叩く音が聞こえ、「どうぞ」と声をかけると扉が開いてキャスケットを深く被り紺色のコートに身を包んだ眼鏡の女性が顔を出す。

「こんにちは。こちら継星探偵事務所よろしいでしょうか……」

「はい。こちら継星探偵事務所です。猫探しから浮気調査まで、どんな依頼もハードボイルドに解決。現在所長は不在ですが当事務所の探偵の私が承ります。ご依頼ですか？」

「えつと……おかしな話なんですけど」

リイを客席からどかしながら受け答える。なんか聞いたことある声だな、とか思っていると。眼鏡と帽子を外し、青い髪と碧眼を見せた女性に目が点となる。

「死んだはずの友人を捜してほしいんです……」

「う、う、ウナちゃん……!?!」

歌姫IAに並ぶ人気を誇る水都のアイドルにして大人気ラジオ番組「音街ウナのポジティブ★ワールド」のMC、音街ウナがそこにいた。

「音街ウナ。本名、乙町海鳴おとまち うなりっていうんですね…それで、死んだはずの友人を捜してほしいとは？」

大人しく私のデスクに座って見守っているリリイを尻目に、私は依頼人であるアイドルから事情を聞いていた。

「はい。ロストメモリーデイ…知ってます？」

「もちろんです。ウナちゃんの代表曲じゃないですか」

「その曲を作るきっかけになった、10年前、小学五年生の時に亡くした友人をあの際の姿のまままで先日見かけたんです…」

「先日と言うと」

「水都総合病院で起きた大量怪死事件の頃に、病院で精神科の定期検診を受けていた時の事です…」

「あの事件、ですか」

ダンデライオン・ドーパントと対決し私がダウンして、きりたんが事件解決のために奔走した事件だ。未だに記憶に新しい。その精神科の先生が犯人だったわけだがウナちゃんが無事でよかった。

「ライオンの様な怪物に追われながら病院内を走るあの子を見かけて、最初は夢かなとも思っただんですけど」

「んん？」

あれ、なんかデジャヴ。ライオンの様な怪物に追いかけて回される小学五年生なんて心当たりしかないんだが。

「でも最近、死人が蘇って水都のあちこちに出没してるって噂を聞い

てもしかしてと思つて…」

「あのー、そのご友人の名前をお聞きしても？」

「…東北。東北記理子とうほくきりこ…きりたんと呼んでました」

「！」

差し出された当時の写真に写る人物とその名前に思わず目を見開く私とリリイ。そこにはウナちゃんであろう少女と、ワンピースを着て笑顔のきりたんが写っていた。…え？きりたんのルーツが知れたかもしれない、というのはいい。だけど…きりたんは、もう死んでいる？背中に氷を突っ込まれたような寒気が私の身体を震わせた。

とりあえずウナちゃんには連絡先を聞いてから丁重にお帰りいただき、私とリリイは無言で睨み合っていた。

「…おい」

「なんですか」

「お前の相棒の出自は？」

「記憶喪失なので知りません。…ああ、そういえば貴方にはビギンズナイトを語ってませんでしたね」

とりあえず情報を共有するために掻い摘んでビギンズナイトの情報をリリイに話した。

「…きりたんは結局何者なんだ」

「きりたん本人も知らないですよ。何故地球の本棚に入れるのか、何故ダブルの中核になっているのか、何故エクストリームメモリに入る事ができるのか…なにも、わからないです」

「それが今日、実は死んでいましたと聞かされたわけか」

「まさかロストメモリーデイがきりたんのことを歌っている歌だったなんて…きりたんが気に入るわけです」

楽しそうにあの曲を聞いていたきりたんの顔を思い出す。まさか自分のことを歌った曲とは夢にも思わなかっただろう。

「で、どうするんだ？きりたんに話すのか？」

「…そりゃあ、黙ってるのは駄目でしょうよ。でもどうしますかね…まだ依頼を受けたわけじゃないですが、ウナちゃんの依頼には応えたいです…」

「なら気になることがあったな」

「気になる事と言うと？」

「死人が蘇って水都のあちこちに出没してるって噂だ」

「それですか」

まあ事実なのだとしたらドーパントの仕業なのだろう。なにがしたいのかよくわからないが。

「とりあえず調べてみますか。リリイは鳴花ーズで聞き込みをお願いします。私は情報屋たちから情報をもらってきます」

「了解だ。…ってオレはこの調査員じゃないぞ」

「暇なんですよ、手伝ってください。なんならここで働きます？」

「…それもいいな」

「人手が足りないんでいつでも歓迎ですよ。では」

そう言い残して、私はハードボイルダーで水都タワーに向かった。

「死人が蘇る噂、本当らしいですよ。この間、明峰春を街で見かけたって言ってた友達がいきましたし」

「私も沖田君を見ました。怖くて近づけませんでしたが。歩色町の琴葉神社近くです」

「JTR事件の犠牲者の目撃情報ですか…ありがとうございます」

水都タワーでスイーツを食べていたJKコンビからは目撃情報を。

「ネットだと死人を追いかけた先で「夢を買いませんか？」などと言ってくる美女と出会えるっていう噂がありますね」

「夢を買う…?」

「なんでもそれは、超人になれる夢の小箱、だとも」
「！」

相変わらず公園の「金堂」でラーメンを食べていたネルさんからは確信に迫る情報を。

「全ての情報を照らし合わせると琴葉神社が怪しい、というわけですが…」

「まさかゆかりさん、お姉ちゃんを疑ってるんですか!?!」

「どうどう葵ちゃん。うちも死んだお母さんを見たで。葵ちゃんもそんなこと言ってたなあ?」

「私も先日、お父さんを見かけた気がしましたけど…」

琴葉神社の茜さんと、釈放されたいらしい葵さんを訪ねると新たな情報を得ることができた。

「…それ、どこです?」

「コンビニから帰る道の途中。ほら、線路下のトンネルがある道や」
「感謝します」

そう礼を言っつて、いざ向かおうとしたときだった。琴葉家を出た矢先、人気の少ない神社の境内にそれはいた。

「そんな、馬鹿な……」

帽子とペストマスクを被った、着流し姿の初老の男。虚音イフ。おやつさんが、そこにいた。後ろから琴葉姉妹が顔を出す。この二人は、毎年ここに初詣に来ていた他、私が飲み会に誘うなどでおやつさんと顔見知りだった。

「あれ、イフさんや。久しぶりやなあ」

「本当だね、一年ちよいぐらい？…ゆかりさん、どうしたの？」

「おやつさんは…おやつさんは、一年とちよつと前に亡くなってます。この目で見ました…！」

「え!?!」

「本当に、死者が蘇るだなんて…」

死人が蘇る。まさかとは思いましたが、涙が出てくる。あの時失った、おやつさんの姿だ。よたよたと駆け寄ろうとする。しかし謎の衝撃が私の腹部を襲い、蹲ってしまふ。

「ぐっあ…今、のは…おやつさん…?」

おやつさんを見上げると、帽子を手に取りその姿が骸骨男…仮面ライダースカルへと変身。帽子を被り直し、片手で帽子を押さえながらスカルマグナムをこちらに向けた。そんな、な……

「さあ、お前の罪を数えろ」

《ジョーカー!》

「っ……変身!」

《サイクロン!ジョーカー!》

銃撃から琴葉姉妹を守るために咄嗟に変身。きりたんがすぐにメモリを装填してくれたためなんとか防ぐことができた。防いだジョーカーの腕がシューシューと音を鳴らして煙が上がる。なんて威力だ。

「二人とも、屋内に逃げてください!」

「お、おう!逃げるで葵ちゃん!」

「え、あ、うん!」

『ゆかりさん!?何事ですか!?なんで、スカルが…』

「死人が蘇るといふ事件を追っていて遭遇しました。いきなり襲ってきて…私、どうすれば…」

琴葉姉妹を屋内に逃がして、構えるとスカルはスカルマグナムを胸に取りつけて突進、徒手空拳で殴ってきた。咄嗟に受け止め、拳を繰り出すも見えない壁に阻まれて弾かれてしまう。

「なに、が…?」

『スカルの防御力がここまでとは…!ここはエクストリームで…』

「駄目です、おやつさんなんですよ!?!せつかく、会えたのに!倒すなんて…」

『ゆかりさん!しっかりとってください!攻撃してくるんですよ!?!敵なんですよ!?!』

「駄目です、ぐあああ!?!」

再びスカルマグナムによる銃撃が私達を襲う。胸部装甲が爆ぜて煙を立てている。さらに銃撃を浴びる。これ以上は不味い。だけど、頭ではわかってるのに…攻撃することが、できない…!

『ゆかりさん!しっかりとってください、ゆかりさん!こうなったら…!』

《ルナ!》《ルナ!ジョーカー!》

『私がやります!』

するときりたんが右腕を動かしてルナジョーカーに変身。右腕を伸ばして攻撃する。しかし見えない攻撃に弾かれ、手首を掴まれて引っ張られ蹴りを入れられ変身が強制解除されてしまう。

「ぐっ、あっ…」

「……」

意識が薄れる中、そのまま黙って帽子を押さえながら去って行くスカルに、咄嗟に手を伸ばしていた。

「待って、待って!おやっさん!おやっさん…!」

しかしスカルは振り返る事も無く。そのまま私は気を失った。

「ゆかりのやつ、琴葉神社に行くとメールしたきり連絡がないってどういことだ…!」

ビートルフォンでメールが来てないか確認しつつ、ミダスホイーラーで琴葉神社を目指す。アイツに限って大丈夫だとは思うが何かあったのか…?

「っ!」

もうすぐ琴葉神社つてところでそれが見えた。石段を降りてくる骸骨男……仮面ライダースカル。ついさっき、死んだと聞かされたはずの因縁の敵の姿に、ゆかりになにかあったのだと悟る。右手でハンドルを握ったまま取り出したダブルドライブバーNEOを腰に取りつけ、さらに二本のメモリのボタンを鳴らして一本ずつ挿してドライブを展開する。

《ゴールド!》《パイレーツ!》

「変身!」

《ゴールデンパイレーツ!》

そしてエルドラゴに変身しながらミダスホイラーを全速力でスカルにぶつけた……はずだった。

「なんだこれ、受け止められた……?」

スカルの眼前で止められたミダスホイラーから飛び降りて飛び蹴りを繰り出す。しかしスカルはバックステップで回避。スカルマガナムを取り出して乱射してきたので、パイレーツカリバーで全弾叩き落とす。

「あの時の雪辱、晴らしてやる!」

パイレーツカリバーを振り回すと分かりやすく後退するスカル。このまま追い詰めようとしたところで、スカルの姿がぶれた。

「え……?」

スカルの姿がぶれて現れたそれに、思わず剣を寸止めしてしまい。金堂雛菊。今は亡き美しかった頃の母の姿に呆けてしまい、その正体

に気付いた瞬間には胸元にそれが打ち込まれていて。

「くっそ……」

変身解除され力なく倒れ伏すオレを、母の姿をしたそれは冷めた目で見下ろしてそのまま去って行った。なんとか、ゆかりに、あれの正体を……ああ、駄目か。意識が……。

第三十四話：死人の〇／白面金毛九尾の狐

あの日。ビギンズナイト。私のせいでおやつさんは死んだ。それは変えようのない事実だ。あかりに許してもらったとはいえ、この罪は変わらない。

「さあ、お前の罪を数えろ」

あのスカルに言われた言葉を反芻する。その言葉こそ私が言われべき言葉だった。耳を押さえて目を瞑って蹲る。歩み寄ってきたスカルの気配を感じて、恐る恐ると目を開き耳から手をどけると、変身を解いたおやつさんの優しい笑みがあつて。それで思い出した……あのスカルは、ありえない。

「弟子を泣かせた。あたしの最後の罪でごさいます」

「そんな、違います！あれは私の罪で……！」

そう訴えるもおやつさんはほんやりと消えて行って。慌てて手を伸ばすが空を切る。

「おやつさん……、おやつさん！」

「お、起きたみたいやな」

目を覚ますと、見覚えのある可愛らしい部屋のベッドの上で。傍らには茜さんが椅子に座って私の顔を覗いていた。

「ここは……茜さんの部屋ですか？」

「葵の部屋やで。お姉ちゃんのベッドに寝かせるなんてとんでもない、なんて言うてな」

「あ、ですよね……その葵さんは？」

「イフさんを追って行ったら倒れてた金髪の人を客間で介抱中や」

「金髪…？まさか！」

痛む身体に鞭打ち飛び起きて客間に向かう。そこには、青い顔をしたりリイが寝かせられていて沢山の薬を手にした葵さんが途方に暮れていた。

「リイ!? 一体どうしたんですか！」

「あ、ゆかりさん起きたんですか…お知り合いですか？何やっても全然よくならずにどうしようもなく…でもなんかわけありっぽいから医者に連れて行くわけにも…」

「知り合いに医者があります。呼んでみましょう」

スタックフォンで電話をかけたのは、あの病院での事件で知り合い番号を交換した監察医。阪井芽衣子だ。連絡したらすぐタクシーで来てくれた。リイの様子を観察した芽衣子さんは安心させるように笑う。

「大丈夫。弱めの神経毒を受けて麻痺してるみたいだけど命に別状はないよ。胸元に刺された跡があるからそこから何かに刺されて打ち込まれたみたい」

「神経毒…ですか。ガイアメモリの傷は普通の治療では治せないんですか…」

「呼吸も難しくなるからうちの病院で預かろう。どうせ訳ありなんだから？探偵さん」

「助かります…！」

リイは救急車で運ばれ、私は琴葉姉妹に礼を言って、とりあえず蘇った死人の目撃された線路下のトンネルに向かうことにした。

「しかしよくわかりませんね…」

私のトラウマを刺激し、攻撃するだけして去って行ったおやつさん……の偽物、と断定するとして。リリイも恐らく死んだ知り合いを見て油断したところをやられたのだろう。かといって、茜さんや花梨が見た死者は、確かに知り合いではあったが直接的な被害は受けていない。恐らくついていったら夢を買いと称してガイアメモリを売りつけられるのだろう。この違いはなんだ？仮面ライダーを標的にしている……？何故？

「うん？」

スタツグフォンに着信。相手の名前はきりたん。スカルとの戦いで私を守ろうとしてくれてそのままだった。出てみると怒鳴り声が聞こえてきた。

《「ゆかりさん！無事なんですか!？」》

「わ、私は無事です。ですがリリイがやられました。神経毒だそうです」

《「神経毒？スカルにそんな能力ありました？」》

「あと一つ、思い出したんです」

《「思い出したとは？」》

「…おやつさんは死に際に私にロストドライバーを託しました。そして」

《「スカルメモリも私の本棚に虚音イフが入る時に消滅してる……」》

「だから、例えおやつさんが復活したとしても変身するのはありえないんです」

だが幻ではなかった。何度も銃撃を受けたし、謎の衝撃を受けた痣が腹部に残っていた。確かにそこに、おやつさんの姿をした何かがあったんだ。

《「スカルではない何かだったと」》

「さつそく検索したいところですが…今どこですか？」

《「帰りの新幹線の中ですね。横であかりさんが不貞腐れてます」》

「じゃあ検索できそうですね。では……………!？」

茜さんの言っていた線路下のトンネル。そこに、白髪で着物を着た美女が黒スーツ姿でピンクのメッシュが入った黒髪ロングヘアーにサングラスの人物…恐らく「夢を売る」というミュージアムの売人と接触していたのが見えて。ダブルドライバーを装着しながら突撃する。

「駄目です、メモリを買っては！」

「ちゅわ？」

美女が振り返り、その紅色の宝石の様な瞳がこちらを見据えたその瞬間。体が硬直した。な、なんだこれは…？動けない。見れば売人も動けなくなってる。これは重圧…いや、プレッシャー？

「誰かと思えば仮面ライダーの片割れですわね。彼女にとって優先度は低いでしょうが…わたくしに痛めつけられたら別かしら」

「なに、を…」

【ゆかりさん!?どうしたんです、ゆかりさん!？」

震えと冷や汗が止まらない。本能的な恐怖の根源が目の前にいる。こいつは、メモリを買わされる哀れな被害者なんかじゃない。かといってアルテミスやエクスタシー、シャークにホワイトアウトといったミュージアムの幹部でもない、もつと上…!

《「ナインテイルフォックス！」》

ガイドドライバーを取り出し腰に装着。九尾の狐が体をくねらせてNと描かれているゴールドメモリを胸の間から取り出すとキスで

ガイアウイスパーを鳴らし、ドライバーに挿入する白髪の女性。とんでもない灼熱の風が吹き荒れて私は吹き飛ばされて転がり、視線を向けるとそこにいたのは、目を釘付けになるほどの美貌の怪物だった。全身金色の毛皮に包まれ女性らしいフォルムの肢体の上半身を包む、複雑な文様が紅く記されている振袖を思わせる高級そうな蒼い着物。毛皮しか身に纏ってない下半身の臀部から生える九本の黄金の尻尾がまるで鎌首をもたげる八岐大蛇を思わせる扇状に広がり、下駄を履いてる様な足を囲ってドレスの様にも見える。

そして黄金の毛皮の中で唯一白い毛皮の、狐耳が生えた頭部は狐の仮面を思わせ、紅く隈取りされていて歌舞伎役者の様で笑っている様な顔の視線は冷徹そのもの。麦畑を連想させる金毛の腰までかかる長髪が灼熱の風で靡いて太陽にも見える。今までのドーパントとは間違いなく格が違う。

《ジョーカー!》

「くっ…変身!」

《サイクロン!ジョーカー!》

プレッシャーに怯える身体を鞭打って無理やりダブルに変身。しかしプレッシャーはさらに大きくなり、ついには地面が揺れ出した。地震…!?

「これ、は…!?!」

『白面金毛九尾の狐…!?!ゆかりさん、こいつです!こいつがビギンズナイトで私に命令していた「狐」です…!この地震は恐らく、傾国の…!?!』

「こいつが…ミュージアムの首魁…!?!」

「こいつ呼ばわりは失礼ですわね。きりたんはいつからそんな生意気になったのですわ?…ああ、元からでしたわね」

『私を知ってる…?!』

それはつまり、東北記理子を知つてると言う事なのではないか。地震で立っていられず、プレッシャーで動けずなすがままに揺さぶられ頭を打つ。

「ぐうっ…」

「あら、なにもしてませんのにおっちよこちよいですわね」

《トリガー!》《サイクロン!トリガー!》

「立っていられなくても…!」

サイクロントリガーとなりトリガーマグナムから風の弾丸を連射する。しかし九尾が動いてナインテイルフォックス・ドーパントを包み込んで巨大な岩石となり弾いてしまう。

『殺生石!?!』

「これだけじゃありませんわ」

瞬間、九尾が岩石からほどかれて元に戻り、間髪入れず高速で伸びた尻尾が槍の様に尖って私の腹部を貫き持ち上げられる。さらに伸びた残りの八本の尻尾がマシンガンの様に変形し弾丸が連射され、弾は撃ち抜かなかつたものの全身衝撃で打ちのめされてしまったかと思えば、一本が触手の様に変形して首に巻き付いてきた。

「ぐっ…くっそ…!」

「無駄ですわ」

トリガーマグナムを乱射するが他の尻尾が殺生石と化して防御、槍を引き抜かれ苦悶にもがく間もなく上空に投げつけられ、さらに纏まって巨大な一本となった尻尾で叩き潰され上の線路に転がり、何とか立ち上がる。どうやら奴の地震で運行が止まっているらしく、遙か彼方に停車している電車が見えた。

「ぐっあつ……なんて力……!」

『一步も動いていないのに……手も足も出ない……こうなればあかりさんが何とか誤魔化してくれると信じてエクストリームです!』

《サイクロン・ジョーカー!》

「このっ……がああ!?!」

尻尾を足にして線路まで上がってきたナインテイルフォックス・ドーパントに、サイクロンジョーカーになりながら回し蹴りを叩き込むも尻尾が日本刀、七支刀、青龍刀、サーベル、シミター、シヤムシール、フランベルジュ、ハルパー、クレイモアといった刀剣類に一瞬にして変形、纏めて振るわれて斬撃と共に薙ぎ払われてしまう。傷だらけとなったボディで線路に転がり、仰向けで空を仰ぐことになり、空の彼方から飛んできたそれを見た。

「おや、エクストリームメモリですわね」

「……きりたん!」

『はい、ゆかりさん!』

《エクストリーム!》

空から飛来したエクストリームメモリをドライバーに装填。サイクロンジョーカーエクストリームに変身を遂げる。よし、これで……!?

「東北、記理子……それが私の名前……? きりたん、落ち着いてください! ウナちゃんが私の親友……?」

ゆかり
私が手に入れてしまった情報を記憶が統合されたことで確認した
きりたん
私が上の空になってしまい、咄嗟にプリズムビツカーを召喚して構えるも刀剣類のままの尻尾が振り回されて吹き飛ばされてしまう。

「……しっかりしてください!……はっ!?! そうですね、今はこいつを……!」

「甘いですわ」

先端は刀剣類のまま、触手の様に蠢いて縦横無尽に襲いかかってくる尻尾。本体は微動だにしてない。なのに押されている。プリズムサーバーで解析しても、それ以上の動きで襲いかかってくる攻撃に対応しきれない。人間一人の頭脳で処理できる動きを完全に上回っている、まるでダブルの様な…！

「くっ、この…！」

《プリズム・マキシマムドライブ！》

「プリズムブレイク！」

プリズムソードとビツカーシールドで刀剣尻尾を捌きながら本体まで何とか近づき、プリズムソードの鏢部分にあるボタンを押してエネルギーを纏った剣身で刺突する。確かな手ごたえに勝利を確信する。

「残念ながらそれは今切り離れた私の尻尾ですわ」

「なっ!?!」

しかしボフンという音と共に突き刺したナインテイルフォックス・ドーパント…否、尻尾が一本だけの狐のドーパントが金色の尻尾となり、切り離されていたそれを回収した、奥にいた本物が再び九尾となつてたつた今回回収した尻尾を大剣、クレイモアに形成。振り下ろしてビツカーシールドを弾き飛ばしてしまう。

「しまっ…！」

「終わりですわ」

尻尾を全て元の形状に戻して天に伸ばし、先端を雷雲の形状にして九つの紫雷を落とすナインテイルフォックス・ドーパント。ビツカー

シールドが手元にないのでプリズムソードを横に構えて受け止めるが、九つ全部受け止められるわけがなく。全身に雷撃が駆け巡り、あまりのダメージに意識が飛んだ。

「がはっ…」

「究極のメモリもこんなものですか。残念ですわ。それにしても全然現れませんわね、彼女。実験体の在り処を知りたいところなんですわ…ああ、ちようどいいですわ」

「ぐっ!?!」

なにかを思いついたのか一本の尻尾で首を絞められ、持ち上げられてナインテイルフォックス・ドーパントの眼前に引き寄せられる。なにを…!?!

「月読アイ。知ってますわよね? なら教えて欲しいのですわ。彼女が連れて逃がした実験体の在り処を…!」

「実験体…:…なんのこと、ですか…!」

「ちゆわ。知りませんか? 残念ですわ。なら、月読アイが出てくるまで永遠に苦しむといいですわ。聊か不本意ですが、手段は選んでおられませんか」

そう言っつて投げ捨てられ変身が強制的に解除されて私ときりたんがその場に転がるも、ナインテイルフォックス・ドーパントから元に戻った白髪の女性は一瞥してから去って行き。私達は敗北に打ちひしがれるしか、なかった。

「エクストリームまで使うってことは相当な強敵が出たってことや…
所長は置いて来て悪いとは思うが、急がへんと。琴葉神社つて言う
とったな…!」

ディアブロッサで揺れる水都を爆走し、琴葉神社に急ぐ。見れば、
向かってる方面で巨大な九つの何かが聳え立ち、その先端から紫の雷
を落としている光景が見えた。あれか?なんて力や、大地を揺らすほ
どの力はあそこから…!

「っ!」

もう少しで迫り着く、その直前に目の前に飛び出してきたその人物
に、急ブレーキして目を見開く。そこにいたのは、ウェブ・ドーパン
ト…快子が演技していたものではなく、神威岳その人で。噂の蘇った
死人なのかと、ディアブロッサから降りて駆け寄ろうとする。

「岳…!?!」

しかし岳は持っていた刀を回して峰を前にしたかと思えば、目にも
留まらぬ斬撃…否、打撃が襲いかかって全身を打ちのめされる。し
まっ…咄嗟に頭部は守ったが右腕の骨がやられた…!

「剣筋は同じやけど偽物だった奴を知っとるぞ…!」

「…峰打ちだ」

「がっ!」

岳は動きもしなかったのに、首に鋭い打撃を入れられて昏倒する。
咄嗟に岳に手を伸ばすもぬめって滑ってしまい倒れ伏す。くっそ、ま
たうちは…岳を騙る奴なんか…ぐう。無念。

第三十五話：死人の〇／母親か相棒か

あのあと、事務所に帰ろうとしたらついなさんがすぐ近くで倒れていたのを見つけた。その手についていた謎のぬめる液体が気になったものの、骨折や打ち身が酷かったのでリボルギャリーを呼んで事務所に運び込んだ。既にあかりもタクシーを使っていたのか帰っていて、ガレージから私達が出てきて驚いていた。

「うえ!?! ついなさん!?! あんなに元気に向かったのにどうして!?!」

「そんなことはいいから包帯! あとなんか添え木になりそうなもの!」

「よく見たらゆかりさんときりたんもボロボロじゃないですか!?!」

「メモリのダメージは普通の手段じゃ治らないからいいんです! 消毒はした方がいいのでそれも!」

「は、はい!」

ドタバタと救急箱を持ってきたあかりが半泣きでついなさんに治療を施していく。あの役村えんのむらの一件以来仲良くなったから気が気でないのだろう。私ときりたんも互いに消毒液をつけたガーゼを傷口に当てて包帯を巻いて行く。

「…ゆかりさん。ウナちゃんの話、私が東北記理子という名前だということ…本当なんですか?」

「まだわかりません。その可能性があるってだけの話です。でも、ウナちゃんにはまだ話さない方がいいと思います。…何故かはわかりませんけど直感です」

「…まあ私はただのきりたんです。気にしないことにします」

そう笑うきりたん。…本当は知りたいだろうに、無理をして…。しかし東北記理子、東北、か…。水都でも有名な名家の東北家と同じ苗字なのは偶然だろうか。いや、まさかね。

「それより、今回の敵の狙いがなんとなくわかりました。多分、ついなさんを襲ったのは神威岳の姿をしたなにかです。仮面ライダーばかり直接狙われてるのは恐らく、月読アイを誘き出すため。あのナインテイルフォックス…ミュージアムの首魁であろう人物の言葉からここまででは推理できます」

「実験体は何処だってやつですね」

「やっぱり、そういうことだよね」

「!?!」

いつの間にか入り口を開いて立っていた少女に私ときりたんとかりの驚愕の視線が注がれる。何時の間に。

「貴方が月読アイですか…?」

「そうだよー、できそこないのきみとはこえだけだからはじめましてだね」

「できそこなっ……」

「だってやっぱり、ナインテイルフォックスにはかなわなかったじゃん。プレッシャーにもかんぜんにまけていたし」

「ぐっ」

言い負かされて落ち込む私。いやでもできそこないはひどくないですか…?しかも蔑む様な視線は辛い。私がかきましたか…?いや、「狐」に手も足も出ませんでした。誰だってああなると思うんですけど。

「月読アイ。貴方が連れて逃げ出したという実験体は、「狐」に渡さない方がいいんですね?」

「うん。だからきりたんだらうとおしえられないし、わたしは「狐」のまえにはでられない。たとえついなやリイがしんでも」

「貴方は私のなんのですか。私の何を知ってるんですか…!」

気にしないとは言った物の、答えを知ってそんな人物の登場に焦ったのだろう、問いかけたきりたんに、月読アイは困った様な表情となり。

「…んー、ははおやっていったらしんじる？」

「え」

「!?」

「は、母親!？」

その一言に固まる私達三人。きりたんなんか驚きすぎて固まっちゃってる。いやでも、どう見ても童女………初峯弥美っていう老婆なのに20代みたいなた姿って言う前例がいたか。あれはたしかフレンジーのガイアメモリの影響で恐らくハイドロープみたいなもので……あ。

「もしかして、ガイアメモリの影響ですか？」

「のーこめんと。もしかしたらウソかもね？」

「いやダブルドライバーやアクセルドライバーやダブルドライバーN E Oにメモリを作った人がただの幼稚園児なわけが…」

「のーこめんと!」

裾をひらひらさせながらそう言う月読アイ。すると目をグルグルさせていたきりたんが正気に戻り、おずおずと尋ねてきた。

「あ、あの……父親なら遠祢照や木偶蔵さんでわかりますけど、母親とは……なんなんでしょうか」

「え」

「え」

まさかの言葉に固まる私とあかり。いや記憶喪失ならなおさら自

分で調べているものと…。

「あー…やっぱり「家族」にカギがかかってるよね。ワンちゃんいうことをきいてくれるかなーとおもったけどあまかったかー」

「カギとは…?」

「きりたんは「家族」を知ることができないと…?」

「狐」のしわざだね。…いや、せいにかくにはアイツか。……いい? 結月ゆかりときりたん、ふたりのダブルじゃぜつたいにニンテイルフォックスにはかてない。かちたいならわるいことはいわない」

頭を抱えるきりたんと、寝たきりであかりに介抱されるついなさんに視線を向ける月読アイ。なにを…。

「きりたん。結月ゆかりとはわかれなさい」

「え?」

「そんな勝手な…!」

「ダブルはもともとニンテイルフォックスにかつたためにつくったもの。きりたんとイフがいつしよにへんしんすることをみこしていたのに、結月ゆかり。きみのせいでイフがしんだばかりか、きりたんのしんようをかちとつてしまった。しようじきいつて、めいわくして」

「っ…!」

怒っているかのような月読アイの視線に、あの時見た夢を思い出す。おやつさんが許してくれているなんて私の願望でしかない。その事実を突きつけられた様な気がした。

「ニンテイルフォックスは「恐怖」をうえつける。その「恐怖」はねづいてえんえんとむしばみ、たちむかえなくなる。たとえ、たちむかえたとしてもほんりようをはつきできない。だから「凡人」の結月ゆかりじゃかてないんだ」

「恐怖…そんなもの、誰も勝てないじゃないですか！」

「だからわたしはきりたんのあたらしい「相棒」としてついなちゃんをえらんだ。「復讐」のちからはなによりもつよい。「強い精神力」と「強靱な肉体」、「どす黒い復讐心」をやどしていたついなちゃんとダブルになればさいきょうのダブルがうまれる。そうかくしんしていた」

だからついなさんにアクセルドライバーやらを渡した、と。…フレンジーの時のきりたんの判断は正しかったのか。

「エクストリームメモリのしゅつげんできりたんの「力」がつよくなって、バランスがくずれてきりたんからついなちゃんにもうしてたまではよかったのに…結月ゆかり、おまえについなちゃんはえいきょうされて、じぶんからことわってしまった。そればかりかきりたんと結月ゆかりでサイクロンジョーカーエクストリームにまでいたってしまった」

フレンジーとサーカスの時の…あれですか。

「…だからわたしはあきらめて、ナインテイルフォックスにたいこうできるせんりよくをふやすことにした。「強い精神力」をもつてるにんげんならダブルのたたかいを見てめぼしはついたからね」
「それが仮面ライダーエルドラゴ…リリイですか」

舌足らずな説明で話が見えてきた。つまり私は、月詭アイの計画の想定外。「凡人」が首を突っ込むなど、そういうわけだ。

「わたしは「アイツ」にすべてをうばわれた、ぜったいにふくしゅうしてみせる。そのために「実験体」をわたすことはできない。サイクロンアクセルエクストリーム、それがナインテイルフォックスにたいこうできるゆいいつのちからだとこんかいかくしんした。だからきりたん、結月ゆかりとはわかれてついなちゃんと…」

「嫌です」

「きりたん…」

月読アイの訴えに、真っ向から拒否するきりたん。それに狼狽える月読アイ。まさか断られるとは思わなかったのだろう。

「なんで、わたしは、きりたんのために…」

「決まっています。私の相棒はゆかりさんだけです。虚音イフは恩人ですし、ついなさんは仲間ですが、ゆかりさんとは比べ物になりません」
「それはカツコウみたいなものだよ。たよれるあいてが結月ゆかりしかいなかったからにすぎない」

「そんなの関係ありません！「今の私」は、ゆかりさんを必要としている。例え貴方が私の母親であつても、ゆかりさんと別れるだなんて言葉に頷けるわけがありません！」

「…でも、ナインテイルフォックスにかてないよ？結月ゆかりじゃ、ぜっつたいに」

「勝ちます。次こそは勝つて見せます。私達は二人で一人の仮面ライダーですから！」

そう断言するきりたんに、怯む月読アイ。私も頷き、きりたんと並び立つ。

「そうです。諦める理由にはなりません。恐怖が相手だと言うのなら、克服して見せます」

「…そのまえに「実験体」をかくほされたらおわりだよ。ミュージアムのもくてきがたっせいされる」

「ならなおさら、あなたは出てこないでください。「実験体」を隠し通してください。今回の事件に誘き出されることは駄目です」

「そのつもりはもともとないけど…イフのトラウマにおびえている結月ゆかりにかいけつできるかな？」

「いえ、今の私にはきりたんがいます。きりたんの相棒として、おやつ

さんの影を乗り越えるまでです」

そう宣言すると、月読アイは初めて私を見て、溜め息を吐いた。

「…いまのきりたんにとっては「母親」より「相棒」のほうがだいじ、か。ざんねんだな」

そう言っつて月読アイは背伸びして扉を開けて出て行った。…色々衝撃的でしたね。

「さあ、ゆかりさん。検索を始めましょう。まずは今回の事件を解決するのです」

「了解です。ついなさんとリリーの仇を取りましょう」

白紙の本を手に目を瞑るきりたん。全幅の信頼を寄せてくれているのだと思うと嬉しくなる。

「まずは「偽物」です」

「ダミー、などが出てきましたね」

「強そうなメモリですが、多分違います。次に「神経毒」がキーワードです」

「毒で幻覚を見せる、などもあるかもですね」

幻覚には見えなかったし、確かに実体があった。ダミーもあるかと思いますが、だとしたらわからないことがひとつ。恐らく神威岳の偽物だったのに、ついなさんには打撲痕しかなかったこと。つまり…斬撃は使わなかった、いや使えなかった。

「最後のキーワードは…「ぬめり」です」

「ビンゴ。わかりました、敵のメモリが」

そう言つてガレージのホワイトボードに書いたその名の頭文字は「O」。その答えを聞いて納得する。…ついなさんとリリイが命懸けで得た手がかりが繋げてくれました。

「行きましょう。恐らく今もドーパントは月読アイを誘き寄せるために私達を襲うはずです。死者を歩かせて噂を流して誘き寄せてくるはず」

「どうやらその人間に関係する死者を利用しているみたいですが…恐らく、私達の関係者に噂を流させるはずです」

「だとしたら…リリイの治療をした阪井芽衣子さん、が恐らく狙われますね。電話してみましよう」

連絡するとすぐ繋がる。あの人には珍しく慌てた声が聞こえてきた。

《「探偵さんかい!? 今、院内でラピスを見て…」》

「やはりですか。今すぐ行きます」

「水都総合病院ですか。…ウナちゃんがいませんように」

「いや本当にそう」

祈りつつ、私はきりたんを後部座席に乗せたハードボイルダーを駆って水都総合病院に向かった。

第三十六話：死人の〇／見えざる敵の正体

きりたんを後部座席に乗せたハードボイルダーで水都総合病院までやってくると、屋上の給水塔の上に佇むおやつさんの姿が見えた。ペストマスクで表情は見えないがこちらを見つけたようでその姿をスカルに変えるとスカルマグナムをこちらに向けて乱射してきた。

「いました！まさか撃つてくるとは思いませんでした！」

「デンデンセンサーで見ました！やはり口から弾丸を飛ばしています！」

そうなのだ。あの時はきりたんが大阪からの帰り道だったので使えなかったが、デンデンセンサーで正体を探ることができたのだ。奴はおやつさんの姿に「擬態」している。神経毒を持ち、ぬめりがある擬態できる生物。ついでに言えば遠距離攻撃は吹きかける墨、見えないう壁が奴の身体、不意打ちでもらった攻撃は恐らく触手。つまりは。

「オクトパス：誰だか知りませんが絶対に許しません」

「単純明快故にわかりませんでしたね」

「とりあえず私が行きましょう」

《メタル！》

「私の身体はエクストリームメモリに回収してもらいます」

《ルナ！》

「変身！」

《ルナ！メタル！》

ルナメタルに変身、同時にやってきたエクストリームメモリがきりたんを回収。メタルシャフトを伸ばして屋上まで一気にやってくる。そこには仮面ライダースカルの姿が…。デンデンセンサー越しに見てみると、そこにはタコをカツラの様に被って目元を隠した女性的なフォルムの、艶かしい触手の怪人がいた。

『擬態を解くには例の方法です!』
《トリガー!》《ルナ!トリガー!》

ルナトリガーに変身して右腰のスロットにルナメモリを装填。掌にルナの力で作り出した光球を出現させる。

《ルナ!マキシマムドライブ!》
『トリガーシャインフィールド』

光球を握り潰すことで粒子として周り一帯に散布。散布された領域内にいる目に見えない、または捉えきれない相手を感じできる索敵専用の裏技だ。粒子を受けて輝き出す蛸怪人のシルエットをしたスカル。自分の現状に気付いたのか、スカルの擬態を解いて姿を現した。頭のタコだけピンク色の、あとは全部真っ赤なぶよぶよしている触手の肉体。両手の五指はあるが足はハイヒールのような形になっているものの触手だ。

「なぜ、私の事を…!」

「ついなさんが残した手がかりで正体に辿り着きました。オクトパス、スカルに化けていたことからミュージアムの関係者ですね?」
『スカルの情報を知るのは私達以外にはミュージアムしかありませんからね』

「ついでに言うなら、ナインテイルフォックスと戦う直前に出会っていた…あの売人が貴方でしょうか」
「(一)明察よ」

そう言ってメモリを引き抜くオクトパス・ドーパント。現れたのは男物の黒スーツを身に着けたピンク色のメッシュが一房入った黒髪ロングヘアアの美女だ。首元の赤い斑点がついた白いスカーフは売人の特徴だ。

「私はガイアメモリ売買成績二位、巡寧瑠夏めぐりねルカと申します。お見知りおきを」

「名前まで名乗るとは…逃げ切れるとでも?」

「いえいえ。ここで貴方達を潰すっていう表れよ。正々堂々するつもりは毛頭ありませんけど?」

《オクトパス!》

タコが触手で丸を作つてOと描かれているメモリを鳴らし、ぐわつと開いたシャツの胸元から覗く豊満な胸に刻まれた生体コネクタに挿入する巡寧瑠夏。コネクタから噴き出した煙幕に包まれるようにしてオクトパス・ドーパントに変身。いちいち扇情的だな。胸がない私への当てつけか、ドーパントの姿でも巨乳であつてからに。

「やれるものなら!」

トリガーマグナムを構えて連射。六発放たれた誘導弾は奴の周りを一周してから速度を増して、一斉にその全身に炸裂。しかしぐにやんと歪んだかと思えば全弾弾かれてしまう。

「私の軟体の肉体にその程度の攻撃、通じるはずもないわ」

そう言つて跳躍し、毒々しい黄色い液体…恐らく神経毒の滴る爪のついた右腕を振るつてくるオクトパス・ドーパント。バックステップで回避してトリガーマグナムで殴りつけるがぶよんつと弾かれてしまう。さらに右腕を屋上の床に突き刺して身動きが取れないオクトパス・ドーパントに追撃を仕掛けようとしたが、髪の毛を形成している蛸の八本の足が蠢いて殴りつけられる。

「がはっ…普通に戦つても強いのは聞いてませんが!」

『多彩な能力を持つメモリです、油断しないように!』

「ちよつと忠告が遅い…ぐあああああ!？」

さらに腕を引き抜いて立ち上がったオクトパス・ドーパントが口から真つ黒い球体を吐き出し、それは胸部で爆せて大爆発。大きく吹き飛ばされてフェンスに背中から激突する。墨の爆弾…!？」

「これがスカルの銃撃の正体ですか…!？」

「ご明察。威力を下げて撃つただけで、隠す必要がないのならこれぐらいの威力を出せるわ」

「ならばタコ焼きにしてやります!？」

《メタル!》《ヒート!》

《ヒート!メタル!》

ヒートメタルに変身、メタルシャフトを振るうが、オクトパス・ドーパントは宙返り。着地したところを狙おうとするが、オクトパス・ドーパントは足の吸盤で出入り口の壁にくっ付いてメタルシャフトは空振り。そのまま頭部のタコ足による連続ビンタを受けて後退すると、今度は真つ黒い煙幕を吐いて屋上を包み込んだ。

「なにを…!？」

「今の感触、防御力に特化した姿の様なので。私は力押しが苦手だからじわじわと甚振ってやろうかと思ってるね。仮面ライダー、一般人を殺されたくなければ私を見つけてみなさい」

「待て!？」

シユルルルという滑る音が聞こえて。慌てて出入り口に入ると腹ばいになって階段を滑り降りて行くオクトパス・ドーパントの姿が。まさか病院にいる一般人を無差別に殺害する気ですか…!？」

《ジョーカー!》《サイクロン!》

《サイクロン!ジョーカー!》

さすがに屋内で長物を扱う訳にはいかないので、サイクロンジョーカーに変身。メタルの防御力じゃないと対抗できないのをわかっていてシャフトを使えない屋内に：頭の回る奴ですね。一階まで降りると、何十人もごった返す一般人の間を縫って廊下を高速で滑走するオクトパス・ドーパントを発見。襲わせるわけにはいかないと、走る。

「仮面ライダー!?!」

「きやあ!?!ナニこれ!?!」

「うわああああ、化け物だあ!?!」

廊下にいた人々は大混乱。押し寄せてくる人波を優しくどかして追いかけてようとするが、ロビーでオクトパス・ドーパントの姿を見失った。

「消えた!?!」

『ウインディスタビライザーが反応しないってことは透明にはなっていない。どこに…?』

「え、きりたん?」

『え』

聞き覚えのある声に振り向くと、そこには検診に来ていたらしい音街ウナちゃんがいて。右半身のきりたんが固まってしまった。何てタイミングで：しかも声ではれた!?!普通、顔と声を合わせて認識するものですよね!?!

「きりたん、私だよ、ウナだよ。何で仮面ライダー…?」

『いや、あの、それは…』

「危ない!」

間一髪。ロビーに座っていた入院着を着た老人の頭上から黒い球

が発射され、咄嗟にウナちゃんの前に出て受け止める。立ったまま座った老人に擬態するなんて小癪な真似を…！

「…のー！」

ウナちゃんを庇いながらハイキック。しかし正体を現したオクトパス・ドーパントの肉体にぶよんと弾かれ、ウナちゃんと一緒に倒れ込んでしまう。

「一般人を守らないといけない仮面ライダーは大変ね」

さらにはオクトパス・ドーパントは宙返りして天井にくっ付き、私やウナちゃん、さらには周りの患者や看護師にドクターまで、八本の触手で首を締め上げて持ち上げるオクトパス・ドーパント。変身している私でも苦しいってことは、ウナちゃんを始めに他の人々は失神間近だ。不味い。

「さあ仮面ライダー、守ってみなさい守れるものならね！」

「くっ、関係ない人まで巻き込んで…！」

『ウナちゃん…！来てください、エクストリーム！』

するときりたんの呼び声に応えて自動ドアのガラスを突き破りエクストリームメモリが飛来。高速で飛び回って人々を締め上げている触手を斬り落として解放すると、私の伸ばした手に収まる。

「いったあ!?なに!?なんなの!?!」

『エクストリームで勝負です！』

《エクストリーム!》

そしてダブルドライバーに装填して展開。プリズムサーバーを開いてサイクロンジョーカーエクストリームに変身。

「なんだ、首領様にボコボコにされてた姿じゃない、爆ぜなさい！」
「プリズムビツカー！」

天井からオクトパス・ドーパントが墨爆弾を放ちつつ、それをカモフラージュに飛び降りて爪で攻撃してきたが、左手を掲げて顕現したプリズムビツカーで受け止め、弾き返す。

「斬撃に対抗できますか？」
《プリズム！》

ビツカーシールドからプリズムソードを引き抜いて、振りかざしていたオクトパス・ドーパントの左腕を手首から切断。しかし瞬時にニョキツと生えて再生した。よく見ればさつきエクストリームメモリに切断された触手髪も再生している。

「タコは再生能力を持つてるって知ってたかしら！」
「解析完了。もう手品は通じません！」

伸ばしてきた触手髪に、プリズムエネルギーを纏った斬撃で迎撃。伸びてくる触手をズバズバズバ斬って行く。そのうち再生しないことに気付いたオクトパス・ドーパントはざんばら髪状態になってしまった。

「なんで、このメモリは一般メモリの中でも最強なのに…!？」
「プリズムソードは解析済みのドーパントの能力を無効化します。全てのタコの力を有しており、物理攻撃を無効化する軟体、擬態、触手、吸盤、煙幕、墨爆弾、神経毒の毒棘、再生能力といった多彩な能力を持つ貴方にとって、エクストリームは天敵です」

「くっ……こんなところで負けるわけには…首領様の命令をこなさない、殺されるのよ……！」

周囲の光景に擬態しながら煙幕を吐いて逃走を図るオクトパス・ドーパント。プリズムソードで煙幕を斬り裂くと、自動ドアが閉まるどころだったので外に逃げたと判断。追いかける。

「私はこんなところで終わる器じゃないのよ……!」

すると庭で待ち構えていたオクトパス・ドーパントの下半身が膨れ上がり、10メートル以上の巨大なタコの下半身を持つ怪物へと変貌。本体は10メートル以上もの上から墨爆弾を乱射し、巨大なタコ足で踏み潰そうとしてくる。ビッグオクトパスとでも呼ぼうか。

「来て、リボルギャリー!」

停めていたハードボイルダーに乗り込み病院の敷地内を爆走。追いかけてくるビッグオクトパスのタコ足と墨爆弾を避けながらスタッグフォンを操作してリボルギャリーを呼び出す。

「これならどうかしら!」

するとその巨体で透明に擬態してくるビッグオクトパス。ウインディスタビライザーが無いので察知することはできず、ハードボイルダーごと見えないタコ足に蹴り飛ばされて病院の壁にクレーターを作りながら激突。そのまま落下し、倒れ伏す。

「やりますね…だがでかいと見えなくても当てれますよ!」

「なに? ギャアア!」

するとリボルギャリーが到着。体当たりでビッグオクトパスを転倒させたらしく擬態が解かれて巨体が倒れ伏すもすぐに立ち上がる。本体に攻撃を決めれないとメモリブレイクは難しそうですね。とり

あずハードタービュラーで…と、リボルギャリーを展開すると、そこには見慣れないマシンが収まっていた。

「これは…たしかついなさんの、ガンナーA?」

尋ねると手?を上げて挨拶するガンナーA。そう言えば互換性があるのかないとか以前言ってたような…ならば!

「貴方の主人の仇を打つためにも、力を貸してくださいガンナーA!」

ハードボイルダー車体後部をガンナーAに換装。砲撃形態ハードガンナーとなったそれを操り、大砲を浴びせてダメージを与えて行く。

「私はまだ、死にたくない…!」

するとタコ足をバネの様にして大跳躍。空に舞い上がるビッグオクトパス。本体下部についている牙の生え揃った口で磨り潰す気なのだろう。ならばと私はハードガンナーから飛び降りて取り出したプリズムビツカーの四隅のスロットにメモリを装填。

《サイクロン!マキシマムドライブ!》《ヒート!マキシマムドライブ!》《ルナ!マキシマムドライブ!》《ジョーカー!マキシマムドライブ!》

プリズムビツカーの中心に七色のエネルギーが集めてからプリズムソードを引き抜いて、ビツカーシールドをハードガンナーの砲口に投擲。そのままビツカーシールドに飛び乗るとハードガンナーがビツカーシールドを射出。空飛ぶビツカーシールドに乗った私は宙に舞い上がり、ビッグオクトパスの本体に肉薄する。

「こ、来ないで?! 私に近づくなあああああ!?!」

「『ビツカーチャージブレイク!!』」

すれ違い様に七色のエネルギーを纏ったプリズムソードを一閃。ビッグオクトパスは地上まで撃墜されて爆散。アスファルトに巡寧瑠夏と碎け散ったメモリの残骸が転がり、私達も無事に地上まで降りる。

「私は、まだ、まだ…首領様の、期待に……」

「さあ、お前の罪を数えろ」

「…ぐう」

ボロボロの巡寧瑠夏はメモリの残骸に手を伸ばしていたが、私が指を突きつけて宣告すると、力尽きて気を失った。

サイクロンジョーカーエクストリームのまま、ハードボイルダーに乗って帰路につき、ガレージで変身を解除して二人に戻る。偽物事件の犯人はミュージアムのメモリ売買人でしたか。厄介な相手でした。これでリリイとついなさんの傷の回復は早まるはずです。

「…ん?」

「どうしました、ゆかりさん?」

メモリ売買……思い、出した。星香さんと初めて出会った時。なんて名乗った?

「私、東北星香といいます。ここを知ってるとは貴方も通なんですねえ」

「私は探偵の結月ゆかりです。東北…という水都の名家の？」

「お恥ずかしながら。養子に入れてもらい営業部長をやらせていただいています」

東北、星香。水都の名家、東北家の養子。今の今まで気付かなかつた、いや、気付かないようにしていた。ミュージアムは東北家だ。…東北記理子。まさか、まさか。

「…きりたん。貴方の名前が東北記理子だと言うのなら…」

「おそらく、ミュージアム…東北家は、貴方の家族です」

「…え？」

信じられないと言わんばかりの表情で固まるきりたんに、私はそれ以上言葉を告げることはできなかつた。

「きりたん…生きてたんだ。よかつたけど、なんで…」

そして。今回の事件できりたんの生存を確信したアイドルが拳を握りしめていたことを、私達はまだ知らない。

第三十七話：Fへようこそ／ミュージアムの依頼

「東北家がミュージアムだとわかったのはいいですが…」

「私、家族に殺されかけたんですか……」

「ううっ、事務所の空気がどんよりしてますう…」

「オレなんか部下に裏切られたぞ、元気だせ」

アレから数日。きりたんがずっと落ち込んでいて、私とあかりとリイの三人で慰めている。そうなのだ、オクトパスの毒から復活したリイをあかりが雇ったのだ。あのナインテイルフォックス：調べて分かったが東北家の家長である東北至子と、姉弟の一人であろうアルテミス・ドーパントやエクスタシー・ドーパントに殺されかけたことを引き摺ってるらしい。

「し、知らなかったかもしれないし……」

「いやアルテミスは変身した瞬間見てたので知ってるはずかと…」

「アルテミスなんか戦闘ヘリまで使ってたんですけど…」

「……いやでもまさか、家族への情がないなんてことは…」

家族のことを検索できないせいかな家族の定義が分からず不安になっていくようだ。言わない方が良かったかもしれないがエクストリームになると記憶が共有されるので今のうちにと思ったが…。

「私、家族に愛されていないんでしょうか…」

「家族が愛されないなんて、ありえませんかよ!」

「…少なくとも、アルテミスは愛していると思いますよ」

「なんでですか」

「だって、手加減してましたもの」

ダンデライオンの時に知ったが、彼女は獵犬を操る能力があるらしい。それを初戦で使ってこなかった。ついでにいうとおやつさん：

スカルと戦った時に比べて、私達と交戦した時は威力が低かった気がする。そういう旨をきりたんに伝えると幾分か明るい表情となった。

「…今度幹部と会ったら直に話そうと思います」

「あ、それなら東北星香さん…シャーク・ドーパントはやめておいた方がいいかと。彼女、養子らしいので」

「あ、なら私とは血縁じゃなさそうですね…」

「星香つつーと、あの売人か。私もマネーとかエルドラドとか買ったな」

「その節はご購入ありがとうございます」

「おーおー、感謝しろよ………ってえ!」

「…いつの間に!?!?!」

いつの間にか事務所の入り口に立っていたスーツ姿の女性に驚く私達。件の人物、東北星香がそこにいた。

「まさか攻め込んできたんですか!」

《ジョーカー!》

「二位とか言ってたオクトパスを潰したんです、当然ですね…!」

《サイクロン!》

「決着をつけたら受けて立つぞ」

《ゴールド!》《パイレーツ!》

「あわわ、事務所で暴れないでください!修理代が!」

あかりが慌てる中でドライバーとメモリを用意する私達。しかし星香さんは手を上げて困り顔となる。

「戦う気はないから勘弁してください。今回は完全に依頼人としてここに来ました」

「依頼人?」

「あとオクトパス潰したことについては文句ないです、むしろありが

とうございます」

「相変わらず淡白だなアンタ…」

「ちなみにもし私から定期連絡がない場合、今現在ブチギレてる至子様が大暴れするのでござ承ください」

「至子…東北至子、ナインティelfフォックスですね」

「それで、何を依頼しに来たんですか？」

客ならしやうがないので警戒しながらも客席のソファに案内する。リリイが隣に立ち、正面に私とあかりが座り、その横できりたんがファンングを肩に乗せ、エクストリームメモリを頭上に浮かばせて睨み付ける。完全警戒態勢である。何故って相手は敵の幹部だ。いくら警戒しても足りない。

「なんか動いただけで首スパってされそうなので単刀直入に言います」

そう言つて懐に手を突っ込む星香さん。メモリを出すのかと思つたら違った。二枚の写真だった。濃い緑に染めたロングヘアに枝豆を模したカチューシャをつけている金色の目の女性と、双葉の様な奇妙な髪型の黄緑色の髪の中性的なニコニコ笑つてる中学生ぐらいの子供。少女の方は見覚えがある。ずんだ広報アイドル、ずん子として有名な街のアイドルの一人だ。

「東北純子様と東北蛇門様…至子様の実妹と実弟である二人の行方を探ってもらいたい」

「！」

それはつまり、きりたんの家族の搜索依頼だった。

「なるほど、アルテミスとエクスタシーの二人ですか……私達が敵である貴方たちの依頼を受けないといけない理由は？」

「今の至子様は家族を失ってなにをするかわかりません。端的に言うなら、水都壊滅の危機です。水都を愛する者としてそれは嫌だ。なのでわざわざ至子様提言してまで敵である貴方方に頭を下げて来たのです」

それは……不味い。端的に言ってナインティルフオックスは簡単に水都を滅ぼせるだろう。きりたんとりリイ、あかりと顔を見合わせる。特にきりたんは家族が行方不明と聞いて無意識だろうか、心配した顔を浮かべていた。誰も否定的な顔はしていなかった。リリイなんかは「引き受けろ」と言わんばかりに不敵に笑っている。

「……わかりました、その依頼。引き受けます。詳細をお願いしますか？」

「助かります。あれは純子様と蛇門様の趣味に付き合っただけで現在放映中のハイパー戦隊シリーズ最新作「声月戦隊ボイスターズ」の映画を見に出かけた数日前のことです。どこの映画館に行っただけはわかりませんが、何時まで経っても帰ってこず……至様様の能力の一つである「尻尾」に何も反応せず、組織を総動員して町中を捜したのですがどこにもいないのです」

「……ミュージアムを裏切って水都から逃げ出したという可能性は？」
「ありえません。純子様は至様に逆らうことはできません。「アルテミス」と「エクスタシー」……ゴールドメモリの中でも特に強力なこの二つを与えるぐらいに、家族を失うことを極端に怯えている至様様を捨てて逃げる事なんてありません。それは五年間見てきた私から見た感想ですが。そもそもろくな荷物も持たずに出かけてるのですよ？口座のお金が使われた形跡もないとの報告も受けています」

ちよつとだけ情報が開示されたな。東北至子は家族を失うことを恐れている。それにきりたんが関係してるんじゃないだろうか。きりたんだらうと容赦なく攻撃していた矛盾があるが。

「なるほど…ちなみに誘拐だと仮定して、身代金の要求などは？」

「ありません。東北家の人間だと知って襲ったのか、それとも事件に巻き込まれたのか…少なくとも第三者が関与している可能性が高いです」

「そんなことができるメモリは？貴方は売人でしょう」

「山ほどあるので断定はできません」

「それはそうだろうな」

リリイが納得した声を上げる。まあ売人である星香さんと、メモリ界限に詳しいリリイが言うならそうなのだろう。

「わかりました。なんとか捜してみます。その代わりこちらも知りたい情報を一つ」

「なんででしょうか。貴方方の腕は信用してるので前払いでお教えしましょう」

「…東北記理子の情報を知りたい」

「ゆかりさん!？」

驚くきりたんを手で制して星香さんを見つめる。なんだろう、なんでそんなことを？というピンとしてない顔だ。この違和感は…なんだ？

「東北記理子というのは10年前に亡くなった至子様と純子様の妹で蛇門様の姉である東北家の三女のことです。当時は小学五年生だったとか。そう言えば以前見せられた写真とそこの子供、似てますねあれ？」

どうやらきりたんが東北記理子だとは気付いてないらしい。…つまり、一部の幹部にも知らされてない情報だと言う事だ。どうにもきな臭い。それがわかったただけでも収穫だ。

「ありがとうございます。それを聞いただけで満足です」

「そうですか。ではよろしくお願いします。なにか報告があれば例の埠頭に来てください」

「承りました」

一礼して去って行く星香さん。すると入れ替わりについてなさんがやってきて、すれ違った星香さんのスカーフを見て驚いた表情を浮かべていた。

「おいゆかり。今の…」

「ミュージアムの売人です」

「…ゆかりたちに限ってそんなことはないやろうけど…なにがあったんや?」

「水都を滅ぼされたくなければ行方不明の幹部二名を捜してほしいんですと」

「はあ?」

かくかくしかじか。事情を話す。すると事の重大さがわかったのか神妙な顔となった。

「話は分かった。うちも個人的に調べるわ」

「助かります。私達も聞き込みしましょう。きりたんは…」

「私も行きます。…姉と弟を襲った犯人がいるのなら許しておけない」

「…わかりました」

不安定なきりたんは私が連れて、全員出動となった。

「CINEMA T―ジョイ水都？それって歩歌路町の映画館ですか？」

「うん。一緒に来た友達が帰り道でいなくなったりするんだって」

「映画館に行って行方不明の人を捜してるならそれかなーと」

JKコンビから聞いたのは、とある噂。CINEMA T―ジョイ水都という映画館で映画を見た帰り道、連れがいなくなるらしい。

「どう思いますか、きりたん」

「調べてみる価値はありますね」

「あ、メールです。ついなさんも行方不明者届から辿り着いたようで先に向かっているとか」

「リリースとあかりさんに連絡してから私達も向かいましょう」

別行動中のリリースとあかりに、CINEMA T―ジョイ水都に向かうことをメールで送り、私はハードボイルダーの後部座席にきりたんを乗せて歩歌路町の商店街に向かった。

CINEMA T―ジョイ水都。歩歌路町の商店街にある小さな映画館だ。歩色町にでかい映画館があるのでちよつと寂れてしまっているが数年前までは水都にここしか映画館が無かったために繁盛

していた場所だ。今では穴場の映画館として知られている。

「こんにちは。館長さんでいらつしやいますか？」

「いや、私は映写技師見習いの桐谷洗きりやといコウいます。館長は不在でして…」

事務室を訪ねるとハスキーボイスでいろんな色のメツシユを入れた茶髪の女性が顔を出す。どうやら館長は不在らしい。きりたんと顔を見合わせる。

「継星探偵事務所のもんです。行方不明者を捜しているんですが…えっと、館内を調べても？」

「いいですよ。警察の方も来られてなにもなくて帰って行きましたけど」

「ん？あ、そうなんですか。でも一応…」

ついなさんは既に来て帰ったのか。教えてくれればいいのに。きりたんを連れてトイレや映写室と調べて行く。この映画館に行方不明者がいるならどこかに隠していると思っただが…

「でも、ナインテイルの「尻尾」とやらで水都のどこにもいないって話でしたよね」

「そうでしたね。気配を感じないととかだとすると、ドーパントの力で閉じ込められているかもしれない別の街に連れて行かれたか…」

「ここで犯行が行われたなら痕跡が…うん？」

客席までやってくると、きりたんが何かに気付いて座席の下を覗きこむ。私も見てみると、そこには見覚えのある鬼の面が……つて！

「これ、ついなさんの？」

「なんでここに……ゆかりさん！画面の方に！」

きりたんに言われて振り向くと、画面の目の前にそれはいた。まるで複数の本棚が組み合わさった様な上半身で、ひよろりとした手足が伸び、正面に開いて目が描かれた本の様な顔が浮いているという異様な怪人。よく見れば本棚には「人魚姫」や「赤ずきん」「不思議の国のアリス」「ヘンゼルとグレーテル」「北風と太陽」といったお伽話の名が並んでいて。

「フェアリーテイル…？ 貴方が行方不明事件の犯人ですか!？」

「ご明察！メモリを知っているなら話は早い。君達も私の映画にご招待しよう！」

「生憎と私は絵本よりは推理小説が好きでして。遠慮します」

《ジョーカー!》

「誘拐した人達をどこに隠したんですか!？」

《サイクロン!》

「変身!」

《サイクロン!ジョーカー!》

きりたんが座席に倒れ込み、私達はダブルに変身。殴りかかるとフェアリーテイル・ドーパントはまともに攻撃を受けてゴロゴロと転がる。

「あれ？弱い…？」

「いたた…よくもやったな！お前もあの赤い仮面ライダーと同じように苦しめてやる！開け、絵本の扉！」

するとフェアリーテイル・ドーパントは自分の顔を両手で掴むと前に突き出した。すると顔の本がパラパラと勝手に高速で捲られ始めてその風で引き寄せられていく。なんとか座席に掴まるも、勢いが凄まじくて逃れることができない。

「ぐっ、これは!？」

『これが何人もの人間が行方不明になった原因…!？』

「っ、きりたんの身体が!」

風の勢いは強くなり、座席に座っていたきりたんの身体が浮かんでフェアリーテイルの顔の本に吸い込まれていき、咄嗟にきりたんの身体を掴んだが勢いは殺せず、私も本の中にグルグルと回転しながら吸い込まれてしまった。

「これにてお話は、おしまい」

「っ……っはっ？」

目が覚める。いつの間にか変身が解けていて、周りを見渡す。森…？にしては色がなんか奇怪だけど。紫ってなんだ。

「あれ、私の服……」

見下ろせば、いつもの黒のベストにスラックスではなく、ファンシーな青のワンピースに白のエプロンドレスを身に纏い、縞模様のニーソックスに黒色の靴を履いていた。嫌な予感がして頭に触れるとソフト帽ではなく青いリボンがついている。なんだこの、既視感を感じる格好は。おやっさんから受け継いだ私のトレードマークどこに行った。それに、ダブルドライバーはつけているのにきりたんと連絡が繋がらない。なんで。

「やあアリス。どうしたんだい？」

「アリス？」

頭上から声が聞こえてきたので上を向くと、木の上にこれまた奇怪な色の猫(?)がにやつと笑って見下ろしている。

「チエシヤ猫…?これってもしかして、不思議の国のアリス…ってことはここは、絵本の世界!？」

つまり行方不明者は奴の本の中に吸い込まれて…:…どうやって出れば?すると頭痛がして、耳障りな声が直接脳内に響き渡った。

「パンパカバーン!お知らせ、お知らせです!お伽話の最後までいけば外の世界に出られるよ!最高の映画を作って私を存分に楽しませてね!」

そんなフェアリーテイル・ドーパントの声からは愉悦の感情を感じられて。奴の思い通りになるのは嫌だが、外に出るため、きりたんと合流するため。私はかすかな幼少期の記憶を頼りに歩を進めるのだった。

第三十八話：Fへようこそ／不思議の国のゆかり

「うう、スカート落ち着かないです…」

いつもと違うヒラヒラしたスカートを押さえながら歩く。しかしこの服本当にダブルドライバーが似合わないな。

【せっかく美人さんなのにあんな格好してたから着替えさせたよ】

「いやきもいですね!？」

【同性だから気にしない気にしない】

「…それでも嫌ですが!？」

同性、同性か。まあほとんど正体は確定だな。今は全く意味ないが。ダブルドライバーが反応しないのが本当につらい。しかしなんで反応…：あつ、きりたんが起きてないとかだろうか。

「えっと、とりあえず大きくなる薬とかは飲まなくて助かるんですけど…このあとどうするんですしたっけ」

「君が死ねばいいのさ」

「っ!？」

襲いかかってきた杖の一撃を、バックステップで回避。襲ってきた奴を睨みつけると、そこにいたのは派手な山高帽を被った、これまた派手ながらボロボロの燕尾服を着てJ状の杖をクルクル振り回して狂笑を浮かべる怪人。

「いかれた帽子屋…マッドハッター!」

「君はアリスじゃない。君がいる限りアリスは来ない。だから死んでくれ!」

【あ、言い忘れてたけど主人公の役割に割り込んでから登場人物にとって君は敵だよ。チャシャ猫みたいな無害なものいるけど】

「味方キャラでも敵であると！わかりやすい！」

振り回される杖を、紙一重で避けていく。スタックフォンは取られてしまったらしいが腕にはスパイダーシヨックが、ポケットにはバットシヨットが入っていた。杖の一撃をスパイダーシヨックで受け止め、バットシヨットを取り出してギジメモリを装填。バットシヨットを飛ばして閃光で目くらましして体当たりさせる。

「今のうちに！ストーリーは無視してでも最後にいけばいいのでしょう!？」

「そうだね、「おわり」まで行けば出してあげるよー。いけるものならね」

「なんですって?」

【それでは左をご覧ください。私を中々楽しませてくれたあと力尽きて倒れた一般OLになりまーす】

「!？」

アナウンスの言う通り走りながら左を向くと、そこには白骨化しているOLの服を着た遺体が。しかも一つや二つじやない。服は様々だが、数えきれないほどの白骨死体が道の脇に転がっていた。

「っ……お前！何人、犠牲にしたんですか！こんなことして、何を……！」

【最高の映画を作るため！君達のアドリブで最高の物語を作るのさ！其の名もネバーエンディングフェアリーテイル！】

「センスないですね」

「……………あつそ。そんなこと言っているんだ?」

「え?」

瞬間、マッドハッターに追いかけていた森が一瞬にして切り替わる。トランプの城ってことは終盤の場所!?!振り返ればマッドハッ

ターも消えていた。

「いいんですか？もうおわり間近ですが」

「ハートの女王とその兵隊、切り抜けられるものならやってみせてよ」

また、読んでは途中でページが捲られるようにして城の庭に移動される。そこにいたのはクロツケーをしていたハートの女王。しかしその手にはフラミンゴ、ボールの代わりにハリネズミ、ゲートは部下の兵隊と言う傲慢で非常に怒りっぽい暴君だ。

「私はアリスとクロツケーするのが役目なの！お前もさっさと死んでアリスを寄越しなさい！」

「お前も…？」

気になることを言いながら激昂するなりフラミンゴでハリネズミを打って来るハートの女王。咄嗟に宙返りで避けて着地。バットショットを飛ばして兵隊を牽制し、スパイダーショットから糸を飛ばし兵隊から槍を奪い取って、続けて打たれたハリネズミを打ち返す。打ち返されたハリネズミが激突したハートの女王は爆散。「不思議の国のアリス」のラスボスともいえるハートの女王を倒したことで勝利を確信する。

「やった、これで！」

【帰れると思った？】

しかし、高速で光景が巻き戻って行き気付いたらまた最初の森の中に立っていて。思わず目を見開いた。

「なんで…」

【お伽話はページを戻せばまた読める。繰り返し読んでいくことで理解が深まる。おわりになんてさせないよ。私が満足するまで何度で

もページを戻すんだから！夢で終わらせない！」

「ふざけるなー!!!」

勝手な言い分にブチギレる。確かに本と言うのはページを戻すことで何度も読めるけどおわりがあるからいいんでしょうが！するとまた現れるマッドハッター。

「また会ったな偽物アリス……！」

「しかも記憶引き継いでるんですか道理で恨みが深いはずですよ今畜生！」

【無限ループって怖くね?】

「お前が言うな！」

真面目に死ねばいいのに、と素で思ってしまうぐらい性格悪いんだがこのドーパント。とりあえず吸い込まれたはずのきりたんとなさんを捜そう、と思つたその時だつた。

「そういえば、この間の奴と同じ異様な力を使っていたな貴様。ならばこれだ」

《ユートピア!》

「ガイアメモリ!？」

マッドハッターが突如ガイアメモリを取り出したかと思うと額に挿入し、黄金色なれど頭部の仮面は左側が欠けて目が覗き杖を持つ左右非対称のドーパントとなる。なんで!？」

【以前取り込んだ人間が持ってたものだねー、面白いでしょ?】
「ふざけんなくさい!？」

降り注ぐ浮かんだ瓦礫の雨。これは結構、不味いかもしれない。

「風よ、吹け吹け！吹くがいい！」

「服などいらぬ！熱かろう？脱げ！脱げ！」

「じゃあかしいわ天候の分際で!？」

まったくなんなんやこの世界。どこかの平原で、クソ寒い暴風を吹き散らす顔のある暗雲と、ギラギラと輝き熱気を放つ太陽に、延々と追いかけてるんやけど？アナウンスは「北風と太陽」「おわりまで行けば出す」とか言ってたか？うち、絵本とか一切読まないで育ったからどうすればいいのかわからんのやけど！

「おのれ！おのれ！」

「旅人よ！何故脱がない！」

「暑さと寒さが一緒に来たらちようど良くて脱ぎたくても脱げんわいボケ！」

脱げばいいんか？一応乙女やから嫌なんやけど。すると暗雲と太陽が領き合うと一体化し、光り輝く人型の雲みたいな姿になるとその手にガイアメモリを取り出して：：なんやと!？」

《ウエザー！》

「風よ吹け！吠えろ太陽！唸れ雷！碎け豪雨！凍てつけ吹雪！」

風神雷神かサムライを思わせる姿となると次々と暴風、熱線、雷撃、

水流、冷気を放ってくるウエザー・ドーパント。中々に凶悪なメモリやな。

「…はっ、なんの因果かWのメモリか。上等や！」

《アクセル！》

「変…身！」

《アクセル！》

うちはアクセルに変身、ウエザー・ドーパントに立ち向かった。

「つたく、なんでオレがこんなことを…」

窓ガラスを吹きながら溜め息を吐く。ボロボロで貧相な服を身に纏って結構でかい家の掃除をやらされている。それもこれも、オレを「シンデレラ」と呼び姉を名乗る女二人と継母を名乗るクソババアのせいだ。美しくもないくせにオレに命令してるんじゃないやねえ。…あかりと一緒に映画館に突入したはいいが、あかりを庇って吸い込まれてしまった…：やらかしたなあ。

「シンデレラ！それが終わったら、王子様の所に行く前に死になさい」

「そうよそうよ。貴方はシンデレラの代わりにならないわ」

「召使にするのもいいとは思ったけどあの子じゃないとね…！」

「あ？何を言って…」

《タブー！》

《クレイドール！》

《テラー！》

振り返ると、姉二人と継母は芋虫の様な下半身の女性型のドーパントと土人形のドーパント、マント付きの巨大な仮面を帽子のように被った古代の王を思わせるドーパントと化していた。

「…あー、そういうことか。掃除よりよっぽどやりがいがあるじゃないか」

《ゴールド！》《パイレーツ！》

「変身！」

《ゴールデンパイレーツ！》

ジョリーロジャーを描くようにポーズを決めてドライバーを開閉。エルドラゴへと変身してパイレーツカリバーを構え、破壊光弾の雨と召喚された巨大なドラゴンに立ち向かい、破壊光弾を薙ぎ払いドラゴンを蹴り飛ばす。

「王子様に会いに行くなんて性に合わないんだよ。感謝するぞクソババア共！」

「…なんでノリノリなのこの二人？」

「ううつ、こころは…」

目を覚ます。顔にかかっている頭巾をどかすと、それは赤い頭巾

で。周囲を見渡すと森の中だった。見れば手にはパンとワインが入った籠が握られている。…えっと？

【君は可愛い可愛い赤ずきんちゃんだ！…あれ？知らない？まあいや、知らない子がやっても面白そうだしね！】

「フェアリーテイルですか…ゆかりさん、聞こえますかゆかりさん」

【あ、きりたん起きましたか！早速半分力貸してほしいのですが！】

ダブルドライバーが腰に付けられたままだったので呼びかけると返事が帰ってきて安心する。じゃあ早速…とサイクロンメモリを取り出そうとするも、目の前の茂みからそれが出てきて固まってしま

【きりたん？どうしましたか？】

「…それは無理そうです」

「グルルルル…！」

現れたのは私よりも大きな狼。どんなストーリーなんですかね赤ずきんって！

【可愛い可愛い赤ずきんちゃん、お婆さんの家にお見舞いしに行く途中に狼さんに襲われ食べられてしまいました！アハハハハ！】

「ファング…はこの世界にはいない、なら！」

連絡手段だからかスタッグフォンは消えていたが、懐に入っていたデンデンセンサーでの甲殻で狼の爪攻撃を受け止め、もう片方の手でフロッグポッドを起動。一度地面に降りてから跳躍し、顎に強烈な一撃を与えて怯ませた。

「キャイン!?!」

「今です！」

フロッグポッドを回収して全力で走る。この世界のどこかにいるゆかりさんと合流するしかありません。あの狼は脳震盪を起こしているはずなのでこれなら逃げられるはず……

《スミロドン！》

「はい？」

振り返ると、狼が口から吐き出したのだろうガイアメモリをたしつと前足でボタンを押し、啞えてポイツと空中に投げると背中に直挿し。立ち上がり、その姿が狼男……ではなく、どう見てもネコ科のドーパントへと変貌する。スミロドン・ドーパント……!?

「それでいいんですか狼さん!？」

「キシヤア！」

「はやつ、回り込まれた!？」

「きりたん！きりたん！大丈夫ですか!？」

ゆかりさんの声が脳内に木霊するが尻餅をついてしまった。まずい、終わった……。

「させない！」

その瞬間、飛んできた光の矢が激突してスミロドン・ドーパントの胸で爆ぜる。振り向くと、そこには三日月を模した平べったい弓盾を左腕に装備している、熊の毛皮の様な装甲を上半身に纏い猟犬の毛皮のスカートに身を着け、足が鹿の様になっている女性の様なドーパントがいた。アルテミス・ドーパント……ということとは。

「大丈夫ですか!？怖がらないで、私が守りま……すから……きりたん？」

「ずん、姉、さま……？」

聞き慣れている様な気がする呼びかけに、自然とそのワードが口から出た。やはり、姉、なのか……。

「何で襲われてるのにダブルになって……そうか、あの恐竜がいないのね」

「っ……！」

フアングメモリが不在で私が変身できないことに気付いたのか近づいてくるアルテミス・ドーパント。襲われる、と目を瞑った瞬間、ガキンツと鉄同士がぶつかる音が聞こえた。

「……え？」

「きりたんは……もう、絶対に、殺させない！」

目を開けると、スミロドン・ドーパントの爪を弓盾で受け止めているアルテミス・ドーパントの姿が。守って、くれた？そのままアルテミス・ドーパントが矢を飛ばし、それを避けるスミロドン・ドーパントの攻防が繰り広げられる。…一か八かだ。

「ゆかりさん、変身しますよー！」

「え？そつちも襲われてるんじゃ……」

「アルテミス・ドーパント……東北純子、いやずん姉さまと合流しました！私を守ってくれるらしいので、信じますー！」

《サイクロン！》

「っ……きりたんがそう信じたなら、きりたんが信じる貴方の姉を信じましょうとも！《ジョーカー！》」

「【変身！】」

「危ない！」

倒れそうになった私を抱きかかえる感触がした。ずん姉さまに抱えられてスミロドンの襲撃を避けたらしい。ちょうどいい、体を任せよう……………

「変身！」

《サイクロン！ジョーカー！》

ユートピア・ドーパントの念動力で捕まり、振り回されていたところきりたんがメモリを送ってきたのでサイクロンジョーカーに変身。風を操り無理やり着地。周囲の地盤を浮かび上がらせて追撃を放とうと突き出されたユートピア・ドーパントの杖を回し蹴りで蹴り飛ばす。

「ぐう!？」

「それがなければ攻撃できないでしょう!とどめです、マッドハッター！」

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

「ジョーカーエクストリーム！」

そのまま風に乗って飛び上がって分裂、飛び蹴りを叩き込んで爆散させた。爆発から出てきたマッドハッターから帽子と杖をもらい、変身を解いて帽子を頭に被る。山高帽ですがまあ悪くないですね。

「すみません、ゆかりさん！ずん姉さまと早速話してきます！」

「あ、はい。いってらっしゃい…それぞれの居場所を知りたかったの

ですけど」

…さてと。とりあえずまっすぐ進んだらループするから、横に行くか。

第三十九話：Fへようこそ／姉と妹と弟と

目を覚ます。すると私は猟犬の背に乗せられていて。前を向けば、高速で動くスミロドン・ドーパントを追い詰めるようにアルテミス・ドーパントが複数の矢を空に連続で放ち、矢の雨で追い詰めている光景があった。少なくとも、Wとして戦う時は見なかった容赦のなさだ。手加減していたというゆかりさんの推理は当たっていたらしい。

「ずん姉さま…」

「あ、きりたん！」

「キシヤー！」

呼びかけると、どちらも反応。スミロドン・ドーパントは「赤ずきん」である私を是が非でも殺す為か矢をいくつもその身に受けながら突撃してきたが、アルテミス・ドーパントは私の前に立つと弓を構えてエネルギーの矢が引き絞られる。

「どんなに速くても目標が決まってるなら…！」

「キシヤー!？」

瞬間、放たれた特大のレーザーがスミロドン・ドーパントを飲み込み、射線上の木々もろとも消滅させた。す、すごすぎる…。

「きりたん、大丈夫だった？」

そう言つて振り返ったアルテミス・ドーパントがメモリをドライバーから引き抜いて変身を解くと猟犬も消滅して私は地面に降りる。そして改めて見れば、写真に写ってた女性と同一人物…のはずだが、緑色の髪が途中から金髪になって地面に蛇のように引きずるほど長くて、桃色のドレスを身に着けた格好だった。…なんのお伽話でしよう？

「えっ、金髪？それに長い…すごく長い…」
「きりたんは赤ずきんかな？私はどうやらラプンツェルに当てはめられてしまったらしくて…魔女を倒して逃げながら、迷い込んでいた人達を保護してたんだけどみんな私を怖がって…ちゃんと守れたのはきりたんだけなんだ」

人助け…ミュージアムの幹部とは思えない善行だ。前は口封じと
かしていたのに。

「貴方は私が妹だと知ってたんですか？死んでいるということも？」
「…うん。父様や至子姉様にガイアゲートって呼ばれている東北家の地下にある井戸に足を滑らせて落ちて、「運命の子」として蘇ったきりたんはまるで別人みたいで…怖かった。逃げ出した時にはちよつとだけ、ほっとしたよ…」

「…私には記憶がないので…死ぬ前の私ってどんなだったんでしようか」

「…生意気でゲーム好きですぐ煽って甘えん坊で素直になれない子供？」

【今とあんまり変わりませんね！】

「…遺憾ながらゆかりさんに今とあんまり変わらないって言われたんですが」

いや確かに否定できませんが。すると笑顔になるずん姉さま。

「ゆかりさんってのはそのドライバーで繋がってる相棒かな？…うん、いい仲間に恵まれたんだね。よかった。…あそこにいた時より、すごく楽しそう」

「…ずん姉さまは何でミュージアムの幹部なんかやってるんですか。そんなに優しいのに」

「…至子姉様も蛇門も放っておけないから。きりたんを失ってから二

人はおかしくなっちゃったの。至子姉様は父様の跡を継ぐって言いだしてミュージアムなんて立ち上げちゃうし、蛇門は狂ってしまったのかいつだって笑ってる。母様も至子姉様の実験体を連れて夜逃げしちゃったし、私までいなくなったら、二人とも本当に壊れちゃうよ……」

「私が死んだことでそんなことに…?」

…いや冷静になってみれば。足を滑らせてガイアゲート?に落ちて死んでしまったのはいい。どうして生き返って、ミュージアムの中枢に使われていたんだ…?

「…私が生き返った理由、知ってます?」

「…至子姉様はガイアゲートから出現した生き返ったきりたんを見て歓喜した。私もそうだった、きりたんが帰って来たんだって。でも至子姉様が喜んだ理由は違ったの。きりたんは地球に選ばれたんだって。そう喜んでいた」

「地球に、選ばれた?」

「至子姉様はガイアインパクトを起こして人類を絶滅しない種にする為の、地球の記憶と繋げての強制進化を起こすって言った。人類を絶滅させず、家族を絶対に失わない方法だって、誇らしげに。そのために、選ばれたきりたんを利用するって、言った」

「そんな…そんなことしたら、強制進化に適応できない人間はそのまま死亡するんじゃない?」

「…だよね。詳しくはわからなかったけど、そうなるんだろうなとはわかってた。きりたんを利用してまでやる事じゃないって。…でも、今の至子姉様は本当に怖くて、止められなくて。従うしかないの…ここにきてようやく、やりたいことができたんだ」

「ずん姉さま…」

泣きそうな顔のずん姉さまに、何とも言えなくなる。苦しんでいたんだ、狂っていく家族を見て、それでも自分は正気を保つしかなくて、

従うしかなくて、人を殺めて……それを十年も。どんなに苦しかったのか、想像もつかない。

「久しぶりにその名前で呼ばれて嬉しいな。……でもなんできりたんがここに？」

「ミュージアムの幹部の星香さんという人からうちの探偵事務所に依頼が来たんです。消えただずん姉さまと東北蛇門を捜してほしいと。さもないとナインテイルフォックス・ドーパントが水都を滅ぼすかもしれない、と」

「……うん、そうだね。至子姉様は何よりも私の安否を気にしていた。自衛向けとは思えないこんな強いメモリを渡したのも、きつと……じゃあ私、帰らなくちゃね。正義の味方ごっこは終わりだ。全然できてなかったけど」

「でも、でも……」

「私だって水都が大好きなの。私が戻って守れるなら、そうするよ」
「……わかりました。ゆかりさん、合流しましょう。今どこにいるかわかりますか？」

「あ、やっと話が終わりましたか。そうですね、森の中なのでさっぱり」

「そうですか……」

周りを見渡す。目印になりそうな高い物はない。あるのはいせいぜい、アルテミス・ドーパントの矢を受けた木々から立ち上ってる煙ぐらいで……あ。

「ゆかりさん、煙です！煙が見えませんか!？」

【太陽の位置からして……西にそれっぽいのは見えますけど】

「なら東に向かえばよさそうですね。ずん姉さま、飛べましたよね。私を運んでもらっても？」

「いいよ、ここにいる間は協力する。外に出たらまた敵同士だけど……」

《アルテミス！》

「それは嫌ですけど……ゆかりさん、今から飛んで東に向かいます。私達が見えたら教えてください」

弓と矢でAと描かれたメモリを取り出して腰に付けたガイアドライバーに挿入、アルテミス・ドーパントに変身したずん姉さまに抱えられ、東に向かう。

【わかりました。では私も西に…つてえ!?!】

「ゆかりさん!?!」

「その無粋な鎧を脱げ! 脱げ! 脱ぐのだ旅人よ!」

「脱げ脱げうるさいわボケナス! どんな変態が読む話やねん!」

暴風をエンジンブレードで斬り裂き、熱線をジェットで相殺し、水流をエレクトリックで防ぎ、冷気をスチームで掻き消す。そんな攻防を繰り返すが、雷撃だけはどうしようもない。速すぎる。何度も装甲で受けてきたがもう保たない。ならば、とトライアルメモリを取り出してアクセルメモリをドライバーから引き抜いた。

《トライアル!》

「雷の速度すら、振り切るで!」

《トライアル!》

そしてアクセルトライアルに変身。雷の攻撃を避けて突撃し、エンジンブレードで斬り飛ばす。

「ぐああああ…なんて頑固な旅人だ…」

「旅人でもないわい！」

トライアルメモリを引き抜き、ストップウォッチ型に戻して即面のボタンを押すとタイマーが作動し、放り投げると同時に最高速度で突撃。ウエザー・ドール・パントは雷を放って迎撃せんとするが、それを全て回避して目前まで迫る。

「はああー！」

「ぐっ!? ああっ!?」

速すぎて気付いていないウエザー・ドール・パントにエンジンブレードで斬撃を繰り返して怯ませるとそのまま連続斬りに移行。T字を描く様に連続で斬撃を叩き込み、何度も何度も斬撃を浴びせて行き、落ちてきたトライアルメモリをキャッチしタイマーを止める。

《トライアル! マキシマムドライブ!》

「8. 7秒、それがお前の絶望までのタイムや！」

「そこまでして脱ぎたくないのかアアアアアア!」

爆散するウエザー・ドール・パント。出てきた太陽は空に浮かぶでかい太陽と一体化し、雲はどこかに飛んで行った。どんな断末魔やねん。…うん?すると平原から見下ろせる森から大きな土埃が舞っていた。

「森で…爆発? 行方不明だつて言うミュージアムか? いや、もしかしてゆかりたちもこの世界に…?」

《アクセル!》

一度通常形態に戻り、バイクフォームとなって平原を駆け抜ける。とりあえず誰かと合流せなな。

「アハハハハハ！グレーテル！楽しいのだ!?楽しいのだ!?妹ができて嬉しいのだ！」

「お兄ちゃん止まって!?!いや、お兄ちゃんじゃないけど、落ち着いてー!?!」

「おっ、人がいたのだ！珍しいのだ！おーい！」

「待って！止まって!?!」

きりたんと会話しつつ森の中を西に歩いていたらなんか聞こえてきた。なんだ?と思つて上空を見れば、薄汚れた金髪の少女を左手に抱えた筋肉モリモリマッチョの変態が落ちてきて……つて、エクスタシー・ドーパント!?!

《ジョーカー!》

「そーいや東北蛇門つてこいつでした……!」

「お?お前、誰だっけ?見覚えがないのだ、すまぬのだ」

「え、あ、はい」

咄嗟にジョーカーメモリを構えたが、こちらがダブルだと気付いてない様なのでそそくさにしまう。ダブルドライバーを見て思い出さないことを祈ろう。

「もしかしてお前があのだーパントなのだ?」

「え?」

「否定しないってことはそうなのだな!」

「いやいや、違いますって!?!」

しかし話を聞かないエクスタシー・ドーパントはその巨体で木々をなぎ倒しながら迫り、私は慌てて踵を返して逃げ出した。ドカーンと

背後で大地が爆ぜる音が聞こえて頭に土がかかってくる。

「きりたん！どこですかきりたん!」

「ゆかりさん、私は抱えられてるので変身です! 《サイクロン!》」

「もうなんでもいいので助けてください!」

《ジョーカー!》

「変身!」

もう情けなく叫びながら逃げながらきりたんの言う通りメモリを鳴らしてドライバーに装填、変身。振り返ってエクスタシー・ドーパントの振るってきた右の巨拳を両手で受け止める。まるでトラックを受け止めた様な衝撃が伝わり、足を踏みしめて耐える。

「重たい!?!」

「お前、仮面ライダーだったのだ!?!ここで会ったが百年目なのだ!」

『待つてください! 私たちは、貴方たちを助けに……お姉さんだつて今ここに向かってます!』

「ずん子がここに来るのだ!?!わーい、やったのだー!」

「ぎゃああああ!?!」

きりたんが伝えた言葉に喜んで、私達が掴んだまま両腕をバンザイしたため上空に投げ出されて木に落っこちて引つかかる。……話が分かったならよかったですけど。

「きりたん……貴方の弟すごいですね……色んな意味で」

『お恥ずかしながら……私が死ぬ前はそんなことなかったそうなんですけど』

「ぐえっ」

木から落ちて頭から地面に激突。変身してなかった死んでいた。頭を押さえながら変身を解くと、エクスタシー・ドーパントも腰のガイ

アドライバーからメモリを引き抜いて変身を解いて私に手を差し出してきたのでありがたく手に取り立ち上がる。それは、双葉の様な髪型の黄緑色の髪を持つ、シャツと緑色のオーバーオールを身に纏った少年だった。中学生じゃないか。こんな子供がメモリを……。左手に抱えた金髪の少女が暴れているけど大丈夫なのか？

「どうも、探偵の結月ゆかりです……」

「助けに来てくれたなら仲間なのだ。東北蛇門なのだ、よろしくなのだ。いたい、痛いのだグレーテル」

「お兄ちゃんじゃないお兄ちゃん癖に私の名前を気安く呼ぶな――！」

「グレーテルってことは貴方はヘンゼルとグレーテルのヘンゼルの役割なわけですね？」

「そうなのだ！お菓子の魔女は親子丼みたいなのになったからブツ飛ばして食べてやったのだ！」

「えっこわっ」

脱出したグレーテルに首を絞められながら笑顔で語る東北蛇門にドン引きした。魔女が親子丼に変身したってのもよくわからないし、それを食べたのもよくわからんし、グレーテルに首を絞められながら笑っているのも理解できないのだが。

「あの……助けなくていいんです？」

「末っ子の僕にできた妹なのだ！何しても許せるのだ！」

「お前の妹じゃないくっくくく！」

……これあれだ、理解したダメな奴だ。気にしない様にしよう。するところからか聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……さーん！ゆかりさーん！」

「ん？あ、きりたんん！」

振り向くと、アルテミス・ドーパントに抱えられたきりたんが空からやってきて着地。きりたんを手を握って再会を祝する。

「爆発が起きたからわかりやすかったです」

「よかった、この世界は通じていたんですね。バラバラの世界だったらどうしようかと…」

「同じ作者の物語は舞台が地続きだったりするので、フェアリーテイル・ドーパントと言う作者の生み出した物語の世界は地続きだということですね。ついなさんもどこかにいると思われれます。あ、ゆかりさん紹介します。私の姉、東北純子ことずん姉さまです」

「ずん姉さま？」

「昔からずんだ餅が好きで食べてたらずん子と呼ばれるようになりまして…」

「なるほど？あ、紹介します。恐らくきりたんの弟の東北蛇門……どうしたんです？」

「あわ、あわ、あわわわわわ」

グレーテルすら心配して離れるぐらいに青ざめた顔をしている蛇門に首を傾げる。まるで幽霊を見た様な顔ですね？とか思っていたら、次の瞬間衝撃的なことを言い出した。

「あ、ありえないのだ！きりたんはあの時、父様に…！」

「はい？」

「えええ!？」

「…ええ？」

泣き喚く東北蛇門。言葉の意味を理解して驚く私と純子さん。理解できなくて目を見開いて口をポカーンと開けるきりたん。夢いっぱいのお伽話の国で、辛い現実が明かされた瞬間であった。

第四十話：Fへようこそ／「おわり」を呼ぶ怪鳥

戦いの舞台は家の壁をぶち壊して外の森に映る。空を飛び光弾を放ってくるタブー・ドーパント、光弾を放ちながら歩み寄ってくるクレイドール・ドーパント、地面にどす黒い粘液を展開するテラー・ドーパント。光弾を斬り払いながら粘液の足場を走りながらテラー・ドーパントに接近。斬撃を叩き込む。

「なっ…恐怖を抱かないというの!？」

「生憎とオレに精神攻撃は効かないんだとよ!」

驚くテラー・ドーパント二連続で斬撃。吹き飛ばすと頭部の蒼い部分から巨大なドラゴン?が出現。木々を薙ぎ払いながらオレを掴みあげ、空中に持っていくとタブーとクレイドールの光弾が動けないオレに襲いかかる。…うん?テラー・ドーパントはこのドラゴンを出しただけで何もしないな。そういうことか。

《ルーラー!》

ルーラーメモリを取り出して拘束されたままダブルドライバーE0に装填。開閉して空中に展開されたいくつもの黄金の波紋から出現した西洋風の鎧がドラゴンに炸裂して解放、森に着地して全身に装着していく。

《ゴールデンルーラー!》

背中に赤いマントが展開されルーラティンを握った、王を思わせる荘厳な姿のゴールデンルーラーに変身したオレはルーラチエインを伸ばしてテラー・ドーパントを拘束して引き寄せ、引き抜いたメモリを腰のマキシマムスロットに装填する。

《ゴールド！マキシマムドライブ！》

「ゴールドデンアービトゥラージ！」

そして地面に触れて黄金に変えたものを右腕に集めて右掌を振りかぶり、ルーラチエインで引き寄せたテラー・ドーパントに巨大な黄金の右掌による張り手が炸裂。ルーラチエインから解放されて吹き飛ばされたテラー・ドーパントはゴールドのメモリのGの刻印が胴体に刻まれ、ドラゴンに激突して爆散。

「お母様?!」

「よくも！シンデレラの方で……！」

「オレはシンデレラじゃねえ。オレの名前を覚えて逝きな」

《サンダー！》《ゴールドデンサンダー！》

メモリを交換すると装甲が消えて雷雲が発生して雷が落ち、それは黒に稲妻が描かれた和風の鎧武者風の装甲となり、イナズマサカリが握られる。ゴールドデンサンダーだ。イナズマサカリを振り回してポーズを決めていく。

「陽光を、受けて輝く黄金郷——エルトラド——誰かがオレを呼びやがる。怪物を屠り、悪を討てと言いやがる。上等だ、やってやる！悪鬼を制し羅刹を潰し！——輝くこの身はゴールドデン！仮面ライダー、エルドラゴ。

——只今ここに見参だ」

「シンデレラの癖に頭に乗るなああああ！」

突撃してくるクレイドール・ドーパントの光弾をイナズマサカリで弾き飛ばし、メモリを装填して振りかぶる。

《サンダー！マキシマムドライブ！》

「オレはエルドラゴ、悪魔だ！サンダーバッシュ……！」

「キヤアアアアアア!」

刃を高速回転させ大電流を放出させたイナズマサカリで縦一閃。クレイドール・ドーパントは碎け散り、さらにその破片も大電流で消滅させる。あとはタブーだけか。あんな自由に浮かぶやつにはパイレーツの方がいいな。

《パイレーツ！》《ゴールデンパイレーツ！》

「くっ…こうなれば、助けて王子様！」

「は？」

瞬間、殺気を感じて後ろに回したパイレーツカリバーで不意打ちの剣を受け止める。弾き返して振り向けば、そこにいたのは白の衣装に身を包んだザ・王子様みたいな見た目の金髪のイケメンだった。

「ガラスの靴が似合う姫君を返してもらおうか…！」

「王子と言うだけあって美しいな。オレの方が美しいが！」

「くっ…！」

《ナスカ！》

斬りかかると、青い騎士風のドーパントとなり斬撃を受け止める王子、もといナスカ・ドーパント。タブー・ドーパントが空中から遠距離攻撃である光弾を繰り出し、ナスカが高速で動いて斬撃を幾度も繰り出してくる。厄介な組み合わせだ。せめて隙が出来れば……

《エンジン！マキシマムドライブ！》

「頭、どかんかい！」

「っ！」

頭を下げる。その瞬間、頭上を炎を纏って突撃していく不格好なバイクがタブー・ドーパントに激突。爆散させて着地し変形するバイク。仮面ライダーアクセル、如月ついなだった。

「お前もここに飲み込まれてたかついな！」

「恥ずかしながらな！で、こいつを倒せばいいんか？」

「シンデレラとしては王子様と結婚するのが正しいんだろうが、生憎とオレはレズビアンでな！」

「ツンデレラ？…え、うちのことをそんな目で見てたんか!? エッチ！」

「ちんちくりんの身体なんかに欲情するかロリコンじゃねえぞ！」

「誰がちんちくりんじゃいもっぺん言ってみい！」

「言ってる場合か!? こいつ速いんだからトライアルとかいうのにさっさとなれ！」

「お前、スタイルよくても胸はうちと同じぐらいなの知つとるからな!?!」

「胸はステータスだから美しさにいらねーんだよ!?!」

王子様そつちのけで口論するオレたち。するとその王子様…ナスカ・ドーパントがおずおずと尋ねてきた。

「あ、あの…そろそろ戦ってもいいかな？」

「黙っとけ！」

《エンジン！マキシマムドライブ！》

《パイレーツ！マキシマムドライブ！》

「ぐあああああ!?!」

「あ」

しかし口論に夢中だったオレたちは反射的にパイレーツカリバーとエンジンブレードで無防備なナスカを叩き切ってしまう、思わず固まってしまう。変身が解けて倒れ伏し気絶した王子様に、オレとアクセルは顔を見合わせて、一緒に手を合わせて拝んだ。本当に申し訳ない。

「クルオアアアアッ！」

「!？」

すると、森の向こう側からとんでもない咆哮と、烈風が吹き荒れる。さらに爆音まで聞こえてきた。

「……ゆかりたちがいるとしたら」

「ああ、そこやな。フルスロットルで飛ばすぞ！乗れ！」

「嫌な予感がする、逃げ！」

バイクフォームになったアクセルの背に乗り走り出す。無事であるよ、ゆかり、きりたん！

数刻前。

「…父親って、遠祢照みたいに子供のために自らも犠牲にする、そういう人ですよ？そんな人に、私は殺された…？」

きりたんを見て狼狽えだした東北蛇門の衝撃的な言葉に放心するきりたん。私と純子さんも顔を見合わせるしかなかったが、狼狽える東北蛇門に姉である純子さんは信じられないとばかりに尋ねる。

「父様がきりたんを殺したなんて、そんな…あの父様よ？私達姉弟を大事に育てた、病弱で優しい父様が…！」

「僕だって信じられなかったのだ！でも、瞼を閉じれば何時だって思いう出す…幼い僕の目の前で、ガイアゲートにきりたんを突き落した父様の姿を…！」

「…それが、東北蛇門の狂気の原因…」

そんな光景を幼心に見せられたら、そりや狂う。きりたんが生きて
いるという衝撃で正気に戻っているところから、きりたんが蘇ったこ
とを知らされてもいかなかったのだろう。自ら狂うことで自我を保つ
ていたんだ…。

「きりたん！きりたん！本当にきりたんなのだ!?偽物とかじゃないの
だ!?!」

「えっと、あの…記憶はないんですけど、きりたんです」

「あの頃のままなのだ、会いたかったのだ…!」

「お、おとおお」

「あの、純子さん。つかぬことをお聞きしますがその父親と言うのは
…」

結構身長差がある蛇門に抱き着かれて何とも言えない声を上げて
るきりたんを横目に純子さんに尋ねてみる。何かきな臭い。

「先代の東北家当主、東北外道^{とうほくソトミチ}。母様に一目惚れして東北家の婿養子
に入った考古学者で…10年前、きりたんが死んでから一ヶ月後に病
死しました。何分病弱だったので…父様がきりたんを殺したのだな
んて…至子姉様なんて、父様の悲願を叶えるんだとミュージアムま
で作ったのに…」

「…うーん?」

10年前。ウナちゃんから聞いたきりたんが亡くなった年と同じ
だから間違いないだろう。足を滑らせた事故だときりたんからの通
信で純子さんの話から聞いていたが、東北蛇門の話によれば父親が突
き落としたのだと言う。その結果きりたんは「運命の子」に選ばれ
蘇った。そしてそのあとすぐ、一ヶ月後に死んで、それを長女が引き
継いだ? 作為的なものを感じるのは気のせいだろうか。

「…父親の事を調べるためにも、元の世界に早く戻らないとすね」
「で、でも！蛇門の思い違いだってことは…」
「…私も両親に捨てられたからおかしくないよ」

きりたんの訴えにそう言ってきたのはグレーテル。先程までの暴れようが嘘のように、蹲ってしまった蛇門の頭を撫でて安心させようとしている。

「…今わかった。なんでこの人が私のお兄ちゃんになったのか。同じだったんだね。親つてのは邪魔になったら容赦なく子供を捨てる。子供が傷付こうと、信じて帰っても平気で何度でも捨てる。上っ面だけ優しくても、信用しちや駄目」

「上っ面だけ優しい…」

「優しくかった父様はやっぱり、嘘なのだ…？」

心当たりがあるのか押し黙る純子さんと、泣きじやくる蛇門さん。見てられない。

「とりあえず、それを確認するためにも脱出しましょう。でも絵本の結末を目指そうとしてもループするんですよね…」

「私も試しました。まあラプンツェルの物語をそのままやってみただけですけど、魔女が死ぬ前に巻き戻って…」

純子さんも失敗した様だ。じゃあ普通にゴールを目指すのは悪手か。するとグレーテルが何やら納得したように頷くと私の顔をまっすぐ見てきた。

「決めた。私が本当のお兄ちゃんに会うためにも、協力する。物語を終わらせる方法は一つだけ。「おわり」を見つけることだよ」

「おわりって…絵本の最後に出てくるあの「おわり」の文字ですか

「？」

まさかの情報だ。きりたんは首を傾げているが純子さんと蛇門さんは「あー」とポンと手を打ってる。たしかにフェアリーテイル、お伽噺の記憶ならあってもおかしくないか。グレーテルは頷いて続ける。

「うん。でもその文字が封印されて、絶対に終わらない様になっているのがこの世界。神様は誰もここから出す気がないの」

「卑怯だ畜生だとは思ってましたがそこまでとは」

「文字は本来、お城から出てくるらしいんだけど…一番高い塔の天辺に閉じ込めてるんだって」

「…その城とは、トランプ城？」

「ううん、森を囲むように三つ存在するお城の全部。そのうち一つでも解放すれば「おわり」の文字が浮かんで強制的に終わらせられるはずだよ」

三つも城があるのか。…いや、少ない方だ。もしかして本人が知ってるお伽話しか使えないとかならうか。なら納得だが。

「話はわかりました、とりあえず城に向かって突撃すればいいんですね！純子さん、一番近い城はどの方角かわかりますか？」

「ちよつと待ってね」

《アルテミス！》

アルテミス・ドーパントに変身して空に舞い上がる純子さん。周りを見渡して、南に弓矢を向けた。

「こっちの方角にトランプのマークが描かれた城があるよ！ニキロちよい、かな？」

「トランプ城ですね。それぐらいの距離ならドーパントの二人の機動

力ならずぐだと思うのですが…どうでしょう?」

「じゃあゆかりとグレーテルは僕に掴まるのだ。きりたんは姉様に連れてってもらおうのだ」

《エクスタシー!》

蛇門さんがエクスタシー・ドーパントに変身して私とグレーテルを抱え上げ、アルテミス・ドーパントがきりたんを抱え上げる。スカートなんて持ち方気にしてほしいんですけど…まあいいか。

「さあ、いくのだ!」

「ちよまああああああ!」

「これきらあああああいい!?!」

瞬間、エクスタシー・ドーパントは跳躍。あまりの風圧に悲鳴が出る。隣でグレーテルも悲鳴を上げてる。後ろを見ればきりたんがすごい大事そうに横抱きされてアルテミス・ドーパントが飛んできていた。いいなあ。しかし、森の彼方に見えるトランプ城に凄まじい勢いで近づいて行き、もう目と鼻の先まで来た。よし、これであの高い塔まで……!

【散る、血る、満ちる。幸せを呼ぶ青い鳥気取りの裏切り者、可愛い可愛いグレーテルに私の幸せを呼んでほしいからこんなメモリを挿してみよう。カモン、青い鳥!】

「え?」

アナウンスが響いて、何か森から飛んでくる。それは青い鳥。口に加えた黄金のメモリを凄まじい勢いで運んできて、呆けていたグレーテルのうなじに突き刺した。そんな…!?

《ケツアルコアトルス!》

「うっ、ううっ……お兄ちゃん、離れて……!うあああああああ!?!」

「グレーテル！」

むくむくと見る見るうちに巨大化し、翼と化した左腕でエクスタシー・ドーパントを吹き飛ばすグレーテルの姿が、嘴が三つに開く巨大な翼竜……ケツアルコアトルス・ドーパントへと姿を変えてしまう。さらに正気を失ったのか目についた私達に襲いかかってきたケツアルコアトルス・ドーパントの翼で城の手前の平原に四人纏めて叩きつけられてしまった。ぐう、痛い……。きりたんに助け起こされて立ち上がる。見上げればこちらに光弾を飛ばしてくるケツアルコアトルス・ドーパントが突撃して来ていて。

「…きりたん！」

《ジョーカー！》

「彼女を止めましょう！ずん姉さま、私の身体をお願いします！」

《サイクロン！》

「変身！」

ダブルに変身、アルテミス・ドーパントとエクスタシー・ドーパント共に立ち向かうのだった。

第四十一話：Fへようこそ／凄惨なるおわり

「……なにをしてるんでしよう……？」

「知らん。あいつが、リリイ様を……！」

「落ち着け西友」

先刻一緒にやってきたリリイさんが変身したエルドラゴがドーパントと対峙した際に、咄嗟に外まで投げられて無事ですんだ私が、応援に呼んだキクさんと西友さんを連れて隠れながら戻ってくると、客席を縫うようにバタバタと歩きながら顔がない本棚の化け物が自分の顔であるはずの本をペラペラ捲りながら一喜一憂していた。

「あー！そうじゃない、そうじゃない！物語に逆らうのは面白いけどシンデレラが王子様をぞんざいに扱うのは駄目でしょう！？あーもうグレートル！お兄ちゃんのために力を貸すのはいいけど今の君はヴィラン！そんなぶれぶれじゃ困る、困るよ！そうだ、確か青い鳥が集めているメモリにちょうどいいのがあったな…そうすれば面白いんじゃないか？いいねいいね、そうしよう！」

「…っ！」

映画館の入り口からそつと覗きこむがなんだろう、監督気取り…？すると疲れたのかどかっ！と客席に座りメモリを腕から引き抜くドーパント。

「あー疲れたー！館長も先輩もみんな死んだし、ここには私しかないから一休みするかあ」

「…あれは」

現れたのはいろとりどりの頭。あれはたしか、映写技師見習いの桐谷洗^{きりや}さん…この館長や映写技師さんも取り込んで殺したということですか…？しかしそれをなんとも思っていない。ダンデライオン

事件の葉常美来とは別ベクトルでサイコパスと言う奴でしようか…。とにかく、変身できない私達三人でどうするべきか…。

ガタツ

「誰?!」

「リリース様を…:返せ」

「ちっ、しょうがない…!」

すると逸ったのか西友さんが素手で突撃。キクさんも包丁二本を逆手に持って高速で体勢を低くして駆け抜ける。

「仮面ライダーの仲間か?!お前らも吸い込んでやる!」

《フェアリーテイル!》

すると桐谷洗は本棚でFと描かれたメモリを取り出し左腕の生体コネクタに突き刺し、フェアリーテイル・ドーパントに変身。顔の本をペラペラと高速で開いてエルドラゴを吸い込んだ風が巻き起こる。

「オオオオツ…!」

すると西友さんは風に逆らって跳躍、風を乗り越えてドーパントに接近し、頭頂部にオーバーヘッドキックを叩きつける。スーツ姿なのにすごい。

「あいたあああ?!」

「こいつ、他のドーパントに比べて断トツに弱いみたいですね!」

さらに接近したキクさんがフェアリーテイル・ドーパントの脛に斬撃。痛かったのか足を押さえてピョンピョン跳ねるフェアリーテイル・ドーパントを背中から蹴り飛ばすキクさん。ゴロゴロと無様にフェアリーテイル・ドーパントが転がり、さらに西友さんが腹部を

サッカーボールキックで蹴り飛ばされてさらに転がって行き壁に激突してようやく止まった。

「ぐええっ……よくも、よくもお伽話の神である私を足蹴にしたなあ!」

「関係ない……早く、リリイ様を返せ……!」

「首ギロチンしないだけマシだと思ってください」

「裏切った愚か者が……反吐が出る」

「はあ!?言ってる場合ですか狂信者!?!リリイさん助けるためでしょ!?!」

「俺一人で……充分!」

「はーこいつ、頭氷河期みたいにカチンコチンですか!はーこいつ」

いきなりいがみ合い喧嘩を始めるキクさんと西友さん。というか西友さんが一方的に喧嘩を売ってしまった。あれ、私、呼ぶ人選間違えました?

「隙あり!」

「チイツ……!」

するとフェアリーテイル・ドーパントが再度構えた自分の頭部である本を構えてページがパラパラと開閉し風が発生。しかし、西友さんはそれに気付くなりキクさんを蹴り飛ばして自身も後退し、風から逃れる。

「なにい!?!」

「お前のせいだな?裏切り者」

「あんたのせいでしょうが!」

驚愕するフェアリーテイル・ドーパントを挟んでまたいがみ合う西友さんとキクさん。しかし深呼吸すると西友さんが提案した。

「仕方ない……援護しろ。不愉快だがな」

「最初からそのつもりです。ちよつとは氷が溶けたようで」

「黙れ。行くぞ……!」

「こんの……!」

キクさんに向けて吸い込むフェアリーテイル・ドーパントの後頭部……だと思われる本棚に踵落としが炸裂。振り返ったフェアリーテイル・ドーパントの背中に二連撃で包丁が叩き込まれる。その繰り返し。蹴りが、包丁が、振り返り続けるフェアリーテイル・ドーパントに次々と炸裂して本棚と中に入っている本の山がボロボロになっていく。

「痛い痛い痛い!何なんだお前ら!?!中の奴等をループさせる暇もないぞ!」

「元エル・ドラードのナンバー2ですが、なにか?ループはよくわかりませんがさせない方がよさそうです」

「そして、俺こそがリリイ様の真の部下だ。早く出さねば……お前を潰す!」

「ヒイヒイヒイッ!」

…:なんというかその、生身でドーパントをフルボッコにする元マフィア怖い。

「クルオアアアアッ!」

「させない！」

「このお！」

「なのだあ！」

ケツアルコアトルス・ドーパントの突進しながらの光弾をきりたんの身体を抱えたアルテミス・ドーパントの光の矢が撃墜し、サイクロンジョーカーの私達とエクスタシー・ドーパントが両翼を受け止める。とにかく、止めないと…って!?

「なのだあああああ!?!」

「持ってかれて…!?!」

受け止めようとしたのだが、そのまま空に連れ去られてしまった。この高所から落とされたらさすがにヤバイ…手が滑って、落ちる…!?

「うわあああああ!?!」

「さーせーるーかー!」

「イナズマサカリイ！」

たまらず落下してしまうと快晴の空に稲妻が走り、ケツアルコアトルス・ドーパントに直撃。さらに私達は横抱きに受け止められる。それは、仮面ライダーアクセル バイクフォームと、仮面ライダーエルドラゴ ゴールデンサンダーだった。

「無事かゆかり、きりたん！」

「いやおかげさまで無事ですけど…あれ、ついなさんはともかくリリースまで、なんで？」

「…：恥ずかしながらあかりを庇ったらそのまま…」

「あー」

「うちは完全に油断してやな。してやられたわ」

「仮面ライダー全滅じゃないですかやだー」

『とにかく、手伝ってください！グレーテルっていうキャラクターが「おわり」という文字を見つけたら出られると教えてくれたんですが、そのグレーテルがドーパントにされてしまっ……！』

再び舞い上がって光弾と突風を放ってくるケツアルコアトルス。ドーパントを見上げながらきりたんが叫ぶ。

「よくわからんがわかった。とりあえずあのデカ鳥を倒せばいいんだな」

「いや、出口の「おわり」とやらを見つけた方が早いやろ。場所は分かっているんやろ？」

「わかってますけど、城の上で……」

「こんだけ数があるんや。分かれた方がいいやろ」

『……なら！』

ケツアルコアトルス。ドーパントの光弾がすぐ近くで爆発するが、きりたんはアクセル バイクフォームに飛び乗ってエルドラゴ、アルテミス・ドーパント、エクスタシー・ドーパントに向けて叫んだ。

『私達が「おわり」を解放するまで時間稼ぎをお願いします！』

「わかったわ！」

「グレーテルは僕が止めるのだ！」

「任された！」

《《ゴールド！マキシマムドライブ！》》

こちらに向けて放って来た光弾を、エルドラゴが地面に手を付けて黄金の壁を形成して防御。私達はアクセル バイクフォームのハンドルを握ってトランプ城に向けて加速する。スピードに乗って平原を駆け抜け、門まで肉薄する。

「何者か！……ここはアリスを待つハートの女王の……」

「私がアリスですよ文句があるかあ！」

「「うぎやああああ!?!」」

門に屯っていたトランプ兵を轢き飛ばし、体当たりで門を開けて場内を爆走する。えつと、一番高い塔は……西のあれか。

「ついなさん、西！」

「あの上の扉か！了解や！」

群がるトランプ兵を蹴散らし、ハートの女王がフラミンゴで打って来るハリネズミを手刀で弾きながら塔を目指し、いつぞやのラプトル・ドーパントを追いかけた時の様に外壁を登って行く。

「クルオアアアアアッ！」

「『っ!?!』」

「なんやと!?!」

しかし、平原の方からケツアルコアトルス・ドーパントが飛来。その翼で壁面から薙ぎ払われてしまう。もう少し、なのに……!

『まだです!』

《ルナ!》《ルナ!ジョーカー!》

アクセルが落ちて行くのを尻目に、きりたんが手を動かしてルナジョーカーに変身、右手を天に伸ばすが、届かない。目の前にケツアルコアトルス・ドーパントが迫る。

「くそっ……」

『何故かフェアリーテイルの横槍がない今がチャンスなのに……!』

「さ！せ！る！か！なのだあああああ！」

すると凄まじい勢いで平原の方からなにかが飛んできてケツアルコアトルス・ドーパントに激突。それはエクスタシー・ドーパントで。平原から大跳躍してきたというのか…!?

「グレーテルは僕が止めるのだ…!」

「きりたん、手を貸して!」

『へ?』

すると飛んできたアルテミス・ドーパントが伸びた先の右手首を掴んで弓に番えて天に向けて発射。凄まじい勢いで上空に射出されるダブル。すぐに、扉の眼前まで飛び上がる。

「頼むのだ!ライダー!グレーテルを、解放してやってくれなのだ!」

「…ミュージアムの願いを聞くのは癪やけど…!」

《アクセル!マキシマムドライブ!》

「美しい兄妹愛だと見た。任せろ!」

《サンダー!マキシマムドライブ!》

地上ではアクセルとエルドラゴがエクスタシー・ドーパントの願いで彼が空中に放り投げたケツアルコアトルス・ドーパントを挟み込むようにライダーキックを繰り出そうとしていて。私達も、それに習う。

《メタル!》《ヒート!》

《ヒート!メタル!》

「決めますよ!」

『この世界におわりを!』

《メタル!マキシマムドライブ!》

ヒートメタルに変身し、メタルシャフトにメタルメモリを装填。両端から炎を噴いて推進力を得て扉に突撃する。

『メタルブランディング!』

「ライダーツインマキシマム!」

上空と地上で同時に炸裂し、瞬間。扉から「わ」の字が飛び出して空高く飛んでいく。見れば、上空だからこそ見えた他のシンデレラ城と、恐らく白雪姫の城からも「お」と「り」の字が飛び出し、空で合体する。

【ああー!? なしなし! 邪魔者の相手をしていたら何時の間にも!?! 巻き戻れ巻き戻れ、ああ、私の力が通じなギャー!?!】

外でなんかあったらしくアナウンスからの悲鳴を聞きながら地上に降りると、元に戻ったグレーテルと蛇門が抱き合ってた。

「ヘンゼルお兄ちゃんじゃないけど…嫌いじゃなかったよ、お兄ちゃん」

「こっちこそ、夢を叶えてくれてありがとうなのだ…」

「じゃあね、皆さん。私達をただの人形だと思って弄ぶ神様をぶん殴ってやって!」

そう笑顔で見送られ、私達は眩い光に包まれた。

「ん? まさか…そんな、そんな…馬鹿なああああ!?!」

キクさんと西友さんに斬られ蹴られていたフェアリーテイル・ドー

パントの様子が変わり、その本が捲られ始めると眩い光が劇場を照らしだす。そして光が晴れると、ゆかりさん、きりたん、ついなさん、リライさん、東北純子さん、東北蛇門さんが現れていた。やった…やった！

「ゆかりさん！きりたん！ついなさん！リライさん！無事でしたか！」

「リライ様…！」

「無事でよかった、リライさん…！」

「あかり！貴方達が頑張ってくれてたんですね！」

「よくやったお前ら。あとは任せろ」

駆け寄る私と西友さん、キクさん。ボロボロのフェアリーテイル・ドーパントを見て何があったのか悟ったのか、楽しそうに向き直る六人。

「ひ、ヒイイイイツ!?そんな馬鹿な、私の世界から出てこれた奴なんて今まで一人も…！」

「貴方はいくつか間違えた」

「私達をなめてドライバーの類を奪わなかったこと」

「ループで何とでもなるからと油断しきっていたこと」

「キャラクターたちから大事な人間を奪い、反骨心を抱かせたこと」

「人間たちが貴方の言うことを聞く役者だと思ひ込み好き勝手させたこともそうですね」

「まあ言いたいことは一つです」

ゆかりさんときりたんが交互に言いつつ、指を突き付ける。ついなさんはエンジンブレードを、リライさんは握り拳を向けて。

「さあ、お前の罪を数えろ」

「絶望がお前のゴールや」

「ド派手に散りな」

《サイクロン！》《ジョーカー！》《アクセル！》《ゴールド！》《パイレーツ！》《アルテミス！》《エクスタシー！》

ただの人間相手にもやられるドーパントの前で、死刑宣告の如く次々とメモリが鳴らされていく。しかもエクストリームメモリまで来た。

「**「変身！」**」

《サイクロン！ジョーカー！エクストリーム！》

《アクセル！》

《ゴールドエンパイレーツ！》

仮面ライダーダブル、アクセル、エルドラゴ、アルテミス・ドーパント、エクスタシー・ドーパントに囲まれ、せめてものとまた絵本の中に閉じ込めようとするフェアリーテイル・ドーパント。

《プリズム！》

「これでもうお伽話は読めません」

「私のアイデンティティがー!?!」

しかしエクストリームの力で完全に無力化されてしまったフェアリーテイル・ドーパントに、一斉攻撃が炸裂。あっけなく爆散してメモリブレイクされ、重傷の桐谷洸が転がるのだった。南無三。

深夜。救急車に乗せられ、警察病院に連行される桐谷洸。しかしそ

の救急車の進む先の道路の上に立つ着物姿の女がいた。

《ナインテイルフォックス!》

救急車の赤い光に照らされながら女は九尾の狐の怪物に変身。巨大な尻尾を振るい、救急車を転倒、炎上させてしまう。護衛の警官が出てきて銃を向けるが、尻尾が変形した口で噛みちぎり、そのまま後部に乗せられた桐谷洗を眼前に引き摺り出すナインテイルフォックス・ドーパント。

「うっ、うう…やめて…もうやめて…」

「よくもわたくしの…いや、「俺」の計画を邪魔してくれたな…：ガイ
アインパクトを起こすための生贄は替えが効かん。台無しにするところだったんだ。命を持って償うといい」

「う、う、うああああああ!?!」

紅い眼光が睨み付けると共に九尾が伸びてそれぞれ口を開いて噛み付き、断末魔と共に八つ裂きならぬ九つ裂きにしたナインテイルフォックス・ドーパントは舌なめずりすると変身を解き、炎の灯りに照らされながら東北至子は水都の闇夜に姿を消した。

その後、東北姉弟が礼を言っただけで帰って行き依頼は解決。しかかと思われたが、犯人である桐谷洗は連行中に連行していた人間ごと何者かに皆殺しにされたことをついなさんに知らされた。ミュージアムの粛清なのだろうか。それはわからない。だけど、今回の事件は一つの謎の答えに辿りつけるきっかけになったのは確かだ。

「…東北家は代々イタコの家系、その中でも東北至子の力は歴代で最も強い……」

集めた資料に描かれた事実を反芻する。…間違いない。今の東北至子…ナインテイルフォックス・ドーパントは…娘に霊媒させた東北外道だ。

ボイロ探偵W設定（第二十九話〜四十一話まで）

・結月紫／仮面ライダーダブル

リリイが仮面ライダーだと当初は認めなかったが、人となりを知って認めて共闘する。おやつさんの死を乗り越えられず、オクトパスが扮した偽物に騙されてしまう精神的な弱さが露呈するも、相棒や仲間を借りて克服した。お伽話の世界では「不思議の国のアリス」のアリスに配役された。得た情報から至子の正体に行きつくなど推理力はかなりのもの。

・きりたん／東北記理子／仮面ライダーダブル

ついに自分の本名に行きついたものの、姉弟や両親のあれこれで大混乱しつつもゆかりと共に歩み続けることを選んだ。「家族」という記憶に鍵がかけられていて調べることができない。母親が別れると言おうがゆかりの方が大事。お伽話の世界では「赤ずきん」の赤ずきんに配役された。お伽話の知識もないので混乱したが姉弟に出会えて会話できてご満悦。

・継星燈

「金堂」の金粉ラーメンを食べたり、きりたんに付き合っただ阪にタコ焼きを食べに行ったり、結構満足してる大食漢。戦えないながらも探偵事務所の所長として捜査に奮闘する。戦えないなりに戦える人間を呼んで現状を打破するなど、身の程を弁えている。

・如月追儼／仮面ライダーアクセル

犯罪者のリリイが仮面ライダーだと当初は認めなかったが、人となりを知って認めて共闘する。オクトパスが扮した岳の偽物と邂逅、偽物だと看破するが重傷を負うものの手がかりを掴んで事件解決に貢献した。お伽話の世界では「北風と太陽」の旅人に配役されたが絵本など読んだことないので何もわからないまま戦っていた。

・リリイ金堂／金堂百合／仮面ライダーエルドラゴ

仮面ライダーとして認められた元悪党。ついでに継星探偵事務所の探偵として就職した。自分が美しいと思った物を守るために身体を張れる仮面ライダー。人たらし。オクトパスが扮した偽物の母で

ある金堂雛菊に隙を作ってしまった毒を受けてしまう。お伽話の世界では「シンデレラ」のシンデレラに配役された。内容を知ってるだけにそのまま進めようとしたが合わなかったらしく継母たちが襲ってきたときには嬉々として反撃した。レズビアン。

・呪怨キク

リリーの相棒。リリーの提案でラーメン屋「金堂」を経営している。料理の腕前はネルが絶賛しゆかりもぐうの音も出ないほど。ドーパントとしての力は失ったものの、持ち前の戦闘センスは相変わらずで包丁を手で高速で動ける。西友に裏切り者として憎悪されている。

・西友蒼司にしとも そうじ

リリーの腹心。リリーの資金源として株をやっている他、情報収集もできる有能。蹴り技が得意で並のドーパントなら蹴り飛ばせる。キクを裏切り者として憎悪し許されているのに納得していないが、必要と感じれば共闘もできる。

・昭胤流子あきたね りゆうこ

「金堂」を気に入った情報屋。仮面ライダーの事を知ってそうなきクから情報を仕入れようとするものらしくらりと避けられている。

・鳴花緋女めいか ひめ

仮面ライダーの事を知っている一人。平然とミコトに奢らせる。

ミュージアムに対抗したい様だが…？

・鳴花三言めいか みこと

仮面ライダーの事を知っている一人。ヒメに奢らされるけどすぐ許す。ミュージアムに対抗したい様だが…？

・月読哀つきよみ アイ

自称きりたんの母親。ナインテイルフォックス、正しくは「アイツ」と呼ぶ人物に全てを奪われたらしく復讐のために仮面ライダーを用意し、「精神の強さ」を最低条件として選別していた。ゆかりと別れるように言ったがきりたんに拒否られて割とシヨックを受けてる。実験体を連れてミュージアムを逃げ出し、ナインテイルフォックスに狙われている。

・東北至子／ナインテイルフォックス・ドーパント

代々霊媒師として地位を築いてきた歩色町の名家、東北家の家長にして水都にガイアメモリをばら撒いている組織「ミュージアム」の首魁。父親の悲願「ガイアインパクト」を叶えるためにミュージアムを生み出し、10年前に末妹を失ったことで妹の純子と弟の蛇門を何よりも優先し溺愛している：はずだったが、きりたんだと知りながら容赦なく攻撃を加えるなどちぐはぐ。

その実態は死後すぐの10年前に父親の霊魂を霊媒して乗っ取られていた。表層は確かに至子ではあるが、その思考の方向性は支配されている。エクストリームが現れたことで本格的に活動を開始し、アイから「実験体」を奪取しようと目論むものの、その矢先に肝心の純子が行方不明になり、ブチギレて八つ当たりにより水都を滅ぼそうとしていたが帰ってきたので犯人を始末することで感情を抑え込んだ、かなりの危険人物。

・東北純子／アルテミス・ドーパント

アイに対して並々ならぬ感情を抱いているミュージアムの幹部。きりたんに対してはいつも手加減していた。蛇門の映画に付き合っていたところ、フェアリーテイル・ドーパントに遭遇しお伽話の世界に閉じ込められてしまう。配役は「ラプンツェル」。お伽話の世界では同じく取り込まれた人間を助けようと奔走していたが上手く行っていなかった。きりたんとは再会し話もできたが、至子を裏切ることはできず脱出後は敵対する道を選ぶ。

・東北蛇門／エクスタシー・ドーパント

アイに対して並々ならぬ感情を抱いているミュージアムの幹部。何時も笑って楽しんでる狂人だったが、10年前に姉を目の前で父親に殺されたショックがトラウマとなり、自ら狂うことで自我を保っていたためだった。幹部の中で唯一きりたんが蘇ったことを知らされていない。ヒーローものの映画を見に行ったところ、フェアリーテイル・ドーパントに遭遇しお伽話の世界に閉じ込められてしまう。配役は「ヘンゼルとグレーテル」のヘンゼル。グレーテルを自分の妹として喜び全力で兄を演じていた。きりたんとは再会し大混乱に陥ったが、脱出後は純子についていくことを選ぶ。

・東北星香／シャーク・ドーパント

第十一章の依頼人。巡寧瑠夏の直属の上司でもある。10年前の出来事は知らず今の至子に忠誠を誓っている幹部。

・東北奏楽／ホワイトアウト・ドーパント

10年前の出来事は知らないため面白そうだと笑っていた。一応純子捜索に回されていた。

・東北記理子

故人。愛称はきりたん。父親である外道に蛇門の目の前でガイアゲートに突き落とされて殺され、地球に選ばれ「運命の子」として復活する。純子曰く生意気でゲーム好きですぐ煽って甘えん坊で素直になれない子供だった。11歳、小学五年生の時に死亡し親友の音街ウナや家族に影を落とした。

・東北外道

故人。先代の東北家当主で純子曰く姉弟を大事に育ててくれた病弱で優しい父親で、純子たちの母に一目惚れして東北家の婿養子に入った考古学者。しかし10年前に実の娘であるきりたんを蛇門の目の前でガイアゲートに突き落とし殺害。その一ヶ月後に病死した。：はずだったのだが娘の至子が霊媒し、乗っ取って復活。10年間至子を操りナインテイルフォックス・ドーパントとしてミュージアムを使い自らの目的のために暗躍していた。ぶつちやけると全ての元凶である。

———ここからネタバレ注意

●第九章「R集結」の登場人物（Rはラプトルの他にREX、ライダーなど）

・川合優希

施設に住む小学生の少女。戦闘に巻き込まれブティックに逃げ込んだところ、リリイに庇われて憧れる。元キャラはVOCALOID

2の歌愛ユキ。

・メルリ・郡上ぐんじょう／パキケファロサウルス・ドーパント

若者強盗団「REX」頭領姉妹の姉。司令塔で頭脳役。テレパシー持ちのハイドープでありラズリに指令し、ラズリを介してラプトル軍団を操り銀行強盗を行う。エルドラゴと決戦した。元キャラはVO CALOIDのメルリ。

・ラズリ・郡上／ラプトル・ドーパント（リーダー）

若者強盗集団「REX」頭領姉妹の妹。ちよつと頭が足りないお馬鹿。テレパシー持ちのハイドープであり姉の命令を厳守し、それを指示してラプトルたちのリーダーをしている。部下たちと共にダブルと決戦。元キャラはVO CALOID3の蒼姫ラピス。

・角南陸太郎ツナミりくたろう／波音リツ／スピノサウルス・ドーパント

若者強盗集団「REX」の副頭領で自分の女性的なビジュアルに絶対の自信を持つオカマ。元エル・ドラードの戦闘員で、表の顔は正体不明のカリスマファッションデザイナー・波音リツであり女にしか見えない美少年。ガンナーAを手に入れたアクセルと決戦。元キャラはVO ICEVOXの波音リツ。

・REX構成員

エル・ドラードに憧れその後釜に就こうと目論む半グレ集団。ラプトルメモリを手に略奪を繰り返す。エル・ドラードという「組織」に憧れているだけでありリライなどのことは全く知らない俄か集団。REXの構成員は頭領姉妹のラズリとメルリ、副頭領のツナミ、あと十人のラプトル。

・パキファケロサウルス・ドーパント

「石頭竜」の記憶を宿したドーパント。硬い頭を駆使した頭突きと、巨体と脚力を武器に大暴れする。また磁力を操ることで戦車形態に変身が可能で、高速移動しながら頭突きを繰り返す小型の戦車と化す。

・スピノサウルス・ドーパント

「棘蜥蜴」の記憶を宿したドーパント。腹部に貫通している丸鋸状の棘をブーメランのように飛ばしたり、巨大な口で噛み付いたり長い腕で攻撃する。五メートル大に巨大化することも可能。

・ラプトル・ドーパント

「掠奪者」の記憶を宿したドーパント。小型肉食恐竜を人型にした姿を基本に、戦闘時や走行時は骨格を変えて元となる小型肉食恐竜の形態になることができる。鋭い爪と凄まじい脚力、しなる尻尾が武器。複製されたラプトルメモリの使用者との連動で遠距離での意思疎通、息の合った連携攻撃を行う。しかし個人の戦闘力としては凄く弱い。

●第十章「死人のO」の登場人物（Oはオクトパスの他、オーメン（前兆）、オース（誓い）、オーバークラム（克服）など）

・音街ウナ／乙町海鳴おとまちウナ

第十章の当初の依頼人。ラジオ番組「音街ウナのポジティブ★ワールド」のMCをしている水都のアイドル。10年前に亡くした親友、東北記理子こときりたんのことを綴った歌「ロストメモリーデイ」で小学五年生時にブレイクした。定期検診を受けてる時に、ダンテライオン事件の際にきりたんを見かけ、死人が蘇る噂を聞いて依頼しに来た。きりたんに並々ならぬ感情を抱いているようで…？

・巡寧瑠夏めぐりねルカ／オクトパス・ドーパント

ナインテイルフオックス・ドーパントの配下でメモリ売買人二位の敏腕ミュージアム構成員。星香を越えて幹部になることを夢見ており、ミュージアムの情報網と「一般メモリ最強」と自負するオクトパスのメモリを悪用し、死人に化けて誘き寄せた人間にメモリを売ることで荒稼ぎしていた。幹部を除くとミュージアム最強と言つてもいい人物。仮面ライダーにもばれずに活動していたが、至子直々に命令され、仮面ライダーを襲うことでアイを誘き寄せようとしていた。元キャラはVOCALOID2の巡音ルカ。

・琴葉茜

生前のイフを知る人間の一人。死んだ母親を目撃した旨を伝えた他、スカルに敗れたゆかりを介抱する。

・琴葉葵

生前のイフを知る人間の一人。死んだ父親を目撃した旨を伝えた

他、倒れていたリリイを介抱する。メモリ使用については「姉を悲しませる」として反省している。

・明峰春

故人。JTR事件の被害者。潮風高校の学生が目撃した。オクトパスの擬態。

・沖田柀郎

故人。JTR事件の被害者。花梨が目撃した。オクトパスの擬態。

・琴葉姉妹の両親

故人。事故死していたものの、それぞれ姉妹が目撃した。オクトパスの擬態。

・虚音威風／仮面ライダースカル

故人。復活し、琴葉神社を訪れてゆかりを襲い絶望に叩き込んだ。スカルにまで変身し、圧倒的な強さもそのまま。オクトパスの擬態であり強力な攻撃もあの手で再現したもの。

・金堂雛菊

故人。リリイの母親。美しかったが夫が自殺し、ストレスで醜くなり病死した。オクトパスの擬態。

・神威岳

故人。ついななの相棒。ウェブ・ドーパントと違い人間の姿でついなの前に現れる。オクトパスの擬態。

・阪井芽衣子

水都総合病院の監察医。リリイの症状が神経毒によるものだと看破し入院させた。仮面ライダーの正体を知り協力してくれる人物の一人。

・ナインテイルフォックス・ドーパント

『白面金毛九尾の狐』の記憶を宿したドーパント。同一視される玉藻の前、妲己、そして天照大御神としての側面も合わせ持つ。存在そのものが圧倒的なプレッシャーを放ち、変身するだけで周囲の人間に本能的な恐怖を抱かせる。傾国の美女、の異名の通り文字通り大地を揺るがすプレッシャーを放つ他、九つの尻尾を自在に変形させる能力を持つ。自身を包んで殺生石になったり、一時的に切り離して分身や怪

物を生み出したり、その力は圧倒的。使用するメモリはゴールドメモリ。変身者はミュージアムの首魁にして東北家家長、東北至子。

・オクトパス・ドーパント

「蛸」の記憶を宿したドーパント、ミュージアムの集めた情報で大事な人間に化けて仮面ライダーを翻弄する。全てのタコの力を有しており、物理攻撃を無効化する軟体、擬態、触手、吸盤、墨爆弾、毒棘、再生能力、巨大化といった多彩な能力を持ち、一般メモリ最強と称される程。

●第十一章「Fへようこそ」の登場人物（Fはフェアリーテイルの他、ファンタジーなど）

・桐谷洗／フェアリーテイル・ドーパント

C I N E M A T ージョイ水都の映写技師見習い。自分が満足する映画を見たいがためにお伽話の世界に閉じ込めてどう動くかを愉しむ脚本家気取りのサイコパス。何人もの人間を結果的に殺害したのに罪悪感すら感じてないド外道。館長や映写技師を死なせても悪びれずに映画館をそのまま使っていた。誰彼かまわず取り込んでいたために純子と蛇門を取り込んでしまい犯行が発覚したばかりか至子に目を付けられ殺害されてしまった。容姿の元キャラはV O C A L O I D 3のギャラ子（キャラは全然違う弓弦君タイプのキャラ）。

・グレートル／ケツアルコアトルス・ドーパント

本章のメインヒロインで「ヘンゼルとグレートル」のキャラクター。当初は兄であるヘンゼルに会うべく蛇門を殺そうとしていたが通じないどころか妹だと喜ぶ蛇門に毒気を抜かれ、さらに共通点を知りもう一人の兄として手助けする道を選ぶ。しかしフェアリーテイル・ドーパントはそれを許さずケツアルコアトル・ドーパントに変えられてしまう。倒された後は笑顔で蛇門たちを見送った。

・チャシヤ猫

アリスとなったゆかりの前に現れた「不思議の国のアリス」のキャラクター。特に敵対しようとしなない珍しいキャラクター。

・ マッドハット いかれた帽子屋／ユートピア・ドーパント

アリスとなったゆかりの前に現れた「不思議の国のアリス」のキャラクター。アリスとお茶会するのが存在意義なためゆかりを殺してアリスを取り戻そうとする。杖繋がりですートピア・ドーパントに変身したが超能力は使えないため重力操作しか使えずサイクロンジョーカーに敗北した。

・ ハートの女王

アリスとなったゆかりの前に現れた「不思議の国のアリス」のキャラクター。アリスと勝負するのが存在意義なためゆかりを殺してアリスを取り戻そうとする。実はクイーンメモリを持っていたが使わずじまい。

・ トランプ兵

「不思議の国のアリス」のキャラクターでハートの女王の兵隊。

・ 狼／スミロドン・ドーパント

「赤ずきん」のキャラクター。赤ずきんと化したきりたんを食い殺そうとするがアルテミス・ドーパントに阻まれ激戦を繰り広げる。イヌ科なのにネコ科のスミロドンメモリを器用に使ってスミロドン・ドーパントに変身したがきりたんを執拗に狙ったのを突かれて敗北した。

・ 北風と太陽／ウエザー・ドーパント

「北風と太陽」のキャラクター。本来はどちらが旅人の服を脱がせるかと競う天候だったが、それを知らないなが「旅人」となったことで混乱を極め、合体してメモリを使いウエザー・ドーパントに変身。しかしせっかくの多彩な能力を脱がすことに全力を注いだため普通に敗北した。

・ シンデレラの姉たち／タブー・ドーパント&クレイドール・ドーパント

「シンデレラ」のキャラクターでシンデレラをいびる姉二人。シンデレラをいじめたいのかりリイを殺そうとドーパントになるも返り討ちにされた。

・ シンデレラの継母／テラー・ドーパント

「シンデレラ」のキャラクターでシンデレラをいびる継母。シンデレラをいじめたいのかりリイを殺そうとドーパントになるも、精神攻撃が効かないリリイとは相性最悪でありテラードラゴンを出すも普通に負けた。

・ラプンツェルの魔女

本編未登場。「ラプンツェル」を塔に閉じ込めた魔女。普通にアルテミス・ドーパントになれる純子に逃げられた。

・お菓子の家の魔女／親子丼・ドーパント

本編未登場。親子丼・ドーパントになり蛇門を襲うも負けた上に食べられた。

・青い鳥

フェアリーテイル・ドーパントの僕。メモリを集めば撒いている存在。

・フェアリーテイル・ドーパント

「お伽話」の記憶を宿したドーパント。複数の本棚が組み合わせられた様な上半身で、ひよろりとした手足が伸び、正面に開いて目が描かれた本の様な顔が浮いているという異様な姿。本棚には「人魚姫」や「赤ずきん」「不思議の国のアリス」「ヘンゼルとグレーテル」「北風と太陽」といったお伽話の名が並んでいる。対象をお伽話の世界に閉じ込める、それだけの能力。現実では無力に等しいがお伽話の世界は自由に操ることができ、ループさせたり「おわり」を隠したり、自我を持たないキャラなら操ることが可能。

試練のR

第四十二話：Tを止めろ／噛み砕かれた友情

路地裏で、東北星香に大金を支払ったその人物は震えて、ガイアメモリを両手で握って青ざめた顔で見つめていた。

「こうするしかないんだ…こうするしか…！」

焦点が合わない目で複数の歯でTと描かれたガイアメモリを見つめ、カタカタと震える手でガイアメモリを取り落として慌てて拾い上げるその人物に、東北星香はほくそ笑む。上司である至子が不機嫌だったので、オクトパス・ドーパントことメモリ売買成績ナンバー2であった巡寧瑠夏が抜けた分を埋めることも含めて仕事に出たが、至子が満足しそうなドーパントが生まれることを長年の経験による直感から確信する。

「お買い上げありがとうございます。しかし面白いですねえ」

「なにが…！」

「傾いた店を守るために大金を支払ってメモリを買う…矛盾してるじゃないですか」

「これは私の個人的な貯金だ！」

「それ削って資金にした方がいいと思いますけど。あ、別にいいんですよ気にしなくて。こちらとしてはなんでも。では頑張ってくださいね？」

ガイアメモリと私の手柄のPRをね、とほくそ笑む星香の去り際の言葉はその人物に届いていなかった。

《トウース！》

おそろおそると「齒」を意味するガイアウイスパーを鳴らしたガイアメモリをおしやれのために露出させているお腹に浮かび上がった生体コネクタに挿入するその人物の姿が、不気味な異形の怪物へと変わる。三本指に変わった己の両手をわなわなと眺めるトウース・ドーパント。

「…お父さん。私、やるよ」

そう覚悟を決めて拳を握ると変身を解き、誰もいないことを確認するとそそくさとその場を後にした。

フェアリーテイルの事件から数日。ついなさんが東北家に踏み込もうとしたが、上の圧力で止められたらしく、実質手出しできない状況の中。私達はできることをやっていた。私は資料集め、きりたんは鍵がかかってない東北家関連の記憶を探るらしい。

「え？「金堂」が襲われた？」

「ああ。キクも軽傷を負った」

東北外道について個人的に調べていると、リリイからそんな話を聞かされた。資料を纏めて直しながら話を聞く体勢となる。猫探しの依頼の報告書を作っていたあかりは憤慨していた。

「許せません！あんなに美味しいラーメン屋を襲うだなんて！」

「なにに襲われたんですか？」

「いやなんというかな……歯、らしい」
「は？」

リリーの差し出した紙に描かれたのは、歯の怪物としか形容できないドーパント。はあ、これは確かに「歯」だ。

「トウース・ドーパントでしょうか？」

「指から歯を飛ばして人を追い払った後、屋台に噛み付いてバリボリと砕いてしまったらしい。オレが駆けつけた時にはもう既にいなかった」

「人を追い払ってからだなんて律儀なドーパントですね」

あかりのぼやきに頷く。キクさんは軽傷を負ったらしいが、できるだけ人を巻き込まないようにしているのが分かる。狙いは屋台…？

「で、今西友に調べさせている。…お、言ってる傍からメールだ」

ビートルフォンを取り出してメールを確認するリリー。頷くと、紙の空いている余白の部分に書き足していく。

「ラーメン屋台「金堂」だけじゃなく、出水洋菓子店、オムライス専門店「オムライFOU」、水花饅頭店、レストラン「人魚の饗宴」、飯処「鴉の声」、ファーストフード店「歩色バーガー」なども似た様な被害を受けたらしい」

「有名店ばかりですね。何が目的なのでしょうか」

「食べ物に恨みがあるとかじゃないか？」

「太りすぎたか虫歯か…どっちにしる自分が悪いのに店を襲うなんてひどいやつですー！」

「いやそう決まったわけじゃないですから…」

ふんすつ！と憤るあかりを宥める。相変わらず、食のことになる

情熱が凄いなこの子は。するとリリイが札束を机に置いてこちらに視線を向ける。

「オレからの依頼だ。うちの店を滅茶苦茶にしてくれた馬鹿野郎を見つけて捕まえてくれ」

「…あかり？いいですか？」

「もちろんです！お金払われなくてもやりますよ！」

所長もそう言ってることですし、やりますか。東北外道については後回しです。東北外道の若い頃の写真とか出てきたんですが確認は後ですね。

ネルさん。JKコンビ。鳴花ーズ。西友の情報網。使える情報源を全部当たったが、被害が出た飲食店の名前は出てくるも、犯人であるドーパントの目撃証言だけで犯人の手掛かりが一切ない。犯行を終えたら威嚇しながら逃げるらしい。あと怪我したのはキクさんだけだともわかった。ドーパントを知っている分、反撃しようとしたせいだろうか。

「となると、犯行現場を押さえるしかありませんね！」

「共通点は全部、最近話題になってる飲食店ですか？」

「となると、近いのは安くて美味しい寿司屋「海坊寿司」だな」

「詳しいですね」

水都好きの私でもさすがに全部の店の詳細までは知りませんよ？と視線を向けると自慢げに語るリリイ。

「金は天下の回り者。エル・ドラード時代に金をかけずに美味しい飯食

うのは大事だったからな」

「ああ、料理できないんでしたっけ」

「……炊事できるからって調子に乗るなよ！」

「いや女子力ぐらい頑張りましょうよ……」

ぼやきながら、あかりを後部座席に乗せてハードボイルダーを駆り、ミダスホイラーを駆るリリイの後を追う。歩色町の水都アウトレットモール近くの店らしい。遠目からでも多くの客がいることが分かる。

「うん？あれは……」

近くの建物の屋上に立つ金髪ロングヘアの人物が見えた。後ろ姿しか見えないが、あの手に握られているのはメモリ：!? 咄嗟にドライバーを取り出し腰に取りつける。…あの後姿、見覚えがあるような。まさか……?

「リリイ！上です！」

《ジョーカー！》

【状況は分かりませんがドローパントですか。《サイクロン！》】

「ん？早速お出ましか！」

《ゴールド！》《パイレーツ！》

「【変身！】」

屋上の人物がトウース・ドローパントへと変貌し、「海坊寿司」の駐車場に降り立つのと同時に私達も変身。両手を掲げて放たれた歯の弾丸を、間に割り込むことで防ぐと驚くトウース・ドローパント。黒づくめのボディの胸部と両肩にピンクの歯茎の入れ歯の様な装甲がつけられ、歯のような爪がついている指は三本。頭部は歯でYを描いている様な頭部で聊か不気味だ。後部座席から降りたあかりが先導して仮面ライダーとドローパントが現れたことで周りの人間が逃げて行く。

「もしかして、仮面ライダーか！」
「なにがしたいのかわかりませんが、これ以上はさせません」
「オレたちが相手だ。バキボキに折って歯医者にぶちこんでやる」
「っ、私の邪魔をするなあ！」

殴りかかってくるトウース・ドーパント。歯のような爪の引っ掻きを避けて胸部に拳を叩き込むが、とんでもない硬さで弾かれてしまう。

「いったあ!？」

「ならー！」

《ゴールド！マキシマムドライブ！》

エルドラゴがアスファルトを黄金化させて右腕に装備しパンチを肩に叩き込むが、信じられないことが起こった。金のグローブの方が砕け散ったのだ。そのまま両手からの歯弾丸の一斉掃射を受けて吹き飛ばされるエルドラゴ。

『なんて硬さ……！』

「ならメタルですー！」

《メタル！》《サイクロン！メタル！》

サイクロンメタルに変身してメタルシャフトを装甲に覆われていない黒い身体部分を狙うが、信じられないことが起きた。何もなかった部位に歯が出現して弾いたばかりか、メタルシャフトに噛み付いてバリバリと噛み砕いて飲み込んでしまったのだ。しかも食べ終わったらまた何も無い状態に戻っている。

「なあ!？」

『メタルシャフトをいとも簡単に……』

「ならば！」

《トリガー！》《ルナ！》

《ルナ！トリガー！》

物理が効かないならとルナトリガーに変身。光弾を連続で発射するも次々と体中に現れた歯で噛み潰されてしまい、トウース・ドーパントは突進。両肩を掴まれて押し付けられた胸部の巨大な口で何度も噛み付かれて火花が散り、ダメージに崩れ落ちたところを蹴り飛ばされてエルドラゴに激突、もみくちゃになる。今の蹴りは…高校時代に見覚えが。

「私はもう止まれないんだ…邪魔をするな！」

「くそっ、なんてやつだ…」

「今まで戦ったどのドーパントより硬い…エルドラドが柔軟性の防御力ならば圧倒的硬度の防御力です…」

『全方位からマキシマムです！リリイ、手伝ってください！』

「了解だ。破壊力に特化しているこれで行こう」

《サンダー！》《ゴールデンサンダー！》

ゴールデンサンダーに変身したエルドラゴと並び立つ。きりたんの提案した同時にマキシマムならば…！

《トリガー！マキシマムドライブ！》

《サンダー！マキシマムドライブ！》

『トリガーフルバースト！』

「サンダーバッシュ…！」

エルドラゴは刃を高速回転させ大電流を放出させたイナズマサカリを手に突撃して、トウース・ドーパントの腹部に横一闪。それを援護する様に、トウース・ドーパントの正面以外の全方位にぶつけるようにして複数の光弾を同時に発射。一瞬臆するトウース・ドーパント

だったが全身に口を開いてトリガーフルバーストを文字通り全て噛み潰し、さらに腹部に出現した口の歯でイナズマサカリの刃に噛み付いて白歯取り。

「なんだと!?!」

「そんな馬鹿な!?!」

『体中に口を展開できるなら打つ手がありません!』

「私の邪魔を…するなあ!」

さらに、エルドラゴがイナズマサカリを引き抜こうとしているところに、頭部の歯の部分で頭突きを繰り返して出しエルドラゴを昏倒、変身解除させてしまった。

「今のは、効いたあ…」

「お前は…!?!」

倒れ伏したりリイに駆け寄り爪を振りかぶってとどめを刺そうとしたものの、踏み止まるトウース・ドーパント。それをチャンスだと踏んでリイを助けるべくトリガーマグナムを突きつけるも、胸部の歯に噛み付かれて噛み砕かれてしまう。

「そんなわけない…そんなはずがあ!」

「くっ!」

《ジョーカー!》《ルナ!ジョーカー!》

何やら怒鳴りながら突進してくるトウース・ドーパントに、後退しながらルナジョーカーに変身。腕を伸ばして拘束を試みるが、拘束しようとした腕にも口が出てきて噛み付かれ、たまらず腕を元に戻したところを掴みかかれる。掌に口が出てきた両手で肩を掴まれて、逃げられずにもがいていたところに頭突きを喰らった後に大きく投げ飛ばされて、駐車場を転がり止められていた自動車の一つに背中から激

突。

『このドーパント、異様に戦闘慣れしている…』

「この、喧嘩殺法は……がはっ」

あまりのダメージに変身が強制解除されて、車の残骸に寄りかかる。全身痛くて動けない。いや、それよりも……心が痛い。まさか。まさかとは思っていたが、今の戦い方を、私は知っている。高校時代、まだやんちゃしていた頃の私がコンビを組んで、茜さんのストーカーや不良をぶちのめしていた頃の、親友の戦い方にそっくりだ。

「そんな、まさか……仮面ライダーの正体が、ゆかりんだったなんて……」

「…マキさん、なんで」

「え？マキさん!？」

私が信じられないとばかりにその名を告げると、腹部に手を当ててガイアメモリを引き抜くトウース・ドーパント。そして現れたのは、事件ばかりで全然行けてなかった喫茶「弦巻」の看板娘にして私の幼馴染にして一番の親友。弦巻真希つるまきさんの姿だった。きりたんの驚く声が聞こえるが返事をする元気がない。

「マキさん、そのガイアメモリは悪魔の小箱なんです……それは麻薬も同然です。お願いですから手放して…」

「…ゆかりんに今の私の気持ちは分からないよ。私はもう、これを使うしかないんだ……」

《トウース!》

ハイライトの消えた目でガイアメモリを鳴らして露出したお腹に浮かび出た生体コネクタに、注射を打つかの様に勢いよく突き刺すマキさんの姿がみるみるうちに歯の化け物へと変貌。突進して「海坊寿

司」の店内に飛び込むと数分もしないうちに倒壊させてしまった。店から出てきて私を見つめて去って行くこうとするトウース・ドーパントに手を伸ばす。

「マキさん……！」

「ゆかりん、私たち友達だよね？友達なら私を見逃してよ。それとも、私に仮面ライダーだってことを隠していたってことはもう友達じゃない？……もしも、仮面ライダーとしてまた立ちはだかるなら、ゆかりん相手でも容赦しないから」

そう言ってトウース・ドーパントは齒の弾丸を地面に飛ばして煙幕を張ると、その場から去って行った。……まさか、マキさんがメモリに手を出すだなんて……私は、どうすれば。

「……なんでなんですか、マキさん……！」

立ち上がれもしない体で私はどうしたらいいか分からない感情を地面にぶつけるしかなかった。

第四十三話：Tを止めろ／蝕む親友の闇

「水都で悪さは絶対に許しません！」

五年程前。当時、水都を荒していた不良集団を許せなくて、喧嘩を売っていた。私は喧嘩に滅法強かったが多勢に無勢。そこに割り込んで加勢してきたのが、マキさんだった。正義感が強くて、言葉より先に手が出る、そんな人だった。

「二人の女の子相手に男が何十人も寄ってたかって恥ずかしくないの!？」

そう言っただけを切ったマキさんは頭突きに蹴りと言った喧嘩殺法で不良たちも圧倒。私も負けられないとばかりに大暴れして数十人はいた不良集団をたつた二人で降参させた。そうだ、マキさんは私の親友で、幼馴染で、私の最初の相棒だ。

——「もしも、仮面ライダーとしてまた立ちはだかるなら、ゆかりん相手でも容赦しないから」

なのに、マキさんはドーパントになって、私は手も足も出ずに叩きのめされて。こちらを睨んできたハイライトを失った目が忘れられない。なんで。なんで。なんで、こんなことに……

「ゆかりさん、ゆかりさん……!」

「きりたん……?」

きりたんの声で目覚める。事務所の寢床だ。顔を上げると雫が滴

り、何事かと頬に触れると、涙だった。寝ながら泣いていたのか…。

「うなされてましたよ、大丈夫ですか。…まあ無理もありません。まさかマキさんだったなんて…」

「…やつぱり、夢じゃないんですね」

記憶がフラッシュバックする。不気味な造形のドーパント。ダブルとエルドラゴのどんな攻撃も通じず、圧倒的な格闘センスによる喧嘩殺法で一方的に叩きのめしてきたトウース・ドーパント。その正体がマキさん…私の大親友。夢であってほしかった。今だって信じたくない。だけど…受け入れなきゃいけない。

「変身する前。ドーパントに変身する前の後ろ姿を見かけて、まさかと思っただんです。いつも喫茶店「弦巻」で見っていた、仕事する後ろ姿にそっくりで…マキさんがメモリに手を出すだなんて、信じられませんか…」

「ゆかりさん…信じられなくてもこれは現実です。せめて止めましょう。私達の手で」

「はい…だけど、どうすれば」

きりたんの言葉に頷くも、打つ手なしだ。どんな攻撃も歯が立たず、なんでもかんでも噛み砕いて無力化するあの防御力は如何様にもしがたい。

「フアングでも恐らく文字通り歯が立たないでしょう。ダブルでは恐らくエクストリームでしか…一応検索しましたがトウース、つまり「歯」は人体で最も硬い部位です。物を噛み切るための前歯または門歯、とくに硬い物を噛み切るための糸切り歯または犬歯、噛み切ったものを磨り潰すための奥歯または臼歯の3種類に分類されており、表面は非常に硬い白いエナメル質で、内部は歯の全体を支える象牙質と歯を組織に固定するセメント質で構成されています」

「ごめんきりたん。なんのこつちゃです。専門用語が多すぎる。よくはわからないが、もうなんか字面で硬いと分かる。」

「弱点は「酸」ですが逆に言えば酸以外のものは通用しません。歯はダイヤモンドでなければ削れないくらい硬い組織であり、ちゃんと歯磨きし続ければとんでもない硬さを発揮します」

「あれ歯磨きしてるんですかね…?」

「さあ?そもそも食べてたのが無機物のメタルシャフトか光弾ばかりでしたし…腹を壊すぐらいはしそうですけど」

「そういえば屋台や店も食い壊してましたね…あの細身の体のどこに入ってるんでしょうか」

「粒子レベルまで噛み砕く能力はあるみたいですね。胃袋には入らない、口だけの機構の様です」

「はあ、なるほど」

つまり食道が無い口だけが体中に生えるみたいなものか。あかりっぽいなとは思ってたが違ったらしい。っと、あかりといえば。

「そう言えばあかりは?リリイも。きりたんだけは珍しい」

「あかりさんならリリイのお見舞いです。入院したので」

「入院!?リリイがですか!」

「頭蓋骨にひびが入ってたんですよ。パキファケロの時と同じく。メモリの能力によるダメージじゃない物理的なダメージなので水都総合病院に運び込まれました」

それほどの威力だったというのかあの頭突き。いや、人体で最も硬い部位での頭突きだ、ひびですんでよかったです。…でもあれ?

「…私も頭突き喰らいましたけどぐわんぐわんするだけでそんなことありませんけど?むしろ全身が痛い」

「そういえばそうですね。なんででしょう?」

思い出せ、思い出せ。あの時、マキさん…いや、トウース・ドーパントはエルドラゴの正体がリリイだと知って動揺していた。知っている顔だったからだろう。オクトパスの事件の前に喫茶「弦巻」で食事するついでに「うちの新しい探偵です!」とマキさんに紹介しに行ったことがある。知っていた顔だから動揺した? いや、あれは…。

「マキさんはうすうす気づいていたのかもしれませんが…怪事件専門の継星探偵事務所の探偵で、怪物騒ぎの事件が起きているときに限って喫茶「弦巻」に顔を出さない私が仮面ライダーだと…」

「巻き込みたくないからと露骨に距離を置きますからねゆかりさんは。なにかおかしいと感づかれてもしようがないと言えます」

「エルドラゴを倒して案の定知り合いの顔だったから、もう一人の仮面ライダーが私だとうすうす気付いて、手加減した。そう考えられませんか…?」

だから私はリリイ程のダメージを負わなかった…そうとしか考えられない。

「まだ、人の心は残っている…そう、信じたい」

「説得すれば止まってくれると? 甘いですが、ゆかりさん。貴方は何度、そのハーフボイルドによる甘さで説得しようとして痛い目に遭ってききましたか」

「ぐっ…」

ハーフボイルド。ハードボイルドには遠く及ばない半熟卵。たびたび甘い判断をする私に対してきりたんの使う呼び名を久々に言われた。そう言われたら反論できない。メモリの力の強大さやメモリの毒素ゆえに地球の記憶に飲み込まれたり、精神と肉体を蝕まれるこ

とで、怒りや憎しみといった負の感情を助長・増幅させやすく暴走・依存症になつてしまうことを知っているのに、悲しい理由があつてメモリに手を出した人間の善性を信じて、説得をしよう。今回だつてきつと…と思つてしまった。私の悪い癖だ。

「で、でも！マキさんは大親友です！きりたんよりも前の相棒なんです！ちゃんと話せば…！」

「虚音イフの相棒でさえ説得を聞き入れずにどうなつたか忘れまじたか。メモリを利用してしまつた人間はもう、手遅れなんです。琴葉葵の様な善意…善意？で使つた人間だつて暴走したんですよ？エルドラドメモリを使いこなしていた強靱な精神力を持つていたリリイでさえ、毒に影響されていたと言つていたじゃないですか」

「リリイすごいですよね、色んな意味で」

「反論できないからつて話を逸らさない！」

「すみません…」

いやでもすごいと思つたのは間違つてないですよ。思い返してみても精神力が並大抵の物じゃないと思うんですよ、と心の中で言い訳してみる。実際に言つたらまた怒鳴られそうだ。

「まったくもう…ゆかりさん。貴方が憧れるハードボイルドならば、いかなる事態にも冷静さを保ち、自らの感情を押し殺しても為すべき事を為す…そうなんじゃないですか？」

「その通りです…でも、私は…！」

「邪魔するでー」

反論しようとする、ちょうど同じタイミングでついなさんが扉を開けて事務所に入つて来て、三人揃つて固まる。ついなさんは私達の間の空気が悪いことに気付いたのか巻き戻る様に後退して。

「邪魔するんやったら帰つてーあいよー」

「待って待って待って?!」

どこかで聞いたようなボケをしながら出て行こうとしたのできりたんと一緒に慌てて呼び止める。するとついなさんは不貞腐れながら手にした書類をひらひら振って頬を膨らませる。

「なんやねん。せっかく弦巻真希の情報を集めて来たつてのにうちは邪魔者かいな」

「そんなことありませんよ!助かります!」

「マキさんの情報……なにか、悪いことでも……?」

ついなさんが集めてきた情報、というのに悪い予感がする。私が知らないといけなかった、なにかだという予感が。

「ああ、それがな。弦巻真希の実家でもある喫茶店「弦巻」なんやが…今月いっぱい閉店するらしいねん」

「え…?」

「閉店…ですか。なるほど、繋がった」

語られた言葉に呆ける私と、逆に納得できたのか頷くきりたん。喫茶店「弦巻」が閉店……?潰れるつていう事ですか……?」

「なんでもな。半年前から客足が遠のいていたらしいんよ。覚えはあるか?」

「たしかに、ここのところ客が少ないとは思ってましたが…」

「ここ半年で水都に次々と新しい飲食店ができたり、新メニューが出たりしてそつちに客を奪われて、客足が遠のいたらしくてな。襲われた店は、全部それや」

「じゃあ、マキさんの動機は…」

「自分の店である喫茶店「弦巻」を潰させないために、ライバル店を襲撃したということですか…?」

「そういうことに、なるやろな」

重たい空気がその場を支配する。主に私が原因であり、きりたんとついなさんはこちらを見て気を遣っているのが見て取れる。マキさんの店が、そんなことになっていたなんて……いや、違う。あの店は、マキさんの店じゃない。

「…親父さんのためです」

「え?」

「マキさんが、自分の正義感を無視してまでガイアメモリに手を出したのは恐らく、マキさんの親父さんのためです」

「それはなんでや?」

「あの店はマキさんの親父さん…弦巻誠人さんが亡くなったマキさんの母親の夢を叶えようと家を改造して作った店らしいんです。マキさんもミュージシャンになるという夢を諦めてその手伝いを……それだけ、思い入れ深い店なんですよ」

マキさんがどんな思いで夢を諦めたのか知っている。それだけに、やりきれない。

「だからって他の店を壊していい理由にはならへんやろ。ゆかり、お前は許すんか?」

「許せるわけがないでしょ…!他の店だって誰かの夢が形になったもののはずです。身勝手に消していい理由にはならない!」

それは確かなはずだ。マキさんを見逃す理由にしては断じてならない。

「なら、行きましょう!ゆかりさん!弦巻真希を止めるんです!」

「でも、どこに行けばいいのか…」

「それなら任せい。条件に合う店でまだ襲われてないところもメモし

ておいた」

そう言つてメモを見せるついなさんに頷く。絶対に止めて見せる。

歩歌路町の商店街。以前JTR事件が起きたあそこだ。そこにある牛丼屋「すい屋」が見える建物の屋上に、マキさんはいた。色んな店をついなさんと手分けしてしらみつぶしに巡つてようやく見つけた。

「もう少し…もう少しで…！」

《トウース！》

トウース・ドーパントになって飛び降りると、それまでにぎわつていた一般人が逃げて行く。人がいなくなつたことを確認してから両手を入り口に向けるトウース・ドーパントだが、人がいなくなることはこちらからしても好都合だ。きりたんと二人で歩きながらメモ리를構える。

《サイクロン！》

「これ以上はさせません、ゆかりさんのためにも…！」

「…きりたん。君も仮面ライダーだったんだね。残念だなあ。…ゆかりん。ここに來たつてことは、そういうことだよな？」

首を傾げて訪ねてくるトウース・ドーパントに、私は覚悟を決めてメモ리를掲げてガイアウイスパーを鳴らす。

《ジョーカー!》

「いいえマキさん。私は、貴方の親友として…貴方を止めます! 半分の力を貸してください、きりたん!」

「変身!」

《サイクロン! ジョーカー!》 《エクストリーム!》

メモリをドライバーに装填、同時にエクストリームメモリが駆けつけてきりたんを吸収すると同時にドライバーに装填。開閉してサイクロンジョーカーエクストリームに直接変身する。

「プリズムビツカー!」

《プリズム!》

「はああああ!」

歩み寄りながらプリズムビツカーを取り出してプリズムソードを引き抜き、トウース・ドーパントの間合いに踏み込み一閃。

「本当に、残念だなあ!」

「なっ!? があああっ!?」

しかし、貫くはずだったプリズムソードの剣先は弾かれてしまい、隙ができた所に歯の肩装甲によるシオルダータックルが炸裂。大きく吹き飛ばされる。なんで…!

「解析完了…: トウースの能力はあくまで体中の口の開閉。硬さは能力ではなく、肉体の変質…! プリズムメモリでは無効化できない…!?!」

「ああ、嫌だなあ… ゆかりん… ゆかりちゃんを殴る感触、嫌だなあ嫌だなあ…:」

転倒している私達に駆け寄って襟元を掴んで持ち上げ、歯を出現さ

せて膝蹴りを叩き込んでくるトウース・ドーパント。何度も何度も叩き付けられ、仮面が罅割れて行く。

「ああ、なんだろう。このどす黒い感情は。怒りと悲しみと失望が入り混じった、これはあー！」

「これは…!?!」

激昂と共に、全ての歯の間から何か黒い物が沁み出して、それを纏った爪による斬撃を胸部のプリズムサーバーに受ける。その瞬間襲いかかる苦しみと激痛。これは、毒…!?

「はは、白かったのに黒く染まっちゃった…これなら！」

悶え苦しむ私達を尻目に、「すい屋」に視線を向けて毒を纏った両腕の爪を振るうトウース・ドーパント。すると毒が飛んで斬撃となり、「すい屋」に炸裂。当たったところがドロドロと融解してしまうのを目の当たりにする。

「ハハハハ、ハハハハハッ！壊れてしまえ！私の夢を奪うもの、すべて！」

「駄目です、マキさん…!」

手を伸ばして叫ぶが狂笑を上げる親友には届かない。変り果てた親友に、私は^{ゆかり}シヨックを隠し切れなかった。

第四十四話：Tを止めろ／もうあの日々には

「ハハハハ、ハハハハハハッ！壊れてしまえ！私の夢を奪うもの、すべて！」

「駄目です、マキさん…！」

高笑いを上げながら黒く染まった歯の弾丸を周囲にばらまくトウース・ドーパント。いや、その姿は歯から沁み出してきたどす黒い粘質の液体により真つ黒に染まり、ブラックトウース・ドーパントとも言ふべき姿になっている。本来の標的の「すい屋」だけじゃない。関係ない他の商店街の店まで毒で蝕み融解させていく。

「何時か私の夢を…お父さんの店を脅かすかもしれない。そんなものは全部全部、なくなっちゃえ！」

「駄目です！」

手を伸ばすが届かない。私の声も届かない。止めないといけなのに、体が痺れて、激痛に苛まれて、動けない。

《エンジン！マキシマムドライブ！》

「それ以上はさせへんで！」

次の瞬間、商店街の入り口から炎を纏ったアクセル バイクフォームが突撃。ブラックトウース・ドーパントに正面から前輪を掲げて激突するも、ブラックトウース・ドーパントは何も臆せず両手で前輪を受け止め、漆黒の猛毒で前輪を起点にアクセルを蝕んでいく。

「なんやこれは…!?!」

「どこの誰だか知らないけど私の邪魔をするなら、容赦しないから！」

そのまま融解させて取り外した前輪を投げ捨てると、人型に戻った

アクセルの装甲に連続で黒く染まった爪を叩き付け、分厚い装甲を融解させてダメージを与えて行く。アクセルは情報と違う容姿と能力に混乱しているようで、指で抉り取られた跡が残る装甲が痛々しい。

「噛み付きにさえ注意すりやよかつたんやないのか…!」

《エレクトリック!》

「ああ、ゆかりちゃんの仲間なんだ。悲しいなあ、悔しいなあ。ゆかりちゃんが悲しむことになるのが、心底嫌だなあ!」

電撃迸る剣身を右手で掴み、握りしめ融解させてぼつきりと真ん中から折り砕くブラックトウース・ドーパント。エンジンブレードを引っ張っていたせいで残骸を手にしてバランスを崩したアクセルにブラックトウース・ドーパントは肉薄。リバーブローを腹部に叩き込んでアクセルを吹っ飛ばして壁に激突させるとそのまま突進しショルダータックルを顔面に叩き込み壁にめり込ませる。

「この程度…毒の鬼を退治した時に比べたらあ!」

《アクセル!マキシマムドライブ!》

歯の形をした肩装甲と壁に頭部を挟まれもがきながらもアクセルドライバーのスロットルを回してマキシマムドライブを発動、ボディを赤熱させてブラックトウース・ドーパントに距離を取らせてブレーキ痕を描くような飛び回し蹴りを叩き込むアクセル。しかしそれは、炸裂した瞬間その部位に出現した真っ黒な歯の口で噛み付かれて受け止められてしまう。

「そんなことするんだあ?…私は誰も傷つけないのに。邪魔するのなら、足一本喰われても文句は言わないよね?」

「ぐっ…あああああ!?!」

ジュージューと鉄と肉の焼ける音と匂いがする。噛み付かれたア

クセルの右足が、沁み出した黒い猛毒で侵食されて今まで聞いたことも無いついなさんの苦痛に喘ぐ声が響き渡る。

「まさか骨まで溶かして…？駄目、です…！」

毒のダメージを受けながらもなんとか立ち上がる。こちらに気付いて放たれる黒い歯を、なんとか手にしたビツカーシールドにプリズムソードを突き刺しプリズムビツカーで防ぎながら歩み寄り、プリズムビツカーを投擲。黒い歯を弾きながらクルクルと回転してブラックトウース・ドーパントの顔面に炸裂。よろけさせてアクセルを解放させることに成功し、戻ってきたプリズムビツカーを手に取り一息つく。

「解析…：トウース・ドーパントの能力変容。使用者の感情で「虫歯」状態になったことによる、ありとあらゆる物体を蝕み朽ちさせる猛毒生成…：解析完了。無効化！」

エクストリームの能力で地球の記憶に接続、クリスタルサーバーにこびりついた猛毒を無効化して復活する。解析して無効化するエクストリームが持つプリズムビツカー以外では守れないことが解析してわかった。ブラックトウース・ドーパントから沁み出したあの黒い液体はどす黒い感情が実体化した、万物を蝕む虫歯菌の様な猛毒だ。

「ぐっ…そのまま倒れていればよかったのに…！私の邪魔をすると
いうのなら…！」

頭を押さえながら体勢を立て直し、頭部と胸部と両手から滴り溢れる漆黒の猛毒を胸部に溜めて行くブラックトウース・ドーパント。大技が来ると確信し、こちらもアクセルを庇うように立って手にしたプリズムビツカーにメモリを装填させていく。

「全部終わるまで寝ていてよ、ゆかりちゃん！」

《サイクロン！マキシマムドライブ！》《ヒート！マキシマムドライブ！》《ルナ！マキシマムドライブ！》《メタル！マキシマムドライブ！》
「ビツカーファイナリユージョン!!」

どす黒い毒液が圧縮された球体が発射され、いつものジョーカーメモリでなくメタルメモリを装填して防御よりにしたビツカーファイナリユージョンの、七色の光で構成された強固な盾を発生させて受け止めると、黒い煙が発生し何も見えなくなる。

「くっ、何も見えない…っ！」

プリズムソードを引き抜いて警戒していると、何かが高速で向かってきたのでプリズムソードを振るって迎撃。しかし地面に落ちて消えたそれは黒い歯で。

「右や！」

「ゆかりちゃんは、考えるより前に反射的に動いてしまう…：：：変わらないね。私とは大違いだ」

「っ…!?!」

ついなさんの言葉に反応してビツカーシールドを右に置くも、それすらフェイントで。いつの間にか右に体勢を低くして接近していたブラックトウス・ドーパントの足払いを受けて転倒、したところに右足の爪先に出現した口の黒く染まった歯で右腕を噛み付かれる。

「ぐっ…!?!」

「ゆかりちゃんは根性が凄いからな…：：：ぐうの音も出ないほどに痛めつけば諦めてくれるかな？」

「マキ、さん…：：：があああああ!?!」

そのまま左足を軸にグルグルと回転するブラックトウース・ドーパントに竜巻の如く振り回されて、コンクリートの壁に何度も何度も、頭から、左腕から、足から、滅茶苦茶に叩きつけられ、意識が遠のいて行く。そして二十回転ぐらいしてからいったん立ち止まると、私達の右腕に噛み付いたままグルンと縦に一回転。

「っ……………」

「…ごめんね」

「しまっ…!?!」

おぼろげな視界にアクセルが映った、かと思えば宙返りしてオーバーヘッドキックでもするかのようブラックトウース・ドーパントは私達を頭から、横たわっているアクセルに叩きつけられ、激突。同時に変身が解除されてついなさんと私、きりたんがボロボロの姿でその場に転がった。

「ついなちゃんだったんだ。たまにうちの店に来てくれて、常連になってくれそうな人だったんだけど…こうなったらもう来てくれな
いか。残念だなあ」

気絶しているついなさんときりたんの襟元を両手で掴んで引き摺り、安全な路地裏に運びながらそう呟くブラックトウース・ドーパント。その扱い方から優しさが見えて、涙が出てくる。なんで、こんなに優しい人が、ドーパントにならないといけないんですか……………」

「マキ、さん…お願いです、もうやめてください……………自首してくださいよ……………」

「ゆかりちゃん。私からもお願いだ。お願いだから、黙って見過ごしてよ。全てが終わったらさ、ゆかりんブレンドのコーヒーと特製カルボナーラで歓迎するからさ。また、来てよ。私の、お父さんの店に」
「このまま、全てが元通りになることはもう、ありえませぬ…! わかつ

ているでしょう、メモリに手を出したその時から……!」

頭から血が流れて意識が朧気になりながらも、意識を振り絞って声を張り上げ説得する。しかしブラックトウス・ドーパントは止まらず。きりたんといいなさんを路地裏の壁に寄りかからせると、私に歩み寄ってくる。その頭部の歯の間目の目に当たる部分から、黒い液体が滴った。それは涙の様だった。

「……なんでさ」

「マキさん……?」

「なんで、ゆかりちゃんが仮面ライダーなのさ! ゆかりちゃんが仮面ライダーでさえなければ! 私がドーパントだと知られずに! 店もずっと存続して! 今までと同じように、過ごせたじゃん……」

「……私はおやっさんから引き継いだんです。人知れず水都を守る仮面ライダーと言う生き方を……それに、もしも私が仮面ライダーじゃなかったとしても、壊される飲食店に疑問を抱き、独自に調査して……貴方に行きついていましたよ」

「……探偵だから?」

そう尋ねてくるブラックトウス・ドーパントが変身を解き、マキさんが顔を覗き込んできたので首を横に振る。

「違います。探偵以前に、親友として。親友の貴方が犯人だと信じたくないから、本気で調査して、貴方が犯人だと知って絶望していたことでしょう。でも……!」

「ぐっ……!?!」

全身に力を振り絞って、私を覗きこんでいたマキさんに頭突き。怯ませて、痛む身体に鞭打ち立ち上がり、額を押さえて呻くマキさんに飛びかかる。

「今、私は仮面ライダーでよかった！物怖じすることなく、マキさんを止めに行けるから！」

「きやあ!？」

衝撃で地面に倒れ込んだマキさんに組み付いて手を伸ばし、右手に握られたトウースのガイアメモリを奪うべく暴れる。きりたんが気絶している。きりたんが目を覚まさない限り、仮面ライダーにはなれない。メモリガジェットはあるが、起動している間にまたドーパントになられたら勝ち目がない。だから…！

「くっ…離れてよー！」

「離れません！」

この身一つで、マキさんから悪魔の小箱を没収する！それしかない！マキさんは長い両足で私に組み付き、締め上げられて左手を顔に押し付けられる。絞め技までできるなんて、マキさん戦闘センスが抜群すぎやしないだろうか！私も右手をマキさんの顔に押し付けて左手を懸命に伸ばすが届かない。あと、もう少し……！

「っ!？」

その瞬間だった。本能的な恐怖が私に襲いかかって身がこわばる。なんとか恐怖を押し殺してマキさんの右手首を捻り上げてメモリを取り落とすことには成功。体勢を変えて手に取ろうとするマキさんを必死に押さえるが、この感覚は……まさか……!？」

「戦いで勝てないからって醜い争いで勝とうだなんて。見苦しくてしかたありませんわ」

「お前は…!？」

私とマキさんの目の前でメモリを細い指でつまみ、拾い上げた人物

がいた。透き通った白髪に赤い目の和服美人。東北至子……なんでここに!?

「ほら、邪魔ですわよ」

「がつ!？」

背中を掴まれて持ち上げられ、マキさんから引き離されると細腕からは考えられない怪力で投げ飛ばされる。壁に背中をぶつけて呻く私の前で、立ち上がるマキさんに手を伸ばす東北至子。

「弦巻マキですわね? わたくしについてくれば、貴方の店を立て直すチャンス差し上げますわ」

「はあ、はあ……本当に……?」

息を荒らげながら東北至子を見上げるマキさんに、東北至子はにやりと笑ってゴールドメモリを取り出す。

「本当ですわ。わたくし、あなたが気に入りましたの」

「……メモリを売ってくれた人の仲間……? わかった、ついていくよ」

「交渉成立ですわ!」

《ナインテイルフォックス!》

ガイドドライバーにメモリを挿した東北至子の変貌したナインテイルフォックス・ドーパントの尻尾に包まれていくマキさんに手を伸ばす。

「マキさん! 駄目です、そいつは……!」

「……ゆかりちゃん。私は店を救えるなら何でもするよ。その邪魔をするなら……絶交だから」

そう言い残してマキさんはナインテイルフォックス・ドーパントの

九尾に包まれて霞の様に姿を消し、私は限界を迎えて意識を失った。

第四十五話：Tを止めろ／悪魔の誘いと残酷な真実

礼拝堂と思われる赤いカーペットやカーテンが目立つ広間にて。弦巻マキはその中央で、ナインテイルフォックス・ドーパントから発せられるプレッシャーに縮こまっていた。

「ようこそ、ミュージアムへ。ガイアメモリの力を引き出す強いドーパント、歓迎いたしますわ」

正面にはナインテイルフォックス・ドーパント。右前方にはアルテミス・ドーパント。右後方にはシャーク・ドーパント。左前方にはエクスタシー・ドーパント。左後方にはホワイトアウト・ドーパント。ミュージアムの主要メンバーである幹部ドーパント五名に囲まれ、メモリをナインテイルフォックス・ドーパントを握られているため変身することもできず話を聞くしかない。

「あの……私の家の店を救ってくれるとは本当ですか……？」

「本当ですわ。我がミュージアム、表の顔は水都でも有数の名家、東北家。そしてわたくしはその家長にしてミュージアムの首魁、東北至子。ここまで明かすのだから信用してほしいですわ」

「東北家……そんな名家から出資してもらえれば立て直せる……！」

「そういうことですわ」

条件に釣られてついて来たが、現実的な解決法を提示されて沈んでいた気分が高揚する。親友の気持ちを裏切ってまでついてきた、目を逸らせる理由がそこにある。

「条件は……！」

「簡単です。ミュージアムに入ってください」

「え……？」

そうやってきたのはシャーク・ドーパント。続けてホワイトアウト・ドーパントが演技の様に仰々しく身振り手振りで大袈裟に語る。それを黙って見守るアルテミス・ドーパントとエクスタシー・ドーパント。

「実は先日、うちの構成員でも有能だった売人が倒されました。埋め・合・わ・せ、が必要だと話してたんですよ」

「私の部下だった人間なんですけどね。仮面ライダーに手を出してしまっただけに……」

オクトパス・ドーパントこと巡寧瑠夏。彼女が抜けた穴はミュージアムにとつてかなりの痛手であり、メモリ売買の結果がすこぶる落ちている。シャーク・ドーパントこと星香も久々に現場に出てマキにトウースのガイアメモリを売ったのはそれが理由だった。

「そんな仮面ライダーを、貴方は一人で戦い一方的に叩きのめした。一人だけでなく三人とも、それも最強のメモリと呼ばれるエクストリームメモリを使ったサイクロンジョーカーエクストリームさえも、簡単に退けてしまいました。それも一般のメモリで。これは凄いことです、偉業です」

パチパチパチと拍手を送るホワイトアウト・ドーパントに委縮するマキ。言ってることはチンプンカンプンだったが、褒められていることは分かる。自分じゃ想像もつかない巨悪に、正義の味方をぶちのめしたことを褒められていることを理解してしまった。親友への申し訳なさと恐怖でおかしくなってしまうそうだった。

「貴方のことは調べました。弦巻マキ。喫茶店「弦巻」の看板娘。潮風高校のOBで元軽音部、仮面ライダーWの片割れである結月ゆかりの幼馴染。必死に止めてくる幼馴染を返り討ちにするとは。覚悟は決めているようですね」

シャーク・ドーパントの、自分にガイアメモリを売った女であろう声の言葉に余計なお世話だと心の中で毒づくマキ。覚悟なんて決まっただけだったが、ラーメン屋「金堂」の女主人を傷つけ、知り合いだった仮面ライダーたちを次々と重症に追い込んで、嫌でも覚悟を決めてしまったのだ。

「特筆すべきはその戦闘センスでしょうか。結月ゆかりと組んで不良の団、総勢47名を相手にして壊滅させる。流派は截拳道ジークンドーを主体とした我流ですね。死んだ母親から習ったのでしょうか？なんて、小説の主人公の様な人なのでしょう！面白いです！面白いですよね!」
「は、はあ……」

興奮しながら顔を近づけ捲し立ててくるホワイトアウト・ドーパントに、マキは引きながら苦笑いを浮かべて頷く。

「それで、どうしますか。：残念ですが姉様が名乗った以上、後戻りはできませんが」

「もし断ったら死んでもらうのだ。ついて来た以上、その覚悟はあったのだ?」

そう言っただけで弓を突きつけてくるアルテミス・ドーパントと、拳をパキパキと鳴らすエクスタシー・ドーパントに、死の恐怖を感じたマキは、きつと睨み付ける。

「私は、お父さんの店の為なら何でもする！もう悪魔にだって魂を売ったんだ！親友の信頼を裏切って、傷つけました！ミュージアムに入ることも、悪の手先になることも異論はない！教えて、私はなにをすればいいの!?!」

「話は簡単ですわ」

必死の訴えに、幹部四人を一步下がらせマキに歩み寄って屈み、視線を合わせたナインテイルフォックス・ドーパント……否、実の娘の身体を乗っ取った悪魔は妖しく笑みを浮かべる。

「目障りな邪魔者である結月ゆかりを始末し、その相棒であるきりたんと呼ばれている少女を連れてくること。それを成し遂げたら幹部として高待遇で貴方を迎え、貴方の店が一生困らない援助を約束いたしますわ。弦巻マキ、貴方なら簡単でしょう?」

「始末って……私の手で、ゆかりちゃんを殺せって!?!」

嘘だよね?とでも言いたげに震えて己を見上げるマキの顔がお気に召したのかにんまりと三日月の様な笑みを浮かべるナインテイルフォックス・ドーパントは、人差し指を立てて揺らしながらたしなめるように続ける。

「結月ゆかりは正直目障りなだけでどうでもいいのですけど、手を汚す覚悟は決めたのでしょうか?親友だろうが手にかける覚悟を見せて欲しいのですわ」

「じゃあ、なん、で……きりたんを……」

「我々の計画に必要不可欠だからですわ。まだ準備ができてないので、まあ回収が早くても問題ないでしょう」

「……そんな」

父親の店の、己の夢の存続のために親友を始末しなければいけない。五分間、葛藤し続けたマキは立ち上がり、眼前のナインテイルフォックス・ドーパントに口を開く。

「私は……」

「…ゆかりさん」

ブラックトウース・ドーパントにズタボロにされたものの、ゆかりさんとついなさんに比べて比較的軽症で済んだ私は、相棒である結月ゆかりの自宅の自室の扉前に立っていた。あのあと、駆けつけた月読アイの乗ったりボルギャリーに回収された私達は水都総合病院まで運ばれ、打ち身などの手当てを受けた。その後には私は一人で突破口を掴むべく捜査していたが、あかりさんからゆかりさんが手当てを終えるなり病院から抜け出したと聞いて捜し、ここまで来た。

「姉ちゃん…」

「姉さん…」

ゆかりさんの双子の弟の結月縁と、その妹で中学生の結月雫が心配そうに壁から顔を出して見ている。心配ですよ、ゆかりさんがここまで塞ぎ込むなんて。

ゆかりさんとその弟妹は数年前に両親を亡くしていると聞いた。それから、ゆかりさんは一時期探偵になると言う夢を諦めようとしたものの、縁さんと雫さんは姉の夢を後押しするために就職し、バイトを始めたのだと言う、そんな愛されているゆかりさんがボロボロの姿で、とても傷付いた表情で帰宅して自室に閉じこもるものだから、ゆかりさんを捜していた私に連絡が来て、今に至る。

「…」一応報告です。ついなさんは右足が骨折した上に爛れて戦闘不能。リリイは未だに昏睡中です。あかりさんと、元エル・ドラードの二人がつきつきりで看病してます。戦えるのは、マキさんを止められ

るのは私達だけです」

返事はないが現状報告に留める。ちなみにエンジンブレードは月読アイが回収して修理と強化を行っているらしい。そんなことを考えていると、返事があつた。

「…止められなかったじゃないですか」

泣いていたことが分かる震えた声が扉越しに聞こえてきた。返事がしたことが嬉しくて、用意してきた言葉を続ける。

「ナインテイルフォックスに攫われたんですよ!? マキさんを助けられるのは私達だけです! 方法なら、私が見つけます! だから……」

「攫われたんじゃないやありません、自分からついて行ったんです! 私の制止の声も聞かずに、ですよ!?! それに絶交だなんて……嫌ですよ、私は。マキさんと絶交だなんて考えたこともなかった。私はもう、なにもできな……」

声を荒らげたかと思えば泣きじやくる声が聞こえる。二度も手痛い敗北を喫し、エクストリームですら返り討ちにされて、マキさんに拒絶されて……ゆかりさんは完全に心が折れてしまったらしい。いつもは仲間を勇気づけるゆかりさんがこうなったなら、私が何とかしないといけない。

「…わかりました。ここからは独り言です、いいですね」

調査した結果が記されたメモを手に、私は言葉を紡ぐ。

「私が喫茶店「弦巻」に向かうと閉まっっていて、変だと思った私は無理やり侵入して、今にも首を吊ろうとしていた弦巻誠人を発見。慌てて取り押さえました」

「親父さんが…!？」

「警察からマキさんがメモリに手を出し水都の飲食店を次々と襲ったことを知らされたそうです。自分の存在が「呪い」になったのだと確信し、マキさんを解放するために死のうとした…そう語ってました。とりあえずフロググポッドを置いて見張ってもらってます。そして、事情と真実を聞きました」

「なにを……ですか？」

そう尋ねてくるゆかりさんに、私はある確信を抱きながら続けた。

「気付いていたはずです、ゆかりさん。誰よりもマキさんの傍に、彼等親子のことを見てきた貴方なら」

「……………」

「経営難も理由の一つですが……喫茶店「弦巻」はもともと、そろそろ閉店する予定でした。そのことをマキさんには黙っていた。マキさんはそれを知らずに経営難を何とかするべく暴走に至った。だけど、閉店させる理由は……………」

「…マキさんのためですね」

「…やっぱり。わかっていたんですね。そしてそれを知ってしまったらマキさんが壊れると思った、だから言えなかったのでしょう。そして言えなかったせいでマキさんが暴走を続け、終いにはミュージアムの手に渡って、ゆかりさんの罪悪感は限界を迎えてここにいる。そんなんでしよう？」

「…だって、だって、言えるわけないじゃないですか!!」

怒号が響く。泣き叫ぶゆかりさんの姿を幻視する。

「言えるわけがない！マキさんの本当の夢のために、あの店を閉めるだなんて！親父さんの店を守るために、そのただけに、自分の夢を諦めたマキさんに！言えるわけがない！」

ドンツ！と、行き場の無い慟哭を壁をぶつける音が聞こえた。

「確かにマキさんは未練たらたらでしたが、大事なギターを売って未練を断ち切った！マキさんなりに納得した結果なんです！いまやあの店はマキさんの生きがいなんですよ!? ガイアメモリに手を出すほどに大事な、マキさんが守りたい夢そのものだ！それがマキさんのために無くなるだなんて……言えるわけがない」

「…弦巻誠人もそれをわかっていて、責任を取ろうとしてました。自分が死ねば娘は止まるのだと信じて。娘のために、父親のために。それぞれへ向けた思いが空回りしてすれ違ってしまったのが今回の事件です。だけど……娘に夢を追ってほしいのだと、マキさんの背中を押すのだと、そう思った弦巻誠人の思いも本物です！だって、マキさんのギターを買い戻して渡そうとした、矢先だったんですから」

「……え？」

信じられないという声が聞こえてきたので、メモをちぎって扉の隙間から部屋の中に入れて続ける。

「虚音イフに依頼していたそうなんです。ゆかりさんに知られないように、マキさんのギターの行方を追ってほしいと。ビギンズナイトの直前に行方が分かって、弦巻誠人が今の持ち主を必死に説得して、買い戻したはいいいけど楽しそうに喫茶店の仕事にいそしむマキさんを見て言い出せなくて、ようやく覚悟を決めた……その矢先にこんなことに。本当に間が悪かったただけなんですよ。この思いは、伝えるべきだと思いませんか」

「……でも、次邪魔したら絶交だって……」

「絶交されるのとマキさんが悪の道に堕ちて手遅れになると、どっちが嫌ですか」

「…そんなの、後者に決まっていますじゃないですか!」

扉が開く。そこにはいつもの男装ではなく、私服の黒のウサミミ

パーカーを被り紫のワンピースを身に着けたゆかりさんが、覚悟を決めた顔で立っていた。

「吹っ切れましたか？」

「いいえ！だけど、マキさんに嫌われることよりもマキさんが戻ってこなくなる方が嫌だと、私の心が叫んでいる！」

「まったく、貴方は本当にハードボイルドなんだかハーフボイルドなんだか…」

「行きますよ、きりたん…：…ぐうつ」

「姉ちゃん!？」

「無理しないで！」

先陣切って外に出ようとするゆかりさんだが、私に比べて重症な身体で廊下を歩こうとしてすぐ倒れてしまい、縁さんと雫さんが駆け寄ってくる。辛そうなゆかりさんに視線を合わせて、私は不敵に笑う。

「今回は私に任せてください。ゆかりさんの「昔」の相棒は、「今」の相棒である私が止めて見せます。だから…：…いつも通り半分だけ、力を貸してください」

「…わかりました、きりたんを信じます」

悔しげながらも私を信じてくれたゆかりさんに頷き、私は結月家を後にした。

第四十六話：Tを止めろ／歯牙の激突

ゆかりさんの家を後にし、事務所に帰還する私。マシンハードボイルダーには乗れないので徒歩だ。歩いて十分の近場だ。ミュージアムに襲われるかもしれないが、念のためにエクストリームメモリが近くを飛んでいるし、フアングメモリも先程ちらりと見かけた。まあ大丈夫だろう。

「あとはマキさんとどう出会うかですが…」

ゆかりさんから電話しても出ないだろう。そもそもなんでミュージアムがマキさんを連れ去ったのか。…恐らくはオクトパスの穴埋めにミュージアムに勧誘するつもりなのだろう。トウース・ドーパントの通常の戦闘能力はともかく、覚醒したブラックトウース・ドーパントの能力と、変身者であるマキさんの戦闘センスが合わさった戦闘能力は異常の一言だ。サイクロンジョーカーエクストリームでも歯が立たず、アクセルのマキシマムドライブですら通用せず、ハイドロープで頑丈なエルドラゴを昏睡させた。

「…一応作戦は考えましたけど勝てますかねこれ？」

改めて戦績を並べたら勝てる気がしない。コーティングされている幹部専用ガイアメモリではない、一般ガイアメモリの中ではオクトパスと並ぶ、いやそれ以上の強さだろう。ミュージアムの構成員、いや幹部に勧誘されていてもおかしくない。ただ、条件もなしに幹部にするとは考えづらい。幹部になるための昇級試験かなにかがあるはずだ。

「恐らく、正体を明かした上で逃げられないようにするはず…」

…あの「面白いこと」が大好きなホワイトアウト・ドーパントもい

る組織だ、趣味の悪いことで、さらに確実に遂行できる条件を提示するはず。と、事務所に帰つてくると、扉が不自然に開いていた。あかりかりイイか、どちらかが帰つてるのかな?と思つて中を見てみるも、誰もいない。隠し扉を開けてガレージも覗いてみると、私の作業台を使って月読アイが工具を手にしてエンジンブレードを修理していた。

「月読アイ。あの扉は貴方ですか?不用心ですよ」

「なんのこと?わたしはいつもどおり、鳴花ーズにつながつてるかくしとびらからはいったんだけど」

顔を上げて私だと確認するとすぐに視線をエンジンブレードに戻して、作業を続ける月読アイ。小さな手を使って細かい所の配線を弄っていた。やはり大人の頭脳と子供の身体を有しているらしい。

「そんなものがあつたんです?初耳なんですけど」

「もともとはイフがかいとつたよるのBAR兼ひるの探偵事務所を、わたしがつれてきたこたちのかくれみのとわたしのひみつきちとしてゆづつてもらつてかいぞうしたばしよなんだ。イフが継星財閥のざいりよくをかりたらしいよ」

「あかりさんの実家もここに關係していたんですね……なるほど。それで、少し開いていた事務所の扉は貴方じゃないんですね?」

「わたしはそこからはいってないし……さつきかえつてきたかなつてけはいがあつたけどすぐでていったよ」

「そうですか、ありがとうございます」

ガレージから出て、事務所に戻つて考える。この嫌な予感は何なんだろう。胸騒ぎがする。ゆかりさんを捜そうとした私が不用心に鍵をかけずに出ていったとはいえ、「close」の掛札はちゃんと掛けてあつた。客ではない筈だ。休みだとわかつていて尋ねる人がいた、と考えるのが自然だ。そんな人物は……一人だけ。

「……まさか!」

慌てて外に出て扉に鍵をかけて階段を駆け降りる。外に出ると飛来したエクストリームメモリに体を預け、空を駆つて目的地へ急ぐ。もしも、訪ねてきたのがマキさんなのだとしたら。もしも、あの悪趣味な連中が提示した条件が、ゆかりさんの始末だとしたら。次に向かう場所なんて、決まっている。

「急いでください、エクストリーム!ゆかりさんの家へ!」

ピンポンとインターホンのチャイムの音が鳴る。また来客か、きりたんが戻つて来たんでしようか、などと自室でベッドに寝込みながら考える。ガチャツという扉を開ける音と同時に雫の悲鳴と縁えんちゃんの怒号が上がる。何事ですか!?!と飛び起きるも体に激痛が走つて蹲る。

「強盗? いや、開けたつてことはインターホンで誰なのかを見たはず……なのにあの二人が開けたつてことは……まさか、マキさん!?!」
「そうだよ、ゆかりちゃん」

ガチャリと部屋の扉を開けて、メモリを手にしたマキさんが姿を現した。縁ちゃんと雫の声が聞こえない。まさか……!?!

「大丈夫、雫ちゃんはドーパントしての私の姿を見て気絶、縁くんは立ち向かってきたけど変身を解いて戸惑ったところを腹パンして気絶

させといたよ。あの二人まで傷つけるのは本意じゃない」

「…何をしにきたんですか。まさか、自らを姿を現して絶交するために…!？」

そう尋ねると、マキさんは苦虫を噛み潰した様な表情のあとに悲壮感と決意を漂わせた顔となるとメモリを構え、私も咄嗟にダブルドライバーを装着する。

「…うん。だけど、うん。絶交してくれていいよ。されて当然のことを今から私はするから」

《トウースー》

メモリを腹部に突き刺してトウース・ドーパントに変貌し、まるで涙を流す様にして漆黒の液体に包まれてブラックトウース・ドーパントに姿を変えるマキさん。ジョーカーメモリを取り出すも一瞬で扉からベッドまでの距離を詰められ、三本指の右手で首を締め上げられ持ち上げられる。

「ぐっ、あっ……!？」

「ごめんね、ごめんね……ゆかりちゃん。ミュージアムは金を援助する代わりに幹部になれ、幹部になりたいならゆかりちゃんを殺してきりたんを連れ去れって……!」

涙の様に頭部の目に当たる歯の隙間から黒い液体を流しながら声を荒らげるブラックトウース・ドーパント。手首を掴んで握りしめて拘束をほごうとするがビクともしない。息が、できない……意識が……。

「私は親友の命よりも店を、私の夢を選んだんだ。軽蔑していいよ。こんな親友、絶交だよね？恨んでいいよ、私は地獄に落ちて当然だ。…あんな奴等と戦うんでしょ？駄目だよ、私にも勝てなかったのに、

ゆかりちゃんたちが勝てるわけがない。惨たらしく殺される、その前に死んだ方がいいよ。安心して、毒は使わない。あんな悪魔の手で殺されるぐらいなら私が一思いに殺してあげるから……！」

「ぐう、あああああ!？」

せめて誰かに届けと苦悶の声を上げる。ああ、私は昔の相棒に殺されて一生を終えるのか。きりたん、私の死を乗り越えて、ついなさんかりリイを相棒にして、ミュージアムを倒せることを祈ってます……。

「ぐっ?。」

すると視界の端、カーテンに遮られた窓を何か小さな鳥の様な物の影が飛来してきたのが見えた。さらに鳥の影から人影が窓に向かって飛び込んでくるのも見えた。確信する、私の「今の」相棒が来てくれたのだと。ならば、やることは一つだけ……!

《ジョーカー!》

「無駄だよ、変身してもそんな状態じゃなにも……」

「ぐっ……そう、いえば……あなたは、しり、ません、でしたね……」

【《フアング!》】

手にしたままだったジョーカーメモリを鳴らして何とかドライブバーに装填。脳内でもう一本のメモリの音を聞きながらブラックトウース・ドーパントの注意を引くことに集中する。

「……ダブルに変身できるのは、私だけじゃない」

「なにを……!？」

「変身!。」

《フアング!ジョーカー!》

意識が私の身体から飛んで、次の瞬間にはきりたんの身体でダブルに変身して自室の窓を突き破るところだった。

ゆかりさんの家に飛来、空から玄関の扉に挟まれる形で倒れている縁さんの姿が見えて遅かったのだと確信。ならばと加速したエクストリームメモリから飛び出す形で、腕を交差して顔を守りながらゆかりさんの部屋の窓を突き破らんとすると、いつの間にか腰に装着されていたダブルドライバーにジョーカーメモリが転送されてきて咄嗟に左手で装填。同時に右手にメモリーモードになりながら飛び込んできたファングメモリを掴んで起動させながらドライバーに装填。窓を突き破る瞬間にドライバーを展開する。

「変身！」

《ファング・ジョーカー！》

部屋の中からの声と重なりながら、変身して窓に飛び込むと、そこにはゆかりさんの首を掴んで持ち上げているブラックトウス・ドーパーがいた。

「お前は……まさか、きりたん!？」

『貴方に見せた姿とは逆で、私がきりたんの身体に入ってるんですよ、マキさん』

「まさかと思って急いだ甲斐がありました。焦っていたのか、事務所の扉を閉め損ねたのはやらかしましたね。『さあ、お前の罪を数えろ！』」

「今更だよ、罪なんていくらでも被るさー！」

フアングジョーカーの、サイクロンジョーカーエクストリームよりスペックの高い身体能力をフルに使った右拳と、ゆかりさんの身体を手放して即座に構えを取ったブラックトウース・ドーパントの凄まじい速度で放たれた右拳が激突。

『今の私達は牙の切札、フアングジョーカー!』

「目には目を、歯には歯……否、牙を!」

「私の歯は、決して砕けない!」

拮抗するも双方弾かれ、私達は割れた窓から飛び出して道路に着地。次の瞬間、闘争心に飲まれてしまう。

「ヴアアアア……!」

『落ち着いてきりたん。私が殺されかけて怒ってるのはわかりますけど、平常心を保たないと勝てません!』

「ヴアアアアア……なんとか、落ち着きました」

「私に勝てると思っっているの!?!」

同じく割れた窓を乗り越えて飛び降りてきたブラックトウース・ドーパントが目の前に着地。飲まれないうようにした闘争心を上手く調整して、タクティカルホーンを一回叩いて荒々しい動きで飛びかかる。

《アームフアング》

「ヴアアアアッ!」

「無駄だよ!」

アームセイバーを展開して斬りかかった右腕に口が展開。噛み付かれてさらに毒で浸食され、ぽつきりとアームセイバーを折られてしまう。やはり接近戦は厳しいか。ならばと大きく跳躍して距離を取る。

《シヨルダーフアング》

「ヴアアツ！」

「こんなもの！」

シヨルダーセイバーを展開して手に取り投擲する。旋廻して何度か斬りつけることに成功するも、やはり噛み付かれて噛み砕かれる。やはりあの口は自分の意思で展開していて、自動的に展開するわけではないようだ。…やはり、あの作戦しかないか。ジョーカーメモリを引き抜いて腰のマキシマムスロットに装填する。

「ゆかりさん、怒らないでくださいよ？」

『きりたん…?』

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

「でやああああああ！」

事前にゆかりさんが決めてるわけでもないのに、腰のマキシマムスロットを叩いてマキシマムドライブを発動後、何も考えずに叫びながら跳躍して、紫の炎を纏った右足を突き出して飛び蹴りを放つ。

「正気!?!噛み砕いてやる！」

ブラックトウース・ドーパントは両腕を広げ、胸部の口を開いてむしろ招き入れるように胸部に飛び蹴りを受けて、私の右足の脛を噛み付いて受け止めた。装甲越しに血が溢れて、毒が沁み渡り激痛が走り着地した左足でアスファルトを踏み込む。

「ぐあああああああ!?!」

『きりたん!?!』

「私が罪を受け入れて、なにもせずを受け止めると思った？残念だけど、そんな甘くは…」

「ああああああ……いえ、甘いですよ。だって、噛み切らなかった。信じていましたよ、貴方が優しさを捨てきれないのだと」
「え……?」

呆けるブラックトウース・ドーパントに肉薄しながら、タクティカルホーンを三回叩く。作戦通り、これで決まりだ。

《ファング! マキシマムドライブ!》

「貴方が硬いのは表面だけです、内部はそうでもない! ゆかりさん!」
『なんて無茶を……はい、きりたん!』

『『ファングストライザー!』』

そしてブラックトウース・ドーパントの胸部の口の中にある右足にマキシマムセイバーを展開。そのまま左足で踏み込んで、ブロック塀にブラックトウース・ドーパントを背中から激突させ逃げられないようにすると右足をちぎりかねない勢いで振り抜いて内部を引き裂いてく。

「グアアアアアアア!」

血だらけの右足をアスファルトについて着地して振り返ると、同時に背後でブラックトウース・ドーパントは爆散。ガイアメモリの残骸と共に倒れ伏したマキさんを見下ろした。

「…今の相棒として負けられませんでした。それに、ゆかりさんが犯した罪は相棒である私が一緒に償わないと」

「なんの、こと……? ゆかりちゃんは、何も悪くないよ……」

『マキさん……私は知っていて黙っていたことがあります』

「貴方のお父さんは、貴方の本当の夢を応援するために喫茶店をやめようとした。それが真実です」

「……へ?」

真実を告げると信じられないとばかりに黒焦げの姿で呆けるマキさん。終いには涙を流し始めた。

「そんな、じゃあ、私はなんのために……」

「一人で抱えて、罪を犯してまで解決しようとした。それが貴方の本当の罪です。…貴方のお父さんが貴方のギターを用意して、待っています」

『マキさん……罪を償って、帰ってきてください。幸いなことに誰も死人は出ていません。マキさんがわざわざ人を遠ざけてから襲撃していたおかげですよ』

「…私を許してくれるの、ゆかりちゃん」

そう涙ながらに問いかけてくるマキさんに私達は頷いて答える。

『はい……だって、マキさんはいつだって私の親友です』

「そっ、か……」

その言葉を最後に気絶したマキさんを抱えて、私達はその場を後にしたのだった。

気絶したマキさんを警察に送り、この事件は終わった。ついなさんと、目を覚ましたリリィは未だに入院中だ。だけど誰も死人は出なかった。それだけでも救いだと思う。

「きりたんはエクストリームメモリに入って治療を終えましたし、便

利な身体ですね…」

そんなことをぼやきながら東北外道の資料を漁る。きりたんは何を思ったのかガレージに籠って何か作業している、新しいガジェットだろうか？と首を傾げながら資料を手に取り、資料の間に挟まっていた写真が床に落ちたので拾い上げて…驚愕した。

「…弓弦伊織？」

東北外道の若い頃と記されている写真に写っていたのは、犯罪者だった知人と瓜二つの青年の姿だった。

第四十七話：純愛のB／燃ゆる愛が嗣ぐまで

「フフフフツ……」

結月ゆかりの自宅の近くにある一軒家。その二階の一室であるカーテンが閉め切られ、パソコンの灯りしか光源が存在しない真っ暗な部屋で、カタカタカタとキーボードを叩く音が聞こえる。画面を見ながら顔をにやけるのは、髪の毛先が虹色がかったカラーリングの透き通った銀髪を腰まで伸ばし、鍵盤やスピーカーの意匠をあしらった黒のロリイタファッションに身を包んでいる、一見清楚で可憐なお嬢様。しかしその目のハイライトはなく、握りしめたクマのぬいぐるみはあまりの力に綿がはみ出でしまっている。

「ああ、愛しの騎士様……傷付いてなお立ち向かうその姿は、なんと美しいことか……」

恍惚とした表情で見つめるパソコンのモニターに映っているのは、結月ゆかりの盗撮写真。それもトウース・ドーパント事件でこれでもかと言わんばかりにボロボロにされた姿。結月ゆかりの持つメモリガジェットを目にして、似た様なフクロウと置時計を模したガジェット「クロツクロウ」を作成して半年間も撮り続けてきた写真群だ。

「あの日、あの時。私は見た。鳥の怪人を相手に物怖じせず立ち向かい、そして仮面の騎士様に変身して華麗に倒して見せた様を。それからもその雄姿を見届けて来ましたわ……」

【変身】と記されたファイルを開くと、ゆかりが変身する直前のシーンが色んなアングルから撮られているビデオがあつて、お嬢様は椅子から立ち上がるとポーズを真似して笑みを浮かべる。お嬢様……杏璃万結は結月ゆかりの大ファン……またの名をストーリーカーであった。どう見ても外国人だがクォーターである。

ホーク・ドーパントの事件で水都アウトレットモールを訪れていた客として目撃したのを皮切りに。マッド・ドーパントの事件では大学生として聞き込みで話しかけられ、ダンデライオン・ドーパントの事件では精神病の患者の一人として目撃し、運命を感じたマユはそれ以降、目立った事件はすぐさま嗅ぎつけてあの手この手で観察していた。

エルドラド・ドーパントの事件では自前のガジェットで監視して。JTRドーパントの事件では商店街の屋上をアグレッツシブに跳び回ってその雄姿を追いかけ。イレイザー・ドーパントの事件では自前のガジェットで追跡しつつ交友関係をメモに纏めて。フレンジー・ドーパントの事件では追いかけてきて廃村に潜伏しつつ相棒のきりたんが想われていることに嫉妬し。ビギンズナイトの回想では事務所窓に仕掛けていた盗聴器で盗み聞くまでに至り。

ウェブ・ドーパントの事件では役村^{えんのむら}までついてきて潜伏し物陰から一部始終を観察しつつ仲間のために重傷を負ったその姿に顔を赤らめて。REXの事件では水都中の監視カメラをハッキングして録画。オクトパスの事件ではスカルやニンテイルフォックス・ドーパントに一方的に倒されボロボロになりながらもめげずに立ち上がり見事にオクトパス・ドーパントを倒す姿を尾行して観察しつつ大興奮。フェアリーテイル・ドーパントの事件では嗅ぎつけたはいいものの雄姿を見れずに憤慨し、そしてトウース・ドーパントの事件では誰よりも早くマキの思惑に気付いて次に狙われるであろう飲食店に先回りしてダブルが現れるまで待ったり、拳句の果てにはゆかりの家の近くの空き家を買取り引っ越して窓からじつくりと撮影していたりと、その行動力は常軌を逸していた。

「ああ、^{ここ}を買い取ったせいで株で稼いだ金の大部分を使ってしまったわね……まあ口うるさいお母様やお父様から離れて一人暮らしを始められたので結果オーライですわ」

お嬢様然としている彼女ではあるがその実態は、佐藤紗々良や鈴木

鼓、鷹嘴飛翔が所属していた千絵美尾大学の学生であり、実家もそこそこ裕福な名家の分家なだけの一般人である。しかし子供の頃から夢見がちだった彼女は自らの血筋が名家のものであるという事実を知ってお嬢様を気取るようになり、自分にふさわしい運命の人が現れると信じつつつけた挙句に出会ってしまった。

「ああ、結月ゆかり様……困ります、困ります……いつか私に気付いてくれると信じつつけて幾星霜。まだ私に気付いてくれないのですね……？」

偶然にも出会い続けるうちに惚れてしまった。最初は男性だと思いついていたが、女性だと知ってもなおも想い続けている。杏璃万結は、一方的に結月ゆかりに想い焦がれていた。

「うん？インターホンの音？頼んだ最新型カメラが届いたのかしら？」

部屋を出て殺風景な家の中を進んで玄関に向かうマユ。何故、ここまで彼女の身の上を語るのか。それは彼女が今回の事件における犯人だからだ。

「お待ちせしましたわ。……あら？」

「こんにちは、おねえさん。きょうはいいはなしをもってきたの」

結月ゆかりを退場させんとする悪意が、愛に生きる怪物を誕生させる。それは全て、愛ゆえに。

その日。ついなさんとリイが復帰し、事務所の事をあかりとリイに託した私は水都を出て、マシンハードボイルダーを数時間走らせて日本某所にある拘留所を訪れていた。ドーパントになった人間が投獄され服役している、ついなさんの上司ともいえる国そのものが作った特殊な拘留所らしい。他にも何人も殺した凶悪犯が収監されている刑務所もあるとか。その面会室の椅子に座って待っていると、係員に連れられてその人物はやってきた。

「あんたは…!?!」

「久しぶりですね。弓弦伊織くん」

やってきたのは琴葉神社のアルバイトであった一見温厚な好青年。その正体はミュージアムとも繋がっていた情報調査会社ユミカルチャーの社長でミュージアムに口封じで殺された弓弦重三の息子で、その御曹司にして茜さんのストーカー、イレイザー・ドーパントだった弓弦伊織だ。怒りに任せてヒートジョーカーでボコボコにして以来である。東北外道の写真に写った彼と瓜二つの姿。髪色が緑色だったことは異なるが、関係はある筈だ。精神崩壊してたが今は落ち着いたようになにより。

「あのときは怒りに任せて容赦なくぶちのめして、すみませんでした」「な、何しに来たんだ…まさか、まだ僕を…!?!」

「いや、これ以上なにかする気はありませんよ。今日は聞きたいことがあって参りました。…東北外道という名前、知ってますか?」

「外道おじさんのことか?」
「!」

やはり血縁者か。奇妙だとは思ってたんです。ミュージアムと繋がっていたユミカルチャー。伊織くんは生かされたのに、社長である

重三だけ口封じに殺されていた。恐らく核心的な情報を持っていたから殺されたんだ。

「別に隠すことでもないから言うけど、外道おじさんは俺の親父の兄貴だよ。旧名は弓弦外道^{ゆうづるソトミチ}。不治の病を抱えていて病弱で、なのに自分の治療方法を自分で探そうと考古学者になって色んな古代文明や遺跡を研究していた凄い人だつて聞いている」

「聞いている…？」

「俺が生まれる前に結婚して考古学者としての活動をやめていたからな。子煩悩で特に長女を可愛がっていたな」

長女……東北至子か。昔考古学者だったということ以外は純子さんから聞いた話の通りだ。考古学者……そういえば、ミュージアムのガイアメモリは化石みたいなフォルムでしたっけ。何か関係が……もしかしてガイアメモリは古代文明を利用した技術なのだろうか？ 帰ったらきりたんに聞いてみよう。

「10年前に亡くなってしまってから音沙汰ないが……それがどうかしたのか？」

「ちなみに誰と結婚したのかは…」

「東北藍^{とうほくアイ}さんのことか？」

「アイ…!?!」

聞き覚えのある名前が出てきた。きりたんの、純子さん達の母親と
言う話は本当なのか？

「面識はそんなにないけど、藍色の着物を着た黒髪の大和撫子で優しい人だったよ。結構年の差があったらしいけど外道おじさんが惚れてアプローチして結婚したらしい。だけどたしか、娘さんが事故で亡くなった時の葬式で姿を見せなかったな。死んでいるのかもしれない」

「その亡くなった娘さんと言うのは」

「東北記理子、だったかな。生意気ながきんちよだった」

確定だ。…月読アイは偽名だとする。明らかに小さな童女ではあるがダブルドライバーを作成する技術力を持ち合わせているのは不自然だった。もし彼女が本当は大人で、きりたんが死ぬ前に何らかの出来事が起きてあの姿になったのならば説明がつく。いや、だとすると10年以上もあの姿のままだということか…？もし本当にそうなら恨む理由もある程度想像がつく。

「…ちなみに、ミュージアムとユミカルチャーは何故繋がっているかは…？」

「俺が知らんうちに協力関係にあった。だけど、確か現当主の東北至子が自らユミカルチャーを何度か訪れて親父となんか話していたな。俺はそのおこぼれをもらったただけだ。本当なら今頃茜さんを嫁にして跡を継いで事情を知ってたかもしれないが…」

「おや、まだ反省してない様ですね？」

「いや、悪かった。反省してる。勘弁してくれ、あれは本当に痛かったんだ」

反省してないなこいつ、とギロリと睨むと委縮する伊織くん。すると「面会時間は終わりだ」と係員が知らせてくれる。まあいい。一応最後に聞いて、帰りますか。

「最後に。…東北至子に何か違和感は？」

「へ？なんでそんなことを聞くのかはわからんけど…外道おじさんが亡くなる前の至子さんはおっとりしてたけど、葬式後は何とというか…笑ってはいったけど外道おじさんが死んで狂ったのか、狂気を感じる笑い方をしていた…ぐらいかな？」

「…なるほど。ありがとございしました。では存分に反省してくださいね？」

答えに満足した私はそう言つて拘置所を後にしたのだった。

数時間ハードボイルダーを走らせて、水都に戻ってきた。入り口からも見える水都タワーと歩色町の街並みが美しい。この街を守るためにも、ミュージアムの首魁である東北至子…いや、東北外道を追い詰めなければいけないと改めて決意する。

「ネルさんに東北外道の評判について調べてもらいますかね…」

そんなことを思いながら水都タワーへの道路を走らせる。もう昼過ぎだ、同時に「金堂」で遅めの昼食をとるとしよう。西友の財力とリリーのリクエストですぐ屋台を再建して復帰したのはさすがと言える。キクさんも怪我した体でも気にせず今日も開店しているはずだ。

「…ん!？」

ふと、キキーツ!と背後からブレーキ音が連続して聞こえてきたのでサイドミラーに視線を向けて驚愕する。道路を走る複数の車の間を縫うように異様な物が走って近づいて来ていたのだ。一見は青みがかつた銀色の複雑な装飾の鎧に身を包んだ、体型からして女騎士。頭部は目元を隠した白銀色のロングヘアの様ではあるが硬質化したロングヘアの形状をした白銀色の装甲であり、口元は人間の女性そのもの。その手には巨大な刃を備えた長槍の様な武器を持ち、下半身は四つの足と尻尾に紅蓮の炎を纏った灰色の馬の形状でケンタウ

ロスの様だ。パカラツパカラツと蹄鉄の音を鳴らしながら近づいて来ていた。

「ドーパント…!?!」

「ゆかりさん？拘置所に行つてたはずでは？」

驚愕しながらも懐からダブルドライバーを取り出して装着。きりたんが疑問の声を上げたので現状を説明する。

「きりたん、今水都に帰ってきたところなのですがドーパントです！」

「よく会いますねえ。もしかして知られちゃいけないことでも知ったんでしょうか。《サイクロン!》」

《ジョーカー!》

「はっ！探偵は真実を解き明かすことがお仕事なんですよ！」

そう啖呵を切ると、何故か後ろのドーパントが上半身を両手で抱えて悶えていた。なんだ？

「まあいいです…【変身!】」

《サイクロン!ジョーカー!》

ハードボイルダーを操縦しながらダブルに変身、後輪を浮かばせて方向転換し、逆走してドーパントに突進しながら宣言する。

「『さあ、お前の罪を数えろ!』」

「その言葉…まさか私に言われるだけでこうも興奮するだなんて!ああ、最高ですわ!クロックロウ、ちゃんと撮影してますわね!?!」

すると何やら叫びながら興奮しつつ、スピードを速めながら槍を構えるドーパント。何言ってるかは理解できないけど、とりあえず倒すのみ!

「はあああー！」

「ぐう!？」

すれ違い様に振るわれた槍を、頭を屈めて回避しながら右拳を腹部に叩き込み、方向転換。槍を取り落とし、ダメージを受けて止まっているドーパントに目掛けて全速力でハードボイルダーを走らせ、落ちていた槍をジャンプ台替わりにして空中に飛び出し、車体によるダイレクトアタックを頭部に喰らわせ吹き飛ばし着地する。

「ぐううあああ!?!……直接攻撃するんじゃないやなくてバイクで頭部を轢くだなんて……DV!DVなのね!?!これも愛の形!燃え上がりますわ!?!」

しかし吹き飛ばされたドーパントはロングヘアの様な装甲を発火、紅蓮の炎を燃え上がらせると何事も無かったかのように綺麗に着地。手を翳して槍を引き寄せ、炎を槍に移してグルグルと頭上で回転させていく。

「私の愛^{ロマンス}、受け取ってくださいる?!」

「なにを…!?!」

『これは、不味いです!』

《メタル!》《ルナ!》《ルナ!メタル!》

その様子に危険を感じ、きりたんの警告に頷いてルナメタルに変身。伸縮するメタルシヤフトを回転させて防御の構えを取る。

「愛の炎よ、燃え上がれ!燃ゆる愛が嗣^{ブレイジング・ロマンス}ぐまで!」

全身に炎を纏って槍を構え、高速で突撃してくるドーパントに、防

御はあつけなく貫かれて、私達は吹き飛ばされ、あまりの威力に意識を失った。

第四十八話：純愛のB／恐怖の新婚ハウス

「星香さん。水都に新しく現れたというケンタウロスのドーパントは貴方が？」

週に一度の幹部召集。トウース・ドーパントの件が思惑通りにいかず不機嫌な至子の問いかけに、委縮していた星香はビクツと反応する。

「い、いえ…全く身に覚えのないドーパントです…ここ数日で売ったメモリにあのようなものはないはず…」

「奏楽さんは？」

「ウェブのメモリの時の様に試したいメモリがあるので適格者を捜してますけど、それは知りませんねえ」

メモリの売買を担当する星香と、メモリの実験を担当する奏楽の二人が知らないと言うドーパントの存在。東北至子…その内に潜む東北外道が思い出すのは、10年前に実験体を連れて逃げ出した己が妻の存在。そう言えば一緒に何本かメモリも奪い取られていたなど思い出す。ナインテイルフォックスと同格のメモリがいくつかあったはずだ。

「なるほど…10年前に盗み出したガイアメモリの可能性が高いですわね。10年前に運命の子を介さずに作成したメモリは強力な記憶が多い…これは、奴を見つけるチャンスかもしれませんわ。奏楽さん、任せられます？」

「おや、私の出番ですか？」

「謎のドーパントを近辺を見張っててください。もしかしたら月読アイか、もしくは実験体が出るかもしれません。貴方の能力なら捕縛も簡単でしょう？」

「それはたしかに。実験体って確か…鳴花梅^{なるはな うめ}、でしたっけ？」

そう奏楽が確認を取ると、写真を取り出してぴんつと指で弾いて奏楽に手渡す至子。

「10年前の写真ですが実験の影響で見た目の年は取っていない筈ですわ」

「なるほど。…はて？どこかで見た様な…：まあ気のせいですね、はい」

奏楽は手に取った写真を確認して首を傾げながらその場を後にした。その写真には、鳴花ヒメ・ミコトと瓜二つな黒髪の少女が映っていた。

目を覚ますと、どこかの部屋だった。拘束…はされていない。むしろ丁寧にふわふわの枕に寝かせられていた。見渡してみると、窓が一つだけある四畳半ほどの洋室だ。何も置いてないが倉庫だろうか。思い出す。拘置所からの帰りに謎のケンタウロスのドーパントに襲われ、強力な一撃を受けて意識を刈り取られたんだった。見渡すと、天井の隅に監視カメラらしきものが付けられてるとわかった。誰かに見張られているらしい。

「そうだ、ドライバーにメモリ…」

慌てて確認する。ダブルドライバーも、メモリもない。ジョーカー

メモリも、メタルメモリも、トリガーメモリもなくなっている。手首に付けてたスパイダーシヨックも、懐に入れていたスタツグフォンとバットシヨットも無くなって完全に無力化されていて……うん？

「無いというか、服が着物に着替えさせられてる……？」

慌てて頭を触る。帽子はあった。よかった。しかし濃紺色の着物に帽子を被っていると、着流しを着たおやっさんを思い出させる格好だ。しかし靴も靴下もなくなつて裸足なのはいかな物か。嫌な予感がして触つてみると、最悪なことに下着が上も下もなくなつていた。

「どんな変態なんですか…」

深い溜め息を吐く。つまり私は、男か女かもわからないが誘拐犯に全裸に剥かれた挙句に無防備な姿をさらして着せ替えられたというのか。帽子だけ残してるのは何の優しさなのか。何が目的なんだ。私なんか攫つてもお金なんか……いや、あの両親を失つたことで一時期立ち直れなくなつていた弟妹たちなら全財産はたいてでも助け出そうとしそうだ。そう考えると私を攫つたのは妥当かもしれない。すっぽんぽんにひん剥いて着替えさせた理由は分からないですが！あーもう、すーすーする！

「さて、どうやって出ますか…」

どうせ出入り口は鍵を閉められているだろうし、光源でもある窓を確認する。鍵は外せたが丁寧に溶接されていてビクともしない。誰だか知らんけど無駄に丁寧だなくソツ！溜め息を吐いてダメもとで扉の取っ手に手をかけると、あっさり扉が開いた。ええ…。

「…部屋からは出せるということはこの家から出られないようにして

いるということでしょうか？」

「ということは犯人はこの家にいない可能性が高い。もしくは隠し部屋かなにかで監視しているのだろうか。廊下に顔を出し、廊下の先に玄関を発見。きよろきよろと見渡すと一見普通の一軒家なのだが、よく見れば各所に監視カメラが設置されている。デスゲームでもしようってのか。」

「…物音はしませんね」

廊下を抜き足差し足忍び足で進み、玄関傍の廊下に置かれた台に配置されている据え置き電話の受話器を手に取り確認。通じない。見てみれば電話線が切られていた。さすがにそこは用意周到か。

「外には…あつつ!?!」

玄関の内鍵を開けて扉を開いた瞬間、とてつもない熱風が顔に打ち付ける。見れば扉の外は轟々と燃え盛る紅蓮の炎の壁に遮られていた。これじゃ脱出は不可能ですね…。窓は閉め切られ、出口の外には炎の壁。自由にはするが是が非でも出す気はないらしい。

「脱出手段を探りつつ…：…なにか武器の様な物…：台所ならありますか
ね?」

静かに移動して廊下を進むと何の変哲もない台所に出た。いや、変哲もないは嘘だ。置かれている包丁やナベにフライパンといった調理器具は全部ピカピカに綺麗にされて配置されており、冷蔵庫を開けば食材や調味料がぎっしり。よく見れば松坂牛とか本マグロとか高級なものばかりだ。しかも私の大好物のチーズケーキがホールで箱に入れられて冷蔵庫で冷やされていた。棚も漁ってみれば私の好物のカルボナーラの材料が山ほどあった。食器類はいわゆる夫婦茶碗めおと

に夫婦箸といった二つ一組の物ばかり用意されているのが気になるが……夫婦でも住んでいるのか？とは思いますが、あまりにも私の好物が多い気がするのはいきのせいだろうか。

「いや本当に何がしたいんです？」

疑問の声を上げながらとりあえず護身用に包丁を一本手に取り探索を続ける。お風呂場。特に変哲無し。しかし湿気と熱気を感じて湯船の蓋を開けてみたら常温を保たれてるお湯が張ってる湯船が用意されていた。調べたら監視カメラまで隠されて設置されているが、入れと？

「…うん？」

洗面所を見れば歯ブラシやコップなどは二つずつ新品が置かれている。……これ夫婦じゃないな？夫婦なら、両方とも新品なのはおかしい。しかも私の好みの色である紫色の片方が私用だとしてももう片方は黒を基調としているものは犯人の…？

「私と結婚したとでも思い込んでる異常者でしょうか……」

どうにかしてダブルドライバーを取り返してきりたんと交信しなければ……そう思いながらトイレを覗いてみる。引くぐらい綺麗に便器が掃除されていた。築何十年かは経ってそんな家屋だが、犯人が必死になって掃除していたと思うとちよつと笑えてくる。笑いごとじゃないが。

「リビングは…？」

リビングであろう部屋に入ると、さすがにびっくりした。継星探偵事務所の間取りとそっくりなのだ。元おやっさんの席である私の愛

用のデスクにそっくりな机と椅子にタイプライター、ポールハンガーにコーヒーマーカー、来客用のソファやお菓子類、古めかしいラジオにレコードプレイヤーまで。さらには仮眠ベッドや壁に取り付けられた帽子かけ、さらに棚にはこれまでの事件をあかりが丁寧に纏めていたファイルまでも完璧に再現されている。

「デンデンセンサーが配置される前はともかくそれ以降の事件のファイルまで完璧に再現されてるってどういう…?」

ここまで来ると不気味だが、ある核心に至る。この家は、私の為だけに用意された家だ。あかりが持って来た最新式の薄型テレビまで……どれだけ金がかかっているんだこの家。

「って、テレビ!?!」

慌ててリモコンを探し、いつも適当に置いていた場所に置かれていたことに恐怖を覚えながらリモコンを手に取りスイッチオン。ドーナツのニュースをたびたび取り上げている地方局「水都テレビ」にチャンネルを合わせると、やってるやってる私を襲ったドーナツの事件のニュース。

「昨日お昼頃、水都タワー前の道路にて凶行は行われました。突如出現したケンタウロスのような怪物は通行中の自動車を蹴散らしながら道路を爆走し、駆けつけた仮面ライダーと対決。なんと打ち負かしてしまい、気絶した仮面ライダーを連れて空を駆けて行き、姿を消したとのことです。その目的等はわかっておらず、市民の間では仮面ライダー不在による不安が…」

「昨日!?!: 気絶してから一時間ぐらいいしか経ってないと思ってましたが、丸一日経っていたってことですか!?!」

驚愕の事実に関心が高くなる。包丁を落としそうになった。こ、これ

で一階は全部かな…？廊下に出て階段に向かう。気になるのは、まるで生活感がないと言う事だ。もはや理想の家の展示場とまで言ってもいい。まさか私を閉じ込めるためだけにこの家を購入したわけでもあるまい。…違うよね？

「二階は二部屋だけですかね…」

一階に比べると狭い廊下をそろりそろりと歩いて行くと、最初に見えてきたのは寝室とハートマークで囲われて書かれたプレートがかけられた扉。嫌な予感がしながらも扉を開ける。

「うわあ」

二人ギリギリ寝られそうなシングルベッドと、二つの枕。どこのホテルだ。布団とカーテンとカーペットの柄が私の自室のものと同じなのはもう気にしない方がいいかもしれない。枕も私の使ってるものとそっくりな気がしないでもないが気にしない！

「もう勘弁してください…」

涙目になりながらも一つ一つの扉に向かう。ここまでどこにもダブルドライバーも、ガイアメモリも、メモリガジェットもなかった。だとするとこの最後の部屋にありそうだが…できれば入りたくないんですが。

「お邪魔します…」

「お待ちしております、結月ゆかり様」

扉を開けると、その人物はいた。髪の毛先が虹色がかったカラーリングの透き通った銀髪を腰まで伸ばしている清楚そうな女性が、三つ指を立てて頭を下げて私を出迎えた。しかし驚くべきはそこではな

く、その服装。たわわなもので押し上げられた白いシャツとその上に無理やり着せられた黒のベストに紫色のネクタイを締め、黒いストラップスに黒のソックス。私が着ていた一張羅だった。

「そ、その服は……」

「もちろん、すべて！下着までゆかり様の物ですわ！」

「ええ……」

何故か自信満々に金色の目を輝かせながら胸を張る女性に頭を抱える。見れば、部屋に彼女のものである上品そうな服が脱ぎ捨てられている。いやあの、サイズがあつてなくてはち切れそうなんですがあ。私の一張羅……。

「お気に召していただけましたか？わたくしの用意した新婚ハウスは。何時か貴方様と一緒に住んで満足していただくためにわたくし、全力でリフォームしましたの！食料も新鮮なものですわ！あとで手料理を食べさせてくださいまし！」

「いやあの手料理ならいくらでも作るんで……」

押し押しで歩み寄ってくる女性にたじたじになりながら、部屋を見渡して、後悔した。「結月ゆかりファイル」なるタイトルが書かれた分厚いアルバムの様な本が本棚にぎっしり。壁中から天井まで私の隠し撮り写真が隙間なく貼られ、その中心にあるデスクに置かれたパソコンのデスクトップにはどこで撮ったのか私がボロボロに傷付きながらも立ち上がろうとしている動画が延々と繰り返し返されており、目を凝らして見ればファイル名は全て私の名が書かれていた。ぞわぞわっ！と凄まじい寒気が着物一枚しか着ていない私の身体を駆け巡り、後ずさりして出ようとする両手を両手で握られて引き留められる。

「申し遅れました！わたくし、杏璃万結と申します！貴方の大大大大

大大大…もつと大がつく大ファンですわ！世界一の大ファンだと自負していますの！」

「そ、そうですね、ははは……」

いやまあ私のファンは多分世界にあなた一人だと思う。悲しいけど。むしろ世界中の私のファンになってくれるはずだった人達の好意が全てこの人に集束したんじゃないかと思うぐらいだ。

「私達、一度会って話もしてますのよ？」

「え？」

そう言われて記憶を引き出す。最近のから古いのまで…いや、このマユさんという方と出会いそうなシチュエーションを思い出す……
ああ！

「もしかして、千絵美尾大学で聞き込みをした…？」

「思い出してくれて嬉しいですわ！これで私達、夫婦ですわね！」

「いやいやいやいや」

覚えていた方が奇跡ですからね？全力で頭を振りながら逃げようとする。だが逃げられない。がっしりと手を掴まれてしまっている。私も鍛えているのに、とんでもない身体能力だ。

「義理堅い貴方様の事ですもの、既成事実を作れば認めてくださりますよね？」

「え？え？え？え？」

唐突に足払いをかけられ、仰向けに倒れた所に組み伏せられる。傍から見ればはだけた着物姿の女が男装した巨乳の美女に押し倒されている様に見えるはずだ、とか現実逃避している場合じゃなくて。

「わたくしのはじめて、さしあげますわ！」

「いやいらぬし私もはじめて……待って本当に待ってください私だって女ですできることなら好きな人と……」

…詳細は省くが、それはもう、蹂躪された。もうお嫁に行けない。

第四十九話：純愛のB／愛に生きる戦乙女

目を覚ましたら事務所の寢床で。寝ながら涙を流していたらしく大きく濡らした枕から顔を上げて目元をこする。

「私、なんで眠って……そうだ。ゆかりさんが…」

いつもデスクにいるはずのゆかりさんがいないことで、現実を思い出す。あのドーパントに敗れて、ゆかりさんが攫われたんだった。ゆかりさんの意識が飛んでも私はなんとか意識を保ってたのに、途中でダブルドライバーを無理やり外され、更にはルナメモリまで奪われてしまった。サイクロンとヒートが手元に残ってたのは不幸中の幸いだが、ダブルドライバーごとゆかりさんを攫われたのは不味い。

「…ダブルドライバーが装着されないということはゆかりさんがダブルドライバーを奪われたということですか……」

いや、え、どうすればいいんですか!? ゆかりさんがダブルドライバーを取り返すのを信じて待つ…? いや、あのドーパントは最初からゆかりさんを狙っていたように見えた。ストーカーだと貞操が危ない。ゆかりさん喧嘩は強いが押しに弱いし。

「あ、きりたん起きましたか! 丸一日寝たきりで心配しましたよ!」

「恐らくダブルドライバーを無理やり外されたのが原因ですかね…。あかりさん。ゆかりさんは!」

「搜索してまずけど手がかり一つ…」

事務所に帰ってきたあかりさんによると、現在ついなさんとその部下二人、リリイとその部下二人、情報屋たちが総動員でゆかりさんを搜索しているらしい。しかしかなりド派手なドーパントのはずなのに、ネットにすら足取りが存在せず。ネットに置いて無敵とも言つて

いいネルさん曰く、彼女すら上回るハッキング能力で自分の足取りを消している…ということぐらいしかわからないらしい。

「ネルさんってゆかりさん曰くネットの、特に掲示板に精通しており9つのニュースサイトの管理人でさらには140のツイッターアカウントを持ち合わせ、着火や火消などを自在に行えるやべーやつ…でしたよね？それすら越える…？」

「ネルさん曰く「ありえない」とのことです。ドーパントの力なんですかね？」

「いや、あのドーパントにそんな細かいことができる様には見えませんでしたけど…」

思い出す限り、馬の下半身による機動力と槍を利用した騎馬戦、炎を操ることに長けているように見えた。明らかに戦闘タイプだ。そんなネットを操る能力がある様には…だとすると、それだけの技術力がある人間？

「…まさか」

「きりたん？」

犯人がストーカーだとするならばあるはずだ。ストーカーが使う仕掛けが…いきなりソファの下や机の裏側を始めに普段死角になっっている場所を確認する私に首を傾げるあかりさん。説明している暇もないし説明したらばれてゆかりさんになにされるかわからないから言えない。事務所内には見当たらなかったの窓を開き、窓枠の下を覗きこんで…見つけた。不自然にくっ付いたテープに包まれた小型の機械を。

「やはり…」

摘み上げる。テープは触った限り防水でさらに粘着性が高い物、機

械は恐らく盗聴器。高性能の代物だが手作り感が凄い。技術力から見てゆかりさんを攫ったであろうケンタウロスの仕掛けたものとみて間違いないだろう。ハンカチにくるんでそつと事務所の机に置く。

「それは…?」

「しー。盗聴器です。これを逆探知して居場所を…:きやつ!」

しかし、突如盗聴器が爆発。木端微塵に碎け散ってしまふ。:くつ、異常があれば自爆する機能…?無駄に高性能ですね!?

「くつそ…!」

「大丈夫ですかきりたん。火傷…今氷を!」

バタバタと冷蔵庫に向かうあかりさんを見ながら思考する。ネットの目撃情報などはハッキングして証拠隠滅し、さらには盗聴器まで…。相当な技術力を持っている。だが、自爆させるためにセンサーを使っていた形跡はなかった。何らかの手段でこちらが盗聴器を見つけたことを察知し、自爆させたことになる。あるとすれば…:外か。

デンデンセンサーを手に窓から周囲を見渡してみる。人影、見たところ真下で箒を手に掃除している鳴花ヒメ一人ぐらいしか見えない。車の類…:何台か道路脇に止められているが、デンデンセンサーで後部座席まで確認するがおかしいところはない。近くの建物類は、仕事している人間がちらほらと見えるが特に違和感ない。あとは…:うん?

「電柱の上に…:フクロウ?」

両翼をお腹の前に置いているこげ茶色のフクロウがジーツとこちらを見つめている。昼間だと言うのに珍しいな。:うん?翼の間に…:6の文字…?変だなと思いデンデンセンサーを向けると飛び立

つフクロウ。慌ててデンデンセンサーで見ると、機械仕掛けのフクロウだった。メモリガジェットのように置時計型フクロウらしい。アレで間違いない！

「逃がしません！」

「きりたん!?!」

小さな体を利用して窓枠に跳び乗ると後ろから氷囊を持って来たあかりさんの驚いた声が聞こえたが、気にせず飛び降りるとそのまま走って追いかける。エクストリームメモリを呼ぶのも、入る時間も惜しい。しかしちゃんと羽ばたいて飛ぶのはバットショットを思い出す。ゆかりさんのストーカーだとしたらまさか見ただけでメモリガジェットに類似したものを作ったとでもいうのか。すると後ろからエキゾーストノートが聞こえて振り向くと、ミダスホイラーに乗ったりリイがやってきた。

「きりたん、どうしたんだ？事務所に戻ろうとしたら走って行くお前が見えたからついてきたが」

「いいところに！多分ですがあの機械仕掛けのフクロウがゆかりさんを攫った犯人の手先です！あれを追いかければ…」

「なるほど。ゆかりが捕まってる場所まで案内してくれるってことだな。乗れ！」

そう言ってヘルメットを投げ渡してきたので受け取り被るとリイに襟元を掴まれて持ち上げられ、後部座席に乗せられる。

「しつかり掴まってるよきりたん！」

「逃がさないでください！」

そのまま全速前進でフクロウを追いかける。ゆかりさん、待っていてください…！

私の服を丁寧に脱いで金庫にしまったマユさんにドン引きしつつ、マユさんが普段着であろう服に着替えている間、部屋の中を見渡したがダブルドライバーもガイアメモリもメモリガジェットもない。：普通に考えれば金庫の中だろうがさすがに番号は覚えられなかった。そのまま彼女に言われるまま家を移動する。

「…で、私を捕らえてどうしたいんですか。ミュージアムにでも売る？そんな価値ないと思いますけど」

マユさんにリクエストされて台所で料理しながらそう問いかける。あのあと手放して床に落ちていた包丁を手に脅そうとしたら普通に取り上げられてしまった。今も普通に包丁を使わせてもらっているところから、もし刺されそうになっても返り討ちにできる自信があるのだろう。かなりハイスペックである。

「まさか。ミュージアムなんかに渡したりしません。継星探偵事務所の人間にも。私と一緒にこの家で暮らしてくれたらいいんです」

私が差し出したチーズハンバーグを美味しくそうに食べながら答えるマユさんからは純粹な好意と、敵意が見えた。私の事が好きだと言う言葉に嘘はないのだろうが、ミュージアムや継星探偵事務所に敵意を抱いているのも間違いない。でもそうはいかないんだ。

「でもきりたんには私が必要で…！」

「そのきりたんの母親から頼まれたんですよ。ゆかり様がこのまま戦い続けると殺されてしまうから、このメモリを渡すから貴方が救ってやりなさい、と」

「え…？」

そうやって炎を纏った槍を手にした女でBと描かれたメモリを取り出し、机に乗せて見せるマユさん。まさかそのメモリを渡したのはミュージアムではなくて、月読アイ…!?

「私は嫌です。あなたが殺されるのを見るのは嫌です。ボロボロに傷付きながらも立ち上がるゆかり様はかっこいいですが、命を落とすのは駄目です。このまま見守っていてもよかったです、このままでは死んでしまうぐらいなら…：ねえ、私と暮らしましょう？ 何一つ不自由はさせないことを誓います」

「…貴方の愛はわかりました。だけど、私は探偵で、きりたんの相棒なんですよ」

「あのナインテイルフォックスやホワイトアウトのドーパントに挑んだら貴方は殺されます。私にはわかりますわ。今までの貴方達の戦いを、見て来ましたから」

「…確かにサイクロンジョーカーエクストリームでも手も足も出ませんでした、だからって諦める理由にはなりません！ 私は大好きなこの水都と言う街を守りたい！」

「その気持ちは分かりますわ。だけど、大好きな貴方に死なれたくないと思っっている私の様な人間もいるとわかってくださいまし！」

真剣な目で私を見据えて声を荒らげるマユさんに、思わず怖気づく。本気で私を思ってくれているのだとわかる。だけど、だけど。ここで終わるのは嘘だろう。

「貴方の心配は分かりましたけど…それでも、私は」

「まあいいですわ。ゆかり様が諦めてくれるまでずっと愛を育むことができるのですから」

「…いやまあ、キスはしてしまいましたけど…」

考えろ、考えろ私。机の上にあのメモリが置かれている。玄関の外の炎の壁はドーパントの能力によるものはずだ。メモリブレイクする事さえできれば外に出られるかもしれない。ならばと、注いだ牛乳を入れたコップを置くふりをしてメモリをこっそり奪い取るが、次の瞬間にはすり返されてしまった。……本当にハイスペックですねこの人は。

「メモリを奪い取ればなんとかなると思いましたが？貴方が望むならさしあげますが、力づくなんていかが？」

「いいんですか？喜んで！」

ハンバーグを美味しそうに食べ終え牛乳を飲み干すと立ち上がり、スカートの裾を掴んで持ち上げてペこりと挨拶するマユさん。メモリを取らんと手を伸ばすが、手で払いのけられマユさんはくるりと回転。足払いを仕掛けてきたのでバックステップで回避。廊下まで後退すると台所の入り口に立ったマユさんがつまんだメモリをひらひらと揺らして挑発してきた。

「ごんのー」

「はい、さしあげますわ」

「えっ」

手を伸ばして突進するも、メモリを放り投げられて硬直。目でメモリを追ってしまうと顔に掌底を受けて怯んでしまい、メモリをキャッチしたマユさんに壁まで追い詰められて顔と顔がすれすれ間近に追い詰められ、顔の横に壁をドンと叩かれる。いわゆる壁ドンだった。

「っ!？」

「あら。まっすぐ見つめられると顔を赤らめるのですね。新発見ですわ。しかしメモリがなくともこの身のこなし、さすがはゆかり様ですわ」

「…むしろなんで貴方はこんなに動けるんですかね…」

「わたくし、愛する者の為なら努力は惜しみませんわ!」

「答えになってません!」

メモリを奪い取ろうと手を伸ばすが、マユさんはひらりと回転しながら距離を取り、ブラウスの胸元のボタンを外して大きく開くとメモリを鳴らす。

《ブリュンヒルデ!》

「ああ、滾ってきましたわ!あのゆかり様が私だけを見て!私だけのために考えてくれている!滾るなど言う方が無理ですわ!」

そして左胸の上部に刻まれた生体コネクタが浮かび上がるとメモリを突き刺し、その姿が件のドーパント……ただし屋内だからか下半身がハイヒールの白銀色の鎧を身に纏った二本脚のものになっている形態に変身する。あのケンタウロス形態は形態変化だったと…!?

「これ以上騒がれたら近隣住民に気付かれそうなので、申し訳ないですが眠っていただきますわ」

「ぐっ!？」

膨大な熱気を当てられ、平衡感覚を狂って倒れてしまう。これは熱失神…?そこらへんの知識まで潤沢ですか、全く才能の無駄遣いと言うか……くそっ、変身できないとなにもできないんですか、私は……

「おやすみなさい。私だけの騎士様」

第五十話：純愛のB／火焰幻想・姉妹降臨

「ご苦労様ですわ、クロックロウ」

機械仕掛けのフクロウが飛んで行ったのは琴葉神社。まさか茜さんか葵さんが!?!と気の迷いをしながらミダスホイラーから降りて石段を登って行くと、境内に佇むその人物を見つけた。

「おや、クロックロウを迎えに来てみれば。ネット上の情報は完全に消したのにまさか盗聴器の存在に気付き見張っていたクロックロウをも見破るとは。ただの頭でっかちじやないみたいですよわね」

機械仕掛けのフクロウを止まり木の様に腕に止めたのは、髪の毛先が虹色がかったカラーリングの透き通った銀髪を腰まで伸ばし、鍵盤やスピーカーの意匠をあしらった黒のロリイタファッションに身を包んでいる、一見清楚で可憐なお嬢様。しかしハイライトが消えた金色の目はただ者ではないとわかる。

「そのフクロウ、お前のか？」

「ええ。クロックロウ。ゆかり様のメモリガジェットを元に、ギジメモリと一緒に作成した置時計型監視用メモリガジェットですわ」

「まさか、見ただけで作ったと…？」

「わたくし、ゆかり様のためならなんだってできますのよ」

フクロウ…クロックロウを撫でて飛び立たせた女が私を睨みつける。見覚えのない敵意の宿った瞳に思わずリリーの後ろに隠れてしまおうと女は嘲笑した。

「ふふっ、おかわいこと。わたくしは…：本名を言うと「地球の本棚」で閲覧されてしまうかもしれませんわね？ならば私は仮面ライダーダブルという正義の味方をよしとしないこの世全ての悪を敷く

者。ゾロアスター教の悪の神「アンラ・マンユ」と名乗りましょう。我が伴侶、ゆかり様の唯一の味方ですわ」

「は、伴侶お!？」

「ゆかり、オレと同じレズビアンだったのか!？」

「いやそこじゃないです」

いきなりとんでもないことを言い出したアンラ・マンユと名乗った女は私を値踏みするように見ると「勝った」とでも言いたげに嗤った。

「やはりゆかり様の伴侶には私がふさわしいですわ。こんな、ゆかり様に甘えてばかり、助けられてばかりの人間もどき。ゆかり様がいないとなにもできないデクノボー。貴方はゆかり様にふさわしくありませんわ。諦めて新しい相方を見つけなさいな」

「なんで初対面の貴方にそこまで言われなはいけないんですか!?! ゆかりさん以外とだなんて考えられません!」

「オレも、ゆかりときりたん以外のコンビがダブルなのは納得いかないな?」

「それは貴方達の都合ですわ。ナインテイルフォックス相手にぼろ負けして気まぐれに見逃されたのを忘れましたか? あんなのと戦ったら、肉体を担当しているゆかり様が無事ですむとは思えません。ゆかり様を死の戦いに巻き込まないでくださいまし」

「っ、それは…」

たしかに、ミュージアムは私の敵で、私の家族だ。本当は虚音イフと変身するはずだったのに、ゆかりさんは巻き込まれたただだ。ダブルを作った月読アイが新しい相棒を見つけてくれたのに、私のわがままでゆかりさんを戦わせ続けた挙句、親友と戦わせて苦惱させてしまった。

「それを選んだのはゆかりのやつだ。お前がどうこう言う権利はない」

「心配する権利はありますわ！だってわたたくし、ゆかり様を愛してますもの！愛した人間を心配する権利も無いというのですか！」

「誘拐しているやつにどうこういう権利があるか！」

「リリイ金堂！貴方こそI Aを始めとして何人も誘拐していたじゃないですか！」

「それを言われると言い返せないな！」

「ええ!？」

私が悩んでいる間にかつこよく啖呵を切ったかと思えば言い負かされてしまうリリイに思わずつこけてしまう。いや確かにゆかりさん一人誘拐してストーカーしていただだけのアンラ・マンユと異なり、誘拐強盗監禁殺人なんでもござれな大犯罪者だったリリイの方が悪人ではあるが。思い返してみればよく許せてるな私達。

「…とにかく！愛してるからってオレたちの仲間を誘拐するんじゃないやねえ！」

「強硬手段に出るしかなくなったのですわ!……早くゆかり様の待っている我が家に帰りたいたいと言うのに、邪魔をするというのなら容赦しませんわよ?。」

《ブリュンヒルデ!》

そうやってアンラ・マンユは炎を纏った槍を手にした女でBと描かれたメモリを取り出すと、ブラウスの胸元のボタンを外して大きく開いて左胸の上部に浮かび上がった生体コネクタにメモリを突き刺すと、その姿が件のドーパント……ブリュンヒルデ・ドーパントへと変わり、槍を構える。

《サイクロン!》

「ゆかりさん!……あつ」

「下がれきりたん!オレが相手だ馬女」

《ゴールド!》《パイレーツ!》

咄嗟にサイクロンメモリを取り出して鳴らすが返事はせず。我に返って悔しさに齒ぎしりしながらメモリを懐に戻すと、リリイが前に出てダブルドライバーNEOを腰に取りつけ二本のメモリを同時に装填。まるでジョリロージャーを思い出させる両腕を胸の前で交差するポーズを取って振り下ろすのと同時にダブルドライバーNEOを展開する。

「変身！」

《ゴールデンパイレーツ！》

「さあ！派手に行こうか！」

「私の愛の炎で燃やし尽くして差し上げましょう！」

エルドラゴのパイレーツカリバーとブリュンヒルデ・ドーパントの槍が激突する。ブリュンヒルデ・ドーパントは四つ足を大きく踏み込ませてエルドラゴを押しつけ、槍を頭上で高速で回転させて炎を纏うとそのまま横に回転させて炎の竜巻を放って来た。

「ちい！」

《パイレーツ！マキシマムドライブ！》

エルドラゴは避けようとするが背後に私と神社本殿があるのを見てドライバーから引き抜いたメモリをパイレーツカリバーに装填、黄金の光を纏って縦に振り、打ち消すまではいかなかったものの真つ二つに裂いて軌道を逸らすことに成功する。

「ちい…炎を操るドーパントか。ダブルのヒートの比じゃあないな」

「検索完了しました。ブリュンヒルデは北欧神話の大神オーディンの娘にして戦乙女ワルキューレの長女であり、リヒャルト・ワーグナーの『ニーベルングの指環』にてヒロインとして最も知られている戦乙女です。偽名のアンラ・マンユとまるで関係ないとは、恐れ入る」

「ニーベ…？横文字が多すぎるぞ！」

「別名シングルドリーヴァ。名高きジークフリートもしくはシングルドのヒロインと言えば分かりますか!?」

「ああ、ラインの黄金の」

黄金で思い出すのがリリイらしいですね…。呪われた黄金だろうと手を出すんだろうなあ…。とか考えている場合じゃない、警告しなければ。

「炎に包まれた館の中で眠りについたという逸話があつた。炎を操る力の元でしょう。それより気を付けてください。あの下半身の馬がブリュンヒルデの愛馬である灰色の天馬「グラナーネ」だとしたら…飛びます！」

「は?!」

「ご明察。頭だけはいい頭でつかちなだけはありませんわ」

そう言った瞬間、下半身の馬の背中から翼が生えて羽ばたき、ブリュンヒルデ・ドーパントが飛翔する。高速で空中を舞ってエルドラゴに斬撃を叩き込んで吹き飛ばす。

「ゆかりさんを攫った時も今思い出せば飛んでました…：飛べると言うだけでかなり厄介です」

「作戦は！」

「これを！」

《ヒート!》

そう言つて私がボタンを押して投げ渡したのはヒートメモリ。危なげなく片手で受け取ったエルドラゴはヒートメモリを腰のマキシマムスロットに装填。炎に包まれて飛び上がる。

《ヒート! マキシマムドライブ!》

「なるほど炎を推進力にするわけか！」

「さすが、ゆかり様を支えた頭脳は伊達じゃありませんわね！」

炎に包まれ空を自在に飛ぶエルドラゴと、四つ足の足首に炎を纏って空を駆け回るブリュンヒルデ・ドーパントが激突。巧みな槍捌きと剣捌きが琴葉神社の上空で斬り交わされる。

「お得意の炎は今のオレには効かないなあ！」

「おやそれはどうでしょう。我が炎は我が愛を薪に燃え上がる。さらに燃やせば火力も倍増ですわ！」

一度距離を取ったブリュンヒルデ・ドーパントがばら撒いた火球の雨をまともに受けながら突撃するエルドラゴだったが、ブリュンヒルデは突如全身に紅蓮の炎を纏い、槍を振るって炎が動き、周囲に槍を手にした天使の様な翼が生えた戦乙女：ワルキューレが九体炎で形成。いつせいに炎の槍をエルドラゴに投擲してきた。

「なに!？」

「ブリュンヒルデはワルキューレの長女。姉が望めば妹達は手伝ってくれますわ！名づけてフレイジング・リヴスラッセル火焰幻想・姉妹降臨！」

「ぐああああ!？」

パイレーツカリバーで斬り弾いていたエルドラゴだったが、斬り損ねた一本の炎の槍が左肩に突き刺さり、悲鳴が上がる。

「リリー！」

「ぐっ……トウースの頭突きに比べれば大したことない。だが……」

ブリュンヒルデ・ドーパントを中心に炎の槍を手に並び立つ炎のワルキューレ九体。その戦力差は絶望的だ。

「…ダブルの変身を封じてこいつは、なかなか性格悪いな？」

「お褒めに預かり光栄ですわ。わたくし、ゆかり様の為ならなんでもできますの。DIYからパルクールまで！なんでもしてみせますわ！愛に生きるのですわー！」

「そうかい。オレの腹心の西友みたいだな？」

「狂信者と一緒にされては困りますわ！」

「うるさいヤンデレサイコメンヘラめ」

「失礼な！私は純愛者ですわ！」

なるほど。リリイの人を見る目は確かだ。ヤンデレでサイコでメンヘラ、なるほど。ゆかりさんのことが大好きで一般常識分かっているけど自分ルール行使して、ゆかりさんが好きな自分が好き、そんな人だと言う事ですね。

「いい加減帰らせてもらいますわ。いち、にの！」

「っ!？」

炎の槍を手に突撃していく炎のワルキューレ九体。エルドラゴは炎を纏った状態で何とか避けていくが、いつの間にか全方位を囲まれてしまう。

「さん、はいー！」

「しまっ……ぐあああああ!？」

いつせいに全身を炎の槍で貫かれ、炎のワルキューレ九体に組み付かれて大爆発。境内に落下して変身解除されるリリイ。全身火傷や焦げ跡だらけで見るに堪えない。

「あ、これいただきますね。あの人の指示ですので」

「あの人…?」

境内に降り立ち、リリーの傍らに落ちていたヒートメモリを摘み上げるブリュンヒルデ・ドーパントに首を傾げる。まさか、ルナメモリを奪ったのも、ダブルドライバーを奪ったのも偶然じゃない…？

「ではでは。二度と会わないことを祈りますわ。アデュー」

そう言って四つ足に炎を纏って空中を。パカラツパカラツと駆けて行くブリュンヒルデ・ドーパント。咄嗟にスタッグフォンを取り出し追跡させるも、即座に撃墜されてしまう。

「待てー待ちなさい！ゆかりさんを、返せ！」

飛んでいくブリュンヒルデ・ドーパント…アンラ・マンユに手を伸ばすしかない私の悲痛の叫びが境内に木霊した。そんな私の腰にダブルドライバーが出現したのは、ブリュンヒルデ・ドーパントが立ち去って五分後のことだった。

目を覚ますと寝室で一人で寝かされていて。…着せられたままの着物のある部位に変なシミができてるのは気にしないことにする。ふらつきながらもマユさんの自室に侵入し、金庫を調べる。駄目だ、開かない。何かキーワードの番号がある筈だ。…まさか？

「いやいや。いくら私が好きだからってまさか…」

まさかな、と思いながら試しにと私の誕生日である「12月22日」
：1↓2↓2↓2と合わせてみる。ちなみにあかりも同じ誕生日だ。
そんなことを考えていると、カチャツという音と共に金庫が開いた。

「ええ…」

ドン引きしながらも、金庫の中に納められていた私の一張羅…なんか胸元が大きく広げられているが気にしないことにする…に着替える。そして一緒に納められていたトランクケースを開けると、丁寧にダブルドライバーとジョーカーメモリ、メタルメモリ、トリガーメモリ、ルナメモリが納められていた。

「これは…おやつさんに渡しに行った時のトランクケースと一緒に？」

とりあえずダブルドライバーを手に取り、腰に取りつけると、脳裏に声が響いた。

【ゆかりさん!?!ゆかりさんですか!?!今、どこですか!?!】

「きりたん!今いる場所は分かりません。ですがダブルなら脱出できるはず……」

「なにをしているのでしょうか、ゆかり様」
「!?!」

背後から声をかけられて、おそるおそる振り向くと、目のハイライトを完全に失ったマユさんがいた。

「えっと、これは…」

「私が留守の間に乙女の秘密を探るなんて…おいたがすぎますわね。少しお仕置きさせてもらいますわ」

《ブリュンヒルデ！》

「っ、きりたん！」

《ジョーカー！》

「はい、ゆかりさん！ 《サイクロン！》」

「【変身！】」

マユさんの自室に疾風が吹き荒れてアルバムやらが浮かび上がり、床に落ちる。サイクロンジョーカーに変身した私達はブリュンヒルデ・ドーパントに立ち向かうのだった。

第五十一話：純愛のB／遙か高き炎の壁

「ネットの情報が頼りにならへんからなんとか聞き込みを続けて目撃情報を追ってここまでできたはいんやけど……」

エンジンブレードを入れたゴルフバッグを担ぎながら歩いてきたうちは手帳にかかれた目撃情報と目の前の光景を見比べる。間違いない、この近くにあのドーパントが降りてきたのは確かだ。

「ここってたしか、トウース・ドーパント…弦巻マキを逮捕しにきた時にも来た…ゆかりのうちの近くやんな？」

というか今いる場所の目の前がゆかりの家だったはずや。この近くにドーパント…犯人がいるってことは大したストーカーやんな。

「捜査は足や。一軒一軒家々を巡るかあ」

「やだなあ。そんなのつまらないじゃないですか。行き詰まったなら勘で当てるなりドラマを生んでくださいよ」

「っ!？」

咄嗟にゴルフバッグからエンジンブレードを引き抜いて振り返り、構える。そこには手帳と筆ペンを手にした、清楚なワンピースの上から水色のカーディガンを身に付けている桃色がかったふんわりとした茶髪で眼鏡をかけた少女に見紛う若々しい容姿の美女…東北奏楽がいた。

「快子さんの事件以来になりますかねえ。あの時はどうもどうも、嬉しい演目ありがとうございます。大変、面白かったですよ」

「ホワイトアウト……、東北奏楽ア……!」

「おっと」

快子のことを話題に出されて一瞬で怒りが振り切り、エンジンブレードを両手に握って上段に構えて一気に振り下ろすも、東北奏楽は素早い身のこなしで回避。エンジンブレードの剣先に飛び乗ると筆ペンをうちの目の前に突き付けてほくそ笑む。

「そうカッカしないでくださいよ。私も今日は仕事で来てるんです。仮面ライダーの片割れを攫ったドーパントの調査にね。どうやらミュージアムが関与してないドーパントらしいんですよねえ……」
「そんなもん、知るかー！」

東北奏楽が乗っているエンジンブレードを思いつき振り上げるとその勢いに合わせて宙返りされ、スタツと華麗に着地して氷柱でWと描かれたガイアメモリとガイアドライバーを取り出したのでこちらもアクセルドライバーとアクセルメモリを取り出す。

「貴方がいるとゆつくり調査もできません。せいぜい面白く戦闘不能になってくださいな」

《ホワイトアウト!》

「うちに質問するな。みんなの仇……今日こそ取らせてもらおうで！」

《アクセル!》

「変……身!」

《アクセル!》

そしてうちはアクセルに変身、エンジンブレードを構えてホワイトアウト・ドーパントに姿を変えた奴に斬りかかった。

「【変身！】」

《サイクロン！ジョーカー！》

「はあああああ！」

仮面ライダーWのサイクロンジョーカーに変身。二本足の人型形態のブリュンヒルデ・ドーパントを廊下まで押していき、拳のラッシュを叩き込む。しかし殴った部位から炎が吹き上がり、それがブリュンヒルデ・ドーパントの両手に集まっていく。

「なっ…!?!」

「ああ！嬉しいですわ！ゆかり様の愛をこの身に受けられるなんて！」

集束した炎を纏った両手による強烈な掌底が叩き込まれ、廊下の突き当たりの壁に激突。崩れ落ちる。

「ぐはっ…なんで…」

『ブリュンヒルデのメモリは使用者が愛を倍増させればその分火力を増します』

「つまり…?」

『ゆかりさんの拳を「愛情表現」と捉えているのか殴れば殴るほど火力が上がるってことかと…』

「ええ…」

「殴り愛、ですわ！」

こちらが殴れば火力を増した炎を纏ったブリュンヒルデ・ドーパントの拳がカウンターで叩き込まれる。無骨に殴り続けるも、あちらの

火力が増していくだけで、こちらのリバーブローを華麗に手で受け流したブリュンヒルデ・ドーパントのアップパーを喰らって大きく後ずさる。

「ならばー！」

《ジョーカー！マシンマムドライブ！》

『ジョーカーエクストリー…むがっ!』』

マシンマムドライブを叩き込もうとメモリを装填して疾風に乗り浮かび上がるが、すぐに頭をぶつけて廊下に叩き落される。…室内でジョーカーエクストリームは使えない…だと？

「痛い…」

『ゆかりさん！前！前!』

「もつとーもつとーもつと愛をちょうだい！ですわ！」

私達の両手を掴まれて無理やり立たされ、全身発火して組みついて来るブリュンヒルデ・ドーパント。装甲がバチバチと火花を散らす。

「きりたん！ヒートですー！」

『そいつに取られてありません!』

「ええ!?!…ならばー！このおー！」

「ああん！」

組みついているのをいいことに膝蹴りを入れて蹴り飛ばす。なんか横に倒れて悶えているが気にしない。今のうちに、金庫の中のケーソに入られたままのメタル・トリガー・ルナのメモリを取り返して

…

「させませんわ！」

「っ!?!」

部屋の入口にこの家屋を閉じ込めているものと同じと思われる炎の壁が展開、弾き飛ばされ廊下に転がされる。

「ぐっ……この炎の壁は……!」

「ゆかり様はご存じのはず。私の愛の炎は私が許した人間以外は通しませんわ!」

『概念系故の固定概念……厄介ですね』

炎の壁に拳を叩き込んで破ろうとするも、腕を振るった時に発生するそよ風で揺らめくだけで貫くことすらできない。これじゃあメモリに手が届かない……!

「残念ですがゆかり様。この部屋に入ることは禁止しますわ。他の部屋ならご自由に。必要なら倉庫も改造してゆかり様のリクエストに応えますわ」

「私は……きりたんもあかりもリイもない事務所なんて、悲しいだけです!」

『事務所?事務所を再現したとでも言うんですか!?!』

驚くきりたんに頷いておく。できることならこの家をゆっくり案内したいぐらいだ。

「それは駄目ですわ。きりたん……東北記理子はゆかり様を死地に導く。継星あかりはおやつさん……虚音イフを思い出させるだけ。リイ金堂に至ってはレズビアンで犯罪者!危険すぎますわ!ゆかり様が襲われたらどうしてくれますの!?!」

「寝ている間に奪った人が言っても説得力ねーですよ!?!」

『え?』

ムズムズとした慣れない感覚で疼いている下半身にいらつきなが

ら思わず言っつてしまい、きりたんの驚いた声が聞こえて気まずくなる。やっべ。探索中に気付いて気にしないようにしていたのについて思わず…。

「…忘れてくださいきりたん」

『いや聞き捨てなりません?!』

「気付いていただけたのですわね?! お恥ずかしながら大人の玩具を買うのはさすがにためらいまして…この槍でこう、トンとー」

「トンと、じゃねーですよ?! 道理で妙に痛いはずですねこのサイコ!」

槍を抱きしめて恍惚とした声でそう語るブリュンヒルデ・ドーパントにブチギレる。寝ている間に失っていた気持ちが変わりますか?! とか罵倒するとさらに燃え上がるブリュンヒルデ・ドーパント。物理じゃなくてもいいのか。無敵すぎないだろうか。

「ああ、サイコなどと…よよよ…悲しいですわ。でもわかってくださいまし、その痛みはわたくしからの愛の証ですわ!」

「わかるか!? ファーストキスマでに飽きたらずよくもはじめてまで!」

『ファーストキスマで?!』

なんかきりたんが凄いい反応してる。身体年齢小学生には早かっただろうか。すると右側が凄まじい力に溢れて行くのを感じた。

『ゆかりさんの…ゆかりさんのおおおお!』

「おおおお、これ、フレンジーの時の…!」

グルン、と右側が拳を振り抜いて振り回され、強烈な拳が叩き込まれてブリュンヒルデ・ドーパントを殴り飛ばす。私に意思による攻撃じゃないためか、炎が噴き出さずに攻撃が通用しているようだ。

「痛いですわ!？」

「このままー!」

『絶対に許しません!』

「この頭でつかち!無粋ですわね!」

私を振り回して繰り出した拳は簡単に受け止められ、炎上した業火がこちらまで伝わってきて爆発。その衝撃で階段の下まで転がり落ちる。

「ぐう…」

「貴方達、仮面ライダーWの強みはメモリの交換による多彩な能力の使用によりどんな相手にも対応できるという事ですわ。その戦いを見てきた私は思いました、真つ向勝負では勝ち目がない。急襲して相手のペースに持ち込ませず勝利する、それしかない。私に対抗できるのは恐らくヒートとメタル。どちらも、いやサイクロンとジョーカー、所在のわからないファングとエクストリーム以外のメモリは今、我が手中にありますわ。勝ったも同然。なのでゆかり様、諦めて我が手中に収まりくださいませ」

「…残念ながら断らせていただきます。理由は分かりますよね?」

「ならどうすると?ゆかり様たちの最強の力:サイクロンジョーカーエクストリームで!この、愛に燃える私に勝てるっても?」

『なら見せてやりますよ……』

「駄目です、きりたん。今の精神状態でエクストリームは……」

『来なさい、エクストリーム!』

すると甲高い鳴き声が聞こえ、迎え入れるべく玄関の扉を開けると彼方の空からきりたんを収納しているのであろうエクストリームメモリが飛来するのが見えた。そのまま炎の壁を貫かんとするが、信じられないことが起こった。炎の壁にエクストリームメモリが触れた瞬間、炎が生きている様にエクストリームメモリを包み込んで封じ込めてしまったのだ。

「大事なことなでもう一度言いますわよ！私の愛の炎は私が許した人間以外は通しませんわ！」

『エクストリームまで…!?!』

「それより、きりたんの身体が…!?!」

思わずエクストリームメモリの中に入れられたきりたんの身体を心配すると、ショートを起こしたエクストリームメモリからきりたんの身体が排出され、同時に変身が強制的に解除される。

「えっ？なんで……」

「私は知っていますわよ！変身してない方の身体に異常が起きた場合強制的に変身が解除される！推測どおりですわ！」

「ゆかりさん……!?!」

炎の壁の向こうで黒焦げで火傷だらけのきりたんが立ち上がり、どこからともなくやってきたフアングメモリをメモリーモードにして手に取るのが見えた。それで思惑に気付いた私はジョーカーメモリを構えてボタンを押してガイアウイスパーを鳴らした。

「まだ、終わっていません！」

《ジョーカー!?!》

「牙の切札、ですか。相手にとって不足無し。不覚にもわたくし、トウース・ドーパントとの決着を肉眼で見届けた時は魂が震えましたわ！」

「吠え面かかないでくださいよ！」

《フアング!?!》

槍を抱えて身を悶えるブリュンヒルデ・ドーパントにきりたんが睨みを切りながら、炎の壁を挟んで並び立った私達は同時に叫ぶ。

「変身！」

《ファング！ジョーカー！》

《アームファング》

ファングジョーカーにきりたんの身体で変身するなり、アームセイバーを展開して炎の壁を斬り裂いてエクストリームメモリの救出を試みるが揺らめくだけでビクともしない。

「そんなもので私の燃えるような愛が裂けるわけがないですわ」

「そんな、あらゆるものを斬り裂く牙も通じない…!？」

『ならマキシマムでぶちぬきましょう！』

《ファング！マキシマムドライブ！》

槍をその場に置いて意識を失っている私の身体を抱きかかえながら高みの見物を決め込むブリュンヒルデ・ドーパントの姿を炎の壁越しに見据えてタクティカルホーンを三回押し込んで右足首にマキシマムセイバーを展開して跳躍。

『『ファングストライザー！』』

グルグルと回転しながら炎の壁に突っ込んでいき、恐竜の頭部のようなオーラと共にメモリに描かれている「F」の文字が浮かび上がらせて連続で斬撃を叩き込む。

「そんな…!？」

『ファングのマキシマムドライブも通じないとは…』

しかし炎の壁は揺らぐだけで突破はできず、私の身体を例の倉庫に置いたらしいブリュンヒルデ・ドーパントが炎を纏った槍をくるくる頭上で回して構えていて。

「愛の炎よ、燃え上がれ！燃ゆる愛が嗣ぐまで！」
『!?!』

投擲された炎を纏った槍が咄嗟に回し蹴りの要領で振るったマキシラムセイバーと激突し大爆発を起こし、次の瞬間私は倉庫で目覺めた。

「きりたん…!?!」

「彼女なら木端微塵に吹き飛びました。これでもう、なにも心配することはありませんね？」

「そんな…」

倉庫の扉を開けて現れたマユさんの言い放った言葉に、私は愕然となるしかなかった。

第五十二話：純愛のB／やがて愛という名の雨

「ぐうう…全身が焼けるように痛いです……」

フレイジング・ロマンシア
燃ゆる愛が嗣ぐまでとかいう技。二度目で、しかも投擲に変えていたから何とか対処できた。マキシマムセイバーを回し蹴りしてぶつけることで軌道を逸らし、直撃を逃れた。しかし爆発の余波までは対処できず、変身が強制解除されたせいで体が軽くなったことでどこかの家の庭まで吹き飛ばされてしまった。

「ダブルドライバーがないってことはまたダブルドライバーを奪われましたか……」

さてどうしたものか。傍らに倒れていたフアングメモリはフレームが融解して故障してしまっただし、見れば服は黒焦げ、髪の毛先も煙が上がり、露出している肌は火傷が凄い。エクストリームメモリに入れば修復できるでしょうが……修復、ですか。考えたくはなかったですが、人間離れしているなあ。

——— 　　こんな、ゆかり様に甘えてばかり、助けられてばかりの人間もどき。ゆかり様がないとなにもできないデクノボー。

——— 　　貴方はゆかり様にふさわしくありませんわ。諦めて新しい相方を見つけなさいな。

——— 　　それは貴方達の都合ですわ。ナインテイルフォックス相手にぼろ負けして気まぐれに見逃されたのを忘れましたか？

——— 　　あんなのと戦ったら、肉体を担当しているゆかり様が無事ですむとは思えません。

——— 　　ゆかり様を死の戦いに巻き込まないでくださいまし。
——— 　　きりたん…東北記理子はゆかり様を死地に導く。

「ぐっ、ぐすっ、ぶぐう……」

言われた言葉がフラツシユバックする。正直怒りだけは沸々と湧き起こる。だけど、言い返せなかった。涙が溢れてくる。アンラ・マンユの言っていたことは事実だ。ゆかりさんが死んでしまうかもしれないと思いつながら相棒でありたいがために無視していた。ゆかりさんのことが大事なら離れるべきだとわかっている、だけど……。

「ゆかりさん……」

「姉ちゃんがどうかしたのか?」

「大丈夫、きりたん?」

「あ……」

聞き覚えのある声に顔を上げると、そこには結月縁と結月雫……ゆかりさんの弟妹きょうだいがいた。どうやらここは、ゆかりさんの自宅だったらしい。まさかこんな近くで監禁していたとは……灯台下暗しとはこのことか。

「まさか、姉ちゃんがすぐ近くに監禁されていたなんてな」

「うん、気付かなかった」

「私もついさつき気付きましたので。ありがとうございます……」

今私は家の中のリビングに案内されてシャワーを借りた後にゆかりさんの子供の頃の服を借りて出てくるとソファに座らされ、雫さんに治療してもらっている。縁さんは簡単な料理を作ってくれて、チャーハンが差し出されたのでありがたいといただく。しばらくもぐもぐと食べていると縁さんが小説を読み始め、雫さんがノートとシャーペンを手に勉強を始めたので気になったので思わず問いかける。

「…あの、心配じゃないんですか？」

「もちろん心配ですよ。そんな傷だらけで泣いていたんですから」

「姉さんが女の子を泣かせるなんて珍しいとは思うけどな」

「いやそうじゃなくてゆかりさんが誘拐されてるんですよ…？」

そう聞くと縁さんと雫さんは顔を見合わせると、同時に「別に？」と答えてきたので愕然とする。

「なんで！姉を誘拐されたんですよ!?!もう二度と帰ってこないかもしれないんですよ!?!」

「だって、俺達は姉さんを応援すると決めたからな。姉さんなら大丈夫だろ、イフさんの弟子になることを納得させた根性がある」

「それに姉さんは約束してくれた。母さんと父さんみたいになくなったたりしないって。だから、心配はしないよ。姉さんは決めたことは絶対に守るから」

「まあさすがに、親友のマキさんが相手だった時は折れそうになって心配したがな。だけど、乗り越えた」

「姉さんは誰よりも強いと私達は知っている。だから心配はしないんです」

そうなんでも無いように言う縁さんと雫さんに愕然となる。どうやら私は、まだゆかりさんを信じ切ることができていなかったらしい。

「きりたんは姉さんの相棒なんだろう？」

「姉さんを、頼みます。私達では姉さんの力になれませんので」

「お二人とも…：わかりました、任せてください！」

縁さんと雫さんの信頼の言葉に、頷いて結月家を飛び出す。向かうは事務所のガレージ。そこに、あれがある。

「おかえり、きりたん。そろそろあきらめたかな？」

「月読アイ……！」

リリイが寝ていてあかりさんが看病している事務所を素通りしてガレージに入ると、そこには月読アイがいて。先日のトウース事件を受けて、私に何かあった時のためにゆかりさんに使ってもらおうと、私が修理していた「それ」を手にニコニコと笑っていた。

「くるとおもった。ダブルドライバーをふうじられたらこれしかないもんねえ」

「それを渡してください」

「いやだ。きりたんが結月ゆかりをあきらめてついなちゃんかりリイのどちらかをえらばいいだけのはなしなのに、なんでわかってくれないの？」

「……やはり。今回の事件の黒幕は貴方でしたか、月読アイ」

私がそう言うのにんまり笑みを浮かべる月読アイ。そうなんじゃないかと思っただがやはりか。

「ミュージアムの売っている一般のメモリには異様に強力なブリコンヒルデのメモリ、何故か私たちのメモリを回収する理由。殺されでもしない限り止まらないゆかりさんを物理的に止めて、同時にダブルを完全に攻略されることで無力感を煽り、私がついなさんかりリイのどちらかを頼るように仕向けた……そんなところでしょうか」

「ごめいとー。じつはずつとまえからかのじよのそんざいにきづいてね。いばしよがわからなくてせつしよくできなかつただけど、トウース・ドーパントのじけんであのいえにすんでることにきづいて、「このメモリで結月ゆかりをてにいれていいから、かわりにダブルドライバーとメモリを回収してダブルをかんぷうして」ってとりひきしたんだ」

そう笑ってそれを弄ぶ月読アイに拳を握りながら問いかける。

「…私のために？」

「そうだよ。ぜんぶぜんぶ、きりたんのため。結月ゆかりにとつてもかのじよといっしよにいたほうがあんぜんだししあわせだよ。結月ゆかりなんてわすれて、ついなちゃんかりリイとダブルになってミュージアムを……」

「断ります。ゆかりさんの意思を聞いてないし、前にも言いました。私の相棒は、ゆかりさんだけだ！」

「…しようがないなあ。ききわけのないこにはおしおきだよ」

《ラバー！》

啖呵を切ってガレージ内を走る。すると月読アイはだぼだぼの裾の中から小型のトリガーマグナムの様な銃とねじれた風船でRと描かれたメモリを取り出し、メモリを銃に装填。乱射してくる。一発被弾して激痛に怯む。ゴム弾…!?

「ごしんよーのプロトマグナムとラバーメモリだよ。ゴムだんだとあなどるなかれ、おくないならばむてきだよー」

「っ!?!」

跳弾したゴム弾がガレージ内を跳ね返りまくり、四方八方から私を打ちのめす。私がエクストリームメモリで傷を再生できるのを知っているからか、容赦ない。あまりの威力に着ているゆかりさんの子供

の頃の服も破れてボロボロになって行く。だけど、それでも……ゆかりさんを諦める理由にはならない！

《フロッグ！》

「月読アイ………母さんのバカヤロー!!」

《母さんのバカヤロー!!》

フロッグのギジメモリを取り出して咄嗟に思い浮かんだ声を録音。フロッグポッドに装填してライブモードにすると最大音量で出力。ピョンツとフロッグポッドが月読アイの傍まで跳躍すると、至近距離で大音量のボイスを叩き付け、それをまともに聞いた月読アイは白目をむいて立ったまま気絶した

「はあ、はあ………本当に私の母親だと言うのなら、子供の意ぐらい酌んでくださいよ……」

気絶した月読アイからそれ……ゆかりさんが虚音イフから私や帽子と一緒に託されて保管していたものを勝手に修理したロストドレイバーを無理やり取り返し、見つめる。もう、これしかない。

「……ゆかりさん……お借りします」

ボロボロのゆかりさんの子供の頃の服を脱いで、以前ゆかりさんが買ってくれたはいいけど趣味じゃなかった黄色いボーダー柄の指穴付きカットソーの上に濃い緑色のロングパーカーを羽織り、クロツプドパンツと茶色いブーツを履いて事務所に戻ると、ゆかりさんの帽子の一つにサイクロンとよく似た色の緑のものを見つけたので、いつもの包丁の髪飾りを置いてその帽子を手に取り、借りることを呟いてから頭に被る。心機一転、これが私の新しい一張羅だ。……帽子はゆかりさんとお揃いで恥ずかしいから今回限りのつもりだけ。

「きりたん、なんか騒がしかったけど何が…ってその姿は…？」

するとリリーの看病していたあかりさんがこちらに気付く。私は不敵に笑むとあかりさんに問いかけた。

「あかりさん、確かバイクの免許持ってましたよね？」

「ええ、一応事務所の所長になってから念のために取っておきましたけど…」

「私を今から言うところに送っていただけませんか。そして見届けてください、私の変身を」

「ゆかりさんの居場所が分かったんですね！もちろん、全力で手伝いますよ！」

そして私はあかりさんの運転するマシンハードボイルダーの後部座席に乗り、ゆかりさんの家の近くにある一軒家へと向かうのだった。

「きりたん……」

ダブルドライバーもジョーカーメモリモ没収され、きりたんも木端微塵に吹き飛んだと聞いて無気力に過ぎすしかない私は、適当に昼食を作ってマユさんに振る舞った後、事務所を模ったりビングのタイプライターにひたすらこれまでの出来事を打ち込んでいた。

「そう怒らないでくださいまし。まだ、ゆかり様のはじめてはいただ

「いいません。あれは調子に乗って嘘ついただけですわ…」
「奪う気満々じゃねーですか!?!」

いやまあまだ失ってなかったのはよかったけど！痛かったのは奪おうとして槍の柄を押し付けていたのが原因と言うのはちゃんと聞きましたからね!?!しかしこのタイプライター凄く古い機種なのによく同じものを用意できたな、と視線を向けるとマユさんは笑顔で。

「あ、それなら作りました」

「は?」

「さすがに発売中止されていたので、勉強して作りました。同じ見た目にするの苦労しましたよ…」

「そこまでして、何が目的なんですか…」

「もちろん。ゆかり様への献身に他なりませんわ」

その言葉を聞いて改めて確信する。マユさんは本当に私を愛してくれている。だけど、その愛をどう示せばいいのか分からない人間なんだ。だから私を守るために監禁までしたし、私が喜ぶだろうとこの家を用意した。全て、私への愛のために……。

「…私の事を思うならこの家から解放して、ドライバーとメモリを返してください」

「嫌ですわ。貴方が傷付くところはもう見たくない。傷付きながら立ち上がるゆかり様はかっこいいけど、それ以上に傷付いてほしくないのですわ!このまま戦い続けたらゆかり様は死んでしまいます!だから…」

「それでも、私は戦い続ける……この水都と言う街が大好きだから」
「…こんなに愛を示しているわたくしよりも、水都のことが好きなんですか?」

そう涙目で問いかけてくるマユさんに、一瞬悩んでから答える。

「貴方の愛は嬉しいですけど。水都を守る方が最優先です」
「…なら水都が無くなればゆかり様は戦うことはありませんのね？」
「え？」

今なんて言いました？聞き捨てならないことを言ったような…：
？と視線を向ければ、取り出したメモリを胸の生体コネクタに挿入しているところだった。

《ブリュンヒルデ！》

「待っていてくださいまし。今すぐゆかり様を危険に晒す水都と言う街を滅ぼしてまいりますわ」

「待ってくださいマユさん!?きりたんだけでなく私の弟妹きょうだいたちまで燃やすつもりですか!?…それに貴方の家族までいるはずですよね!」
「ゆかり様以外どうでもいいです。全部全部、この家以外燃やし尽くしてさしあげますわ!」

そう狂気のままに外に向かう二足歩行形態のブリュンヒルデ・ドーパントを慌てて追いかける。メモリの毒素でおかしくなっている…？このままでは私への愛のために、水都を火の海に…!?

「させない!」

「邪魔ですわ!」

腰に飛びつくも簡単に払いのけられ、玄関を通って外に出るブリュンヒルデ・ドーパント。慌てて追いかけるも炎の壁に阻まれて追いかげられない。もう私は願うしかなかった。ついなさん、リリィ…：誰か、きりたん…：…!

「なにするつもりか知りませんが、させませんよ」

「あなたは…!?!」

すると炎の壁のすぐ向こうでブリュンヒルデ・ドーパントが止まる。その肩越しに、いつもと違う格好のきりたんと、ハードボイルダーのハンドルを握るあかりがいた。

「その服は私が以前、プレゼントした…？趣味に合わなかったんじゃない？」

「着る服が無かったのでしょうがなく！しよがなくです！勘違いしないでくださいね！」

「痴話喧嘩しないでくださいまし！？ゆかり様からもらった服だなんて羨ましくすぎますわー！この街と一緒に燃やして差上げます！」

「…なるほど？ゆかりさんが水都を愛しているがために戦おうとするから水都を燃やそうと言う魂胆ですね？でもそれは、ゆかりさんの相棒として私が止めます。止めて見せます」

「それはまさか…!？」

《サイクロン！》

きりたんが懐から取り出し腰に装着したのは私がおやつさんから託されたロストドライバーで。サイクロンメモリを取り出してガイアウィスパを鳴らし、スロットに装填にして構えると斜めに倒して緑の疾風に包まれて浮かび上がり、大人の姿になると装甲に包まれた。フアングジョーカーの時と同じだが、初めて正面から見た。

「変身」

《サイクロン！》

そして現れたのは、全身緑で真ん中の線が存在しないダブル。二つに増えたマフラー、ウィンディスタビライザーが水都の風でたなびき、その戦士は右手の人差し指をブリュンヒルデ・ドーパントに向けて名乗りを上げる。

「仮面ライダー…サイクロン。さあ、お前の罪を数えろ」

「罪など愛の前には不問！ですわ！」

槍を手にケンタウロス形態となり突撃するブリュンヒルデ・ドーパントだがサイクロンは風に乗って跳躍して回避。空中で二段キックを繰り出してブリュンヒルデ・ドーパントを転倒させる。

「下がっていきくださいゆかりさん」

そう言ったサイクロンの言うとおりに一步下がると、回し蹴りする様にサイクロンが一回転して竜巻が発生。この家を囲んでいた炎の壁を取っ払ってしまう。たまらず外に脱出した私にブリュンヒルデ・ドーパントが激昂する。

「よくも！わたくしたちの愛の城を守る城壁を！」

「愛する人間をも焦がす炎なんていらないますよバーカ」

そう挑発したサイクロンに向けて凄まじい速さで炎を纏った槍の刺突が襲いくるも、サイクロンは風の壁を張り炎を散らして槍の先端を掴み、逆に引引っ張って膝蹴りを叩き込み、アッパーでかち上げる。

「な、ぜ……ここまで力を……」

「貴方が予習して完璧にメタるタイプなのはわかりました。初見のサイクロンに対応できないのもひとつ。そしてサイクロンの能力は風を受けてのパワーアップです。熱風を必ず発生させる貴方にとっては天敵です」

「ならば、炎を纏わなければ……！」

そう言って両手に握り振り上げた槍を叩きつけるブリュンヒルデ・ドーパントだったが両手を構えたサイクロンに受け止められ、さらにサイクロンメモリを右腰のマキシマムスロットに装填して叩くサイ

クロン。

「んな!？」

《サイクロン！マキシمامドライブ！》

「怒ると冷静さをかくのも貴方の弱点です。…ライダーチョップ！」

そして、風の刃を纏った手刀が槍を叩き折り、よろよろと後退したブリュンヒルデ・ドーパントはやけくそになったのか炎を纏って道路を走り、サイクロンに突撃。サイクロンは再び右腰のマキシمامスロットを叩いて竜巻に乗り空に舞い上がる。

「やがて、愛という名の雨が我が身を癒すまで…！」

《サイクロン！マキシمامドライブ！》

「ライダーキック…！」

そして風を受けて急降下したサイクロンの飛び蹴りがブリュンヒルデ・ドーパントに炸裂、吹き飛ばして、サイクロンは着地して変身を解除し、きりたんんに私とあかりさんが駆け寄った。

「まだ…まだですわ…！」

「なっ…サイクロンじゃパワーが足りないということですか…!？」

しかしそれでも立ち上がるブリュンヒルデ・ドーパントに、戦慄する私達。すると、ブリュンヒルデの背後で金ぴかが煌めいた。

「駄目押しだー！」

《ゴールド！マキシمامドライブ！》

やってきたのはミダスホイラーに乗った仮面ライダーエルドラゴ、ゴールドエンルーラー。波紋が出現してその中にルーラチェインが飛び込み、ブリュンヒルデ・ドーパントの四方八方に波紋が現れて雁

字揃めに拘束。完全に身動きが取れなくなってもがくブリュンヒルデ・ドーパントの背後からエルドラゴが跳躍、右足に黄金の光を纏い、ルーラチェインを戻す勢いで急降下して飛び蹴りを叩き込んだ。

「ゴールデンジャッジメント！」

「馬鹿な、こんな愛も知らない怪物もどきに……ぐっ……ああああああああ!？」

「生憎とオレも愛は知っているんでな。これにて裁定、有罪だストーカー女」

爆散し、転がったマユさんの傍に着地。美味しい所を完全に持っていったエルドラゴのサムズアップに、私達もサムズアップで応えるのだった。

その後。あの問題しかない家はあかりが実家のお金を使って買い取ったらしい。もしもの時の第二の事務所にするようだ。まあそれには賛成だ。あの家はもったいない。マユさんはお縄につき、拘置所に連れて行かれたのだが妙なことがあった。今回逮捕を担当したのは花さんで、ついなさんじゃなかったのだ。一体なにがあったのだろう。心配だ。

第五十三話：凍り付いたW／悪夢の続き

杏璃万結さん：ブリュンヒルデ・ドーパントの事件が終わり一週間。猫探しや浮気調査など通常の探偵業務を行いながら無作為に現れるドーパントの対処をする日々を送る私達継星探偵事務所だったが、やはり寂しい。窓を開けながら思わず曇天の空を見やる。

「ついなさん…今どこに…」

あの事件以来、ついなさんが一度も顔も出さないし連絡も寄越さなかったのだ。ドーパントの事件で遭遇する警察は花さんや有阿刑事だけで、花さんたちもついなさんがどこに行ったのか知らないらしい。刑務所の杏璃万結さんに心当たりを聞きに行ってみたものの、心当たりはないと言う。きりたん曰くあの事件の黒幕だった月読アイにも話を聞いたが、彼女も捜しているという。私達も手分けして水都中を探してみたが見つからない。

「ついなさん…心配です」

「せめて痕跡があれば検索できるんですけどね…」

いつもより食欲を失って白飯三杯目を黙々と寂しそうに食べるあかりの呟きにきりたんが肩を落とす。手がかりすら見つけれなくて申し訳ない。すると扉が開いてリリイさんが顔を出した。

「おう、見つけたぞ」

「リリイ。手がかりを見つけたんです？」

おのずと視線が集まると、リリイは手を外に伸ばして何かを引っ張ってきて、中に入れたそれを見て驚愕する私達。

「いや、本人だ」

「ううっ……お前たちは誰や、ここは、この街は何処なんやー！」

リリイに首根っこを掴まれたその人物は、髪を下ろして滅多に見ない涙目でじたばたしているけれど、如月追儼その人だった。え、え？なにがあつたんです？

「今頃、ついなちゃん探偵事務所に保護されてる頃ですかねえ」

東北家の屋敷の一室にて。自分に割り当てられた書斎の机に向かって新作を執筆しながらフフツツと笑うのは、水都が誇る人気小説家にしてミュージアムの幹部である女性、東北奏楽^{とうほくそら}。

「あれ、拷問してたあの子、解放したんです？」

その近くの椅子に座って小説を読んでいた同僚である東北星香が気になったのか本から視線をずらして尋ねると、東北奏楽は嬉々として筆ペンを走らせながら答える。

「ホワイトアウトの力で私が戦友の仇だという情報を漂白させて聞けることは全部聞いたんで、あとは面白くなるかなと期待を込めてメモリに関する記憶を全部漂白して送り出しておきました。ダブルとの関係も一からやり直します、どうなりますかね？」

「うわあ…鬼畜ですねえ。記憶がないってのはつまりドーパントも知らない状態でこの欲望の街にほっぴり出したってことじゃないですか」

「もしなにもできなければそれまで。でも、私は確信しています。苦難

を乗り越えて私の下に再び訪れると……それは絶対面白い！最高傑作になるでしょう！そのために彼女を招いたのですから」

そう言つて指を鳴らす東北奏楽の合図を引き金に、隣の部屋への扉が開いてその人物は顔を出す。

「……本当に悪趣味だね」

「貴方にはこのガイアメモリとメモリ施術装置、ガイアメモリ強化アダプターを授けます。受け取つて、くれますよね？」

「……わかった。でも、その代わり……！」

「約束を守りますよ、ええ。私は最高に面白い物を見るために動いているだけでそこまで外道げどうではありませんので」

「どの口が……！」

笑顔でいけしやあしやあとほごく東北奏楽に、怒りのまま殴りかかろうとするその人物。その眼前に人差し指が立てられ、幼子をたしなめす様にゆつくりと振られる。

「おや。逆らうのですか？それもいいでしょう、面白い！そのメモリを強化すれば私のメモリに勝つことも可能だと思いますよ？」

「っ……！」

その言葉を受けて、決意したのかメモリを挿入したメモリ施術装置を自身の右掌に押し付けるその人物は、引き抜いたメモリを生体コネクタに突き刺してその姿を変えた。

《フレア！》

「うおおおおおっ！」

『太陽風』の記憶により燃え盛る人型の火の玉とも言うべき姿に変貌したフレア・ドーパントは燃え盛る掌を東北奏楽に押し付けんとす

るも、東北奏樂はあっけなく砕け散ってしまい大きく空ぶってしま
う。

「え…!？」

「あはは、氷人形ですよ。まさか、私が何も対策せずに貴方にメモリを
手渡すわけがないじゃないですかー。どれぐらいの精度で動かせる
かもついでに試してたんですよー」

そう言つて真つ白な壁から染み出す様に姿を現すホワイトアウト・
ドーパントの頭部を掴まれるフレア・ドーパント。咄嗟に自身の炎を
さらに燃やして迎撃せんとするが、ホワイトアウト・ドーパントから
吹き荒ぶ冷気がそれを許さない。脳に侵食してくる「白」に絶叫が上
がる。

「うああああああっ!？」

「あらごめんなさい。直接これをやると冷えちゃうんですよ。少しだ
から我慢してくださいね?」

「相変わらず悪趣味ですねえ奏樂さんは。さっきのは肝が冷えました
よ」

「おや、心配してくれたのですか?」

「まさか。で、どうするんです?」

四肢の力を失い変身が解けて崩れ落ちたフレア・ドーパントだった
その人物を見やりながら尋ねる東北星香。するとホワイトアウト・
ドーパントは変身を解いて、凍り付いた己の腕を取り出した高そうな
ライターで炙りながら東北奏樂は嗤った。

「そりやあもちろん。怖気づいてガイアメモリ強化アダプターも使え
ないその理性含めて漂白してやるのですよ。面白いでしょ?」

「いや、趣味悪いです」

「ええー」

私達はとりあえずついなさんを客席に座らせ、なんとか状況説明をしていた。

「ここは水都という場所で、ドーパントとかいう怪物が暴れていて、うちはそれを倒す仮面ライダーでお前たちはその仲間？なんの特撮や、そんなん鬼だけで十分や。人をおちよくるのも大概にせい」

「いや本当なんですよ…」

「こいつ頑なに信じないな、鬼やらは覚えてるのに鬼Ⅱ不完全なドーパントというのも忘れてやがる」

うがーつと威嚇するついなさんを相手しながら溜め息を吐く私とリリィ。あかりなんか涙目でついなさんもそれを見てビビって一考してる。そしてきりたんはというと、検索していた。

「どういうわけかメモリやドーパント関係を忘れてしまったようですが…：…きりたん、なんかわかりました？」

「記憶を奪うことや消すことができるメモリは数多くありますが…：…この感じ、一番可能性があるのはこれですね。ホワイトアウト…：…神威岳の命を奪い、赤井快子をメモリの毒素で死なせたミュージアムの幹部、東北奏楽のメモリです」

「東北奏楽の…！」

「ああ、オレが知らない幹部か」

「ちよつと待ちいや」

私が驚き、リリイがあまりピンと来ないのか首を傾げる中、反応したのはついなさん。怒りに満ちた表情を浮かべている。

「…岳と快子が死んだ？そのメモリとドーパントとやらのせいですか？それは本当か」

「嘘は吐きませんよ。…貴方の中では生きていることにでも？」

「いいや。なんでか分からんが過程をすつ飛ばして、二人が死んでしまったことは覚えとる。なのに、今の今までおかしいとも思わんかった…今一度教えてくれ、メモリのこと、ドーパントのこと。うちはそいつを許せへん」

「…いいでしょう」

きりたんが頷き、私とリリイも顔を見合わせて一緒に知ってる限りのことを話すことにした。如月追儼、仮面ライダーアクセルのことを。

かくかくしかじか。知る限りのついなさんの過去とこれまでを語った私達。しかしついなさんはしつくりこないよう腕を組んで目を細め、首を傾げていた。

「岳を殺し快子を唆した挙句に見殺しにした怨敵、ホワイトアウト・ドーパント…駄目や、思い出せへん。怒りはあるのに、全然そいつに対して何の感情もわかへん。なんやこの感覚」

「ふむ。どうやらホワイトアウト・ドーパントへの悪感情も漂白され

てしまったようですね。0はいくら足しても増えることはないと言う事でしょう。これは厄介だ、自分から戻らないと「他人事」として認識してしまうようです」

ついなさんを観察したきりたんの説明に首を傾げる。リリイは理解したのか「なるほど」と頷いているがさっぱりだ。それに気付いたのかきりたんが溜め息を吐く。

「いいですか、つまり0×5＝ってことです」

「ああ」

その説明でさすがに分かった。さすがきりたんと称賛しているとまた溜め息を吐かれる。馬鹿な相棒ですみません。

「ではどうすれば?」

「やはりホワイトアウトを見つけてメモリブレイクするしか手はないでしょうね」

「だったらもうミュージアムに乗り込むか?」

「そうしたいですけどねえ…」

きりたんを見る。やはり、父親は姉弟たちのことを吹っ切れてないらしい。もう少し時間を置きたいところだ。

「とりあえず警察に行つて見つかったと花さんたちに……」

そう言った瞬間、結構近場から聞こえてくる爆音と悲鳴。思わず顔を見合わせる私ときりたんとリリイ。

「あかり! ついなさんとここで待機しててください!」

「あ、はい!」

「なんや? ドーパントって奴が出たならうちも……」

「大丈夫です！アクセルの変身も忘れてしまったあなたに戦わせることはできません！」

あかりとついな、きりたんを事務所に置いて飛び出して、リリイと共にそれぞれハードボイルダーとミダスホイラーを走らせて急行する。この方向は、千絵美尾大学…!?あの煙は、火災ですか…!

「きりたん！」

【救助ですね！ヒートメタルで行きましょう！《ヒート！》】

《メタル！》

《ゴールド！》《ルーラー！》

私は片手で運転しながらメタルメモリを取り出して鳴らし、あらかじめつけておいたダブルドライバーに、転送されてきたヒートメモリも押さえて装填。リリイも片手で運転しながら二本纏めて鳴らして器用に装填、ポーズをとることなく両手でバイクのスロットルを上げながら突き進む。

「【変身！】」

《ヒート！メタル！》

《ゴールドンルーラー！》

そして私は仮面ライダーW、ヒートメタルに。リリイは仮面ライダーエルドラゴ、ゴールドンルーラーに変身、そのままバイクから飛び降りて炎上するキャンパスに飛び込んだ。

「よし、これで全員ですかね…！」

「聞こえてきた声的にはそうだな」

ルーラチエインで要救助者を何人も持ち上げたエルドラゴと共に、四人の人間を担いで外に飛び出すと同時に今の今までいたキャンパ

スの一棟が崩壊。救助した人間を下ろしつつ警戒する。

「…エルドラゴ、犯人を見ましたか？」

「いいや。…なあおい、火元は見たのか？」

私の問いかけに首を振ったエルドラゴが助けた人間に問いかけると、咳き込みながら燃えるキャンパスの残骸を指差した。

「いや、だから…」

「…どうやら中にまだいたみたいですよ」

「なんだって？」

振り向く。そこには、燃え盛るキャンパスの残骸を踏みつけながら歩いてくる、燃え盛る火達磨の様なドーパントがいた。

「ウウアアアアッ!!」

私達を見つけるとドーパントは唸って両手を翳し、凄まじい熱風を放って来たので私は救助した人間を庇って両手を伸ばして受け止め、エルドラゴはルーラチエインを壁の様に展開して逃げる時間稼ぎをするも、吹き飛ばされてしまう。

「ぐうっ…あつづ?!」

「いったい何のメモリなんですか…」

『今のはおそらく太陽風…フレア・ドーパントだと思われます』

「普通にやばいやつだなそれ!? ふん縛ってやる!」

そう言ってルーラチエインを伸ばして拘束せんとするエルドラゴだが、フレア・ドーパントは炎を手の中に集束させて太刀の様な形状にすると両手で巧みに振り回してルーラチエインを弾き飛ばしてしまった。変身者の技量が高いのはウェブ・ドーパントを思い出した。

「中々の手練れみたいですね…あれ、でもこの動き、どこかで……」
「ちっ、ならこいつだ！」

《ゴールド・マキシマムドライブ！》

エルドラゴが手にしたルーラテインの先端にあるスロットに引き抜いたゴールドのメモリを装填、波紋が出現してその中にルーラチェインが飛び込み、フレア・ドーパントの四方八方に波紋が現れて雁字搦めに拘束。

「オレの名前を覚えて逝きな！仮面ライダーエルドラゴ、ってなあー！」

完全に身動きが取れなくなりギシギシと両腕を引っ張るフレア・ドーパントの前でエルドラゴは跳躍、右足に黄金の光を纏い、ルーラチェインを戻す勢いで急降下して飛び蹴りを叩き込んだ。

「ゴールデンジャツジメント！」

「ウウウアアアアアアッ！」

するとフレア・ドーパントは全身から熱風を放ってルーラチェインを融解させることで解放され、着地と同時に再び炎の太刀を出現させて刀身を伸ばし、勢いよく振り下ろすことでエルドラゴを撃墜した。

「なっ?!ぐあああつ?!」

「大丈夫ですか?!この…!」

『水や氷属性のメモリはありませんしこれしかありませんね…!』

《メタル！マキシマムドライブ！》

ならばとこちらもメタルシャフトにメタルメモリを装填、両端に炎を噴き出させてそれを推進力に突撃、振りかぶる。

『メタルブランディング!』

「ウウウアアアッ!!」

しかしフレア・ドーパントは炎の太刀の刃を地面に突き刺し、それを蹴り上げることで勢いをつけてメタルブランディングと相対、私達を吹き飛ばす。つ、強い…!

「この感じ…ウェブ・ドーパントの時のような…まさか」

太刀。ウェブ・ドーパント。そのキーワードから連想した人物にそんなはずないと首を振る。本当にそうなら、なんて酷な…

「そんな、その技は…」

「え?」

聞こえてきた呟きに思わず振り向く。そこにはエンジンブレードを慣れない手つきで持ったついなさんがいて、信じられない様な表情を浮かべていた。…そのまさかですか、クソツたれ。

「なんで、なんでなんや。お前までそんな…恵!」

神威恵。神威岳の妹にして赤井快子とついなさんの親友だ。

第五十四話：凍り付いたW／漂白される記憶

千絵美尾大学で起きた大火災事件。その火元から現れたフレア・ドーパント。太陽風の記憶を有するドーパントに私達は返り討ちにされ、どうしたものかと攻めあぐねていた時にやってきたのは、事務所に置いてきたはずの、メモリに関する記憶を失っているついなさんだった。

「なんでや、恵…！」

「飛んで火に入る夏の虫イイイイツ!!」

ついなさんを見つけた途端、さらに全身を燃やして突撃するフレア・ドーパント。その火力はブリュンヒルデ・ドーパントのそれと大差ない。ついなさんは方相氏としての心構えなのか、慣れない手つきでエンジンブレードを構えて迎え撃たんとする。だけど、変身もしないで挑むのは無謀です！

「ついなさん！逃げて！」

《ルナ！》《ルナ！メタル！》

「つたく、世話が焼ける…！」

《サンダー！》《ゴールデンサンダー！》

咄嗟にルナメタルに変身してメタルシャフトを伸ばしてフレア・ドーパントの腕に巻きつけて引っぱり、ゴールデンサンダーに変身したエルドラゴがついなさんの前に駆け寄りイナズマサカリを全力で叩き込んでフレア・ドーパントを殴り飛ばす。

「やめろ！あれは恵や、説得すれば戻ってくれるはずや…！」

『言っただしよう、メモリの毒素は例え善人だろうと蝕み悪意の塊にしてしまう』

「私達がメモリブレイクして止めるので、ついなさんは隠れてください

い！」

「そうはいくか！うちかて方相氏や、親友のピンチになにもしないとかできるわけないやろ！」

そう言つてエンジンブレードを両手で持つて、エルドラゴの頭上を跳躍し着地と同時に踏み込んで斬りつけるついなさん。体勢を立て直したフレア・ドーパントも炎を集束させ太刀を作つて迎え撃ち、ぶつかる両者。

「恵！そんなもんには負けるとは弱なつたなあ！」

「ウウアアアアッ!!」

やみくもに、なれど凄まじい動きで炎の太刀を振るうフレア・ドーパントに、重いはずのエンジンブレードを振るつて受け流していくついなさん。変身してないのにここまでできるとは、さすが方相氏か。だが見てるだけというわけにもいかない。

「ついなさん、離れてください！メモリブレイクします！」

《メタル！マキシマムドライブ！》

「オレの名前を覚えて逝きな！仮面ライダーエルドラゴ、つてなあ！」

《ゴールド！マキシマムドライブ！》

私達はメタルメモリをメタルシャフトに装填、振り回したメタルシャフトで金色の輪を大量に描いていく。エルドラゴはゴールドメモリを引き抜いてイナズマサカリの刃の後ろについてるスロットに装填、斧が黄金を纏つて巨大化し、頭上で回転させて跳躍。回転するイナズマサカリから雷が発生して降り注ぎ、炎の太刀を振るつて弾き返していくフレア・ドーパントと、たまらず退避するついなさん。今だ。

『メタルイリジョン！』

「ゴールデンシャイニング！」

私達が金色のエネルギーの輪を一齐に飛ばし、エルドラゴは斧の回転をやめると両手に持って急降下、一気に振り下ろす。

「ウアアアアアアアアアッ！」

「そんな!？」

「なに!？」

するとフレア・ドーパントが白熱し、大爆発。その炎を纏った衝撃波でエネルギーの輪は全部打ち消され、エルドラゴに至っては直撃を受けて空中から吹き飛ばされ、変身解除されてしまう。

「リリイ！」

「ウウアアアアッ！」

「させるか！」

駆け寄ろうとしたところに白熱化したままのフレア・ドーパントが炎の太刀を高速で振るって伸びる斬撃の嵐を叩き込んできたのを、私達を庇うように前に出たついなさんがエンジンブレードを高速で振るって斬り弾いて行く。

『失ったのはメモリに関する記憶だけだから、本人の戦闘能力は健在ということですか…』

「…すごい」

「なにぼけっとしてるんや！その派手女連れてとっとと下がれえや！」

「は、はいー！」

怒鳴られて思わず返事し、慌ててリリイを引き摺ってその場を離れる。結局ついなさんに任せてしまった、リリイを安全なところに置い

て戻らねば。すると、事務所の方からあかりが駆け寄ってきた。

「すみません！ついなさんの気迫に負けて止めることができず…リ
リイさんは任せてください！」

「頼みますー！きりたん！」

『エクストリームでいきますよー！』

リリイをあかりに受け渡すと、踵を返してついなさんがエンジンブ
レードでフレア・ドーパントの炎の太刀とぶつかっている場に戻り、
飛来したエクストリームメモリを手に取りドライバーに装填、展開す
る。

《エクストリーム！》

「はああああああ！」

そしてサイクロンジョーカーエクストリームへと姿を変えながら
突撃、プリズムビッカーから引き抜いたプリズムソードを振りかぶる
が、それは一瞬で形成された真っ白い壁に受け止められた。燃えてい
る現場だと言うのに凍てつく冷氣…氷塊だった。

「なっ、氷……ということはない？」

「せっかく面白くなってるんですから白けさせないでくださいよ〜」

瞬間、氷塊の中に溶け込んでいた純白のイブニングドレスを着た全
身が凍てついた女性的なフォルムで白熊を思わせる装甲を身に着け
た美しい妖精、とも言うべき姿のホワイトアウト・ドーパントが出て
きて蹴りを叩き込んできた。咄嗟にビッカーシールドで受け止める
が、一瞬で凍てついてしまい慌てて投げ捨てる。

「ホワイトアウト……、東北奏楽……！」

「お久しぶりです、仮面ライダーW。このたびは大変面白い喜劇を提

供、まことにありがとうございます」

「やはり、ついなさんの記憶が消えたのは貴方の仕業でしたか…」
「ご明察。この間のブリュンヒルデ事件の際に彼女とばったり出くわして倒させていただいたので、拷問した後メモリに関する記憶を漂白させていただきました。ええ、予想以上に面白くなって私感激してます。面白いですよね？」

「どこも面白くありません！プリズムビッカー！」

一度凍り付いたビッカーシールドと手にしているプリズムソードを消し去り、もう一度プリズムビッカーをプリズムサーバーから出してプリズムソードを引き抜いて斬りつける。しかしホワイトアウト・ドーパントはあっさり砕け散ったかと思えば、いつの間にか凍り付いていた地面から現れ平手打ちを仮面に叩き込まれ、踏ん張れない凍り付いた足場だったのもあり転倒してしまう。

「…なん、で……？」

「私のガイアメモリは漂白の記憶。「白」を生み出し、自在に操れるのが強みです。今のは氷人形です。元々はただ凍り付かせたり記憶を消去したり文字通り「漂白」するだけだったのですが、私自身で研究してここまでの力に仕上げました。面白いでしょうか？氷雪系ドーパント最強と謳われているのですよ」

そう言つて漂白させた大地から生えた氷の剣を二本手に取るホワイトアウト・ドーパント。地球の記憶の「漂白ホワイトアウトの記憶」よりも強力な能力だ。得体の知れない相手だ。二本の氷剣による連撃を、プリズムソードとビッカーシールドで受け止めて行く。

「そして私は幹部にすら恐れられる組織の掃除屋でもあります。何故だかわかりますか？」

「…一気に決める……！」

《ヒート！マキシマムドライブ！》《サイクロン！マキシマムドライブ

!》《ルナ!マキシマムドライブ!》《ジョーカー!マキシマムドライブ!》

プリズムソードを納刀したプリズムビツカーの四隅のスロットに、ヒートメモリから順にメモリを装填、プリズムビツカーの中心に七色のエネルギーが集めてからプリズムソードを引き抜くと、七色のエネルギーが剣身に移動、剣身が燃え盛ったそれを振りかぶる。

「ビツカーチャージ・ファイアブレイク!!」

「話を聞かない人たちですねえ」

「!?!」

言いながら真つ二つに切断され、溶解するホワイトアウト・ドーパントにギョツとしていると、いつの間にか右に立っていたホワイトアウト・ドーパントの氷塊を纏った横蹴りが叩き込まれて氷塊が砕け散る勢いで吹き飛び、ゴロゴロと転がって変身が解け、きりたんと共に地べたを転がる。エクストリームメモリも飛んで行ってしまった。

「がはっ…何時の間に氷人形と入れ替わりを…!?!」

「ゆかりさん…こうなったらファングジョーカーです!」

《ファング!》

「了解…!」

《ジョーカー!》

ピンチに現れたファングメモリを手にとって立ち上がったきりたんに頷き、私もジョーカーメモリを鳴らしながら立ち上がる。

「変身!」

《ファング!ジョーカー!》

《アームファング》

「さあ、お前の罪を数えろ!」

フアングジョーカーに変身してアームセイバーを生やして斬りかかり、ホワイトアウト・ドーパントは氷剣二本で受け止め鏢競り合う。

「はあー！」

きりたんが腹部を蹴りつけて蹴り飛ばし、そのまま左足を振り上げ回し蹴り。ホワイトアウト・ドーパントは蹴り飛ばされ受け身を取る。確かな手ごたえ、あれが本体か。

《シオルダーフアング》

タクティカルホーンを二回弾いてシオルダーセイバーを装備、腰のマキシマムスロットでヒートメモリを装填する。

《ヒート！マキシマムドライブ！》

シオルダーセイバーを手に取り、炎を纏い熱を刃に集中させて投擲、綺麗な弧を描いてホワイトアウト・ドーパントの両手の氷剣をバターの様に斬り裂き、私達自身は突撃して、戻ってきたシオルダーセイバーを手に取り跳躍、縦一文字に斬り裂く。

「フアングバーンザッパー！」

しかし切り裂いた瞬間、ホワイトアウト・ドーパントは爆発して氷煙が周囲を充満。周りが何も見えなくなる。嘘っ、これも偽物…!?

「そんな、どこに…!？」

「貴方達が今まで相手していたのは全て私の生み出した氷人形です。一人芝居、いや二人芝居？滑稽でしたよ」

そう言つて氷煙に溶け込んでいたのか目の前に現れて、ダブルドライバーに右手で触れるホワイトアウト・ドーパント。すると次の瞬間、左半身の力が抜けて崩れ落ち、なんとか右側で支えるダブルの身体。な、何が起きたんですか!?

『きりたん、なにが!?!』

「わかりません、急に左半身の力が抜けて…つて!?!」

驚くきりたん。視界には、白く染まつた左サイド…ジョーカーだったはずの左手が見えて。しかもフアングの右腕と違って、ラインまで全部真っ白だ。

「隙アリです」

「ぐうっ!?!」

氷を纏つてまるで鍵爪のようになつた右手で引つ掻いてくるホワイトアウト・ドーパントの攻撃に反応できず、吹き飛ばされて変身が解けごろごろ転がるきりたんの体。目を覚ました私は慌ててジョーカーメモリを取り出すが、端子に至るまで漂白されジョーカーのマークも消え、ボタンを押しても反応しないただの小箱になつてしまつていた。

「フアング!?!」

きりたんの悲痛な叫びが聞こえて振り向くと、そこにはホワイトアウト・ドーパントの手に握られ黒い部分まで白く染められぐったりと動かなくなつたフアングメモリがあつて。さらにホワイトアウト・ドーパントは地面に転がっていたヒートメモリを拾い上げると、瞬く間に白く染まつて行く。

「驚きましたか? 驚きましたよね? これがさっきの答えです。ホワイト

アウトは、全てのメモリの記憶を漂白する。私はその気になれば至子さまのメモリだろうが無力化できます」

「そんな、反則じゃないですか……！」

ジョーカー、フアング、ヒートのメモリが漂白されてしまった。残るメモリがあるとはいえ、ホワイトアウト・ドーパントを相手にするにはあまりに不利だ。エクストリームメモリが逃げる訳だ、触れられたら終わりだ。

「東北記理子の身柄は必要ですが、結月紫は別に始末してもいいと言われてます。個人的には生かしておいた方が面白いんですけど、始末させていただきますね？」

「ぐっ……こうなれば無理にでも……！」

「駄目です、ゆかりさん！……ここは撤退を……！」

「できるならしていますよ！きりたん……！」

《トリガー……》

やるしかない、そう構えた時だった。

《フレア！アップグレード……プロミネンス！》

「おや……？」

そんなガイアウイスパーが聞こえてホワイトアウト・ドーパントが振り返ると同時に、出現した紅焰が大きく広がり大きく怯む。

《ゴールデンルーラー……》

「選択肢はない、逃げるぞ馬鹿……！」

そこにミダスホイラーに乗ったエルドラゴ・ゴールデンルーラーがルーラチェインでついなさんを縛り上げて現れて、私ときりたんをルーラチェインで捕縛するとそのまま走り去っていった。

「ちえつ、逃がしましたか。なんてタイミングでアップグレードしてるんですか、もうー」

変身を解いて膨れっ面を浮かべる東北奏楽の目の前には、日輪を背負った金剛力士像の様なドーパントが立ち尽くしていた。

第五十五話：凍り付いたW／加速する本能

「……」

なんとか事務所まで帰り着いた私たち。全員ズタボロ、リリイに至っては頭から血を流しており、みんな黒焦げで、最悪の状況に無言で各々の治療をする。

「……きりたん。最後のあれ、どう思います?」

「敵は何かしらの手段でメモリをアップグレードする手段を得たようですね。ただでさえ発火能力の高いフレア・ドーパントがプロミネンス・ドーパントとなつて火力もさらに上がった様です。短時間で水都を燃やせる火力があると思います。ですがその分、大火力を出した後はエネルギー切れで動けなくなるはずです。最後のアレがそうかと」
「ということはフレア改めプロミネンス・ドーパントは当分動けないわけですね、問題はホワイトアウトですか…今はダブルとエルドラゴしかないと言うのに」

「…あいつがうちの記憶を奪つて岳や快子を殺した東北奏楽やな。悔しいが、うちじゃ勝てる気がせえへんかった」

火傷に薬をつけて包帯を巻きながら悔しげにぶるぶると震えるついなさん。

「あいつは…恵はホワイトアウトのドーパントにダブルが押されているのを見た途端、一度変身を解いて取り出した変な機械にガイアメモリを装填してああなったんや。まるで、希望が潰えたかのような絶望した表情やった」

「…今回の事件はホワイトアウトが発端かもしれませんがね」

ついなさんの説明に少し考え込んで、思い浮かんだことを言ってみると全員の視線がこちらを向く。

「恐らくですが、ついなさんが記憶を奪われたのと同時に、ホワイトアウトが恵さんに接触したんだと思います。そしてメモリを渡してドーパント化させ、命を奪うなどの脅しで暴れさせたのが今回の事件。そして恐らく以前、ウエブ・ドーパントを相手に戦った私達がホワイトアウトに勝つことに一縷の望みをかけた…だけどそれも、断たれてしまった」

「あの反則の能力だな。特にオレの場合、ゴールドのメモリが漂白されたら変身もできねえ。迂闊に相手できないぞ」
「そう言えばそうでしたね」

リリーのベルト：ダブルドライバーNEOはゴールドメモリと、パイレーツもしくはサンダーまたはルーラーメモリを同時に使用して変身できる「一人版ダブル」だ。メモリを漂白して使えなくするホワイトアウトとは相性最悪だろう。やはりダブルでどうにかするしかないか。

「ダブルの使えるメモリは…メタル、トリガー、サイクロン、ルナですか：奴の単純な凍結能力に対抗する手段であるヒートメモリが無力化されたのが痛いですね」

「フランクメモリもこうですし…特にジョーカーメモリも漂白されてしまつてエクストリームになれませんか」

そう言つて漂白されて沈黙しているフランクメモリを取り出すきりたん。何時もちよこちよこ動いていたフランクメモリがこうも痛々しい姿になるとは…。

「どうにかして直せないんですか？きりたん、ガイアメモリを作れましたし新調するとか…」

「残念ながらあそこの設備が無いと無理です。それに直そうにも、これはガイアメモリの能力による漂白です。あのメモリをブレイクす

るしか直す手段はありません」

「あのー……エクストリームになれないという話ですが、サイクロンジョーカー以外にもなれないんですか？ほら、ルナトリガーエクストリームとか強そうじゃないですか」

そんなあかりの言葉に、きりたんと顔を見合わせ苦笑する。それは私も以前考えましたね。

「結論から言うと、私と相性のいいサイクロンとゆかりさんと相性のいいジョーカーメモリの組み合わせでないとエクストリームを使用できないんですよ。ファングジョーカーも同様の理由でジョーカーしか使えません」

「なるほどわからん」

「オレとゴールドメモリと同じ理屈だな。…そうだ、一つだけホワイトアウトに対抗する手段があるぞ」

するとなにか思いついた様子のリリイ。自分の私物を置いてあるスペースに歩いて行きゴソゴソ漁ると、なにやら資料の束の様なものを持って来た。

「これは月読アイから渡されたダブルドライバーNEOの説明書だ。エクストリームメモリも参考にしたらしくてな、ドライバーを閉閉することである能力を使用することができる」

「ほれ」と言っ手渡してくるリリイから受け取ったその内容をきりたん、あかり、ついなさんと共に覗きこむ。そこにはこうあった。

「ドライバーを一度開閉することで「ゴールドラッシュ」を発動可能：？10秒間だけ金色に煌めく無敵状態となってパワーとスピードを増した怒涛の攻撃を繰り出すことができる。こんなのがあったんですか」

「たまに思い出した時に使ってたがあるんだよ」

「…この能力ならば10秒間だけあの漂白能力も無効化できますね」

きりたんが資料を読んでそんな結論を出す。これでホワイトアウト・ドーパントへの対抗手段は得た訳だ。

「ならば私ときりたんがプロミネンス・ドーパントは引き受けます。リリイ、頼みました」

「了解だ」

「ホワイトアウトとプロミネンスの居場所を探るとして…：…とりあえず、ついなさん。記憶が戻らない限りはもう戦わないでください」

「なんでや！うちが駆けつけなかったらどうなってたことか…」

「もうその域を越えたんです！」

私の言葉に反論するので大声で言い返すと怯むついなさん。あかりまでびくつとしてしまった。申し訳ない。

「フレア・ドーパントはどうかになったかもしれませんが、パワーアツプしてるんです。それこそ人間を一瞬で蒸発させることも可能でしょう。いくら普通の人間と違う方相氏でも、無事では済まないかもしれないんです！」

「そんなの予想でしかないやろ！恵を救えるのはうちだけや！」

「私達が必ず恵さんを助けます！記憶を失った貴方にとってはまだ信用できないかもしれない。だけど、私達を信じてください！」

「お前の記憶もホワイトアウトを倒して必ず取り戻す。待っていてくれ」

私に続いてリリイもそう言うと、納得したのか頷くついなさん。

「…：…わーったわ。大人しゆう待つとくわ」

「きりたんとかかりを頼みます。きりたんはホワイトアウトとプロミ

ネンスの弱点を探ってください。行きますよ、リリイ！」
「おうよ」

リリイと共に外に出て、それぞれの愛車に向かいエンジンを回しながら向かい合う。

「…あれは納得してない顔でしたね」

「アイツは知らないだろうがそこそこの付き合いだからな。オレでもわかる」

「…ついなさんが来ないうちに終わらせましょう」

「同感だ」

その後、ネルさんやJKコンビの情報網を用いてプロミネンス・ドーパントの行く先を探ると、燃える人影が空を飛んで水都タワーの屋上に向かっていったという情報を聞いて乗り込む私とリリイ。風車の動力部まで来ると、黒焦げの石炭の様な姿の燃え尽きた状態と思われるプロミネンス・ドーパントを傍に侍らせた東北奏樂がニコニコしながら待っていた。

「ようやく来ましたね。待ってましたよ、仮面ライダー」

「東北奏樂…！…罨でしたか」

「妙に目立っているなと思っただらわざとか。面倒な真似をする」

「ついなさんはいないのでか？面白くないですねえ」

《ホワイトアウト！》

つまらなそうにしながらガイアウイスパーを鳴らしたメモリをガイアドライバーに突き刺し、ホワイトアウト・ドーパントに変貌する

東北奏樂。同時に冷気が吹き荒れると、それに反応する様に燃え上がるプロミネンス・ドーパント。私とリリイもドライバーを腰に取りつけメモリを鳴らす。

「《サイクロン！》」

《トリガー！》

《ゴールド！》《パイレーツ！》

「〔変身〕」

《サイクロン！トリガー！》

《ゴールドンパイレーツ！》

変身すると同時にカットラスを振り回し、ビシッ！ビシッ！とポーズを決めて行くエルドラゴと共に指を拳銃の様にして付きつける。

「陽光が、なくとも輝く黄金郷——誰かがオレを呼びやがる。怪物を屠り、悪を討てと言いやがる。上等だ、やってやる！悪鬼を制し羅刹を潰し！——輝くこの身はゴールドン！仮面ライダー、エルドラゴ。——只今ここに見参だ」

『さあ、お前の罪を数えろ！』

「いいですね、面白いですね！決め台詞！それ小説のネタにいただきます！」

「笑っていられるのも今のうちだ！」

やんややんやと拍手喝采するホワイトアウト・ドーパントに、カットラスを振り回しながら突撃するエルドラゴに続いて私たちもトリガーマグナムから疾風を纏った弾丸を撃ってプロミネンス・ドーパントを撃ちながら突撃、シオルダータックルで壁をぶち抜き、水都タワー前広場まで落下。人々が逃げて行く。

「貴方を止めます。ついなさんと約束したので……！」

「アアアアアアアアッ！」

右手に特大の火球を形成し、ぶん投げると徐々に巨大化して広場を飲み込んでいくプロミネンス・ドーパントの攻撃を側転で回避。トリガーマグナムで狙い撃つも、炎に煽られて弾かれてしまう。

『胴体は炎が強くて攻撃が届きません！』

「ならば、炎の少ない四肢を狙います！」

両手を突き出し、灼熱の火炎を放出するプロミネンス・ドーパントの炎を疾風を纏った弾丸で軌道を逸らしながら連射。次々と手足を撃ち抜いて行く。やはり動きは単調だ。火力こそ石畳が融解するゾツとする威力だが、これならなんとかなる。

『急所のメモリだけを撃ち抜けばなんとか無傷で解放できるかもしれない』

「バットショットの出番ですね」

きりたんの言葉に頷き、隙を見て取り出したバットショットをスコープに変形させてトリガーマグナムに合体。トリガーメモリを引き抜いてトリガーマグナムに装填して現れた照準をプロミネンス・ドーパントに合わせる。

《トリガー！マキシマムドライブ！》

『トリガー・バットシューティング！』

「アアアアアアアアッ！」

炎の太刀を生み出して迎撃しようとするプロミネンス・ドーパントだったが炎の太刀と真っ向からぶつかり刀身を弾き飛ばしてプロミネンス・ドーパントの心臓を撃ち抜くと、纏っていた灼熱の炎も吹き飛ばされ、脱皮するかのようには恵さんが元の姿に戻って崩れ落ちる。

よかった、なんかあった……。

「よし、リリイの援護に……」

『ゆかりさん！』

きりたんの絶叫に、右を振り返る。そこには、水都タワーを中心に吹き荒れ銀世界に変えて行くブリザードの壁があつて。瞬く間に、あつけなく飲み込まれてしまった。しまった、過去に隼さんから聞いた話で想像できたはずなのに……

「くそっ、くそっ……くそっ！」

数分前、突如襲ってきた膨大な冷氣から自身を庇って氷像になつてしまったあかりの下から抜け出して、エンジンブレードで凍り付いた扉を斬りつける。こうなつてしまった理由は明白だ。ホワイトアウトの仕業だろう。ゆかりたちもやられてしまったのだろう。

「うちは、この無力感を知っている……なのになんでや、なんで思い出せないんや！」

なんとか外に出ようと方相氏のパワーで斬りつけるもビクともしない。このままじゃ体力も尽きて終わってしまう。なんとか……なんとかする方法は……！

「そうだ、アクセルドライバー……！変身すればこんな氷……！」

《アクセル！》

アクセルドライバーを取り出して腰につけ、アクセルメモリのボタンを押して装填。すると自然に、右のグリップを回していた。ブウンブウン！とエンジン音が轟く。

「…うちは、この感覚を知っている」

《アクセル！》

そして仮面ライダーに姿を変えたうちは、直感と共にグリップを回し続けた。

《アクセル！アクセル！アクセル！》

「うおおおおおおっ！」

そして扉を蹴破り、銀世界となった外に出る。思い出した、うちは……仮面ライダーアクセルや！

「さあ、振り切るで……！」

第五十六話：凍り付いたW／純白の悪魔

数刻前。東北家の屋敷の東北至子の書斎にて、訪れた東北星香はあ
る質問をしていた。

「奏楽さんのあの異常な強さはなんなのか、ですか？」

「はい。差し出がましいことを聞いて申し訳ありません、至子さま。
ですがいくらアクセルの記憶を失わせたとはいえダブルを完封した
あの強さは異常でした。彼女は我々組織の人間ではなく元々ただの
小説家だったはずですが……」

「記録ではそうなってますわね」

そう言いながら考古学の本を本棚に戻し、不敵に笑んだ至子はある
一枚の写真を取り出した。東北奏楽と思われる幼い眼鏡の少女が
写っている。

「これは幼少期の東北奏楽……佐倉奏楽さくら そうらですわ。彼女は私の父親……東
北外道そとみちの時代に試作型ガイアメモリの被験体にされていたハイド
プなんですわ」

「外道様の頃の……!？」

名前だけしか知らないミュージアム創設の元凶とも言うべき人物
の名が出てきたことに驚きを隠せない星香。そんな彼女に引き出し
から取り出されたりリストが手渡される。それには政界の要人や神威
岳の名もあった。

「これは……？」

「奏楽さんがこれまで始末してきた組織の邪魔者のリストですわ。彼
女が新参者の幹部だなんてとんでもない。幹部にしたのがつい最近
と言うだけで、小説家をしていたそのずっと前、幼少期から組織の殺
し屋ですわ」

「道理で小説家の割にあんなに強いんですね」

「それだけじゃないですわ。彼女のハイドープとしての能力は「白の視点」。視界に入った全てを「白」と認識、情報で黒く埋めて行くことでありとあらゆるものを推察して最良の判断を取れる力。この能力の影響で全ての物事がつまらなく感じて「面白い」ことを模索している様ですわ」

「あの口癖はそういう…」

「なにも面白く感じることはないのに「面白い」を問い続ける不憫な子ですわ」

まさか自分の事も言い当ててくるとは思いませんでした、と内心毒づく至子もとい東北外道。

「ですがこの写真、本を持っていて怯えている大人しい様子から今の東北奏楽は想像つかないですね」

「ああ。今の彼女はその奏楽さんとは違いますからね。殺人に耐えきれなかったのか彼女は本来の人格を閉ざして快楽的に面白さを追い求める殺人鬼になったわけですが、組織の最大戦力の一つなのですら何も悪いことはありませんわね。彼女なら仮面ライダーを打ち倒して、きりたんと実験体を回収してくれるはずですよ」

「……」

人を人とも思わない冷酷な物言いに思わずゾクツと背筋が震える星香。自分はメモリ売買の成績から養子に迎え入れられたわけだが、もう一人の養子の数奇な運命に思わず同情するのだった。

ダブルとプロミネンス・ドーパントが出て行ったあと、対峙するホワイトアウト・ドーパントと仮面ライダーエルドラゴ。黄金の剣身と紅い持ち手のカットラス…パイレーツカリバーを振るって攻撃するも、瞬時に形成された氷の太刀で受け流され、返しの斬撃を受けてしまう。

「仮面ライダーに鞍替えしたとかいうエル・ドラードのボスですね。私達幹部並みの強さだとか。お手並み拝見」
「上から目線、ムカつくな！オラア！」

床を蹴り右手で持ったパイレーツカリバーを振り回して連撃を叩き込むエルドラゴ。ホワイトアウト・ドーパントは罅が入った氷の太刀を投げ捨て、代わりに両手に冷気を纏って手甲から伸びた三本ずつの爪を装備。白クマを思わせる豪快な動きでエルドラゴの攻撃を弾き返し、脚を勢いよく床に叩き付けそこから凍らせて剣山を床に形成。エルドラゴは突き刺されない様に跳躍し壁を蹴って範囲外に逃れる。

「派手にやるな！こっちもド派手に行こうか！」
《パイレーツ！マキシマムドライブ！》

ダブルドライバーNEOから引き抜いたパイレーツメモリーをパイレーツカリバーの柄のスロットに装填、グルングルンと振り回し溢れだした黄金の光を刀身に集束させて振るうエルドラゴ。

「ゴールデンストラッシュュー！」

黄金の光の斬撃は剣山を砕きながら一直線に突き進んでホワイトアウト・ドーパントを真っ二つに切り裂くも、氷像だったそれは砕け散り、凍り付いた壁からホワイトアウト・ドーパントが現れ何も装備

してないものの触れただけでメモリを無力化する右手を伸ばす。

「無駄だ！」

《ゴールドラッシュユー！》

「むっ」

それを気配で察したエルドラゴはダブルドライバーNEOをいったん閉じて、もう一度展開。それをスイッチとして黄金の光を纏ってホワイトアウト・ドーパントの魔の手を弾き飛ばし、弾かれた手を見て不服そうに首をすくめるホワイトアウト・ドーパント。

「私の能力を受け付けないとは…面白くないですね」

「オラオラオラオラ、オラア！」

そのまま時間切れにならないうちにとパイレーツカリバーを投げ捨て、拳と脚で猛連撃を叩き込むエルドラゴだったが、フウツと息を吹きかける様にして白い霧を発生させたかと思えば氷人形とすり替わっており、霧の中で次々と出現する人影を片っ端から殴り壊していく。そうこうしていくうちに10秒が経過、纏っていた黄金の光が霧散してしまふ。

「くそっ、全部フェイクか…！」

「やはりそんな強力な力、そんなに長い間持たないようですね？ですが密室では私も無敵なのです。残念でしたね」

そう言つて凍り付いた床から現れて前蹴りを叩き込んでエルドラゴを蹴り飛ばすホワイトアウト・ドーパント。エルドラゴはなんとか受け身を取るが、その瞬間には目の前までホワイトアウト・ドーパントが凍り付いた床を移動して瞬間移動しており、さらに拳の一撃をもらつてリリイは壁に叩きつけられ崩れ落ちる。

「があっ…」

「…おや？熱気が消えた…：恵さん、やられてしまったのですか。面白くないですねえ」

リリイから外れたゴールドのメモリとパイレーツのメモリをつまみ上げて漂白していると、外でプロミネンス・ドーパントがやられたことを察知してふむ、と顎に手をやるとなにかを思いついたのかポントと手を叩くホワイトアウト・ドーパント。既にリリイのことは眼中になかった。

「いいことを思いつきました。至子さまに怒られてしまうかもですが、水都を漂白してしましましょう！ダブルの絶望する顔はさぞかし面白いに違いありません！」

「なんだって…」

なんとか立ち上がるリリイを余所に、両手の間で冷気の竜巻を形成、それを大きく広げて行くホワイトアウト・ドーパント。そしてそれは一気に広がり、水都タワーを中心に大きく膨れ上がり、水都を飲み込んで氷漬けにしてしまったのだった。

「…おや、失敗しました。ダブルも凍り付いてしまってるじゃないですか。これでは絶望した顔も見れないじゃないですかあ」

凍り付いた水都タワーを降りて、漂白した水都で他の住人の氷像に紛れて氷像となったダブルをこつんこつんと小突いて残念そうに口を尖らせる東北奏楽。そこに、コツコツと歩いて九つの尻尾を持つ狐の怪人が現れる。ナインテイルフォックス・ドーパントである。

「なにをしているんですか、奏楽さん」

「あ、至子さま。なについて、水都を漂白したんですよ。面白いでしょう？」

「何も面白くありません。無作為に全てを凍らせて、きりたんどころか純子たちも凍り付いてしまったじゃないですか。私も気付かなければどうなっていたことか…戻しなさい」

「嫌です。至子さまの命令でも、面白い事優先です」

真つ向から反抗する奏楽に、ナインテイルフォックス・ドーパントは苛立ちを表現する様に九つの尻尾を逆立てる。

「…便利だと思って好き勝手させた挙句こうなるとは。もう貴方はいいません。メモリブレイクしてでも純子ときりたんは戻してもらいます」

「できると思ってるんですかあ？ガイアメモリ相手なら私は無敵ですよ。」

《ホワイトアウト!》

尻尾を機関銃に変形させて構えるナインテイルフォックス・ドーパントを前に怖気づかずにメモリを鳴らした奏楽はホワイトアウト。

ドーパントに変貌。挑発する様に肩を竦めた、そんな時だった。エンジン音が徐々に近づいて来て、滑走するかのように走ってきた仮面ライダーアクセル・バイクフォームが二体のドーパント目掛けて体当たりしてきたのは。

「危ないですわね」

それを巨大な腕に変形させた九つの尻尾で受け止め、投げ飛ばすナインテイルフォックス・ドーパント。アクセルは空中で人型に戻り着地、エンジンブレードを構える。

「ホワイトアウトに……見た目からしてナインテイルフォックスか。相手にとって不足無しや、いくで！」

「え、うそっ、記憶を漂白したはずなんですが、あれ？」

「…ガイアメモリには記憶が蓄積される。そしてあのベルトは試作型のメモリの力を増幅させるガイアドライバーを応用したみたいですよわね。メモリに蓄積されていた記憶を増幅して復活したところでしょうか。メモリも漂白しないからこうなるのです、詰めが甘いですわね」

そう糾弾するナインテイルフォックス・ドーパントだったが、ホワイトアウト・ドーパントはなにかを堪える様にプルプルと震えていた。それは、感動だった。

「…です。面白いです、あなた！私の「白の視点」を越えてくるなんて！…これが面白さ！ああ、素晴らしい！」

「何も面白くあらへんわ。さあ、振り切るで！」

第五十七話：凍り付いたW／逆転ブースター

「…です。面白いです、あなた！私の「白の視点」を越えてくるなんて！これが面白さ！ああ、素晴らしい！」

「何も面白くあらへんわ。さあ、振り切るで！」

感動から両腕で自身を抱えて打ち震えるホワイトアウト・ドーパントに、容赦なくエンジンブレードで斬りかかるアクセル。しかし凍り付いた足場に溶け込むようにしてホワイトアウト・ドーパントは姿を消して、アクセルは大きく空ぶってスリップしかけるも脚部のタイヤを回転させてブレーキ、踏みとどまる。

「っ…白に溶け込む能力か！狐もどつか行きおったし…どこや!?卑怯やぞ、出て来い！」

「隙だらけの相手を狙う人に言われたくないです」

「お前の騙し討ちにもいい加減慣れてきたところや！」

アクセルの背後から水面に浮上する様に出現、手にした氷の三つ又槍を振るって攻撃するホワイトアウトの攻撃を、アクセルは後ろ手に構えたエンジンブレードで防御。脚部のタイヤを回転させて反転、振り返りざまに斬撃を叩き込むも、砕け散ってしまう。

「この間の遊びとは違う、全力でお相手しましょう…！」

すると次々と凍り付いた地面から生えてくるホワイトアウト・ドーパント。その数、総勢50体。各々がレイピア、ヌンチャク、狼牙棒、サーベル、斧、バルディツシュ、フレイル、日本刀、槍、鎖鎌、戟、鎖分銅、鉈、マチェット、ハルバード、大剣、トンファア、鉤爪、ジャベリン、十手、苦無、太刀、棍棒、ハンマー、薙刀、弓矢、刺股、突撃槍、籠手、短剣、双剣、大鎌、金棒、モーニングスター、鉄扇、乾坤圈、チャクラム、手甲剣、メリケンサック、金剛杵と小説家であり様々な

物語を書いてきた彼女ならではの多種多様な武器が握られている。シンプルな数の暴力が、単騎のアクセルに襲いかかる。

「偽物の軍団か！なら……！」

《トライアル！》

アクセルはトライアルメモリを取り出しドライバ―に装填、アクセルトライアルに変身してスイッチを押したトライアルメモリを放り投げ、加速。次々とホワイトアウト・ドーパントを斬り捨てて行くも、何体かが斬り捨てられるとすぐに対応してきて10秒経っても5体も減らすことができなかった。

《トライアル！マキシマムドライブ！》

「くそっ…10秒じゃ無理か、ぐあっ!？」

トライアルでは分が悪いと見たのか通常のアクセルに戻ったアクセルに、次々と雪崩込むように襲いかかるホワイトアウト・ドーパントたち。斬り刻まれ、突かれ、殴打され、頑丈な装甲がズタボロとなつて行き、大柄に形成されたホワイトアウト・ドーパントのメリケンサックによる拳を受けて殴り飛ばされるアクセル。

「いくら偽物を倒そうが意味ありませんよ。ホワイトアウトとは漂白。漂白された世界で私は無敵です。初めて戦った時にも同じように負けたのに忘れたのですか？」

「無茶でもやるんや。兄と親友を失って傷心気味の恵まで巻き込んでおつてからに。どうせうちを人質に脅迫してメモリを使わせたんやろ。これ以上失つてたまるか。それにうちの今の仲間にも手を出したんや、倒さなきや嘘やろ」

エンジンブレードを杖代わりに息絶え絶えながらも立ち上がるアクセル。その視線の先には氷像にされたダブルと恵がいた。負けら

れない戦いがそこにある。すると氷人形たちが次々と砕け散って行き、一人になるホワイトアウト・ドーパント。手にした狼牙棒ろうげぼうを構えながらほくそ笑む。

「いいです、面白いですよ！そうです、私はそうなることを期待して貴方の記憶を奪った！記憶を取り戻して復活、決して敵わない強敵に立ち向かう……なんてドラマ！なんて面白さ！素晴らしい！ならば直接戦って力の差を見せて、どう反応するかを見るのも面白いッ！」

「舐めプしたことを後悔しても知らんで！」

そして狼牙棒ろうげぼうを握っていない右手から冷気を放出しながら突進するホワイトアウト・ドーパントに、アクセルは右のハンドル：パワースロットルを握って何度も捻り、灼熱の業火を纏って相殺しながら突進、狼牙棒ろうげぼうとエンジンブレードを激突させて鏖あつり合う。

「うおおおおおっ！」

《エンジン！マキシマムドライブ！》

「ダイナミック、エースッ!!」

一回蹴り飛ばして距離を取るとエンジンメモリをエンジンブレードに装填、A状に空を斬り裂いて斬撃を叩き込み、ホワイトアウト・ドーパントに直撃。爆散する。

「やったか？」

「残念。やっぱりそれも偽物です」

「があっ!?!」

《スチーム!》

倒したと思った目の前にいきなりニョキツと出てきたホワイトアウト・ドーパントのモーニングスターで殴られ、咄嗟にエンジンブレードの引き金を引いてスチームを起動して反撃するも、エンジンブ

レードを手放し装甲が火花を起こして吹き飛んだアクセルの変身が解かれ、凍り付いた地面を転がって行くついな。瞬時に「白」に溶け込み、偽物を生成できるホワイトアウト・ドーパントの能力に打つ手が無かった。

「く、そ……何か、何かないか…!？」

「アハハハッ！生身で対抗するとか嘘みたいですね！面白いですねえ！」

空中に形成された氷の礫のミサイルを、血塗れになりながらも素早い身のこなしでなんとか回避していくついな。凍った大地が砕け散り、えぐれていく。とんでもない威力に寒気がした。もしこんなのが当たれば凍っている人々はひとたまりもない。自然と、離れて逃げて行くことしかできなかった。

「くっ…ガンナーA！」

「こんな隠し玉まであるんですねえ！」

ビートルフォンを操作し、頼れる自立戦車を呼び出すついな。しかし氷でごつい剛腕を両腕に装備したホワイトアウト・ドーパントに突撃を受け止められ、投げ飛ばされるガンナーA。

《アクセル！》

「変…身！」

《アクセル！》《エンジン！》

その間にアクセルに再変身してエンジンメモリをアクセルドライバに装填してバイクフォームに変身、体当たりでホワイトアウト・ドーパントを跳ね飛ばしてガンナーAと合体、アクセルガンナーとなって砲弾を叩き込んでいくも、手を翳したホワイトアウト・ドーパントの目前で撃ち込んだ砲弾全てが凍り付いて砕け散って行く。

「化け物やな……！」

「お褒めに預かり光栄です」

手を地面に付けると、凍り付いた地面から巨大な回転する槍が飛び出してガンナーAを貫き、半壊。投げ出されたバイクフォームにアクセルは人型に戻って転がる。いつの間にか、水都タワー前に戻って来ていた。ホワイトアウト・ドーパントはゆっくりと歩み寄ってくる。

「ついなー！」

「恵!？」

そこに、エンジンブレードを抱えながら走ってきたのは、凍り付いていたはずの神威恵。スチームを起動したまま手放されたエンジンブレードが氷を溶かしたらしい彼女は、エンジンブレードをアクセルに手渡した。

「これ、必要でしょ。ごめん、私……」

「…気にすんな、うちのためやろ。そんなん怒る気にもならへんわ。あとで逮捕させてもらうけどな」

「うん、うん……そうだ、これ！ガイアメモリの強化アダプターなんだって。使えないかな……？」

そう言っただけで恵が取り出したのは、フレア・ドーパントをプロミネンス・ドーパントにしたガイアメモリ強化アダプター。奇跡的に破壊されずに残っていたらしい。

「こいつは……そうか、これなら……！恵は下がるときい！」

「う、うん……！」

それを受け取ったアクセルは、直感のままにアクセルメモリをアク

セルドライバーから引き抜いてガイアメモリ強化アダプターに取りつけ再度アクセルドライバに装填する。

「変……身！」

《アクセル！アップグレード！》《ブースター！！》

すると脱皮するかの様に赤い装甲が剥がれ落ち、アクセルトライアルにも似た軽量のアーマーを身に着けた、全身メタリックイエローで、マスクのシールドは黒鉄色のシャッターで覆われ、胸部アーマーも巨大なジェットエンジンのような装甲に変化。バイクフォームへ変身するためのタイヤが失われた代わりに、飛行用のブースターが全身に設けられ、空に舞い上がるアクセル。その名も仮面ライダーアクセルブースター。強化アダプターによりアクセルメモリの能力が三倍まで強化された形態である。

「まさか、強化アダプターを……!?ならば！」

その危険度を感じたのか、再び50体もの分身を形成するホワイトアウト・ドーパント。弓矢を持った個体が引き絞って狙うも、アクセルブースターは宙返りで回避。全身のブースターから炎を噴射して猛加速し、ホワイトアウト・ドーパント軍団に突撃する。

「じゃあかしいわああああああつ！」

斬る。斬る。斬る。すれ違いざまにひたすら斬撃を叩き込み、アクセルトリアル時よりも上がったパワーで一撃で粉碎するのを繰り返し、上空に舞い上がるアクセルブースター。10秒の制限もない、圧倒的なスピードとパワーに、ホワイトアウト・ドーパント軍団は全滅。なんとか氷壁を出して直撃を免れていた本体が信じられない物を見るかの様に上空のアクセルブースターを見上げる。

「そんな…!?そんな傷で加速し続けたら、死にますよ!?死んだら何も面白くないんですよ!」

「うちは不死身や!親父や恵、ゆかりたちを置いて死ぬるわけがないやろツ!!」

「そんな、何の根拠もない根性論…!面白く、ないです…!」

冷気を溜めた両手を勢いよく振り下ろし、空中に多数の氷の武器を形成し、それを射出していくホワイトアウト・ドーパント。アクセルブースターはそれを次々と斬り落としながら、隙を見てエンジンブレードにエンジンメモリを装填。さらに加速する。

《エンジン!マキシマムドライブ!》

「逃げ…!」

「逃がすかあ!」

咄嗟に凍り付いた地面に飛び込んで逃げようとしたホワイトアウト・ドーパントを、形成していた偽物ごと叩き斬って上空に打ち上げるアクセル。打ち上げられた青空に、ホワイトアウト・ドーパントが溶け込める「白」は存在しなかった。

「こんな、こんなことが…!」

「これで終わりや!」

《ブースター!マキシマムドライブ!》

さらにアクセルブースターは地面に着地してアクセルドライバーのグリップを捻ってマキシマムドライブを発動。全身のブースターから尋常じゃない炎を吹き上げながら勢いよく上昇し、急旋回して上空から急降下したアクセルブースターは右足をホワイトアウト・ドーパントの胴体に突き立てた。

「ブーストグランツァー!」

「ぐ、あ、ぎつ……ああ、なんて、おもしろ……うああああああつ!?!」

そして地面に叩きつけられたホワイトアウト・ドーパントは爆散。凍り付いた水都は砕け散る様に元に戻り、砕け散ったガイアメモリと倒れた東北奏楽を見下ろしたアクセルブースターは変身を解除、倒れそうになりながらもしつかりと二本足で立つ。

「…絶望がお前のゴールや」

第五十八話：凍り付いたW／懺悔の青空

《サイクロン！ジョーカー！》

「ついなさん！記憶が戻ったんですか!？」

『それにこれは…東北奏楽!?倒したんですか!?!』

意識が覚醒したらジョーカーメモリが復活していて、サイクロンジョーカーになるとついなさんが血塗れで立っていたので、駆け寄ってみると傍らには碎け散ったメモリと倒れた東北奏楽がいて。きりたんの問いかけに、ついなさんは笑ってVサインを向ける。

「おう。記憶は戻ったし完勝しといたで…ぎゃあ!？」

「ついなー!」

背後から神威恵が抱き着いて来て、痛みからか悲鳴を上げるついなさんに思わず笑う。無事とはいかなかったけど、記憶が戻ってよかった。

「ぐ、う……、こは……」

「起きたか。逮捕させてもらったで」

すると手錠で両手を繋がれた東北奏楽が目を覚まして上半身を起こし、咄嗟に身構える。混乱しているらしき東北奏楽からは、あの邪悪さは感じなかった。

「あれ、私……そう、だ……私、殺人を……今までなんて……」

様子がおかしい。青ざめてプルプルと震え始めた。これは本当にあの東北奏楽か？終いには泣きそうな顔で狼狽える東北奏楽に、ついなさんも困惑している。

「お前、一体どうしたんや?」

「如月追儼…私、わたし…今まで、悪いなんて一度も思わなかったのに…神威岳を殺して、ごめんなさい…今までいっぱい人を殺して…ごめんなさい…」

「これは…まるで別人ですね」

『恐らくメモリが破壊されたことで隠れていたまともな人格が元に戻ったのでしょう。こちらが本来の東北奏楽だと思われれます』

「おま、お前!ふざけんのも大概にせえよ!」

激昂して掴みかかるついなさんに、東北奏楽はされるがままだ。終いには殴ろうとしたので、慌てて止める。

「待ってついなさん!無抵抗の相手を攻撃するのは駄目だと前に言っただけですよ!」

「散々人を殺して、岳を殺して…!快子を殺して…!うちの記憶を奪って、恵まで巻き込んで!終いにや水都中の人間を殺すところだったんやぞ!ごめんなさいですむわけないやろ!」

「謝ってもどうしようもないとはわかってる、だけど…私には、謝る事しか…」

「返せ!岳を、快子を返さんかいド阿呆…!」

「ついな…」

東北奏楽の顔から本気だとわかったのか、その拳は行き場を失いそのまま泣き崩れてしまうついなさんに恵さんが駆け寄る。さて、どうしたものか…。

「きりたん、どうしましょう?」

『とりあえず場所を移したいですね。ここだとすぐにでも人が集まっています』

「じゃあいったん事務所に…」

「それには及びませんわ」

瞬間、ゴゴゴゴッ!と揺れ始める大地。地震、じやない! 震えと冷や汗が止まらない。本能的な恐怖が襲いかかる。この現象を私たちは知っている。ふわりと上空から舞い降りたのは、目を釘付けになるほどの美貌の怪物。ナインテイルフォックス・ドーパント…!その出現に、集まり始めていた住民が蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。私も逃げ出したいぐらいだ…。

「東北至子…!」

「ちゆわ。お久しぶりですわね、ダブル。先日はうちの妹弟が世話になりましたわ」

狐耳が生えた狐の仮面を思わせる紅く隈取りされていて歌舞伎役者の様で笑っている様な顔の視線に射抜かれ、足が崩れ落ちそうになるのを必死に抑える。戦わないでこれか…!

「至子、様…!」

「まったく。勝手に暴走して私の計画を台無しにしたかけた挙句に仮面ライダーに敗れるなんて、とんだ役立たずですわね?」

怯える東北奏楽に向き直りカランコロンと下駄を履いているような脚を鳴らして歩み寄るナインテイルフォックス・ドーパント。そして串刺しにせんと槍状になり伸びた一尾の尻尾を、咄嗟に割り込んで左手で掴んで受け止める。あぶ…なかつた!

「あら? 何故邪魔をするのかしら。生ごみを掃除してあげようというのに」

「ドーパントでなくなった以上、私達の守るべき対象です…! 殺させはしない!」

「私に勝てると思ってるのかしら? 手も足も出なかつた貴方達
が」

そう言った瞬間、握っている尻尾が鞭の様にしなつて天高く振り回され、咄嗟に手放したところに薙ぎ払われて水都タワーに叩きつけられ、内部の通路まで転がされる。そのまま尻尾が斬り離され、一尾のナインテイルフォックス・ドーパント……ただし全身金色の毛皮に包まれ女性らしいフォルムの肢体の上半身を包む複雑な文様が紅く記されている振袖を思わせる高級そうな着物は蒼から紅になっている……言うなればフォックス・ドーパントだろうか、に変形して下駄の様な脚で飛び蹴りを叩き込んだので回避。一回転しての回し蹴りを叩き込み、首に直撃させた。

「その程度ですわ？」
「がっ…!？」

しかしフォックス・ドーパントはビクともせず、尻尾を巨大化させてビインタを叩き込んできて、殴り飛ばされた私達は床を転がって行く。分身でこれとか強すぎるでしょうが！

『こうしている間にも東北奏樂が……!』
「一気に決めましょう！」
《ヒート!》《ヒート!・ジョーカー!》
《ヒート!・マキシマムドライブ!》

走りながらヒートジョーカーに変身し、マキシマムスロットにヒートメモリを装填。右半身が熱き炎に包まれ、右拳を握って抉り込むように叩き込む。

『ジョーカーバックドラフト!』
「ぐうっ…!？」

その一撃をまともに受けたフォックス・ドーパントは吹き飛んで一

尾の尻尾にボフィンと戻り、地上で何時の間に復活したのかエルドラゴと相対していたナインテイルフォックス・ドーパントに合体して九尾に戻り、私達は飛び降りてエルドラゴと合流する。見れば、ついなさんと東北奏楽は恵さんが連れて離れたようだ。

「リリイ！無事でしたか！」

「お前たちもな。こいつがミュージアムの首魁か、ホワイトアウト以上には化け物だ」

「私のプレッシャーが効かないどころかはねのける貴方に言われたくありませんわね」

そうか、リリイは月読アイが探した、ついなさんと同じ精神耐性持ち。フレンジーの咆哮にも負けた私と違って耐性があるのか。これならいける……！

「何時まで守り切れるかしら？」

『サイクロンメタルです！』

《メタル！》《サイクロン！》《サイクロン！メタル！》

そう言つて九つの尻尾を機関砲に変形させて乱射するナインテイルフォックス・ドーパントに、私達はサイクロンメタルに変身。メタルシャフトに風を纏って振り回し、弾丸を防いでいくと弾丸をパイレーツカリバーで斬り弾きながら突進したエルドラゴがヤクザキツクを叩き込み、ナインテイルフォックス・ドーパントは仰け反つて後退。今度は尻尾を大砲に変形させて爆撃して来てエルドラゴは吹き飛ばされ、咄嗟についなさんと東北奏楽、恵さんを守るべく駆け寄つて庇い、背中に直撃を受けてしまう。ダメだ、強すぎる。

「ゆかり!？」

「邪魔をしないでもらいたいものですわ。私は私の秘密を知っているあの子を殺したいだけですのに」

「秘密……」

…それを知っているから東北奏樂は狙われてる。つまりそれが公然の事実になれば退いてくれるのか…？考えろ、それは…：東北奏樂が知り得て、殺してまで守りたい、秘密…。

「それは、貴方が東北至子ではなく…：東北外道^{ソトミチ}、だということですか？」

『え』

「なに？」

ブリュンヒルデ事件の直前に、関係者だった弓弦伊織から聞き出した事実を開示する。すると明らかに狼狽するきりたんとリリイ。そう言えばドタバタしてて言っただけだった。

「…：最近嗅ぎまわっていたのはお前だったか」

すると声はそのまま口調が変わるナインテイルフォックス・ドーパント。やはり、そうか。

「正確には、病死した後東北至子に霊媒させた死人…：それが貴方の正体です！東北外道！」

『私を殺した、父親…？』

「そこまで知られていたなら、もう仮面ライダーを相手取って消耗してまで奏樂を殺す意味はないか。時間を無駄にしたな」

そう言っただけを返すナインテイルフォックス・ドーパントは煙と共に姿を消して、同時にプレッシャーが消え去り私達はどっと疲れて尻餅をつく。

「一か八かでしたが上手く行きました…：とりあえず、この場を離れま

すか」

『ゆかりさん、後で話してもらいますからね…』

その後、東北奏楽は逮捕された。しかしやはり権力で東北家への捜査はできなかつたらしくついなさんは憤慨していた。東北家の霊媒は政界も深く根強く関わっているという話ですからね…。直接乗り込むぐらいしかない気がします。

「その後、東北奏楽は？」

「己のやってきたことを悔いている様子や。アイツの自供で行方不明者が何十人も殺されていたことが分かったからな。警察は騒然としているで」

そうそう。ついなさんが戻ってきて花さんや有阿刑事は喜んでいい。今回の事件はこうして幕を下ろしたわけだ。

「……父親が、私の姉を……」

きりたんへの遺恨を残して。この遺恨が、大きな事件に繋がることを私達はまだ知らない。

それは、水都上空を進んでいた軍用ヘリが襲撃されると言う形で始まった。全身真っ白の女が、四人の男女を率いて水都のビルの上で高らかに囃う。

「さあ、始めようか！死神のパーティータイムを!!」
《エターナル!》

ボイロ探偵W設定（四十二話〜五十八話まで）

・結月紫／仮面ライダーダブル

時にはヒロインも務める主人公。数年前に両親を亡くし、双子の弟の縁と妹の雫と共に暮らしている。イフに師事したすぐあとに両親が他界しており一時期探偵になると言う夢を諦めようとしたものの、縁と雫が就職しバイトを始めて己の夢を後押ししたため探偵になれたという過去がある。

親友がドーパントになって敵対することになったりストーカーに誘拐されたりロクな目に遭ってない。親を失ってるため親の夢を叶えようとするマキの苦しみを理解できずに苦しんだがきりたんの啖呵で吹っ切れた。東北外道の事実唯一気付き独自に調べていたもののトラブル続きで全然話す機会に恵まれなかった。

・きりたん／東北記理子／仮面ライダーダブル／仮面ライダーサイクロン

時にはアグレッシブなゆかりの頼れる相棒。先代相棒と戦ったり相棒を誘拐した誘拐犯と戦ったりとゆかりのために奮闘した。トウース、ブリュンヒルデ戦どちらも決定打も与えたMVP。母親を名乗る幼女がやらかしてたり父親が姉の身体を乗っ取つてることを知らされたり、まだちゃんと思いい出せてない家族に対して悩んでいる様子。

・緋星燈

縁の下の力持ちの所長。戦えないなりにゆかりたちを手当てしたり咄嗟にツイなを庇ったり頑張っている。

・如月追儼／仮面ライダーアクセル

よく重傷を負ったりして生傷が絶えないものの持ち前の回復力でピンピンしている方相氏。ブリュンヒルデ事件の際にホワイトアウト・ドーパントと遭遇し敗北、拉致されてガイアメモリ関連の記憶を漂白されてしまった上に最後の幼馴染までも利用されてしまうも、見事に復活してホワイトアウトを一騎打ちで倒して目標を成し遂げた。正気に戻った東北奏楽には思うことがある様子。

・リリイ金堂／金堂百合／仮面ライダーエルドラゴ

ドーパントの初見殺しを喰らって結構な重傷を負うものの毎回ピンピンしている、探偵として馴染んできた元マフィアのボス。苦汁をなめさせられたブリュンヒルデ戦ではとどめを持っていった。

・呪怨キク

リリイの相棒。ラーメン屋「金堂」を経営している。最近流行っている美味しい飲食店としてトゥース・ドーパントに襲撃され応戦して怪我を負ったものの普通に復帰した。

・鳴花緋女めいか へいメ

仮面ライダーの事を知っている一人。鳴花梅なるはな うめなる瓜二つの少女がミュージアムに追われているようだが…？

・鳴花三言めいか ミコト

仮面ライダーの事を知っている一人。鳴花梅なるはな うめなる瓜二つの少女がミュージアムに追われているようだが…？

・月読哀つきよみ アイ

自称きりたんの母親。トゥース事件では全滅した仮面ライダーを全員回収したり支援はちやんと行っていたものの、ミュージアムから複数のガイアメモリを持ち出したことが判明。そのうちの一本、ブリュンヒルデを杏璃万結に渡してゆかりを誘拐させ排除を狙おうとしていた懲りない人。「ラバー」のメモリと銃で時には戦う。

・結月縁えにし

ゆかりの双子の弟。ゆかりの夢のために就職した。生傷が絶えない姉を心配している。元キャラは「結月ゆかりの双子の弟」

・結月雫しずく

ゆかりの妹で中学生。ゆかりの夢のためにバイトしている。元キャラは「結月ゆかり雫」

・東北至子／東北外道ソトミチ／ナインテイルフォックス・ドーパント

ゆかりに真実を暴露されたミュージアムの首魁。この三話では本格的に活動。トゥース事件ではマキを回収した上で幹部として勧誘し、ブリュンヒルデ事件では手がかりからアイと「実験体」を得れると考え東北奏楽を用いて調査させ、ホワイトアウト事件では暴走を始

めた東北奏楽を口封じも兼ねて肅清しようとし、ダブルと交戦。実力差を見せつけた。10年以上前から東北奏楽を被験体にしてに殺し屋として育てていたことも明かされた。

旧名は弓弦外道で伊織の叔父。不治の病を抱えていて病弱で、なの方に自分の治療方法を自分で探そうと考古学者になつて色んな古代文明や遺跡を研究しており、結構年の差があつた東北藍に惚れてアプローチして結婚した…とされていた。名前に違わぬ外道。

・東北純子／アルテミス・ドーパント

ミュージアムの幹部。マキが勧誘された際に、断つた場合容赦なく始末しようとしていた。

・東北蛇門／エクスタシー・ドーパント

ミュージアムの幹部。マキが勧誘された際に、断つた場合容赦なく始末しようとしていた。

・東北星香／シャーク・ドーパント

ミュージアムの幹部。ルカが倒されたためメモリの売人として積極的に活動。マキにメモリを売った張本人。奏楽に苦言を呈したりもしたが、奏楽の過去について知らされていなかった。

・東北奏楽／ホワイトアウト・ドーパント

ミュージアムの幹部で至子に次ぐ実力者で、アクセルと一騎打ちして完全敗北させた。旧名は佐倉奏楽で、幼少期から外道による試作型ガイアメモリの被験体にされ「ホワイトアウト」に適合。組織の殺し屋としてミュージアムの邪魔者を排除し続け、「白の視点」のハイドープに目覚めてその影響で全ての物事がつまらなく感じて「面白い」ことを模索し続ける、殺人に耐えきれず本来の人格を閉ざして快樂的に面白さを追い求める殺人鬼の人格になつていた哀れな存在と化していた。メモリブレイクされたことで本来の人格を取り戻すも、罪悪感から懺悔し続けることになりついなの手で逮捕された。

●第十二章「Tを止める」の登場人物（Tはトウースの他に友、弦巻マキなど）

・弦巻真希^{つるまきマキ}／トウース・ドーパント／ブラックトウース・ドーパント

ゆかりがいつもコーヒー豆を購入する喫茶店「弦巻」の看板娘。潮風高校のOBで元軽音部。ゆかりの同級生で親友で幼馴染で、高校時代共に不良集団と戦った最初の相棒。母親から習った截拳道主体とした我流の使い手でステゴロではゆかりより強い。

ギターリスト志望だったが父親が一人で切り盛りする店を手伝うことになったよくだきた娘だったのだが、「弦巻」が閉店間近にまで追い込まれて、メモリに手を出してしまい「トウース・ドーパント」に変貌した。人気店が潰れれば「弦巻」は救われると信じてゆかりと敵対することになりながらも止まれなくなった挙句に、ミュージアムの幹部になれば「弦巻」を援助すると至子に勧誘され悪魔の誘惑に乗ってしまった典型的なガイアメモリの被害者。元キャラは弦巻マキ。

・弦巻誠人^{つるまきまこと}

マキの父親で喫茶店「弦巻」の店長。亡くなった妻の夢を叶えようと家を改造して作った店を切り盛りしていたが、経営難もあってマキの夢のために店を畳もうとしていた。警察からマキの凶行を知らされ自分の存在が「呪い」になったのだと確信し自殺しようとしていたところをきりたん^{きりたん}に止められる。虚音イフに依頼してマキのギターを買い戻して渡そうとした、その矢先の事件だった。

・トウース・ドーパント／ブラックトウース・ドーパント

『歯』の記憶を宿したドーパント。全身歯が生え揃った口がついたフルアーマーの騎士の様な姿をしている。人体で最も硬い部位である歯の記憶を持つだけあってとんでもない防御力とありとあらゆるものを噛み砕き粒子化する口を持ち、マキの実力も合わさってミュージアムの幹部に勧誘されるほどの実力者。どす黒い感情に飲まれると「虫歯」と化して万物を侵食し溶かす猛毒を持つ「ブラックトウース・ドーパント」にパワーアップする。弱点は口の中。変身者は弦巻マキ。

●第十三章「純愛のB」の登場人物（Bはブリュンヒルデの他、炎のブレイズ、花嫁のブライドなど）

・杏璃^{あんり}万結^{まゆ}／アンラ・マンユ／ブリュンヒルデ・ドーパント

全ての事件に関わっていたゆかりのストーカーであるクォーター。千絵美尾大学の学生であり、実家もそこそこの裕福な名家の分家なだけの一般人で自らの血筋が名家のものであるという事実を知ってお嬢様を気取るようになり、自分にふさわしい運命の人が現れると信じつづけた変人。

ホーク・ドーパントの事件で水都アウトレットモールを訪れていた客として目撃したのを皮切りに。マッド・ドーパントの事件では大学生として聞き込みで話しかけられ、ダンデライオン・ドーパントの事件では精神病の患者の一人として目撃し運命を感じて以降、目立った事件はすぐさま嗅ぎつけてあの手この手で観察していた。挙句の果てにはゆかりの家の近くの空き家を買取り引越して窓からじつくりと撮影していたりと、その行動力は常軌を逸しているやべーやつ。

アイからメモリを受け取り依頼され、ゆかりを死なせないために誘拐し、添い遂げて一緒に暮らそうと目論んだ。資金源は株であり、そこそこ名家の実家の援助は受けていない。作中屈指のハイスペック。元キャラはVOCALOID3のMAYU。名前の由来はゾロアスター教の悪神「アンリマユ」

・クロックロウ

バットショットを参考にマユが作ったフクロウと置時計を模したガジェット。メモリを使わない上に、監視したり盗聴したりなど多機能。最終的に継星探偵事務所が使用することに。

・弓弦伊織

元琴葉神社のバイトで、情報調査会社ユミカルチャーの御曹司。イレイザー・ドーパントとしてゆかりたちに敗北し、投獄されていた。若い頃の東北外道瓜二つの姿であり、甥っ子だった。

・弓弦重三

ミュージアムとも繋がっていた情報調査会社ユミカルチャーの社長で、イレイザー事件の際にミュージアムに口封じで殺された。その正体は東北外道の弟だった。

・ブリュンヒルデ・ドーパント

「輝く戦い」の記憶を宿したドーパント。巨大な槍を手にした女騎士の様な姿をしており、灰色の天馬「グラマーネ」を模した天馬の様なケンタロス形態にも変形できる。変身者の「愛」を炎に変換し、愛が燃え上がるほどパワーアップする、ただそれだけのシンプルな能力。元ネタはFateシリーズの英霊ブリュンヒルデ。

●第十四章「凍り付いたW」の登場人物（Wはホワイトアウトの他、ダブル、水都IIウォーターシティなど）

・神威恵／フレア・ドーパント／プロミネンス・ドーパント

ついななの幼馴染でついななの相棒だった神威岳の妹。ウェブ事件で親友の一人である快子を失い、ついななを人質にされたことで奏楽に従うことを余儀なくされた。方相氏の一人であり太刀を用いる卓越した戦闘技術を持つが、プロミネンス・ドーパントになった際に理性が焼き切れてしまい、単調な動きしか出来なくなり敗北。目を覚ました後はついななにガイアメモリ強化アダプタを渡すなどで一矢報いた。元キャラはめぐっぽいど。

・フレア・ドーパント

「太陽風」の記憶を宿したドーパント。発火能力で炎を自在に操り、高熱を用いる。炎を太刀の形に集束させたりなど応用も可能。

・プロミネンス・ドーパント

「太陽風」をアップグレードした「紅炎」の記憶を宿したドーパント。火力もさらに上がり、短時間で水都を燃やせる火力がある。爆発したかのように広がる紅焰を操るが、大火力を出した後はエネルギー切れで動けなくなる上にあまりの熱さに変身者の理性まで焼き切ってしまう諸刃の剣のドーパント。

・ホワイトアウト・ドーパント

「漂白」の記憶を宿したドーパント。初期型のメモリであり、長年使
い続けた奏楽の試行錯誤で空間の漂白（氷漬け）、氷武装、無限の氷製、
白に溶け込む、自在に動かせる氷人形、記憶の漂白（人間・メモリど
ちらも）＋ハイドロプの「白の視点」の万能ともいえる数多くの能力
を持つ。無敵に近いがそれ以上の力によるごり押しには弱い。ウエ
ザー＋ホツパー＋ゼロ＋デス・ドーパントをイメージしている。

劇場版：A to Zフォーエバー

第五十九話：A to Zフォーエバー／地獄の始まり

私達ダブルとついなさんことアクセル、リリイことエルドラゴが水都第二屋外ステージで暴れるドーパントと相対していた。

「さあ、振り切るで！」

《アクセル！アップグレード！》《ブースター！！》

「さあ、派手に行こうか！」

《ゴールデンルーラー！》

「祭りの場所はア、ここだあ！」

対する「脱獄囚」の記憶を有するドーパント、プリズナー・ドーパントはその白黒のボーダーラインが目立つ巨体を揺るがせて両手首に付けられた手枷から伸びた鎖につけられた家屋を振り回すと言うとんでも攻撃を仕掛けてくるが、一瞬のうちにアクセルブースターが鎖をエンジンブレードでバラバラに斬り裂いて、宙に浮いた家屋をエルドラゴがルーラチェインでキャッチして近くにゆっくりと下ろす。

「水都の人々の家を武器に使うとは言語道断！」

『観念なさい！脱獄囚、あさくら たけし旦那様！』

《エクストリーム！》

「さあ、お前の罪を数えろ！」

「うおおおおおっ！」

鎖を両拳にグルグル巻いて殴りかかってくるプリズナー・ドーパントの攻撃を、サイクロンジョーカーエクストリームに変身しプリズムサーバーから出現させたプリズムビッカーで受け止め、弾き返して四隅のスロットにメモリを装填していく。

《サイクロン！マキシマムドライブ！》《ヒート！マキシマムドライブ！》《ルナ！マキシマムドライブ！》《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

プリズムビツカーの中心に七色のエネルギーが集めてからプリズムソードを引き抜くと、七色のエネルギーが剣身に移動、プリズナー・ドーパントを十字に斬り裂いた。

「ビツカーチャージブレイク!!」

「さばああああ!」

プリズナー・ドーパントは鎖の破片を撒き散らしながら吹き飛び、爆散。まあダブル、アクセル、エルドラゴの最強形態が揃ったのですから楽勝ですね。私達は変身を解除し、四人で並び立つとついなさんが歩み寄って変身者だった且椋竹志に手錠をかけた。

「お疲れや三人とも。おかげで逃亡中の凶悪犯を捕まえることができたわ」

「まさか刑務所で何者かが手引きしてガイアメモリを渡して脱獄させるとは……」

「上手い手だよな。オレが捕まった時もそうすればよかったよ」

「馬鹿言わないでください。しかし一体何者なんでしょうか?」

「記録によれば若い女やな。且椋の友人を名乗って接触したようや。こいつ問い詰めて吐かせたるわ」

そう意気揚々と笑顔で説明するついなさん。ホワイトアウト・ドーパントとの戦いで手に入れたガイアメモリ強化アダプターによる新しい力、アクセルブラスターも使いこなせている様ですし刑事としての仕事もどことなく生き生きしている。ホワイトアウト・ドーパントとの決着がついて憑き物が落ちた感じだ。

「若い女と言うと……ミュージアムの純子さんか東北至子？」

「いや、東北至子みたく真っ白けやったけど別人みたいやったで。名前は……ちよつと待ちい」

ビートルフォンを取り出し、操作して写真を探すついなさん。目当ての物を見つけたのか嬉しそうに顔を輝かせる。

「念のために撮つといたんや。こいつや。公式記録によればアリアル・ボイスというらしい」

そう言って見せたビートルフォンの画面には、監視カメラが撮影したのであろう白髪でだぼだぼのパーカーの様な服を着た白づくめの少女の写真と書類が写っていた。

「……アリアル。どこかで聞いた名前だな」

「リリイが覚えがあるってことは……裏社会の人間ですか？」

「さすがに覚えてないが、出会ったなら以前のオレなら黄金像にしていただろう容姿だな」

「……うん？」

すると何かに気付いた様子のきりたんがビートルフォンの画面に指を指す。見てみれば、すました顔のアリアルと名乗ったらしい少女が後ろ手でピースしているのが写っていた。

「これ、撮影されるのを見越してますね。まるで、警察……もしくは私達に向けたメッセージ……？」

「うちも今気付いたわ。さりげなさ過ぎやろ」

「なめてんですかねこの女」

「……おい待て。こいつがオレ達に向けたメッセージなら、こいつをドーパントにして逃がした理由はなんだ？」

そう言うリリイに、ハツとする私達。一つだけ頭に浮かんだ。

「…こいつは、囹?」

「私達がプリズナー・ドーパントを倒した後情報を探るのを見越してでしょうか」

「目的はオレ達をここに誘き寄せる事だろうな」

「罨か!？」

慌ててエンジンブレードを構えて周りを警戒するついなさん。私もきりたんを庇うように構えるが、特に異常は見当たらない。

「罨じゃないとすれば…：…目的は歩歌路町に俺達を誘き寄せるってところか。あれか?」

そう言うってリリイが指を指した先にあったのは、万宵川を挟んだ反対側、私達の事務所がある歩色町の上空を飛ぶ黒塗りの大型ヘリコプターと、それに近づくもう一機のヘリコプターの光景。思わずバツトショットを取り出し望遠機能で見やる。

「…あれは!」

黒塗りの大型ヘリコプターに向けてもう一機のヘリコプターからパラシュートもなしで飛び降りたのは、件の白づくめの少女。

「死ぬ気ですか!？」

思わず度肝を抜くが、急降下して無理やり機内に乗り入れた少女。何が起きているのかわからない。そのうち、黒塗りの機体は爆発。色とりどりのなにかが水都中に散らばった。

「爆発したぞ!？」

「一体何が起きてるんや?」

「私が行きます!」

エクストリームメモリを呼び寄せて向かうきりたん。ついなさんとリイと共に愛車に急ぎながら、私は一人考える。なにかが散らばる直前に、黒いマントを身に纏った誰かが飛び降りるのが見えた。全身白く、黄色い複眼のそれは……。

「……仮面、ライダー?」

これが水都史上最悪の事件に繋がるとは、この時私はまだ知らなかった。

エクストリームメモリに入った私が黒塗りのヘリコプターの残骸が落ちた付近にやっていると、炎上する残骸を物ともせず調べている三人の男女がいた。

「あー、やっぱりなにもありませんね。全部水都中に飛び散ったみたいですよ」

「なに、心配しなくてもいいさミリアル。アリアルのように俺達にも運命のメモリが引き寄せられるはずだ」

「なんでもいいからさー、私は早く暴りたいの!まだなの、アベルーニ!」

「…あかりさん？」

物陰で実体化し様子を窺っていると思わず声が出てしまう。そこにいたのはリアル・ボイスと瓜二つだが髪から服まで黒づくめの少女、白黒の服を身に着けた長身の男性、そしてあかりさんを幼くしたような容姿のタンクトップで鉄の棒を肩にかけた少女だった。

「おや。ブロッサ、どうやら君のお望み通り、仮面ライダーの片割れが来たようだよ。想定より早いね」

「誰かは知りませんが出てきた方が身のためですよ？」

「こっちから行くの！」

ブロッサと呼ばれたあかりさんによく似た少女が鉄の棒で地面を突いたかと思えば人間とは思えない怪力で地面を突いた反動で跳躍、私のいる路地裏の壁に勢いよく鉄の棒が叩きつけられ粉碎される中私は横に転がり逃れながらやってきたフアングメモリをキヤッチ。変形させボタンを押す。

《フアング！》

「ゆかりさん！」

【《ジョーカー！》】

「【変身！】」

《フアング！ジョーカー！》

そして腰につけっぱなしだったダブルドライバーの左サイドに転送されてきたジョーカーメモリを装填してからフアングメモリを装填し展開。フアングジョーカーに変身する。

『え、あかりさん!?それに黒いリアル!?何事ですか!?!』

「私はあかりじゃなくて、ブロッサだあ！」

そう言つてブロツサは鉄の棒を横に突いてダブルの腹部に一撃浴びせ、吹き飛ばす。なんとか受け身を取りながら未だに混乱しているゆかりさんに言う。

「この力、普通の人間じゃありません！本気で相手しないとこつちが死にます！」

『でもだからってメモリも使つてない人間を攻撃するわけにも…』

「なにをごちやごちや言っているう！」

《アームフアング》

ブンブン鉄の棒を振り回して竜巻の様な連撃を叩き込んでくるブロツサの攻撃を、アームフアングを展開して鉄の棒を斬り裂くことで防ぐ。すると斬り裂かれた鉄の棒にブロツサは不満げに頬を膨らませた。

「こんな得物じゃ物足りないー！アベルーニーー！」

「やれやれ。今戦うのは得策じゃないと戦う前に気付いてほしかったねえ」

そう言つて何かを投げるアベルーニと呼ばれた男。それは地面に落ちると煙を噴き出し、あつという間に隠れてしまった。

「煙幕!？」

『しまった…!』

「ではまた会おうダブル。今度会う時は、俺達が君達に成り代わる番だ」

そんな声と共に煙が晴れて行つたとき、やつらの姿は影も形も無かった。…なんだつたんですか？

第六十話：A t o Z フォーエバー／不死身の傭兵団

「雨漏りが酷いですね…どこかに穴でも開いたんでしouxか？」

誰かの涙の様に雨が降りしきる中できりたんを回収し、事務所に戻ってきた私達。ついなさんは旦那棟竹志を警察に引き渡すために残ったため、今いるのは私、きりたん、リリイ、そして事務所で待っていたあかりだった。デスクの傍が雨漏りしてびしょ濡れになっていたのでバケツを手に丁寧に拭いてから、皆が待つてるガレージに向かう。

「ミリアル、アベルーニ、ブロッサ…アリアル・ボイスの仲間でしょうか」

「ミリアルと呼ばれていた少女はアリアルと色以外瓜二つでした。恐らく血縁だと思われます」

「ブロッサという名前の私とそっくりな怪力な女の子？…私に姉妹はいませんし、親戚もいないので…単にそっくりさんじゃないですかね？」

「それにしても声もそっくりでしたが…なんなんですかね？」

「アリアル、ミリアル、アベルーニ…やっぱり聞いたことある名前だな。西友に聞いてみるか」

電話するために一度ガレージから出て行くリリイを見送り、白紙の本を片手に意識を集中するきりたんに視線を向ける。検索開始だ。

「検索を始めましょう。キーワードは「アリアル・ボイス」「ミリアル」「アベルーニ」「ブロッサ」

とりあえずと名前を入れて検索するきりたん。しかし個人名は地球の記憶にはそれこそいくらでもある。やはりそれだけでは難航している様子だった。

「…どうやらアリアル・ボイスは偽名、もしくは自称の様です。ゆかりさん、何か他にキーワードありませんか？」
「そうですね…」

あの仮面ライダーらしき存在が気になるが、名前もわからない以上手がかりにならない。どうしたものか…そう考えていると、リリイが戻ってきた。

「わかったぞ。アリアル、ミリアル、アベルーニの三人はCOEFONT^{コエフオン}を名乗る傭兵集団で、世界各国で破壊活動を行うテロリスト集団だ。一度、エル・ドラードもかち合ったことがあるらしい」「らしいって、あなたボスでしょう」

「いやな。ミュージアムのスポンサーとしてオレ達を襲ってきたらしいんだが、そのときはキクの奴がミリアルとかいう女の首を落として撤退させたらしいんだ。だからオレの記憶にもそんなに残ってないわけだな」

「…は？ いやいや、首を落としたってつまり…：…死んだってことですよね？」

償うと言う言葉を信じてるから今更咎める気はないが、それはおかしい話だ。

「ミリアルという少女は生きてこの私と会いました。それはありえませんか」

「同じ名前を名乗ってるだけの別人じゃないのか？」

「死んだ人間が生きてるなんて、そんなゾンビみたいなこと…：…」
「ゾンビ…」

あかりの言葉に、あることを思い出す。そう言えば。アリアルはヘリコプターを急襲する際、プロペラに巻き込まれることをまるで気に

してないようだった。まるで替えが効くみたいなの……そしてアリアルと瓜二つで死んだはずのミリアルに、あかりを幼くしたようなそっくりさん。まさか、そんな小説みたいなのが……荒唐無稽すぎる。

「とりあえずCOEFONTで検索しましたが、傭兵集団だということとメンバー名しかわかりませんでした。リーダーはアリアル、構成員はミリアル、アベルーニの計三人。ブロッサは新規のメンバーみたいですね」

「……つまり、最近加入したと」

「それにしても一切情報が無いんですよ。この感じはそう……呪怨キクの時と同じです。名無し、存在しないものは検索できないのと同じく似ています」

「ゆかり？なんか思いついたのか？」

「……いやあ、シンプルにドツペルゲンガーかなにかなのかなと。まさかクローンとかなわけありませんし」

リリイに問いかけられて考えを話してみる。幼い容姿なのも相まって、クローンだと言われたらしくくりくるのだ。

「いやほら、ミリアルも首を斬られて死んだはずと言ったじゃないですか。クローンとして再誕したのになって」

「クローンって映画とかのあれか？それこそありえないだろ、第一あかりの遺伝子をどこで手に入れるんだ」

「ですよええ」

「クローンってなんですか？」

本当に知らないのかあかりがそう問いかけてくる。クローンがなにかと言われたら難しいですね……。

「クローンとはまったく同じ遺伝情報を持った別個体が作られることであり、生物学による科学技術……いわゆるバイオテクノロジーの一つ

ですね。あかりさん、なにか遺伝子情報を外部に漏らした覚えはありませんか？」

検索したのか詳しく語ったきりたんがそうあかりに問いかける。すると少し考えて、何か思い出したのか目を見開くあかり。

「もしかしてあれかな…数年前、中学生の頃にお母様に連れられてどこかの研究機関で遺伝子検査されたことがありました」

「遺伝子検査？またなんで」
「いくら食べても太らないし食欲も減らないので変に思われたんです」

ああ、たしかにあかりの食欲と胃袋は無限大だ。まともな精神の持ち主なら何かの病気かと思って調べるのもおかしくないか。

「そのとき、代謝効率がどうのこうのの超人体質とか言われた記憶があります」

「超人体質…その研究機関の名前は？」
「えーと、財団なんか…だったかな？」

なんとかじゃわからないんですけど、とツッコもうとしたら思わぬ反応があった。リリースだ。

「もしかして財団Xか？」
「財団エックス？」

「ミュージアムのスポンサーの一つだ。エルドラドのメモリを巡ってその幹部と一戦交えたことがある。たしか、兵器になりそうなものには片っ端から出費している死の商人たちの通称だ」

「死の商人…継星財閥ほどの富豪なら関係を持っていてもおかしくないですね。もしや、リアルが襲っていたへリがその財団の…？」
「検索してみます」

そうきりたんが再度検索しようとしていた時だった。スタツグフォンに着信。ついなさんだ。

「ついなさん？どうしました？」

《大変やゆかり！今、水都署にとんでもない数の通報が来とる！その全てが全て、怪物事件が起きたと言つとつて緊急出動や！自分等も手伝てつぱうてくれ！場所は……》

「はい、はい……千絵美尾大学に水都総合病院、琴葉神社に水都アウトレットモール、水都第二屋外ステージに歩歌路町の倉庫街、水都市民ホールに水都大橋、潮風高校……!?そのすべてで、ドーパントが現れたというのですか……!?」

「オイオイ、何の冗談だ!?!」

私の絶叫に異常事態だと察したのかりリイも焦躁に満ちた表情を浮かべる。

「こうなったら片っ端から行くしかありません！リイ、歩歌路町方面は任せました!」

「任せれたよ畜生！タービュラー借りるぞ!」

リイと共に慌てて外に出て、それぞれの愛車に跨る。一体、何が起こってるんですか……!?!

第六十一話：A to Zフォーエバー／ドーパント大渋滞

ついなさんの連絡を受け、ハードボイルダーを駆ってドーパントが同時に出現したと言う場所の一つである水都総合病院にやってきた私が出くわしたのは、二体のドーパント。

「二番被害が大きいと思って水都総合病院に来ましたが：予想以上です、ね、まさか一カ所でも二体とは」

右腕に角が生えた馬の頭部を装備した、金色のポニーテールを付けた白い剣士のドーパントと、まるで要塞の様な赤みのかかった桃色ドレスを身に付け黄金の王冠を付けた女王の様なドーパント。水都総合病院の庭で暴れていた。ダブルドライバーを腰に取りつけ、きりたんと情報を共有する。

「恐らくユニコーン・ドーパントとクイーン・ドーパントと思われるんですけど、どんな防御も貫く刺突と、要塞の様な鉄壁の防御力の持ち主です！」

「つまり相性がいいコンビってことですね！理性が無いように見えますが、同士討ちしないとは。行きますよきりたん」

《ジョーカー！》

「もちろんです！《サイクロン！》」

ジョーカーメモリを取り出してボタンを押してガイアウイスパーを鳴らし、ダブルドライバーにサイクロンメモリが転送されてきたのを確認して装填。ジョーカーメモリを装填し、展開する。

「【変身！】」

《サイクロン！ジョーカー！》

そして仮面ライダーダブル サイクロンジョーカーに変身、風を纏った拳でユニコーン・ドーパントに殴りかかる。するとユニコーン・ドーパントは蹄の様な脚でバックステップして刺突を繰り返し、咄嗟に裏拳で弾くとクイーン・ドーパントのドレスに取り付けられた複数の小型砲門から砲弾が乱射され、爆発を受けて吹き飛ばされる。

「ぐっ…強い!」

『爆風を利用しよう!』

《サイクロン!マキシマムドライブ!》

サイクロンメモリを右腰のマキシマムスロットに装填。右腕の馬の頭部の角をレイピアかなにかのように構えて突進し突き出してきたユニコーン・ドーパントを、援護する様に弾幕を張るクイーン・ドーパントの砲弾の爆風を利用して風のエネルギーを溜め、右足で跳躍。弧を描いて急降下し疾風を纏った右足を回し蹴りでクイーン・ドーパントに叩き込む。

『ジョーカートルネード!』

「きゃああああつ!」

そして無防備な頭頂部に回し蹴りを受けたクイーン・ドーパントは爆散。そのままサイクロンメモリをマキシマムスロットから引き抜いてドライバーに装填、代わりにルナメモリを装填して大きく背後に跳躍しながらマキシマムスロットを叩く。

《ルナ!マキシマムドライブ!》

『ジョーカーファンタジスタ!』

そして金色の光を纏った両足を空中で斜めに高速回転して、三日月の様な形状の幻想的な金色の光の斬撃の雨を放ってユニコーン・ド

パンツを切り刻み、爆散。着地すると、爆発跡から出てきた変身者に驚く。ダンデライオン・ドーパントの事件の際に知り合ったさかい 阪井芽衣子とメイコ 葉常はつね海斗カイトだったのだ。

「芽衣子さん!?!海斗さん!?!どうしてドーパントに!?!」

『この二人ならあの連携も納得ですが』

慌てて駆け寄る。特に芽衣子さんはオクトパス・ドーパントの事件の際にもお世話になった人だ。すると海斗さんは気絶したままだったが、芽衣子さんが目を覚まして頭を抱えながら立ち上がる。

「あいたたた……アタシだつてなろうと思つてドーパントになつたわけじゃないよ。海斗と散歩していたところにガイアメモリがいきなり空から落ちてきて、警察かアンタたちに渡そうと思つて海斗と一緒に拾い上げたらメモリがいきなり浮かんで突き刺さつて来て……」

「メモリが浮かんだなんてそんな馬鹿な……つて、あれ?」

嘘としか思えない嘘みたいな言葉にどうしたものかと考えて辺りを見渡すと、ガイアメモリが二本転がっているのが見えて思わず驚く。メモリブレイクしたはずなのに壊れてないのもそうだが、ミュージアムのような化石の様なものではなく、ダブルのものと同く似たガイアメモリだったからだ。端子が青いのも異様な雰囲気醸し出している。描かれているのはUとQ……ユニコーンとクイーンだろうか。

『なんででしょうかこのガイアメモリは……興味深いですね』

「つてそれどころじゃありません!次の場所にいかないと……二人とも、水都警察署に向かって事情を話してください!いいですね!」

そう言つてハードボイルダーに跨り、次に近い琴葉神社に向かった。

☆

うちは通報に従い潮風高校に来ていた。ここで怪物が二体暴れているらしいのだが：駆けつけたうちの前で警察の部隊を蹴散らしているのは見覚えのある奴等だった。

「こいつは確かウエザーとナスカ：フェアリーテイルの事件の時に戦った奴等やな。なんやおとぎ話から飛び出してきたんか？」

そうエンジンブレードを片手に、侍か風神雷神を思わせる白いドーパントと、青い騎士の様なドーパント相手におどけてみせると赤い雷撃と飛ぶ斬撃を放って来たのでエンジンブレードで斬り弾く。いきなり危ないやつぢやな。キヨロキヨロ辺りを見渡してからアクセルドライバーを腰に取り付け、アクセルメモリを取り出してボタンを押す。

《アクセル！》

「ちようどよく見とる奴もいないようやし……気兼ねなく、振り切るで！変……身！」

《アクセル！》

そしてドライバーに装填、ハンドルを回して仮面ライダーアクセルに変身。エンジンブレードを構えて飛びかかってきたナスカ・ドーパントの剣と鏢競り合う。

「不意打ちとは卑怯やないか？騎士みたいな見た目らしく正々堂々来い、やあ！」

ウエザー・ドーパントから放たれた鎌鼬に、ナスカ・ドーパントを押しやってぶつけて防御。そのままナスカ・ドーパントを蹴り飛ばし、ウエザー・ドーパントにブチ当ってエンジンメモリを取り出してエンジンブレードに装填、引き金を引く。

《エンジン・マキシマムドライブ！》

「ダイナミック、エース！」

そしてAの字に形に斬撃。ナスカ・ドーパントを爆散させるとウエザー・ドーパントが竜巻を発生させてきたのでエンジンメモリをエンジンブレードから抜いてアクセルドライブバーに装填、アクセルドライブバーを外して両手に持ちバイクフォームに変身して竜巻を突き破って突撃。

「アクセルグランツァーや！」

竜巻を突き破ると変形を解いて、アクセルメモリを再装填したドライブバーのハンドルを回してマキシマムドライブを発動、横回し蹴りを叩き込んでウエザー・ドーパントを蹴り飛ばし爆散させた。

「つてこいつらは…」

爆発から出てきたのは小春こはる六花りっかと夏色なつき花梨かりん。確か潮風高校のJKコンビでゆかりが頼りにしている情報屋だったはずや。傍に転がるWとNのメモリを拾い上げる。メモリブレイクしたはずやのにどないなってるねん？

アクセルがウエザー・ドールパントとナスカ・ドールパントを倒すその様子を見ていた人物がいた。アベルニと、ミリアルでもアリアルでもブロッサでもないスレンダーな帽子を被った少女だ。

「…メモリ自体が意思を持って通りがかった人間に突き刺さるとはね。おや、どうしたんだい？ウララ」

「…見つけた。これが私の運命のメモリ」

そうほくそ笑むウララと呼ばれた少女の手袋に覆われた手に握られているのは青い、Tと描かれたメモリだった。

第六十二話：A to Zフォーエバー／黄金郷の不始末

「歩歌路町の倉庫街つていやあ、前にエル・ドラードがアジトにしていた場所だ…久しぶりだな」

マシンミダスホイラーに乗って歩歌路町のドーパントをひたすら倒して回って何故かブレイクされないメモリを回収して周っていたオレはドーパントが出たつて言う港の倉庫街、エル・ドラードのアジト跡まで来ていた。自爆して吹き飛んだあそこだ。金かけたんだがだいぶもつたいなかったな。

「うん…？」

近づくにつれ、破碎音が聞こえてくるが違和感を感じる。これは、ぶつかり合っている？二体いる…！

「何故だ、何故お前は死なない…！」

「殺されてたまるか、あの人に見逃してもらった命だ…！」

そこにいたのは、マグマ・ドーパントの溶岩が激流の海を思わせる青いものとなった様な水を操るドーパントと、巨大な髑髏から骨の四肢が伸び、そこから肋骨を思わせる刃を装備したドーパント。海洋と、骸骨。オーシャン・ドーパントとスカル・ドーパントか…！

「大人しく死ね！」

「死体を殺せるか！」

オーシャン・ドーパントの巨大な水の砲弾にぶち抜かれたものの、体が崩れて空に飛び、空中で再形成。右腕の肋骨の様な刃をチョップの要領で叩き込むスカル・ドーパント。それを全てを受け止める海面の様に擦り抜けさせ拘束したオーシャン・ドーパントの前蹴りが叩き

込まれ、右足が膨れ上がって爆発。吹き飛んだスカル・ドーパントの欠片がひとりで動き出して組み立てられて戻って行く。海の広大さと柔軟さを併せ持った怪物と不死身の怪物か。

「周囲の被害お構いなしか」

いや、だがこの言い争う男と女の声：明らかに今までのドーパントと違う、理性ある行動。おいまさか。なにやってるんだ馬鹿どもが：

《ゴールド！》《ルーラー！》

片手でミダスホイーラーを運転しながら二本纏めて鳴らしてあらかじめつけていたダブルドライバーNEOに装填、両手でバイクのスロットルを上げながら突き進む。

「変身！」

《ゴールデンルーラー！》

そして空中に展開されたいくつもの黄金の波紋から出現した鎖の様な装飾がある純白の彫刻を思わせる西洋風の鎧を全身に装着し背中に赤いマントが展開して仮面ライダーエルドラゴ ゴールデンルーラーへと変身。ミダスホイーラーで二体の間に割り込み、ルーラティンを握った手を振り抜く。

「生まれ二人とも！」

両肩の装甲からルーラチェインを伸ばしてオーシャン・ドーパントとスカル・ドーパントを拘束する。

「何故だ、何故、この裏切り者に償いをさせようとしな！：！リリイ様

！」

「やっぱりお前か、西友…！」

西友蒼司、オレの腹心の男。忠誠心が高すぎるのがたまに疵だが、こいつは洒落にならないぞ。メモリのせいで溜まっていた鬱憤が爆発してやがるな。

「それでお前がスカルか。皮肉が効いているな、エル・ドラードを乗っ取った奴がエル・ドラードが崩壊しかけた原因の仮面ライダーと同じメモリとはな？キク」

「…あんなこととして、あんなこととして、なんで私は生きていますか！？」

「お前の方は不安が爆発しているのか。…メモリのせいだけじゃないな？」

恐らくハイドープか、もしくは超能力者兵士クオークスか？なんにしても財団Xが関わっていると見た。精神干渉系がいるな。

「邪魔すると言うのならリリイ様だろうと…！」

「むっ？」

「私は、殺されても文句言えないのに…！」

「おおっ!？」

するとオーシャン・ドープアントは両手から海水を放出して水圧でルーラチェインを潰して脱出、スカル・ドープアントは複数のパーツに分割して抜け出てしまう。ゴールデンルーラーとは相性が悪いか。

「裏切り者は、俺が始末する…！」

《サンダー!》

「独断専行が過ぎるぞ西友。派手に仕置きしてやる」

《ゴールデンサンダー!》

ルーラーメモリを抜いてサンダーメモリを装填してドライバーを展開。雷雲が発生して雷が落ち、それは黒に稲妻が描かれた和風の鎧武者風の装甲となり、右手に握ったイナズマサカリを振りかぶるとオーシャン・ドールパントは水流をウォーターカッターの様に放出してきた。俺に危害を加えようとは大きく出たな？

「水の出しすぎ注意だ」

イナズマサカリのグリップを回すとチェーンソーの様に刃が回転して帯電、水流の刃にぶつけて通電、感電させてダウンさせると空から骸骨のパーツが降り注ぐ。

「私がこのうと生きていいいわけがあー！」

「ハハハッ、ラーメン屋自身が出汗になりそうな骨になってどうするー！」

《サンダー！マキシマムドライブ！》

「痺れる程の信頼を喰らえ。サンダーバツシュ……！」

サンダーメモリを装填し、刃を高速回転させ大電流を放出させるイナズマサカリで縦一閃。迸る雷撃がパーツ一つ一つを撃墜し、空中で爆散させスカルメモリと一緒に転がってきたキクを受け止める。すると水流を放出し飛び上がって襲いかかってくるオーシャン・ドールパント。

「そいつを殺させてくれ、リリイ様……！」

「お前には悪いが駄目だ」

《ゴールドラッシュユ！》

サンダーメモリを再装填したダブルドライバーNEOを一度閉じて再度展開。黄金の光を纏い、水流を纏った拳を右掌で受け止め膨れ

上がった水の爆発からキクを庇ってもらに受ける。ホワイトアウト・ドーパント相手じや時間稼ぎされて負けてしまったが、こういう瞬間的な火力を出す相手には滅法強い10秒間の無敵時間だ。

《サンダー！マキシマムドライブ！》

「ゴールデンエレクトロ」

そしてサンダーメモリをマキシマムスロットに装填して電撃を纏ったミドルキックを叩き込み、オーシャン・ドーパントは爆散。西友が崩れ落ちた。

「お前ら二人がどう思おうと俺は気にしないがな。二人とも、一つ忘れてるぞ。オレが許した。それ以外に理由があるか？」

「ぐう……いいえ、ありません……」

「…私は、裏切ったのに……殺そうとまでしたのに」

「傑作の黄金像にした時点でチャラだから気にするな」

…さて、オレの部下を惑わせてくれた落とし前……つけさせてもらおうぞ、COEFFONT……！

その光景を、ガタガタ震えながら物陰から見ていた人物がいた。ミリアルと呼ばれるいた黒づくめの少女だ。

「…失敗してしまった……せつかく二人を誘き寄せてドーパント化させて、不穏分子のリレイ金堂を始末できそうだったのに……姉さんに

怒られる……わた、わたしが責任を取らないと……」

そのブルブル震える手には、Hと描かれたメモリが握られていた。

第六十三話：A to Zフォーエバー／国際警察きりたん

私とついなさんとリリイはきりたんとかかりの待つ事務所に帰還、それぞれ手にしたメモリを机の上に並べていた。

「おい、なんだあのドーパントは。メモリブレイクしてもメモリが壊れず排出されたぞ」

「そつちも同じか。うちのところもや、一応分析してもらおうと警察に提出せずに勝手に持って来たで」

「押収じゃないですか。いいんですか」

「最悪警視の階級返上したるわ」

そこらの男より男前のついなさんが取り出したのはI、N、W、R、Xのメモリ。このXってエクストリームじゃないですか!?!と思わず視線を向ける。

「そいつ特撮のヒーローみたいな見た目なやつだが見かけ倒しもいいところだったで。多分他のメモリと組み合わせる前提なんやろな」

「エクストリームはそう言うメモリですからね。恐らくこれらは、複数を合わせて使うのを想定しているはずです。Aのアクセル^{加速}、Dのダミー^{偽物}、Gのジーン^{遺伝子}、Iのアイスエイジ^{氷河期}、Kのキー^鍵、Nのナスカ^{ナスカ文明}、Oのオーシャン^{大洋}、Qのクイーン^{女王}、Rのロケット^{ロケット}、Sのスカル^{骸骨}、Uのユニコーン^{一角獣}、Vのバイオレンス^{暴力}、Wのウエザー^{気象}、Xのエクストリーム^{極限}、Yのイエスタデイ^{昨日}……A to Z全てある勢いですねこれ」

「アクセルもあるんはなんや複雑やな。どんなやつた?」

「茜さんが変身していて、加速が強敵でしたがルナトリガーで」

「葵さんの変身したアイスエイジが足を引っ張ってましたね。いや、滑らせていた、でしょうか?」

単体ならあの二人は多分強かったけどお互いをフォローしようとしてお互いの足を引っ張っていたから勝てたようなものだろう。

「だとすると足りないのはBとCとEとFとHとJとPとLとMとTとZか?どこにあるんだろうな」

よくわかりましたねリリイ。…なんだろう、デジャヴ既視感を感じる。そのイニシャルの一部に覚えしかないのですが。そんな時だった、出入り口の扉がいきなり開いてその人物が現れたのは。

「どこにあるかは知らないけど、誰が持っているかはわかるわ」
「うわっ!?!びっくり…した…」

あかりが驚いて絶句するの無理もない。私も、きりたん、ついなきんも、リリイも全員絶句する。そこにいたのは、すらりとした長身で黒コートを着ていて茶色い髪をツインテールにした、切れ長の瞳の女性。年齢や包丁のアクセサリをしてないなどの違いがあるが、きりたんが成長したような人物がそこにいた。

「私はキリエ・T・ノーマン。FBI…国際警察のエージェントよ。貴方達が仮面ライダーね」

「きりたんに、そっくり…」

キリエと名乗ったその人物は固まってるきりたんを見て肩を竦めて見せる。

「それは私が東北家の親戚だからよ。フルネームはキリエ・東北・ノーマン。私は国際警察としてメモリ犯罪を追っているの。…東北記理子。存在は知っていたけど実在するとは思わなかったわ」

「うちはFBIが来るとは聞いてへんぞ。何者やお前」

「国際警察がメモリ犯罪を追っているのは知っている。オレも蹴散らしていたからな。だが身内のそっくりさんが目撃されている今だ、クローン疑惑も出ている。そんな時にそっくりさんが出てきて信用できると思うか？証拠を見せる証拠を」

リリイがそう警戒しながらメモリを構えると、キリエさんは溜め息を吐きながら身分証を見せた。たしかにFBIらしい。これはそうそう偽造できない筈だ。

「リリイ金堂。元国際手配されていたエル・ドラードのボスね。保釈金で釈放されたと聞いたけど、今ここで捕まえてもいいのよ？」

「できるものならな？」

「リリイ、落ち着いてください！用件を聞いてからでも遅くありません！」

今にも変身しそうなリリイを押さえながらそう説得すると、しぶしぶと引っ込んでくれた。

「私はCOEFFONTを名乗る世界各国で破壊活動を行うテロリスト集団が、財団Xの新型ガイアメモリを狙っているという情報を得てこの水都までやってきた。私の目的は単純よ。力を貸してほしい」

そう訴えるキリエさんが取り出したのは、アリアル・ミリアル・アベルーニの名前と顔写真が載った書類。さらに追加で二枚書類を置き、それを見た私達はまたもや驚愕する。ブロッサとウララと書かれたその顔は、あかりと、私の顔だった。

「あかりと、私…!？」

「こんなの、地球の本棚にも…」

「ゆかりやと!?弟や妹とも似とるが、こいつはゆかりそのものや…」

「あかりの顔をしている奴は例のブロッサか。こっちのあかりと違っ

「て好戦的な顔をしてやがるな?」

「地球の本棚でもわからないのは当然ね。名乗っている名前はブロッサとウララだけど苗字は不明よ。そもそもデータが存在していないわ。アリアル達含めて、ね」

「データが存在しない……キクと同じ……」

そう名乗っているだけで名無しだから検索しようがないわけか。厄介な。

「私からの情報提供、必要なんじゃないかしら?」

「…COEFONTについて、教えてください」

意を決してそう言ったのは所長のあかり。ブロッサの事も気になるのだろう、私達を纏める人間として決断したらしい。

「いいわ。まずCOEFONTというのは……」

「そいつはいただけじゃないな。Missキリエ。私達の秘密を知らされたら困る」

そんな声が響いて、事務所の壁が爆発。私達は吹き飛ばされる。何とか立ち上がり、半壊した壁に隠れて外を確認すると、赤と青、二体のドーパントを従えた白づくめの女が立っていた。

「アリアル……!そんな、ここまで……」

「やあ仮面ライダー諸君。私はアリアル。君達にとって代わるためにやってきたCOEFONTのリーダーさ」

そうやって、片足を斜め後ろの内側に引き、もう片方の足の膝を軽く曲げ、背筋は伸ばしたままメモリを手にした右手を前にした優雅なお辞儀……カーテシーを行い不敵に笑むアリアル。その右手がサムズダウンを作ると、赤のドーパントは左手に炎を灯し、青のドーパント

は右手そのもののライフルを構える。

《アクセル!》

《ゴールド!》《パイレーツ!》

「変…身!」

「変身!」

《アクセル!》

《ゴールデンパイレーツ!》

咄嗟に飛び出したのはついなさんとリリイ。アクセルとエルドラゴに変身し、アクセルは青のドーパントに、エルドラゴは赤のドーパントと組み合い、その場を離れて行くのを笑いながら見送ったアリアルは私達に視線を向けると、Eと書かれた白いメモリを取り出した。

「あなたも、ドーパント…!」

《エターナル!》

「いいや? 私は…仮面ライダーだ」

《エターナル!》

そう言つて左手を突っ込んだ懐から取り出したロストドライバーを腰に取り付け、ボタンを押してガイアウイスパーを鳴らしたガイアメモリを装填、撫でる様にして倒すと白い装甲に包まれていき、黄色い複眼と漆黒のマントとプロテクター以外すべてが純白の仮面ライダーへと姿を変えた。あの時の仮面ライダー…! 思えば当然か、あの時アリアルがいたのだから。

「私は仮面ライダー、エターナル」

《ジョーカー!》

「きりたん!」

《サイクロン!》

「はい! あかりさん、私の身体をお願いします」

仮面ライダーエターナルを名乗った敵に、私達は怒りのままにダブルドライバーを取り付けメモリを鳴らし、きりたんと共に腕でWを描く様に構え、叫ぶ。仮面ライダーは、悪党が名乗っていい名前じゃない。

「変身！」

《サイクロン！ジョーカー！》

そして私達は仮面ライダーダブル サイクロンジョーカーに変身、跳躍してエターナルに殴りかかるも、その手に握られたナイフで斬り弾かれる。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

「ここからは死神のパーティータイムだ。私と一緒に踊ってもらおうじゃないか！」

第六十四話：A to Zフォーエバー／永遠の宴

うちとリリイは襲撃してきたアリアルを前に顔を見合わせ、頷いて同時に変身。それぞれが控えていたドーパントに飛びかかってその場から遠ざける。アリアルはゆかりたちがなんとかするはずや。

「ゲームスタート」

「ぐっ!?…まだまだあ!」

青いドーパントの右腕と一体化しているライフルが腹部に突きつけられ、投射された衝撃で吹き飛ばされる。この声、ゆかりのそっくりさんか。確か名前はウララやったな。言動はまるで似とらんが。

「トリゲームメモリ、私と引き合ったメモリ。これならあの私にも負けない」

「あの私? ゆかりのことをえらい意識しとるようやな!」

放たれる光弾をエンジンブレードで斬り裂きながら挑発する。一回の攻防で分かる、こいつは冷静に攻撃を組み立てられる奴だ。ゆかりとよく似ている、冷静にメモリの組み合わせを考えられるあいつと。怒らせて冷静さを欠かせないと反撃もままならない。

「誰が誰を意識しているだど…!」

「わかりやすいやっちゃな!」

《ジェット》

激昂して乱射して来て狙いが甘くなった隙を突いてエンジンブレードの引き金を二回引きながら刺突を叩き込み、切っ先からエネルギー弾を超高速で射出して胴体を撃ち抜く。

「があ!?!」

「このまま……!」

《エンジン・マキシマムドライブ!》

さらに四回引き金を引いてマキシマムドライブを発動、炎を纏ったエンジンブレードを刺突してAの形の炎の斬撃を飛ばして青いドーパントを貫き、爆散させた。転がったのはトリガーマemory。本当にトリガーのドーパントやったのか。

「…なんやあつさりやな」

「いやだ、私は、まだ……死にたくない……」

予想通り、爆発跡から出てきたウララと言う名前らしい黒服に身を包んだゆかりとそっくりの少女は手袋に包まれた手を伸ばし、トリガーマemoryを手に取りろうとして力尽き、服だけ残して消滅した。

「は!?!」

慌てて駆け寄る。空っぽの服とトリガーマemoryしか残ってない。服を掴み上げると、何かが転がり落ちてそれも拾い上げる。

「…チップ?」

焼け焦げたそれは、マイクロチップかなにかだった。

☆

ついなど目配せして、直感で赤い方のドーパントに殴りかかる。ドーパントには珍しく、オレが変身したマネー・ドーパントの時と同じで女性的なフォルムが目立つ。蟲みたいな顔だが何のドーパント

だ？

「お前さえ、お前さえ殺せば姉さんの憂いは晴れるんだ！」

「思念波か…無駄だ、俺には精神攻撃に耐性がある。お前がキクと西友を洗脳した奴だな！」

脳を襲ってきた違和感を頭を振って振り払い、右手に灯した炎を飛ばしてくる攻撃をパイレーツカリバーで薙ぎ払う。

「生憎と炎のドーパントとは三連続で当たってるんだ！いい加減飽き飽きだ！」

《パイレーツ！マキシマムドライブ！》

ダブルドライバーNEOから引き抜いたパイレーツメモリをパイレーツカリバーの柄のスロットに装填、グルングルンと振り回して溢れだした黄金の光を刀身に集束させて振るい、黄金の斬撃を飛ばす。

「ゴールデンストラッシュ！」

「なんの！」

右足に炎を纏い、炎を膨れ上がらせて爆発させ、その反動で跳躍して斬撃を回避、オーバーヘッドキックを叩き込んでくる赤いドーパント。右手に握ったパイレーツカリバーに左手を添えて受け止め、弾き返す。アクロバットな奴だな、変身者も徒手空拳が得意だと見た。

「強い…！能力だけの奴じゃなかったの…!？」

「失礼なやつだなお前。頭は弱いようだ」

「そつちこそ失礼ね！」

両手に炎を灯し、それを右手に集束させて炎を膨れ上がらせた火球をサツカーボールかのごとく蹴りつけてくるが、もう三度目なんだよ

集束した炎
それは！

《ゴールド！マキシマムドライブ！》
「もろとも、吹き飛ばせ！」

ゴールドメモリをダブルドライバーNEOから引き抜いてマキシマムスロットに装填、全身を光り輝かせると突撃。右手に黄金の光を集束させ、火球を殴りつけると黄金に染まり、黄金の液体と化した火球を拳に纏うと右腕を振りかぶりながら加速、叩きつけると大爆発が起きて赤いドーパントを吹き飛ばす。

「ゴールデンバーン！」
「きゃああああああっ!?!」

赤いドーパントは爆散、黒づくめの少女と共にヒートメモリが転がる。ヒートのドーパントだったのか。だが様子がおかしい。少女の指先から崩れ始めている。

「あうあ……姉さん、ごめんなさい……また、私は……」

その言葉を最後に黒い少女は完全に瓦解。残ったのは衣服とヒートメモリ、そして……

「こいつは、マイクロチップか？」

シヨートして焼け焦げた精密機械だけだった。

☆

「はあああー！」

疾風を纏った蹴りを何度も何度も叩き込むが、エターナルはマントを翻して攻撃を捌き切ると右拳の一撃。とんでもない衝撃に私達はよろよろと後退、そこにナイフを手に斬りかかってきたので掌で横から押して攻撃を逸らす。

「私に生半可な攻撃は通じない、どうする仮面ライダー?」

「戦い方を変えるまでです!」

『相手の武器はナイフ、距離を取りましょう!』

《トリガー!》《サイクロン!トリガー!》

サイクロントリガーに変身して風を纏った弾丸を乱射、しかしそのすべてをナイフ一本で撃墜しながらエターナルは悠然と歩いてくる。威力を犠牲にスピードに長けているサイクロントリガーの弾丸を全て防ぐなんてどんな反射神経ですか!?

「ならば!」

《メタル!》《サイクロンメタル!》

接近してきたエターナルのナイフを、サイクロンメタルに変身してメタルシャフトで防御。しかしメタルシャフトを掴まれて持ち上げられ、エターナルはメタルシャフトを振り下ろして、私達はメタルシャフトを手放して事務所の半壊した壁に向けて投げつけられてしまう。

「ゆかりさん!?きりたん!」

「あかり!キリエさん!ガレージから逃げてください!」

半壊した壁から飛び込み事務所に客席の机を粉碎しながら転がると、きりたんの身体を抱えて怯えているあかりとキリエさんがいて。逃げるように促しているとマントを翻しながらエターナルが跳躍し

て事務所内まで入つてくると、ガレージに逃げ込もうとするあかりとキリエさんの目の前の壁にナイフを投げつけて突き刺し制止させる。

「キリエは逃がすわけにはいかないね。そこで大人しくしてるといい。すぐ終わる」

「どつちが、ですかね！」

《ヒート！》《ヒート！メタル！》

もう事務所を壊しても構わない覚悟でヒートメタルに変身、再び装備されたメタルシャフトを手にして振り回し、エターナルを玄関に叩きつける。

「あいたた…なかなかやるね。さすが仮面ライダー。T2メモリを借りるとしよう」

すると扉の残骸の中から立ち上がったエターナルは半壊した机の上からT2メモリと呼んだガイアメモリの一本…Aのアクセルメモリを手にとると広げたマントの下の全てがマキシマムスロットのプロテクターの一つに装填。

《アクセル！マキシマムドライブ！》

「ぐっ!?がっ!?」

気付いた時には私達は宙に浮かび、四方八方から殴りつけられていた。ただでさえ強いのに、他のメモリまで…

「複数のメモリを扱えるのは君達だけじゃない。次はこいつだ」
《アイスイージ！マキシマムドライブ！》

いつの間にか手にしていたナイフの柄に付けられたマキシマムスロットにIのアイスイージメモリを装填。そのまま床に突き刺すと

そこから冷気が発生し私達を氷漬けにしてしまう。

「こんなもの、ヒートの熱で……!」

「一瞬動けないなら十分だ」

《ウエザー!・マキシマムドライブ!》

さらにアイスエイジメモリを引き抜いたナイフのマキシマムスロットにWのウエザーメモリを装填、雷を纏った風の渦をナイフから展開すると振り上げ、雷を伴った竜巻が事務所内で発生し装甲が火花を起こして吹き飛ばされておやつさんの机の傍まで転がった。もう事務所の天井の一部も吹き飛んで半壊している。

「があっ……」

「ゆかりさん!」

変身が解け、駆け寄ってくるきりたんとあかり。すると散らばったメモリを拾い上げていたエターナルがこちらを見て変身を解除する。

「継星あかり。会いたかったよ、我が姉妹」

「えっ、…姉妹?」

「そうとも。君も私達COEFONTの一員たる資格がある。私達につかないかい?」

そう手を差し出して勧誘してくるアリアルに、あかりは「いやっ!」と悲鳴を上げて近くにあったコーヒーカップを投げつける。咄嗟に手にしたナイフで切り弾くが中のコーヒーまでは防げなかったように右手に火傷を負うアリアル。

「やれやれ。勧誘は失敗か。寂しいことだ」

言いながら右手をひらひらさせるアリアル。すると不思議なこと

が起こった。その手の火傷が、みるみるうちに治っていったのだ。

「まあ効かないけどね」

「ば、化け物…」

「酷いじゃないか。同類だろ？」

「させるかあ！」

そう言つて近づこうとするアリアルに渾身の力で飛びかかるも、簡単に蹴り飛ばされダウンする。強すぎる、どうすれば…：するとアリアルの後。キリエさんが、一本のメモリを取り出し起動したのが見えた。

《サイクロン！》

「させない！」

すると宙を舞つたそのメモリ：サイクロンメモリがキリエさんが髪をかき上げて見えたうなじに突き刺さつて仮面ライダーを思わせるドーパントに変貌。

「キリエさん!？」

「しまった、メモリを持っていたか」

サイクロン・ドーパントは疾風を纏つて私ときりたんにあかり、外からこちらに来ようとしていたついなさんとリリイも回収してどこかへと天高く飛び去って行った。

「私達の秘密も自ずとばれる、か。…ウララとミリアルはやられたか。迎えに行くでしょう」

飛び立つ中、アリアルが踵を返して事務所から立ち去るのが見えた。

第六十五話：A to Zフォーエバー／クリアトゥルー ス

キリエさんが変身したサイクロン・ドーパントの竜巻に乗せられて連れて来られたのは、かつて若者強盗団「REX」の溜まり場だった水都歩歌路町の廃線の建物の一つだった。サイクロン・ドーパントを中心に、私、きりたん、あかり、ついなさん、リリイが転がる。

「……ここまでくれば大丈夫かしら。知ってる人間にすぐばれる本拠地を対策もなくそのままにしておくのはどうかと思うわ」
「いや待って待っていい！」

サイクロンメモリを引き抜いて人間態に戻りながらそう言ったキリエさんに、Tのメモリ：トリガーメモリを手にしたついなさんが物申す。気持ちは凄いわかる。

「こちとら敵さん倒したと思ったらゆかりのそっくりさんだわ、ようわからんチップが出てくるわ、消滅するわでいっぱいいっぱいやったのになんや!?! あんさんまでドーパントかいな!?!」
「同感だ。アンタは何者だ? あいつらについて何を知っている?」

ついなさんに続いてリリイも腕を組んで問いかけると、キリエさんは観念しながらきりたんと同じ顔で溜め息を吐くと、メモリを手にした右手を懐に突っ込み、代わりに大きめの手帳を取り出した。

「アリアル：彼女たちの名乗るCOEFFONTは、自称でもなんでもない。彼女たちの正体を現している言葉の略字よ。CELL遺伝子
OPERATION操作系 ENDS際限なく FEARS恐れを知らない
ORGANISM有機的 NEXTTYPE次世代型 WEAPON兵器の略で、財団Xの
天才科学者アベルーニ・ボルコフの生み出した二種類の生体兵器の通

称よ」

「アベルーニとは白黒の男の事ですか？」

「財団X……！」

「二種類の生体兵器？」

きりたんとあかりと私がそれぞれのワードに反応する。財団Xといえはあかりの遺伝子検査をしたとかいう研究機関の名前と同じだ。

「ええそうよ結月ゆかり。死者蘇生兵士ネクロオーバー……通称NEVERと、クローン兵士クローンオーバー……通称CLEARの二種類でCOEFONTは構成されている。アリアルはNEVER……死者蘇生兵士で、驚異的な自己再生能力を持っている。ちよつとした傷じゃびくともしないわ」

「あれはそういうことだったんですか……」

「クローンってのはマジだったのか……」

「……おいまさか、うちの倒したゆかりのそつくりさんはその……」

「ええ。ウララは結月ゆかりのDNAを元に作られたCLEARよ。覚えがない？血を流すほどの激闘を。財団Xは優秀な兵士を生み出そうとその血液サンプルを確保していたの。アベルーニはその血液サンプルから抽出したDNAデータをもとにCLEARを生み出した。それがウララよ」

「そんな……」

「待つてくださいい……！」

私のクローンが作られているという信じがたい言葉に放心していると、あかりが割り込んできた。その顔は、今にも泣きそうで。信じられないとばかりに、視線を彷徨わせている。

「なにかしら……？」

「じゃ、じゃあ！私が、アリアルに姉妹と呼ばれて……COEFONTの資格があるつてのは、まさか……！」

「……ご推察の通り。貴方も、CLEARよ。COEFONTの一員であるブロッサは貴方の同型機。生まれた順番としては妹つてことになるのかしら」

衝撃的な事実があつさりとキリエさんの口から語られる。一気に血の気が引いて行くあかり。

「嘘だ！私は、継星あかり！虚音威風の孫で継星円と継星惣一の娘で……」

「それは貴方の元になった継星あかりのパーソナルデータよ。貴方は、幼い頃に事故で亡くなった継星あかりのDNAから生み出され代わりとして育てられたCLEARよ」

「そんな、そんなの！名探偵のおやつさんが気付かないはずがありません！そんなの嘘です！」

「なら知っていて黙認してたんでしょうね。…CLEARは人間、本当の人間と異なり塩基配列に欠陥が存在する。だからメモリブレイクされると消滅してしまう程に構成が希薄なの。…貴方、何時も腹ペコなんじゃない？それは、初期型CLEARの特徴。肉体を維持するべくエネルギーを本能的に求めているからよ。嘘だと思おうのなら、当時の記事を調べれば見つかる筈よ。貴方の名前が」

思わず反論するが心当たりあり過ぎる言葉に思わず黙り、あかりはその場にへなへなと崩れ落ちる。理解が追い付いてないながらも納得してしまった様だ。それを冷めた目で見ながらキリエさんは続ける。

「そして奴等はフリーの傭兵団だと言われているけど、その実態は財団Xの掃除屋。だけど今回、主従関係にあった財団Xを裏切り、この新型type2ガイアメモリ…通称T2メモリを強奪しようとする目論んで襲撃、財団Xの抵抗でT2メモリが水都中にばら撒かれた。それが今回の事件の真相よ」

「…そこまでの情報と、あかりのことまで知っているなんて…貴方は何者なんですか？」

「何を隠そう、私もCLEARなの。お察しの通りそこにいる東北記理子のね。国際警察というのは財団Xに与えられた役職。本業は…COEFONTの痕跡を消去する情報操作係。それが私」

その言葉に、私ときりたん、ついなさんとリリイは身構える。キリエさんも…キリエもCOEFONT。きりたんにそっくりだとは思っていたが…。すると両手を振って降参の意を示すキリエ。

「待つて待つて！私は逃げ出したの！財団Xの裏切者のCOEFONTの裏切者！貴方達に協力を頼みたいと言ったのは本当の事よ！」

「…そういうばアリアルは貴方を殺そうとしていましたね」

「だがそれが演技だと言う可能性もあるやろ」
「ああ、あるな。マスカレイドに化けて死んだ風に見せかけていた奴もいたしな」

リリイ、それは皮肉か？そんなジト目を向けていると、キリエは自らの顔を指差して訴える。

「見て分からない？私と東北記理子、全然違うでしょ！私は、東北至子から財団Xに渡された東北記理子のDNAデータで作られた「運命の子」の予備だったけど結局失敗して肉体年齢は本来のもの、中途半端にしか地球の記憶に接続できないでそこないなの！それでも今回のアイツらの目的に必要なだったように無理やり連れだされたから逃げ出して、貴方達に助けを求めようとしたのよ！信じて！」

色々気になるワードは出ていたがその言葉に嘘は感じなくて。

「…わかりました。信じます。でも、どうすれば？」

「ゆかり!?!いいんか!?!」

「今は反撃するためにも少しでも情報は必要です」

「奴等は全てのT2メモリを集めようとしている。残りのメモリを奴等より早く手に入れることはできないかしら」

「…まずは拠点がいりますね。事務所は破壊されてしまいましたし…」

あかりを助け起こしながら考える。あかりもこの状態だし、こんな廃墟じゃない場所で休ませなければ。するときりたんが何か思っていたようだ。

「ならいいところがありますよ。もう一つの事務所です」

「もう一つの？」

「事務所？」

「ああ、あそこか」

「…まさかと思えますけどそれって」

「はい。杏璃万結の残した、偽の事務所です」

まさかこんな形で役に立つとは…首をかしげているついなさんとキリエさんに説明しなければならぬじゃないか、もう。

「やおお目覚めかな？ミリアル、ウララ」

「…うう、悪い夢でも見た気分です…」

「慣れないものだな…」

水都のどこかで目覚める病衣の少女二人を両手を掲げて迎えるリアル。死んだはずの二人の名を口にした少女は、不敵な笑みを浮かべていた。

第六十六話：A to Zフォーエバー／ゾンビクロニクル

警戒しつつやってきたのは、私の自宅のすぐ近くの一見平凡な家。二週間ぐらい前に私が杏璃万結に誘拐されたあの家の一室。私を引き止めるために年代物のタイプライターまで完全再現した事務所とそっくりの部屋だ。とりあえず意気消沈しているあかりは杏璃万結の寝室に寝かせてきた。今はゆっくり眠って休んでほしい。

「ゆかりの誘拐犯、まさかこんな目と鼻の先で監禁してたんか…」

「そう言えばついなさんはホワイトアウトに捕まってて知らなかったんですでしたね」

「ここは杏璃万結の意向で事務所と全く同じ造りです。立派な拠点になるかと」

「まさかこんなところにいるとはリアルたちも思わないわね」

「鳴花ーズに修繕は頼んでおいた。事務所の方は大丈夫だろう」

ビートルフォンで電話していたリイが頷いてそんな旨を伝えてきたので頷き、とりあえず杏璃万結の部屋から持って来たパソコンに打ち出していく。

「私達は数多くのT2メモリを集めました、襲撃の際に置いて来てしまいました。現在所有しているT2はついなさんがウララから回収したTのトリガー^{銃撃手}、リイがミリアルから回収したHのヒート^{炎熱}、そしてキリエさんが所有しているCのサイクロン^{疾風}、この三つのみです」

言われて机に置いて行く三人。あれだけあったのがこれだけだと思おうと悲しい。

「せっかく集めたT2メモリを全部奪われたのは痛いな…」

「奴は他のメモリも使いこなすんやろ集めたメモリすべてが奴の戦力になったも同然や」

「奴等に回収されたと思われるメモリは…えーっと、きりたん、お願いします」

「しようがないですね…言つていくので欄を分けて書き足してください。Aのアクセル、Dのダミー、Gのジン、Iのアイスエイジ、Kのキー、Nのナスカ、Oのオーシャン、Qのクイーン、Rのロケット、Sのスカル、Uのユニコーン、Vのバイオレンス、Wのウエザー、Xのエクストリーム、Yのイエスタデイ…そして、奴自身が所有していたE、エターナルです」

「エターナルの能力は？」

「財団Xが作成した二本しか存在しないメモリで、全てのガイアメモリを支配する究極のメモリ…ということしか」

「私も詳しくは知らないわ」

リリーの質問に答えたきりたんときりえさんの言葉に頷き、私は作成したA to Zの一覧を確認する。

「足りないのはBとFとJとPとLとMとZ、残り7本ですね。詳細は分かりますか？」

「…ごめんなさい。T2メモリは財団Xでも機密の兵器。末端の私じゃAからZまで存在する事しか…」

「それなら仕方ありませんね。…もしも襲撃を受けた際のために二手に分かれましょう。私ときりえさん、ついなさんとリリーで分かれて迅速に探します。きりたんはあかりと共にこの家に待機してください。きりえさんの話が正しければ、奴らの目的はきりたんも入っています」

「わかりました。何時でも連絡できるようにしておきます」

「二人一組なら逃げることもぐらいできるはず。情報屋の鳴花ーズとネルさんを頼りましょう。ついなさんたちはネルさんを。恐らく水都タワー前公園にいるはずです。T2メモリがドーパントになる前に

確保しましょう」

JKコンビもT2メモリの被害に遭っていて頼れないが、幸いなことにネルさんと鳴花ーズは無事だ。鳴花ーズ：つまり事務所に直接出向くことはできないが、連絡で情報を聞くことはできるはずだ。

「このT2メモリは念のためにここではなく、それぞれが所持して守った方がよさそうです。私がヒートを、ついなさんがトリガーを、キリエさんがサイクロンを持ちましょう。サイクロン・ドーパントもこうなれば貴重な戦力の一つです」

そしてそれぞれの持ち主の元に戻るT2メモリ。ここに残して襲われたら元も子もない。分散させておいた方がいいだろう。

「了解や。リリイ、一応聞いてくんやがお前んとこの情報網は使えるか?」

「無理だな。二人とも意識不明だ。水都総合病院で他のT2メモリの被害者と一緒に寝かされているはずだ」

「あの二人はもしもの時に戦力になるから抜けたのは痛いな：うちらで頑張るしかないか。きりたん、あかりは任せたで。：あいつはあいつや、うちはあかりの元気に助けられとる。起きたらそう伝えてくれ」

そう言い残してついなさんはリリイを伴って出て行った。見送った後、私はキリエさんと共に家を出つつスタッグフォンでヒメさんの携帯電話に連絡を入れる。

《「あ、ゆかりちゃん!? 一体何ごと!?! いつの間にか事務所が吹っ飛んで、ミコトが文句を言いつつ直してるんだけど…:」》

「あ、ヒメさん！近くに怪しい奴はいませんか!?!」

《「こんなことになってるんだし人っ子一人いないよ！こっちは商売

あがつたりで・・・「ヒメ！馬鹿言つてないで本題を聞く！」ひゃい！
「それで、なにかな？」《》

いつもはヒメさんがミコトさんを振り回しているが、シリアスな空気は苦手なのかミコトさんに怒鳴られてしゅんとなつてる。話が早くて助かる。

「…T2というガイアメモリが水都にばらまかれました。ミュージアムではありませんが、敵にその大半を奪われてしまった。残りのメモリを回収したい。何か知ってることがあれば教えて欲しいんです」
《…ガイアメモリ。…情報はないけど、ちよつと待ってね》

そう言つて黙るヒメさん。情報が無い上に人が近くにいないらしいのにどうするつもりなのだろうか。そう考えてながらも待つていると、30秒ぐらい後に荒い息が聞こえてきた。

「ど、どうしました!？」

《すーっ、はーっ……えつとね、ここから北東と、南西。喫茶「弦巻」近くと、歩色町の万宵川沿いの工場地帯。それと…凄い近くに気配を感じたよ。どこかまでかはわからないけど》

「け、気配ですか?」

《詳しいことは言えないけどそこにあるのは確かだよ。急いで!》

「キリエさん」

《サイクロン!》

その言葉に、キリエさんに視線を向けると頷いてサイクロンメモリを取り出して鳴らし、サイクロン・ドーパントに変身すると緑色の竜巻を発生させ私を取り込んで空に舞い上がる。

「目指すは一番近い喫茶「弦巻」です!」

「奇遇ですね、仮面ライダー…と、姉さんの期待を裏切った脱走者」

喫茶「弦巻」近くの道路に辿り着くと、傍らに赤いバイクを置いた見覚えのある人物…とは色違いの人物がそこにいた。リアルと瓜二つの黒づくめ…あれがミリアルですか。たしか、リリイが倒して消滅したはずでは。

「ミリアル…やはり、復活したのね」

「復活…どういうことですか、キリエさん」

「CLEARはクローンよ。専用の培養機から生まれる。特に“死にやすい”戦闘員は、頭に埋め込まれたチップを介して死んだ瞬間の意識データが保存されて転送され、新たな肉体を持って生誕する。それがCLEARの恐ろしさよ」

「それを早く言っただけよかったですね…！」

するとミリアルは見覚えのあるロゴのFと書かれたメモリを取り出してガバツと広げた自分の胸に押し当てるも、何が気に入らないのかそのまま懐にしまい込んだ。

「フアングメモリ…私と合うかなと思いましたがやはり駄目ですね。やはり私の姉さんへの熱き思いを受け止められるのはヒートです。持っているのでしょうか？ 気配を感じます、渡しなさい！」

「っ…!?!」

ダブルドライバーを取り出した右手を、一瞬で距離を詰められ鋭い

蹴りを受けて吹き飛ばされダブルドライバーを手放してしまう。

「この……」

サイクロン・ドーパントが疾風を放つも、ミリアルは逆に風に乗って壁を蹴って宙返り、私にのしかかり押さえこむと懐に手を突っ込んできた。

「なっ……やめっ……」

「のこのこと持ってきていただきありがとうございます。これは返してもらいます」

《ヒート！》

私から奪い取ったヒートメモリを取り出してボタンを押し、ガバツと広げた胸元に突き刺してヒート・ドーパントに変貌し、サイクロン・ドーパントを脚を振るって放った炎で吹き飛ばすミリアル。持って来たのは裏目に出た…。

「改めて名乗りましょう。私はミリアル、アリアルの妹。そして…私達はCOEFONT。水都を解放する者です」

「水都を、解放…？」

四肢に炎を燃え上がらせるヒート・ドーパント相手に、ダブルドライバーを拾い上げながら身構える。やるしか、ない！

第六十七話：A t o Z フォーエバー／ハーフボイルド・デッドヒート

「残念ながらヒートとフアングのT2メモリを手に入ればあなた方に用はないのです」

「ま、待てー！」

ダブルドライバーを装着し身構えた私たちを右掌を突き出して制したミリアルが変身したヒート・ドーパントは傍の赤いバイクに跨り、発進。私も慌ててハードボイルダーに跨り、ジョーカーメモリを鳴らしてドライバーに装填し仮面ライダーWサイクロンジョーカーに変身、追いかける。

「私達は奴を追います！キリエさんは先にもう一つの場所に！」

「分かったわー！」

サイクロン・ドーパントにもう一つのメモリの場所に向かわせ、ヒート・ドーパントとバイクチェイスする私達。万宵川沿いの道路を爆走しながら左手でハンドルを握りつつ右手を振るって火炎を後方に飛ばしてくるヒート・ドーパント。特殊能力特化だったブリュンヒルデ・ドーパントや火力特化だったフレア及びプロミネンス・ドーパントと違って精密な炎操作だ。私も蛇行する様にして炎を回避、次々と爆発炎上していくのをバックにスロットルを回してスピードを上げる。すると高速で進んでいく道路の脇に、白黒の服を着た男がいたのが尻目に見えた。

「全然振り切れてないじゃないかミリアル。手を貸そう」

《ルナ！》

「…？」

『ゆかりさん、今の！アベルーニです！』

強化された聴力が男の声とガイアウイスパーを聞き取り、きりたんが声を上げる。振り向けば、両腕の長い触腕が目立つ金色の三日月を思わせるドーパントが両腕を振るうと金色の光が輝き、そこからバイクに乗ったマスカレイド・ドーパントが四体現れて追いかけてきた。

「マスカレイド!? ミュージウムやエル・ドラードの様に戦闘員が!?!」
『いいえ、聞いた限りあのドーパントはルナ! 即ち「幻想」の記憶です! あれはルナ・ドーパントに作りだされたまやかし、言うなればルナ・マスカレイドです!』
「なるほど! なら遠慮なく倒していいですね!」

本物のマスカレイドはメモリブレイクしても死んでしまうのでできれば相手したくないドーパントのひとつだ。まやかしだというのなら遠慮はなしだ。

『撃ってきました!』

「撃っていいのは撃たれる覚悟がある奴だけだとおやっさんが言っていました!」

《トリガー!》《サイクロン! トリガー!》

ルナ・マスカレイドが手にした拳銃を撃って来たので、こちらもトリガーメモリとジョーカーメモリを換装してサイクロン・トリガーに変身。疾風を纏った弾丸を放ってルナ・マスカレイドの一体のバイクの後輪を浮かして引っくり返し、爆散させる。

「!」

「うわあ!?!」

『メタルに交代です!』

《メタル!》《サイクロン! メタル!》

すると命知らずにもスロットルを限界まで回してスピードを上げて肉薄してきたルナ・マスカレイドが蹴りを放って来て、横転しそうになるのを咄嗟にサイクロンメタルに変身してメタルシャフトをつつかえ棒代わりにして転倒を回避。つつかえ棒代わりにされた反動で外れたメタルシャフトを左手で上手く掴んでくるくる回し、横のルナ・マスカレイドに叩きつけて吹っ飛ばし、爆散させると、トンネルに差し掛かった。前には何も知らずに走っている乗用車が数台。不味い。

《ジョーカー!》《サイクロン!ジョーカー!》

「くっ…無事でいてくださいよ…!」

するとルナ・マスカレイド二体が前の乗用車目掛けて銃を乱射。驚いたドライバーがハンドルを切って乗用車二台が横に回転してぶつかり止まってしまい、私はドライバーたちの無事を祈りながらハンドルを握って上に引張って前輪を持ち上げ、乗用車二台のボンネットの上を擦り抜ける様にして回避。するとスロットルを全開にしたルナ・マスカレイドの一体が横を通り抜けていき、前方でバイクを反転させると突撃してきた。見れば後ろのルナ・マスカレイドと共に加速してながら座席の上に立ち上がって殴りかかる体勢に。どうやら挟み撃ちにするつもりのようなのだ。

「…本当にまやかしかですか?それにしては能があるような…」

『言ってる場合ですか!申し訳ないですがあの車を利用しましょう!』

すると私達と同じく挟み撃ちにされて困ったらしい前方の車が停まってくれたのでまた前輪を持ち上げて乗り上げる。そして空中に舞い上がる私達は車体を横にし、前方からのルナ・マスカレイドを轢き飛ばしながら下半身を捻って後方から追いかけて車を乗り上げ空中に舞い上がったルナ・マスカレイドに蹴りを入れて吹き飛ばし、二

体は共に反対方向に吹き飛んで爆散。私達は気を取り直してはるか遠くに見えるヒート・ドーパントの追跡に戻った。

「ここは…歩色町、万宵川沿いの工場地帯?」

『敵もメモリの居場所が分かっているという事ですか…?』

水都通の私だからこそ知っている裏道を駆使し、なんとかヒート・ドーパントの駆るバイクに追い付いた私達。しかし既に工場地帯に入っていて、嫌な予感がしつつも再びサイクロントリガーに変身、トリガーメモリをトリガーマグナムに装填して構える。

《トリガー!》《サイクロン!トリガー!》

《トリガー!マキシマムドライブ!》

『トリガーストームボム!』

そしてヒート・ドーパントのバイクの前方に弾丸を撃ち込み、その撃ち込まれた弾丸を起点にした爆弾のように発生させた竜巻に巻き込んで吹き飛ばすと、高所から道路に叩きつけられ爆散するバイクとギリギリで降りて受け身を取るヒート・ドーパント。よし、なんとか追い詰めたぞ。

「お転婆はここまでです、ミリアル」

『観念しなさい…ゆかりさん、横です!』

「っ!?!」

きりたんの声に、咄嗟に防御態勢を取るとメタルシャフトの様な鉄棒で殴り飛ばされ、防御していたにも関わらずとんでもない衝撃に引っくり返る。見れば、そこには肩に鉄棒をかけた、腰に大きなウエストポーチを付けた黒いズボンと灰色のブーツに、上半身は灰色のタスクトップのみを身に付けたあかりを幼くしたような容姿で凶悪な笑みを浮かべた少女がいた。彼女がブロッサ：あかりの妹：!?

「会いたかったの、仮面ライダー！私と戦うの！さあ！さあ！」
「くっ…!？」

手にした鉄棒を突き、薙ぎ、払い、次々とダブルの生体アーマーに打撃を叩き込んでくるブロッサ。一撃一撃が、重い。打たれた箇所が痺れる。強い…!

「この、いい加減にきなさい！」
「わきやあ!？」
「あつ、しまっ…！」

思わず両手で鉄棒を受け止めて、工場の壁に向けて投げつけてしまう。資材の山に激突して見えなくなるブロッサ。不味い、やりすぎた…!?

「あははは、中々やるなの、仮面ライダー！」
「…なんで、そんな状態で笑えるんですか…」
「死ななきゃ儲けもんなの！」

頭から血を流し、右肩が脱臼し左足が変な方向に曲がりながらも立ち上がり豪快に笑うブロッサに、思わず恐怖する。そのまま左手で右肩をはめ直し、左足を無理やり元の位置に戻すと、ポーチに手を突っ込んで拳大の包みを取り出したかと思えば包みを開けてハンバガーを出すと口を大きく開けて二口で頬張るブロッサ。もぐもぐし

ているとまるで逆戻りするかのように足が元に戻り、血も止まってしまった。

「ぐちそうさまでしたー！」

「…あかりの腹ペコの理由が分かった気がします」

「…ん？ついに見つけたの！私のメモリー！」

『なっ…!?!』

すると資材の中に落ちていたのか、Mのイニシャルの入った銀色のメモリ：メタルメモリを手に取り喜ぶブロッサ。最悪だ、キリエさんが回収する前にここにあると言うメモリを取られてしまった。

《メタル！》

「おおー！力がみなぎるのー！」

すると起動したメモリを放り投げ、タンクトップを脱いでスポーツブラ姿になったブロッサの背中にメモリが吸い込まれていくと、銀色の体色をした金属質の身体をしている大男の様なメタル・ドーパントに変貌。手にしたダンベルに刃がついたようなクローで何度も斬撃を受け、トリガーストームボムのダメージから回復したらしいヒート・ドーパントの炎を纏った蹴りも受けて蹴り飛ばされる。

「があ!?!」

「どうだい？俺の作ったCLEARの形状記憶遺伝子は」

するといつの間にか、転がった私達の先にルナ・ドーパントがいて。触腕で締め上げて持ち上げられる。くそっ、メモリチェンジができない…！

「初めまして。俺はアベルーニ。COEFONTの生みの親さ」

「貴方が、あんな狂った物を…！」

「狂っているとは人間が悪い。あれは全て、願いの結晶さ。東北記理子の居場所を吐いてもらおうか。ああ、そうそう。東北記理子の出来損ないは今頃ウララが押さえているはずさ」
「ぐう!?!」

ルナ・ドーパントに締め上げられ、ヒート・ドーパントとメタル・ドーパントに囲まれる。キリエさんも捕まったらしい。絶体絶命だ。どうすれば……すると次の瞬間、斬撃が襲ってルナ・ドーパントの腕が斬り裂かれて私達は解放される。

「やらせはしませんよ」

そこに現れたのは、思いがけない援軍だった。

第六十八話：A to Zフォーエバー／本物の悪魔

「あなたは…」

「水都を脅かそうとする存在、許しません！」

ルナ・ドーパントの触腕を斬り裂いて解放してくれたのは、鮫を模した騎士の様なドーパント、シャーク・ドーパント。東北星香さんだ。

「邪魔するななの！」

「そいつは僕らの台詞なのだ！」

シャーク・ドーパントに怒って襲いかかるメタル・ドーパントの目の前に着地し鉄棒を握って受け止めたのは、筋骨隆々の巨人。エクスタシー・ドーパント…東北蛇門。まさか、まさか？

「排除する…!?!」

「させない…!」

すると高所に陣取ってたらしいトリガー・ドーパント…ウララの声
が聞こえたと思えば、空中で弾丸に矢が激突して爆ぜた。見れば倉庫
の屋根の上にアルテミス・ドーパント…東北純子さんが弓を構えて佇
んでいた。

「ミュージアムの幹部…!? 仮面ライダーを倒すまでは邪魔しない筈な
んじゃないんですか、アベルーニー！」

「そのはずなんだが…」

「薄汚い亡霊共が立ち入っていい街ではないのですわ」

困惑していたヒート・ドーパントとルナ・ドーパントが、突如伸び
てきた九つの尻尾に締め上げられて持ち上げられる。その尻尾の伸
びてきた方向から地面を揺らしながらやってきたのは、目を釘付けに

なるほどの美貌の怪物。ナインテイルフォックス・ドーパント…東北
至子。倒したホワイトアウト以外のミュージアムの幹部と首魁が勢
ぞろいだ。幹部三人が私たちを守る様に並び立ち、その前方で率いる
様にナインテイルフォックス・ドーパントが立つ。

「仮面ライダー。この亡霊共の始末はこちらが受け持ちますわ。大事
な水都に手を出すなど許せませんので」

「誰が任せてたまりますか。T2メモリを奪って貴方の目的の糧にし
たいだけでしよう、貴方にとつて水都はどうでもいいはずだ！東北
外道！」
ソトミチ

「なんだ。わかってるじゃないですの。引っ込んでおきなさいな」

そう言つて刃物を展開した九本の尻尾を伸ばし、丁寧に幹部陣や私
達を避けながらCOEFONTに攻撃、同時にヒート・ルナ・メタル・
トリガーのドーパントを切り刻み、圧倒するナインテイルフォック
ス・ドーパント。私たち相手の時は遊んでいたと確信したぐらいに、
あまりにも圧倒的すぎる。

「こいつは大物が出てきたな……だが対策していないと思わないこと
だ、ミュージアム」

するとルナ・ドーパントの変身を解いて、取り出したタブレットの
様な端末に何やら打ち込んで不敵な笑みを浮かべるアベルニ。す
ると圧倒されるだけだった他三体の動きが変わる。トリガー・ドーパ
ントの弾丸が次々と刃を撃って弾き飛ばし、ヒート・ドーパントの炎
を纏った蹴りが蹴り飛ばし、メタル・ドーパントの鉄棒が尻尾を巻き
取るようにして殴り飛ばす。あの動きに、対応してきた…!?

「脳のリソースを動体視力に回した。自我すらなくなっただろうが、
一時的なものだ。対応できない動きなら演算全てを宛がって、見てか
ら対応すればいい。まあ俺はできないんだけどね」

「ぐっ、私の演算能力を超えてくるなど面倒な……！」

「至子さま！」

「加勢するのだ！」

「助太刀します！」

「……」

ヒート・ドーパントに守ってもらいながら首を竦めるアベルーニに妙に引つかかる悪態を吐くニンテイルフォックス・ドーパントに加勢する様に、シャーク・エクスタシー・アルテミスがそれぞれメタル・ヒート・トリガーを攻撃するもそれすら対応している。つまり今、CLEARの三人は自我を失う代わりにニンテイルフォックス・ドーパントの強大な力に対抗する術を得たと……あの終始楽しげだったブロッサすら黙々と機械的に対処している姿は不気味にも程がある。クローンとはいえ、人を何だと思っているんだあのマッドサイエンティスト……！

『ゆかりさん、何はともあれ今です！キリエ・T・ノーマンを助けるなら今しかありません！思うところはありますが、ここは潰し合わせた方が得策です！』

「……そうですね、行きましょう」

星香さんは水都好きの同士みたいなものだが、きりたんの言う通り潰し合いさせた方が得だしキリエさんも助けなければならぬ。こつそりとその場を移動しようとするが、金色の触腕に阻まれる。アベルーニが再変身したらしいルナ・ドーパントだ。

「おっと、キリエも出来そこないとはいえ運命の子。今回の計画には必要だ、リアルは裏切られた怒りから殺そうとしてたけどね。東北記理子の居場所も吐いてくれると嬉しいのだけど」

「誰が……！」

「俺が言うのもなんだけど、ファンング以外勝ち目ないと思うよっ。」

そう言つて伸ばしてくる触腕に拳を叩き込むが、まるでゴムを殴つたかの様に跳ね返る。チョップもキックも跳ね返り、四方八方から伸びてくる触腕のラツシュで叩きのめされる。強い…CLEARの様な異常性はないのに…！

「物事は計算さ。ルナの幻想的な力と俺の頭脳は相性がいいらしくてね。あのナインテイルフォックス・ドーパントには負けるけどね」
「ぐっ…！」

そのまま他のメモリを手に取りろうとした腕を弾かれ、そのまま再び拘束され、コンクリートの地面に頭から叩きつけられて変身が解除される。不味い、意識が…。

「結月ゆかり。君の遺伝子は優秀だ。CLEAR量産のためにもぜひとも解剖したいな…！」

「この、変態ですか…ぐあああつ?!」

「結月ゆかり…！」

触腕で締め上げられ、無理やり意識が覚醒されて悲鳴が漏れる。それでシャーク・ドーパント…星香さんがこちらに気付いたようだが、メタル・ドーパントに邪魔されて来れないらしい。

「ウララも喜ぶ。彼女がオリジナルになる日も近いぞ…！」
「くっ…！」

その時だった。空から超高速で何かが飛来、私を捕らえている触腕を斬り裂いて解放するとそれ…エクストリームメモリから粒子化されたきりたんが実体化、私に手を差し伸べてきたのでそれを手に取り立ち上がる。

「まったく、奴等が狙っていると言うのに貴方って言う子は…」

「ゆかりさんを失ったら意味がありません。全員倒して、切り抜ける」

《ファング！》

「それしありませんね」

《ジョーカー！》

その手に変形しながら飛び乗ったファングメモリが握られ、私もジョーカーメモリを鳴らして二人の腕でWを描く様に構える。

「二変身！」

《ファング！ジョーカー！》

《アームファング》

そしてきりたんがファングジョーカーに変身、アームセイバーを展開して伸びてくる触腕を斬り裂きながら突撃、獣の様に飛びかかってその肩にアームファングを突き刺し、胴体を蹴って宙返りして着地するとルナ・ドーパントは肩口から火花を散らしながらフラフラと後退する。

「ぐああああ!?!」

「貴方の言う通り、ファングジョーカーが一番相性がいいようですね！」

《シヨルダーファング》

不意打ちでもしようとしたのか横から伸びてくる触腕に野生の勘で気付き、シヨルダーセイバーで斬り裂きながら投擲するきりたん。幾重にも計算された複雑なゴムの様に反動で蜘蛛の巣の様な軌道を描く変幻自在な触腕を斬り捨てるシヨルダーセイバーに守られながら姿勢を低くして突撃、ミドルキックを叩き込んでルナ・ドーパントを蹴り飛ばす。

《ジョーカー！マキシマムドライブ》
『フアングバイシクル！』

そして左足に紫色のエネルギーを溜め、クルクルクルと回転してきたシオルダーセイバーをオーバーヘッドキック。紫色の炎を纏わせてルナ・ドーパント目掛けて蹴り飛ばし、胴体を貫いて爆散させた。

「これが、ダブルの力……計算を間違えた……」

ルナメモリが排出されながら崩れ落ちるアベルーニを尻目に、トリガー・ドーパントがいた方向にキリエさんを捜すべく跳躍する私達。

《ロケット！マキシマムドライブ！》
『ぐああああ!?!』

次の瞬間、炎を噴いて飛んで来たミサイルが何かに撃墜され、工場内に落ちる私達。その入り口から現れたのは、白い体に黄色い複眼、黒いマントの仮面ライダーを名乗る悪魔。

「よう。私の兄が世話になったようだね？」

「アリアル……」

「仮面ライダーエターナルと呼んでくれ」

アリアル……仮面ライダーエターナル。その手にZのメモリを取り出してベルトのマキシマムスロットに装填する。

《ゾーン！マキシمامドライブ！》

「そうだ、受け取れ。迷子のお届けだ」

「ついなさん!？」

『リリイ!？』

そう言つてエターナルが持つてたらしいZ：ゾーンのマキシمامドライブで目の前に飛ばされてきたのは、ボロボロのついなさんとリリイ。歩歌路町方面のメモリを回収していたはず…。

「…悪い、ゆかり…きりたん。しくじったわ…」

「メモリは手に入れたんだが、それを拠点に置いてこつちに向かつているときに出くわして…気を付けろ、ホワイトアウトより強いぞ」

《アームフアング》

意識をなんとか保ちながらそう言つてくる二人を守る様にアームセイバーを展開して構えると、エターナルは驚きのことをしてきた。なんと、変身を解いたのだ。

「…なんのつもりですか？」

「エターナルを使うまでもないということさ。ナイフ一本で十分だ」

「後悔しないでくださいよ…ゆかりさん、相手は不死身のゾンビです。生身だろうと…」

『ええ、覚悟はできてます…!』

「ゾンビとはいただけいな。ネクロオーバー、NEVERと呼んでくれ」

先手必勝と言わんばかりに野獣のような動きで斬りかかる私達。しかしアームセイバーの一撃をナイフを振り上げて弾き飛ばし、左手による拳もナイフを投げて左手に持ち替えた右手で受け止められ、引つ張られて膝蹴りを叩き込まれる。

「がつ!?…このお!」

「死神のパーティータイムだ」

アームセイバーを振り回すが、全てナイフ一本で捌かれていく。右手と左手を巧みに持ち替え、フアングジョーカーの斬撃をすました顔で斬り弾いて行くアリアルは掌底を受けてよろめいて後退する。

『そんな、手も足も出ない…!』

「そんなことがあつてたまるもんか…!」

《フアング!マキシマムドライブ!》

焦りで闘争本能が刺激されているらしいいきりたんが右手で荒々しくタクティカルホーンを三回弾き、跳躍して回転しながら急降下する。合わせるしかないか…!

『『フアングストライザー!』』

《エターナル!》

直撃。しかし次の瞬間大きく弾かれて吹き飛ばされる私達。直前に変身したのは分かったが、なにが…?

《クイーン!マキシマムドライブ!》

「惜しかったな。もう少しでその牙が届いたかもしれないが、女王の守りは碎けない」

…クイーンメモリのマキシマムドライブで守っていたのか。反則だそれは…。

「さあ、地獄を楽しみな」

第六十九話：A t o Z フォーエバー／永遠の鎮魂歌

「さあ、地獄を楽しみな」

「ぐああああ!？」

手にしたナイフを振り下ろした、ただの一撃で工場の外まで吹き飛ばされるダブル ファングジョーカー。ファングジョーカーの反射神経を逆に利用してフェイントを織り交ぜた攻撃で叩きのめされたきりたんの身体はもう限界を迎えていて、変身が強制解除されて地面に転がる。

「柵から牡丹餅ですわ!」

「させるか!」

それを見たナインテイルフォックス・ドーパントがCOEFFONTを相手しながら九尾のうち一本できりたんを回収しようとするが、持ち前の頑強さである程度回復していたついなさんとリリイがエンジンブレードと蹴りで弾き返す。

「COEFFONTだけで十分なのにミュージアムの幹部も首魁も勢揃いとか悪夢かこれは」

「生憎と現実だ。おいきりたん、起きれるか?」

「な、なんとか…」

「きりたん!こうなったらエクストリームです!」

工場の中で意識を飛ばしていた私もそこに合流。前門にCOEFFONTのCLEARが変身したドーパント三体と、それと敵対しているがきりたんがいる以上完全にこちらの味方ではないミュージアムの幹部三人と首魁、後門にエターナル。私とついなさん、きりたんとはリリイで背中合わせにメモリを構える。

「COEFONTはミュージアムの幹部に任せましょう。ついなさんとリリイはインテイルフォックスの相手を」

《サイクロン！》

《ジョーカー！》

《アクセル！アップグレード！》

《ゴールド！》《ルーラー！》

「変（…）身！」「

そしてドライバーに装填。きりたんは飛来したエクストリームメモリに吸い込まれ、ついなさんはグリップを回し、私とリリイはドライバーを展開する。

《サイクロン！ジョーカー！》《エクストリーム！》

《ブースター！》

《ゴールドンルーラー！》

そして私ときりたんはダブル サイクロンジョーカーエクストリームに、ついなさんはアクセルブースターに、リリイはエルドラゴゴールドンルーラーに、それぞれの最強形態へと変身を果たした。

「「「さあ」」」

「お前たちの罪を数えろ！」

「振り切るで！」

「派手に行こうか！」

それぞれの決め台詞を放って私達はエターナルに、エルドラゴはインテイルフォックス・ドーパントに突撃、アクセルは空に舞い上がる。

「検索完了、貴方の戦い方はロシアの格闘術「システム」がベース、動きはある程度決まっています！」

「そいつが地球の記憶の力か…！」

振るわれるナイフをビツカーシールドで受け止め、プリズムソードで斬り返す。いける、エクストリームなら…！

「九本の尻尾が強みなんだろ？縛られたらどうしようもないだろ…！」

「それがあの女が対わたくし用に作った仮面ライダーですわね…！」

ルーラチエインで九本の尻尾を縛り上げて空中に固定し、ルーラチエインで殴りつけるのを手の甲で受け止めるナインテイルフォックス・ドーパント。確かにエルドラゴはナインテイルフォックスと相性がいいかもしれない。月読アイはそのためにエルドラゴを作ったのか…。しかし八尾を斬り離して分身に変化、残りの一尾を無理やり拘束から引っこ抜いたナインテイルならぬフォックス・ドーパント九体の攻撃を受けてしまっている。やはりナインテイルフォックスは一筋縄じゃいかないようだ。

「厄介な奴やな！」

超音速で飛んでエルドラゴを援護するアクセル。しかし数の差は埋めきれず、逆に圧倒されている。やはりナインテイルフォックス・ドーパントは強すぎる。

「よそ見をしている暇があるのかい？」

《オーシャン！マキシマムドライブ！》

《アイスエイジ！マキシマムドライブ！》

「ぐっ…!?!」

するとオーシャンメモリを腰のマキシマムスロットに装填したエターナルの水を纏った回し蹴りで水流を浴びせられ、そこにすかさず

アイスエイジメモリをマキシマムスロットに装填し冷気を纏ったナイフを振り上げて、地面を沿うように冷気を放ってプリズムソードとビッカーシールドを持った手ごと四肢を凍らされて身動きが取れなくなる。しまった、そんなことまで…!?

「メモリの組み合わせは無量大だ」

《バイオレンス！マキシマムドライブ！》

そこにバイオレンスメモリを腰のマキシマムスロットに装填したエターナルがナイフを持ってない左腕で地面を殴りつけてそこから衝撃波が伝導して凍り付いた私達に襲いかかって氷が砕け散り、その衝撃で天高く打ち上げられ、そこに跳躍してきたエターナルに掴まれて頭上のクレーン車のアーム？部分に乗せられる。

「不安定な足場で十分なパフォーマンスができるかな？」

そのままダメージの響く体でバランスを取ろうとしていたところにナイフで連続で斬り裂かれ、咄嗟にプリズムソードを振るうも黒いマントで防がれて弾かれ、首を掴まれクレーン車のアームの壁面に何度も叩きつけられ、放り投げられて空中に投げ出される。

「うわああああ!!」

「仮面ライダー!?!」

「ゆかり！きりたん！」

「ちいー」

ちょうどシャーク・ドーパントとアクセルの間のドラム缶の山に落ちた私達はドラム缶を散らばらせながら崩れ落ちる。舞い降りてきたエターナルを見て、エルドラゴを一蹴していたナインテイルフォックス・ドーパントが九尾を本体に戻して触手の様に九つを同時に伸ばして空中のエターナルを攻撃するも、エターナルはマントの裾を掴ん

で翻して全ての攻撃を防御。私達仮面ライダーとミュージアム、C O E F O N T の間にエターナルが着地、ナイフをクルクル回すとロストドライバーから外したエターナルメモリをナイフのマキシマムスロットに装填した。

「さあ、地獄を楽しみな」

《エターナル！マキシマムドライブ！》

すると仮面ライダー三人とミュージアム全員の全身に青い稲妻が走り、身動きが取れなくなる私達。こ、これは一体…!?

「終わりだ、過去の組織と、仮面ライダー」

エターナルのバッドサインと共にアクセル、ナインテイルフォックス・ドーパント、アルテミス・ドーパント、エルドラゴ、シャーク・ドーパント、エクスタシー・ドーパントと次々と変身が強制解除されてガイアメモリが転がり、崩れ落ちて行く。

「負け…るかあ！」

《エクストリーム！マキシマムドライブ！》

動けない体に鞭打ってエクストリームメモリを開閉、マキシマムドライブのエネルギーでなんとか抗う私達を見て「ハッ」と鼻で笑ったエターナルは右足に蒼い炎を灯してその場で宙返り、蒼い炎が渦を巻いて跳び回し蹴りを叩き込んできた。

「駄目押しだ。エターナルレクイエム…！」

「ぐあああああっ!?!」

その直撃を受けた私たちは変身が強制解除され、きりたんと共にその場に崩れ落ちる。信じられない様にナインテイルフォックスのメ

モリのボタンを何度も押す東北至子の姿が崩れ落ちる瞬間に見えた。

「エターナルのマキシマムドライブは旧型のガイアメモリの機能を半永久的に完全に停止する。仮面ライダーだろうがミュージアムだろうとだ。もう二度とお前たちは変身できない。これで決まりだ」

「…やるじゃありませんの、死体と偽物の分際で…」

「その死体と偽物に負けたんだ、お前たちは。旧組織の首魁、東北至子。お前の力は確かに脅威だが、使えなければ何も怖くないさ」

そう言いながら度重なるダメージからか気絶したきりたんを担ぎ上げるエターナルの足を咄嗟に右手で掴む。行かせない、きりたんを連れて行かせたりしない…！

「しつこいぞ、お前たちは負けたんだ！結月ゆかり！」

「があ!？」

トリガー・ドーパントの右腕の銃身で背中を殴打され、緩んだ手をエターナルに引き剥がされる。見ればエンジンブレードを手に斬りかかろうとしていたついなさんもメタル・ドーパントに薙ぎ払われ、リリイを炎を纏った脚で蹴り飛ばしたヒート・ドーパントがそのままアベルーニを担いでエターナルと共にどこかに行こうとしていた。

「ああそうだ、君達の新しい拠点は何処にあるのかな？」

「……」

「だんまりか。しょうがない、地道に探すとしよう。それなら東北記理子をいただければ君達に用はない。キリエも回収しろ。制圧を開始する」

「了解」

「待、てえ……！」

去っていくCOEFONTに力なく手を伸ばす、が届かない。止ん

でいた雨がまた降り始める。力尽きた私とついなさんとリリイはダメージから倒れ、東北至子と星香さんは悔しそうに歯を噛みしめ、純子さんと蛇門は最愛の家族を目の前で奪われた故か絶望していた。私達は……水都は、外からの侵略者に完敗した。

第七十話：A t o Zフォーエバー／水都タワーの惨劇

完全敗北し、ホワイトアウトの時と同じ…いや、あの時と違い漂白されていないもののメモリが無力化された状態で力なく倒れた私達の元に近づいてくる大型車両があった。リボルギャリーだ。

「見つけたー！いったいなにが、きりたんは……!?!」

リボルギャリーから降りてきたのは、月読アイ。降りるなりとある一人に視線を向けて驚愕に目を見開く。それは、気を失っている東北至子だった。

「外道そとみちイ……!」

「待っ……!」

憎悪に満ちた表情と共に気を失っている東北至子の首に小さな手をかける月読アイ。そのままギリギリと首を握りしめようとしたので何とか起きて止めようとするが、それはある声に止められる。

「至子姉様に、なにしているの…?」

「……純、子」

目を覚ました純子さんの信じられないものでも見ているような視線に、首を絞める手が止まる。そして同時に東北至子の寝顔を見て、目を見開いて手を放しフラフラと後退する月読アイ。その目には涙が滲えられていた。

「…だめだ、わたしに、至子までこころせない……なんで、そんなおとこをれいばいしたの……!」

「もしかして、母様…?」

「…!」

純子さんの問いかけに応えることなく、取り出したスタックフォンを操作し、リボルギヤリーで私とついなさんとリリイを回収しその場を去る月読アイ。意識のあった私が見たのは、リボルギヤリー内部でまるで子供の様に泣きじやくる月読アイの姿だった。

ゆかりたちがCOEFONTに敗れたその日の午後、水都タワーは花火大会というイベントの真っ最中だった。大人も子供も多くが集まり、水車を模した水都のマスコットキャラクターである「すいとくん」が屋内ステージに上がってショーを行っている、そんな最中だった。

ターン

気の抜けるような乾いた破裂音に人々が振り向くと、そこには少女四人と男一人という奇妙な集団が。そのうちの一人で中心に立つ、ハンドガンを手にしたリアルがそれを突きつける。

「やあ。お楽しみのところ悪いが、ここは我々が占拠させてもらうよ」「う、うわあああああ!?!」

不敵な笑みを浮かべ、ターンと乾いた破裂音を立てて目の前の床に着弾した弾丸にパニックになった男を中心に、蜘蛛の子を散らす様に逃げ出す人々。その波に逆らうように十数人の警備員がやってきて警棒を構えるも、リアルの不敵な笑みは崩れない。

「仲間をやったのはお前たちか！好きにできると思うなよ！」
「怖気付かずに立ち向かってきたのは評価しよう」

十数人の警備員が取り囲み、いっせいに制圧しにかかるも、アリアルが手を振るうと大きな袋を担いだアベルーニ以外の領いた面々が各々構えて迎撃にかかる。

「GAME START…！」

ハンドガンを手にしたウララが、足払いで転倒させた警備員の頭に銃口を突き付け脳幹を撃ち抜き、それに怯む他の警備員に次々と狙い撃つていく。

「お前たちじゃ全然、物足りないの！」

鉄の棒を握ったブロッサが、先端を握ったそれをグルングルンと振り回して警備員を薙ぎ倒し、両手で持ち替えると突きを繰り出し警備員の腹をぶち抜いて天井にぶん投げて叩き付け、落下してきたそれをまるで野球ボールかのように打って他の警備員を吹き飛ばす。

「姉さんに敵意を向けたな？」

殺意に満ちた目のミリアルが、スカートであるにも関わらず宙返りしてスパッツに包まれた足を全開にして警備員の首に組み付いて締め上げるとそのままグルングルンと回転して頭から床に叩き付け、器用にもその場で逆立ちして竜巻の如く回転、制圧しようと囲んできていた警備員たちを蹴りつけ弾き飛ばす。

「ただの人間じゃ相手になるわけがないさ。どうしてそれがわからな
いんだらうねえ…！」

「油断するな、兄さん。ドーパントがいる街で警備員をやっている連

中だ、根性はある」

きりたんとキリエ、何かの機材を担いだルナ・マスカレイド三体を率いながら先に進もうとするアベルーニを押さえこもうとした警備員を、容赦なく発砲して頭部を撃ち抜いたアリアルがナイフを手に、突撃してくる警備員の持つ警棒を容易く斬り裂き、呆然としている警備員たちを拳の一撃で首を折り心臓を潰して冷酷な目を向ける。その目には、人を殺したことなど何も感じていなかった。

「諸君。準備はいいな？始めよう。我々のビギンズナイトを。この日が、この街にとって新たな門出となる」

——「やあ。アリアルさんだ」

声が聞こえる。聞くのも恐ろしい、残酷な真実を告げてきた死神の
声が。

——「ミリアルの能力を応用して君の心に語りかけている。あかり。君は私の姉妹で我々の同胞だ。共に来い。如月追儼とリリイ金堂が回収したT2メモリを持って継星探偵事務所まで来てくれ。……継星^{きずな}か、いい名前だ。CLEARである君は結月ゆかりたちにとっては敵も同然だ。受け入れられるのは私達だけだ。同胞としての君との絆を信じているよ」

そんな勝手にも程がある甘言は、私の心に溶けて行った。

「……………」

目を覚ますと、知らない部屋のダブルベッドの上で。同時に思い出す。キリエさんから伝えられた真実。私が人間ではなくクローンで、両親もお爺様もそのことを知っていて……私は、幼い頃に事故で亡くなった本当の「継星あかり」のDNAから生み出され代わりとして育てられたCLEARだということ、を……。

「……………はは、そうだ…私、人間じゃないんだ……………」

そうとは知らずに20年近くも……呑気に過ごしてきたのか。思い返してみれば運動もしてないのにすぐお腹が空いて、なのにくら食べても太らなくて、他の人より成長も遅くて、力も強くて……変なところだけじゃないか。

「…きりたんもこんな気持ちだったのかな」

東北記理子が既に死んでいたことを知らされた際のきりたんの顔は覚えている。多分、私も似た様な表情を浮かべたのだろう。…人間じゃない私が生きていていいのだろうか。

——「聞こえてるかは知りませんがついなさんからの伝言です。「あいつはあいつや、うちはあかりの元気に助けられとる」……私もそうですよ、あかりさん。貴方の屈託のない笑顔に元気づけられます。…いつてきますね」

そんな何時聞いたのかもわからないきりたんの声がフラッシュバックする。…寝ているときに聞いて、脳が覚えてたのかな……。

「…とりあえず現状把握しよう」

訳も分からず部屋を出て階段を降りると、何故か事務所そっくりの部屋で、ゆかりさんといいなさんとリリイさんがお通夜もかくやというぐらいに沈んでいた。もう夜らしく照明もつけずに月明かりに照らされている。

「ゆかり、さん…?」

「…あかり。起きましたか」

「きりたんと、キリエさんは…?」

この場にはいない人たちの名前を呼ぶと、苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべるゆかりさん。その顔に、察しはついた。

「…攫われたんですね」

「面目ない…完全敗北です、メモリも機能停止させられて変身まで封じられてしまいました…」

「そんな……」

「リアルは怪物や。今まで相手してきた誰よりも強かった」

「NEVERとCLEARの力も予想以上だった。あそこまで化け物じみているとは……」

「リリイ!」

「あ、いや、あかりのことを言ってるわけじゃないぞ?」

CLEARが化け物呼ばわりされて私の表情が強張ったのに気付いたのだろう、ゆかりさんの注意する声にリリイさんがしどろもどろになって言い訳する。

「いいんですよ、ゆかりさん。私、人間じゃないCLEAR…化け物なのは事実ですから」

「あかり…そんなことは!」

するとそのタイミングでかかってくる電話。私に何か言おうとして、呼び出し音に我関せずと言った様子でスタックフォンを開くゆかりさん。

「ヒメさんですか？今は忙しくてですね……」

《「大変大変！テレビつけて！」》

「テレビ？」

こちらにまで聞こえて来たぐらい大きな声で言われるままテレビをつけるゆかりさん。地方局「水都テレビ」のチャンネルが映し出されるも、そこには見覚えのある人物たちが映っていた。

《「やあ。我々はCOEFFONT。このたび水都タワーをジャックさせていただいた、この水都を浄化する者だ」》

赤・青・緑・金・銀：キリエさんだったはずのサイクロン・ドーナントも含めた色とりどりのドーナント五体を引き連れた件の白づくめの少女、アリアルがにこやかに手を振ってそこに映っていた。

第七十一話：A to Zフォーエバー／切札をその手に

《「やあ。我々はCOEFONT。このたび水都タワーをジャックさせていただいた、この水都を浄化する者だ。…変身」《エターナル！》》

テレビの向こうでアリアルがそう言って仮面ライダーエターナルに変身、マントを翻してルナ・ヒート・サイクロン・メタル・トリガーのドーパントの中心で両腕を広げる。

《「さて、水都の全市民に次ぐ。私はアリアル・ボルコフ。またの名を、仮面ライダーエターナル。この水都を守護する新たな仮面ライダーだ」》

「水都の人間が名付けてくれたヒーローの名を名乗るなんて…！」

「来たばかりならともかく今ならわかる、仮面ライダーはこの街の希望そのものや…！」

「俺が名乗るのにどれぐらい苦労してると思ってるんだアイツ…！」

「リレイさんだけなんか違いますか？」

仮面ライダーを勝手に名乗ったことに憤っている中でテレビの向こうの演説は続く。

《「我々は水都を浄化…もとい、ガイアメモリに命運を握られた哀れな箱庭の住人を解放する。我々はこのとおり、最新型のガイアメモリと、水都タワーに設置した光線兵器「エクスピッカー」を有している。そして、以前の仮面ライダーは全員無力化。旧型のガイアメモリは全て使えなくさせてもらった。故に我々に抵抗できる者は存在しない。警察、軍などの武力も干渉できない、返り討ちに遭うだけだ。我々COEFONTはこの水都タワーを拠点に、水都を楽園に変えるところに宣言する」》

「水都をどうするつもりなんですか…！」

「楽園と言うとったな。ろくなもんじゃなさそうや」

「エクスピッカーとやらも気になるな」

名前からしてプリズムビッカーを思い出すが関係あるのだろうか……こういうのに詳しくそうな月読アイは生憎とどこかに雲隠れしてしまった。よほど自身の娘に手を出そうとしていたのが響いたのだろうか。

《「ところで、今言った最新型ガイアメモリなのが数本が不足している。この街のどこかに落ちてはいるはずだ。それを我々に持って来たものには十億出そう。我々の仲間として迎え入れることも検討しようじゃないか》」

「…そうだ、T2ガイアメモリ…！」

ついなさんとリリイが回収したものをここに一度置いて来たと言っていた。ならば…！」

「ああ。BのボードとPのパペティアーや」

「そのこの机の上に置いてたはずだが…ちやんとあるな」

私の机、もといおやつさんの机そっくりなタイプライターが置かれている机の上を見やると二本のガイアメモリが無造作に置かれていた。

「詳細が分からなかった残るBとFとJとPとLとMとZ、残り7本のうちF…フアングとL…ルナとM…メタル、そしてZのゾーンは敵の手に渡りました。ルナは倒せはしましたが回収できなかった。…さらにこちらが有していたCのサイクロン、Hのヒート、Tのトリガーも奪われてしまいました」

「トリガーメモリはボードとパペティアーと一緒にここに置いておくべきやったな…エターナルに負けた時に奪われてしまうた。面目ない」

「あの感じ、キリエの奴は多分心が折れたな。抵抗の素振りが見れなかった。サイクロン・ドーパントも敵に回ったと考えてよさそうだ」
「…頼りにしていた私達がああも完全に敗北したのです、そうなったとしてもおかしくないですね…」

正直残念だが、元々COEFONTを裏切ってこちらについてたのだ。また寝返っていてもおかしくない。

「幸いなことに居場所は分かった。だがこっちの戦力はエンジンメモリが使えないエンジンブレードと各バイク、そしてリボルギヤリーとガンナーAくらいや。ギジメモリも使えなくなつてガジエツトも戦力に使えん」

「二応ハイドープの力は残つてるみたいだがな。まあ俺は頑丈なことしか取り柄が無いが」

「でも、T2ガイアメモリは形状からして恐らく私達のドライバーと互換性がある筈です！これを使えば反撃が……？」

そう言いながらも一度机に視線を向けて、思わず首をかしげる。忽然とメモリが二本とも消えていた。キョロキョロと辺りを見渡すと、一人いないことに気付いた。

「あれ？あかりはどこにいきました？」

「さつき花摘むつて言つて廊下に出てつたぞ」

「なんや、どうしたんや？」

…そんな、まさか。でも、あの自虐的な感じ……COEFONTからなにか接触があったとしたら、まさか…同時に聞こえるエンジン音。聞きなれたものだ。

「T2ガイアメモリが無くなりました！それに同時にあかりも……！もしやとは思いますが」

「くそっ！…オレのせいだ！」

私が言い終わる前に、リリイが舌打ちして部屋を飛び出していくのを、ついなさんと共に追いかける。すると塀の中に置いていたハードボイルダーがなくなっており、リリイがミダスホイラーで追いかけていったところだった。

「ハードボイルダーを…！」

「ちい！出遅れた！もう塀の向こうで見えへんわ！おい、遠隔操作できひんのか!？」

「あかりが運転しているときにそんなことしたら横転してしまいます！ですが居場所なら…スパイダーショックの発信機をあかりに万が一誘拐された時のためにと付けていたので、それで」

まさかこんな形で使うことになるとは思わなかったが。

「ならうちのバイクに乗りいや！それで、どこに向かっているんや!？」

「えっと、この方向は…事務所?」

そんなところにメモリを持っていくなんて、敵にわざわざ餌を持っていくようなものです…!ついなさんのディアブロツサの後部座席に乗ってついなさんの運転で走り出す。あかり…リリイ、どうか間に合って…!

楽園。それは恐らく、COEFONTと普通の人間が手を取り合い、笑い合える世界。そんな世界になれば、私は……そう考えた瞬間、ゆかりさんたちを裏切ることを心に決めてしまった。トイレに行くふりをしてメモリを盗み、ハードボイルダーにも勝手に乗って事務所までやって来ていた。……これで私も、ゆかりさん達の敵、だなあ。

「あ、本当に来た。待ちくたびれたの、継星あかり」
「ブロッサ、さん」

半壊した事務所跡にいたのは、気を失っているミコトさんとヒメさんを傍らに転がしている私と瓜二つのタンクトップの人物。ブロッサと呼ばれていた、私の同型機……だったはずだ。私は持って来たメモリ二本をスカートから取り出して差し出す。

「これ……メモリです」

「ありがとうなの。これで、残り一本……ふへへっ、ここで拾ったけど隠して行方不明ということにしておいたXのメモリと合わせたらこれで三本なの、お手柄なの」

「あの……私、姉妹に憧れていたから貴方に会えて嬉し……」

「じゃあ、プロフェッサー・アベルーニに継星あかりはメモリさえもらえば用済みって言われてるから、消すの」

瞬間。私は腹部を殴られて、その場に蹲っていた。あまりにも重い衝撃と、突然のことで目を白黒させながら顔を上げると、にやにやと笑っている自分と瓜二つの顔と目が遭った。

「がはっ……そんな、私は仲間じゃないんですか……!?!」

「私達はリアルに望まれて生まれてきたの。貴女みたいな初期型とはそもそも存在意義が違うの！大丈夫、貴女は仮面ライダーたちを裏切ったから殺されたってことにするの！あの冷酷なリリイ金堂ならやりかねないの！プロフェッサー・アベルーニの計画は完璧なの！」

《メタル!》

メタル・ドーパントに変身しながら語られたその言葉に、絶望に目を見開く。それじゃあ、私は……なんのために……!

「そんな、じゃあ、私に、仲間なんて……」

「蘇生も出来ない初期型CLEARの生き残りはお前ただ一人なの! わかったら大人しく死ぬの!」

嬉々とするブロッサの両手で握られ、勢いよく振り下ろされる鉄の棒が頭を捉えんとする。あ、駄目だ。これ、死ぬ。そう確信した私の前に、黄金の輝きが割り込んできた。

「させるかあ!」

「えっ……」

金色の頭から赤い液体が溢れて床を濡らす。私を庇って鉄の棒の一撃を頭で受け止めたのは、リリイさんだった。

「リリイさん!」

「リリイ金堂…!」

「ぐはっ……こいつに仲間はいない、だど? ふざけんじゃねえ!」

「なのお!」

鉄の棒を握り、引き寄せて渾身の前蹴りを叩き込んでメタル・ドーパントを蹴り飛ばしたリリイさんだったが、力尽きたのかその場に崩れ落ちるのを慌てて抱える。思わず涙が溢れてきた。

「なんで、なんで……」

「仲間を守るのは当然だろ……悪い、オレの言葉で不安にさせちまった。無神経だった。許してくれ」

「そんなの、そんなの……！許してほしいのは私の方で……！」
「誰もお前を非難したりしないさ。仲間だろ。……こいつは、お守りだ。お前に託す、ぞ……」
「リリイさん……！」

そう言つて私にダブルドライバーNEOを手渡し、崩れ落ちるリリイさんに呼びかける。ダメだ、このままじゃ……最悪なことは続く。メタル・ドーパントが復帰してきたのだ。

「痛いなの……お前が大人しく死なないからなの……同じ顔なのも不愉快なの……！」

「っ……！」

「それ以上は、させませんよ」

そこに、私とリリイさんを庇うように立つ二人がいた。帽子を押さえて目元を隠したゆかりさんと、怒り心頭と言った様子をついなさんだった。

「…あかり！無事か！心配かけおつてからに！」

「ついなさん、ゆかりさん……！」

「邪魔する気なの、仮面ライダー……！いや、もう変身できないの。ただの探偵なの。なのに立ち向かってくるなんて馬鹿なの！」

「…お生憎と、キレました。ついなさん、ミコトさんとヒメさんを！」「任せときい！」

無謀にも突撃するゆかりさん。宙を舞って蹴りを叩き込むも、メタル・ドーパントはビクともせず弾き返し、鉄の棒を振るうのをゆかりさんは紙一重で回避していく。すごい、だけどジリ貧だ……。

「いくら怒ろうが、ただの人間がCLEARに勝てるわけがないの……！」

「いいえ。人間、怒りがあればどんな敵にも勝てます。私は怒っている。大事な後輩を騙し、仲間を傷つけられて、それを止められなかった私自身にも……!」

「だからどうしたの!」

鉄の棒のフルスイングを、避けようと後退したゆかりさんを追うように伸びて……いや、持つ部分を変えて殴り飛ばすメタル・ドーパント。殴り飛ばされたゆかりさんは奥のデスクに突っ込んで引っくり返る。

「私は馬鹿じゃないの!とどめなの!」

「…お生憎と、切札は常に私の所に来るようです。雨漏りの原因がこれとはね」

立ち上がったゆかりさんの手に握られていたのは、ジョーカーメモリ。…いや、端子の色が違う。T2のジョーカーメモリ!?

「ガレージでこれを取っておいて正解だった。きりたん、力を貸してください」

《ジョーカー!》

そしてゆかりさんが懐から取り出したのは、以前きりたんが仮面ライダーサイクロンに変身した際に使っていたロストドライバー。それを腰に取りつけ、ジョーカーメモリを鳴らしたゆかりさんは真っ直ぐメタル・ドーパントを睨みつけて口を開く。

「変身」

《ジョーカー!》

紫の風が吹き荒れ、納まったそこには黒一色のダブルが立っていた。

「ダブル…!? そんな、馬鹿なの!?」

「ダブルじゃありません。私は……仮面ライダー、ジョーカー。さあ、お前の罪を…数えろ」

第七十二話：A to Zフォーエバー／ジョーカーは二枚ある

きりたんがガレージに残していた、以前仮面ライダーサイクロンへの変身に用いたロストドライバー。そして、事務所の雨漏りしていた場所の床に突き刺さっていた、私と縁あるJージョーカーのT2ガイアメモリを用いて私が変身したのは、紫のラインが入った漆黒のダブルの様な仮面ライダー。

「私は……仮面ライダー、ジョーカー。さあ、お前の罪を…数えろ」
「罪なんて数えてたら傭兵なんてやってないの！」

メタル・ドーパントの振るうメタルシャフトの様な鉄の棒を右手で握って受け止め、左の拳をジャブの要領で叩き込む。すると鉄の棒を手放して刃のついたダンベルの様な武器を取り出して殴りつけてくるメタル・ドーパント。腕を蹴り上げて攻撃を逸らし、押しやって壁に叩き付け、何度も膝蹴りを腹部に叩き込んでから投げ飛ばす。

「…ゆかりさん、怒ってる…？」

「そらリリースがやられてあかりの不安まで利用されたからな。ハーフボイルドなアイツのことや、怒りを我慢できひんのやろ。そういうのを押さえるのはアイツの憧れるハードボイルドって奴なのになあ」

「…私の、ため……」

そんなあかりとついなさんの会話を背中に受けながら突進。拳を叩き込んでガレージへの隠し扉に叩きつける。ここでは気を失っているミコトさんとヒメさんたちまで危険が及ぶ、移動しなくては。そんな思いを込めて前蹴りを叩き込んでメタル・ドーパントをガレージの中に押しやると、階段を転がり落ちてリボルハンガーの前に落ちるメタル・ドーパントの前に着地、立ち上がったメタル・ドーパントと

同時に拳を振り抜き、クロスカウンターで殴り飛ばされた。

「ぐっ…!？」

「アハハハ！強いなの！もっと来い、なの！」

鉄の棒を生成して振り回してくるのを、立ち上がりつつバックステップで紙一重で回避。蹴り上げて放物線を描いて落ちてきた鉄の棒を手に取り、逆に振り回して胴体に火花を散らす。

「ウララの何倍も強いの！あいつのオリジナルとは思えないの！」

刃がついたダンベル状の武器を振るい、鉄の棒を弾き飛ばして斬りつけ、私の肩を掴んで何度も何度も胸部を斬りつけてくるメタル・ドーパント。そのまま放たれたアッパーカットで私は大きく吹き飛ばもりボルハンガーを蹴って反転、飛び回し蹴りを叩き込んでメタル・ドーパントを蹴り飛ばした。

「ぐっ…なんのおー！」

それでも立ち上がって殴りかかってくるメタル・ドーパントの攻撃を手の甲で捌き、次々と徒手空拳で攻撃を加えながら違和感に気付く。…妙に守っている部位がある？

「なんで、なんで攻撃が通じなくなってるの…!？」

「私は探偵です。人を観察するのが仕事です。貴方の癖もわかってきました…もう、貴方の攻撃は通じません！」

「無駄なの！私はCLEAR！いくら死のうと何度も蘇るの！今は勝てなくても、次は違う！次に負けてもその次がある！永遠に戦い続けてやるの！」

「…左側頭部を攻撃されてもですか？」

「っ!？」

指摘すると分かりやすく左側頭部を押さえて動揺するメタル・ドーパント。やっぱりか、頭部の右側への攻撃は避けずに受けるのに左への攻撃だけわかりやすく防御していた。ブロッサは嘘を吐けない性格なのだろう。

「頭に埋め込まれたチップのことは知っていました。どこにあるのがわからなかった、馬鹿正直な貴方のおかげでわかりました。そこが急所だ。データを送られる前にチップを破壊すれば貴方達C L E A Rはもう、復活できない。違いますか？」

「だったら、どうしたっていうの！」

出現させた鉄棒と刃のついたダンベル型の武器を合体させハンマーにして振り回し、勢いづけ振り下ろして攻撃してくるメタル・ドーパントの一撃をバックステップで回避。ロストドライバーから引き抜いたジョーカーメモ리를腰のマキシマムスロットに装填し、叩くと右拳を引き絞る。

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

「や、やめ……来るなああああ！」

「ライダーパンチ……！」

そして跳躍、我武者羅に殴ってきたメタル・ドーパントの拳を顔を逸らして避けながら、紫の炎を灯した右拳を左側頭部に叩き込むと吹き飛ばされ、爆発。床に転がったブロッサからメモリが排出される。

「や、やだ……私はまだ、死にたくな……」

「…貴方が今まで奪ってきた命にあの世で詫びなさい。…身勝手に作られ心が歪んだ貴方の命は私が背負います」

助けを求める様に手を伸ばし、崩れ落ちて複数のT2メモリを残し

て消滅するブロツサ。その頭部があつた場所に、砕け散つたチップの残骸が転がっていた。…私の推理が正しければこれでもう、復活はできない筈。

「…奪われたバードにパペティアー…それにメタルと…これは、エクストリーム？ブロツサが拾っていたんですね…」

ブロツサの跡に落ちていたメモリを拾い上げ、ガレージから事務所に戻る。帽子掛けに偽装してある扉を潜つた瞬間、頭部に衝撃。出口にて突きつけられていた銃口から放たれた弾丸を受けた私は変身が解けて、メモリを手放しながら床を転がる。

「があっ…!?!」

「ようやくお前に一撃を与えられたな、オリジナル」

「悲願が叶ってよかったですね、ウララ」

頭部に受けた衝撃にもだえながら確認すると、トリガー・ドーパントとヒート・ドーパントが事務所にいて。焦げてうつぶせで倒れているついなさんを踏みつけたヒート・ドーパントが紅い炎を灯した指を突き付けたあかりは動けないでいて。私にもトリガー・ドーパントの右腕のライフルの銃口が突きつけられる。

「ゆ、ゆかりさん……ごめんなさい、ついなさんまで私のせいでは…」
「継星あかりを責めないでやってください。私の精神干渉で操つて如月追儼を攻撃させただけなので。ブロツサは馬鹿だから兄さんの命令を鵜呑みにしましたが、貴女は姉さんのお気に入り。殺しはしないのでご安心を。さて、メモリは回収させてもらいますよ」

「ブロツサが倒され、最後のメモリまで見つけてくれるとは誤算だったかな？」

…精神干渉、リリーの言っていた、キクさんと西友を争わせていた

誰かとはミリアルのことだったのか。油断した、ブロッサだけという
確証も何もなかったのに…！

「このメモリさえなければお前はもうただの人間だ。これで私が結月
ゆかりだ」

ジョーカーメモリを奪い取り、銃口を頭部に突きつけてくるトリ
ガー・ドーパント。くっ…どうすれば。

「……だ」

「ん？何か言いました？」

すると何かを呟いたあかりに、ヒート・ドーパントが首をかしげる。
次の瞬間、あかりはとんでもない怪力を持ってヒート・ドーパントを
突き飛ばして床に手を伸ばして何かをキャッチするとゴロゴロと転
がる。

「ぎゃあ!？」

「この…!？」

「させません!」

そんなあかりに銃口を向けようとしたトリガー・ドーパントにしが
みついて妨害。その間にあかりは、手にした二本のT2ガイアメモリ
を握りしめ、もう片方の手に取り出したダブルドライバーNEOを腰
に取りつけベルトにする。

「足手まといは、もういやだ!…リリイさん、私……戦います!」

《エクストリーム!》

《メタル!》

両手に一本ずつ持ったMとXのメモリのボタンを押して、ダブルド

ライダーNEOに装填したあかりは、両腕を交差して、勢いよく振り下ろすのと同時にダブルドライバーNEOを展開。まっすぐ前を向いて、その言葉を叫ぶ。

「変身！」

《メタルエクストリーム！》

するとガンガンガンと音を立てながら積み上がるようにして鋼のブロックに包まれ、罅割れて砕け散る様にしてその姿を変えるあかり。仮面ライダージョーカーとよく似ている銀色の姿に、胴体にX型の鉱石みたいな赤い装甲を身に付けて、触角でもあるXの文字が仮面に刻まれると背中に交差したメタルシャフト二本が伸びる。

「そんなこけおどしい！」

「待って、ウララ！」

変身したあかりに激昂し、ヒート・ドーパントの制止の声も聞かずに弾丸を撃ちながら突撃するトリガー・ドーパントの弾丸を、全て真正面から受け止め無傷のあかり。なんて防御力だ。

「はああ！」

「がああっ!？」

そのまま正拳突きが突撃してきたトリガー・ドーパントに炸裂して殴り飛ばし、あかりは深呼吸してから拳を突きつける。

「私はルクス、仮面ライダールクス！さあ、罪の重さに潰れる！」

第七十三話：A to Zフォーエバー／罪を数えて重さを知る

「はあああああ！」

仮面ライダールクス、つまりは仮面ライダーを名乗ったあかりは、その覚悟を示す様に勇猛果敢にヒート・ドーパントに殴りかかる。ヒート・ドーパントは腕を次々と振るって火球を飛ばして迎撃せんとするが、そのすべてを真正面から受け止めながら突撃するルクス。怯みもしないとはとんでもない防御力だ。

「このー！」

「無駄ですー！」

炎を纏って打ち上げる様に加速させた蹴りを叩き込むヒート・ドーパントだったが、X状の装甲で受け止めて背中に手をかけて引き抜いたメタルシャフトを打ち付けて地面に叩き付け、そのままゴルフでもするかの様にスイング。大の字に倒れたヒート・ドーパントを殴り飛ばして事務所の外に吹き飛ばすと追いかけてやろうとするルクス。

「こいつはどうだー！」

「ぐう!?」

すると背後に立ったトリガー・ドーパントが銃口をルクスの背中に突きつけて接射。爆発を起こして怯み、よろめくルクスに銃身をバツトの様に頭部に叩きつけて殴り飛ばし転倒させるトリガー・ドーパント。

「調子に乗るなよ、何が仮面ライダーだー！」

「くっ……！」

ダメージによるめきながらも立ち上がったルクスの振るった拳を左掌で受け止めてその衝撃をバックステップすることで受け流し、背後に向けた銃身から弾丸を撃った反動で左拳を叩き込むトリガー・ドーパントは、そのまま弾丸と拳でルクスを滅多打ちにする。

《ジョーカー！》

「あかり……変身！」

それを見て、咄嗟にジョーカーメモリを拾い上げてボタンを鳴らし、腰に装着したままだったロストドライバーに装填しながら走り、変身。トリガー・ドーパントに殴りかかろうとするも、炎の壁で阻まれる。足から炎を出して復帰してきたヒート・ドーパントだ。

「邪魔はさせません」

「それはごっちの台詞です。後輩の初舞台なのでね！」

事務所の横、空中にいるヒート・ドーパントに半壊した壁から飛び込んで組み付く。ヒート・ドーパントは殴って落とそうとしてくるが、私はそれに耐えながら身体を揺らしてヒート・ドーパントの体勢を無理やり崩して壁に激突させ、ふら付いたその身体を引っ張って地面に撃墜する。

「があ?!この……!」

「どこぞのコックを思い出す蹴りですね……!」

《ジョーカー!マキシマムドライブ!》

逆立ちで立ち上がりながらクルクルとその場で回転して放った炎の竜巻を、ジョーカーメモリをマキシマムスロットに装填しながら跳躍してバックステップで回避。逆立ちをやめて次々と火球を飛ばしてくるヒート・ドーパントの攻撃を避けながら鳴花―ズの壁を蹴って

反転、左側頭部目掛けて飛び蹴りを叩き込む。

「蹴りには蹴りです。ライダーキック……！」
「っ！」

しかし紫の炎を纏った飛び蹴りは空振り、ヒート・ドーパントを突きぬけて転がる私。どういふことだと困惑していると、ヒート・ドーパントの形が崩れて炎が揺らめく。それは陽炎かげろうだった。やられた……！一体どこに……いや、今はあかりの援護を！

「変身できたからと強くなった気にいるのか？なにが罪の重さを知れだ、罪を背負う程人間は強くなる……！のうのうと幸せに安全に生きてきたお前が、私に勝てるわけがない……！」
「……それは、違います！」

トリガー・ドーパントにタコ殴りにされていたルクスが奮起し、両腕で頭部を庇いながら立ち上がる。やはり傷一つついてない。衝撃での押されていただけの様だ。

「お爺さまは言っていた。人は、己の罪を数えることで成長できる。数えないで罪から目を背ける人間は、決して成長できないと！私は……私は、自分の異常性からこれまで目を逸らし続けてきた！仲間を信じることができなかつた！信じきれずに仲間を裏切つて、拳銃の果てに裏切つたはずの仲間を庇われて、傷つけた！」

「なにを……？」
「私は己の罪を数えましたよ。さあ、お前の罪を……数えろ！」

そう言つて指を拳銃の様に突きつける姿は、仮面ライダースカルと

……おやつさんと重なった。例えCLEARだとしても、おやつさんの孫である貴方は……ちゃんと、おやつさんの魂を受け継いでますよ、あかり。

「私は……私は、結月ゆかりになりたいだけだ！私は結月ゆかりよりも強い、結月ゆかりよりも殺せる、私は結月ゆかりよりも優秀だ！そう証明して私が結月ゆかりになるために犯した罪だ！それを数えろだ!?ふざけるのも大概にしろ……オリジナルが死んでその代わりに生み出された者になにがわかる！」

激怒したトリガー・ドーパントの発露。あまりに理解できない、恐らく私では絶対理解が及ばない身勝手な動機を語るトリガー・ドーパントの構えた銃身が上方に弾かれ弾丸が天井を撃ち抜く。ルクスが、手にしたメタルシャフトが振り上げたのだ。

「なにもわかりませんよ！でも貴方は身勝手だということとはわかります!!罪は罪です！理由を持たせて正当化するな！」

メタルシャフトの打突が炸裂、そのままトリガー・ドーパントの右腕の銃身を握って引つ張り、ショルダータックルを叩き込んで吹き飛ばすルクス。メタルメモリを引き抜いてメタルシャフトのマキシマムスロットに装填、背中のメタルシャフトをもう一本引き抜いて、片手で一本ずつ握ると銀と赤の光を纏い、振り回して次々とトリガー・ドーパントに打ち付けていく。

《メタル！マキシマムドライブ！》

「認めない、こんな奴に負けるなんて、認めない……！」

トリガー・ドーパントも弾丸を撃って反撃せんとするが、全てを受け止めて物ともせず猛連打を叩き込んでいくルクス。その勢いは嵐が如く、ついにはトリガー・ドーパントの身体が浮かび始めて打ち

上げられていく。

「メタルエクストリーム……！」

恐らく私たちのジョーカーエクストリームから名前を取ったのだろう、猛連撃。最後に交差する様にメタルシャフト二本を叩き付け、地面に叩き潰されたトリガー・ドーパントは爆散。トリガーメモリが排出されて変身が解け、ウララは左手を空に伸ばす。ジョーカーメモリで底上げされた目は捉えていた、あの猛連撃で左側頭部のチップを破壊したところを。その身体が指先から粒子化していく。

「私は、偽物なのが嫌で……結月ゆかりに、なりたくて……」

「…例えばCLEAR…クローンだとしても、私は私なんです。…貴方も貴方でしかないですよ」

「……そう、だな。そのとおりだ……」

ルクスの言葉に満足したような笑みを浮かべ、ウララはチップの残骸を残して完全に消滅した。……私と同じ顔の人間が消えて行くのは、やはり複雑な気分だ。クローンとはいえ人を殺してしまったからか、虚しそうにチップの残骸を見下ろしていたルクスに合流する。

「…あかり、お疲れ様です。おやっさんのようでした」

「ゆかりさん……私、エターナルと同じように勝手に仮面ライダーを名乗って……」

「アイツとは違いますよ。あかりの在り方は、正しく仮面ライダーです」

「そいつは聞き捨てなりませんね。姉さんも仮面ライダーです」

言いながらトリガーメモリを拾おうとすると、炎の壁に遮られてしまい、あまりの熱さに手を引つ込める。壁の向こうでトリガーメモリを拾い上げたのは、ヒート・ドーパント…ミリアルだ。その手にはB

とPのメモリまで握られている。何時の間に…！

「…まさか、ブロッサだけでなくウララまでやられるとは思いませんでした。その三つのT2メモリは私一人じゃ奪えそうにないので預けます。水都タワーまで届けに来てくださいね？」

そう言っ路地裏に隠していた赤いバイクに搭乗して走り去っていくヒート・ドーパントを、見送るしかなかった。

「…ゆかりさん、いきましよう。私達できりたんを取り戻すんです」「あかり……ええ、そうですね」

そうだ。きりたんも恐らくそこにいる。…リリイとついなさんがやられた今、戦えるのは私とあかりのみ。…やるしかない、か。

第七十四話：A to Zフォーエバー／孤独のNEVE R LAND

水都タワーに戻ってきたミリアルの報告を、傍にサイクロン・ドールを侍らせたアリアルはメモリを受け取りながら特に動揺することなく聞いていた。

「…ブロッサとウララがやられた、か。ご苦労、ミリアル。アベルーニに手を貸してやってくれ」

トレーラーに偽装し水都に持ち込んだアベルーニの簡易研究室にしてCOEFONTの仮拠点を映したカメラの映像内の、緑色の液体に満たされたポッドで培養されたもう起きもしない空っぽのブロッサとウララのボディをモニター越しで見つめながら冷めた目でそう呟くアリアル。仲間が倒されたというのに特に怒りもしない様子を、中央に据えられたマキシマムスロットが26個付いた巨大な装置「エクスビッカー」の椅子に縛られたきりたんは信じられないものを見るような目で見つめている。

「なんで、仲間が倒されたんですよ!?!なんで、そんな顔ができるんですか…!」

「何を言う。ブロッサもウララも替えの効く代用品だ。元々死ぬことを前提として作っているのにいちいち涙を流すのは水分の無駄だ。壊れてしまってもまた作ればいい。また精神を教育するのは億劫だがね」

「クローンだって生きてるんですよ!なんでそんなこと言えるんですか…!人の心が無いんですか!」

「私は悪魔だからね、心なんて持ち合わせてないさ。どうした?自分と似た境遇のCLEARを同情しているのかい?」

きりたんに歩み寄り、その顎を掴んで自身の眼前に引き寄せるリアル。その目に光はなく、きりたんは思わず怯むとリアルは笑って手を放す。

「驚いたかい？ 私は NEVER。生きる死体だ。生氣なんてないんだ、生者の CLEAR と違ってね。NEVER は死体の適合率が異様に低くてね、成功例はこの私だけだ。この世で唯一の存在、それが私だ。君の恐怖も正当なものだ、誰だって自分と違うもの、異物は恐ろしいものだからね。君とは同じ、この世で唯一の存在として仲良くなれると思ったが……異物は異物らしい、残念なことだ。私は孤独のままだということか」

自分の胸に手を置いて死んだ目で淡々と告げてくるリアル。きりたんは悟る。この目の前の女は自身の IF なのだ。残酷な真実既に死んでいることを知った際に、支える者ゆかりたちがいなかったら自身もこうなっていただろうと。

「……このエクスピッカーと言う兵器、もしかして貴方の目的は……」
「ああ。T2メモリとエクスピッカーを使って私と同じ、NEVER を量産する事さ」

なんでもないことのようにさらっと語られた悪夢の様な目的。水都の解放と言う言葉の真の意味を知ったきりたんは動揺する。知らなかったのかサイクロン・ドーパントも激しく動揺した。

「私の孤独を癒す方法を兄さんがついに見つけてくれてね。実践するために財団Xに従事してT2メモリを作る障害を排除し、エクスピッカーを開発しこの街に戻ってきた。生前の私の住んでいた街にね」

「そんなことをしたら、適合しなかった人間が……街の住人の半数以上が死にますよ!?! 正気ですか!?!」

「正気なわけがないだろう。私は心を失ってなお孤独でどうかかなりそ

うなんだ。もう狂ってるかもしれないが、私の悲願だ。数人でもNEVERが増えれば上出来だ。そのために何人死のうが知ったことじゃない」

必死に訴えるきりたんに、真顔で返すアリアル。その狂気すら感じない瞳に、きりたんは思わず目をそらして、決意したのか後ろ手に風を集めているサイクロン・ドーパントを見た。なにをするのか察したきりたんは注意を惹こうと話題を変える。

「…アベルーニは、貴女の兄はそれを承知で……?」

「ああ、兄さんかい?よく尽くしてくれてるよ。私は彼の「妹を失いたくない」と言う願いから生まれた存在だ。研究費のために財団Xを介した継星財閥の依頼で君も知る継星あかりを作った。「妹」が欲しいと望んだら私の遺伝子を使ったCLEARであるミリアルを作った。他のCLEARも私が「仲間」を望んだ故に作られた存在だ。だがそれでも私の孤独は癒されなかった。同じCOEFONTと括られていようがNEVERは私一人だった」

アリアルが手にしたりモコンを操作してモニターの映像を切り返る。そこには、アベルーニとミリアルが、水都タワー傍の公園にて集う数多の人間の相手をしていた。十億に釣られて、よくわかってない水都市民がミュージアムの旧型ガイアメモリをどこからか集めて持ち寄ってきているのだ。そんな地獄みたいな光景を一瞥してアリアルは無感情に続ける。

「それにどうでもいいだろう?こんな醜い者達がどうなろうと。こんな街に君達仮面ライダーが救う価値はあるのかい?」

「…私は信じています。相棒が、ゆかりさんが愛した街に住む人々を！」

「…ふむ。不快だ。この上なく不快だ。最悪の気分だよ、同類だと思っていた君の口からそんな言葉が紡がれるだなんて」

《エターナル!》

腹立たしげにしながらエターナルメモリを取り出して腰のロストドライブに装填してスロットを倒し、仮面ライダーエターナルに変身するリアル。ファングメモリを取り出すと腰のマキシマムスロットに装填する。同時に、それを止めようとサイクロン・ドールパントが手の間に形成した鎌鼬を放たんとする。

「ああ、あああああつ!」

《ファング!マキシマムドライブ!》

「…ファングストライザー」

そしてマント、エターナルローブを翻して鎌鼬を弾きながらマキシマムセイバーを右足首に生成したエターナルは高速回転してサイクロン・ドールパントに回し蹴り。Fの文字が刻まれたサイクロン・ドールパントは爆散してキリエとCのメモリが転がる。

「キリエ。君は一応同じCOEFONTで東北記理子の予備だからまた仲間に引き入れたが信用はしてなかった。君を国際警察に潜入させた結果、人の心を学んでしまったからね。そしたら案の定、道具に心など不要だとよくわかった」

「ぐうう……」

「そのまま道具として使命を全うしてくれ」

言いながらキリエを引き摺り、きりたんと反対側の椅子に無理やり座らせ機械を頭に乗せるエターナル。そしてZ：ゾーンのメモリをエクスピッカーのマキシマムスロットの一本に装填、ボタンを押す。

《ゾーン!マキシマムドライブ!》

「うああああああつ!?!」

すると使用者であるエターナルの意思を汲み取り、エターナルの変身を解除させながらゆかりとあかりの有しているJージョーカー、Mーメタル、Xーエクストリーム以外の22本の、COEFONTが有しているメモリが転送されてきてエクスピッカーのマキシマムスロットに装填。電流が走ってきりたんとキリエは悲鳴を上げる。

《アクセル!》

《バード!》

《サイクロン!》

《ダミー!》

《エターナル!》

《フアング!》

《ジーン!》

《ヒート!》

《アイスエイジ!》

《キー!》

《ルナ!》

《ナスカ!》

《オーシャン!》

《パペティアー!》

《クイーン!》

《ロケット!》

《スカル!》

《トリガー!》

《ユニコーン!》

《バイオレンス!》

《ウエザー!》

《イエスタデイ!》

《ゾーン!》

《マキシマムドライブ》

!!!!!!!!!!!!!!

「君達はこの装置を起動するための生体ユニットだ。メモリの数こそ足りないが、二人もいれば起動するには十分だろう。そして…」

ぐったりとしたきりたんとキリエを満足げに見やり、エクスピツカーから二本のメモリを引き抜いて意識を失っているきりたんに歩み寄るアリアル。

「東北記理子…きりたん。君は私を怒らせた。心を取り込まれた抜け殻の君の身体、利用させてもらうとするよ」

そう言って孤高の白き悪魔は心底楽しげな笑みを浮かべるのだった。

第七十五話：A to Zフォーエバー／疾風の牙獣

水都市歩色町が一望できる立体駐車場の屋上で、水都タワー方面を見下ろす私とあかり、そして方相氏とハイドープの頑強さで復活したついなさんとリリイ。警官隊が止めようと動いていたようだが、失敗したのかパトカーの残骸が転がっていた。

「しっかし派手にやられましたねえ」

「ミリアルはいなかったはずなのであればアベルーニ一人でやったってことですよね…」

「うちがいなかったばかりに…」

「不意打ちはしようがないと思うがな？まあオレは名誉の負傷だが」

ブロッサとウララを倒したモノの、まだアリアルとミリアル、そして倒したがメモリを奪えなかったアベルーニと敵に回ったキリエが残っている。戦力差は歴然だ。少しでも素早く乗り込もうと、私とあかりはマシンハードボイルダーと、ついなさんはエンジンブレードを搭載したディアブロッサ、リリイはマシンミダスホイラーに搭乗している。

「…ついなさん、リリイ。本当に公園のミリアルとアベルーニは任せたいんです？」

「エターナルに勝てるのはお前ら二人ぐらいやろ。露払いは任せとっきい」

「変身できないがちょうどいいハンデだ。オレのドライバーで頑張つてこい、あかり」

「個人的には戦い慣れてないあかりを連れて行くのも憚られるんですけどね」

「二人で行くのは無しですよ、ゆかりさん！」

頼りになる二人と、怖いだろうに気丈に振る舞うあかりに思わず苦

笑する。…さて時間をかけてもいられない。

「行きますか」

《ジョーカー!》

「はい!」

《エクストリーム!》《メタル!》

私はロストドライバーを腰に取りつけT2ジョーカーメモリを手に取り、あかりはダブルドライバーNEOを腰に取りつけT2エクストリームメモリとT2メタルメモリを手に取り、それぞれドライバーに装填。私はJを描くようなポーズをとり、あかりは両腕を交差して、勢いよく振り下ろしてダブルドライバーNEOを展開する。

「変身!」

《ジョーカー!》

《メタルエクストリーム!》

私は漆黒の風に包まれ、仮面ライダージョーカーに変身。あかりはガンガンガンガンと音を立てながら積み上がるようにして鋼のブロックに包まれたかと思えば罅割れて砕け散る様にして仮面ライダールクスに変身を果たすと、ついなさんとリリイも合わせてそれぞれのマシンを発進させた。

一方、水都タワー前公園では、アベルーニとミリアルが次々とやってくる水都市民に飽き飽きとしていた。

「市民が仮面ライダーからT2メモリを奪い取ることを期待してたわけだが、てんで駄目だな。ミュージアムのメモリばかりだ」

「私達が失敗したのにそんなことを求めるなんて酷でしょう」

「俺もお前たちに期待しすぎたよ、まさかブロッサとウララが完全に死ぬとはな」

「:CLEARに幻滅しましたか?」

「期待はずれなのは最初からだ。リアルを満足させることができなかったからな。せめて道具として役立て」

「:はい、わかりました。姉さんの為なら私は道具で構わない:」

アベルーニの言葉にリアルが複雑そうな表情で返していた時だった。三つのエンジン音が轟き、アベルーニとリアルがその方向を向くと、三台のバイクが並走して走って来ていた。それを見て逃げ出す市民たち。誰が来たのか察したアベルーニは笑う。

「仮面ライダー:…来たか!さつき渡した財団Xからパクった奥の手の出番だ。リアル!」

「承知しています!姉さんの元には行かせません:…!」

そう言つてリアルが取り出したのは、M/Tと鉄と銃で描かれたダブルたちのものと同じ形状のガイアメモリ。アベルーニも炎と月でH/Lと描かれたガイアメモリを取り出し、同時にボタンを押して二重に重なったガイアウィスパーを鳴らす。それは、財団Xがミュージアムには秘匿してダブルを参考に開発した試作型複合メモリType Fusionガイアメモリ「TFメモリ」だった。アベルーニが「退職金」と称して盗み出したものである。

《メタル!／トリガー!》

《ヒート!／ルナ!》

そして、それぞれかざしたアベルーニの額とリアルのはだけさせ

た胸元に浮かび上がった生体コネクタに挿入すると、アベルーニは胸部より上が燃え盛る炎に包まれたルナ・ドーパントの様な姿に、アリアルはスレンダーで右腕のライフルが消えた全身のいたるところに鋼の装甲を身に着け、砕ける様に割れた頭部の右側からメタル・ドーパントの様な赤い複眼が露出したトリガー・ドーパントの様な姿に変身。ヒートルナ・ドーパントが腕を振るって燃え盛るマスカレイド・ドーパント…ヒートルナマスカレイドを大量に召喚した中に、スピードを上げたついなとリリイが突っ込んでいく。

「なんや強そうになったなあ、堪忍せい極悪人、アベルーニ！」

「相手にとって不足無しだ、ミリアル！」

「いいね、方相氏のCLEAR作ってみたかったんだ如月追儼…！」

「リリイ金堂…！貴女を逃した不始末はこの手で…！」

激突する四人を尻目に、ハードボイルダーを走らせ水都タワーに辿り着いたジョーカーとルクスは、後ろ髪を引かれながらも内部に突入した。

ついなさんとリリイに異様なドーパントになったアベルーニとミリアル、マスカレイド軍団の相手を任せて水都タワー内部を駆け上がって行く私達。そして中枢部に辿り着くと、きりたんとキリエさんが拘束されぐったりしている中心に据えられた巨大な機械を見上げていたアリアルがこちらに気付く。

「アリアル・ボルコフ！きりたん…とキリエさんを放しなさい！」

「やあ。待っていたよ結月ゆかり、いや仮面ライダージョーカー。そして仮面ライダールクス、継星あかり…君が私達に敵対するのは心底残念だ」

「どの口が…！私を殺そうとした癖に…！」

「そこは勘違いしないでほしい。私は本心から君が仲間になることを望んで勧誘した。君を殺そうとしたのは部下たちの暴走だ。…まったく、兄さんめ。私が落胆するぐらいならと始末しにかかるとは…：謝罪しよう」

そうやって頭を下げるリアル。しかしすぐに頭を上げると無感情な顔で見てきた。思わず、変身もしていない少女に怯む。改めて見れば高校生ぐらいだ。NEVERだから本来の年より若々しいのだろうか。

「だがしかし、東北記理子とキリエは別だ。彼女たちはこの機械…エクスビツカーを制御するための生体パーツだ。返すわけにはいかな
いね」

「だったら無理矢理にでも…！」

「取り返します…！」

「残念ながら君達の相手は私じゃない」

そうやって、CーサイクロンメモリとFーファングメモリを手にするリアル。ボタンを押すと二本を纏め、背後のぐったりしているきりたんの首に突き刺した。

《サイクロン！》《ファング！》

「なにを…!?!」

「…これ、は………」

「ウオオオオオオオオオオオオッ!!!」

するときりたんの身体が膨れ上がり、二メートル大の全身から白い

牙が生え揃った刺々しい姿のサイクロン・ドーパントの様な姿の怪人……言うなればサイクロンファンング・ドーパントに変貌。咆哮を上げる。頭の刃はきりたんの包丁の髪飾りを思わせるが、知性の欠片も感じられないその姿からきりたんの面影は感じられず、ショックを受ける。

「まさか二本挿しが上手くいくとはね……今の彼女の精神はエクスピッカーに閉じ込められている、いわば抜け殻だからかな？」

「きりたんを、よくも……！」

「ゆかりさん、来ます……！」

「ウオオオオオオオオオオオオッ!!!」

斬撃を伴った疾風が吹き荒れる。私とルクスは構えるしかなかった。

第七十六話：A to Zフォーエバー／水都タワー攻防戦

サイクロンフアング・ドーパントとジョーカーたちが対峙していた頃。水都タワー前公園では激闘が繰り広げられていた。

「はっはっはっはーダブルに負けた時と同じだと思ふなよ！」

両腕に灼熱の炎を纏い、さらに両腕を縦横無尽に伸ばしてとんでもない範囲を一齐に攻撃するヒートルナ・ドーパント。ついなは炎を纏った腕をエンジンブレードで斬り弾きながら突進、突きを喰らわせるが炎の壁に阻まれ弾かれてしまう。

「ガンナーA！」

「無駄だ。そうだな、こいつとかどうだ？」

ゆかりたちの置いて行ったハードボイルダーに搭乗し、さらにガンナーAを呼び出してハードガンナーにしたついなは砲撃を浴びせるが、金色の光を纏った腕を振るってヒートルナ・ドーパントが繰り出してきた巨大なタコの怪物に阻まれる。

「なんや!？」

「ビッグ・オクトパス・ドーパント。君はその戦いに参戦してないから知らないのかな？」

「岳に化けてたうちゆうあのタコかいな！マスカレイド以外も出せるんか、厄介やな！」

「陽炎が如き灼熱の幻影に勝てるかな？」

背後に侍らせたビッグ・オクトパス・ドーパントの触手を向かわせるヒートルナ・ドーパントに、ついなはハードガンナーの上でエンジ

ンブレードを構えた。

「ちいー！」

一方、メタルトリガー・ドーパントの鉄のステイック二本による攻撃を、頑丈な身体で受け止め押し返していくリリイ。

「ヒート以外は使いにくい……！」

すると後退してステイックの一本を伸ばし、もう一本を変形させてL字にすると伸ばしたもう一本と合体。簡単な構造のライフル銃にすると構え、弾丸を乱射する。

「くそっ！」

近くの木に隠れて耐え凌ぐリリイだったがぶち抜かれ、できた大穴に冷や汗を流すと別の木まで駆け抜ける。

「逃がすか！」

そう言つて左手を振るうメタルトリガー・ドーパントの手から複数の鉄のステイックが発射。それは放物線を描いて地面に突き刺さり鉄棒の壁を作り上げると、弾丸を撃つてそれに跳弾。背後から肩を撃ち抜かれるリリイ。

「ぐっ……こっちだー！」

次々と隠れる木を変えて行くリリイ目掛けて、鉄の壁を次々と作り上げながら弾丸を連射するメタルトリガー・ドーパント。しかしいつ

の間にかリリイを見失い、ライフル銃を元の鉄のステイック二本に戻すと辺りを見渡しメタルトリガー・ドーパントは警戒する。

「残念、上だよ！」

「ぐっ、あつ…!?!」

すると木に登って上を跳躍して回り込んできたリリイに上空から飛びかかれて長い脚で首を締め上げられるメタルトリガー・ドーパントは、そのまま回転したりリイに投げ飛ばされて地面を転がった。

「リリイ金堂、お前…！」

「いいね。借りるぞこの武器」

転がった鉄のステイック二本を手に取り構えるリリイに、メタルトリガー・ドーパントもジャキン！と鉄のステイック二本を取り出して構え、二人は甲高い金属音を立ててぶつかるのだった。

「これで君もまごう事なき怪物だ。一緒に堕ちようじゃないか、東北記理子」

「ウオオオオオンッ!!」

「くっ……」

きりたんが変貌したサイクロンファング・ドーパントから竜巻の如く牙の様な風の斬撃がばら撒かれる。器用にもエクスピツカーやリアルに当たらなかつたそれは私とルクスには炸裂、私は火花を散ら

して吹き飛ばされる。

「くっ……つまりきりたんの意思が戻ってくればいいんでしょう？あかり、こいつの相手は私に任せてあのエクスピッカーを破壊してくださいー！」

「わ、わかりました！」

風の刃を受けてもビクともしてなかったルクスが突き進み引き抜いたメタルシャフトを振り上げるが、それはエクスピッカーからメモリを一本引き抜いたアリアルの手で止められる。

「やあ、痛いなあ。同じ運命的に科学から生まれた怪物同士じゃないか私達は。それに今は同じ仮面ライダーだ。仲良くしようじゃないか、あかり」

「同じじゃありません、仮面ライダーはこの街の希望なんです！戦争屋の貴方が名乗っていい名前じゃありません！」

「傷付くな。私はこの街の新たな希望だ。間違っていないさ…変身」

《エターナル！》

アリアルが変身したエターナルの拳を受けて怯んで後退するルクス。さらにサイクロンフアング・ドーパントの放った風の牙が襲いくるも、それはルクスの頑強な装甲とエターナルのマントで弾かれる。羨ましいなこの野郎！こちとら身一つで受け止めてるつてのに。ルクスの方も一人でエターナルを相手するにはきつそうだ。

「止まって！止まってください、きりたん！」

「ウオオオオオオオオオンッ!!」

サイクロンとフアング、二つのメモリの力に振り回され暴走するサイクロンフアング・ドーパント。きりたんの意識が無いとしても、少しは残っている可能性もある。しかし全身に生えた牙による斬撃を

連続で受け、風の牙を纏った回し蹴りを受けて蹴り飛ばされる。

「こうなったら無理にでも止めます!」

《ジョーカー! マキシمامドライブ!》

「ライダーパンチ…!」

腰のマキシمامスロットにメモリを装填。紫色の炎を右拳に灯して殴りかかるも、サイクロンフアング・ドーパントは自身の身体から疾風の牙を竜巻の如く放出して弾き飛ばされる。とてつもない風圧で近づくことすらままならない…!

《ゾーン! マキシمامドライブ!》

《アクセル! マキシمامドライブ!》

「君の防御力は厄介だからね」

「ぐっ、あああっ!」

ZとAのメモリを引き抜いたエターナルが、腰とナイフのマキシمامスロットに装填。ルクスの死角に瞬間移動しながら高速で斬撃を叩き込むと言う攻撃を繰り返し、防御力があるルクスでもその速さの衝撃に吹き飛ばされる。防御力があってもあれは不味い。

「きりたんときりエさんをこんな目に遭わせて…なにが目的なんですか!」

「データ人間とのできそこない。彼女たち二人が揃えばエクスピツカーの補助回路として機能し、26のT2ガイアメモリの力を完全に引き出して水都の人間全てをNEVERに変える…!それが私の悲願だ。さつさとメモリを引き渡してくれないかな、仮面ライダー!」

《ユニコーン! マキシمامドライブ!》

「がああああっ!」

そして己の目的を語ったエターナルは、それにルクスが怯んだ隙を

突いて腰のマシマムスロットにメモリを装填。ドリル状のエネルギーを纏った拳でルクスの装甲を貫き、殴り飛ばして変身解除させる。そんな…！

「くっ…！」

サイクロンフアング・ドーパントを蹴り飛ばして距離を取ると、エターナルに殴りかかる。しかしマントの裾を持ったその手で拳を全て受け流され、バサツとマントを広げたエターナルの拳を逆に受けて後退、さらに首を掴み上げられて床に叩きつけられ、勢いよく壁に投げつけられて叩きつけられ床に転がる。身体能力を上げるジョーカーでも、敵わないなんて…!?

「T2を使ったところで私との差は埋まらない。エターナルは全てのメモリの王だ。それに、素人格闘技と訓練で培った戦闘技術を一緒にするな」

《クイーン！マキシマムドライブ！》

「エクスピツカーは私が守るから全力を出せサイクロンフアング・ドーパント。私の猟犬としてかつての相棒に引導を渡してやれ」
「不味い…!?!」

メタルメモリとエクストリームメモリを拾いながら引き抜いたQのメモリを腰のマキシマムスロットに装填し、ドーム状のバリアを張りながら言うエターナルに、私は変身が解除されて転がっているあたりを庇うと同時、風が爆発した。

「ウオオオオオオオオオンツツツツ!!」

周囲の空気を吸い込んで、その全てを牙に変換したサイクロンフアング・ドーパントが爆発でもしたかのように一斉放出。水都タワーの壁の一角を吹き飛ばした。私はあかりを庇うように全身を切

り刻まれ、崩れ落ちて変身が解除される。コツコツと靴音を立ててやってきて、ジョーカーメモ리를拾い上げるエターナル。クイーンの防御でエクスピッカーごと無事だったらしい。

「ご苦労。お前はもう用済みだ」

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

そのまま腰のマキシマムスロットに装填、右足に紫の炎を灯して跳躍し、飛び蹴りを叩き込んで容赦なくサイクロンファンング・ドーパントを蹴り飛ばすエターナル。たまらずサイクロンファンング・ドーパントの変身が解けて、ズタボロのきりたんの身体とメモ리가二本、転がった。

「AttoZ…26本全てのメモ리가揃った。始めるぞ」

そう言つて容赦なくメモリと共にぐったりとしているきりたんの身体を掴み上げ、エクスピッカーの椅子に無理やり座らせると器具を取り付けて行くとZのメモ리를エクスピッカーのマキシマムスロットの一番端つこに装填した。

《ゾーン！マキシマムドライブ！》

「今度は起動だけじゃない。先に起動しておいたエクスピッカー内でこの二人の精神を用いてプログラムを組み立てて置いた。安心しろ、一瞬で終わる。結月ゆかり、継星あかり。お前たちもNEVERになれたら歓迎しよう、我が楽園に…！」

するとエターナルの変身も解け、その手に握られたメモリたちが空を舞い、次々とエクスピッカーに装填されていく。こんな、こんなことで全てが終わるんですか……

第七十七話：A to Zフォーエバー／逆転の仮面ライダーたち

《アクセル！》《バード！》《サイクロン！》《ダミー！》《エターナル！》
《ファンク！》《ジーン！》《ヒート！》《アイスエイジ！》《ジョーカー！》
《キー！》《ルナ！》《メタル！》《ナスカ！》《オーシャン！》《パ
ペティアー！》《クイーン！》《ロケット！》《スカル！》《トリガー！》
《ユニコーン！》《バイオレンス！》《ウエザー！》《イエスタデイ！》《エ
クストリーム！》《ゾーン！》
《マキシマムドライブ》

ゾーンメモリのマキシマムドライブで呼び出された、エターナルに
所有権が移った全てのT2メモリが次々とエクスピッカーに装填さ
れていき、きりたんときりエさんが悶え苦しむ地獄の様な光景を見て
いることしかできない私とあかり。

「ぐうう、あああああああつ?!」

「うあああああああつ?!」

「きりたん!」

「きりエさん!」

二人の悲鳴と共に、エクスピッカーから緑色の光線が頭上に向けて
放たれる。その先は…水都タワーの巨大風車。あれを発射台に…!?
するとリアルはカメラを自身に向けて機械を操作し、中継を再開し
た。

「水都の諸君、朗報だ。これから緑色の光が街に降り注ぐ。それを受
けた諸君らは、死ぬ」

己の首にナイフの切っ先を向けてかき切るショッキングな光景を

中継するアリアル。すぐさま治って行く様はお茶の間には到底見せられないグロイ光景だ。

「だが安心しろ。エクスピッカーの光が、諸君らの肉体を変質させて、この私と同じ不死身の怪物に変えてくれるだろう。もつとも、適合しなければそのままあの世行きだがな？生き残りたければ神にでも祈れ！生き残った暁には我が仲間として迎えよう。さあ市民諸君、地獄を楽しみな！」

それはまさしく死刑宣告。アリアルは嗤っていた。そのまま中継を切ると、狂ったように機械を操作していく。

「ははははははっ！感じる、感じるぞ！心が無い私にもわかる！この昂揚感！いい気分だ！もう私は孤独じゃない！怪物は私だけじゃない！みんな私と同じ、生ける死者になれ！」

「くっ…やめなさい！」

「うあああああっ！」

隙だらけなアリアルに、あかりと共に飛びかかる。エターナルじゃない今のアリアルなら勝機があるかもしれない。しかしアリアルはナイフを逆手に持ち替えると刃の峰で私の脇腹に一撃、両腕を振り回すあかりの襟元を掴むと持ち上げ、背後に向けて投げつけられて柱に背中からぶつかりダウンするあかり。

「があっ…」

「まさか実力の差がメモリの違いだけだと思っていたのかい？」

そのままアリアルはその小柄な体で廻廻し回転蹴りを繰り出し、踵が私の側頭部に炸裂。ふらついた私に、さらに右の掌底を鳩尾に叩き込まれ、激痛に悶えた私の顎をサマーソルトキックで捉えて蹴り飛ばすアリアル。なすすべもなく私は壁に叩きつけられ、崩れ落ちた。

「ゆかりさん!？」

「ぐ、う…」

「安心しろ、痛みには悶えるのは少しの間だけだ。NEVERになるか死ぬかの神のみぞ知る答えの時間がすぐにやってくる」

待ちきれないと言わんばかりに喜悦に歪んだ下手くそな笑顔を浮かべるアリアル。終わりの時は近い。

一方其の頃、東北家では帰還し傷の手当てをしていた幹部の面々が放送を目に当たりにしてお通夜もかくやという空気だった。

「…最悪ですわ。こんなところで我が野望が…そんなギャンブルに等しい方法で不死身になど、それもゾンビのようになどなりたくありませんわ。神に祈るしかないというのですか」

ミュージアムの首魁が好き勝手言っているが水都市民全員の代弁だった。奇しくも別の悪意が水都最大の悪意の目的をくじくとはなるとる皮肉だろうか。

同時刻。緑色に輝く水都タワーを一望できる水都総合病院の屋上に集まった民衆の中で、T2メモリでドーパントにされここに運び込まれていた琴葉葵と琴葉茜の双子が寄り添って様子を見守っていた。

「お姉ちゃん…私、怖いけど…お姉ちゃんだけは守るから…」

「うちがついてるから大丈夫やで葵…って言えたらよかつたんやけどな。ゆかりみたいにはいかへんわ。なにしてるんやゆかり、このままじゃ…水都、全滅や」

計器を見守るアリアルは、その数値が目的に達したのを確認して右手を振り上げた。あの手が振り下ろされる時、水都は終わる。ただ駄目だ、痛めつけられた体は、動かない…。

「――充填完了。発射だ」

「やめろおおおおおおお！」

せめて声だけでも叫んで止めようと試みるが虚しく、ボタンを押したアリアルだったが、その瞬間。突如エクスビツカーがギユウウウン！と凄まじい音を立てて停止した。カチカチカチ、ダンダンダン！と強めにボタンを連打するアリアルだが、エクスビツカーが停止したことに気付いたのか視線を向ける。

「なんだ？何が起きた？」

「ぐう…完全に制御しようとしたのは、失敗でしたねえ…！」

そう言っただけで苦しげにしながらも不敵に笑うのはエクスビツカーに繋がれたきりたん。その後ろでは、キリエさんも踏ん張っていた。

「アリアル・ボルコフ…お前に…水都を滅ぼさせたりさせません！」

「私だって、東北記理子だ…！」

「まさか、お前たち…発射プログラムを書き換えているのか!？」

アリアルの話が正しければ、生体制御システムにされていたきりたんとキリエさんが力を合わせてエクスピッカーのプログラムを逆に書き換えてエネルギーの発射を食い止めているらしい。……相棒が、依頼人が頑張ってるんだ。私も、寝てなんてられない……！

「待っていてくださいゆかりさん！今、エクスピッカーに繋がっているエターナルメモリの力を壊せば……！」

「また、あなた達の……仮面ライダーのガイアメモリが使える！」
「させるかあ！」

さらに起死回生の策に出ようとするきりたんとキリエさんに、ナイフ片手に襲いかかるアリアルの前に、私と……同じく奮起したあかりが立ち塞がる。

「それはごつちの台詞です！」

「二人には近づかせません……！」

「私の邪魔をするな！」

今までになく激昂したアリアルの猛攻を、あかりが自らの二の腕にナイフを刺させることで受け止め奪い取り、そこに私のミドルキックが炸裂。あまりのことに驚愕するアリアル胸部に直撃、蹴り飛ばす。

「なっ……あかり!? バカなのか君は!？」

「何を驚いているんですか、私を同じバケモノだと言ったのはアリアル、貴女だ！」

「あかりはバケモノなんかじゃありませんけどね。仲間のために自らの体を張れる……立派な探偵です！」

「うおおおおおっ！」

その間にもきりたんとキリエさんの雄叫びが起こり、次の瞬間バチバチと火花を散らして飛び散るT2メモリたち。咄嗟に私はきりたんに駆け寄り拘束を外しつつ、ジョーカーメモリを取り出してボタンを押してみた。

《ジョーカー！》

「……どうやら切札が私の手元に戻って来たようですね」

「だからどうした。君達が私に勝てる道理はない。失敗した時のプランもちゃんと考えてある……！」

エターナルメモリとゾーンメモリを拾い上げながら睨み付けてくるアリアル。

「仮面ライダー。君たちは、大事な街のピンチに駆けつけないハードボイルドではないだろ？」

同時刻、水都タワーの下では、なんとかビッグ・オクトパスを倒したもののハードガンナーから投げ出されたついなが異変に気付いてアクセルドライバーを腰に装着、ヒートルナ・ドーパントと相対、手にしたアクセルメモリを鳴らしていた。

《アクセル！》

「どうやら仲間がやってくれたようやな。さあ思いっきり、振り切るで。変……身……！」

《アクセル！》

そしてアクセルに変身、放たれた炎の触手をエンジンブレードで薙ぎ払うと、ヒートルナ・ドーパントは片腕でアクセルと斬り結びながら裾の長い袖の様な手を顎にやり考える。

「ふむ。これは想定外だが想定内だ。仮面ライダー、君達には明確な弱点がある」

「ほう、言ってみい。それはなんや?」

「ヒーローである故に、人々を守らなきゃならないということさ。ふん!」

アクセルを大きく弾くと、ヒートルナ・ドーパントは両腕を長く長く伸ばしてそれを頭上で回転。まるで炎の竜巻のようになってそれから、次々と異形が現れ水都中に飛び散っていく。それは、ビッグ・オクトパスを出したのと同じ、ルナメモリの能力で生み出した実体を持つ幻影だった。ホーク、マッド、シャーク、ダンデライオン、エルドラド、ギロチン、ジャックザリツパー、バステト、イレイザー、フレンジ、サーカス、スコープオン、ウェブ、タンク、パキファケロサウルス、スピノサウルス、ラプトル、オクトパス、フェアリーティル、トウース、ブリュンヒルデ、フレア、プロミネンス、プリズナー、さらにはT2メモリのドーパント達まで。それも一体ずつではなく複数もだ。

「なんやと…!?!」

「俺なんかを構っている暇があったら行った方がいい。街に被害が及ぶぞ」

そう言って行くことを促すヒートルナ・ドーパントだったがアクセルはその場を動かず、エンジンブレードを手に斬りかかって来てヒートルナ・ドーパントは慌てて受け止める。

「なんのつもりだ!?!街が滅ぶぞ!?!」

「お前が出どころやろ。お前を倒したら全部消える、違うか？」
「…違うないね！薄情な奴だ！」

炎の鞭と化した両腕を振るい、アクセルのエンジンブレードと斬り結ぶヒートルナ・ドーパントだったがしかし、アクセルは仮面の下で不敵に笑んだ。

「それになあ。…これまで各地で鬼どもを退治してきたうちから言わせりゃ、仮面ライダーはうちらだけやないんやで」
「…なんだと？」

同時刻、歩色町と外の町を繋ぐ道で、ちようど落ちてきて暴れているホーク、マッド、ギロチン、ジャックザリッパー・ドーパントと相対しているバイクに乗った青年がいた。

「大変なことが起きてると聞いて来て見たら予想以上だな。妖怪じゃないみたいだが…人でもないな。これ以上、被害は出させない」
《ゴクオードライバー！》《ラセツ！》

青年はバイクから降りるとゴクオードライバーと言う名のバツクルと、アヤカシバレットと言う名の掌大の弾丸型アイテムを取り出すと、アヤカシバレットをゴクオードライバーから展開されたマガジンに装填、荘厳な待機音声で鳴り響いて赤と黒のエネルギーが円柱型に現れて男を取り囲む。

同時刻、歩路町の商店街でも、赤・橙・黄・緑・水色・青・紫のメッシュを入れた純白の髪を持ち眼鏡をかけた性別不詳の人物が、イレイザー、タンク、フェアリーテイル、オクトパス・ドーパントが暴れる中に訪れていた。

「酷い有様だ……この街の光景は美しいものであるはずなのに、君達はそれを汚すのか。到底許すことはできないな」

『COLORS DRIVER!』『WHITE!』

「始まり。全てはここから……万能の白」

『CHOICE the COLOR?』

その人物はカラーズドライバーと言う名のバックルを腰に取りつけると、取り出したリライントペンと言う名の白いクレヨン型アイテムのスイッチを押し込み、カラーズドライバーに装填。

水都とは異なる街の守護者が二人、別の場所ながら全く同じタイミングでそれぞれ構えを取り、その言葉を唱えた。

「変身!」

《ジゴク・レンゴク・ヘンゴク!》

《ゴクオー・ラセツ!!》

「――俺は、獄王。仮面ライダー獄王。お前たちを地獄へ送る者の名だ」

『CHANGE! COLORS of WHITE!』
「ボクの名は、仮面ライダーカラーズだ……!」

現れたるは対照的な二人の戦士だった。赤と黒色の鬼のような仮面ライダー……獄王と、白と虹色の絵具筆を模した仮面ライダー……カラーズ。

ある人は言った。彼等は人間の自由のために戦うんだと。無辜の人々が危機にさらされる時、仮面ライダーは必ず現れる。

第七十八話：A t o Z フォーエバー／閻魔の使者

「そんな!?!なんで、姉さんが…失敗した!?!」

「危なかったな、このまま水都と心中するのも悪くないと思っ
てしまっていた」

対峙するはメタルトリガー・ドーパントのミリアルと、その武器を奪い取り互角の戦いを繰り広げていたリリイ。ゴルドメモリの力が戻ってきたことを感じはしたが、あかりがダブルドライバーNEOを持っていったため変身はできない状態だ。

「だけど姉さんは凄いから次の策も考えている。むしろこっちの策の方がお前たちにとっては最悪です。エクスピッカーを止めたことは無駄でしたね」

相方の方から街中にはら撒かれるドーパントの幻影たちを見上げながらそうのたまうメタルトリガー・ドーパントに、リリイは不敵に笑う。

「そいつはどうかかな?」

「…なに?」

「お前たちは一つミスを犯した。あんな大々的に宣戦布告すりやあ他の街にも伝わる。そしてこの近くの街にはな、俺達エル・ドロードが手を出そうにも出せなかった理由が存在するのさ」

「…何の話ですか?」

「分の悪い賭けだったがな。存外、お人好しだったらしい」

そうフツと笑ったりリイの背後の上空にて、何かが飛翔する。それはホーク・ドーパントとカラスを思わせる姿の仮面ライダーだった。

少し時を遡って、水都アウトレットモール。以前、ホーク・ドーパントが暴れたそこでは、ホーク・ドーパントを含めた四体のドーパントに襲われていた。他はジャックザリツパー・ドーパント、ギロチン・ドーパント、マッド・ドーパントだ。その四体による被害を押さえるべく奮闘している者がいた。仮面ライダー獄王である。

「妖怪と同じで厄介な奴等だな……！」

右手に握った大型拳銃ヘルガンと、左手に握った日本刀の様な剣ヘルソードを巧みに振るい、ホーク・ドーパントの放った羽手裏剣を弾丸で迎撃し、ジャックザリツパー・ドーパントの短針と長針を模したメスとハイヒール、ギロチン・ドーパントの腕から生やした刃を斬り弾き、マッド・ドーパントの放って来た泥の塊を跳躍して回避する。

「特に厄介なのはお前だ、泥田坊みたいなやつ」

《オニビ！》

「大人しくしてろ！」

「ゴボボオ!?!」

ヘルガンの側面からマガジンを引き出し、取り出したアヤカシバレットのボタンを押して装填する獄王。

《アヤカシバレット！オニビ・フレイム！》

赤く光り輝いて炎を纏ったヘルガンから火炎弾を発射。直撃して自身の力の源である水分が蒸発したマッド・ドーパントは慌てて近くの水路に向かう。フレイムルナ・ドーパントから生み出された幻影だ

が元の弱点までそのまま再現しているらしい。

「才前ノ身体モ血ニ塗ツテヤルゼ…」

「切り刻ンデヤリマスヨオオオオ！」

「物騒だな。ならこうだ」

一度距離を取って突撃してくるジャックザリツパー・ドーパントとギロチン・ドーパントに、専用バイクであるヘルスピーダーに搭乗しハンドルを捻って走り出す獄王。空を飛ぶホーク・ドーパントと、アウトレットモールの店舗の壁を足場にして駆けて追いかけてくるジャックザリツパー・ドーパントとギロチン・ドーパントに、獄王はハンドルを切って車体の前方を向けるとスイッチを押した。

「ハシイ!？」

「ギャアア!？」

車体に搭載されたマシンガンから弾丸が乱射される。ジャックザリツパー・ドーパントはアウトレットモール内を「路地裏」としたのか霏に包まれ瞬間移動して回避するが、ホーク・ドーパントとギロチン・ドーパントは避けきれずに撃墜されて地面を転がる。そして獄王はアクセル全開、姿を再度現したジャックザリツパー・ドーパントに体当たりして吹き飛ばした。

「頭ガ痛イゼエ！」

「まずはお前からだ。瞬間移動する力になんでも斬り裂く剣…そういうのに対抗する力は、生憎と持っている」

そう言つて、ゴクオードライバー上部の左端にあるボタンを押すと左側面からマガジンが展開、一番上にある羅刹のアカシバレットを取り外し、マガジンを収納すると別のアカシバレットを取り出してスイッチを押した。

《イヌガミ！》

そしてゴクオードライバー右端にあるボタンを押して展開されたマガジンの中央のスロットに装填。マガジンを戻すとドライバー上部の中心にあるボタンを押す獄王。すると円柱状の黄色いエネルギーが取り囲んでジャックザリツパー・ドーパントの斬撃を弾き、獄王は銃の形に変えた右手を正面に突き出して撃った様な動作を行った。

《ゲキコウ・ライコウ・ホウコウ！》

《ゴクオー・イヌガミ！》

すると円柱状のエネルギーが弾けて獄王の姿が黄色をメインカラーにした犬を模した姿「犬神バレット」に変身。白く染まった複眼がジャックザリツパー・ドーパントを睨みつける。

「血ヲ見セロ！赤ク染マレ！」

靄に包まれ瞬間移動を繰り返して惑わす様にして獄王に迫りくるジャックザリツパー・ドーパント。それに対して獄王は右足を後ろに下げて息を大きく、限界まで吸い切ると犬の如き遠吠えを上げると空気を震わせ、目に見える衝撃波となってジャックザリツパー・ドーパントに襲いかかった。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

「!？」

すると自身を包んでいた靄が消滅し、無理やり実体を引き摺り出されたことに困惑するジャックザリツパー・ドーパントに、獄王は両腕を上に掲げてクロスさせると両腕のアーマーが光り輝いて犬の爪を

模したかぎ爪が展開。次々と斬撃を叩き込んでジャックザリツパー・ドーパントを吹き飛ばす。

「イヌガミバレットの破邪の咆哮。お前らにも通用するようだな」
《ファイナルバレット！》

無様に転がるつぎはぎの怪人を一瞥し、ゴクオードライバー上部中央のボタンを二回連続で押す獄王。黄色いエネルギーが全身に広がると黄色い犬が召喚。雄叫びを上げると突撃し、五体に分身してジャックザリツパー・ドーパントに噛み付いて行く。

《獄王犬神粉碎拳！》

そして獄王も走り出し、全身に行き渡ったエネルギーが両腕に集約して光り輝いた爪を突き刺した。そこから破壊のためのエネルギーが流れ込み、崩壊していったジャックザリツパー・ドーパントは爆散した。

「まずは一人……っ!?」
「ハシイ！」

すると突如襲いかかってきた上昇気流に打ち上げられる獄王。その正体は空を舞うホーク・ドーパントの起こした突風だった。このままでは高所から落とされて落下死してしまう。ならばと新たなアヤカシバレットを取り出し先程と同じ動作で取り換える獄王。

《ヤタガラス！》
《テックウ・カックウ・シンカク！》
《ゴクオー・ヤタガラス！》

そして姿を変えたのは黒をメインカラーとし背中から黒い翼を生

やした、黄色い複眼が輝くカラスの如き姿「八咫烏バレット」。右腰のホルスターからヘルガンを抜いて放たれた弾丸は、瞬時に黒い羽根へと変化、鋭い音と共にホーク・ドローパントの身体を斬り裂いた。

「生意気ハシイ！」

「行くぞ！」

高速で飛翔し、ぶつかり合う両者。鍵爪による蹴りを繰り返したホーク・ドローパントの胴体を蹴って距離を取った獄王の放った黒い羽根の弾丸がホーク・ドローパントの翼を切り裂いてバランスを崩して墜ち、それを逃さず追いかけてながらドライバー上部の真ん中のボタンを2回押す獄王。

《ファイナルバレット！》

ゴクオードライバーから黒と白のエネルギーが溢れ、両腕に集うと身体を回転させ、どんどん速くなっていく回転は小さな竜巻の様になり突撃する獄王。

《獄王八咫烏殲滅刃！》

「ハアアアアアアアッ!!」

「ハシイイイイイ!!」

エネルギーを纏った手刀を構えた獄王は連続で叩き付け、切り刻まれたホーク・ドローパントは天高く打ち上げられて爆散。獄王はアウトレットモールの中心に着地した。

「あとは二体…!?!」

「刃全力展開イ！」

咄嗟に構えたヘルソードで受け止めたのは、両腕、両肩、五指、頭頂部、両頬、側頭部、背中、胴体、両太腿、両爪先、両足の間にと全

身に刃を展開したギロチン・ドーパント。跳躍してアウトレットモールの店舗の壁を足場にして高速で駆け巡り斬撃の嵐を叩き込んでくるギロチン・ドーパントに、獄王はヘルソードで耐えながら別のアヤカシバレットを取り出して起動する。

《ウラー！》

すると、赤い稲妻のようなエネルギーが全身を包み込んで右手に収束、顎の下に持っていていき、自ら撃ち抜く獄王。解き放たれたエネルギーが、アンダースーツを銀色に染め上げ、その上に真紅の装甲が装備されて黒、白、黄色のラインが並んで刻まれる。

《キジン・センジン・カイジン！》

《ゴクオー・ウラー！》

羅刹・八咫鳥・犬神の力を掛け合わせ、強化された形態「温羅バレット」へと姿を変えた獄王はヘルガンとヘルソードを原子分解して生み出された金棒型の武器、ヘルズロッドを携えると両手で持って力いっぱい下から打ち上げギロチン・ドーパントを吹き飛ばした。

「お前は特に強そうだったから全力だ…！」

「死ネエ…!?!」

ギロチン・ドーパントの振るった刃をヘルズロッドで粉碎し、殴り飛ばすと黄色のラインが光り輝かせ高速で追い付いて首を掴み、勢いよく地面に叩きつける獄王。八咫鳥バレットの能力でスピードを極限まで高めて高速で移動したのだ。

「こいつで終わりだ」

《カノンモード！》

《ファイナルバレット！》

ゴクオードライバーから温羅バレットを取り出すとヘルズロッドのスロットに装填、真紅のエネルギーがチャージされて柄を九十度展開する獄王。すると金棒部分が左右に開いて砲身が現れたカノンモードへと変形したヘルズロッドの砲身にエネルギーが集まって行く。

《獄王温羅爆発弾！》

「ギャアアアアアッ!？」

そして引き金を引くと解き放たれた赤と白のエネルギーで構成されたビームがギロチン・ドーパントを貫き、爆散させた。すると視界の端で逃げて行く流動体を捉える獄王。マッド・ドーパントだ。

《ラセツ！》

「さあ、裁きの時間だ。閻魔様に許しを請うなら今のうちだぞ」

《ジゴク・レンゴク・ヘンゴク！》

《ゴクオー・ラセツ!!》

再度羅刹バレットに変身した獄王はゴクオードライバーの真ん中にあるボタンを2回連続で押して溢れだしたエネルギーを両足に集束、上空に飛び上がって飛び蹴りの体勢で勢いよく急降下した。

「地獄に——堕ちろ！」

《ファイナルバレット！》

「ハアアアアアアッ!!」

《獄王・羅刹破壊脚！》

そして逃げようとしていたマッド・ドーパントを背後からぶち抜き、エネルギーが全身に伝達してマッド・ドーパントは爆散。獄王は着地すると周りを見渡して各地で煙が上がっているのを見るとヘル

スピーダーに搭乗した。

「まだまだいるみたいだな。早苗、場所は分かるか?…わかった、すぐに向かう!」

スマホを取り出してどこかと連絡を取った獄王はアクセルを全開にして水都アウトレットモールを後にするのだった。

第七十九話：A to Zフォーエバー／始まりは白

獄王が四体のドーパントと対決していた頃、フェアリーテイル・ドーパント、イレイザー・ドーパント、タンク・ドーパント、オクトパス・ドーパントの四体と対峙する仮面ライダーカラーズ。最初に動いたのはフェアリーテイル。仮面ライダー全員どころかミュージアム幹部すら手も足も出ず無力化された、顔の絵本が捲られての吸い込みが発生する。

「才前モ引きずり込んでやる！」

「お前もって事は既に何人が引きずり込んでるのか」

しかしカラーズは慌てず左手に白いインク状のエネルギー「魂塗料」を集めると、吸い込まれる勢いを利用して強烈なパンチを叩き込み、頭部の絵本が歪んだフェアリーテイル・ドーパントから何人もの人々が排出される。

「悪いことは言わない、逃げるんだ」

「コレナラドウカシラ！」

「クラエ！」

「バクハツダア！」

カラーズが人々に逃げる様に促していると、巻き込むように墨爆弾を乱射するオクトパス・ドーパント、右手の消しゴム型の腕から光弾を放つイレイザー・ドーパント、両手を地面に押し付けれ連鎖する爆発を繰り返すタンク・ドーパント。

「凄い攻撃だけど…ボクには届かない…！！」

しかしカラーズは、右腰の鞘から引き抜いたペンキブラシ型のカラーズエッジと言う名のショートソードを抜刀して逆手に構え、人々

を守る様に立ちほだかり全ての攻撃を一刀両断にして斬り払う。

「ボク以外の戦えない人間を狙うなんて許せないな。染まれ。燃え上がる……灼熱の赤！」

『RED!』『MIX the COLOR? MIX the COLOR?』

無辜の人々を狙う悪意に怒ったカラーズはレッドカラーズリライアントペンの起動を確認すると、Cを描く様にしてカラーズドライバーの右スロットに装填。鳴り響く待機音声と共にドライバーの液晶が白と赤の点滅を繰り返す中で、襲いかかってくるタンク・ドーパントとオクトパス・ドーパントをいなしつつ、レッドカラーズリライアントペンのスイッチを押し込んだ。

『CHANGE COLORS! WHITE and RED!』
「カラード・リミックス。仮面ライダーカラーズ、レッド・パレット。その消しゴムくん。ボクの怒りを消せるかな？」

「ウルサイー！レーザーショット！」

炎を思わせる姿に変身したカラーズに明確な怒気を向けられたイレイザー・ドーパントはタンク・ドーパントとフェアリーテイル・ドーパントに向けて光弾を発射。光弾で撃たれた二体は透明化し、自力で透明に擬態したオクトパス・ドーパントと共にカラーズに襲いかかる。

「ハアアアアッ！」

カラーズエッジを両手で構えると赤い刀身の大剣と化して振り回し、見えないドーパント達を薙ぎ払うとそのまま突進、カラーズエッジで光弾を連射する右腕の上に弾き、魂塗料による炎を放出して加速した蹴りを叩き込んで吹き飛ばすと、ドライバーのレッドカラーズリ

ライトペンのスイッチを押してから、ホワイトカラーズリライントペンのスイッチを2回押すカラーズ。

『MIX COLORS BREAK!』

「カラーズブレイク・レッド!」

すると身体を走るラインから噴き出した最大火力の魂塗料による炎を全身に纏うと加速、吹き飛ばされているイレイザー・ドーパントに追いついて強烈な掌底を叩き込み、全身を炎に包まれた後に爆散させた。

「御伽話ノ神ノカラ見セテヤル!」

「ハゼロヤ!」

『YELLOW!』

「染まれ。迸る……雷光の黄」

『CHANGE COLORS! WHITE and YELLOW!
W!』

様子見しているオクトパス・ドーパントを置いて、透明化が消えてなお殴りかかってくるフェアリーテイル・ドーパントとタンク・ドーパントに、カラーズはレッドカラーズリライントペンとイエローカラーズリライントペンを交換、雷を思わせる姿のイエローパレットに変身し、大剣から戻り二本に増えたカラーズエッジに魂塗料を用いた雷を纏って、全身に雷を纏い細胞と神経を活性化させると高速移動。

『FINISH PAINT!』

すれ違いざまにフェアリーテイル・ドーパントとタンク・ドーパントを斬り裂いて痺れさせると、カラーズエッジの片方の持ち手に設けられたスロットへと、ドライバーから引き抜いたイエローカラーズリライントペンを装填。

「カラーズペインティング・イエロー！」

『YELLOW! COLORS PAINTING!』

そのまま全身に雷光を纏うと、目にも止まらぬ高速移動と共に黄色い魂塗料の鋸めいた刃と化したカラーズエッジを振るい、痺れているフェアリーテイル・ドーパントを滅多斬りにして爆散させると、一緒に斬撃を浴びせてなお耐えている横のタンク・ドーパントを見てイエローパレットの能力により閃くものがあつた。

「このまま力尽きたら爆発するのさ。厄介だけど、対処法が無いわけじゃない」

『GREEN!』

タンク・ドーパントはウェブ・ドーパント事件の直後に水都に暴れてエルドラゴに倒されたドーパント。「貯蔵庫」の記憶を宿し、エネルギーを無尽蔵に貯め込む能力を持ち、下手に攻撃すれば町一つ消し飛ばすほどの危険であり、今まさにその溜め込んだエネルギーが爆発しようとしていた。厄介なところまで再現された偽物である。対してカラーズが取り出してイエローカラーズリライントペンと入れ替えたのはグリーンカラーズリライントペン。

「染まれ。舞い回る……旋風の緑！」

『CHANGE COLORS! WHITE and GREEN
!』

竜巻を思わせる姿のグリーンパレットに変身し、鋼色のリライントペン、スピアーリライントペンをホルダーから取り出すと起動し、横に勢いよく振るうと、身長並の長さがある筆ペン型の槍、カラーズステインガーにすると緑色の魂塗料の疾風を纏うと突き刺した。

「緑色の魂塗料が持つ、強制的に鎮静化させる力で君の力は封じた。これで君は不発弾だ。彩ってあげよう」

『COLORS IMPACT GREEN!』

そのままカラーズエッジをカラーズステインガーに双刃剣の様に合体させると、右スロットに装填されているリライントペンを長押ししてカラーズステインガーを振り回して魂塗料を溜めて行くと弓の形状に変える。

「カラーズインパクト・グリーン!」

そして左手で魂塗料の弓の弦を強く引き絞って緑色の魂塗料の矢を生成し、全エネルギーを集中させて発射。射抜かれたタンク・ドーパントは爆発することなく倒れて消滅した。そんな、残心している隙を目掛けて襲いかかる触手の束。オクトパス・ドーパントだ。

「私ハココデ終ワル存在ジャナイノヨ…!」

『BLUE!』

「染まれ。溢れ出る……流水の青」

『CHANGE COLORS! WHITE and BLUE!』

次にカラーズが姿を変えたのは水を思わせる姿、ブルーパレット。触手の猛連打を全て流れる水のように回避すると、そのうち一本を掴んで引っ張り、肩を顔面に叩きつけて怯ませる。

「ガッ…コノオ!」

顔を押さえて墨爆弾を発射するオクトパス・ドーパントの攻撃を、カラーズエッジとカラーズステインガーを分離させると刀身が青い魂塗料の鞭となってカラーズエッジで墨爆弾を防ぎ、カラーズステイ

ンガーで逆に拘束する。そしてカラーズはカラーズエッジを鞘に納めると、ドライバーからブルーカラーズリライントペンを引き抜いてカラーズステインガーの柄先にあるスロットへ装填、引っ張って拘束を解くのと同時にオクトパス・ドーパントを回転させて身動きを止める。

『FINISH PAINT! BLUE! COLORS PAINTING!』

「カラーズペインティング・ブルー……!」

そして青い輝きを放つ魂塗料が刃に集まったカラーズステインガーを全力で投擲。回転されて動けないオクトパス・ドーパントを貫く……もその瞬間にオクトパス・ドーパントが巨大化。カラーズステインガーが突き刺さりながらもビッグ・オクトパスとなって触手でカラーズを吹き飛ばした。

「カラーズチェイサー!」

カラーズは通常形態に戻りながら水都に來た際に乗ってきたロケットの様なペンシルを彷彿させるバイク、カラーズチェイサーに乗り込み走り出す。それを追いかけて踏み潰そうと次々と触手を伸ばすビッグ・オクトパスだが、大きさが崇つて逆に当たらず、カラーズは距離を取ると反転させ突撃する。

「巨大なキャンバスだ。君に相応しい色は決まった!」

『COLORS IMPACT!』

突撃しながらカラーズはドライバーに装填されているリライントペンのスイッチを長押し。カラーズの左足に色とりどりのインク状エネルギーが集束。それが白色になると同時に座席の上で立ち上がると跳躍。

「カラーズ……インパクト！」

空中で一回転からの左足を突き出し、飛び蹴りの態勢になったカラーズは、その左足に集まったエネルギーとカラーズチェイサーから飛び出した勢いを推進力として、凄まじいスピードでビッグ・オクトパスに突き進むと壁の様に阻んだ触手すら蹴破りながら胴体を貫き、背後に降り立つと同時に爆散、ビッグ・オクトパスは炎が吹き飛ばされるようにして消滅した。

「まずはこの光景を元に戻そう」

ドライバーから引き抜いた白いリライントペンを何かを描く様に振るうカラーズ。するとドーパントの偽物たちが大暴れで破壊された建物や車、傷つけられ様子を窺っていた人々が全て元通りとなる。カラーズが戦った範囲なら元に戻せるのである。

「……街を歪ませる奴等はまだまだいるみたいだ……この街の守護者は忙しいようだし、その間ぐらいなら引き受けよう」

水都タワーを見上げながらそう言ったカラーズはカラーズチェイサーに再度乗り込み、他のドーパントが暴れる場所に急行するのだった。

第八十話：A t o Zフォーエバー／人間で探偵で仮面ライダー

「馬鹿な、サブプランすら潰されるだ?!」

崩壊した水都タワーの壁から外の様子を、NEVER特有の強化された目で見て驚愕するリアル。何が起きているか分からないが作戦が頓挫した様で、ふらつきながらもエターナルメモリとゾーンメモリ、ロストドライバーを手にして扉を蹴破り、部屋を出て行く。まだなにかするつもりだ。止めないと。

「…ぐうっ」

追いかけてようとして、蹲る。連戦に次ぐ連戦でダメージが蓄積されている。立たないと、そう踏ん張っていたら、肩を持ち上げられる。見れば、満身創痍で息も絶え絶えのきりたんがいた。

「何一人で止めようとしているんですか、相棒」

「…きりたんはもう頑張りました。あとは私が頑張るのが筋つてもんでしよう」

「一人で戦ってもアイツには勝てませんよ。リアル・ボルコフの強さは本物だ。でも、一人で駄目でも二人なら可能性はあります」

「それでも惨敗しましたが…きりたんときリエさんがエターナルを弱体化させた今なら…! あかり、傷が痛むでしょうがきリエさんを頼みますー!」

「任せました!」

あかりにきリエさんのことを任せて何とか踏ん張り、きりたんと共に走ってリアルを追いかける。リアルは屋上に出て、水都を見下ろしていた。

「…来たか、結月ゆかり。東北記理子。…良い風だ。ここは私の生まれた街だ。自然と共存している風と水の都、いい街だ。ここに生まれたことを誇りに思う。…だが私は故郷であつても孤独だ。NEVERは私一人だけだ。なら私と同じ人間を増やすしかない、道理だろうか？」

振り返ったその表情は寂しそうで、哀しそうにロストドライバーを腰に取りつけるリアル。その目は諦めていなかった。

「…なにをするつもりですか」

「エクスピツカーは内部から破壊しました、もう撃ちだすことは…」

「まだだ。タワーにエネルギーはもう蓄積されたからね。あとは私自らの身体で、街に落とす！そうすればNEVERの街が誕生する！フフツ、一人でもいい…私は仲間がほしいのさ！」

そう笑う顔は狂気に満ちていて、言葉では止められないと言外に伝えていた。私ときりたんは顔を見合わせ、頷く。

「そうはいきません！」

「貴女は悪魔だ、私が止める！」

「笑わせないでくれ。君もそうだろ、悪魔…！」

《エターナル！》

エターナルメモリを眼前で鳴らし、目をカツと見開いてロストドライバーに装填、私達を睨みつけながらロストドライバーを展開するリアル。

「変身」

《エターナル！》

「私達は、人間を捨てた…魔物同士だ！」

エターナルに変身し、風ではためいて邪魔だったのか無敵の強さの一因であったマントを脱ぎ棄てて殴りかかってくるエターナルの拳を、両手で手首と腕を掴んで受け止め、きりたんがドロップキックで蹴り飛ばす。そして立ち上がりながらきりたんは胸に手を当てて叫んだ。

「いえ、今なら確信できます。私は悪魔なんかじゃない！他人どころか自分の痛みも感じられない、哀れなあなたとは違う！この胸には、みんなが与えてくれた心がある！」

「なに？」

「私は人間で、探偵で、そして、仮面ライダーだ！」

訝しむエターナルにそう宣言したきりたんに、私はダブルドライバーを取り出しながら小突く。

「相棒。それを言うなら、私達は、ですよ」

「そうでしたね。いきましよう、ゆかりさん」

《サイクロン！》《ジョーカー！》

ダブルドライバーを腰に取りつけると背中合わせにし、それぞれの腕でWを描く様にしてメモリを構える。

「変身！」

《サイクロン！ジョーカー！》

変身する直前、きりたんがあとは私に託したとでも言うようにポントと肩を叩いて崩れ落ち、私はきりたんの精神と共に仮面ライダーWサイクロンジョーカーに変身、左手を拳銃の様にして構えた。

『さあ、お前の罪を数えろ！』

「愚問だな、今更数えきれるかあ！」

私達とエターナルの拳がぶつかり、弾き飛ばされる。ナイフを取り出し細かく振り回して牽制しながら斬りかかってくるエターナルの攻撃を両手で捌き、肘打ちで反撃。胸を打たれたエターナルは怯み、私達はそのまま両手で猛ラッッシュ。最後に足を揃えて膝で軽くしゃがみ、踏み出して敵の足を引っ掛けて下方向に向かって背中中で体当たりする鉄山靠で吹き飛ばす。水都を守るためにアマチュアなりに格闘技は学んできたのだ、逆に私をアマチュアだと油断してもらいに喰らったエターナルはふら付きながらもゾーンメモリを取り出してナイフに装填しようとしていた。

《トリガー！》《サイクロン！トリガー！》

『させません！』

すると装填する直前にきりたんがメモリを入れ替えてサイクロントリガーとなり銃撃。早撃ちでゾーンメモリを弾いて手元から吹き飛ばす。

「なに…っ!?!」

「ど…どん行きますよ…!」

《メタル！》《サイクロン！メタル！》

続けてサイクロンメタルに変身。メタルシャフトの端を持って大きく回転させながら突撃し、牽制しながら距離を詰めると持ち替えて突き。咄嗟にナイフで受け止めて弾くエターナル。

《ヒート！》《ヒート！メタル！》

「この攻撃まで防げますか！」

「ぐっ、ぬっ…!?!」

弾かれながらサイクロンメモリをヒートメモリと交換、炎を纏って推進力を加えたメタルシャフトを上から振り降ろしてエターナルを床に叩きつける。

「対応できない：!? 一人では到底できない取捨選択だぞ：!?」

「私達は一人じゃない!」

『二人で一人!それがダブルです!』

《トリガー!》《ヒート!トリガー!》

片方が攻撃して片方が次の攻撃を考え実行する。これでエターナルも対処できない動きが可能。ダブルの強みを最大限に活かす。エターナルと私達の違いは、独りと二人だということだ。この違いはあまりにも大きい。至近距離から火炎弾を連射するも、エターナルはナイフで全て斬り払う。

「無駄だあ!」

《ルナ!》《ルナ!トリガー!》

そのまま斬りかかってきたのを、跳躍して回避。ルナトリガーに変身して空中から誘導弾を叩き込み、爆発。エターナルが怯んだところで着地する。

《メタル!》《ルナ!メタル!》

『それでも無駄ですか!』

ルナメタルに変身してメタルシャフトを振り回し、エターナルに連撃。ナイフで斬り弾いて防ぎつつメタルシャフトを掴んで引き寄せようとするエターナルだが、私達はメタルシャフトを手放してメモリを交換する。

《ジョーカー!》《ルナ!ジョーカー!》

「足を取られたら抵抗も難しいでしょう！」

ルナジョーカーとなり足元から右腕を伸ばしてエターナルの足を掴んで転倒。引き摺って引き寄せつつ手放すとその勢いのまま吹っ飛んでくるエターナル。

《ヒート！》《ヒート！ジョーカー！》

「はあああああつ！」

「ぐあああああつ!？」

そして吹っ飛んできたエターナルに炎を纏った鉄拳を叩き込み、殴り飛ばした。ゴロゴロと転がって行くエターナル。そしてエクストリームメモリが飛来、サイクロンメモリと入れ替えてサイクロンジョーカーエクストリームに変身する。

《エクストリーム！》

「エクストリームで、勝負です！」

「…これが水都を守ってきた仮面ライダーの力か…だが、容易に吹き飛ばしたのは悪手だったな」

そう言ったエターナルの手には、ゾーンメモリが握られていて。さっき落としたところまでわざわざ近づけてしまったことを察した。まずい、調子に乗って吹き飛ばしすぎた。腰のマキシマムスロットにゾーンメモリを装填して、叩く様にしてボタンを押すエターナル。

《ゾーン！マキシマムドライブ！》

「さあ、地獄を楽しみな…！」

ゾーンメモリのマキシマムドライブで呼び出された、T2メモリが全てエターナルの全身に備えられたマキシマムスロットに装填されていく。それは絶望の光景だった。

《アクセル！》《バード！》《サイクロン！》《ダミー！》《フアング！》
《ジン！》《ヒート！》《アイスエイジ！》《ジョーカー！》《キー！》
《ルナ！》《メタル！》《ナスカ！》《オーシャン！》《パペティアー！》
《クイーン！》《ロケット！》《スカル！》《トリガー！》《ユニコーン！》
《バイオレンス！》《ウエザー！》《イエスタデイ！》《エクストリーム
！》《ゾーン！》
《マキシマムドライブ！！！！！！》
「メモリの数が違う…！！！！」

瞬間、私はアクセルのマキシマムドライブによる加速とバード、サイクロンのマキシマムドライブにより高速飛行したエターナルに吹き飛ばされていた。本格的に、不味い…！

第八十一話：A to Zフォーエバー／疾風吹き荒ぶ結末

ダブルがエターナルと決戦を始めた頃。リリイ金堂はミリアル：メタルトリガー・ドーパントの猛攻を耐え凌いでいたところであった。あかりにダブルドライバーNEOを託したためメモリの力を取り戻してなお変身できないのだ。

「ちい！」

「いい加減、諦めろ！」

ラツシュ。ラツシュ。ラツシュ。両手に持った鉄棒の二刀流による乱舞を生身のリリイに何度も何度も打ち付けるメタルトリガー・ドーパント。奪い取った鉄棒を弾かれ、ハイドロープ故の頑強な肉体で耐えるが全身血に濡れて打ち身だらけのリリイだったが、その目は諦めていなかった。

「こっちだ、来い！」

水都タワー下にまで追い詰められると、一瞬上を見てから中に入り非常階段を駆け上るリリイ。辿り着いたのはエクスビツカーの置かれた中枢部。そこには逆転の一手を預けた少女が、キリエを介抱していた。

「あかり！いるか!？」

「リリイさん!? そうだ、これ…!？」

「渡すか！」

ダブルドライバーNEOを取り出して手渡そうとしたあかりの手に弾丸が撃ち込まれダブルドライバーNEOは宙を舞う。追い付い

てきたメタルトリガー・ドーパントだ。銃に組み立てていた鉄棒を構えてそのままリイに照準を向けるメタルトリガー・ドーパント。リイはそれを見てエクスピッカーが間に来る様に移動し、メタルトリガー・ドーパントが躊躇したところで転がったダブルドライバーNEOを手に取り転がりながら腰に取りつけるリイは懐から二本のメモリを取り出してボタンを押した。

《ゴールド!》《パイレーツ!》

「形勢逆転だ。変身」

《ゴールド!》《パイレーツ!》

「くっ…!」

そしてダブルドライバーNEOに装填して展開し、エルドラゴに変身。パイレーツカリバーを振り回してメタルトリガー・ドーパントの弾丸を斬り弾きながら近づいたエルドラゴは、鉄棒銃の銃身を握りしめて銃口を上に向けると、そのままパイレーツカリバーで叩き切った。

「無駄だ、いくらでも出せ……」

「慣れてない能力だから知らんがタイムラグがあるんだよ」

《パイレーツ!マキシマムドライブ!》

鉄棒を再度生成して反撃しようとする鉄棒を取りこぼしたのだが手に取る前に連続で斬撃を叩き込まれ、鉄棒を取りこぼして立ち尽くしたところにダブルドライバーNEOから引き抜いたパイレーツメモリをパイレーツカリバーの柄のスロットに装填、グルングルンと振り回し溢れだした黄金の光を刀身に集束させるエルドラゴ。

「そんな、姉…さん……」

「ド派手に行こうか!ゴールドেনストラッシュ!」

そして虚空に手を伸ばして隙だらけなメタルトリガー・ドーパントに、袈裟斬り一閃。爆散して元に戻ったミリアルはすくと腰から崩れ落ちて、壁にもたれかかり手を伸ばす。

「姉さん、姉さん……ごめん、なさい……」

「…お前のアリアルへの愛は本物だった。その美しい感情が、通じているといいな」

「ああ、私は……姉さんに、認められたかった……」

変身を解いたりリイの言葉に合点が言った様に笑ったミリアルはそのまま崩れ落ち、消滅した。……メモリの残骸と、無傷のチップを残して。

《アクセル!》

「どうやらゆかりたちがやったみたいやな。お前らの目論見も外の仮面ライダーが対処しているようだし残念やったなアブルーニ。変……身!」

一方、アクセルに変身してヒートルナ・ドーパントと対峙するついな。ヒートルナ・ドーパントことアブルーニは反論することも忘れ、心配する様にちらちらと水都タワーを見上げていた。

「アリアル、アリアルの身に何かが起きたのか…!? 邪魔だ、どけアクセ

ル！」

「どけと言われてどく奴がいるか阿呆！」

炎を纏った触手を振り回しながら知性の欠片も無く突進するヒートルナ・ドーパントの攻撃を、エンジンブレードで捌き切るアクセル。すると火の輪を形作る様に両腕を回転させ、軌道上の全てを焼き切つて行くヒートルナ・ドーパントの猛攻を避ける。

「アリアルのもとに行かせろ！俺は、お兄ちゃんなんだ！」

「なんや!?!いきなり豹変してどうした!?!」

「俺は、アリアルの為だけに生きてきた！幼い頃に事故で死んでしまった俺の妹！アリアルを蘇らせるためだけに研究して、財団Xの勧誘にも乗った！妹が欲しいというからアリアルのクローンでミリアルを作った！資金のために財団Xを介した継星財閥の依頼で継星あかりを作った！アリアルが望んだから、結月ゆかりのクローンを含むCOEFONTという戦闘集団を作った！アリアルの願いは全て叶える！アリアルが死んだら全部台無しだ！不死身なNEVERでも限度がある！万が一にもそんなことがあつてたまるか！」

「ふざけんなド阿呆」

早口でまくしたてたヒートルナ・ドーパントの伸ばした炎を纏った触手を、一瞬で叩き切るアクセル。仮面の下は怒りで燃えていた。

「なんだと!?!俺は天才だ、阿呆ではない！」

「お前は阿呆や。妹のためになんでもする、その心意気は認めてやるわ。でもそのために、何人犠牲にした？何人の尊厳を奪ってきた？何度命を軽々しく作って浪費してきた？許されると思うなよ？」

《アクセル！マキシマムドライブ！》

ドライバーの左グリップ下にあるマキシマムクラッチレバーを引くアクセルの身体が赤熱していきヒートルナ・ドーパントの触手を弾

拳を床に突き刺して遺伝子操作を行ったのか右手を樹木に変化させて私達を拘束すると再生するのを利用してナイフで斬り放し、火炎を放って炎上させたかと思えばその上から凍らせ、紫の炎を灯した拳を叩き込んで氷塊ごと砕いて私達を殴り飛ばす。あまりの猛攻に、エクストリームでも対抗できない。

「連続マキシマム、NEVERだからこそ耐えられるが普通の人間がやれば自殺行為だ！」

そのまま吹き飛ばされた体勢のまま空中で施錠されて固定され、手にした伸縮させたメタルシャフトでの連撃、続けざまに手にした剣で水を纏った斬撃、糸で拘束されて振り回され、その軌道に出現した城壁の様なエネルギーに叩きつけられる。

「ぐ、ぬ…」

「ははは、私はバケモノだ！」

そのまま右肘からロケットの如く炎を出して加速して拳で打ち出した髑髏状のエネルギーに噛み付かれ、手にしたトリガーマグナムでの螺旋を描く貫くような銃撃で撃ち抜かれたかと思えば脚を掴まれて振り回され、投げ飛ばされたところに赤い雷が直撃。勝手に体が動き出してエターナルに自ら向かったところに、ダブルエクストリームの様な両足蹴りを受けて吹き飛ばされる。

《エターナル・マキシマムドライブ！》

「ブラッディヘルブレイド。これで終わりだあ！」

そしてエターナルメモリをナイフに装填してボタンを押しながら跳躍して水都タワーの天辺に飛び乗ると、風車に蓄積されたエネルギーを吸い上げて巨大な緑色のエネルギーの刃を形作ると風車を一

撃で斬り裂いて、落ちてきた風車に巻き込まれて私達は屋上から落下してしまった。

「うわああああああつ!?!」

プリズムビツカーを手放し、なすすべもなく落ちて行く私達。もう、ダメだと思ったその時。

仮面ライダー!

仮面ライダー!

仮面ライダー!

仮面ライダー!

仮面ライダー!!!!

声援が聞こえた。それは、水都の人々の祈りだった。そして、声援が形になった様に一陣の風が吹く。その風は私達に集まり、プリズムサーバーが黄金に輝いた。

「ゆかりさん、これは…!」

「風です…水都の風が、私達に、力を!」

次の瞬間、私達は翼を得て飛んでいた。黄金に輝いたプリズムサーバーの背中から風車の様な六枚の翼を生やして、空を舞っていたのだ。名付けならサイクロンジョーカーゴールドエクストリームか、リイが好きそうだ。水都タワーの風車が地面に激突する中で、私達は上空に向けて舞い上がる。目指すは頂上のエターナルだ。

「どこまでも私に抗うか、水都!地獄の楽園に送ってやる…ネバーエインディングヘルウ!」

するとエターナルはナイフに溜めたエネルギーを球状に纏めて発射。緑色のエネルギーの巨大な弾が渦を巻いて襲いかかってくるも、私達は空中で回転して風を纏いバリア状にして激突。回転の勢いで吹き飛ばす様にして、そのままエターナルに飛び蹴りを叩き込んだ。

「があああああ?!これが…そうかあ!これがあ!」

「そうです。それが死ですよ。リアル・ボルコフ」

「もつと違う形で会いたかったですよ…」

「ははは、こうならないと会ってもいないだろうさ!久しぶりだなあ、死ぬのは!」

「さあ、お前の罪を数えろ…!」

そしてエターナルは仮面が割れてリアルの顔を露出させて笑いながら爆散。同時に装填されていたT2メモリも次々とブレイクされていき、最後にエターナルメモリが粉々に砕け散って、この事件は幕を閉じたのだった。

第八十二話：A to Zフォーエバー／残された君の名は

「っはあーはあ、はあ………生きている………のですか？」

水都某所。トレーラーに偽装し水都に持ち込んだアベルーニの簡易研究室にしてCOEFONTの仮拠点。緑色の液体に満たされたポッドから自動で排出され目覚めたミリアルは、何も身に纏ってない状態でぺたぺたと緑色の粘液がついた足でトレーラー内を歩き、傍のポッドの中で眠っているもう起きもしない空っぽのブロッサとウララのボディを一瞥する。

「…そうか、リレイ金堂は私達の弱点を知らずに私を倒したのですね…早く、姉さんの加勢に行かないと…」

壁の一部を触れると回転して現れたスーツケースを手に取り、中に入れられた一張羅に袖を通してハンドガンを手にしたミリアルはハンドガンを懐にしまってトレーラーの荷台から人目を気にしながら外に出る。ちょうど周囲の人々は何かに気を取られてミリアルの存在には気付かない。それを確認してから道に降り立ったその瞬間、一陣の風が舞ってミリアルの髪がふわりと撫でられた。

「姉さん…!?!」

その風に視線を取られて、見てしまったのは自分のオリジナルにして全てを尽くくさんとした最愛の姉の最期。黄金に輝くサイクロンジョーカーエクストリームとなったダブルにエターナルが蹴り飛ばされる、その瞬間の光景だった。

「「うおおおおおおおっ！」「」

「「やったあああああつっ！」」

「そん、な……」

爆音の様な歓声上がる中で、ミリアルは信じられないと言った視線を空に向けたままぺたんとその場に座り込み涙を流す。アリアル・ボルコフは悪魔だった。それでもミリアルにとっては、この世でただ一人の最愛の姉だったのだ。

数日後。エターナルに勝利したとはいえ、水都タワー崩壊に街中で暴れたT2ドーパントやヒートルナ・ドーパントの幻影ドーパントの被害。COEFONTは、決して軽視できない爪痕を水都につけた。ドーパントの被害こそ外の仮面ライダーによって最小限に抑えられたらしいが、それでも水都アウトレットモールなどは一時休業しているらしい。

そして傷を癒した私達は、COEFONTに破壊された事務所は現在鳴花ヒメ・ミコトの二人が修理中なので杏璃万結の自宅だった第二事務所で今回の依頼人であるキリエ・T・ノーマンに報告書を渡していた。

「私はFBIに戻るわ。…財団XのCOEFONTから送り込まれたスパイでCLEARだけど、受け入れてくれるって上司から」

「それはよかった。…貴方に罪が無いとはいえません。でも罪を数えてやり直せたあなたなら、大丈夫だと思います」

「……私が成長した姿って改めて見るとなんかムカつきますね」

「お前が実年齢ならキリエと同じぐらいだもんな。いたっ」

報告書を渡す横でリリイがきりたんに脛を蹴られている。なんかいつもの光景である。あかりも、深呼吸してからキリエさんの手を握る。

「同じCLEARとして…いつでも相談に乗ってくださいね。私達は、仲間ですから」

「ええ。あかりもなにかあったら頼ってね。…そうだ、COEFON Tといえば…捕らえたアブルーニの証言から奴等の拠点だったトレーターを見つけてFBIのエージェントが調査したのだけど、不可解なところが一つだけあったらしいの」

「不可解なところ、ですか？」

「ええ。ウララとブロッサは再生された意識の無い肉体が残っていたらしいのだけど、ミリアルだけいなかったの。何か知らない？」

「ミリアルだったらリリイさんが相手したはずですが…？」

そう言うあかりの視線が向けられると、リリイは首を傾げた。

「ああ、ちゃんと倒したぞ？」

「チップは破壊しましたか？」

「チップ？…ああー」

私に言われて思い出したのか顔を青くさせるリリイに、私ときりたんとあかりとキリエさんは頭を抱える。完全に忘れていたようですね…。

「…ならどこかに生きてるのかしら。すぐに指名手配して…」

「あ、ちよっと待ってください。電話です。もしもし？」

するとスタックフォンが着信音を鳴らしたため開いて相手を確認

する。ミコトさんだ。

「はい、もしもしミコトさんですが？どうしました？」

《「あー、ゆかり？事務所にお客さんなんだけど…」》

「お客なら今は休業中だとお伝えくだ…」

《「いや、この間襲撃してきた一人の黒髪の女の子なんだけど…どうする？」》

「はい？」

……指名手配があつちから来るなんて私、聞いてない。

念には念を入れて、水都第二屋外ステージに来てもらうようミコトさんに連絡して、私とあかりでやってきた。きりたんはミュージアムの件もあるので第二事務所でお留守番である。リリイはもしものための護衛だ。キリエさんは念のためにFBIの仲間を引き連れて周囲で待機している。そこには、以前見た格好なれど数日間彷徨っていたのか薄汚れた姿になったミリアルが、その手に壊れたロストドライブを大事そうに握りしめて待っていた。

「ミリアル・ボルコフ……」

「私に名字はありません。ただのミリアルです」

「…なんで、投降したんですか？」

あかりが警戒しながら尋ねる。一度騙されているのだ、警戒して然るべきだろう。するとミリアルはお腹を撫でながら答えた。

「…単純な理由です。CLEARは人一倍エネルギーを消費する…もう限界なんです、このままだと飢え死にしよう…復元できるアベルーニも捕まったとニュースで知って、頼れるところは貴方達しかいなかった」

「…水都タワーでの惨劇については後から知りました。あれだけのことをしておいて、私達に助けを求めますか?」

「許してくれとは言いません。だけど、私には、死ねない理由がある…！」

そうやってエターナルの物であろうロストドライバーを握りしめるミリアル。その目には決意が宿っていた。

「この拾った命は最後の砦。私が死ねば誰も本当のリアル姉さんを知る人間がいなくなる。それだけは耐えられない。捕まえると言うなら抵抗します。だけど、私を保護してくれると言うのなら…：罪滅ぼしでもなんでもします。人殺しでも、なんでも…！」

「…はあ。そんなこと望みませんよ」

ミリアルは強い。例えメモリが無くても、キクさんと西友がやられた精神干渉能力もあって苦戦必至だろう。今ここにはあかりやキリエさんたちもいる。守って戦うのは分が悪い。…わかっていてキリエさんと一緒にいる時を狙ってこちらに接触したな。計算高い、油断ならない奴だ。…でも。

「リアルを思う気持ちは、本物ですね」

「…はい。ひしひしと伝わってきました。…キリエさん。さつそくだけど頼ってもいいですか?」

「…私も立場が危ういのに、ずるいわねあかり。わかった、司法取引しましょうミリアル」

「キリエ。感謝します」

姿を現したキリエさんに頭を下げるミリアル。あかりも今回の一件で厳かになったなあと感心した。

「というわけで新しい仲間です。司法取引で私達に協力するという形で減刑することになりました」
「よろしく」

数日後、完全に修復された継星探偵事務所で、私の紹介で入って来てペこりと頭を下げるミリアル。椅子に座っていたリリイと、コーヒーを注いでいたついなさんは噴き出した。私とあかりときりたん以外に知らせてないのだから当たり前だ。

「アホか！マフィアのボスの次はテロリストまで入れるなんてどんな探偵事務所やねん!？」

「というわけでじゃねえよ。オレ、こいつまだ許してないぞ」

「私の仲間みたいなものだから放っておけなくて…無理やりキリエさんになんとかしてもらいました!」

「それ言われると何も言えへんやろがい」

「まったく…後輩か。こき使うから覚悟しろよ。…えつと」

殺し合っとなおちゃんと覚えてなかったのか言いよどむリイに、ミリアルは告げる。アリアルを生かし続けるために引き継いだ名を。

「私はミリアル。ミリアル・ボルコフ。アリアル・ボルコフの妹です！」

ボイロ探偵W設定（五十九話〜八十二話まで）

・結月紫^{ゆづき ゆかり}／仮面ライダーダブル／仮面ライダージョーカー

継星探偵事務所に所属している探偵。自分のクローンと出くわしたりと相変わらず波乱万丈。ジョーカーのT2メモリを引き合い仮面ライダージョーカーに変身した。アマチュアなりに格闘技は学んでおり、鉄山靠を披露した。

・きりたん／東北記理子^{とうほく きりこ}／仮面ライダーダブル／サイクロンファン
グ・ドーパント

継星探偵事務所に所属している安楽椅子探偵。自分が成長した姿のキリエに複雑な感情を抱く。誘拐されてエクスピツカーのパーツにされたものの利用して逆転の一手を見出した。肉体だけサイクロンファンング・ドーパントにされたものの悪影響なし。

・継星燈^{きずな あかり}／仮面ライダールクス

継星探偵事務所の所長にして継星財閥のご令嬢。幼い頃に財団Xに遺伝子検査されていたことが判明。その正体は本物の「継星あかり」の代わりに作られたCOEFONTのCLEARで人間ではなかったことにショックを受けたが、仲間のおかげで立ち直り仮面ライダーに変身を果たした今回の裏主人公。CLEARとして燃費こそ悪いが人間離れた怪力と頑強さを持つ。虚音威風の孫で継星^{きずな}円と^{まどか}継星惣一^{そういち}の娘。

・如月追雛^{きさらぎ ついな}／仮面ライダーアクセル

警視の資格を返上する覚悟でT2メモリを集めていた方相氏にして警視。国際警察の介入を知らされてなくて上層部に不満たらたら。メモリが使用不可になった際はエンジンブレードを振り回して生身で奮闘した。国所属の方相氏なので「獄王」の教会を知っていたりカラーズ^{カラーズ}の存在も知っていた。

・リリイ金堂／金堂百合／仮面ライダーエルドラゴ

継星探偵事務所に所属している元マフィアのリーダーだった探偵。今回のMVP。部下二人が暴走したり自らの発言のせいで裏切ったあたりを庇って傷を受けたり大変だったがハイドープとしての頑強さで復帰してメタルトリガー・ドープ相手にも生身で渡り合った。元マフィアであるため敵になりうる仮面ライダーを警戒して存在を知っていた。

・呪怨キク／スカル・ドープアント

リリイの相棒。T2スカル・ドープアントに強制変身された上でミリアルの精神操作により自身の抱いていた「なぜ罰せられないのか」という不満が爆発した。スカルなのは元々使用していたギロチン↓生首↓頭蓋骨から。

・西友蒼司／オーシャン・ドープアント

リリイの腹心。T2オーシャン・ドープアントに強制変身された上でミリアルの精神操作により常日頃から爆発させてた「何故キクが処罰されないのか」という不満が爆発した。オーシャンなのは名前の蒼から。

・鳴花緋女

仮面ライダーの事を知っている一人。破壊された事務所を修理したり裏方で活躍。

・鳴花三言

仮面ライダーの事を知っている一人。破壊された事務所をいつも直している人。

・月読哀

東北家の母親。仮面ライダーのピンチにリボルギヤリーで駆けつける。その際に無防備な至子を見て思わず殺害しようとするも、自身

の娘であるためか実行できなかつた上に純子に見られて精神が不安定になり逃げだした。それ以降の動向不明。

・東北至子／東北外道^{ソトミチ}／ナインテイルフォックス・ドーパント
ミュージアムの首魁。COEFFONTを「亡霊共」と呼び、T2メモリを横取りしようとする。さらにどさくさに紛れてきりたんを回収しようとしたもののエターナルに完全敗北を喫する。演算能力がどうの、アリアルのやり方で不死身になりたくないと言語が…？

・東北純子／アルテミス・ドーパント
ミュージアムの幹部。トリガー・ドーパントの相手を務めた。アイの凶行を目撃した。

・東北蛇門／エクスタシー・ドーパント
ミュージアムの幹部。メタル・ドーパントの相手を務めた。きりたんを助けられるためいつもよりやる気を出してた弟。

・東北星香／シャーク・ドーパント
ミュージアムの幹部。ヒート・ドーパントの相手を務めた。水都を愛する仲間としてダブルを助けるのはまんざらでもなかつた模様。

●第十五章「A to Zフォーエバー」の登場人物

・アリアル・ボルコフ／仮面ライダーエターナル

傭兵集団COEFFONTのリーダー。アペルーニの実妹が事故死したあとNEVERとして復活した存在であり、この世で唯一のNEVERであるために仲間を増やそうと目論んだ。ロシアの格闘術「システマ」がベースのナイフ術を得意としていて、生身だろうがファングジョーカーを圧倒する戦闘力を誇る。あかりを本気で仲間と思い、

裏切ったキリエを肅清しようとするなど仲間意識が高いがだからこそ自分が他と違うのを許せなかった。

・ミリアル・ボルコフ／ヒート・ドーパント／メタルトリガー・ドーパント

COEFFONTの一員でアリアルのCLEAR。アリアルが「妹が欲しい」と願ったためアベルーニに作られた存在でアリアルを慕っている。足技を主体とした格闘戦が得意な他、作られる際に財団Xが入手した超能力兵士クォーツアの遺伝子も使われており精神干渉能力を有する。何の因果か一人だけ生き残り、アリアルの最期を目撃して絶望するもアリアルを知るのは自分一人だけになってしまったと自覚。生き残るために交渉し継星探偵事務所の探偵となる。

・アベルーニ・ボルコフ／ルナ・ドーパント／ヒートルナ・ドーパント

COEFFONTの一員で財団Xの天才科学者。実妹のアリアルを溺愛しており、その要望を叶えるために財団Xすら裏切った程。他の人間は実験材料の道具程度にしか見ておらず、すぐ解剖しようとする悪魔。アリアルの計画が破綻したことにより動揺、ついに敗北して捕まった。

・ウララ／トリガー・ドーパント

COEFFONTの一員でゆかりのCLEAR。黒服に身を包んだゆかりとそっくりの少女。銃器の扱いに長けている。CLEARだということがコンプレックスで、オリジナルのゆかりを越えることを目指している。元キャラは結月ゆかり麗。

・ブロッサ／メタル・ドーパント

COEFFONTの一員であかりのCLEAR。タンクトップに身を包んだ幼いあかりの姿をした少女。怪力を活かした棒術に長けている。戦闘狂であり強い奴と戦うのが大好きな凶暴で無邪気な性格。

元キャラは継星あかり蕾。

・キリエ・T・ノーマン／サイクロン・ドーパント

COEFONTの一員できりたんのCLEAR。財団Xのスパイとして国際警察に入っている、大人の姿をしたきりたん。東北至子の依頼できりたんの遺伝子から生み出された「運命の子」の予備。しかし不完全であり地球の本棚にも安定して接続できないため失敗作と断じられていた。反抗心から裏切り国際警察としてCOEFONTを止めようと試みるも、アリアルが強さを前に心が折れ屈服してしまいうもきりたんと共に反撃、逆転の一手を作った。事件後は国際警察として財団Xに対応している。元キャラはAIきりたん。

・旦あさくら棕竹志たけし／プリズナー・ドーパント

アリアルの手引きでメモリを手に刑務所を脱走した逃亡中の凶悪犯。元キャラは仮面ライダー龍騎の浅倉威。

・阪井芽衣子／クイーン・ドーパント

「Dの微睡」で登場した水都総合病院の監察医。

・葉常海斗／ユニコーン・ドーパント

「Dの微睡」で登場した水都総合病院の天才外科医。

・小春六花／ナスカ・ドーパント

水都の情報屋であるJKコンビの一人。

・夏色花梨／ウエザー・ドーパント

水都の情報者であるJKコンビの一人。

・琴葉茜／アクセル・ドーパント

「Eがついてくる」に登場した琴葉神社の巫女でゆかりの同級生。葵の双子の姉。原作での亜希子ポジになったりした。

・琴葉葵／アイスエイジ・ドーパント

「Eがついてくる」に登場した琴葉神社の巫女でゆかりの同級生。茜の双子の妹。

・桜井カズキ／仮面ライダー獄王

ゲストキャラ。アーニャ@オタクさんの「仮面ライダー獄王（ゴクオー）」の主人公。「雑貨屋 東堂」で働きながら獄王として妖怪から人々を守っている青年。アリアルアリアルの放送を見て恋人と共に水都まで救援に来た。

・染谷色希／仮面ライダーカラーズ

ゲストキャラ。蒼ニ・スールさんの「仮面ライダーカラーズ」の主人公。「アートショップ月城」にて働きながらカラーズとして歪色衆と戦っている性別不明の人物。店に置く品は水都から取り寄せているらしく、その関係もあり救援に来た。

・プリズナー・ドーパント

『脱獄囚』の記憶を宿したドーパント。どんな壁をも突破するパワーを有し、武器の鎖を自由自在に操れる。変身者はあさくら たけし巨椋竹志。

・ユニコーン・ドーパント

『一角獣』の記憶を宿したドーパント。どんな物体をも貫く貫通力を有する角の様な剣を武器とする。元ネタは風都探偵のスクリーム・ドーパントのレイズから。変身者は葉常海斗。

・クイーン・ドーパント

『女王』の記憶を宿したドーパント。城塞の様なドレスを模した、砲弾も撃てる装甲を有する。変身者は阪井芽衣子。

・サイクロンフアング・ドーパント

『疾風』『牙』の記憶を宿したドーパント。全身に竜巻の様な牙が展開されており、それによる斬撃と風の牙による制圧攻撃を得意とする。変身者は意識をエクスピッカーに取り込まれた東北きりたん。

・ヒートルナ・ドーパント

『炎熱』『幻想』の記憶を宿したドーパント。財団Xの開発したものを強奪したTFメモリでアベルーニが変身した。炎を纏った触腕の他、パワーアップした幻影生成能力を持ちドーパントの軍団を使役できる。

・メタルトリガー・ドーパント

『闘士』『銃撃手』の記憶を宿したドーパント。財団Xの開発したものを強奪したTFメモリでミリアルが変身した。鉄棒をいくつも生成できる能力を持ち、それを組み合わせてロッドにしたりライフルにしたり、壁を作ったりと臨機応変に戦える。変身者のセンスが問われる玄人向けのドーパント。

・COEFONT

財団Xに所属していた世界各国で破壊活動を行うテロリスト集団。
CELL遺伝子 OPERA操作TION系 EN際DL眼ESSな NEXT次世代
FEAR恐れを知らないLES兵S器 OR有G機AN的ISM機
TYPE型WEA兵P器ONの略で、財団Xの天才科学者アベルーニ・ボルクフの生み出した二種類の生体兵器、死者蘇生兵士ネクロオーバー：通称NEVEネRバーと、クローン兵士クローンオーバー：通称CLクEAリARアーの通称。

CLEARは人造人間であり専用の培養機から生まれる。特に「死にやすい」戦闘員は、頭に埋め込まれたチップを介して死んだ瞬間の意識データが保存されて転送され、新たな肉体を持って生誕することで擬似的に不死身の存在。その代わり本当の人間と異なり塩基配列に欠陥が存在しており、メモリブレイクされると消滅してしまう程に構成が希薄。脳のリソースを動体視力に回すことで自我すら犠牲

にすることで対応できない動きなら演算全てを宛がって、見てから対応できる。

・TFメモリ

財団Xが研究していたT2メモリとは別ベクトルの発展形ガイアメモリ。Fはfusionの意で、二つの記憶を組み合わせて一つのメモリに集束させている。負担が大きく、ミリアルはCLEARなためそのまま消滅したもののアベルーニは・・・

最終局面W

第八十三話：怪盗I参上／豪華客船インペリアルスター

COEFFONTの事件から数日。最終決戦にてエターナルに破壊された水都タワーが修理されているのを眺めながら自分で淹れたコーヒーを啜る。…うん、やっぱり喫茶「弦巻」から仕入れたコーヒーは美味しいな。下手くそな私でも美味くなるのはいいものだ。マキさんのお父さんには感謝しなくては。マキさんも早く釈放されるといいですけど。知り合いの腕のいい弁護士を紹介したし、器物損壊罪（と仮面ライダーの負傷）ぐらいしか罪が無いから大丈夫だとは思いますが。

「ゆかりさん、これ美味しいですね」

「初めて…初めて、他人に私の淹れたコーヒーを美味しいと言ってもらえた…！」

私の淹れたコーヒーを飲んだミリアルに笑顔で言われて、思わずぐっと拳を握り震わせる。嬉しい。いつもいつも不味い不味い言われて…：やっと私のコーヒーの味が分かる人が…！すると携帯ゲームをしていたきりたんが横目で見てきて口を開く。

「単純にミリアルが味音痴なだけだと思いますよ。CLEARは食事で回復しますが味には無頓着だったみたいですし」

「きりたん!？」

「アベルーニの淹れたコーヒーより美味しいですよ？」

「へえ。ちなみにアベルーニは料理の類は？」

「クソ不味かったです。もっぱらジャンクフードで補ってました」

「ぐふっ」

リリーの質問に感情を失った真顔で応えたミリアルルに、精神的ダメージを受けて机に突っ伏す。

「そ、それでも私の淹れたコーヒーが美味しい可能性…」

「ゆかりさん、いつもよりは美味しいですけどついなさんのが美味しいです」

「ついなさんは反則ですって！」

ついなさんどんな豆でも美味しく淹れるの卑怯だと思う。完全敗北した私は突っ伏したまま気分を変えようとリモコンを手に取りテレビをつけると、水都テレビのチャンネルで仮面ライダー特集をやっていた。

「しっかし閑古鳥が鳴いてますねー。水都の話題は仮面ライダー一色なのに、そのせいかドーパント事件が減少したせいですかね」

「まったくだな。公表とか駄目なのか？仮面ライダーが経営している探偵事務所とか絶対話題になるぞ」

「人知れず街と人を守るのが仮面ライダーですよ、新参ライダーなら知っておいてください」

リリーの言葉にきりたんのゲームしながらの辛辣な言葉。どうでもいいけどゲームに集中しながらこっちの会話も聞いているんだろうか。

「私もう変身できませんし…」

「？ ロストドライバーなりを作ってもらえばいいじゃないですか。ライダーシステムの開発者も仲間なんでしょう？」

「…月読アイのことですか？」

人差し指同士をつんつんしながら言うあかりにこてんと首を傾げたミリアルルの言葉に思わず訪ね返す。COEFONTでは私達と月

読アイは仲間と言う認識だったのか。

「月読？東北、じゃなくてですか？」

「…どこまで知ってるんだ？」

「えつと…東北藍という東北家の裏切者がライダーシステムを作つてミュージアムに対抗している、ということぐらいですかね」

「月読アイが仲間なのは微妙なところですね。時に助けられ、時に敵対し……どういう関係なんですかね？」

「協力者でよいのでは？」

あかりはそう言うが、きりたんもリリイもノーコメントだ。それもそうだろう。エターナルの件では世話になりましたし、主についてなさの黒幕が月読アイだということが尾を引いている。全ては私にダブルをやめさせて代わりについなさんかりリイできりたんをダブルに変身させるためだ。邪魔な私を排除しようとしている。そして…

「エターナルに敗北した際、私達は月読アイに助けられました。その時見た光景から…恐らく、月読アイは東北外道を憎んでいる。…だけど、実の娘であろう東北至子の肉体に手を出すことはできなかつた…」

「…ずん姉さまに見られたことで狼狽もしていましたね」

「…あれ以降音沙汰ないですし、心配ですね」

恐らく東北外道への復讐のためにきりたんすら利用しようとしているけど……それでも悪い人じゃないと思う。なんで東北外道を憎んでいるのか、子供の身体なのか、何も知らないけれど……。

「そーいやエターナルのロストドライバーってどこで手に入れたんだ？」

「財団Xがミュージアムから入手した試作型の設計図でアベルーニが

作りました」

「アベルーニ優秀すぎませんか？」

そんな会話をしているとピンポンとインターホンが鳴る。お客さんかな？あかりが立ち上がって扉を開けると、紫髪をポニーテールにしているメイドがいた。な、何ごと？

「ごきげんよう、継屋探偵事務所の皆さま。私はラグナ・ポンド。初峯家当主、初峯九王様からの命により招待状を渡しに参りました」
「九王、ってあの？」

サイクロンジョーカーエクストリームに初変身を果たした事件、フレンジーの事件で訪れた屋敷の主の名前だ。私達が仮面ライダーだと言うことを知っている数少ない…ということはないが、まあ数少ない人間の一人だ。祖母がミュージアムの関係者だったり、メイドがドーパントだったりと数多の不幸を乗り越えて、婚約者を決めて再スタートしたはずだが…ラグナ・ポンドを名乗ったメイドが取り出した捺印された封筒をあかりが受け取り、封を切って中身に目を通してから私に手渡してきた。

「どれどれ…【前略。以前、事件を解決してもらった様に、今回のCOE FRONTの事件でも君達が助けてくれたのだろうか？初峯家は恩義を決して忘れない。そこで君達を、初峯家が主導して建造した豪華客船「インペリアルスター号」の処女航海で行われる船上パーティーに招待したい。二泊三日で水都に戻るツアーだ。ぜひ堪能してくれ。初峯九王】…船上パーティーですか。」

「…ほう、豪華客船」

「パーティー…ごちそう…じゅるり」

「ミリアルさん、気持ちは分かりますがよだれ垂れています」

「旅行ですか？ゆかりさん」

「そのようですね。でもこれは丁寧に断りま……」

「待った待った待った！」

断ろうとしたら止めてきたのはリリイ。その目は「興味あります！」と書いているように見えた。

「初峯家といやあ水都でも指折りの富豪だ。お前たちが関係しているのは知らなかったが、そんなところの主がわざわざ招待してくれてるんだ。無下にするのも駄目だろ」

「いや貴方が興味あるだけでしよう？」

「あ、あの、私も乗ってみたいですよ…！」

「私も豪華客船は久しぶりだし乗りたいですよ！」

「いや貴方達の意見は尊重したいですが水都を守らないと…」

「ついなさんに街のことは任せてたまにはゆっくり休んでいいと思いますよ。何より興味深い！」

「きりたんまで…」

リリイ、ミリアル、あかり、きりたんと私以外の事務所のメンバーは賛成らしい。私一人だけ突っぱねても無駄ですね。

「はあ…わかりましたよ。ご厚意に甘えるとしましょう」

「わーい、やったー！」

「やりましたね、あかり！」

「よし、そうと決まればキクと西友にも伝えるか」

「ゆかりさんも気になってはいたんでしょう？」

「…そりゃあまあ」

そんなこんなで旅行することになった私達継星探偵事務所の面々。まさか、同時刻に初峯九王のもとにある手紙が送られていたとはつゆとも考えなかったのだ。

【予告する！今宵、インペリアルスター号で行われるオークションの
目玉「真実の愛」をいただきに参上仕る。怪盗Ⅰ】

第八十四話：怪盗Ⅰ参上／予告状、白き影

豪華客船インペリアルスター号。巨大なクルーズ客船。あの事件が起きる前から初峯家の初峯弥美はつみねやみが主体となって建造していた豪華客船で、水都を盛り上げる意図で計画していたものを九王さんが引き継いで完成させたらしい。…ミュージアムの関係者だった故・初峯弥美が計画していたものというのが不安点だが、まあ豪華客船に偽装したメモリ工場と言うことはないだろう。

「というわけでやってきました。豪華客船！」

「私達みたいな貧乏探偵じや絶対お目にかかれない船ですnee」

「豪華客船には何度か乗ったことがありますがかここまでののは初めてです！」

「ははは！やっぱり豪勢なのはいいな！金ぴかじゃないのが残念だが！」

「今すぐ金に塗ります……！」

「やめい。洒落にならない」

「エル・ドロードってこんなのばつかなんですか……？」

上から私、きりたん、あかり、リリイ、西友、キクさん、ミリアルと継星探偵事務所とその部下(?)のフルメンバーだ。ついなさんたち警察組やJKコンビ、鳴花ーズといった水都イレギュラーズの面々はさすがに誘えなかった。警察組はそもそもCOEFONTの後処理に追われ、私達が仮面ライダー故のお誘いなためそれを知らないJKコンビやネルさんは誘えず、鳴花ーズの二人はお店があるからと断られた。ちなみにエル・ドロードの二人はリリイの一声であっさり来た。COEFONTの事件のことで落ち込んでいたため渡りに船だったらしい。

「とりあえず九王さんの元に行ってきます。招待してもらったのだから挨拶をしないと」

「じゃあ私達は先に船上パーティーに向かいますね」

「ごちそう！」

「きりたんの守りは私に任せておけ。ミュージアムの幹部勢揃いでも蹴散らしてやる」

「私も力及ばずながら……！」

「ミリアルはともかくリリイ、ホワイトアウト一人に負けてませんでしたか？」

「リリイ様をなめるな……！」

「リリイさんを侮られているのは癪に障るのはわかるけど落ち着け西友」

リリイの言葉に反応したら部下二人にキレられた。なんかキクさん素直になつた気がする。

きりたんたちと別れて、見晴らしのいいデッキに向かう途中。見覚えのある顔があつたので駆け寄る。

「あ、ラグナさん。こんにちは。九王さんがどこにいるか知りませんか？ お礼を言いたくて……」

「？ ……ああ、探偵の結月ゆかり様。九王様ならこの上の操舵室で船長と話していらっしやいますよ」

私の顔を覚えてなかったのか疑問符を浮かべて首をかしげていたメイドのラグナ・ポンドさんだったが無事思い出してくれたらしい。よかった。するとラグナさんの隣に立っている警備員の恰好をした金髪の青年が気になった。

「あの、ラグナさん。そちらの方は…?」

「ああ、こちらは警備主任の…」

「加賀煉かがれんです。九王様の言っていた探偵ですね。お待ちしていました」

「私を待っていた?」

佇まいを正して敬礼する煉さんに首をかしげる。なんのことだ。今回は依頼ではなく招待のはずなのだが。…何か事件でも起きたのだろうか。

「どうぞこちらに。…九王様、結月ゆかり様をお連れしました」

階段を昇るとそこは操舵室になっていて。煉さんが扉を開けて中に入っていくので続けと、そこには九王さんと、深紅の赤毛で船長帽と白と青のコートを着ていて右目に眼帯を付けている男装の麗人がいた。

「やあ、結月ゆかり!よく来てくれた!招待しておいて悪いが君の力を借りたかったんだ!」

「九王さん。このたびはお誘いどうも…:そちらは?」

「私は船長の赤城あかぎ菟南かんなだ。九王様、この方は?」

「おぼばが亡くなったあの事件を解決してくれた探偵だ。名探偵だ、今回のこともきつと力になってくれる」

「なにかあつたんですか?」

船のオーナー、船長、警備主任が一堂に介して探偵を待っていたというのもおかしな話だと思いきや尋ねると、神妙な顔で懐から封が切られた封筒を取り出し差し出してくる九王さん。受け取って中身を見てみると、こう書いてあった。

【予告する!今宵、インペリアルスター号で行われるオークションの

目玉「真実の愛」をいただきに参上仕る。怪盗Ⅰ】

「……怪盗Ⅰからの予告状？」

見たことも聞いたこともない怪盗からの予告状。いたずらかなにかの可能性があるが、本当なら大変だ。

「ああ、そうだ。君達に招待状をラグナに言って渡したその日に送られてきた。聞いたことのない怪盗だが、「真実の愛」はおぼろげが生きていた頃に計画していたオークションの品だ。盗まれるわけにはいかない。警備主任と船長に話して警備を強化してもらっていたところだ。だがどこに潜んでいるかわからない。怪盗Ⅰを見つけ出すために結月探偵、君の力をお借りしたい」

「そういうことでしたか……一応念のために仕事道具も持って来たので調査できますが……」

念のためスタックフォン、スパイダーショット、バットショット、フログポッド、デンデンセンサー、リリーのビートルフォン、あと旅行の記録用に杏璃万結からクロックロウを持って来てある。最後だけ時計型だからただの荷物だったのだが、役立つ時が来るとは。エターナルのマキシマムドライブで活躍どころを奪われていたのだ、ちようどいい機会だろう。

「あとで継星探偵事務所の所長に話して正式な依頼として依頼させていただく。どうだろうか？」

「……本来なら休暇中に依頼は受けませんが、知らない仲じゃありませんし……引き受けましょう」

実質私がリーダーみたいなどころがあるので、了承する。みんなには悪いが休暇に仕事を割り込ませてもらおう。

「そうか、そうか！ありがたい！赤城船長、加賀警備主任。君達も彼女

に協力してくれ。頼んだぞ」

「了解」

「よしよし。私はパーティーに戻るとしよう。主催がないのもおかしな話だからね」

船長と警備主任が了承し、それに満足げにした九王さんは操舵室を去って行った。

「早速質問なんですが…船長。船員に怪しい人間はいますか？」

「私は雇われ船長だ。船の人間について完全に詳しいとは言えないが……露骨に怪しい者はいないな」

ふむ。確証は持てないがひとまず放置。こんな大きな船の船員を全部覚えろと言うのも無茶な話か。

「では警備主任。怪しい人間は乗船しましたか？」

「船員以外は招待状を持っているお客様しかお通ししていないので、怪しい人間はいないと思います。…目につく二人組は見かけましたが」

「とうとう?」

「いえ…揃いの白づくめの服を着ていたので目に入ったというだけです。東北至子様と仲良く談笑していました」

「東北至子!?それに白づくめ……」

そうか、東北家も水都の名家で九王さんは彼女がミュージアムの首魁とは知らないからいてもおかしくないのか。…リリーの言ったことが本当になりそうだ。それよりも東北至子と話していた白づくめの二人組と言うのが気になる。そんな特徴、最近も聞いたような…えっと、たしかCOEFONTの事件で………あ。

「まさか……警備主任、東北至子は何処に!?!」

「動いてなければ恐らく二番デツキかと……」

「ありがとうございます！」

慌てて操舵室を飛び出す。思い出した、白づくめの衣装はリリイから聞いた財団Xの構成員の特徴だ。リアルやアベルーニが白い衣装を着ていたのもそれだとかミリアルから聞いた気がする！つまり、東北至子と話していたのは取引かなにか！道中の壁に付けられた地図で位置を確認しながら二番デツキに飛び出すと、楽しいげに海を眺めていた白づくめの服で赤みがかった金髪をツインテールに結んだ、キャリーケースを携えた少女を見つける。こんな少女が財団X：!?

「見つけましたよ…財団X！」

「あら？見つかっちゃったわ。こんにちは、水都の探偵さん」

振り返る少女。鋭く尖った八重歯が覗く綺麗な笑顔で、少女は手にした茨の蔦でIと書かれているシルバーメモリをひらひらと掲げる。隠す気もないってことですか…！

「この間はうちの裏切者を排除してもらって、お礼を言うわ。私は財団Xの幹部、グラン・S・ベル。以後、お見知りおきを？」

《アイビー！》

そして鳴らしたメモリを首筋に浮かび上がった生体スロットに突き刺すと、メモリを突き刺した場所から茨の蔦が伸びてグルグルと巻き付いて行き、茨の蔦に巻き付かれたミイラのような緑色の女性型ドールに変貌する。私は他に人がいないことを確認、ダブルドライバーを取り出して腰に装着、ジョーカーメモリを鳴らす。

《ジョーカー！》

「きりたん！財団Xです！」

【ぶふっ!?スイーツバイキングをいただいてたところだったんですが

…ええい、ままよ！あかりさん、身体をお願いします！《サイクロン！》

「それはすみませんでした！【変身！】」

《サイクロン！ジョーカー！》

そしてダブル サイクロンジョーカーに変身。右手を拳銃の形で掲げて楽しげに眺めていたアイビー・ドーパントに告げる。

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

「数えたくても生憎と忘れちゃったわ！」

そして、アイビー・ドーパントの右手から伸びた茨の蔦と私の左拳がぶつかった。

第八十五話：怪盗Ⅰ参上／初見さんいらっしやい

私の名前は初見^{はやみ}久遠^{くおん}。新米ジャーナリストだ。なんでも水都の富豪が豪華客船を建造したと言うので、スクープを求めて友人の整備士にお願いして乗せてもらった。一応正式の客なのだが、パーティーは性に合わないので出てきて、甲板で一人海を眺めている。……特ダネを掴むためなら嫌でもパーティーには参加しておくべきだっただろうか。私、向いてないなあ。

「はあ……うん？あれは……仮面ライダーとドーパント!?」

溜め息を吐きながら甲板の上から海を眺めていた私は、眼下に見えた半分こ怪人の姿を見て靴から一眼レフカメラカメラを取り出して構える。納められたのは、鳶の特徴を持つ怪人、ドーパントと二色の仮面ライダーの戦いだった。これは大スクープだ……!

「はあああ!」

かつこいい見た目とは裏腹に女性らしい声を出しながら殴りかかる仮面ライダー。相手の鳶のドーパントは五指から伸ばした鳶を自在に操って攻撃、仮面ライダーの右腕に巻きつけて拘束して右手の鳶指を何度も振るって叩き付け火花が散る。

『こいつはヒートですー!』

「了解!」

《ヒート!》《ヒート! ジョーカー!》

するとまた別の女性の……いや、子供の声で喋って赤いガイアメモリを取り出した仮面ライダーがベルトの緑のガイアメモリと交換、黒と緑の姿から黒と赤の姿に変わり、右半身に炎を纏って鳶を焼き尽くして反撃。そのまま鳶のドーパントが放つ五指の鳶を燃やしながら近

づき、炎を纏ったパンチを叩き込む。

「あら、危ないわ」

すると鳶のドーパントは両手の五指を絡み合わせて伸ばし、編み込んで鳶の壁を形成。仮面ライダーの炎を纏った拳を受け止めると切り放して、炎上から逃れる。さらに五指を合掌する様に絡み合わせながら伸ばして、組み合わさって槍となった鳶で攻撃。咄嗟に右腕に炎を纏って受け止める仮面ライダーだが質量差に押されて手すりを越えて海上に吹き飛ばされてしまう。

「ならこいつです！」

《ルナ！》《ルナ！ジョーカー！》

しかし仮面ライダーは焦らず、赤いガイアメモリを黄色のガイアメモリと交換。黒と黄色の姿になるとなんと右腕が伸びて手すりに掴まり、それを阻止せんとする合計十本の鳶の攻撃を自在に右腕を伸縮して回避しながらデツキに舞い戻る。私はたまたまらず連射で激写し続けた。

「あら？しぶといわね」

「ケラケラ笑いながら言っても説得力ありませんよ財団X。私達の戦い方を知っているのでしょうか？」

『得体の知れない奴ですね……何が目的なんですか！』

「そんな簡単に教えたら面白くないわ。探偵らしく推理してみたらどう？」

探偵？仮面ライダーは探偵なのか？財団Xとか気になるワードもあるが、仮面ライダーの正体……それがもしわかれば最高の特ダネだ。見逃せない。

「言う気が無いなら仕方ありません」
《トリガー!》《ルナ!トリガー!》
『実力行使です!』

すると仮面ライダーはベルトの黒いガイアメモリを引き抜いて代わりに取り出した青いガイアメモリを装填。左側が青く染まると左胸部に大型の銃が出現し、仮面ライダーはそれを手に取って黄色に輝く光弾を乱射する。あんな軌道じゃ当たらないんじゃ…そう思った瞬間、放たれた光弾は自在に動いて鳶のドーパントに殺到。それがわかっていたのか鳶のドーパントは伸ばした五指で薙ぎ払い、仮面ライダーはさらに乱射しながら突進。

「面白い…!受けて立つわ!」

「エターナルの時の様な不覚は取りません!」

銃を撃ちながら突き出して接近戦に持ち込み、外れた光弾が周囲を飛び交い、五指を伸ばして自在に操る鳶のドーパントと、光弾を自在に操る仮面ライダーが打ち合う。幻想的な光景だ。激写する。どこを撮っても絵になる、すごい。

「中々楽しめたわ。でもね」

「っ!?!」

「生憎と、年季が違うのよ」

すると光弾の全てを撃墜した鳶のドーパントが右足を振り上げると、右足が鳶となって伸びて仮面ライダーの左足を拘束。引っ張って仮面ライダーを転倒させ、五指を交差して振るって竜巻の様な連撃が仮面ライダーに襲いかかる。

「潜ってきた修羅場の数なら負けてません!」

《メタル!》《ルナ!メタル!》

左足を拘束され引き摺られた仮面ライダーは青いガイアメモリと取り出した銀色のメモリを入れ替え、背中に棍棒を装備した黄色と銀色の姿に変身。見るからに硬い装甲で猛攻を耐え抜き、横になったまま背中から引き抜いた棍棒を投げつけて鳶のドーパントの腹部に炸裂、怯ませて拘束から逃れると立ち上がり、跳ね返ってきた棍棒を手にとって振り回し、次々と叩きつけて鳶のドーパントを追い詰めて行く。

「これで終わりです」

《メタル！マキシマムドライブ！》

『メタルイリユージョン！』

そして棍棒の中央にある機械にベルトから引き抜いた銀色のガイアメモリを装填。振り回した棍棒で金色の輪を大量に描き、一気に飛ばして四方八方から鳶のドーパントを切り刻んだ。けどど上にいる私を見た。当たる直前に、脱皮するかの様に自身に巻き付いている人型の茨の鳶から逃れる、白づくめの服で赤みがかった金髪をツインテールに結んだ年端もいかない少女を。

(あんな少女が、ドーパント?)

思わず呆気にとられてしまい、慌てて写真を撮ろうとするも、少女は近くに転がっていたキャリーケースを素早く手に取るとすぐに私の死角に隠れてしまつて撮ることは叶わなかった。

「危ない危ない。時間稼ぎのお仕事はちゃんと果たしたしこれまでね。面白かったわ。また会いましょう、仮面ライダー」

そんな言葉と共に扉が閉まる音が聞こえる。船内に逃げたようだ。仮面ライダーはそれに気付いて追おうとするも、すぐに思

いとどまった。それもそうだろう、人気の少ないデッキだから騒ぎにならなかつたが仮面ライダーが入って来たら船内は大混乱だ。

「…やられました。財団Xは二人組です。今の彼女は、恐らく囹……」
『本命はもう一人ですか……記憶を共有しましたが怪盗Iとやらもいるのでしょうか？せつかくのバケーションが台無しですね』

「そういうもんじゃないですよ。私達は探偵です、事件があるなら解決するだけですよ」

そう言いながらベルトからガイアメモリを引き抜きながらバックルを変形させ、男装の女性に姿を変える仮面ライダー。あれが、仮面ライダーの正体……絶対に逃してはならないとカメラを覗き込むあまり、私は背後から近づくその存在に気付かなかつた。

「ぎらついた色の、いい欲望ツスね。少しだけいただくツス」

「え……？」

振り返った私はその人物の顔を見ることもなく、なにかを吸い取られた感覚と共に気が遠くなり、倒れ伏す。そして私の手からカメラを拾い上げたその人物は楽しげに笑った。

「こんな新米に撮られてちゃ、世話無いツスよ仮面ライダー。今回は消しといてあげるから事件は任せるツスよ。ウチでも見破れない謎を解くのは、探偵の仕事ツス」

そう言ってカメラを操作してデータを丸ごと消し去ると、その人物は靴音を立てながら去っていくのだった。

第八十六話：怪盗Ⅰ参上／船上の変人達

アイビー・ドーパントを逃がしてしまった私達。一息ついて変身解除した私は、自らの肉体に戻って覚醒すると、変身前と同じパーティー会場の中の様だ。

「はっー！」

「お、きりたん。戻ったか。どうだった？」

「あかりさんに身体を預けたはずなんですが……」

「オレの方が背負っていた方が違和感ないからな。あかりならそこにいるぞ」

私を背負っていたらしいリリイに呼びかけられ、下ろされる。なんか西友に羨ましそうに睨み付けられ、あかりさんとミリアルは呑気にスイーツバイキングを楽しんでいた。私達が戦ってた間に呑気なものですね。

「で、なにが出た？」

「財団X。その一人、グラン・S・ベルと名乗ったアイビー・ドーパントと戦いました」

「財団Xがこの船にいるのか。せっかくの休暇だったのに空気を読まない奴等だな」

「それから……ゆかりさんが初峯九王から依頼されました。オークションの目玉「真実の愛」を怪盗Ⅰから守る様にと」

「怪盗Ⅰ？」

「おや、覚えがあります？」

ケーキを手に取りながら現状説明していると、何やら引っかかったらしいリリイが黄金のモンブランを頬張りながら神妙な顔つきになる。真剣な顔でモンブランをもぐもぐ、飲み込むと口を開く。結構上品なんですよねリリイ。

「いや……なんかすごい聞き覚えのある響きだなって」

「…月読アイのことですか？」

それは思った。私達で「I」^{アイ}と言うとやはり彼女だ。だが、彼女が「真実の愛」とやらを狙う理由がない。

「検索完了。「真実の愛」とは20年も前に天才彫刻家「星井安乎」^{ほしい あい}が作りだした彫刻品のことです。緑色に輝く鉱石を削り出して作られたこれは、初峯弥美が購入して初峯家の家宝にしていた様ですね。月読アイが狙うとは到底思えません」

「緑色の鉱石か……金ぴかだったら西友に言っ金を用意させて落札でもしてやろうかと思っただがな」

「すぐ金用意できるのになんで探偵やってるんです？」

すると呆れ顔のゆかりさんが合流。好物のチーズケーキの皿を手にとって美味しそうにフォークで口に運んでいる。楽しむ気満々ですね。

「お前が誘ったからだろう。オレとしては探偵の仕事は悪くないと思ってるがな。で、その怪盗Iとやらと財団Xを捜せばいいんだな。後者は白い服を着てるだろうから簡単だ」

「そもいかないようです。私もそう思っ道すがら聞き込みをしたんですが、まるで目撃情報が無いのです。既に着替えて潜伏していると思われます」

「とすると、この中にいる可能性が高いか」

見渡すリリイに続いて私も視線を向ける。怪しい人間は…結構いるな。変に目立ってるのが12人、いる。

「あれは初峯九王、この船のオーナーですね。隣にいるのは徒影涙^{とかげ ルイ}で

すか？」

「水都の有名なバイオリニストか。最近婚約したと聞いていたがその相手が依頼者か」

「報告しているのは船長の赤城苅南です。メイドのラグナ・ポンドが傍に控えていますね」

「あの目立つピエロメイクは誰なんですかね？」

そう尋ねてきたのはミリアル。あかりさんは一心不乱にもぐもぐして周りを引かせているので他人のふりをしているつもりらしい。促した場所にいたのはピエロメイクを施した長身で緑に染めた髪の毛。応えたのはリリイだった。

「藤城^{ふじしろ}恩^{めぐみ}。その筋じや有名な凄腕オークシヨニアだ。闇社会でも活躍しているやり手だな」

「隣にいるのは警備主任の加賀煉。その横の人は船員名簿で見ました。鳴子^{なるこ}芽衣^{めい}、整備士です。どうやら仕事をサボっている様ですが」「めっちゃ酒を飲んでますね……」

ワインを瓶ごとがぶ飲みしている整備服が似合う茶髪の美女にミリアルがドン引きしている。仕事をしないダメな大人を見たことが無いんだらうな。

「おや。私、あの人見覚えがあります。確かお父様の友人の伊藤^{いとう}廻^{かい}さんですね。水都の政治家です」

ピシツとした白スーツの上から青いマフラーを巻いた男を見てそう言うのは小休止していたあかりさんだ。さすが名家のお嬢様。クローンでもそこは変わりませんからね。そのまま壇上に視線を向ける。

「あそこでマジックを披露しているマジシャンも見覚えがあります。

ミラ・マリリン。海外の有名少女マジシャンです」

「結構な大物ばかりですね。さすがは天下の初峯家……」

「この調子ならあかりの両親もいそうだな」

「そ、それは困ります！」

リリイに言われてあたふたしだすあかりさん。まあありえるだろうな。継星財閥といえれば東北家、初峯家と並ぶ水都の名家だ。呼ばない理由がない。

「…げっ」

「げってどうしたんだゆかり……げっ」

「リリイまで何を…げっ」

「皆さん？どうしたんです？」

それを見て苦い顔を浮かべるゆかりさんに続いて声を上げるリリイ、私に首をかしげるミリアル。そこには、眼鏡をかけた杏璃万結とそっくりの美女がパーティードレスを身に付けてワインを嗜んでいた。そっくりさん……ですよね？

「リリイ様の怨敵かなにかです？さつき自己紹介しているのを聞きましたよ。釘崎檀くぎき まゆみ。医者らしいです」

「名前も似てるんですか……」

「お近づきになりたくはないです」

「調査だからそれは無理だぞゆかり」

「ぐふう。……あれ、そう言えばキクさんはどこに？」

そこで、一行の中の最後の一人がいないことに気付くゆかりさん。そういえばそうだ。どこ行ったんだろう、と思っていたら目立つ赤いカツラが視界に入る。

「あいつならあそこだ。…水都の歌姫IAと偶然出会ってな。誘われ

て萎縮しながら向かっていったぞ」

「…リリイあなた、加害者に被害者のもとに行かせるとか鬼畜ですか」
「歌姫IAがそんな性格じゃないことは知ってるだろ？」

苦笑いを浮かべているキクさんの横には、かつての依頼人である有阿衣亞ありあがいた。さすが、水都の歌姫まで招待されているんですか。丸王さんもやりますね。すると入り口にこの場に似つかわしくない服装の女性が入ってきた。探偵かジャーナリストみたいなカジユアルな格好だ。

「おや、誰が入って来ましたよ」

「お、美女だな。黄金像にしたい」

「どんな性癖ですか？」

「リリイ様だからな」

「ミリアルも早く慣れた方がいいですよ…」

その女性はさっきの整備士、鳴子芽衣なるこめいと楽しげに談笑しながらチラッチラツとこちらに視線を向けている。するとゆかりさんが何か思い出したらしい。

「えっとたしか…乗員名簿で目立ってたので覚えてます。確か名前は初見久遠はやみくおん…」

ジャーナリストって書いてあったので覚えてたんですね」

「ジャーナリスト？ならなにか情報持つてるかもしれないな。接触するか？」

「いやこちらに引っ付かれたら変身も難しいので…」

「それもそうか。よし、西友行って来い」

「御意。根掘り葉掘り聞き出していきます」

「いやあの、荒事はやめてくださいいね…」

リリイに言われてそそくさと早足で向かう西友にゆかりさんが力

なく警告する。ふむ、元悪党がジャーナリストの元に向かうとか厄ネ
タでしかない気がする。あ、このカステラ美味しいですね。

第八十七話：怪盗Ⅰ参上／調査開始

なんか、初見久遠の所に情報を聞き出しに向かった西友が、なにがきつかけなのかりリイの事を語り出して止まらなくなったのでリイが手刀で意識を刈り取り、結局私が相手することになった。仮面ライダーのことをばれないように情報を聞き出せとか地味に難しいんですが？

「連れがすみません。私、継星探偵事務所の探偵、結月ゆかりと申します」

「いやあ、私と同じ様な恰好だったから気になってたんですが探偵さんでしたか。道理で。あ、もう知ってるかもしれないけど私は初見久遠。新米ジャーナリストです。親友のこの鳴子芽衣に頼み込んで特ダネ目当てに乗せてもらったんですよ」

「やめてよね。知り合いを一人なら乗せてもいいって九王様が言うから招待してあげたってのに」

ワインをがぶ飲みするのをやめて肩をすくめる船の整備員、鳴子芽衣。親友つてことは同じ年ですか。その割にはある一部分の差がえげつないことに……いや、私が言えた話じゃないか。

「じゃあ、情報を得たとかじゃないと？」

「特ダネがあるんですか!? ぜび、教えてくださいよお」

目を輝かせてすり寄ってくる初見久遠に、私達が欲しい情報は何一つないと確信。きりたんとリイに目配せし、他を当たるように伝えた。

「私達も事件を探しているんですよ。それじゃあこれで……」

「そんなわけありませんよね？ 私をジャーナリストだと知って接触したならなにかしら事件が起きたのは確定です！」

「そうなの？久遠」

「そうなのです！」

「うぐっ…」

適当なことを言つて私も離れようと試みるも、初見久遠の鋭い言葉と首を傾げながら見てくる鳴子芽衣に怯んでしまう。ジャーナリストをやつてただけあつて鋭いですね…。

「なにかしら情報があるかもしれませんよ？話してみませんか？」

「ちやつかりしてますね…：内密にしてくださいよ。怪盗Iを名乗る何者かがオークションの目玉を狙っています。私達継星探偵事務所はそれを阻むことを依頼されました。それで、怪しい人間を探っていたわけです」

さすがに財団Xのことは話せないのもう一方の事件について話す。視界の端では藤城恩に気さくに話しかけるリリイ、普通の子供のふりをしてミラ・マリンの手品を間近で見学しているきりたん、親関係の話をしているのか伊藤廻と親しげに会話しているあかり、気絶している西友を釘崎檀に診察させているミリアル、有阿衣亞の付き人をしているキクさんと、仲間たちの奮闘している姿が見えた。

「つまり私が怪しいってこと？これでも凄腕の整備士なんだけど？」

「酒瓶話してから言おうか、芽衣」

「だいぶ目立っていたので…：気分を害したなら申し訳ありません」

「でも、怪盗つて言うぐらいなら普通目立たないのでは？」

「それもそうよね。盗みを働こうとしているなら、私みたいに酒をがぶ飲みしているのもおかしくない？」

「怪しい動きをしていたのが貴方達だけだつて言うのもありますね」

久遠さんの言葉に、一理あると納得しかけたが怪しんだ理由を思い出す。他の人間が怪しくないとは断言できないが、根拠はある。

「目立つということとは逆に言えば、なにかしら奇抜な行動を起こしてもある程度緩和できるということです。特に、目立っていた物がいきなり地味になれば人間と言うのは無意識に目立つものを探して地味なものを見過ごしてしまうこともあります」

「つまり…目立ってた方が怪しい？」

「はい、なので貴方達だいたい怪しいです」

財団Xの可能性もなきにしもあらず。グラン・S・ベルを名乗ったあの財団X幹部が時間稼ぎしていた間に潜り込んだと考えるなら、会場の外にいた久遠さんも怪しい。

「……………でも、多分一番目立ってたのあなたたちでしたよ？」

「……………それはたしかに！」

「納得するの!？」

ジト目のツツコミに、ポンと手を打つ。一本取られた。

「よう、藤城。元気にやってるようで何よりだ。黄金の地獄如来像をオークションしていた時以来か？」

「おやおやあ、リリース金堂じゃあないですかあ。エル・ドラードはどこぞの探偵の手で解体されてあなたも監獄送りになったと聞いていましたがあ？」

ゆかりからの指示で、長身で緑に染めた髪でピエロメイクのオークシヨニアに、知り合いなのでフランクに話しかけると、いつも通り道

化めいたふぎけた様なかしこまった口調で返してきた。相変わらずだ。どつちつかずの灰色男め。^{グレイマン}

「人の多い所で人聞き悪いこと言うな。ちゃんと保釈金で出たんだよ」

「相変わらず金で物事を解決しているようで、安心しました。よく見ればナンバー2の【処刑人】呪怨キクとナンバー3の【狂信者】西友蒼司までいるじゃあないですか。エル・ドラードのトップ3が揃っているとは恐ろしいですねえ。今回もご参加なさるので?」

「いいや。今回は仕事だ。探偵として警備させてもらうから安心しろ」

「貴方が探偵…? 冗談は相変わらず下手くそですねえ」

「生憎と冗談じゃないんだこれが」

黄金の用紙に記された名刺を取り出して手渡す。それには「継星探偵事務所調査員 金堂百合」と記されてある。リリイ金堂と名乗っているが本名はこっちなんだよな。それを受け取った藤城はピエロメイクでもわかるぐらい目を見開かせる。

「継星探偵事務所… 継星財閥のご令嬢の戯れの駒にでもなったんですか?」

「うちの所長の悪口言うのはおすすめしないぞ。うっかり手が出るかもしれないからな」

「おおっと、これはついいうっかり。御許しを?」

…特に変なところはないな。笑えない冗談で他人を嘲笑う道化師そのものだ。こいつが最初から財団Xだった、とかじゃないかぎり違和感はない。

「……ところで、オークションにはその……黄金でできたものはあるのか?」

「ありますよお。おすすめは黄金のランプ、ですかねえ。アラビアで発見された、御伽話のルーツらしき代物で……」

「…相変わらず商売がうまいなこの野郎」

西友をさっさと起こして金を集めさせるか。

「ワン、ツー、スリー。ハイ、変わったー！」

「「わーっ！」」

ミラ・マリンの余興のマジック。お偉いさん方の子であろう子供たちに交じって最前列に立ち、棒読みで歓声を上げながら拍手する。：見た限り簡単なトリックだ。それを一見ばれないように振る舞っていることから相当腕がいいマジシャンだと分かる。

「あれれ？お気に召さない子もいるみたいだね？」

「そ、んなこと、ないですよ？」

すると見抜かれてしまったのか、顔を近づけられて問いかけられる。演技は上手い方だと思っていたのだが、本職相手だと無意味か。

「私の夢は子供たちに希望を見させること！君もその一人なんだから感動させてしんぜよう！ハイ、ワン、ツー、スリー！」

そう言つて帽子から鳩を繰り出すミラ・マリン。地球の本棚と繋がっている私にわからないトリックが無いのが裏目に出ってしまった。

何時まで付き合えばいいのだろうか。

「お久しぶりです、伊藤さん」

「これはこれは！継星財閥のあかり令嬢じゃないか！最近見なかったが元気にしていたかね？」

来ているらしき両親が近くにいないことを確認してから、伊藤廻に話しかける。相変わらず暑そうなマフラーだ。

「実は最近起業しまして、そちらの方を優先していてパーティーとかに顔を出せなかったんです……今回はその仕事で知り合った初峯九王さんに招待されて……」

「ほう、それはそれは。さすが継星財閥のご令嬢だ、あの初峯九王とのつながりを持つとは。どんな仕事か聞いてもいいかな？」

「はい、お爺さまから受け継いだ継星探偵事務所という探偵業で……」

そこまで言ってしまった、と思い至る。伊藤廻の顔色が明らかに変わった。すぐに顔色を戻し、にこやかに会話を続ける伊藤廻。今の一瞬の表情は、私がCOEFONTだからわかったのだろうか。

「お爺さまと言うと……虚音イフの。そうか、彼の仕事を継いだのか……それはすごい。そう言えば、君の両親に挨拶していなかったな。どこにいるかわかるかい？」

「それならあちらに……」

「では失礼」

そう言つてマフラーを翻して去っていく伊藤廻。……滅茶苦茶怪しい。ゆかりさんに報告しないと。

第八十八話：怪盗Ⅰ参上／ブラックアウト、戦慄の瞬間

なんかゆかりさんもきりたんもリリイも触れたく無さそうだったので、新参者である私がパーティードレスを着た眼鏡の女医者、釘崎檀に聞き込みすることにした。

「あの…釘崎、さん？少しよろしいでしょうか」

「あら。私に何か用かしら？担当したことがあつたかしら…」

「あ、いえ初対面です」

馬鹿正直に答えてしまった、と口を押さえる。知り合いのふりをし
て聞き込みすればよかった…：まだ頭が探偵じゃなくて姉さんの妹
であろうとする私のままだ、しっかりしろ。なんのために生き延びた
んだ、私。すると釘崎檀はクスクス笑って手にしていたシャンパング
ラスを机に置いて向き直った。

「素直で真っ直ぐな人みたいね。なのに担当って言葉に疑問を抱かな
かったってことは私の職業を知ってるのかしら？詐欺とか宗教の勧
誘とかじゃなさそうだし、話しぐらいなら聞いてあげるわよ？」

「あ、それじゃあ…医者と言う話ですがどこのお医者様のですか？」

「水都総合病院よ。ここには船医として初峯九王に雇われたの。…そ
う、あの殺人精神科医を出した病院。知ってるかしら？」

「話だけなら…」

たしか、ゆかりさんたちが解決した事件が起きた水都で一番大きい
病院だ。精神科医が犯人で、治療と称して己の患者を何人も手につけ
たという凶悪事件。アベルーニが調べてドン引きしていたのを、お前
が言うなと思ったのを覚えている。

「おかげで評判が地に落ちちゃってね。少しでも取り戻そうとしている最中なのよ。今回の仕事もその一環と言う訳。お気に召したかしら？」

「船医がお酒なんて飲んでいいんですか？」

「ああ、これ？ノンアルコールのシャンパンよ。さすがに仕事はちゃんと果たすわ。それより…もしかして、あなた継星探偵事務所の探偵だったりする？」

「っ！」

無難な質問をしていたらいきなり言い当てられてビクツと反応してしまう。まさかこの人、財団X:!?

「凶星みたいね。あ、警戒しないで。同僚の阪井芽衣子さかい めいこから聞いてた容姿の人がいたから挨拶しようと思っていたのだけどなんか避けられてるみたいだったから……」

「あ、それはすみません……苦手な人と顔が似ているみたいで……」

「それは残念ね。せっかくだし話してみたかったのだけど。それで？探偵さんが話しかけて来たってことは何かの捜査かしら？」

「あ、えつと……詳しい事は言えないんですけど、怪しい人って心当たりありますか？」

「怪しい人？……そうねえ、さつきすれ違った人に違和感を感じたぐらい？…なんと言えばいいか分からないけど」

「そ、それは誰の事ですか!？」

「生憎と忘れちゃったのよね……ごめんなさいね？」

「そうですか……ありがとうございます、参考にします」

そう言つて釘崎さんと別れる。…違和感のある人、か。誰の事なんだろう。とりあえずゆかりさんに報告かな。

初見久遠、鳴子芽衣と情報交換をし終えて、煉さんに警備状況でも聞こうかと歩いていると、視界に楽しそうにチョコレートケーキを頬張るIAさんと、不安そうについていくキクさんの姿が入った。そういえばIAさんもあからさまに目立っていたか。疑いようもないですが。

「あ、あの…IAさん。私なんかをボディガードになんて正気ですか…？」

「さん付なんてやめてよ。前みたいに呼び捨てにして、莉奈さん」

「わ、私はキクです…私もさん付けは恐れ多いですし、その名前は偽名なので…それに私、貴方を利用して…」

負い目からかしどろもどろになってるキクさんが気の毒になってきた。あれだけされて気にしてないIAさんもすごいが。さすがは水都が世界に誇る歌姫だ。

「じゃあ、キク。私は気にしてないわ。貴方が私で儲けるためにはいえ、本気でマネージメントしたのは事実だもの。歌姫「IA」は私とあなたがいてこそ成り立つの。お願い、戻って来る気はない？」

「いえ、いえ…IA。貴方が世界の歌姫となれたのは貴方の実力故です。私は何も…ただおこぼれをいただいただけで…」

「その自虐的な性格、素だったのね…私が貴方の事が欲しい、じゃ駄目？」

「あうあう…」

真っ直ぐ目と目を合わせて見つめるIAさんに、キクさんはたじたじだ。思わず助けようとする、その背後から近づく人影を見て止ま

る。…アレは任せた方がいいか。

「わ、私なんかが…：それに私は、リリイさんの部下で…」

「よう、うちの腹心に何か用か？歌姫さま」

「わっわわっ!？」

キクの肩に己の肩を組みながら笑顔で話しかけるリリイ。キクは顔を赤らめて慌てて、リリイはその様子が気に入ったのか上機嫌に口元に笑みを浮かべる。対してIAさんはあからさまに警戒の態度を取るが、それでも離れずにその場にとどまった。

「まったく。歌姫さんよ、お前がキクを恨んだりしない性格だと思つて快く送り出して見守っていたら…：油断も隙もないな」

「…リリイ金堂、さんでしたっけ。探偵さんから報告を受けてましたが本当に出所したんですね。ご無沙汰してます」

「なんだ、ゆかりのやつ伝えてたのか。まあ誘拐犯が出所したんだ、探偵として伝えないわけにはいかないよな？そうそう、今はオレもその事務所の探偵なんだ、依頼があつたらよろしくな？」

キクさんと肩を組みながらにんまり笑つて挑発するリリイ。逃げようとするキクさんの肩をガツシリ掴んで逃がしはしない。それを見てムツと不機嫌になるIAさん。ヤバい、修羅場だ。リリイに任せるのは駄目だったか。

「また依頼ができて貴女にだけは頼んだりしませんよ。…それに、キクは私のマネージャーだった人よ。また勧誘しようが自由では？」

「生憎とこいつはオレの所有物でな？人にやる気はねえ。マネージャーとしてお前の所に送ったのもオレだしな。二度とこいつを送ることはないから、安心して適当なマネージャーでも雇え。金なら迷惑料としてくれてやる」

「リリイさん!？」

「そんなものいらなから、キクを私にください。私にはキクが必要なの」

「IA!？」

「うちのキクが欲しければオレを倒してからにするんだな！」

「あわ、あわわわわわっ」

徐々に喧嘩腰になっていくIAさんと、売り言葉に買い言葉でヒートアップしていきリリイに、顔を赤らめて目を回して慌てるキクさん。可哀想に。そういやリリイって美しいものに目が無いんだっただか。キクさんは裏切られても手元に置いてあるぐらいだからお気に入りなんだろうなあ。

「こっちは面白いことになってますねえ」

「まるでラブコメでヒロインを取り合うイケメンたちみたいですねえ」

どうしたものかと見てみると、ショートケーキをいただいているきりたんと、フライドチキンに齧り付いているあかりがいつの間にか傍にいた。二人とも食い意地はり過ぎです。美味しそうなのは分かれますけど。

「あれ、きりたん。ミラ・マリンはどうだったんですか？」

「特に何も？あ、あれ美味しそうですね」

よく見えないけど子供たちを相手にマジックを披露しているミラ・マリんに視線を向けながら尋ねるとなんでもない言いたげにきりたんはずんだ餅を食べに行つた。なんですんだ…？あ、「提供：ずん子」と書いている。純子さんのずんだ広報アイドルとしての名前だっただけだ。提供：東北家ってことですか。やはり東北家の血なのか、ずんだ餅好きなんですかねきりたん。

「あかり、伊藤廻は？」

「あ、あの人怪しいです！私が探偵だと知ったらあからさまに逃げて行きましたー！」

「…それだけじゃ裏がある政治家ってだけの可能性もありますよあかり…」

「それはそれで問題だが、迂闊に踏み込めるものじゃないな。どうしたものか、他のメンバーの帰りを待つか…そんなときだった。いきなり視界がブラックアウトした。」

「わ、わ、なんですか!?!」

「停電…!?!」

…!?!
どよめく客たちに、私は見えないながらも周囲を警戒する。怪盗か

パンツ!

「ぐあああああつ!?!」

バタリ!

乾いた銃声と男の断末魔、なにかが倒れる音。同時に明かりが点灯し、断末魔が聞こえた方向を見れば心臓に開いた風穴から血を垂れ流して倒れている伊藤廻の姿が。

「キヤアアアアアアツ!?!」

轟く悲鳴。パニックになった客たちが慌てて逃げ出そうとして警備に止められるのが見えた。

「Really!?!」

そして、オークションニアの信じられないとばかりにこぼれた声。振り返れば、檀上にて展示されていた美術品がひとつ、消えていた。

「そんな、馬鹿な…」

私はあまりの一瞬の犯行に、戦慄するしかなかった。

第八十九話：怪盗Ⅰ参上／裏切りの狂信者

殺人事件と盗難事件の同時発生がリリイ様から知らされたのは、気絶から目覚めた後だった。被害者は水都の政治家、伊藤廻いとうかい。盗まれたのは本日行われるオークションのために厳重警戒で展示されていた目玉になるはずだった美術品「真実の愛」。俺が気絶している間に結月ゆかりたちは犯行を防ぐことができなかつたらしく、今も捜査で奔走しており俺も起きるなり駆り出された。

伊藤廻の死因は胸部の心臓を撃ち抜かれ風穴を開けられたことによる即死。凶器はおそらく銃、というのも警備員総勢による、広間にいた人間全員の手荷物検査が行われたが凶器が発見されなかつたらしい。銃どころかガイアメモリもだ。結月ゆかりたちとリリイ様が持っているものは初峰九王の権限で見逃されたのだとリリイ様が嬉々として語っていた。

「真実の愛」の入れられたガラスケースは必要な手順を踏まないと警報が鳴るセンサー付きで、それがあがるにも関わらず鳴らすことなく、しかもあの切れ者のオークションニアの一藤城恩に悟られることなく盗み出されたという。もちろん、手荷物検査から「真実の愛」は見つからなかった。

犯行が行われたのは約十秒の暗転だったらしい。その間にすべての犯行は行われた。暗闇の中で伊藤廻の心臓を的確に狙い、警報の鳴るセンサーをかいくぐって「真実の愛」を盗み出した。結月ゆかりはこれを単独犯の犯行とは考えてないようだ。少なくとも伊藤廻を殺した人間と、「真実の愛」を盗み出した人間は別という考えらしい。それが財団Xか怪盗Ⅰの可能性は非常に高いが、第三者の可能性もあるとのことだ。

以上が事件の概要だ。俺はメモに書かれた内容を読み返しながら、リリイ様が向かったという機関室に向かっていた。早く合流して少しでも役に立たねば。しかしメモを読みながらだったためか、誰かとぶつかってメモを取り落としてしまった。人気ひとけのない廊下での出来事だった。

「すまない……よそ見をしていて…っ!？」

「いえいえ、私からぶつかっただから気にしないでほしいですわ」

メモを拾い上げながらぶつかって相手に謝罪しようとしたら、そこにいたのはこの世のものとは思えない透き通った白髪しろげの和服美人。俺を値踏みするかのように赤い目が細められ見つめられ、背筋が凍る。東北至子。水都でも有数の名家、東北家の当主にしてかつて俺たちエル・ドラードがスポンサーをしていたメモリ売買組織ミュージアムの首魁その人だった。

「かのエル・ドラードのNo. 3の西友蒼司ですわね？」

「だったら……なんだ」

リリイ様が現在敵対しているミュージアムの首魁に名前が憶えられていることに戦慄しつつ、ここで否定したら俺がエル・ドラードの一員であることを否定するという耐え難いことになるので警戒しつつも応えると、東北至子は口元を袖で隠しながらニコニコと笑みを浮かべる。

「あなたのことは調べさせてもらいましたわ。もし出会えたら話をしようと思っていましたの。かつての栄光、邪魔物を消して取り戻してみたくありませんこと？」

「ほう……話を聞こうか……」

甘言だとはわかっている。が、俺は忘れられないのだ。かつて裏社
会を牛耳るまでに至った俺たちの組織、リリイ様を崇めリリイ様の手
足となる、エル・ドラードの栄光を。そして決して無視できない一言、
「邪魔者」を俺は聞き逃さなかった。

「さつき面白いものを見ましたのよ。実は前々から目を付けていたの
だけど、清廉潔白さからメモリには手を出さないだろうと残念に思っ
ていた歌姫IA……彼女はあなたにとって邪魔なキクが欲しいそう
ですわ。リリイ金堂は手放す気がないそうですが」

そう言っって着物の袖から取り出したスマートフォンを操作し、映し
出した映像を見せてくる東北至子。そこには、あまりにも忌々しいあ
の女：呪怨キクを取り合っつていがみ合っているリリイ様とIAの姿
があった。左手で頭を抱え、血が出るほど握りしめた右拳を壁に叩き
つける。おそらくこれは仕込みではない、服装が今日のものだし画面
の端に気絶した俺が見える。こんなものを用意できるのは未来が見
えるものぐらいだろう。

「リリイ様……やはり、俺より一度は貴女を裏切った、キクの方が良い
と言うのか……！」

なぜだ。なぜなんだ。リリイ様。なぜあの女にこだわる？IAに
渡せばあの女は幸せだろう、なのに手元に置こうとするのはなぜだ。
以前聞いたら「オレの所有物だから」だと笑っていたが、その女にそ
こまでの価値があるとは思えない。リリイ様の考えなどは正しいが
しかし、何時までも己の好みだけで、裏切り者を近くに置く様な行動
は、黄金郷の女帝としてふさわしくないとと思うのは俺だけなのか。貴
女は裏切り者は容赦なく黄金にして資金源として切り捨てる人じゃ
なかったのか。

「そのとてつもない苦しみ、心中察しますわ。そこ、で。エル・ドラード

ドが抜けて我々は財政難なのですけどお、投資にも秀でているあなたをスポンサーとして迎え入れたいのですが……」

「馬鹿な。俺がリリイ様の敵対するお前たちに力を貸す理由はない」

「まあまあ。そんなすぐに結論付けずにお聞きくださいな」

《ナインテイルフォックス！》

すると九尾の狐が体をくねらせてNと描かれているゴールドメモリを虚空から取り出すとキスでガイアウイスパーを鳴らし、ドライパーに挿入する東北至子。するととんでもない灼熱の風が吹き荒れて何とか耐えると、そこにいたのはリリイ様一筋の俺でも目が釘付けになるほどの美貌の怪物だった。思わず息を呑む、圧倒的なプレッシャーと恐怖に震える。

「…俺を殺すつもりか」

全身金色の毛皮に包まれ女性らしいフォルムの肢体の上半身を包む、複雑な文様が紅く記されている振袖を思わせる高級そうな蒼い着物、毛皮しか身に纏ってない下半身の臀部から生える九本の黄金の尻尾がまるで鎌首をもたげる八岐大蛇を思わせる扇状に広がり、下駄を履いてる様な足を囲ってドレスの様にも見え、黄金の毛皮の中で唯一白い毛皮の狐耳が生えた頭部は狐の仮面を思わせ、紅く隈取りされていて歌舞伎役者の様で笑っている様な顔の視線は冷徹そのもので、麦畑を連想させる金毛の腰までかかる長髪が灼熱の風で靡いて太陽にも見える。…初めて見たが、俺好みの蒼とリリイ様の好みそうな金の合わさった姿は、俺の理想を彷彿とさせて思わず呆然と見つめる。

「そう警戒しないでくださいまし。さしもの私も何も策もなくメモリを持ち歩いて公共の場に出るのは憚られるのですわ。私はハイドロープ、変身していなくてもこの尻尾をある程度扱うことができるのですわ」

そう言つて九つの尻尾のうち一本に手を突っ込み、さつき虚空から出した時の様に、見慣れた銃のような形状のメモリ施術装置と、倒れた石柱とマンタでAと描かれているゴールドメモリを取り出すナイフと、ナイフを握る。そのメモリを目にしたとき、雷が落とされたような衝撃が走った。

「あなたが我々のスポンサーになる。その代わりにこのゴールドメモリをプレゼントしたいのですわ。エルドラドメモリ級の最強クラスのメモリ。エルドラドメモリも増産の予定がありますの。リリイ金堂と肩を並べてエル・ドラードとして我々ミュージアムに力を貸してくださいませんか？」

そのメモリから感じたのは、運命。これだ、これこそ俺が手にするべきだったメモリ。リリイ様がエルドラドのメモリと惹き合ったように、結月ゆかりがジョーカーメモリと巡り合ったように、俺の運命のガイアメモリだと確信した。それに、一点物だったエルドラドメモリの増産？リリイ様と肩を並べて作る新たなエル・ドラード？……ああ、それは。俺が本当に、欲しかったものだ……。

「クククツ……面白い提案だ……喜んで乗ろう、その話」

「いいご返事ありがとうございますわ。それで、邪魔者たる呪怨キクの排除にはちょうどいいメモリがありますの、件の歌姫にこそふさわしいメモリ……これも渡しますので彼女を勧誘してくださいませんか？」

「任せろ。上手く話して、此方側に引き込んでみせる」

食い気味に答える。こんなおいしい話、乗らない手がない。

「頼もしいですわ〜！では、メモリ施術装置と、ゴールドメモリと歌姫にぴったりのメモリを渡しますわ。あなたが我々に敵対しないことを期待してますわよ」

そう言つてナインテイルフォックス・ドーパントはゴールドメモリとメモリ施術装置、歌声を上げる口元でDと描かれたメモリを手渡すと変身を解いてにっこり笑うと、虚空に己のメモリとガイアドライブをしまい込んだ。

「勿論だ。リリイ様共々、今度こそ良い関係で居たいからな……」

「ああ、それと。頼みたいことがもう一つ」

「なんだろうか」

そのまま告げられた言葉に、頷く。そうか、そういうことだったのか。いいだろう、いくらでも利用されてやる。すべてはリリイ様のためだ。

第九十話：怪盗Ⅰ参上／拝啓、私の影法師

突如起きた殺人事件と盗難事件。私たち継星探偵事務所の面々は三手に分かれて捜査していた。私ときりたんが殺人事件、あかりとリイが盗難事件、ミリアルと西友とキクさんが聞き込みだ。

「検死の結果はどうですか？釘崎さん」

「相変わらずよ。胸部の心臓を撃ち抜かれ風穴を開けられたことによる即死。凶器はおそらく銃、ということ以外には、この場ではなにもわからないわ。専用の設備があればまだわかりそうなものだけど」

「銃、なんですよ？でも弾痕がどこにもないんですよ…」

私がマユさんにトラウマがあるため、きりたんが医者である釘崎さんに尋ねるが進展はないらしい。せめて弾さえ見つかればとメモリガジェット総動員で探しているのだが、全然見つからない。

「加賀さん、どうですか？」

続けて警備主任の加賀煉さんに尋ねるも、表情は芳しくない。

「警備員総動員で探させたが、やはり弾痕と同じで凶器と思われる拳銃はどこからも発見されてない。「真実の愛」もだ」

「やはり拳銃は犯行後に海に捨てたのでしようか？」

「あの騒動の後すぐ抜け出してそんなことをしようとすれば目立ちます。そんな話は聞いていません。つまり、この会場のどこかにあるか……」

それか、最初から存在しなかったか。それこそありえない、私たちはたしかに聞いた。銃声を。この矛盾はいつたい…？すると、あかりとリイが戻ってきた。

「ゆかりさん、こちらの調査もひと段落しました」

「パーティー会場の外の船中の怪しいところを探したが「真実の愛」はなかった。怪しいとしたらあの狐女だが……証拠がないから手出しができない。ミリアルとオレの部下に期待だな」

「新入りのミリアルはともかくあの二人は本当に頼りになりますからね……蔑ろにはいけませんよ?」

「当たり前だ。二人とも、オレの大事な宝だ、死んでも離さないさ。この警備員たちと違ってな?」

「なに…?」

リリーの言葉にカチンと来たのか詰め寄る加賀さん。身長が低い加賀さんが高身長のリリーを見上げる形となり、リリーはどこ吹く風といった様子。

「依頼を守れなかった探偵が俺達警備の人間を馬鹿にするのか…!」

「事実を述べたまでだ。そもそも宝を守るのはあんたらの仕事で、頼りないからオレたちに依頼が来たんだろう。それだけの数を揃えて置いて一体全体なにをした?お前たちの中に犯人がいるといわれた方が納得するまである無能っぷりだな」

「り、リリー言い過ぎです…」

「言わせておけば…!」

止めようとするも加賀さんは怒りに顔を歪ませて握った拳を振るおうとして、リリーは不敵な笑みで挑発する始末。しかし、その拳を受け止めたのはリリーではなく、キクだった。殴り飛ばされ、リリーに受け止められるキク。

「っ…うちの上司の非礼をお詫びします」

「キク!?お前、なにを…」

「リリーさん。犯人にしてやられて焦っている気持ちはわかります、わかりますが仲間にあたってもなんにもならない…!」

「ぐっ、ぬっ…」

キクさんに窘められてぐうの音も出ないらしいリリイ。加賀さんも申し訳なくなつたのかおろおろしてる。…自分の上司のために体を張れるの、すごいですね。するとあかりも頭を下げた。

「加賀さん、うちの部下が申し訳ありません。ですが…リリイさんの言うことももつともです。ここまで手掛かりが見つからないとなると……」

「身内に犯人がいる、か。…すまない、熱くなつた。確かにその可能性も否めない……」

「となると……私たちも含めて調べなおした方がよさそうですね」

姿かたちもわからない怪盗Iと、侵入した財団Xの構成員、そして今回の事件の犯人たちが必ずどこかにいる。絶対見つけ出してみせる。

そんなゆかりたちの様子を物陰から見つめる男が一人。西友蒼司だった。その横にはもう一人、人物がいて。

「キク……やはりお前は邪魔だ……」

「わかっている。東北至子から頼まれたのはあなたの手伝いだ。この船が陸地についてあんたを逃がすのと、怪盗Iとやらが盗んだ宝の奪還だろう。協力はする、財団X。あんたたちとも仲良くしたいから

な」

もう一人の人物の言葉に、頷きながらイタコから渡されたガイアメ
モリを取り出して、別の方向に視線を向ける。

「あんたが矢面に出られないのは分かっている。：歌姫の勧誘と行こ
うじゃないか」

そう言ってもう一人と別れ、接触したのは今回、ライブを披露する
ために初峰九王に招待された人物。

「あなたは……あの女の……？」

「話がある。ついてこい」

「貴方は私を誘拐した組織の一員でしょう？そんな怪しい話に乗るわ
けが……」

「キクのことについても言ってもか？」

「っ……ついていけばいいのね」

「そうだ……趣味は悪いが聞き分けのいい女は嫌いじゃない」

黄金の輝きに魅入られた男は笑い、赤色に心を奪われた女を連れて
多くの人が集まるパーティー会場を後にするのだった。

「あれ……どこですか……？」

一方、甲板にて辺りをきよろきよろと見渡して首を傾げている黒づ

くめの少女がいた。ミリアル・ボルコフ。絶賛迷子の元テロリストである。

「客から話を聞いてたはずがなぜここに…?」

聞き込みをしてたはずがこんなところまでやってきて首を傾げて腕を組み真剣に考えるミリアルが歩いていると、甲板の奥に人が黄昏ているのを見つけた。

「おや、こんなところに人が…もしかしたら何か見てるかも。あの、すみませーん」

「おや、どうしたんですか?ミリアル」

「え、あれ?きりたん?」

振り返ったその顔は仲間のきりたんで、身長も全然違うため「見間違い…?」と首を傾げるミリアル。確かにここに、きりたんではない誰かがいたはずなのだ。

「きりたんこそどうしてここに?」

「ああ、これをどうしようかなと思ひまして」

そう言っけきりたんが手に取ったのは、件の緑色の輝く鉱石の彫像だった。それを見て目を見開くミリアル。

「そ、それって「真実の愛」!?さすが名探偵の片割れ…もう取り戻したんですね!?!いったいどうやって!?!」

感動し、興奮するミリアルに対し、きりたんは憂いに満ちた表情で海に視線を向けたので、ミリアルもそれにつられて視線を向ける。何もない、穏やかな水平線がそこにあった。

「なにがあるんで…すう？」

ひよいっと。次の瞬間、ミリアルはきりたんに片手で持ち上げられていて。慌てて手足をばたつかせるがビクともしない。

「え…え？きりたん?! いったいなにが…」

「見つかってしまったならしょうがない。今度は君になるとしよう」

そう言ったきりたんの姿が一瞬細長いドーパントに変わると、溶け込むようにしてその姿がミリアルそっくりに変わり、口元を三日月の様に歪ませてにんまりと笑う。

「ドーパント…ま、まさか怪盗I…!？」

「すこし眠っててもらいます。なに、私は殺しはしないから安心してください」

口調もそっくり真似られて、自分自身に首を絞められて意識が遠のいていくミリアル。

「姉、さん…」

意識が途絶える直前に見たのは、最愛の姉の姿だった。

第九十一話：怪盗Ⅰ参上／犯人問答

甲板の端、死角になるところに気絶したミリアルを置いて歩くミリアル、という不思議な光景。ミリアルは一息つくど額の汗を拭い、来た道を引き返した。

「予想外のことも起きたけど、「真実の愛」は手に入れた……あとは港に到着するまで隠れ続けるだけですな」

ミリアルの口調で喋るその人物は、階段を下りていく。と、階段を降り切った時だった。黒い弾丸に背後から胸を撃ち抜かれ、よろめくミリアル。その姿がぶれて、枯れ枝が組み合わさって人型になったような怪人に姿を変えて膝をつく。細長い竹の様な顔を背後に向ければ、そこには別の怪人がいた。

「そうはいかないのだよ、怪盗Ⅰとやら。他人に化けられるようだが迂闊だな、口にするとは」

そこにいたのは、これまた異様な怪人だった。四角い漆黒のヘルメットを被っている様な頭部に、万年筆の様な形状の右腕を持ち、ドロドロの黒い液体が人型を作っているような体をしているが、腰には宝玉の様なものがついておりそれがドーパントだと示していた。その怪人を目に入れた枯れ枝のドーパントは苛立たしそうに舌打ちする。

「…財団、X…!」

「容疑者に入れられている以上、時間をかけるとばれてしまう。「真実の愛」は返してもらおうぞ」

右腕を上げ、左腕で押さえて黒い弾丸を乱射するドロドロのドーパント。枯れ枝のドーパントは細い体を駆使して全弾ストレスで回避。

遠距離攻撃を持たないのか、長いリーチの四肢を振るって格闘戦を仕掛ける。

「無駄だ」

するとドロドロのドーパントの左腕が溶けて振るい、ドロドロの液体の壁を作り上げて枯れ枝のドーパントの脚を受け止める。枯れ枝のドーパントは脚を引き抜こうとするも抜けずにバランスを崩し、そこに万年筆の形の右腕を槍の様に突き出すドロドロのドーパント。その細い胸を貫く、といったところで、枯れ枝のドーパントはふと、長い腕を船の壁に触れた。

「むっ…!?!」

瞬間、枯れ枝の様な体が硬質化してドロドロのドーパントの右腕を弾く。そのまま液体の壁を貫かれて顔面を殴り飛ばされ、ひっくり返るドロドロのドーパント。

「ぐぬっ……なるほど、そういうメモリか。面白い…!」

「私の邪魔をするな、財団X…!ミュージアムからも手を引け!」

「そう言うことはそれがどういうものか知っているらしいな。引くわけにはいかんのだよ。我々もビジネスだ。今日の取引を潰した報いを受けてもらおう…!」

そう言っただけで掲げた右腕に、左手を押し付けて何かを流し込んで右腕を膨張させていくドロドロのドーパント。まるで盛り上がった筋肉の様に膨らんだ右腕をかざし、防御態勢をとる枯れ枝のドーパントに向ける。

「喰らえ、鉄をも撃ち抜く弾丸だ。圧縮、発射!」

「っ…!」

瞬間、ドパン！という爆音とともに音速で放出される漆黒のレーザー。枯れ枝のドーパントは硬質化した腕を組んで防御を試みるも、両腕ごと胴体を貫かれてしまう。

「ぐあああつ!？」

変身が解けて、その場に転がる枯れ枝のドーパントだった人物。出てきたその人物を見て、興味深そうに左手で顎を擦るドロドロのドーパント。

「…ほほう?…これはこれは…怪盗Ⅰの正体がまさかこんな…」
「何の音ですか!？」

そこにやってきたのは、騒ぎを聞きつけた結月ゆかり。ドロドロのドーパントを見て、ダブルドライバーを構えて腰に取り付ける。

「貴方が今回の事件の犯人ですか…!」
《ジョーカー!》

「探偵、邪魔をしないでもらおう。私はただ犯人を追い詰めていただけだよ。ほらこの通り。…む?」

そう言つて背後を促すドロドロのドーパントだったが件の人物の姿はすでになく。ポリポリとヘルメットの様な頭部の頬を搔きながら振り返る。

「グランがどうだったかは知らないが私に君たちと敵対する意思はない。ここは引いてくれないだろうか」

「財団Xを見逃す理由はありません。どっちにしろドーパントは倒して捕らえるだけです…!変身!」

《サイクロン!ジョーカー!》

サイクロンジョーカーに変身し、殴りかかるダブル。しかしそのドロドロとした液体に覆われた左腕で拳は受け止められ、胸部に右手の銃口を突きつけられる。

「仕方ない。降りかかる火の粉は払うまで」
「ぐっ!？」

そのまま何度も銃弾を受け、吹き飛ばされるダブル。黒い弾痕を見て、ある事実思い至る。

「これが、行方不明の銃弾の正体？あなたが伊藤廻殺しの犯人ですね……!？」

『レーザーとも違う…何ですか、今の』
「如何にも。彼は財団Xの不利になるので始末させてもらったよ。君たちも不利益になるというのなら同じ末路を辿るといい!」

「くっ…」
《メタル!》《サイクロン!メタル!》

サイクロンメタルに変身し、メタルシャフトを回転させて弾丸を防ぐダブル。弾切れの概念がないのか無尽蔵に放たれる弾丸に、防戦一方だった。

「なんて制圧射撃…隙がありません!」

『こうなればこちらも攻撃に転じるしかありません!』

《トリガー!》

「ノーガード戦法ですな!やっつてやります!」

《サイクロン!トリガー!》

サイクロントリガーに変身、メタルシャフトが消えて代わりに胸部に現れたトリガーマグナムを取り、連射力の高い風の弾丸で敵の

弾丸を相殺するダブル。しかしドーパントは左手を溶かして壁を作り上げて風の弾丸を防ぎ、壁から銃口だけ出して一方的に攻撃し始めた。

「そつちだけ防御するはずのいですよ!?!」

『一体何のメモリなんですかね…?』

ダブルは左手でトリガーマグナムを連射したまま、右手にバットショットとギジメモリを手に取り、いったん物陰に隠れて敵の弾丸を避けながらバットショットにギジメモリを装填する。

「バットショット!」

《バット!》

物陰から飛び出し、ドーパントに突っ込んで壁の裏側に入るとフラッシュ攻撃を行うバットショット。それにドーパントの目がくらんだところで物陰から飛び出し、トリガーマメモリを引き抜いてトリガーマグナムのマキシマムスロットに装填すると、飛んできたバットショットをトリガーマグナムに合体させるダブル。

《トリガー! マキシマムドライブ!》

『トリガー・バットシユータイング!』

一点集中させた精密射撃が放たれ、壁を撃ち抜いて破壊するダブル。しかし、壁が崩れたそこにドーパントの姿はなかった。

「逃がしましたか…」

『とはいってもここは逃げ場のない船の上。水を移動できるようにも見えませんでしたし、まだこの船の中にいるはずですよ。…しかし、あの言いぶりからするともう一人犯人がいたようですが…』

「そつちが怪盗Iですかね。…うん?これは…」

ドロドロのドーパントが促していた場所に向かい、あるものを見つけて拾い上げるダブル。

「……………これは、なんですかね？」

見つけたのは、黒い液体で塗られた写真らしきもの。変身を解いたゆかりは首を傾げつつ、それをしまつてその場を後にしたのだった。

第九十二話：怪盗Ⅰ参上／現場百回は基本

戦いを終えて戻るなり、加賀さんに事のあらましを私たちが仮面ライダーだということ以外を説明して厳戒態勢をしいてもらった。やはり初峰九王の信頼している探偵という肩書きがでかい、信用してもらえる。そして集まったあかり、ミリアル、リリイ、キクさんも共有した。

「オレが西友探している間に一戦交えていたのか。呼べよ」

「そんな暇もなかったんですよ……でも今回のドーパントはおそらく三体います。財団Xがグラン・S・ベルと名乗っていたアイビー・ドーパントともう一体、ドロドロとしたドーパント。そしておそらくドロドロしたドーパントが交戦していた……怪盗Ⅰと思われるドーパント。こちらは姿を確認できませんでしたが……恐らくこれはその人物の落としたものです」

「これは……」

「写真ですか？」

あそこで拾ったドロドロの液体で汚れた写真を見せると、ミリアルとあかりが興味津々で覗き込んでくる。リリイとキクは一瞥しながらもキョロキョロしている。西友が居なくなつた、だったか。なにかあつたんでしょうか。まあリリイ大好きな彼がリリイから長時間離れるとは思えませんので心配はいらないでしょう。

「事務所ならまだしもここじゃこの汚れを取ることはできませんね……古びた写真ということしかわかりません」

きりたんの指摘する通り、この写真はだいぶ色褪せているように見える。上半身が黒い液体で隠れてしまっているが、着物を着た女性と思われる三人と袴を履いているおそらく男性が一人、そして女性のうち二人に抱えられるようにして子供二人の足だけが見える、おそらく

晴れ着の6人の人物の集合写真の様だ。……なんだろう、今何が引つかかった。私はこの数を知っている…?

「これを怪盗Ⅰが落としたんですか？」

「おそらく、ですが。このドロドロは財団Xの変身していたドロドロのドーパントが攻撃に用いていたものと同じものです。おそらく、手傷を負って逃げ出した際に落としたのだらうと思われます」

「ということは少なくともその時はドーパントの変身は解けていたってことだな。おそらく乗客に紛れているのも能力の物だから、本来の姿になっていた時間があったということだ。西友探すついでに見慣れない人物がいなかったかどうかオレたちで聞き込みしてくる。行くぞキク」

「あ、はい。了解です」

「…どうした？」

探偵らしく推理してキクさんを引き連れて聞き込みに向かおうとしたリリイだったが、そのキクさんが明らかに心ここにあらずなのを見て問いかける。さつきからキョロキョロと視線を彷徨わせていたがなにか探し物だろうか。

「いや……さつきからIAの姿が見えないな、と」

「じゃあIAも探すぞ。オレたちみたいにあいつを攫って金儲けしようとするやつもいるかもしれないからな」

「素直に心配だと言えはいいのに。あいたー!？」

あたりがからかってぽかんと殴られ、そのままリリイはキクさんを引き連れて去っていった。今の菌明かりが悪いけど照れ隠しにしては乱暴な気がする。西友がいなくなっただけ焦っているのだろうか。

「私一応所長なんですけどー!？」

「文句あるなら給料差っ引けばいいじゃないですか」

「COEFFONT事件の借りがあるからそれは無理ですー!」
「変なところで義理堅いですね……」

たんこぶ作って泣きながら喚くあかりに呆れる。すると、先ほどから黙って写真を見ていたミリアルが手を挙げた。

「私、COEFFONTでこういう物の汚れを取り除くこともしてたのでやってみましようか?」

「それはいいですけど……道具なしでできるんですか?」

「あー……身近にあるもので何とかかなると思うので調達してきますよ。それ預かってもいいですか?」

「いいですよ」

ミリアルに写真を手渡すと、一礼してとととと早歩きで去っていくミリアル。……変な走り方ですね。……可能性はある、か。左手首に着けているスパイダーシヨックをミリアルに向けて、発信器を発射する。これでよし。

「ゆかりさん?なにを?」

「いや、西友みたいに迷子になるのも困りますし念のためです。おそらく窃盗犯である怪盗Iはリリイたちとミリアルに任せて、私たちは殺人犯を追いましよう。あの攻撃手段から、おそらく伊藤廻を殺害したのは財団Xで間違いありません。まずはメモリの正体が知りたい」
「でも検索しようにも手掛かりがありませんよ?」

「こういうときは現場百回です。伊藤廻の殺人現場に戻りましよう」

そして加賀さんに言つて、警備員二名同伴で現場に戻ってきた私たち。警備員二名に見張られながらも、保存されている死体の周りを手分けして探索する。

「死体の撃ち抜かれた跡は黒ずんでいて火傷の跡だということがわか

るので、恐らく銃で撃たれたことは間違いありません。アームドみたいな銃器を装備するドーパントでしょうか…？」

きりたんの見解はおそらく正しい。でも、銃弾なんてどこにもないのも事実なのだ。……銃弾がなかった、それとも消えた……？」

「暗闇で撃ったのに正確に心臓を撃ち抜いてますね……」

状況を思い出す。よく考えてみたらそれもおかしいのだ。あの暗闇で正確に狙い撃つなど不可能だ。それこそ目印でもない限りは……。

「あ、これが弾痕ですね。でもやっぱり弾丸はありませんね……」

あかりが壁の弾痕を見つめる。改めてみると、真っ黒な染みがついた直径9mの穴が壁にできていた。しかしやはり弾丸はどこにもない。これがカギだ。敵ドーパントの正体を探る、カギ……。

「しかしせっつかくのジェラートも溶けた頃ですね……スイーツどころじゃなくなつたのでしようがありませんが」

「本当に残念です……」

「呑気か。私なんか一つも食べられなかったんですからね。……溶ける？」

撃ち抜かれた、黒ずんだ銃創。真っ暗な空間での狙撃。弾痕の真っ黒な染み。真っ黒なドロドロに覆われたドーパント。黒、黒、黒……全部黒だ。真っ黒だ。それも痕跡ばかり。

「痕跡であることに意味がある……？」

「ゆかりさん……？」

「きりたん、検索です！」

「わ、わかりました…！でも、いつもの本が……」

「本なら何でもいいんですかね？なら、この手帳をどうぞ！」

手帳を取り出しきりたんに手渡すあたり。きりたんは不満げにしながらも手帳をぱらぱら開き、集中。髪がふんわりと浮き上がる。地球の本棚に入った。

「二つ目のキーワードは「黒」です」

「……さすがにそれだけじゃ絞り込めませんね。二つ目は？」

だろうな。黒に関連する記憶などいくらでもあるだろう。

「次に、「液体」です」

「…タールとかが残りしましたが……弾丸とは思えないんですが」

「そこで次です。最後のキーワードは「溶ける」です」

するときりたんは手帳に何かを書き記していく。書かれていたのは、身近にありすぎてまさかそんなものが、と気づけなかった凶器。

「警備員さん、ここの明かりだけ消せますか？」

そう尋ねると、頷いた警備員がどこかに連絡、程なくしてこの区域だけ明かりが消えて、浮かび上がる伊藤廻の胸の輝き。

「これは…!？」

「おそらく、これの正体は蛍光塗料。黒いから明かりがついていると見えなかった……恐らくこれを目印に狙撃したのでしよう。弾丸は溶けてなくなったんです。あの跡はその痕跡。私たちが戦ったドロドロのドーパントの正体は……」

「【INK】……そんなものが」

インク・ドーナツ。それが財団Xのメモリの正体だ。

第九十三話：怪盗I参上／墮天した歌姫

「リリイさんたちには伝えた、ミリアルや西友さんにも伝ええないと……」

敵のメモリの判明、そしてその正体を暴く方法。それを仲間達に伝えようと奔走するあかり。今、インク・ドーパントの正体を暴くべく準備をしているゆかりたちに代わって所長として責務を全うしようと仲間たちに伝えているところだった。

「あ、いた。西友さ……っ」

人気ひとけのない客室区域の廊下。西友の姿を見かけて駆け寄ろうとするあかりだったが、様子がおかしいことに気付いて物陰に隠れて様子を窺う。以前、ブロッサに騙された経験から、嫌な予感がしたのだ。

「ここならいいだろう」

「キクについて話というのは……?」

件の歌姫、すなわちIAを連れてパーティー会場から離れる西友。IAは仇敵の腹心である男に訝しみながらも、なんとしても取り戻したいキクのことだと聞かされては無視することもできなかつた。

「俺にはお前がわからない。なぜリリイ様ではなく、あの女に執着するのかがまるで理解できない。それは、何に変えてでも欲しいものなのか?」

「何を言うかと思えば……そんなの当たり前じゃない。私は苅奈さんの……キクのおかげで、今の私がある。あの人がいないと私は歌姫「IA」にはなれない。例えリリイ金堂の所有物だとしても……私は彼女が欲しい」

「なるほどな? 歌姫。単刀直入に言うぞ。俺に協力すれば、キクをお

前だけのものにできる。ただし、悪魔に魂を売ればの話だが」

そう言つて唇でDと描かれたガイアメモリを取り出す西友に、IAはあからさまに警戒する。悪魔の小箱を水都で知らない人間なんてそうそういない。IAもまた、その恐ろしさをよく知っている人間だ。

「何のつもり…？そんなもの、使うわけが…！」

「まあ聞け。これは歌声で人間を意のままに操ることができるメモリだ…お前と相性がいいとミュージアムの首領お墨付きだ。これがあれば、キクを永遠にお前のものにできる…！リリイ様がお前たちを黄金にして永遠に己の物にしようとしたようにな…！」

「…キクを、私の意のままに…？」

あまりにも甘美な誘惑に、最初は拒絶していたIAも思わず手を伸ばす。ガイアメモリの超常の力をその身で受けたからこそ、その力の強大さを知っている。故に、ただの人間の精神性では抗えない。しかし伸ばされた手から遠ざけるようにガイアメモリを掲げる西友。IAはまるで餌をお預けされた犬の様な表情を浮かべる。相性のいいメモリとその持ち主は惹かれ合う。抗えない衝動が、溢れ出していた。

「これを渡す条件はただ一つ。今の立場も人間関係も捨てて、俺とリイ様が再建するエル・ドラードに幹部として入れ…！」

「私が…!？」

「お前の歌声は人々を魅了する。メモリの力が合わされば猶更だ。気に喰わないがキクのマネジメントも合わされば100人力だ。奴がリリイ様に仕えるのは気に喰わないがお前の下でなら構わない。エル・ドラードは裏社会から表社会に進出する…そうなればリリイ様のカリスマでエル・ドラードの天下だ…！」

己が野心を興奮した様子で語る西友に、IAは押されながらもガイアメモリから視線を離せない。そのことを理解しながら、西友は説得するべく言葉を続ける。

「俺はキクをリリイ様から離したい、お前はキクが欲しい。お前がキクを手にいれれば自ずとリリイ様のもとから離れる……これは両方得しかない美味しい話だと思うがいかがだろうか？」

「……もし、私が断れば？」

「……残念ながら死んでもらうことになるな。もつとも？このメモリに魅了されたお前が断ると思えないが」

「……緒音、こんなお姉ちゃんでごめんね……」

刑事である妹の名を呼びながら、目を瞑り深呼吸して、頷いたIAはガイアメモリに手を伸ばす。

「……いいわ。エル・ドラードの幹部にでもなんでもなるし、今の立場も喜んで捨てる。私に、メモリを……キクをちょうだい！」

「まったく理解できないが、その言葉を待っていた。キクはくれてやる。歓迎しよう、ようこそエル・ドラードへ」

不敵に笑い、ガイアメモリを生体コネクタ施術装置に装填し、IAの喉元に刻印する西友。そしてメモリを引き抜き、投げ渡されたそれを受け取ったIAは、刻印された生体コネクタを撫でながら恍惚とした表情を浮かべてガイアメモリに頬擦りする。

「っ、そんな……」

そしてその一部始終を盗み見ていたあかりは戦慄して震える手でゆかりたちに連絡しようとスマホを取り出すも、取りこぼしてしまいカッーンと乾いた音が鳴る。それに振り向き、あかりの姿を見つける西友とIA。

「所長さん……」

「継星あかりか。密談を盗み見るとは手癖の悪い女だな」

「なんで、どうして……西友さん！あなたは改心したと、思ってたのに……」

震えながらも、涙ながらに訴えるあかり。西友は呆れたとでも言いたげに肩を竦めた。

「何か勘違いしているな？俺はどこまでいってもリリイ様の味方ではない。改心したのは生憎とあの女だけだ。リリイ様も野望を燻ぶらせている……そのはずだ。リリイ様に目をかけられていたのにそんなことも理解していなかったのか？」

「そんな、リリイさんは本当に改心して……あなたこそ、リリイさんのことをなにもわかってないじゃないですか！」

もはややくそで言い返したあかりに、西友は一瞬顔をしかめさせて敵意に満ちた目で睨みつける。

「戯言を……あの女よりはマシだが……所詮は本物の人間じゃない貴様も、リリイ様には相応しくない。イア、ちようどいい。お前の能力を試せ」

「わかったわ……！」

《《ディーバ！》》

西友に言われるままにガイアメモリを起動し、喉元の生体コネクタに突き刺すIA。その姿が喉元から飛び出した五線譜に包まれ、胸元に帯のような触手が伸びている女性を象った彫像の様な姿をしているディーバ・ドーパントに変貌。その口が開かれた。

「IA〜♪」

「あ……」

その歌声が耳に入った途端、電源の切れたロボットの様に目を瞑り
項垂れるあかり。目を開けると、虚ろな目となったあかりはデイー
バ・ドーパントに付き従う。

「さすがだ、歌姫」

「ええ、なんでこんな心地いいものを拒んでいたのかしら……すご
くいい気分。キクもこの力で……！」

「期待している。行くぞ、まずは厄介な客を助けないと」

デイーバ・ドーパントとあかりを引き連れて、西友は歩き出した。

第九十四話：怪盗Ⅰ参上／塗り潰された真実

「この写真……処分しないといけなかったのに、しくじったなあ。ばれたかも」

船内の一室で、ベッドサイドランプの光しかろくな明かりがない暗闇の部屋にて。インクで汚れた写真を手にする人物がいた。アリアルの変装を解いて、ドーパントの変身も解いて、悲しげな顔で写真を見つめて、光を失った目で真っ黒に染められた写真を眺める。それはもう、二度と戻ってこない失われた日常を彷彿とさせて、涙がこぼれる。

「幸せだったなあ……でも、もう戻ってこない……ならせめて」

《ファズマトデア！》

写真を懐にしまい、ガイアメモリを取り出してボタンを押すと右手首に突き刺す。リストカットを思わせるその部位から徐々に痩せ細っていき、身長も伸びていき見るうちに人型の枯れ枝の様な怪人、ファズマトデア・ドーパントに変貌。たたみかけるようにアリアルに姿を変えつつ、ベッドに乗せていた、緑色の宝石で象られた彫像「真実の愛」を手取る。

「お前の思い通りにはさせないぞ、そとみち外道」

「おかしい……」

「なにがですか？」

初峰九王に確認を取って、とある会議室でインク・ドーナツの正体を暴くべく準備を進めていたゆかりは、眉をひそめてそんなことを言いだし、壁の機械を弄っていたきりたんが振り返る。

「ミリアルはともかく、あかりまで帰ってくるのが遅いです。もしかしたら犯人に出くわしたんじゃない……」

「あかりさんは常人より強いから心配なさそうですが……ミリアルはともかくとは？」

「気づいてなかったんですか？恐らくですがあのミリアルは怪盗Ⅰです。そしてきりたん、あなたは狙撃前にどこにいましたか？」

「えっ？ミラ・マリリンに手品を見せられていましたか……」

「やつぱり……私はあの時、「真実の愛」が見える位置できりたんと一緒にいました。あれはおそらく、怪盗Ⅰだったんです」

「ええ!？」

そうなのだ。あの時、感じた違和感があった。きりたんはずんだ餅を美味しそうに食べていたが、あれはずん子……純子さん提供の物だ。気まずくて食べれないはずなんだ。それにミラ・マリリンを調べていたはずなのに「特に何も」は怪しすぎた。あれは私に気付かれることなく「真実の愛」に近づくための演技だったんだ。

「あまりにも自然すぎて、停電の後に合流した貴方を、ずっと一緒にいたかと思ひ込んでいたのが失策でした……そして、私達と離れていた時にミリアルと入れ替わった。きりたんが二人いるのは明らかにおかしいですからね。ミリアルはおそらくどこかに捕まっているのか……今デンデンセンサーたちに探らせています」

「でもそれじゃ、逃げられるんじゃない……」

「そのためにスパイダーショックの発信機を取り付けておきました。ミリアルに化けている怪盗Ⅰはまだ船内にいますよ。それに、恐らくその正体は……いえ、今優先すべきは殺人犯であり財団Xの確保で

す」

怪盗Ⅰの正体は何となく目星はついている。だとしたら、止める必要すらないのかもしれない。だけど依頼されているから後から取り戻させてはもらうが。

「準備はできました。あとは……」

「加賀さんが容疑者を連れてくるのを待つだけです。…もつとも、状況証拠からある程度絞れています」

正直これは賭けだ。加賀煉が財団Xだったら全ての前提が覆る。だがその心配は杞憂だったらしい。

「言われた通り、指定された人間を連れてきたぞ」

「なにかわかったのか？ 探偵」

警備主任の加賀煉かがれんが扉を開けて、インペリアルスター号の船長である赤城苺南あかぎかるなに続いてぞろぞろと入ってきたのはあの事件の前後、目立っていた方々。

「事件の香りがしますよ！」

「子供たちを安心させるためにマジックを披露していたかったのだけど……」

新米ジャーナリスト、初見久遠はやみくおん。海外の有名マジシャン、ミラ・マリオン。

「わ、私に何か御用でしょうか」

「酒でも奢ってくれる……ってわけじゃなさそうだねえ」

インペリアルスター号のメイドの一人でドジっ子メイドのラグナ・

ポンド。インペリアルスター号の整備士、鳴子芽衣なるこめい。

「おやおやあ。これはこれは継星探偵事務所の探偵さん方じゃないですかあ。リライさんはいらつしやらないので?」

「探偵さんの方から呼んでいただけるなんて嬉しいわ」

長身で緑に染めた髪で、ピエロメイクのオークションニア、藤城恩ふじしろめぐみ。
眼鏡の美人船医、釘崎檀くぎさきまゆみ。これで容疑者は全員だ。

「まずあなた方をお呼びした理由をご説明しましょう。伊藤廻を殺害した犯人の目星がつかまりました。しかし証拠が足りず、犯人を追い詰めるにはあと一手必要です。早速で悪いんですが、皆さんには…」

そう言つて首を向けると、頷いて機械を操作するきりたん。瞬間、スプリングラーが作動して水がこの部屋の全員に降りかかる。

「きゃあ!」

「な、なに!」

「っ……」

びしょ濡れになり半ばパニックに陥る中で、きつと睨みつけてくるその人物の姿が、ドロドロと溶けていく。まるで水に溶かしたインクのように、その姿が崩れて真の姿が現れる。逆さにしたインク瓶の様なヘルメットを被った、ドロドロに溶けたインクの漆黒の外套を全身に纏った、右手が万年筆の様な形状になっているドーパント。あいつだ。そいつは観念したのか左手をかざした右手の甲からメモリを引き抜いて変身を解除する。さつきまでインクを被って擬態していた人物がそこにいた。

「ミラ・マリン……やはりあなたが犯人、財団Xでしたか」

「びしょ濡れにしてごめんなさい、逃げてください!」

「なぜわかった？私の偽装は完璧だったはずだ」

スプリングラーがやんで、きりたんが他のみんなを逃がしているのをしり目に、さつきまでとは違う、男勝りな言葉でミラが問いかけてくる。加賀煉だけがいつでも捕らえられるようにと身構え、私は解答した。

「まず、目を付けたのはあなたと藤城さんでした。ステージの上に立ち、見渡せる位置にいた。しかしここで問題が出てくる。ドーパントはその特性上、こっそり変身するのが難点です。ガイアメモリの音を鳴らさず、注目されていた中でドーパントの力で狙撃し、何事もなかったかのように戻る？不可能です。でも、常にドーパントの姿でいたらどうか？これはきりたんが調べた「インク」のメモリの能力でわかりました。操るインクは変幻自在。インクを被ることで色を変え形を変え、擬態できる。おそらくマジックもこれを利用していただろう。それならすれ違いざまに蛍光インクを伊藤廻にマーキングすることも可能だ」

ドーパントのまま人の姿をとれるのはオクトパス・ドーパントと同じだ。さすがにあそこまで精度が高くないが、厄介極まりない能力だ。手持無沙汰なのかガイアメモリを手で玩ぶミラ。私は咄嗟にバットショットを取り出し、ギジメモリを装填して飛び立たせる。

《バット！》

「っ…」

「させませんよ。ここで問題なのは、怪盗Ⅰが「真実の愛」を狙っていたところですよ。もし藤城さんならそれを見逃す手はない。つまりあなたに絞られますが……証拠もなかった」

バットショットがメモリを奪い取り、私の手に渡り勝ち誇る。そう簡単にメモリを使わせるわけがない。

「くっ……それでインクを取り除くためのスプリンクラーか、考えたな。全員呼んだのは私がまだばれてないと油断させるためか？」

「その通り。悪いことをしましたが……あなたは財団X。逃がさないためにはこの方法しかなかった。加賀さん！」

「心得た！」

私の言葉に頷き、加賀さんが飛び掛かる。体格は加賀さんが上、メモリもない。そうそう負けることはない、はずだった。

「生憎だったな。私には頼りになる味方がいるんだ」

その歌声が聞こえてきた途端、加賀さんの動きが止まる。新手か？ そう思ったとたん、扉が開いて押し寄せてくる虚ろな目をした久遠さんたち。加賀さんも加わり、私達に雪崩かかる。いったいなにが…!?

「あともう一步だったな。名探偵」

《インク!》

私を取りこぼしたガイアメモリを手に取り、起動して右手の甲に突き刺し溢れ出た漆黒のインクに包まれ変貌するインク・ドーパントが私に向けて万年筆の様な右手を構える。最悪だ。

第九十五話：怪盗Ⅰ参上／最低最悪の歌姫

「一体何事だ…!?!」

ゆかりときりたんがインク・ドーパントを追い詰めている間、行方不明のあかりとミリアル、西友をキクと手分けして探していたオレがパーティー会場で出くわしたのは、異様なまでに統率された人の群れ。あかりやあかりの両親も含めた、パーティー会場で顔を見かけた人間が何十人も、虚ろな目で歩いている。その先を歩くの女神の彫像の様なドーパント。

「キク！気を付けろ！こいつは……キク？」

「……」

背後に声をかけるが、何も反応がないため振り向くとそこには、あかりたちと同じように虚ろな目をしたキクがいて。オレが伸ばした手から離れて、一団と合流してしまう。いったいなにをした…!?

「これでキクは私のものよ。リリイ金堂」

「…その声。お前、IAか」

「(明察よ)」

あかりたちを盾にするように前に陣取らせつつ、変身を解きながらキクの顎に手をやったのは水都の歌姫IAこと有阿衣亞ありあ。……メモリに堕ちたか。財団Xがいるならその可能性にも行きつくべきだった。それもここは船の上、悪魔の小箱の誘惑に一番適しているような場所、密室だ。今思えばこの女のキクへの執着は危うかった。キクを取られると思って頭に血が上ってたから気付かなかったが、ドーパントのそれじゃないか。

「…大方、ドーパントになればキクを手に入れられると誰かから唆さ

れたか？そんな方法で手に入れて嬉しいか？虚しいだけだろ」

「気に入った人間を片っ端から黄金像にして手籠めにしていたあなたに言われたくないわ」

「そいつを言われるとぐうの音も出ないな。……オレのせいだってんなら止めるまでだ」

《ゴールド！》《サンダー！》

一応説得を試みるもカウンターを返されて言い返せなくなったので実力行使に出るべくダブルドライバーNEOを腰に取り付け、懐から二本のメモリを取り出して両手で握りボタンを押す。これだから元犯罪者って過去はデバフだなあ。

「間違いなく、私がこうなったのはあなたのせいよ。いろんな意味でね。キクは渡してもらおう」

《ディーバ！》

「歌姫風情がオレに勝てるだけでも？変身」

《ゴールデンサンダー！》

そしてダブルドライバーNEOに装填して展開し、何処からともなく雷が落ちてそれを鎧にし仮面ライダーエルドラゴ ゴールデンサンダーに変身。IAもディーバ・ドーパントに変身し、オレは肩に担いだイナズマサカリを振りまわし、軽い電気ショックでディーバ・ドーパントの前に陣取った傀儡の人間たちを気絶させながら、宣言する。

「陽光が、なくとも輝く黄金郷^{エルドラド}——誰かがオレを呼びやがる。怪物を屠り、悪を討てと言いやがる。上等だ、やってやる！悪鬼を制し羅刹を潰し！——輝くこの身はゴールデン！仮面ライダー、エルドラゴ。——只今ここに見参だ」

「正義の味方見たいな口上ね！」

「今は正義の味方なんだよ！」

ディーバ・ドーパントの伸ばしてきた触手を叩き斬る。どうやら両手を使えない様だな。触手もそんなに強くない。本当に歌うことしか能がないドーパントの様だな。

「さあ、派手に行こうか！」

「ええ、派手にね。L A A A ♪」

そのまま突撃しようとする、あかりを始めとした客たちが立ちほだかり、電撃で気絶させようと試みるも、その手に握られたものに呆けてしまう。

「それは…!?!」

「ここに来る前に協力者からもらったメモリよ。歌姫の真骨頂を見せてあげる…！L A A L A L A！L A L A L A ♪」

「はい…ディーバ様…」

あかりが手にしたのは、舗装道路で形取られた『R』と描かれたガイアメモリ。他に人間もその手に握っていたメモリを構え、同時にボタンが押されガイアウイスパーの大合唱が船内に木霊する。

《ロード！》《トードストール！》《メガネウラ！》《カラカル！》《アルコール！》《パズル！》《リアクター！》《アントライオン！》《オウル！》《オウル！》《トラッシュユ！》《クラブ！》《ラーフ！》《ディープ！》
《シザーズ！》

あかりはロード・ドーパントに、他の人間もトードストール・ドーパント、メガネウラ・ドーパント、カラカル・ドーパント、アルコール・ドーパント、パズル・ドーパント、リアクター・ドーパント、アントライオン・ドーパント、オウル・ドーパント（鳥型）とオウル・ドーパント（人型）、トラッシュユ・ドーパント、ラーフ・ドーパント、

デーパー・ドーパント、シザーズ・ドーパントに次々に変貌。取り囲まれる。しかもデーパー・ドーパントの周りにはキクを始めとした生身の人間はいまだにたくさんいる。……こいつはまずいな？

「ウガアアアッ！」

「くそっ…正気に戻れあかり！があっ!？」

飛び掛かってきたロード・ドーパントの組みつきを受け止めながら説得を試みるも、そこに巨大な「L」と「A」が飛んできて、激突。オレは吹き飛ばされ、ドーパントの群れに飲み込まれる。

「くそっ、いい加減にしろ！」

《ゴールドラッシュ！》

ドライバーを一度閉じてからもう一度展開することで全身に電撃を纏い、ドーパントたちを吹き飛ばす。10秒間の無敵状態…切札をさっそく使ってしまった。なんだ今のは？今は消えたが「L」と「A」が飛んできた方向を見ると、デーパー・ドーパントがいて。

「私はこのデーパーメモリの過剰適合者、らしいわ。その能力は、歌声の可視化。いや、この場合実体化、かしら。歌声を形にして、音という特性はそのまま直接当てることができる…例えばこんな風にね！
L A A ! L A A A ! L A A A A ~ !」

次から次へと、デーパー・ドーパントの口から可視化された歌声が放たれる。それは壁や天井にぶつかり跳ね返り、まるでピンボールの様に四方八方から飛んできて次々とダメージを与えてくる。イナズマサカリを振り回して対抗するが、重量のあるイナズマサカリじゃ対抗しきれない。生身の人間相手ならいざ知らず、この数のドーパントと圧倒的な弾幕。分が悪いか。

《パイレーツ！》《ゴールデンパイレーツ！》

ゴールデンパイレーツに切り替わり、イナズマサカリが消えてパイレーツカリバーを手に取り、可視化された歌声を撃墜していくが、移動形態になったロード・ドーパントの体当たりを受けて吹き飛ばされ、二体が合体したオウル・ドーパントの脚に掴まれて空中で振り回され、メガネウラ・ドーパントのソニックブームとアルコール・ドーパントの炎、パズル・ドーパントの分離した拳が炸裂して火花が散り叩き落とされ、そこにリアクター・ドーパントの胸の炉から取り出した赤熱した鉄棒を叩きつけられ、床に押し付けられる。歌声に操られているからか異様に連携が強い。こりゃ不味いか。

「ちい！」

《パイレーツ！マキシマムドライブ！》

パイレーツメモリを引き抜いて腰のマキシマムスロットに装填。両足に水流を纏い、その場で逆立ちしてグルグルとダンスでもするかのように回転。水流を纏った足の回転にドーパントたちを巻き込んで、天井に打ち上げる。

「派手にぶっ飛べ！パイレーツエクストリーム！」

「ぐあああああっ!？」

打ち上げられ、爆散するラーフ・ドーパントとアントライオン・ドーパントとカラカル・ドーパント。ようやく三体か、骨が折れるな、と思いつながらチョコキン、と音を立てて空間を切ってきたシザーズ・ドーパントの攻撃を避ける。幹部級に強い奴まできると来たか。

「…ゆかりたちからなんもないってことはあっちも取り込み中か。だがこのオレをこの程度でどうこうできると思ったら大間違いだ」

《ルーラー！》《ゴールデンルーラー！》

そしてメモリを取り換え、空中に展開されたいくつもの黄金の波紋から出現した鎖の様な装飾がある純白の彫刻を思わせる西洋風の鎧でドーパントたちの攻撃を防ぎつつ、全身に装着し背中に赤いマントが展開して仮面ライダーエルドラゴ ゴールデンルーラーへと変身。ルーラティンを構えてルーラチエインを展開してドーパント共を纏めてふん縛る。

「キクもあかりも、全員返してもらおうぞ最低最悪の歌姫！」

「できるものならやってみなさい！黄金女帝！」

第九十六話：怪盗Ⅰ参上／呉越同舟再び

「くっ……いったい何が…？放してください、皆さん！」

「ダメです、ゆかりさん！トランス状態になってます！おそらく命令した本人の言うことしか聞きません！」

虚ろな目をして雪崩かかってきた加賀さん、赤城さん、初見さん、鳴子さん、藤城さん、釘崎さんに四肢を拘束される私ときりたん。じたばたと暴れるがビクともしない。まずい、目の前にはインク・ドーパントに変貌したミラ・マリンがいるのに！

「終わりだ、仮面ライダー……！」

そして私の頭部に向けてインク・ドーパントの万年筆の様な右手を突きつけられ、そのまま右腕に左手を押し付けて肉体を構成しているインクを流し込んで、右腕を盛り上がった筋肉の様に膨張させていくインク・ドーパント。これが狙撃のからくりか。って、考えてる場合じゃないか！

「鉄をも撃ち抜く弾丸だ、生身で受けたらひとたまりもあるまい。圧縮、発射！」

「フッ！」

「なに!？」

すると透明に擬態していた細長い枯れ枝の様なドーパントがすぐそばに現れ、細長い拳を一閃。右ストレートでインク・ドーパントを殴り飛ばしたドーパントを、私はポカーンと見上げる。え、なんで。私を助け……？

「…それはディーバ・ドーパントの歌声の影響。気絶すれば効果は切れる」

そう言つて加賀さんの頭部を軽く殴りつけ、気絶させる枯れ枝のドーパント。それで右腕が解放されたので、申し訳ないと思いつつも腹部を殴りつけて気絶させていく。その間に枯れ枝のドーパントはきりたんを救出してくれていた。：私よりも丁重にきりたんを扱う様に、疑惑は確信に当たる。

「あなたは、やっぱり……」

「っ!？」

瞬間、巨大な真つ黒な左手に薙ぎ払われた枯れ枝のドーパントが壁に叩きつけられ、メモリが排出され変身が強制的に解除される。振り向けば、インク・ドーパントが尻餅をついたまま左腕を肥大化させている光景があった。

「大きくなっちゃった、なんてね。油断大敵だ怪盗Ⅰ。私のマジック。お気に召したかな？」

「あなたが、怪盗Ⅰだったんですか……月読アイ」

きりたんが呆然と呟く。枯れ枝のドーパントから戻ったのは、高身長だったさつきまでと打って変わり小柄な子供の様な体躯の少女。私達のドライバーを開発した張本人、月読アイだった。月読アイはきりたんからそっぽを向く。……杏璃万結にブリュンヒルデのガイアメモリを渡していたことからミュージアム製のメモリを複数持ち合わせているんだらうなとは思っていたが、やはり自らで使っていたのか。月読アイの指示を受けた誰かか本人、という推理だったがあの写真で確信に変わった。

「……ミリアルに化けていたのもあなたですね」

「そうだよ。さすが名探偵だね」

私の問いかけに頷く月読アイ。…あれは、東北外道、東北至子、東北純子、東北記理子、東北蛇門…そしておそらく月読アイになる前の彼女、東北藍…以前の東北家の家族全員が映った写真だった。どうしても手放せなかったものなのだろう。

「なんで、怪盗なんか……」

「どうしても、手に入れなければいけないものがあつた。正攻法で手に入れるのは無理だったから、盗むことにした。怪盗だと予告すれば初峰九王の知り合いの探偵であるあなたたちも来る、そう思った。手に入れたものを仮面ライダーのマキシマムドライブで破壊してもらうつもりだったけど、こんなことになって、迂闊に接触もできなくて……」

「ミリアルとなり替わって機会をうかがっていた、と」

「…それは、「真実の愛」と呼ばれていた……」

「そうだろうとも。あれは初峰弥美が大金を得るために存在を隠していた、東北至子が探していたものだ。もつとも息子の九王は何も知らずにオークションにかけて、しまいには東北家も招待してしまつたがね。我等財団Xの財力でオークションで手に入れ、東北至子に明け渡す。それが我らの取引だったんだ。ついでに厄介な情報を得ていた伊藤廻も殺させてもらった」

そう言いながら立ち上がるインク・ドーパントはコキコキと液体の様な躯体を動かして、万年筆の様な右腕を構え左手を押し付ける。見る見るうちに集束されていくインクに、私はダブルドライバーを腰の取り付けジョーカーメモリを、きりたんはサイクロンメモリを構える。その横で、月読アイも枯れ枝の様にPと描かれた己のメモリを構えた。

「…これまでごめんなさい。一緒に戦わせて、結月ゆかり。…きりたん」

「さつきも、この間のCOEFONTの事件でもあなたに助けられま

した。色々思うところはありますが、断る理由はありません！」

「しようがないですね！母さ、月読アイ！いきますよ！」

「…うん、うん！」

顔を赤らめながら頷いたきりたんに嬉しそうに顔を綻ばせた月読アイと共に三人で構え、インク・ドーパントを見据える。行きますよ！

《ジョーカー！》

《サイクロン！》

《ファズマトデア！》

ファズマトデア…：擬態を得意とする昆虫ナナフシの学名か。わかるはずがなかったですね。

「『変身！』」

《サイクロン！ジョーカー！》

きりたんは倒れて私達はダブル サイクロンジョーカーに、月読アイは細長い枯れ枝の様なファズマトデア・ドーパントに変身。ファズマトデア・ドーパントは私たちの肩にポンと触れてダブル サイクロンジョーカーと瓜二つの姿に変身、私達三人は指を拳銃の様に突きつける。

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

「罪を数えていたらこんな仕事やっつけられないんでね！」

瞬間、ドパン！という爆音とともに音速で放出される漆黒のレーザーを紙一重で横に避け、両サイドから突撃する私達とダブルに扮したファズマトデア・ドーパント。爆風を受けてサイクロンボディの能力でスピードを上げるが、ファズマトデア・ドーパントも同じくス

ピードが上がっている。触れたものに擬態、その力を引き出す能力か。

「どつちがどつちだ…!?!」

近づきながら幾度も交差し、どつちがどつちかわからないようにして回し蹴りを右側から叩き込む。同時に左側からファズマトデア・ドーパントが左拳を炸裂。両方からの衝撃に耐えきれなかったのか吹き飛ばされるインク・ドーパントに肉薄する。

「このおー!」

「無駄だ!」

ファズマトデア・ドーパントに向けてレーザーを放つインク・ドーパントだったがしかし、ファズマトデア・ドーパントは観葉植物に触れると元の姿に戻り、直撃した瞬間複数の木の葉に分裂してすり抜け、さらに鋼鉄の手すりに触れると金属の光沢を帯びた姿に変化。追撃の刺突もガキン、と弾く。ダブルみたいに特性を切り替えることができるのか、便利なものだ。

「うごごつ……!」

「今だダブル! ヒートを使うんだ!」

『わかりました! お熱くいきますよ!』

《ヒート!》《ヒート! ジョーカー!》

鋼鉄を突いて怯んでいたインク・ドーパントの明らかに硬質な逆さにしたインク瓶の様な頭部を炎を纏った拳で何度も何度も殴りつける。見れば明らかにインクが乾き、動きがぎこちなくなっていく。そこにファズマトデア・ドーパントの振りぬいた長い右足が腹部に突き刺さり、壁まで蹴り飛ばされるインク・ドーパント。リーチが長い手足はそのまま武器になるのか。

「ぐおおおっ!? そんな馬鹿なあ……手も足も出ないはずが……!」
「どんなドーパントにも弱点は存在する。それゆえ正体を秘匿するのは必須だ。お前は無敵だと思ひ込んでそれを怠った。それが敗因だ」
「これで決まりです!」

《ヒート! マキシマムドライブ!》

ヒートメモリをマキシマムスロットに装填。右半身が熱き炎に包まれ、右拳を握り推進力を利用して高速で突撃する。インク・ドーパントは負けじと漆黒のレーザーを放出するが、インクでしかないそれは右拳の炎で固まって砕けていき、遮ることなく私達の拳はインク・ドーパントの腹部をぶち抜いた。

『ジョーカーバックドラフト!』

「ぐああああああつ!」

背後まで炎が貫き、打ちぬかれたインク・ドーパントは膝をついて倒れ伏し、変身が解けてメモリが排出され砕け散った。気絶したミラ・マリンを手すりと繋げて拘束し、一息ついたところで思い出す。

「よし……そうだ、ディーバとかいうドーパントがいるんですよ!?」
「どういうことですか!」

「ここに来る間に、リレイが戦っているところを見た。加勢に行こう。この船の人間は、ディーバの歌声に支配されてドーパントにされているから安全なところはどこにもない」

『どんな地獄ですかねそれ!』

ファズマトデア・ドーパントの先導で急ぐ私達は、忘れていた。財団Xはもう一人いたことを。

「…ようやく見つけたわ。「真実の愛」…いや、地球の記憶の結晶…
！詰めが甘いわよ仮面ライダー、面白くなるから私としては好都合だ
けど」

第九十七話：怪盗Ⅰ参上／月読アイの独白

船内に溢れたドーパント。メモリ一本だけでも高額なのに、こんなにいるなんて……！インク・ドーパント一体だけでも厄介だったのに、是が非でも私達を潰すつもりか！

『全部倒していたら何時までたってもリリイのところに行けません！』

「これは……恐らく敵の狙いは、「真実の愛」の居場所を探ることだ！」
「どういうことですか？」

「私が盗んだ「真実の愛」の正体は、地球の記憶の結晶だ。ついなちやんの故郷、役村えんのむらにあった結晶と同じもので、純度の高いものを彫刻として加工したものなんだ。自我のないドーパントは、それから溢れる力に惹かれてしまうんだ」

「ここまでメモリを使って、そんなものを取引しようとしていた財団Xとミュージアムはなにを……？」

《ジョーカー・マキシマムドライブ！》

『ジョーカーグレネイドー！』

ジョーカーグレネイドで複数のドーパントをまとめて撃破しながら、思わず疑問の声が出る。地球の記憶の結晶、そんなものなんの役にも立たないと思うんですが……。

「ミュージアムはこれを使ってガイアインパクトを起こそうとしている」

「ガイアインパクト……なんですかそれは？」

「関係ない人に言う気はなかったんだけど……こうなったら結月ゆかりも巻き込むと決めたから、ね。ガイアインパクトと言うのは、「地球の記憶」にアクセスできる人間に地球の記憶内の膨大なデータを全て流し込む儀式のことだよ。対象者は地球と完全に一体化した究極の存在へと昇華し、地球の記憶を自由に引き出す事のできる生きたガイア

メモリ製造機にもなり得る……きりたんは10年前、東北外道にガイアゲートに突き落とされて、地球の記憶にアクセスできる人間になった」

「きりたんの力は、そういう…」

ファズマトデア・ドーパントともにドーパントたちを薙ぎ払いながら、明らかになった真実に舌を巻く。純子さんたちから聞いていた話の真実はそう言うことか…。

「そして東北至子は表向きにはガイアインパクトを使って人類の強制進化をなそうとしているけど、真実は違う。至子は……いや、東北外道ソトミチは不老不死になろうとしている。地球上のメモリに適合できない人間以外のすべての人間を死滅させると知りながら、ね」

「不老不死…!?!」

『私の父親はそんなことのために、私を……私達を……?』

信じられないとばかりに悲痛の声を上げるきりたん。その話が本当なら、東北外道は自らの不老不死になりたいという野望のために、きりたんを突き落として意図的に殺害し、死後も東北至子に乗っ取り、純子さんと蛇門さんを騙して、暗躍しているということか……なんて奴だ。

「この子供の身体も、東北外道が不老不死になるため作り出した「ヤング」のメモリの実験台にされて子供の姿にされ、制御できないうえにメモリブレイクされないと戻れない状態で永遠に子供の姿に固定されてしまったんだ。さらにはメモリを破棄され成長することもできなくなった。それに加えて私の子供たちを利用して……」

あまりにも壮絶な月読アイの過去に、思わず絶句する。それは恨んで当然だ。きりたんを、ついなさんを、リリイを利用してミュージアムに対抗しようとしたのも、恐らく計画外だった私をなんとしても

排斥しようとしたのも、わかる気がする。

「私はあの男に復讐するため、その野望を挫くために実験体と新型ガイアドライバーの設計図、ガイアメモリ数本を盗み出して逃げ出した。そして対抗する手段を作ることにしたんだ。それが、仮面ライダーだ」

「それが、ダブル……」

「私は、奴の精神干渉も受けない無敵の肉体と精神、そして最強の頭脳を持つきりたんが融合した最強のWを生み出して東北外道に対抗しようとした。そのために、旧友のイフを選んで……だけど死んでしまつて、慌ててメモリに慣れさせるためのアクセルを作つて次の候補者だつたついなちゃんに渡したんだ。そして、ナインテイルフオックスに対抗するためにエルドラゴも作つた……すべては、アイツを倒すために」

「ついなさんも、リリイもそのために……」

ドーパントを蹴り飛ばしながら話に耳を傾ける。私を排斥しようとしたのも今なら納得がいく。私は肉体的にも強いとは言えないし、心も未熟なハーフボイルドだ。だからこそ、月読アイは頑なに私を認めようとしたなかつたのだろう。

「……でも、いつしか奴と同じように心のない悪魔に成り下がつていた。COEFONTの事件でようやくそれに気づけた……今までごめん、結月ゆかり。許してくれとは言わない。だけど、これからもきりたんを支えてやってくれ……」

『ゆかりさん……』

「そんなの、当たり前です！」

頭を下げるファズマトデア・ドーパント……月読アイに、即座に断言して見せる。そんなこと、最初から決めている。

「おやつさんに託されただけじゃない。私がそうしたいからやる！何か文句がありますか！お義母さん！」

『誰がお義母さんですか!?!』

「まだあなたにお義母さんと言われる筋合いだけはないよ!?!」

重苦しい空気を何とかしようと思ってみたら、親子一緒に怒鳴られた。解せぬ。

「とにかく、私は「真実の愛」を回収しに行く。2人はリリーの援護を！」

「了解です！」

『へましないでくださいよ、母さん!』

「…うん！きりたん！」

私の呼びかたに引つ張られたせいか月読アイのことを普通にお母さんと呼んじやつてるのはツツコまないでおこう。

「L A A A A ♪」

「そんな歌声、心に響かないんだよ！」

エルドラゴ ゴールデンルーラーに変身したオレはルーラティンにメモリを装填、ルーラチェインがジャラララと音を鳴らして四方八方に伸びて簡易的な陣を作り上げ、奴の実体化した音符攻撃を防ぐ。

「裁定を与えてやる！」

《ルーラー！マキシマムドライブ！》

捕らえたドーパントたちを持ち上げ、次から次へと壁や天井に叩きつけて、メモリブレイクしていく。雑魚は相手にならない。なんならこのディーバとかいうIAが変身したドーパントも戦闘力自体は雑魚同然だ。しかし、閉鎖空間だということを利用して反響による歌声の洗脳が何より厄介だ。メモリを使用していて、ある程度耐性があるオレとゆかり、きりたん以外はアウトだろう。一度だけとはいえ仮面ライダーに変身したことがあるあかりがあれだからな。

「ほんと、厄介だなCLEARというのは！」

熱線を放ちながら腕を振り下ろしてきたロード・ドーパントの攻撃を、ルーラティンで受け止めて防ぐ。CLEAR故の身体能力の高さとタフさ。そして、万を超える観客が当たり前の舞台に立つ歌姫だから故か異様に状況把握が上手いディーバ・ドーパントの巧みな命令。最強の操り人形と化した我らが所長の猛攻に押され、その間にルーラチエインを超えてきた他のドーパント共まで襲いかかってきた。

「邪魔だ！」

ルーラチエインを長く伸ばし、ドーパントたちを壁に押し付けて、ルーラティンのメイス部分にあるマキシマムスロットにサンダーのガイアメモリを装填。黄金の電撃を迸らせながら、ルーラチエインを熔かして突進してきたロード・ドーパントに振りかぶる。

《サンダー！マキシマムドライブ！》

「ゴールデンブリッツ！」

そしてルーラティンをバットの様に両手で振りかぶり、一閃。帯電した雷撃が集束して電気の球になったロード・ドーパントは吹き飛ばされ、ドーパントたちを余波で感電させてメモリブレイクしながら

デীবバ・ドーパントに突撃していく。

「L a a a a a a a a a a ♪…そんな!？」

歌声で音の障壁を張って防ごうとするデীবバ・ドーパントだったが防ぎきれず、直撃……する直前、横から飛んできたミサイルの様なものが激突して相殺、メモリブレイクされて変身が解けたあたりだけが転がった。

「……なんだ?」

「リリイ様、駄目ですよ。彼女は我らエル・ドラードの大事な同士だ」

気絶した人間たちを踏みつけるようにして、そのドーパントは現れた。マンタを彷彿とさせる青に金ラインの入った、機械的なダイバースーツめいた鎧に身を包む、一国の王を彷彿とさせるドーパント。明らかに格が違う。おそらくゴールドクラスのメモリ…!

「何者だ」

「俺は貴女の忠臣で……貴女を正すものだ!」

そう言ってトライデントを取り出し、泳ぐようにして突きを繰り出してくるドーパントの一撃を、ギリギリルーラティンで受け止める。
…この船は魔窟かなにかか!?

第九十八話：怪盗Ⅰ参上／深海忠義

突如現れ、デীবバ・ドーパントを庇った、マンタとダイバーを彷彿させ、王の様にマントを翻した青と金のドーパント。手で触れたオブリエクトを水に変えて、トライデントを振るい自在に操り刃として放ってくる攻撃に、エルドラゴ随一の防御力を持つゴールデンルーラーでも切り傷だらけで防戦一方だ。デীবバ・ドーパントはその間にどこかに逃げてしまった。

「くそっ……エルドラドと似たようなことしやがって」

「今の俺は……腑抜けた貴女に負ける事など、絶対に無い……！」

そう言っただけで突き出されたトライデントをルーラチエインで受け止め、押し返す。するとトライデントを床に突き刺してそれを軸に跳び上がり、連続蹴りを叩き込んでくるドーパント。一撃目は防いだが二撃目は防げず蹴り飛ばされ、ひっくり返ったところに背中へのエイめいた酸素ボンベから魚雷を発射し、爆発で吹き飛ばされる。このままじゃ、あかりを始めとしたドーパントにされてたやつらにも被害が……！

「今の貴女は……変わった。以前は、周りの有象無象な人間など……気にしなかった」

「昔のオレがどうかは知らんが、今のオレは仮面ライダーだ。気にしないわけにはいかないんだよ」

「その通り。仮面ライダーになった貴女は……弱い！」

するとドーパントはトライデントを握り、空中を泳ぐ様にして突撃。ルーラチエインで弾いたところに、魚雷が発射されルーラチエインで壁を作った周囲の人間に爆発が及ばないようにするもルーラチエインを触れることで水に変えるとトライデントを振るい、水の斬撃として叩き込んできたのを、四方八方に出現させた波紋に新たに生成し

たルーラチエインを突っ込んで格子を作るように出現させて防御する。

「確かに強いが能力に慣れてないな！隙だらけだ！」

「っ……」

《ゴールド・マキシمامドライブ！》

ルーラチエインの先端にあるスロットに引き抜いたゴールドのメモリを装填、波紋が出現してその中にルーラチエインが飛び込み、ドーパントの四方八方に波紋が現れて雁字搦めに拘束しようとするが、次の瞬間マントを翻すとその姿が掻き消え、ルーラチエインが空ぶってしまう。

「透明化……いや、光学迷彩？魚雷に、触れたものを水にして操る、何のメモリだ……！」

「リリイ様……残念だ。こんな小細工など、昔の貴女ならば一蹴して当然。このメモリの力に慣れていない俺など……赤子の手を捻る様に、完封できた」

「余計な、お世話だ！」

見えないドーパントが、攻撃の瞬間だけ姿を現してトライデントで何度も斬りつけてくる。カウンターでルーラチエインを振るうがまるで当たらない。まるで水のように、捕らえようがない。

「終わり……だ！」

《ルナ！トリガー！》《ルナ！マキシمامドライブ！》

『トリガー・シャインフィールド！』

そこに、ルナトリガーに変身したダブルが乱入。掌にルナの力で作り出した光球を出現させ、それを握り潰すことで粒子として周り一帯に散布すると、透明になっていたドーパントが浮かび上がるとトリ

ガーマグナムを乱射。周囲に放たれた弾丸が集束するように全弾ドーパントに炸裂し、怯ませる。

「おのれダブル……！どこまでも、俺達を邪魔するのか……！」

『ルナトリガーの弾丸で怯むだけとは、なんたる防御力……！』

「貴方がディーバ、インク・ドーパント……ミラ・マリンの言っていた協力者ですね！乗客の意識を元に戻しなさい！」

「違う。それは、俺ではない。お前達の迂闊さを、呪え」

「それは、どういう……？」

「ダブル！乗客を操っているディーバ・ドーパントは此奴じゃない！

IAだ！歌姫IAが、メモリを使った！」

「IAさんが!？」

歌姫IAがメモリを使ったという情報に、動揺するダブル。今話すべきじゃなかったかもしれないが、奴をディーバだと思い込んで戦い方を間違えるのはまずい。

「そのIAをこいつが守って逃がした！おそらくIAを誑かした張本人だ！」

「彼女がメモリに堕ちたのは……元はと言えば、貴女のせいだ。リリース様」

「……どういう意味だ、西友」

そう呼ぶと動きがぴたりと止まるドーパント。ダブルも「え？」と振り向く。リリース様と呼んでいたところからすぐに正体には気づいた。だが気付かないふりをしていた。信じたくなかった。あいつが俺を裏切るなんて、そんなことありえないと思いたかったから。……そうか、お前か。

「言葉通りの意味です、リリース様。IAは……貴女が、あの裏切り者を手放さなかった、故にメモリへ手を出した。己が欲望の為、メモリに

手を出す……この街では、珍しい事ではないでしょう？」
「キク、だど？そういうえば、あいつは……！」

あかりたちがドーパントになっていたことに気を取られて気づかなかった。いつの間にか消えている。おそらくはディーバ・ドーパントに……。

「お前もオレを裏切るのか？西友」

「裏切る……？この俺を、あの裏切り者と一緒にするな……！俺は、何時だって常に……貴女への忠義だけで、生きている！」

そう激昂しながら、メモリを抜いてドーパントの変身を解除したのは、俺の左腕である西友蒼司だった。倒れた石柱とマンタでAと描かれているゴールドメモリを手にして、西友は吠える。

「俺は、東北至子と手を組んでも、あの裏切り者を排除すると決めた……！奴のスポンサーとなり、このアトランティスメモリを手に入れ、新たに作り出されたエルドラドメモリを貴女に献上……！再びエル・ドラードの黄金女帝として、返り咲いて貰う為にも！」

「誰がそんなこと頼んだ！オレはオレのものであるキクを手放す気はないと言ったよな！」

「リリイ様の考えこそ全て……俺も本当は、こんな手段を取るべきでは無い。しかし！何時までも己の好みだけで、あの裏切り者を近くに置く事など、許されない！故に……俺は、己が存在全てを賭けて……リリイ様という存在を正す！」

《アトランティス！》

西友がゴールドメモリを掲げ、スイッチを押すと海底都市の記憶が呼び覚まされ、左掌に押し付けると水の渦が発生して西友を包み込み、マンタとダイバーを彷彿させ、王の様にマントを翻した青と金で彩られたアトランティス・ドーパントに変貌。トライデントを握り、突きつける。

「……余計なお世話だ。オレはオレのやりたいようにやるだけだ」
「そこまで言うのなら、見せよう……俺の覚悟を！」

そう言つて空中を泳いだアトランティス・ドーパントが、トライデントを突き出した先にいたのはダブル。圧倒されていたダブルは我に返り、トリガーマグナムでトライデントの一撃を受け止める。

「ぐっ……!?!」

「ダブル……お前達がミュージアムと手を組まなければ……リリイ様が負ける事はなかった。今頃は、ミュージアムも下し……水都を黄金郷へと変えていた！」

「ええ、そうです……!リリイは、エルドラド・ドーパントはそれほどに強かった！」

「だけどオレは負けた、納得もしている！」

《サンダー!》《ゴールデンサンダー!》

ゴールデンサンダーに変身しながらイナズマサカリを手に乱入。稲妻を纏った刃でトライデントを弾く。そこにダブルがトリガーマグナムを乱射。光弾をすべて右手で受け止め、水に変えて刃にして集め、巨大な斬撃として飛ばしてくるアトランティス・ドーパント。そして、俺のイナズマサカリと奴のトライデントがぶつかろうとした瞬間、間に茨が飛んできて無理矢理分断される。その茨の先には、茨を全身に巻き付けたような怪人が立っていた。

「はい、そこまでよ」

第九十九話：怪盗Ⅰ参上／茨の道の終演

ちょうどその頃、月読アイはファズマトデア・ドーパントとしてドーパントの群れを打ちのめしながら、別の人間に変装して入手した自室を目指して急いでいた。

「とにかく、ドーパントを倒さないと外道たちにも「真実の愛」の場所がばれてしまう……！」

「ちゆわ？なにがバレてしまうのかしら」

瞬間、ドーパントの群れを貫きながら伸びてきた鋭い触手らしきものがファズマトデア・ドーパントの細い胴体を背中から貫き、変身が解けて吐血する月読アイ。そのままドーパントたちを廊下の上から持ち上げながら、その触手……否、変形した尻尾の主であるニンテイルフォックス・ドーパントが歩み寄ってくる。

「お久しぶりですわね。お母様」

「イタコ……いや、その猿真似を今すぐやめろ。外道……！」

そう月読アイが吐き捨てると、わかりやすくにこやかな雰囲気から剣？な雰囲気となり舌打ちするニンテイルフォックス・ドーパント。

「……イタコのお意思が表層に出ているとは少しも思わないんだな」

「霊媒師の家系を舐めるな……！お前の靈魂が、歴代最強の霊媒師であるイタコですら御せない執念を有する最強の怨霊なのはわかる……！」

「怨霊とは失礼だな。仮にも俺はお前の夫だぞ？生きていることを喜んでくれ」

「娘の身体を乗っ取って意地汚く生き延びているやつが何を言う！」

《ファズマトデア！》

胸に手を当ててほざくナインテイルフォックス・ドーパントに激高しながらガイアメモリを鳴らし、右手首の生体コネクタに突き刺してファズマトデア・ドーパントに変身。鉄の壁に触れて鋼鉄化し、拳を振りぬく。

「俺が生きたためだ。そのためならイタコも本望だろうよ」
「ぐっ……!?!」

しかし、届かない。ナインテイルフォックス・ドーパントの腰から伸びた九つの尻尾のうち四本がファズマトデア・ドーパントの四肢を縛り上げ、拘束し持ち上げるとギリギリと四方に引つ張り締め上げる。掌に何も触れさせず、鋼鉄の四肢が碎ける剛力に苦悶の声を上げるファズマトデア・ドーパントの顎に手をやりながらナインテイルフォックス・ドーパントはほくそ笑む。

「お前なんかを好きになった昔の私を殴りたい……!」

「せっかく永遠の若さをくれてやったというのに、恩を仇で返すとは結構じゃないか」

「頼みもしてないのに私の身体で実験して強制的に子供にしたんだろうが! 記理子まで殺して、至子に乗っ取って! 家族をめちやくちやにしておいて……!」

「その家族を見捨てたのはお前だろう、アイ」
「っ……」

反論されてぐうの音も出なくなるファズマトデア・ドーパントに満足げに頷いたナインテイルフォックス・ドーパントは尻尾の一本を伸ばしてファズマトデア・ドーパントの首に巻き付け締め上げる。

「ぐっ、ぎっ……」

「御託はいい。さあ、俺の元から奪い去った実験体……有機情報制御

器官試作体ガイアプログレッサの居場所を吐いてもらおうか」

「あぐつ……あの子には鳴花梅なるはなうめという名前があるんだよ……女心もわからないくそ野郎が……」

「そうか。なら仕方ない、ですわね？」

瞬間、拘束に使っていない残りの四本の尻尾が一斉にファズマトデア・ドーパントを貫き、爆散。メモリブレイクされたメモリが転がり、ぐったりとして気絶した月読アイを尻尾の一本で飲み込んだナインテイルフォックス・ドーパントは変身を解除して振り返る。

「ガイアプログレッサーの居場所は、屋敷に戻ってからゆっくりと拷問して、吐かせてあげますわ。さて、時間は稼いであげましたわよ」「ええ、お手数おかけしました。ここに」

そこにいたのは、植物で形作られた人型。アイビー・ドーパントに酷似しているが目がただの空洞であり別物だとわかる、その手に握られていたのは「真実の愛」だった。

「まさかそのメモリとそこまで相性が良いとは思いませんでした。蒿あしのの記憶、アイビー、その真価はどこだろうと張り巡らせることができる。侵略”。船だろうが何だろうが、根付いてどこにでも分身を形成するなど、とんでもないですわね？」

「ナインテイルフォックスには負けるわ。ミラ・マリンも回収した。例の彼にも分身を向かわせた。取引先としての仕事はこなしたつもりよ」

「ええ、ガイアインパクトを成し遂げた暁には期待しててくださいまし」

東北至子は邪悪に嗤う。野望の達成まで、あと少し。

「はい、そこまでよ。目的の物は手に入れた。IAも回収した、あなたも引き時よ西友蒼司」

リリイの変身したエルドラゴ ゴールデンサンダーと西友の変身したアトランティス・ドーパントが激突しようとしたその時。現れて茨の蔦で遮った怪人。アイビー・ドーパントだった。

「アイビー・ドーパント……グラン・S・ベル！」

「こんにちは、ダブル。今は仕事の最中だから大人しくしてて？」

「そうはいきません……！」

《ヒート！トリガー！》

ヒートトリガーに変身して火球を放つ。業火を纏った弾丸はアイビー・ドーパントを撃ち抜き炎上し燃え尽きてしまう。そんな、一撃で……!?

「こ、殺してしまった……？」

「危ないわね」

しかし、床から突き出してきた蔦が私達の背後で人型を形作り、腕を振るい茨の蔦を伸ばして薙ぎ払ってくる。咄嗟にトリガーマグナムを盾にするも吹き飛ばされる。見れば、リリイの傍にもアイビー・ドーパントが現れて蔦を剣状にしてイナズマサカリとぶつけ合っていた。いったいどう……!?

『ゆかりさん、恐らく奴は分身！本体は別のところにいます！』

「ご明察。なにしているの、西友蒼司。私が時間を稼いでいる間に早く撤退しなさい」

「……断る」

アトランティス・ドーパントに呼びかけるアイビー・ドーパントだったが、当の本人は短く答えるとトライデントを振るい、床に引っ掛けるようにして斬撃を繰り出すと触れた床が水と化して刃となり、アイビー・ドーパント二体を真っ二つ。バラバラに崩れ落ち、新たに床から生えるアイビー・ドーパント。

「な、なにを…!?!」

「俺が組んだのは……東北至子だ。彼女の意向で手は貸したが……エル・ドラードの商売敵である、貴様ら財団Xとでは無い……消え失せろ」

そして、アトランティス・ドーパントの頭部のバイザーに目に見えて膨大なエネルギーが溜まっていく。あれは、ヤバい！

「リリイ！防御を！」

《ヒート！メタル！》《メタル！マキシマムドライブ！》

「くそっ…あかり！」

《サンダー！マキシマムドライブ！》

倒れているあかりたちを守るために私たちとリリイは間に立ち、メモリをメタルシャフトとイナズマサカリに装填。息を合わせて振りかぶり、炎と雷が瞬く。同時に、アイビー・ドーパントも鳶を幾重にも重ねて盾を作り上げていた。

『「ライダーツインマキシマム！」』

「くらえ……！」

瞬間、アトランティス・ドーパントのバイザーから青い破壊光線が放たれ、廊下を滅茶苦茶に粉碎していき、蔦の壁を容易く薙ぎ払ってからライダーツインマキシマムと激突。一瞬拮抗するが、あまりの威力に私達は吹き飛ばされ、破壊光線は徐々に小さくなっていき、そして消えた。

「ぐうっ……」

「……西友、てめえ……あかりを狙ったな……！」

「……本来、人間ではなかった存在。リリイ様の寵愛を受ける資格など無い」

私とリリイは変身を強制解除されて転がり、頭から血を流したりリイの問いかけに冷たい言葉を投げかけるアトランティス・ドーパント。見れば、あかりの倒れていた場所は黒焦げで何もなくて。まさか、まさか……!?

「ふう、危なかった……」

するとモクモクと煙に包まれていた奥の方から声が聞こえて、振り向く。そこにはミリアルがあかりを抱えてしゃがんでいた。

「ゆかりさん！あかりは無事です！ギリギリ間に合いました！」

「ミリアル……あかり、生きて……」

思わず腰が抜けて崩れ落ちる。よかった、本当に良かった……。するとアトランティス・ドーパントはトライデントを向けようとしたが、考え直したのかトライデントを消し去ってリリイに振り返る。

「……俺は、貴女に力を示しました。この力があれば、エル・ドラード

は今度こそ、絶対に天下を取れる！……元の貴女に戻り、俺の元に必ず来てくれると……リリイ様、信じてますよ？」

「待て！西友！」

そう言つてアトランティス・ドーパントは透明になつて姿を消して。リリイの伸ばした手が空ぶる。

「面白いことになってきたけど割に合わないわね……」

辛うじて残っていた蔦も引つ込んでアイビー・ドーパントの気配も消え、私は茫然と立ち上がる。ボロボロの船内、傷だらけで倒れた人々。ドーパントになつた西友と、IAさん。連絡がない月読アイ。あかりこそミリアルのおかげで無事だったが……完全敗北だ。

第百話：怪盗Ⅰ裏／鳴花散乱

ここで振り返ってみよう。まだ解決していない謎がある。最初も最初で、事件が立て続けに起こったために目立っていなかった、なんならゆかりたちにも把握されていなかった一つの謎。

「ぎらついた色の、いい欲望ツスね。少しだけいただくツス」

「こんな新米に撮られてちや、世話無いツスよ仮面ライダー。今回は消しといてあげるから事件は任せるツスよ。ウチでも見破れない謎を解くのは、探偵の仕事ツス」

そう、ダブルとアイビー・ドーパントの対決を目撃した初見久遠からなにかを奪い取り記憶を失わせ、データを丸ごと消し去った人物だ。

「……いやはや参ったツス。魂塗料集めにとんだ惨事に巻き込まれたツスね」

その人物はインペリアルスター号の一室で、ドーパントの襲撃から逃れながらジュラルミンケースを整理していた。中には色とりどりの液体が入った小瓶が十数本大事そうに納まっている。

インク・ドーパントの正体を見破った瞬間に立ち会った変人たち七名。実はあの場に集まったメンバーの中で、ディーバの歌声に操られていなかった人物が一人だけいる。犯人であるミラ・マリンはもとより、初見久遠、加賀煉、藤城恩、釘崎檀、鳴子芽衣、赤城苅南の六名がディーバに操られダブルに襲い掛かった。ここで違和感を抱かないだろうか。そう、一人足りない。

インペリアルスター号への招待状を渡しておきながら、インペリアルスター号で再会したゆかりのことを忘れていた「違和感」を有して

いた人物。

その名を、ラグナ・ポンド。初峰九王のメイドである。しかしその顔も、まるで塗りたくった絵の具を拭うかの様に新たな顔がその下から現れる。それは以前、水都を襲った未曾有の大災害から市民を守った外の戦士の一人、カラーズが使っていた魂塗料と呼ばれるものと同じもの。ラグナ・ポンドという実在する人間に成りすましてその人物は潜入していた。

「……潮時ツスねえ。ラグナ・ポンドからただのオレットに戻るとするツスカ」

ミュージアムでも財団Xでもないその人物は、ドーパントの変身が解かれて混乱している人々の間を堂々とすり抜け、人ごみに消えていった……………。

ゆかりたちがインペリアル・スター号に居合わせた敵対勢力は財団Xであるグラン・S・ベルとミラ・マリ。そして、ミュージアムからは東北至子一名。そう、幹部である純子、蛇門、星香がいないのである。珍しく東北至子が、財団Xの協力を受けてまで「真実の愛」を手に入れようとしたのは訳がある。ミュージアムが取り組んでいた計画「ガイアインパクト」を最終段階に向かえるべく、必要なものを手分けして同時に入手を狙ったのだ。

ガイアインパクトの楔となる地球の記憶の結晶で造られた彫刻「真実の愛」。そして、ガイアインパクトに不可欠な有機情報制御器官試作体ガイアプログレッサーである「実験体」なるはな鳴花梅うめを見つけること。

東北至子は前者を財団Xと己で、もう片方を水都に残った幹部率いるミュージアム総力で行うことにしたのだ。月読アイを捕えられたのは、降って湧いたような幸運、柵から牡丹餅にすぎなかった。

「…ちゅわ!? 鳴花梅を見つけたとは本当ですよ!？」

己の能力である尻尾を分離して作り上げたクルーザーに財団Xの二人と西友蒼司に有阿衣亞と、洗脳され静かに黙って突っ立っているキク。そしてわざわざ尻尾を一本使って拘束しているアイと共に乗って水都を目指しながら連絡を取っていた至子は、星香からの電話に思わず声を張り上げる。10年間探し続けた実験体がついに見つかったのだ。興奮しないわけがなかった。

「それは本当に鳴花梅なんですわね!？」

《はい。至子様の立てた「人でなくなったために年を取ってないのではないか」という仮説をもとに、私の部下たちを使って人海戦術を行ったところ、継星探偵事務所の真下の「鳴花^{めいか}ーズ」というBARで堂々にも看板娘をしていたところを発見し捕縛しました」

「……はい?」

自分の聴き間違いかと思わず目を細めて電話から耳を離す至子。ジト目でアイを「マジか」とでも言いたげな表情で見つめた後、電話に耳を戻す。

《「本人は「私は鳴花^{めいか}緋女^{ヒメ}だー!」と叫んで暴れますが、髪色以外は写真と瓜二つです。同一人物で間違いないかと」》

「……灯台下暗しというやつですわね。まさか拠点と同じところに行っていたとは……そこは盲点でしたわ。にしても偽名ならもつと他にあるでしょうに」

送られてきたヒメの写真を見つめて本人確認した後、気絶している

アイを睨みつける至子。してやられたと感心する心と、そんな簡単なことに気付かなかった己への怒りでどうにかなってしまいたいそうだったが持ち前の外面の良さを発揮して深呼吸、通話に戻る。

「こちらにダブルとエルドラゴが来ていましたわ。東北記理子の回収をしてもよかったですね、財団Xがしくじりまして。撤退せざるを得ませんでした」

「しくじったのはミラだけよ。面白くないこと言わないでくれる？」

あんまりな物言いに不服です、と不機嫌になるグランに「相方のミスは貴方のミスですわ」と取り付く島もない至子は続ける。

「東北記理子は今度、あなたに回収してもらおうことにしますわ。よろしいですわね？星香さん」

《了解しました。至子様》

「ところで純子と蛇門はどうしてますの？万が一純子に何かあったらただじゃすみませんわよ？」

にこやかな表情から一転、表情に影が差し憚ましいプレッシャーを放つ至子に怯む西友と衣亜。自分たちが組んだ者の恐ろしさを再確認する。衣亜は「選択間違えたかな……」とさっそく後悔していた。

《「お二方なら、アクセルの相手をしております。鳴花梅を回収する直前現れて襲ってきたもので迎撃を。もう決着がつくかと」》

「ほう。それはそれは。目障りな刑事に思い知っていたただきたいですわね。我々ミュージアムに逆らえばどうなるか」

至子がほくそ笑んでいるその頃、継星探偵事務所の前では激戦が行われていた。アクセルブースターに変身し高速で空を駆るついなに
対し、前衛のエクスタシー・ドーパント、後衛のアルテミス・ドーパ
ントという組み合わせで対抗するミュージアムの幹部二人。何度か
共闘したことがあるが、それはそれこれはこれ。もともと敵に対して
容赦のないついなは、ゆかりたちのいない分まで全力で、ヒメを取り
返さんと奮闘していた。

「行きつけのBARの看板娘なんや！返してもらおうで！」

《ジエツト！》

「こちらもそういうわけにはいきません。蛇門」

「はいなのだ！姉様！」

エンジンブレードのトリガーを引いて振るうことでアルテミス・
ドーパントに向けて放たれた光弾を、エクスタシー・ドーパントが筋
骨隆々な体を盾にして受け止める。そこに、アルテミス・ドーパント
の振るった弓から追尾する光の矢がエクスタシー・ドーパントの陰か
ら放たれて次々と炸裂。落下するアクセルの首根っこを掴み、落ちて
きた勢いにさらに勢いを加えて地面に叩きつけるエクスタシー・ドー
パント。

「があっ……」

「残念だけど、あなたでは私達に勝てないわ」

「……そうとはかぎらんで」

《エンジン！マキシマムドライブ！》

エンジンブレードにエンジンメモリを装填し、引つ張られるように
して空に舞い上がるアクセル。旋回して加速し、勢い付けたエンジン
ブレードを渾身の力で叩き込む。

「ブーストスラッシュャーや！」

「蛇門」

「お前根性あるのだ！楽しいのだ！」

しかしそれは、右腕を構えてパンプアップしたエクスタシー・ドーパントの拳に、あつさりと弾き飛ばされてしまい、地面に叩きつけられて変身が強制解除され転がるついな。

「そんな、阿呆な……」

「エクスタシーは歓喜の記憶。戦闘狂のこの子が喜べば喜ぶほど、強化されるの。命までは取らないわ。これに懲りたら、私達のことを見て見ぬふりをするからね」

「いい勝負だったのだ！バイバイなのだ！」

そう言い残して去っていくアルテミス・ドーパントとエクスタシー・ドーパントに、力なく倒れ伏すついなに駆け寄る小さな人影。

終わりの時は近い。